



北大山岳部五十周年記念誌





北大山岳部
五十周年



1926~1976

目次

巻頭の辞	一
北海道におけるスキー登山の発達	三
恵迪寮旅行部の思い出	三
山岳部創立のころの回想	二〇
山岳部創立前後の札幌近郊の登山	三〇
冬の石狩岳	四〇
幌尻岳スキー登山	四〇
幌尻岳・イドンナップ岳・カムイエクウチカウシ山	四九
一月の石狩連峯	五三
忠別川溯行	五九
さすらいの日高	二九
大雪山十日の物語り	三〇

座談會 北大山岳部五十年の歩み 一〇〇

冬のペテガリ岳 林 和 夫 一五四

冬期十勝岳・大雪山縦走 木崎 甲子郎 一五五

冬期日高山脈全山縦走 西 信 博 一八四

直登 沢 へ 神谷 正男 一九七

北大山岳部とヒマラヤ 渡 辺 興 亜 二二一

マッキンレー 越前谷 幸 平 二三五

現役たちの山 伏 島 信 治 二五二

コロンビア・アイスフィールドの山 木 村 俊 郎 二六三

北大山岳部における登山合宿 二七四

戦前の合宿 朝比奈 英三 二七六

戦時中の合宿 山 田 真 弓 二八六

戦後数年間の合宿 鮫島 惇 一 郎 二九二

昭和三十年前後の合宿 西 信 博 二九四

昭和三四〜四十年頃の合宿 鶴 卷 大 陸 二九六

昭和四十年以後の合宿 高 橋 一 穂 三〇三

遭難小史 — 北大山岳部における —

橋本誠二
橋本正人
小林年三〇
神谷晴夫

山の歌……………渡辺良一 三〇五

ヘルヴェチア・ヒュッテの二十五年……………山崎春雄 三〇一

ヘルヴェチア・ヒュッテ建設おぼえ書き……………アーノルド・グラブラー 三〇七

芦別岳北尾根の池……………鈴木限三 三〇九

山好きの弁……………奥村敬次郎 三〇一

男沢先生と南札内分教場……………有馬純 三〇五

知床の木下さん……………三角亨 三〇八

豊似川の大庭さん……………松村雄 三〇七

冬山合宿中の思い出……………犬飼哲夫 三〇七

冬期登山のはじめ……………加納一郎 三〇七

北大山岳部と私……………原田準平 三〇一

創立夜明け前の思い出……………渡辺千尚 三〇二

山小屋のピッケル……………原忠平 三〇五

熊	山	浩	三六七
部と私と	佐々保雄	三六九	
グブラーさんと私	金光正次	三五二	
北大山岳部の雰囲気	豊田春満	三五四	
五十年の追憶	安田一次	三五六	
峠・山・氷河	東晃	三五六	
日高で	鮫島惇一郎	四〇二	
わがベース・キャンプの魅力	佐伯富男	四〇三	
ボケボケ人生	西村豪	四〇七	
ヒマラヤの犬たち	伏見硯二	四二二	
写真・スケッチ 説明		四二六	
北大山岳部年表 一九二六〜一九七六		四三三	

写真 真

十勝岳温泉付近より富良野岳	坂本直行
天狗岳よりニペソツ山	坂本直行
春の五剣山にて	朝比奈英三
昭和四年卒業山岳部員送別会	

コイカクシユシビチャリ川の溯行	伊藤紀克
カムイエクウチカウシ、八の沢カール	鮫島惇一郎
美瑛岳より十勝川源流	橋本誠二
トムラウシ源流の温泉	橋本誠二
厳冬のコイカクシユサツナイ川上流	岡彦一
ヤオロマップ稜線上のキャンプ設営	岡彦一
五色ヶ原より石狩岳	橋本誠二
石狩川にて	橋本誠二
神威岳	岡田勝英
ピリカヌプリ南面	岡田勝英
神威岳よりペテガリ岳	岡田勝英
札内岳より幌尻岳	岡田勝英
ヌピナイ川上流	鮫島惇一郎
中の川、中の岳南東面直登沢	神谷晴夫
チャムラン隊員とシニルバ	チャムラン 遠征隊
チャムラン登路	チャムラン 遠征隊
カヒルトナ氷河上の一服	竹田英世
アサバスカを望む	丹羽由紀夫
美瑛岳の稜線にて	橋本誠二
八ツ手岩	倉林正尚
硫黄山でイグルーづくりの練習	東 晃
吹上温泉の夕暮	朝比奈英三
十勝岳白銀荘付近	鮫島惇一郎

オプタテシケ合宿の初年班
 ヘルベチア・ヒュッテ
 北日高ルベシベ山付近のキャンプ
 五月の限三池付近
 二十五周年ヘルベチア祭
 歴代山岳部長
 男沢先生一家とベテガリ隊員
 大庭さんの牧場で
 グブラー先生近影
 吹上温泉の飛沢さん

古川 幹夫
 東 晃
 橋本 誠二
 今村 昌耕
 今村 昌耕
 小村 雄
 松平 俊平
 朝比奈 英三

地 図

北部日高山脈概念図	新旧対照	八六
十勝川上流概念図	三三
大雪山十勝岳縦走図	一六九
無名沢概念図	二〇〇
中部日高山脈概念図	二〇四
西ネパールカルナリ河流域概念図	二三五
マッキンレー山周辺概念図	二四一
コロンビア氷原周辺概念図	二六六
十勝岳付近図	二七九
アイセン県周辺概念図	四〇八

表 紙 伊藤 義輝
 扉・スケッチ・カット 坂本 直行

巻頭の辞

大正十五年に北大山岳部が創立されてから五十年余を経過した。古い歴史をもつほかの山岳会に比べればこの歳月は必ずしも長いと言えないが、この間常に数十名の部員を擁し、国内国外の未踏の高峰や氷原に広く足跡を印してきたことは大いに誇つてよい。山岳部の歴史は歳月の長さでなく、その間の活動で評価すべきものである。我々は登山によって自然の深奥に開眼され、困難な登攀を通じて肉体と精神を鍛錬する喜びを知った。青春の一時期に心を許した仲間とひたむきに山への情熱を燃焼させたことを悔いる部員はいないであらう。

登山の普及に伴い多くの山岳会が簇生しその活動も類型的になったが、大学山岳部はそれが所屬する大学の氣風と、先輩から受け継いだ伝統による特色をもっている。わが国の大学山岳部のほとんどが本州の山を活動の場にしたのに対し、北大山岳部は北海道の山を中心に活動を重ねてきた。標高と岩場において本州の山に劣るが、昭和の初期までは原始の色濃く、未踏の山頂と溪谷が少なからず残っていた。当時の部員は地形図の誤り、道路の不備、入山までの長い道程などに堪えながら、多くの日数を費してその山頂に立った。創設期の部員の足跡は遠く北千島、アリューシャン列島の山にまで及んだ。先人は本州の既知の高山よりも、原始と未知に溢れる北辺の山に強く牽かれたのである。これは北大の氣風と無関係であり得ない。第二の特色は寒冷と氷雪に対する豊かな経験であろう。部員は地理的条件に恵まれ寒冷と氷雪に慣れ親んでいる。冬の十勝岳スキー合宿は厳しい寒気と吹雪を突く登山を通じて氷雪に対する経験と技術を積むのに有効であった。北海道の冬の高山は夏と相貌を一変し登攀を唆って止まない。悲しむべき遭難事故を伴ったが、その厳冬期初登頂のほとんどが北大山岳部によって行われたと言つてよい。そのために他の山岳会にさきがけて雪洞とイグルーの研究を進め、冬季登山に新しい技術を導入した。これも氷雪の豊かな経験によるものである。氷雪への愛着は部員を冬の高山のみならず、南極での越冬、アラスカの氷河や北極海の氷島の調査などに赴かせた。

北大山岳部の第三の特色として広い抱擁力をあげたい。登山の多様化に伴い主義主張を異にする山岳会が生じ、中には他を容れぬものがあるというが、北大山岳部は創立以来山にロマンを求める者から尖鋭の登山を志向する者まですべてを抱擁してきた。部員は互いに相手の主張を理解しながら自分の欲する登山を楽しんだ。冬の十勝岳合宿でも余裕があれば部員以外の学生を加え、規律は厳格であったが融和に満ちた合宿が行われた。山岳部が常に多数の部員を擁してきたのは、この広い抱擁力と寛容性によると思う。

北海道の高山が四季を通じて登頂された後、山岳部がヒマラヤを志向したのは自然の成り行きであった。それはチャムランの初登頂を果し、その後も多数の部員が未踏の高峰を求めてこの山域に赴いた。チャムランにつづく成果を期待したい。最近の各国ヒマラヤ登山隊の行動はオリンピックの様相を呈している。それは他国にさきがけてネパール政府から登山許可を獲得する争いに始まり、初登頂や新たなルートからの登攀を競い合う。成功すれば輝かしい記録になるが、それに執着して多数の犠牲者を出した登山隊も少くない。これを近代アルピニズムの精神としそれに傾倒する集団とは別に、記録に捉われぬ自由闊達な登山を楽しむ人達がいる。すでにヒマラヤの巨峰では異なる登山隊により二登、三登が行われ、黄金時代から遠く過ぎたスイスアルプスにもいまもお登山者が絶えない。初めてその山を訪れる人には過去の登頂の記録は参考文献にすぎず、彼等は自ら登ることによってその山の存在を確かめ、それと交流することを望むのである。自分にとって未踏の山は他の何物にも捉われることなく、おおらかな心で登ることができる。これが人を山に誘う動機の源泉ではなからうか。同じ山も登るたびに趣を変え新しい興味を与える。これは登山者の感性が深まるためもあるが、山がそれほど多くのものを秘めていることを示している。米国の生理学者アレキンス・カレルは人間を「この未知なるもの」と呼んだ。人間についての一つの発見は新しい未知の存在を明らかにし、やむことがないと言うのである。山もまた永遠に未知なるものではないだろうか。数多くの山に登ったことを誇る人がいる。それはたしかに知識と経験を豊かにするが、西欧の著名な画家は「一個の林檎の中にも世界がある」と言った。登山を重ねながらその一つ一つを深く味わってゆきたいと思う。

北海道におけるスキー登山の発達

伊藤 秀五郎

一

日本の近代的な山登りは、明治の中葉に小島烏水、木暮理太郎などという斯界の大先達によって始められたとみてよいであろう。しかしそのころの登山は夏に限られていた。それも草鞋に脚絆という出立ちで、ザイルやピッケルはもちろんのこと、ルックサックもまだ輸入されていなかった時代のことだから、登山技術の上では前近代的な色彩は濃かったし、こんにちの登山の領域はそのころからみると、比較にならないほど拡大された。しかし山登りの精神的系譜をたどると、その近代の出発は日本山岳会の創立者たちにならざるを得ないのである。各大学に山岳部ができたのはその後のことであり、日本の初期の山登りは、アカデミーとは直接の関係はなかった。やがて、登山熱が一部の大学生の心を捉えはじめると、大正のはじめごろからしだいに各大学に山岳部が作られ、登山の中心がしだいにアカデミーに移っていった。ちょうどそのころにわが国にスキー術が輸入されて、大正七、八年のころによくスキー登山勃興のきざしがみえはじめた。こうして冬季登山の気運も、最初はやはりアカデミー中心に起ってきた。そのころが、日本の山登りが世界的水準に向って再出発した黎明期とみてよいであろう。

ところが、本州を遠く北に離れた北海道では、事情がまったく違っていた。北海道では夏山が隆盛になる以前に、冬季のスキー登山が発達した。それは、まだ夏の山登りのほとんど行われていなかった時代に、独塊の山岳地方に発達した山岳スキー術が、北海道に輸入されたからである。

北海道で初めてスキーが行われたのは、明治四十四年（一九一一年）二月である。それは北大のドイツ語講師であった〔ハンス・コラー氏〕が、日本の学生に紹介する目的で、故国スウイスから一台もってきたのを見本にして、学生がスキーを作り、ヘンリー・ヘークやズダルスキーの著書と同氏に講述してもらって、札幌郊外の三角山の麓で試みたのである。最初は三、四名であったが、後には十数名となった。しかし当時コラー氏自身は、スキーはほとんどできなかったため、学生もその時はようやく歩いて歩けるていどであったようだ。

明治四十五年の冬、スキー講習のために、日本陸軍に招聘されたオーストリーの陸軍少佐テオドル・フォン・レルヒが高田師団の講習後、旭川師団でも講習を行った。そのとき講習をうけた札幌連隊の将校から、前記の北大生六名が約十日間講習してもらった。そして、三月三十一日には藻岩山（五三一メートル）に最初のスキー登山を試みた。その後軍隊の方では発展はしなかったが、大学では年々研究を積んでいった。そしてまず札幌地方からしだいに北海道各地にひろまっていったのである。だから実際にはレルヒ系統のアルパイン式に始まったわけである。北欧に成長した競技中心のスキー術に先だって、独塊の山地に発達した山岳スキー術が輸入されたことが、わが国ではスキーの歴史とスキー登山の歴史とがほとんど同時に始まったゆえんである。そして夏季の登山のあまり盛んでなかった北海道に、スキー登山がいちじるしく発達したのもしぜんの勢いであった。

いまから数えるとそれはもう五十年の昔になる。これはかならずしも短い年月ではない。そしてその間の登山術の進歩には文字通り隔世の感がある。その発達の過程を年代的にたどってみると、いくつかの時代に区分される。それを簡略に概観してみよう。もっとも、第二次世界大戦前までの北海道のスキー登山は、大正年代は北大スキー部、昭和に入ってから北大山岳部を中心に行われたから、北海道のスキー登山の最初の数十年の歴史は、とりもなおさず北大のスキー部と

山岳部の歴史を回顧することになる。もちろん他の団体や個人によっても多くの登山は試みられたが、重要なスキー登山の記録はほとんどこの両部員の手によってなされたからである。したがってこの一文も、主として両部の記録とわたくし自身の記憶にもとづいたものである。

二

最初の約十年間は創始時代である。北海道にはじめてスキーの輸入された明治四十四年（一九一一年）から中央高地の山岳にスキー登山の試みられた最初の年、大正九年（一九二〇年）までがこの時期で、登山は羊蹄山のほかもつばら札幌付近の山々で行われていた。したがって登山記録としてとくに重要なものは少ないが、すべてはまったく新しい経験であったから、その時代の人たちの苦心と努力は、むしろその後の時代よりも大きかったかもしれない。この期間にスキーで初登頂された山には、手稲山、羊蹄山、奥手稲山、百松沢山、チセヌブリなどがある。この時代にはスキーはまだ珍しい存在で、一般には普及していなかったし、スキー部員の数も少なかった。この時期の前半は、並河功、角倉邦彦、柳沢秀雄、荒木忠郎の諸氏、後半は一色周知、木原均、大島幸吉、沖野文夫、桜井芳次郎、小林一勝氏らの時代である。

前記のようにレルヒは旭川師団の講習を終ってから、その受講生十数名と、三月に羊蹄山の登山を試みたがこのときは頂上まで達しなかったようである。羊蹄山には翌年の大正二年十二月に北大スキー部員八名が倶知安から登山事務所へて夏路を六合目まで達したが、吹雪のためそこから引返した記録がある。この山は蝦夷富士という通称でも知られるように典型的な富士型の山で、山容が美しい上に鉄道沿線からその全容を仰ぎうるので古くから有名であり、かつ高さの割に近づきやすいので、初期のスキー登山の中心となったが、最初の登頂はそれから四年後の大正六年三月で一行六名であった。そのときは六合目の森林帯を抜けたところからシュタイグアイゼンを使用している。大正八年二月にも試みられたが、九合目まで達して引返している。このときは、スキーに直接取付けるビルゲリー・スキー・アイゼンを用いてスキーで可能なところまで登ることにしてしたが、九合目以上の硬雪にスキー用シュタイグアイゼンが用をなさなかったため

ある。

北大スキー部でシュタイグアイゼンを用いたのはいつのころか正確なことは分らない。すでに大正二年の十二月三一日から翌年一月一日にかけて、角倉邦彦、柳沢秀雄、荒木忠郎氏の一行が、当時としては特筆に価する駿河の富士山の登頂に成功して、このときは、スキーはまったく使わずに、シュタイグアイゼンだけで登っているから、スキー登山の開始とはほぼ同時にシュタイグアイゼンも実用に供されたとみてよいであろう。当時どんなアイゼンが使用されたか、かねがね角倉博士におきぎしたいと思いつながらいまだにその機会がない。

手稲山は大正二年の二月に初登頂されている。このときの一行は八名で、コースは発寒谷から当時の夏登山路にしたがって永降沢にはいり、その左方の尾根を頂上に登っている。それから三、四年はこの登路が行われていたが、大正六年三月にはじめて軽川方面（現在の手稲町市街）に下り、途中で快適な滑走斜面を発見した。ここはネオパラダイスと呼ばれるようになった。大正七年以後は距離とスロープの関係から、軽川方面からの登路が一般的になった。この年あたりからスキーはしだいに普及してきた。そして手稲山はほとんど毎日曜登られるようになった。ただし、当時の手稲山は第一級の登山に属し、相当の熟練者でなければ登高は不可能とされていた。

奥手稲山は大正七年の二月、砥石山は同年の三月に初登頂された。また同年二月には、当時すでに無人であった中山峠の駅通に泊って、はじめてその付近を滑走した。それ以来中山峠はスキー地として知られるようになった。

大正八年の二月にイワオヌブリとニセコアンヌブリの登山が試みられた。このときはどちらも山頂には達せず、前者は火口原、後者は八合目付近で引返している。三月には百松沢山の初登山が行われ、発寒川の常次沢から登頂して定山溪へ下っている。つぎのシーズンになるが、同じ年の十二月三〇日に青山温泉から、はじめてチセヌブリの登山に成功した。そのときの一行は五名であった。

以上の約十年間の創始期に、スキー術も冬季登山術も長足の進歩をとげ、知識と経験はしだいに蓄積されて、つぎの輝かしい一時期を迎えることになった。すなわち大正九年（一九二〇年）から十一年（一九二二年）までの三年間に、余市岳やムイネシリ岳など西部山塊の主峰をはじめ、十勝岳、芦別岳、旭岳、黒岳など中央高地の山々の登攀がつきつきに成就された時代である。だいたい大正九年ごろから大正年代の終りごろまでを創始期につぐ開拓期とみなすことができるが、とくに上記の三年間は、北海道スキー登山史上一つの黄金時代ともいいうる時期である。それは、北大スキー部に一群のきわめて優秀な登山家が輩出したためであった。もっとも、この機運はひとり北大に限ったわけではなかった。全国的に登山の勃興期に入っていたことは、慶応、早稲田、学習院などの各山岳部にも同じような現象がみられたことが、その間の事情を明らかに物語っている。この時代の北大スキー部の中軸をなした人たちは、六鹿一彦、福地義三郎の両氏について板倉勝宣、加納一郎、松川五郎、板橋敬一、後藤一雄など、当時第一線に活躍した山岳人で、前記の主要な登山記録はほとんどすべてこれらの人たちによって作られたものである。その他にも、宮城孝治、山極三郎、奥村楨吉、鈴木金作、網野兼一、平塚直秀、相川正義、南波初太郎、岡本三男、青木三郎諸君のような有力なメンバーを擁していた。

大正九年に初登頂されたものに、キモベツ岳（二月）と奥手稲ハルカ山廻りコース（二月）と十勝岳（三月二七日）がある。キモベツ岳は中山峠を経て登り、定山溪へ下っている（一行七名）。十勝岳はスキーを用いず、山麓鉱山事務所に泊り、火口の鉱山までは道路にしたがひ、それからはシュタイグアイゼンを用い、頂上付近でザイル、ピッケルを使っている。一行は七名であったが、かれらはその足で引続き芦別岳も試みている。

青山温泉の合宿は大正七年から始まったが、大正九年十二月の合宿中にチセヌブリとニセコアンヌブリの初登山に成功した。この年以後、ニセコ山群は毎年数回登山されるようになった。またこの合宿の帰途、十年一月四日に一行十名で昆布岳を登頂している。

ムイネシリ岳と余市岳の初登山は大正十年（一九二一年）行われ、いずれも登頂に成功した。

青別岳はまた陸測地形図の出でいなかった大正九年の三月、前記の十勝岳に登った一隊が試みた。このときはユウフレ沢から夫婦岩の西南に達したが、大キレットに妨げられて登頂には至らなかった。しかし翌十年の四月二日に、つぎに述べる旭岳登山を試みた一行五名が、その帰途見事に登頂を完成した。このときは山部の最奥の農家を午前五時に出発、一〇八メートル峰を経るルートを選び、正午に頂上に達した。すでに陸測五万の地形図が発行されていて、この登頂の可能なルートが選ばれたのである。

北海道の最高峰旭岳の最初のスキー登山は大正十年三月下旬に、板倉勝寛、加納一郎、松川五郎、板橋敬一、後藤一雄の五名によって試みられた。ユコマンベツ上流の造材小屋を根拠として、二六日から三日間登頂を試みたが、連日濃霧のため目的を達しなかった。しかし翌十一年（一九二二年）一月九日、前年と同一メンバーによる同一登路からの再挙の結果、ついにその山頂は征服された。これは北海道スキー登山史上特筆に価する記録であった。

黒岳もまた引続いて同年三月三〇日に層雲別温泉から登頂された。山頂付近はもちろんシュタイグアイゼンを用いた。一行は板倉勝寛、板橋敬一、加納一郎の三人であった。

四

この時代の北大スキー部の中心をなした人たちは、また「山とスキーの会」という同好会を作って、本邦最初の月刊山岳雑誌「山とスキー」を刊行した。創刊号は大正十年六月に出た。スキー部の機関誌ではあったが、楨有恒、松方三郎、大島亮吉氏なども常連の寄稿家で、きわめて高級の内容をもっていた。「山とスキー」は八年続いて刊行された後廃刊されたが、わが国の登山界に対する貢献は大きかった。これはまた、スキー技術や競技の理論や、研究にも多くの頁をさいていた。というのは、ちょうどこの時期に、飛躍や長距離や滑降レースのような、スキー競技の本格的な研究が始まったからである。飛躍の組織的研究は大正九年、レースのほうは大正十二年からであるが、これらの分野では、中野誠一、緒

方直光、広田戸七郎、稲住猶、岡村源太郎、南波初太郎、小川玄一の諸君がリーダーであった。大正十一年には、中学時代にすでに優秀なスキー技術を身につけた伴素彦、村本金弥、神沢謙三など、後年のオリンピック選手たちが、揃って北大に入学したので、競技のほうはますます発展した。同じ年に山のほうでは、つぎの時代を形成した藤江永次、小森五作、田中二郎、宮沢精、内海栄郎やわたくしなどが入学した。そのころから、スキー部の中で競技と登山の二つの領域の分化がますます明確になっていった。

またスキー技術も急速に進歩したが、大きな変化の一つに、スキーの様式の問題があった。最初に輸入されたのは、スプリングで靴形の金具を取付けた、いわゆるアルパイン式で、これがだいたい大正十年ごろまで踏襲されていたが、大正七年に北大の遠藤吉三郎博士がノールウェーから初めて北欧式のスキーを持ち帰ってからは、しだいにフィットフェルト式縮具がアルパイン式に取って代り、北大スキー部では大正十一年の十二月の合宿からは、初心者にいたるまで全部員がこれを採用することになった。

五

登山技術の上からみても登山記録の点からみても、旭岳初登頂の成功した大正十一年で開拓時代に一応の終止符が打れたとみなすことができる。この年の秋に榎さんが海外遊学から帰朝した。そして本格的な岩登りや氷雪の技術を紹介したので、それまでに北海道や日本アルプスで、充分に蓄積されていたわが国山岳界の旺盛なエネルギーが勃然と開花して、こんにちのような隆盛の機運が醸成されたのである。

大正十一、二年のころには、北海道の山岳界も、ようやく開拓時代から爛熟期への発展の転機に立っていた。もともとその爛熟期の果実が充分に実るまでには、数年間の時日が必要ではあったが……。わたくしたちのクラスが北大に入学したのは、ちょうどその変態の胎動期に当たっていた。まだ完全に開拓期が完了していたわけではなかった。脱皮にはわたくしたち自身の大きな熱意と努力を必要としたのである。そして昭和三年（一九二八年）にわたくしたちの試みた、真冬の

石狩岳スキー登山の成功をもって、開拓期は完全に終りを告げ、同時に、北海道のスキー登山の爛熟期とも発展期ともいえる、新しい時代の頁が始まったのである。このように旭岳登山と、石狩岳登山との間にかんがりの時間的距離が生じたのは、つぎのような事情が伏在していたからである。

北大では山岳部に先立ってスキー部が誕生した。しかも当初のスキー部は実質的には山岳スキー部といふべきもので、この状態は、スキー競技の輸入された大正七、八年ごろまで続いていた。しかし夏の山登りはほとんど行われなかった。北海道の冬山の魅力があまりに大きかったこともその一因であった。夏山の本格的な登山は、大正八年に入学した板橋敬一君や松川五郎君などに始まったようだ。そして大正九年に加納、板橋、松川の諸君や館脇操君などの在寮生によって恵迪寮旅行部が生まれ、十一年に予科旅行部に発展した。いずれにしても北海道の山登りの草分け時代で、九年、十年ごろに板橋君や松川君は、大雪山や暑寒別岳などにはいっていた。大正七年に出た小泉秀雄氏の「北海道中央高地の地学的研究」(「山岳」第一二年、二・三号合併号)が大きな刺激になった。大正八年は板倉さんが学習院から北大にきた年であり、大正九年は慶応の大島亮吉、田中三晴両君が石狩岳に登った年である。わたくしの入学した大正十一年には、すでに前年から予科生だけの寄宿舎になっていた恵迪寮の旅行部の幹事は、田口鎮雄、佐々木政吉、赤松勲、阿部謹吾、寺田慎一、岩森秀夫、榎松喬の諸君だった。板倉さんが卒業して北大を去った年で、学部にはまだ板橋君や松川君も在学していたが、残念なことに、両君はスキー部とは多少疎遠な関係になっていた。また田口君などは夏山はよく歩いていたが、スキー登山の技術と経験は、板倉さんを中心とした一廻り前の人たちとは、まだいちじるしい懸隔があった。せいぜいニセコとか奥手稲程度の登山経験しかもっていなかった。わたくしたちの同級生は、最初田口君たちの指導をうけたが、まもなく彼らと一つのグループとして融け合っていた。わたくしのクラスに引続いて一、二年のうちに、和辻広樹、山口健児、山県浩、須藤宣之助、原忠平、渡辺千尚、西川桜、井田清、野中保次郎、中野征紀、野崎健之助、渡部成三、徳永芳雄の諸君が入ってきて、旅行部はますます活況を呈した。当時すでに将来に対して大きい発展が予見された。新しい時代への胎動期であった。熱心な研究と実践が続けられ、技術と精神の両面のエネルギーは、急速に蓄積されていった。やがてわ

たくしたちを中心として、山岳部が創立される機運が醸成された。山岳部は大正十五年（一九二六年）の十一月に発足した。

「山とスキー」は、その後も継続して発刊されていた。編集は一年交替で引継がれていった。発刊当初の編集者加納、板橋の二君のつぎに、第二年目の大正十一年度は野口敦君（旧姓長谷川）、第三年目は赤松勲君が当り、第四年の大正十三年度はわたくしたちに引継がれた。第五年目以降は、順次広田戸七郎、相川正義、山口健児、小川玄一の諸君が編集を担当した。

六

大正十二年から二、三年間、とくに大きなスキー登山の記録のないのは、以上のような事情にもとづいている。しかしこの期間にすぎの発展期への準備は着実に積まれていった。そして新しい時代への飛躍を示す動きはすでに見えていた。例えば、わたくしたちの十三年（一九二四年）五月の夏スキーによる、大雪山から石狩岳への試みや、十四年三月の、黒岳小屋を中心とする大雪連峰の登攀などがそれである。前時代に比して登山の規模がいちじるしく拡大されたことが分る。この時代の特筆すべきことは、夏スキーの使用と野営の技術の進歩である。

夏スキーは大正十二年の春から実用化された。その結果、それまではほとんど試みられなかった四、五月ごろの登山が、さかんに行われるようになった。ハイマツや根曲笹で夏季の山稜縦走の困難なところも、残雪を利用して夏スキーを使えば楽々とできる。そのころは天候もだいたい安定しているので、野営も安全である。大正十二年の四月下旬、松川君のグループがムイネシリ岳から白井岳を登ったのが皮切りであった。五月には、田口、小森、坂上の三人がムイネシリ岳から余市岳へ縦走し、佐々木と藤江とわたくしの三人は、暑寒別山群の縦走を試みた。翌十三年の五月には、藤江、佐々木、小森、田中とわたくしの五名が案内の高橋浅市を伴って、松山温泉からカウソ岳をへて石狩岳に登ったが、吹雪のため頂上付近から追い返された。これが積雪期の石狩岳を試みた最初であった。失敗ではあったが、登山のスケールの大き

さでは、すでに前時代をはるかに凌駕するものであった。十五年の五月、西川、野中、高橋、梅沢一行が人夫二人を伴ってふたたび石狩岳を目指し、こんどは首尾よく登頂した。このときは層雲峡から黒岳、忠別岳を通過してヌタツブヤンペツを下るコースをとった。これとほとんど同じときに、山口、山県、原の三名が人夫一名をつれて、十勝岳から大雪山までのオプタテシケ山脈の完全な縦走に成功している。

この時代にはまた、雪中野営についてもいちじるしい進歩がみられた。そのころまでは雪中野営の経験には乏しかった。前の時代の登山は、すべて温泉とか造材小屋を根拠として、一日で行われた。しかしこの時代からは、より近づきたい山がしだいに登山の対象となってきたので、雪中野営の必要が生じ、その研究が行われ、また実行されるようになった。当時北海道には登山小屋がほとんどなかったからである。大正十五年（一九二六年）一月から昭和三年（一九二八年）四月までに、冬期野営を行って成功した山々に、夕張岳、天塩岳、武利岳、美生岳がある。冬の石狩岳登山は、石狩川上流二個所に簡単な小屋を建設することによって成就された。その他、暑寒別岳、トムラウシ岳、富良野岳から美瑛岳に至る十勝連峰、ニセイカウシユベ山、斜里岳などが、この期間に冬期初登頂の行われた主な山々である。また大正十四年の三月には、その前年建設された黒岳の登山小屋を中心にして、凌雲岳、北鎮岳、旭岳、白雲岳などが登られた。

このようなスキー登山の発達は、いうまでもなく夏山の開拓に並行して行われたものである。中央高地の山々をはじめ、登山家のあいだにはまったく未開の処女地であった日高山脈も、大正十三年以降は、夏山の登山記録は急速に増大していったのである。なお、陸地測量部五万分一の地形図の石狩岳付近が発行されたのは大正十四年であった。以来この地域の山の様相がはっきりしたので、安心して歩けるようになった。

以上が冬の石狩岳登頂が成就されるまでの、わたくしたちの山仲間によって作られた、スキー登山の記録のあらましである。長らくの目標だった石狩岳の登山が終ったからの関心は、スキー登山の処女地であった日高山脈に集中されたのはしぜんのなりゆきであった。わたくしたちは昭和四年の一月にはトツタベツ岳と幌尻岳の登山に成功した。このときも、夏のあいだにトツタベツ川上流に自分たちの手で作ってきた簡易な山小屋を使った。この年あたり以後、北海道のスキー

登山は、ほんとうの意味の発展期に踏み進んだと解釈してよいであろう。新しい年代の人たちによって極地法の研究が生まれ、日高山脈の未踏の峰が、北から南へつぎつぎと踏破される時代を迎えた。(一九二九年八月二〇日執筆)

(北の山統篇 昭和五十一年十二月 若溪堂 より再録)

恵迪寮旅行部の思い出

田 口 鎮 雄

「恵迪寮旅行部の設立と活動」との題で書けとの注文を頂いたが私の昔の旅行日記は満州で敗戦の折りの逃避行でシェンクのピッケルと共になくなってしまったので部の記録としては正確を期し難い。標記のような内容にさせて頂いたが五十年前の記憶をたどってのことであるのでどれが恵迪寮旅行部としてか桜星会旅行部としてかが定かでないが予科生の山歩きするものの殆んどが寮生であったことが実状であったので今標題に近いものを書こうと思う。

私は中学の三年頃から荷馬車用の桐油紙を自分で縫い合せた手作りのテントを担いで燕、檜、上高地を歩き、雲取山、甲武信岳の山梨県北辺の山を歩き、雁坂峠の上に立ってからすっかり山の虜になってしまった。

そして大正十年予科に入学して函館から札幌まで黒松内、倶知安など蝦夷の匂のする駅を通して車中から雪を頂いた羊蹄山を見て異常な興奮を覚えた。予科入学と同時に恵迪寮にはいり南寮で四つ先の室に敬さん(板橋敬一)がいて二級上

だったが、その敬さんから寮には前年の大正九年に恵迪寮旅行部ができて五郎さん（松川五郎）が主任幹事で敬さんも幹事の一人で、今年は予科桜星会旅行部も発足の筈であるが、北大全体の文武会にはスキー部はあるが旅行部がなく、夏山もスキー部の山班活動の延長となっていることを話して呉れて、新入生の活躍を大いに期待するといわれ、以後私の北海道の山に関しよき指導者になって呉れた。

入寮してすぐの日曜日には一級上の政吉（佐々木政吉）と私の二人は敬さんに連れられて藻岩山に登り残雪の中から首を出した馬鹿でかい落のとうと野生の福寿草が印象的だった。そして遙か石狩平野をこえて暑寒別岳の真白な優姿が眺められた。五月の連休には待ち切れなかったように敬さんに連れられて政吉、斎藤謙と私の四人は江別に下車して歩きだした。当時は札沼線はなかったので当別に行き当別から先は無人の泥炭地の原野を北に進んだ。道と電信柱が地の果てに小さく沈んでゆく一本道を歩いて行ったが、当時トラックのない時代で五、六里の間は人影も全くなく、その間に初めて酔払いのような歩調の荷馬車が一台やってきたが御者は空馬車の上に大の字で眠っていた。そしてこの葦原に昔はよく熊が出たと敬さんの話。浜益から左に海岸線を見おろしながら小さな峠を二、三上下したが、海岸の漁場はどこでも大きな薪を山と積んであったが、鍊は全くとれず漁具や大釜があたりに散乱し、どの漁場にも残っている網元の鍊御殿の建物に對比して悲惨の極みだった。しかしそれから先雄冬岬を回って増毛までの道、右手に絶えず眺められる暑寒別岳の威容に接しいつか必ず暑寒別岳に登ろうと考えた。増毛まで出たら留萌まではまだ鉄道がなかったので、いくら道を急いでも留萌発の終列車に間に合わないのを知り夜を徹して歩き、妹背牛から夜行列車で帰ったが途中で厩大な蜂須賀農場がきれいに耕地整理されて遠く電灯がキラキラ四角に輝いているのが見られた。この旅は予科に入學して私の初めての山歩きだった。が携行した地図は陸地測量部発行ではあったが、すべて仮製版で地名などは僅かしか記入されてないのであった。

暑寒別岳の周囲を回り歩いてこの山に魅せられた同行四人の内、私を除いた三人は待ちきれないようにその年の七月留萌から歩いて増毛を経て遂に暑寒別岳に登った。また私としても暑寒別岳の印象は忘れ難く、大正十三年七月予科生坂本弥直（直行の兄）を連れて増毛町山の神から暑寒別に登り、すぐ東の雨竜沼の湿原に遊び、ペンケペタン沢を下り三〇七

ンチに近い大きなイワナを夕方二時間位で七〇尾釣って夜食とした残りや塩焼きにして土産に札幌に持ち帰ったのを覚えていた。暑寒別岳にはその後大正十二年五月に、その年から流行した夏スキーを履いて政吉、秀五郎、藤江の予科生だけで登っているが、スキーなので道がはかどり雄冬山、浜益岳、群別岳まで登っている。

予科一年の夏四人の内私だけが暑寒別岳の初登山に参加できなかったのは約束があったので、私は中学の友人福林正之（松本高校）と二人で七月伊那町から南アルプスの赤石岳、荒川、塩見、北荒川岳と縦走して高遠に抜けた。塩見岳にかかるとき激しい雷雨におそわれたが、やがて雷がおさまった頃雨の這松の中を三頭のカモシカが飛ぶのを初めて見た。この福林は私の送った「山とスキー」誌を見て感激し、後年松本高校生によって「わらじ」が発行されるきっかけを作った。

予科一年の九月に学校に帰ってから秋の中山峠に行った。前日から板さん（板倉勝宣）五郎さん（松川五郎）トンちゃん（野口敦）の三人が中山峠の駅通に泊っているので私と政吉の二人は定山溪から一人通らぬ中山峠への道を何でもが真赤になる北海道の紅葉を賞でながらのぼって行った。夕方駅通に着いたら先着の三人から異常なまでにもてなされ、夜になってさぞ疲れたろうと一重ねしかない駅通の布団に私と政吉二人が寝かされた。翌朝になって駅通の番人の爺さんのもので、爺さんが急死して出入りの客のないままに死骸がその布団の中に二日寝かされていて私と政吉の着く昼前に仏を喜茂別の方へおろしたという話だった。山男のニューモアには相当の迫力がある。翌日も丸一日駅通付近で遊び、彼等は携行した猟銃で獲物を求めたが何もとれずカラスを一羽とってきた。料理は私が命じられて大きな黒い奴を型どおり湯はぎで羽毛をとり枝肉にしたものを根曲りで作った串に刺しこれに味噌を塗って炉辺で焼いた。一同うまいうまいといって食った。食い終ってから板さんに田口はカラス料理には馴れているからと褒められたが、あとから泊る人の手前みつともないと思つて黒い羽毛は駅通の裏の菜園に土を掘ってコッソリ埋めておいた。その夜板さんと五郎さんからいろいろと山やスキーの話聞いた。

また山とスキーの会の事務室では加納一郎先輩から、山とスキーの会は山の研究所でなければならぬといわれたのを五十六年経た今でも耳に残っているが、北大の山岳部には今でもこのアカデミックな精神が残っている。その加納さんも

多くの著書を残して亡くなられた。

大正十年私にとっては初めての北海道の冬、十二月になって札幌に二〇センチ位の雪が降った日、政吉と私は板橋君に連れられスキーを担いで軽川に行き小高い蕎麦畑の跡地で直滑降を試みた。起きあがって振りかえったら滑ったシュプールより雪のはげた黒い土の方が長かった。十二月の末には昆布の青山温泉のスキー部の合宿に行った。初年班の班長は五郎さん（松川五郎）で政吉と私は五郎さんから山班としての特訓を受けた。かく北大は予科一年から学部三年まで最短短六年間は一つの山岳部の仲間が得られる。私は幸にして予科一年から北大の山グループ結成に当たった主だった先輩から直接指導をうけたことを幸運だと思っている。

予科二年になって政吉と私の二人は山のグループのあり方についてゴツソリ話し合っていた。政吉と私の持論は恵迪寮旅行部と予科旅行部を發達させて予科時代からハッキリこれは山男と銘打った人間を思い切り殖やすことである。さすれば夏山に行ってもスキー部の山班という殻にとじ込められることもなくスキー競技の長距離レースの標旗代りに丸一日立たされることもない。所詮目的の異なる山男達は冬期にそなえて将来は山岳部として独立すべきものである。この持論のもとに政吉と私は山の仲間の大量育成に努めた。その結果赤松勲、寺田慎一、阿部謹吾、小森五作、田中二郎、山口健児、須藤宣之助、安積樟三など優秀な仲間ができ、この外にも恵迪寮旅行部で初めて山登りを始めたというのまで立派な山の仲間として育ってくれ、次第に山のリーダーまでやってくれた。大正十一年入学の伊藤秀五郎が恵迪寮に入ってくれたのは心強かった。秀五郎は板橋君の横浜一中の後輩で一年の夏には甲武信岳に登ったというのが嬉しかった。

私は予科二年の夏にはカムチャツカの漁場で働らくアルバイトをみつめて楽しみにしていたが、乗船間際に断られた腹いせに国後島に渡ろうと考へ、根室から古釜布（フルカマツブ）まで途中二時間焼玉エンジンが故障でとまる怪しげな機帆船に二円五〇銭を二円に負けて貰らって便乗し、古釜布の西、瀬石^{ノセ}という部落で道庁の林務課の出張員の臨時人夫をやつて二カ月滞在した。セセキとはアイヌ語で「湯の湧くところ」とかで海岸の汀線で湯が湧いていて村落の人は砂地に太い土管をいけてそれに釜をのせて蒸気で飯を炊いていた。私はその砂を掘つてサウナを楽しみ寝ながら横を見ると砂地

に海浜植物と高山植物が混生しているのを見て異常な興味を覚えた。二カ月間滞在し九月下旬遅れて学校に帰って来たらず科旅行部長の野付教授に学生の本分を忘れるなど叱られた。

予科二年の三学期になってそれまで北海道の山登りに常に行を共にして来た佐々木政吉が突然私に言い出した。それはこの二年間急に山登りに熱を上げ出した彼は俺は今度落第しようかと思ふと私にいった。彼は秋田県増田町の古い味噌醤油業の社長の一人息子で、北大卒業後直ちに実家に戻って家業を継いで一生味噌醤油と暮らさねばならない身分だから、今年落第すれば田口と同級生となり二人して充分山登りもできると一人決めしていた。その三月も終る頃である。その日は私と秀五郎の二人はその年のスキーの滑り納めとばかりに軽川に行つたが予科の進級発表の日なので、日頃低空飛行を続けている私としていささか自分が気になるので、帰路スキーを担いだままの姿で予科事務室前の掲示板を見に行つたがどうやら私は進級していた。一緒に私の掲示を見に来てくれた筈の秀五郎が掲示を見ながら

「アレ 俺おっこってやがら……チェッ」

私も秀五郎自身もまさか彼が落ちるとは思つてもみなかった。秀五郎は前年の春、当時中学四年終了で予科に入学して来た秀才で頭もよく、下級生ではあつたがその後も私は彼から教育されることが多かった。彼の落第は多分製図の提出枚数が足りなかつたか鉱物の結晶学かの不足点が原因だつたのだろう。政吉は予定通り落ちていた。寮に帰って秀五郎の落ちたことを話すと政吉は

「ああ それはよかつた」

実によき時代であつた。これで政吉と私は共に三年生、秀五郎は再び一年生、これで歩調が揃つたので各季節を通じて三人はよく歩いた。後から考えてこの二人の落第で、将来私達が夢に描いていた北大山岳部創立へ一段と躍進したように私は考えているがこれは過言とは思えない。そして陸地測量部以来未登攀だつた札幌付近の札幌岳、空沼岳、無意根尻岳なども予科生のみで私達で夏も冬も登つていった。また政吉、秀五郎、五作、和辻と私で小樽の近郊の張碓の崖にしがついた。崖の途中で岩にロープを巻きつけて夜食をとっていたら大きな鏡のような月が出て来た。やっと登りつめて体の

ロープを解いて裏の緩傾斜を降り始めたら秀五郎は火のつかないパイプを口にくわえた。彼は烟草のみではない。なかなかやるなと思った。

また子供用のスキーを改造したゾンメルシーを穿いて堅雪を利用してそれぞれ多くの山に登ったし、春さき平地の雪も堅くなった時、政吉と私の二人でアルペン式スキーの単杖二本に敷布を張り春一番の風に乗って茨戸まで平地でスラロームを描いて滑り、帰路は逆風の中を夜おそく琴似まで歩いて帰った。当時恵迪寮といわず予科全体の山登りについての関心が最高調に達した感があった。また政吉と私の二人が寮の購買部の委員をやった際、東京築地の片桐天幕店に寮生の予約をとってリュックザックを取寄せたり、贈売部の売店に佐渡草鞋を置いたら土曜日などは朝から飛ぶように売れた。

予科時代私の一番思い出になった登山行は大正十二年七月、政吉、藤江、私の三人の予科生で帯広から音更川を遡行して石狩岳に登り、石狩川の水源から下りはじめ、愛別で汽車を捕えるまでの北海道の二つの大きな森林地帯縦断の十四日間の旅である。帯広では一日滞在して長途の旅の準備を整えて、人夫長田福松に米を背負わせ、当時上士幌まで鉄道はあったが出発が汽車に間に合わなかったので歩いて上士幌に泊り、いよいよ人家を離れるのでそこで草鞋を一七足ずつ各自で背負った。さすがの予科生もこの大荷物はこたえて清水沢駅通で泊り、次の日は糠平温泉で泊った。当時はダムによってできた糠平湖などは勿論なく糠平温泉といってもここには退役憲兵少尉の老人が温泉の権利を守って唯一人住んでいるだけで、今時の青年にしては感心だとはばかりに宿賃もとらずに泊めてくれた。この憲兵少尉が音更側で見た最後の人間で、ここから三股までは沢すじを歩いても斧鉞の跡も見えない全くの無人境で、生れて初めて見る大森林の景観に打たれながら暗く一面に生えた苔の上を歩いていると不意に落し穴のように胸まで落ちる。それは折りかさなって倒れた直径一m以上もある倒木が、上を撫でて地ならししたかのように一面に苔に被われているのだ。私達は二世紀の上を歩いているように思えた。奥の三股から尾根にとりつき石狩岳頂上に立って先ず見たものは旭岳連峰の眺望ではなく今まで登ってきた音更水源の暗く沈んだ大森林であった。頂上では今年来るかもしれない慶応の大島亮吉君一行宛の手紙を書き、烟草の罐に入れ三角標石の上に固定した。前石狩沢から石狩川を下ったが音更川にくらべて明るい沢である。二日目に大函の入口に

達したが三年前やはり上流から下って大函に達した大島君の紀行文通り驚いた。大函は右岸をからんでどうか通過したが、もし雨でも続いて水量を増し水が濁って川底が見えなかつたらとても渡れたものではない。やっと層雲別温泉の唯一軒の宿小屋に出たが客は一人もなく草鞋も売ってないので四人共層雲別からははだして歩きときどきは路傍に捨ててある古草鞋を修繕して履いた。二里位歩いたところで鉄砲をもった三人の村人が昨夜二歳の病馬を熊がかついで逃げたので後を負うのだとてゴソゴソ森の中にはいっていった。

かくして恵迪寮旅行部や予科旅行部から成長して行った数多くの人達は、何等スキー部の力も借りずに冬季登山も重ねてゆき、いよいよ山岳部が独立する時期に達した。そしてスキー部を土台とし、冬山にまで成長した古手の赤松、佐々木、田口は平和裡に山岳部を独立させようと申し合わせて大正十四年十二月スキー部の青山温泉合宿に久し振りに参加してそれぞれ新入班や山班の班長を勤めさして貰った。昔加納、松川、板橋に始まった恵迪寮旅行部、それに続いた赤松、佐々木、田口、伊藤などから今の山岳部の時代となり、現在山岳部の記録を読むには世界地図が必要なまでに発達した。そして山岳部は大正十五年十一月に発足したが、私はその十二月学部三年の時に一年志願兵として入営した。除隊して昭和三年三月卒業して社会人となり満州に渡ったので山岳部とも縁が遠くなった。

稿を終るに当り今名前をあげた七名の内大半は故人となり、生存者は赤松、田口の二人だけになった。淋しいことだが赤松、田口は年一回は必ず会って昔のよき友を偲んでいる。

山岳部創立の頃の回想

山口 健児

五十年とは長い年月であり、また一瞬であるかも知れない。実際に五十年を過してみると、その中には色々な物が詰まっているものであることが、実によく解る。

しかし忘却は人間だけがもつ特権であるというから、皆が忘れかけていることに油をかけて、興味のない若い人達にまで迷惑をかけるような考えは毛頭ないつもりである。北大山岳部は、大正十五年十一月十日に創立されたのである。このことは伊藤秀五郎君の名文をもって、北大山岳部報第一号や、北大山の会の会報四二号（同じ文章が「北の山統編」にも転載してある）に明確に書き遺してあり、また渡辺千尚君が山岳部報第五号の「思い出」の中で証明している。この両君の書かれていることは正史である。

古い奴は古いことを知っているという特性を利用して、創立当時のことを観点を変えて眺めてみるのも、趣きが大分変わり、しかも山岳部誕生記の二番煎じの誇りをも免れるだろうと思う。そこで山岳部創立の大きな背景をなしていた北大スキー部と、山とスキーの会という角度から記憶を辿ってみたい。

大正十五年という年は、我々にとって忙しい事が続いた。まず北大創基五十年の記念式典があり、スキー部は創立十五周年に当たっていたので、手稲パラダイスヒュッテの建設と、十五周年記念出版が行われ、そして北海道帝国大学文武会山

岳部が生れた。そして年末に山岳部のスキー合宿が新見温泉で始めて行われ、終つて昆布駅で新聞を見たら、日付は昭和元年となつていた。

大正十五年に私は「山とスキーの会」の月刊誌「山とスキー」第六年目の編輯を担当したので、広田戸七郎、小野修両先輩と、北五条西十一丁目に家を借りていた。そして記念出版編集の手伝いもしていたので、毎日がほんとに忙しかった。

北大の学生で山の好きな連中は、予科では桜星会旅行部に集り、このうち恵迪寮に居たものは恵迪寮旅行部を別に作っていた。この他に大学全般として文武会スキー部というのがあり、大学生でも、予科実科専門部の学生でも山好きは皆ここに集っていた。

扱て、日本のスキー発祥については、明治四十一年に北大予科の独逸語講師に赴任して来られたハンス・コーラー氏が、一台のスキーを持参されたことに始まるのである。その翌冬に稲田昌植、宮部憲次（宮部金吾氏令息）角倉邦彦等の諸氏がこのスキーを拝借して三角山へ持ち出し、Der Schiなる本の写真に出ている格好を真似て滑ったと、稲田昌植氏の回顧談にある（北大スキー部十五周年記念誌）。従つて、これが日本に於ける最初のスキー滑降で、オーストリアのテオドル・フォン・レルヒ少佐が高田十三師団でスキー講習会を開いた明治四十四年一月よりは古い話である。

この時の Der Schi なる本は、多分 Henry Hoek の Der Schi であろうと思われる。コーラー先生は二冊のスキー書を将来され、もう一つはズダルスキーの本であつたというから、多分 M. Zdarsky, Alpen (Lilienfelder) Skifahrtechnik であろうと考えられ、山とスキーの会の蔵書の中に残っていたのを覚えている。

当時のスキー術はオーストリーのマティアス・ツダルスキーが創始したもので、アルプスの険しい山地を安全に滑るために、一本の長杖と、スプリング付の縮具を具え、シュテムボーゲンを強調したものであつた。

明治四十五年二月レルヒ少佐は中佐に進級して、旭川の野砲兵七連隊付となり、直ちに将校等にスキーを教えた。そして翌月、札幌郊外の月寒において、レルヒ中佐直弟子の三瓶勝美中尉等により、一般人のためのスキー講習会が開かれた。

この月寒の講習会に、北大からは稲田、角倉等七名が参加し、この参加者が中心となり、ここに明治四十五年六月に文武会スキー部が創設されたのである。そして翌大正二年十二月、角倉邦彦、柳沢秀雄、荒木忠郎の三名は富士登山を決行、二合八勺までスキーを使用し、ついに大正三年一月一日に山頂に達している。

次いで大正五年になると、ノルウェーに留学中の水産専門部の遠藤吉三郎教授が、ノルウェー式縮具のスキーと複杖を持って帰朝され、その上彼地で習い覚えたスキー術をスキー部員に教えられたという。それ以来二本杖が普及するとともに、テレマーク、クリスチャニヤの技術が導入され、ここにスキーは軍隊式スキーの域を脱して、スポーツとしての新生面を開いてゆくのである。

やがてスキー部内に於ても、大正七年頃より、木原均、広田戸七郎、緒方直光氏等によって、スキージャンプの練習が始まり、スキー仲間には山党、畑党、燕麦党の区別が生じてくるようになってきた。すなわち山党は登山派、畑党は競技派、燕麦党はスキー滑降だけを楽しむ人々のことである。燕麦は山と畑の間に播く作物であるということから中間派を意味する名であった。

その後大正十三年より、医学部の大野精七教授が北大スキー部長に就任された。新部長はドイツ留学中に、スキー競技についてよく研究され、見学されてきたので競技の内容や知識が急に向上し、翌年には全日本スキー連盟が誕生、その翌年の大正十五年には国際スキー連盟に日本も加盟したので、スキー部に於ける競技スキーの比重は、次第に高まってゆくばかりであった。

やがてジャンプ部門には伴素彦、ディスタンス部門では岡村源太郎の両君を頂点とする錚々たる名手が輩出して、北大は日本のスキー競技に君臨する黄金時代を迎えた。

眼を転じて登山界の状勢は、草鞋と金剛杖から登山靴、ピッケルへと脱皮してゆく近代登山の開幕の時期で、殊に大正十年楨有恒氏のスイスアルプスの峻峰、アイガー東北山稜の初登成功は、それまでの日本の登山界の様相を一変させてしまった。

特にスイスの雪山に憧れる冬季登山が開始され、大正十一年春には慶応の連中により、槍ヶ岳、剣岳の積雪期初登山がなされ、同じく十一年一月には加納一郎、松川五郎、板倉勝宣、板橋敬一、後藤一雄の諸氏によって旭岳登山が、大正十三年一月には佐々木政吉、田口鎮雄、藤江永次、伊藤秀五郎等の諸君により十勝岳登山がなされ、十五年一月には沢本三郎、小森五作、和辻広樹、井田清、高橋喜久司、山口健児らが、夕張岳頂上へのスキーでの初到達に成功している。

このような雪に埋もれた山頂を目指す厳冬の初登が一巡してしまつと、次はゾムメルシーによる陽光五月の登山が始まり、大正十四年五月には山口健児等が大雪山彙へ、十五年五月には西川桜等が石狩岳へ、同じ時に山県浩等は十勝岳よりトムラウシ山・オプタテンケ山脈の縦走に成功している。

かくて北大スキー部内における登山と競技の二つの潮流は大きくなるばかりで、一は競技の研鑽に余念なく、一は登山以外は全く無関心という状態から、スキー部の予算配分で揉めるといふ有様にまでなつてきた。

競技と登山との取扱いに就て、大正十五年の三月、スキー部の先輩や主要な幹部が集つて、来シーズンの運営等が協議された際、登山、競技両方面の一層の発展を期するため、山の連中が計画している山岳部の創立を補佐し、これから後は登山は山岳部にて行い、スキー部は競技専門の部にすることに決つた。そして将来山岳部へ出る者も、スキー部の十五年周年記念事業に一致協力することになつて、手稲巴拉ダイス・ヒュッテ建設委員に、佐々木政吉、田口鎮雄、岩森秀夫、田中二郎が、記念出版の編集に山口健児が加わり、これで山岳部の設立がスキー部内で円満に解決した（大野精七著北海道のスキーと共に）。

ところで北大スキー部と表裏の活躍をした「山とスキーの会」は、先輩と現役を会員として作られ、その会誌「山とスキー」は北海道ばかりでなく、日本の草創期の登山とスキーの発達に並り知れない貢献をしたものである。この会の発行したのは大正十年の四月で、会誌「山とスキー」の第一号は同年六月一日にアート紙刷りで発行されている。

創立者の一人、加納一郎氏の回顧談（山とスキー五十号）によると、提唱者は加納氏と板橋敬一氏であり、初めは予科

旅行部と北大スキー部の機関誌のつもりであったが、予科の旅行部にも先輩ができて、スキー部との円満な理解がなかったため、スキー部だけの雑誌となってしまったと記してある。しかしこの先輩が誰であったか、その経緯は解らないが、山岳部発生の胎動が推測される。

「山とスキー」の編集発行の中心人物としては、前記加納、板橋二氏の他に中野誠一、松川五郎、板倉勝宣という情熱家も揃っていたので、登山とスキーを専門に研究する日本において最初の独創的な性格をもった月刊誌として、特異な存在を続けることができた。また「山とスキー」が発行される前に「アルペンツァイツング」Alpenzeitung という名の、スキー部のガリ版の機関紙が発行されていたが、あまり知られていない。

「山とスキーの会」は会員組織で、最初の会則や会員名は不明であるが、「山とスキー」五十号に掲載のものを参考のため、次に記す。

山とスキーの会会則（大正十四年）

- 1 山とスキーの会はスキー及び山岳に関する月刊雑誌「山とスキー」を発行する為に、北海道帝國大学文武会スキー部関係者の組織する会である。
- 2 必要に応じ、雑誌の発行以外に、スキー及び山岳に関する各種の事業を行うことあり。
- 3 会員は幹事会の推薦により会則を承諾し、出資金一口以上引受けたるものに限る。
- 4 出資金額は一口金二十円とする。会員はこの範囲内においては常任幹事の指定により何時にても払込みをなすべきものである。
- 5 会員退会するときは常任幹事に通告しなければならぬ。しかし既に払込みし出資金は返還しない。会のため都合あるときは幹事会の決議により除名することがある。除名の際は払込出資金は返還するも在会中要した各種の費用を精算する。



十勝岳温泉付近より富良野岳

坂本直行



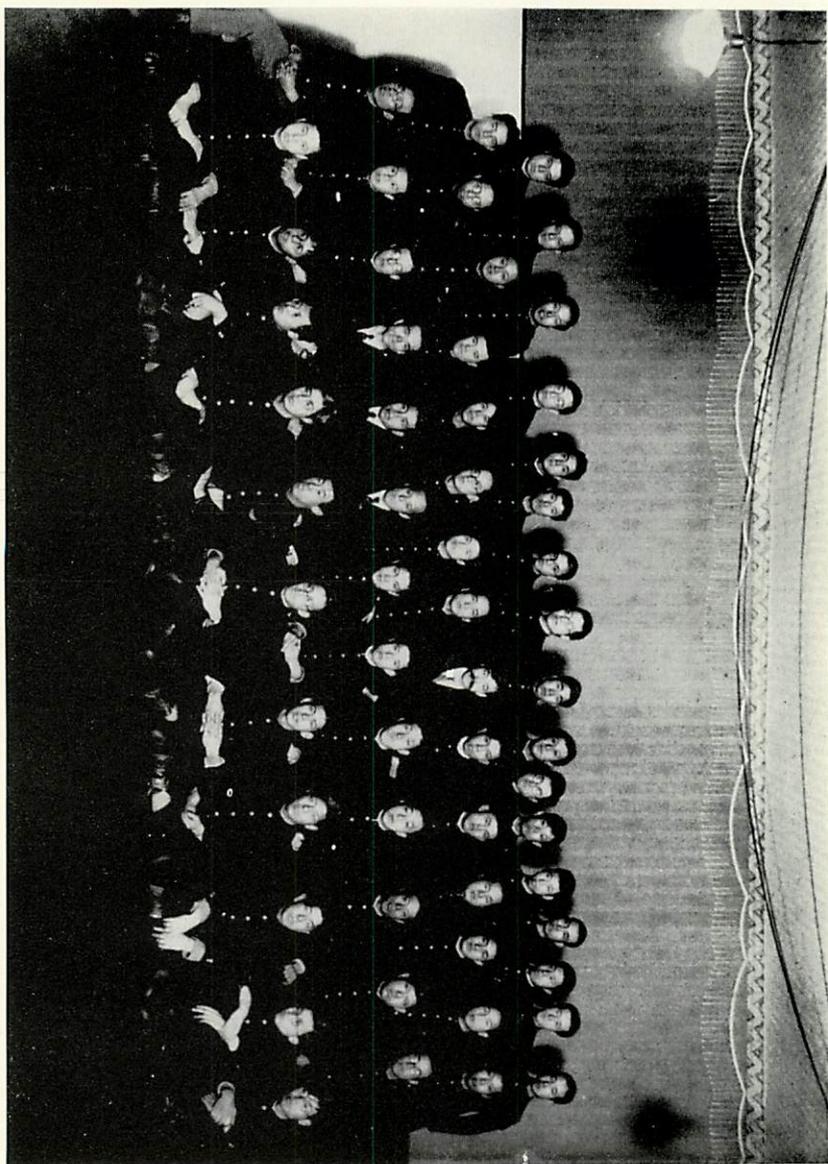
天狗岳よりニベツ山

坂本直行



春の五剣山にて

朝比奈英三



昭和4年卒業山岳部員送別会

- 6 会員中会務にたずさわる者を幹事とする。
- 7 幹事の互選により三名の常任幹事を定め、常に会務に当ることとす。
- 8 必要に応じ特定の事項について委員を置く。
- 9 毎月第二水曜日研究会を開く。常任幹事の必要と認めたる時は臨時之を開く事あり。
- 10 協議事項の決定は出席幹事一致の意見による。但し幹事会は幹事総数二分の一以上でなければ成立しない。
- 11 すべて役員は幹事会において定める。
- 12 毎年一回五月、会員の総会を開き会務の報告をする。幹事会において必要と認めたる時は臨時之を開く。
- 13 会員は会務につき、幹事に質疑し、又は提案することが出来る。
- 14 会則の変更、その他重要な事項は、総会において会員三分の二以上の賛否によりて決定する。

山とスキーの会会員（大正十四年現在）

相川正義、阿部謹吾、赤松勲、青木三郎、青山馨、伴素彦、長谷川敦、平井左門、平塚直秀、広田戸七郎、本田治吉、稻積猶、伊藤秀五郎、岩森秀夫、伊藤健夫、加納一郎、小林一勝、小森五作、桑森一郎、松川五郎、三田村健太郎、宮城孝治、村本金弥、宮沢精、三戸勲、並河功、内藤克三、中野誠一、南波初太郎、岡見清二、緒方直光、岡村源太郎、岡本三男、大久保鉄二、大島幸吉、小川玄一、緒方温光、小野修、佐々木政吉、須藤英雄、須藤宣之助、田口鎮雄、滝田次郎、高杉正樹、徳永熊雄、龍田不二雄、田中二郎、内海栄郎、山極三郎、山口健児、北大スキー部。

そしてこの「山とスキーの会」は大正十年より、昭和五年六月に至る九年間、北海道ばかりでなく日本中の登山とスキー研究者から尊敬と信頼を享けていたが、「山とスキー」が百号にて廃刊するとともに解散した。

第一号以来の執筆者は、今から見ても豪華な顔触れで、稲田昌植、郡場寛、坂村徹、木原均、館脇操の諸先生を始めとする学内の先輩学生の諸君は勿論であるが、外部よりの寄稿も壮観を極めたものであった。まず昭和三年、前穂高登攀中に突然姿を消した大島亮吉氏の数十篇に及ぶ原稿、その中には「山、研究と随想」に収められている「登山史上の人々」を始めとする多くの論文や、訳詩は、天下の岳人を魅了したものである。また楨有恒氏の「板倉勝宣君の死」や、松方三郎氏の「春の槍沢入」などから、青木勝、成瀬岩雄、舟田三郎、麻生武治の諸氏の玉稿。短文や写真を寄せられた方々には武田久吉、伊集院虎一、佐藤久一郎、岡部長豊、近衛直麿等の各氏の名も見られ、近代登山とスキーの黎明期に、先端的役割を果たした方々を網羅していたと言っても過言ではない。私は意識して山に関係の深い方々の名を拾い上げたが、スキーの競技関係でも、やはり当代を代表される執筆者が目白押しで、日本のスキー発達の研究や指導、方向づけ、海外の情報蒐集に大きな役割を果たしていた。

この雑誌が山の先輩や学生達に、山に対する視野を拓けて、兎角、独善に陥り勝ちな殻を破らせた功績は大きく、その上慶応、早稲田、京大の各大学山岳部との交流や、友情を深める機会も作った。また「山とスキーの会」が所蔵する第一巻第一号よりの日本山岳会の「山岳」、英国山岳会の *Alpine Journal* や *エベレスト* への遠征報告その他大部の図書文献によって、山の連中がうけた恩恵は見逃せぬものであった。

雑誌の発行以外に、大正十一年十月には、東京より楨有恒氏を招いてアイガー東北山稜の輝かしい登攀の大講演会を、札幌において「山のスキーの会」主催で行った。この催しは木原均、板倉勝宣両氏の御尽力によるもので、北大を卒業して東京へ帰ったばかりの板倉氏が、わざわざ重い幻灯器械や、種板を担いで札幌へ駆けつけ、大奮闘をされた話が語り伝えられていた。その板倉氏も、その後二カ月位しかたため翌年の正月十七日、立山登山で猛吹雪に遭い、三日間の苦闘も空しく、命を失ってしまった。

また大正十二年と翌十三年の暮には、ハンネス・シュナイダーの映画「スキーの驚異」の第一編と第二編を、「山とスキーの会」主催にて公開を行い、大きな反響を呼んだ。この映画によりスキーは全道に広く普及するようになり、自転車屋や下駄屋でも、店頭にスキーを列べるようになったという。

「山とスキーの会」の運営はすべて学生であったから、面倒なことは手に負えなかったが、月刊誌「山とスキー」の編集は一年ずつの担当で、次から次への順送りであった。編集を担当するものは、どういわけか大体が山の連中にお鉢がまわっていた。

第一年目は加納一郎、二年目は野口敦（当時は長谷川姓であった）、三年目は赤松勲、四年目は伊藤秀五郎、五年目相川正義、六年目山口健児、七年目から山岳部ができたので新スキー部の井出英次、八年と九年を小川玄一の諸君が担当した。四年目を担当したのは伊藤君であったが、当時まだ兵隊検査前の年齢だった為、新聞紙法により許可が下りず、代って佐々木政吉君が名義人になっていた。七年目以後、編集がスキー部の連中に引継がれてからも、山岳部よりの出稿や、写真の提供は依然として続けられていた。

雑誌「山とスキー」の発行部数は五百部であって、この数字は一号より百号まで変らなかつた。また定価の三十銭も、調べてみたら九年間そのままの据置きであった。そして購読者は北海道を除けば東京が特に多く、次いで関西となっていた。また英独埃瑞や北欧へも送っていたが、これは先方のスキーや山の団体の会報との交換用であった。

さしも一世をリードした専門研究誌「山とスキー」も、その後各大学の山岳部が部報や会報を出したり、またスキー年鑑も発行されるようになって稀少性も薄れるとともに、登山やスキーに国際的な感覚も要求されるようになると、もはや学生だけでは繁務をこなすのは困難となり、さらに経済的の理由もあって、百号をもって廃刊に踏みきった。

これは時代の流れであって、力では阻止できぬものであったと思っている。

さて、山岳部も半世紀を迎えて、立派に歩んだ足跡を振り返るとき、いろいろな遠因近因によって誕生したことを思い起

すが、山岳部が歩み出すや否や、直ちに活潑に齒車が動き出したのは、有能なる部員がまことに多士済済であった為に外ならない。

忽ちにして部の目的や進路が定まり、対内的にも対外的にも態勢を整備強化することができたのは、沢本三郎、伊藤秀五郎という性格の全く対蹠的な二人が、時を同じうして北大に居た幸運によるものと思っている。山岳部第一年目の主任幹事は沢本三郎が、第二年目を伊藤秀五郎が勤めて、ここに部の基礎は磐石となった。

しかしながら、この二人は結局うまくゆかず、その後袂を分かつてしまった。それ以来二人は一度も顔を合せることはなかったし、いくら機会をつくっても頑強に会うことを拒み通した。

山岳部の部員章は和辻広樹君のデザインで出来上り、裏に通し番号がつけられた。一号は部の保存用、二号は栃内吉彦山岳部長へ、三号は沢本三郎、四号は欠号、五号は伊藤秀五郎、六号田中二郎、七号小森五作、八号は私がもらった。

伊藤秀五郎君は大学を出てからも北海道との縁は更に強く、日本山岳会の名誉会員であったり、また名著「北の山」以来の文名も高く、北海道の山を語る者なら誰一人知らぬ者はないが、沢本三郎君は忽然と姿を消してしまい、そのまま杳として山の連中から全く消息を絶ってしまった。

しかし沢本君が山岳部創立に果たした役割りは大きく、忘れてはならぬ人物である。私はこの回想の最後に彼の風貌をつけ加えたい。

彼は明治三十三年東京銀座で生れ、東京府立一中を出て、すぐに第一高等学校に入学したというから凡人ではない。一高では学問よりスポーツに精を出し、特に山登りとスキーに熱中し、当時三年制であった旧制高等学校に六年在学したが、ついに卒業せずに退学してしまった。さらに徹底してスキーに打ちこむために、大正十四年北大農学部畜産二部専科に入学して我々の前に現れたのである。彼のスキー歴は、大正八年一高旅行部員として高田の歩兵連隊で手ほどきを受けたのが最初であるというが、彼のスキー理論は堂々たるもので、彼に太刀打ちできるものは、当時既に居なかった。

私は彼が大学で何を勉強したのか全く知らない。後に理学部へ転じたとは聞いたが、何年居たのか、いつ卒業したのか

も知らない。しかし彼とはよく山へ出かけ、一緒に札幌交響楽団にも在籍した。彼はゼロ奏者としてもただならぬ才能を
持っていたのである。

大学を出て以来、私は地方勤務や軍隊生活が長かったので、久し振りに彼に会った時は戦後間もなくであった。そのと
き彼は東京大学伝染病研究所に勤務していたが、相変わらずスキーの理論に没頭していた。

昭和三十三年暮、彼は世に跋扈する誤れるスキー理論に大反駁を加えるという意味で、創元社より「新しいスキー」な
る一書を刊行して、サワモトセオリーの健在を示した。この時の出版祝賀会は大変なもので、三田綱町の三井倶楽部で榎
有恒、麻生武治、黒田正夫、松沢一鶴、三井高孟の諸氏等百余名が集まり、マックアーサー元帥が涎を流したという酒倉
を前に、一同にて彼の快著を心から祝福したものであった。

彼はもはや八十を目前にして往時の元氣はないが、仙骨さらに磨きを加えて、悠々自適、渋谷高台のマンションから遥
か北海道の空を懐しんでいる。

山岳部創立前後の札幌近郊の登山

坂 本 直 行

北大スキー部の創設が明治四十五年即ち大正元年であるから、私の小学校二、三年の頃には、時たま街でスキーを見た。当時はスキーをかつて歩くのは馬鹿で、ヘソ付きのところ針金の輪をつけ、それに細引をつけて街の中をひきずって歩いた。人口八万ぐらいの札幌区の時代はかくものんびりしていた。私たち小学生の頃の通学は、下駄スケートをはいての楽しい通学だった。

だがそんな人間の中に、スケートをスキーに乗替える人間が次第に増えていった。三角山や今は住宅がひしめいている円山の南斜面は、北大スキー部員を主に一般スキーヤーが集って——と言ってもスキー人口は極めて少なかったが——スキーを楽しんだ。集まる人間が少なかったから自然に皆友だちになる、と言うなごやかさがあった。

私の中学時代にはそんな北大の人たちの中に加納一郎氏の存在を早くも見つけて友だちになってしまった。北大スキー部の創立十五周年（一九二六年）を記念した四〇〇ページに及ぶ出版物を見ると明らかのように、最初から競技スキーとスキーの分野が別れて出発している。山スキーを楽しむ人たちは当然スキーを利用しての冬山登山に、最初から取組んで発展してゆく傾向がよく現われている。むしろスキー部であるから、冬山の記録のみが掲載されたと考えても間違ではないが、実際には夏山の記録は少なかったとみるべきであろう。

加納一郎氏は実際には山岳部創立に参加してはいないにしても山岳部創立の重要メンバーを、陰に陽に育てた同氏の功績は大きいといわねばなるまい。ひろん同氏の他に、立山で遭難死した板倉勝宣氏や故松川五郎氏も含まれる。

北海道に於けるスキーを利用しての登山記録第一号は大正二年二月十一日の手稲山登山である。登山隊は稲田昌植、野村竜吉、松本儀一、荒木忠郎、二木春松、吉屋浅雄、柳沢秀雄、角倉邦彦の八名、琴似駅より馬櫓で発寒川に沿ってのぼり、右股の小学校を過ぎてスキーをまく。永峰沢よりひとつ下の沢をつめる（記述があいまいだから推定して）、スキーをはいてから頂上まで四時間で登頂、シールのない時代の記録としてはおどろきである。帰途は登路を下り琴似駅から登頂成功の電報を打った話は有名である。

尚当時、五万分の一地図の有無は私にはわからないが、私が大正八、九年に買った銭函の地図は、大正五年測図で定価は八銭と記憶する。

ところでタイトルにある、札幌近郊の登山対照としての山の範囲は、今の札幌市内にある山と限定しておくが、支笏湖周辺の恵庭、フツブシ、樽前の諸山は、かつて私たちは支笏湖まで一日いっばいかかって、歩いていったのだが、今では一時間〜一時間半で登山口に達する山なので、最後に付記することにした。又明治時代から登山道路があったと思われる山は、藻岩山、円山、手稲山、それに少し離れて羊蹄山ぐらいたと思う。尚大正の末期から、昭和の初期にかけての、札幌近郊の登山の状況は、なにしろ五十年から六十年前のこと故、多忙な私には、貴重な当時の文献である「山とスキー」やこれが廃刊後の「山と雪」などは、手持しているのだが、探し出して記録を整理する時間の余裕もない故、必要な年次などを省略する場合や、明確でない点も出てくると思うが、この点は容赦願うこととする。

何れの場合でも登山状況の急速な変化は、登山人口の増大の他に、道路と交通機関の発達である。札幌近郊の山岳地帯で、登山の重要な起点となる定山溪は、今では有名な温泉街だが、大正四年に豊羽鉱山ができ、更に同七年に定山溪鉄道が開通して、急速に温泉街になった。それ以前の定山溪は、しけた汚ない宿が二軒しかなかった。これは私の小学校時代

定山溪まで歩いていって見たから記憶している。鉄道がここに開通した結果今まで距離の関係でちょっと手出しができなかった山も、土曜日曜を利用して、テントで一泊の山あるいは日帰りの山となり、急速に私たちの身近かな山となった。

その後十五年ぐらいたって昭和七年ごろからと思うが、定山溪から小樽内川に沿って、朝里峠を越え朝里温泉に至る道路ができ、バスが走るようになった。かくて美しい白樺の純林にかこまれた、愛するヘルベチアヒュッテは、道路からまる見えという、夢想もしなかった悲しむべき事態が起きたわけだが、北大スキー部の手稲パラダイスヒュッテも手稲山上にテレビ塔出現により車道ができて同様な事態になった。

かつては、頭からかぶさる笹を分けて歩いた中山峠への山道には、車が行列する今日である。又札幌での冬期オリンピックの時完成した、支笏湖までの道路も同様な結果をもたらした。むろんこれと併行して、山岳景観も一変した。かつての針葉樹の黒々とした美林は、全く消えうせ、残りに追い打ちをかけたのは昭和二十九年の一五号颱風である。この被害は、ヘルベチアヒュッテ周辺の白樺林を壊滅させ、昔日の面影はない。

札幌区に市制が施されたのは大正十一年、人口十二万だったが、その後急速にふくれ上って、今日では一三〇万。それも隣接の町村を合併してふくれたわけだが、現在では国内第二の面積の市となった。そのおかげで市内には、千米を越える山を数えてみると、二〇峰に及び、そして熊が住み、今日でも毎年何人かが熊の被害を受ける。こういう市は珍らしい。以上の山岳地帯は、五万分の一地図の、銭函、定山溪、石山、それに樽前山の四枚があれば、結構退屈することなく楽しめる、という登山者にとってはまことに有難い環境を、私たちはもっている。これらの多くの山で得た沢登り、ブッシュ漕ぎ、あるいは草鞋のはき方などの経験はやがて中央部の大雪あるいは日高へと向う、より困難な登山のための、訓練の場としてもまことに貴重な山々でもあった。

次に標高千米を越える山を列記するが、便宜上地図によって分ける。銭函の地図では、手稲山、迷沢山、烏帽子岳、百松沢山、朝里岳、白井岳、余市岳（地図は仁木）天狗岳がある。定山溪の地図では、美比内山、長尾山、ムイネシリ、中の岳、並河山（これは仮称であるが北大スキー部二代目の部長、並河功先生の名を記念して、この一二三五米の無名峰を

かく呼ぶ) 喜茂別岳、札幌岳、狭薄岳、空沼岳(地図石山) それに地図双葉にある漁岳、小漁岳、以上が札幌市内の千米を越える山だ。千米以下の山では、銭函にある天狗岳、春香山、奥手稲、神威岳、砥石山、観音岩山(通称五剣山と呼んでいたが、今では八剣山と呼ばれている) などが親しい。その他に標高八百米前後の銭函峠、朝里峠、中山峠の三峠がある。

手稲山 昔の夏道の第一は地図上軽川温泉が登山口だったが、今では高速道路がすぐ側を走り、妙なホテルに化けた。大小四峰を上下するこの道はひどかったが今ではごく一部を残して笹の中に埋もれてしまった。次の夏道はバラダイスヒュッテの水源の沢の頂きに向って左の尾根に取付き、現在のゴンドラの頂上駅のやや左で熊笹を分けて頂上の台地に出る戦前の部員には親しい細道であったが、戦後頂上テレビ塔への車道が出来てからは消えてしまった。現在手稲宮の沢の拙宅からは車を利用して山腹に至り、ロープウェイを利用すれば約五〇分程で頂上を踏める。観光開発とはこのように味気ないものである。

百松沢(三段) 山、烏帽子岳、神威岳の三山は昔から夏も冬も日帰りの山だが、三段は発寒川の宮城沢から、烏帽子岳は木挽沢から、神威岳は百松沢から登ることが多かった。札幌を早朝発って百松沢山に登り、南峯を経て烏帽子岳まで縦走し滝の沢か木挽沢に下るのは快適な夏山の一日ルートであった。この百松沢には昭和三、四年頃札幌二中時代の相川修、徳永正雄らが沢の入口より一時間行程のところに掘立小屋を建てストープをつけて山小屋暮らしを楽しんでいた。ところが二年後、この付近の山に登った石橋正夫らの帰宅が遅れ、新聞に百松沢小屋に避難と報道されたため、相川らは帝室林野局に始末書と罰金二円六〇銭也を払う破目になったという。

銭函峠 この峠は部員には、ヘルベチアヒュッテができた昭和二年から、最もなじまれた峠だが、大正十年頃越した時は道は笹に覆われ時々消え失せ、よほど頑張らないと定山溪からの終列車には間に合いかねた。当時の峠からの下り一帯は美事な針葉樹林帯で、毎冬ここから切り出される木材は、峠の急坂を馬によって運び出された。それで造材小屋が所々にあり、私たちはこの小屋に泊めてもらい、奥手稲、春香山、あるいは少し足をのびして白井、朝里、余市の諸山にスキ

↑登山を行った。

余市岳 これは市内にある山の最高峰で、今では最も自然を残している区域のひとつでスケールもあり、ムイネシリ連山、空沼、漁連山と共に貴重な区域である。余市岳の冬の初登頂は大正十年二月十二日、余市川上流の盤の沢より、九八九米に登り、それより尾根伝いに頂に達している。帰途は朝里岳を通過して下山。登山隊は平井左門、板倉勝宣、西尾稔、板橋敬一、青木三郎、南波初太郎の六名である。盤の沢までは、南小樽から小樽峠を越えるルートを採っている。これは夏冬ともに用いられたルートで、夏はただ沢をつめるだけの相違である。今ではこの方面から夏道ができた。余市岳へは冬はヘルベチアヒュッテを利用する人が多いが、白井川の支流の右股川にある札幌医大の右股小屋をベースに登るのもまた快適である。

白井岳 冬は、銭函峠を下った付近にあった造材小屋をベースにして登った。ヘルベチアヒュッテができてからは、一層近くなってらくに登れた。夏は昭和十年代に道があったが今では笹に埋れたらしい、大正十二年頃、ヘルベチアのある沢をつめて登りにいったが、どうしようもない太い笹藪にぶつかり、引返した。私が笹藪に負けたのはこの時だけで、今でも忘れない。山は大きいが、夏に訪れる人は皆無だろう。スキー登山には、南側の白井川の支流の右股小屋を利用するのが一般だが、小屋のない時もここがコースであった。

朝里岳 山上が平坦であまり広いので、昔から飛行場の名があったが、今も通用しているようだ。登りにゆく山とは誰も考えない妙な存在の山である。余市岳や白井岳にゆく通り道になる山だからであるが、二年程前から札幌市のテコ入れで、この山一帯を東洋一の大レジヤランドにするプランが発表されている。だが全道の自然保護団体から反対運動が起って、着工は凍結の状態にある。もしこれが実現すれば、ヘルベチアヒュッテは泣きつらに蜂の有様になるだろう。

天狗岳 札幌近郊の山のうちでは、風変りな姿をしている山として有名だが、昔は冬期も残雪期も、東面にある小樽内川の小さな支流に登った。沢は短いからすぐ岩峰の下の草付きの斜面に出た。この沢は昔は天狗沢と呼んでいたが、今の案内書を見ると岩魚沢と改名されている。そして今の天狗沢というのは、主峰に続く東尾根の南面の沢を指している。夏

道ができてから、空沼岳やマイネシリと共に、最も登山者の多い山となった。

この山の登山記録を見ると昭和四年二月九日に、部員板橋卓、島村和雄、梅沢一郎らによって旧天狗沢から登られている。むしろ札幌からの日帰りではなく小樽内川の発電所に二泊しての記録である。夏のルートは、現在南面の熊の沢と呼ばれている沢を登ったが、現在の夏道も同じルートである。

奥手稲 標高は九四九米だが有名だから加えておく。夏は道がなければとりつきようもない山だが、かつては冬山のバラダイスで、日曜日には最も人気のあった山である。ここに国鉄の「山の家」が建てられてからは、一層山スキーをたのしむ人に親しまれた。しかし今日では長いアプローチを歩いてゆく山には、全く人が寄りつかない。小屋は健在で現在北大のワンゲル部が管理している。この小屋の西側にあるスロープは、針葉樹にかこまれた絶好のスロープで、ユートピアと称され、多くの登山者に長く愛好された。この山上に最初にシュプールが印せられたのは大正七年の二月、やはり北大スキー部員によるが、ユートピアの名も登った人たちの命名である。

長尾山、マイネシリ、中の岳、並河山、喜茂別岳 この諸山は長い一列の峰続きで、春ならば、豊羽鉱山からならば、長尾山から列記してある順に、一日で中山峠へ出られよう。マイネシリの冬期初登山は、大正十年一月に板倉、加納、松川ら十名が豊羽鉱山から長尾山を経て登頂した。薄別温泉ができた、夏道がついてからはここからも登るようになった。大正十一年一月に、北大スキー部の岡村源太郎ら六名が、京極奥の脇方より群馬団体農家に一泊して、一気に喜茂別岳、並河山、中の岳、マイネシリと縦走し、定山溪に下っているが、これは大記録といえるだろう。前述した並河山を命名したのは、このツアーの時であった。中山山道が完成以前は、西側の方がアプローチが短いので、専らこの方面から入山した。

中山峠 この峠は明治時代からの歴史をもつ古い峠だが、バスが走り、更に新道が開かれてからは有名な観光ルートになり環境は一変した。昔は峠に駅通小屋が一軒あるきりだった。その後中山ヒュッテができたが、アプローチが長いため、あまり利用されなかった。その昔駅通にいた番人がフトンに寝たきりで凍死していた話を、北大スキー部の人に聞いた。

たことを記憶している。これは道内の冬の郵便物輸送にからんだ悲惨な話だが、昔はこんな悲話はあるに珍しくもなかった。

札幌岳、狭薄岳 最初の冬山の記録は大正十二年二月松川五郎ら北大スキー部員九名により、北側の盤ノ沢をつめて登頂、下りは冷水沢を通して定山溪に出ている。このルートは昔も今も変わらない。狭薄岳に至っては春めいた季節に、たまに訪れる人がいるぐらいだろう。札幌岳は冷水沢に冷水小屋がかなり古くからあったが今でも訪れる人は多くはない。

空沼岳 昔は夏も冬も石切山から歩き始めたから、近郊の山としてはアブローチの長い山だった。万計沼にヒュッテができてから、湯ノ沢入口までバスがゆくようになって日帰りの山になった。近郊の山で、頂上までの道に美しい沼が二ツもあり、山頂から支笏湖も見えるという山はこの山だけだ。そのせいか登山者も多い。昔は湯ノ沢をつめて頂上北側の急斜面を、ブッシュにつかまってガムシヤラに登った。この山は昔はカラ沼岳と呼んでいたが、それがいつソラ沼岳と呼ぶようになったのか知らない。山容は後述の漁岳と共に、あまりよくないが、山上からの展望はなかなかよい。この山から札幌岳までの縦走路はいつできたか知らないが札幌からの日帰りは近郊の山ではいささかきつい。

漁岳 小漁岳 この二山は今でも夏道がない。登るなら豊平川上流の漁入りの沢をつめるコースがある。頂上までいったら、同じコースを戻るのはヤボで、直下のオコタンベ湖に下った方が好ましい。湖から下は今も車道まで道がある。冬季は空沼岳あたりでテントを張るか、空沼小屋に泊り、尾根伝いに南下する以外によいルートがないのは変らない。ザラメ雪の春、石山から支笏湖への道が除雪されて車を利用できれば、現在ではもっと接近して東側からのルートがとれる。漁岳からの展望はまことによい。それは男性的な恵庭岳と。一べんに二ツの湖を見れるからだ。冬期登山の第一号は、大正十二年二月で、北大スキー部員六名によって登られているが、ルートはやはり空沼岳からで、頂上から二隊に分れ、一隊は同じルートに戻り、一隊は支笏湖に出ている、そのルートは不明だが、当時としては大変な記録である。このメンバーの中には今も健在の田口鎮雄君の名が見えるのはうれしいことである。

漁岳への夏のルートは漁入りノ沢の他に漁岳の頂から東に流れる漁川のルートがある。このルートは今では札幌から支

笏湖に至る車道が横切っているので、この地点で車を捨てて沢登りする人もなからう。昭和四年七月に、私は漁村から漁川に入り、漁岳―オコタンベ湖―支笏湖と歩いたことがあった。札幌近郊の川としては最もスケールもあり、興味もあった。沢の上流には、多くの滝と函があつて頂上まで二泊し、三泊目はオコタンベ湖だった。この湖の落口の大きな滝の滝壺には見事に大きなイワナが群れていたが、ヤマベの釣り糸では一尾も釣り上らなかつたので、今でもくやしかつた思い出だけが残っている。漁川の上流のイワナやヤマベも大変なもので、特に水が少なくなつてから、イワナが右往左往して逃げ廻り、浅瀬でハネる有様であつた。現在でも前記の車道から上の沢には、まだ少し魚がいるかも知れない。

患庭岳 昔私たちは札幌から歩いて支笏湖に至り、湖岸を歩いてから登山口に出たから、大変なアプローチだったが、今では札幌から車でゆけば一時間以内で爆裂口から落ちるポロピナイ沢の夏道登山口につく。

樽前山 フップシ岳 今では樽前山は七合目のヒュッテまで車が登るし、バスも往く有様だが、昔のモラップから五合目迄の生い茂る森林の中の歩道が懐しい。頂上を南に越して、錦多布（現在は錦岡と改名）まで歩いたが、長い道だった。冬季も夏道に沿うて登るのが一般だろう。フップシは樽前より尾根伝いにゆけるが夏冬共に訪れる人は少ない。

以上近郊の山のめぼしい頂は、北大スキー部創立後十一、二年の間に、冬季の登頂は終っているが、シールもヤッケも無い時代に、遭難ゼロで成功しているのは、やはりメンバースリップが非常に厳格に守られたことに起因すると思う。この点はわが山岳部も同様で、こういう時代こそ、よき伝統を作り上げる大切な時期でもある。

大正十二年の十二月に、世界のスキーヤーをゆさぶつた独乙の名映画「スキーの驚異―ダス・ウンデル・デス・シュネーシュユズ」が、前記の「山とスキーの会」主催で、札幌で上映された。主役は当時スキー界の第一人者ハンネス・シュエダー（後に来道して十勝岳で指導した）であつた。私もこれを見て全く仰天したが、これは日本の競技スキーにも山岳スキーにも非常に大きな影響をもたらした。更に同十三年十一月には、この映画の第二編も公開されたが、少なくとも全道のスキー界では当分の間、シュナイダーのスキー技術の話でもちきりであつた。それまでの直滑降とテレマーク一点張りの廻転技術が、忽ちステムクリスチャニヤに置き替えられたのは山岳スキー術の一大転機とも言うべき事件であつた。

次に当時の山小屋について簡単にふれておこう。

道内に建てられた山小屋の第一号は、手稲パラダイス・ヒュッテである。建てたのは北大スキー部だが、それまでの冬期登山の宿泊は、農家や小学校に泊るか、造材小屋に泊るかで、旭岳の初登頂も、ユコマンベツの造材小屋がベースであった。

パラダイス・ヒュッテは、スキー部創立十五周年記念事業として建てられたが、設計者は後述のヘルベチアヒュッテと同じくアイス人ヒンダー氏で、収容人員二〇名、丸太小屋で総工費千五百円である。完成は大正十五年の秋。この時長さ十二尺の材料を軽川の駅（今日の手稲駅）から笹がかぶさる道を汗だくでひきつり上げる仕事は、大変だった。私も油をしぼられたが、そんなことではとうてい間に合わず、後には馬で運搬した。その時田口鎮雄君は、途中で熊と出合いしほしの間ならみ合いをしたエピソードを残した。ヒュッテが建てられた付近は当時は雁皮平と呼ばれていた。

ヘルベチアヒュッテ 前記のヒュッテ完成に刺戟され、当山岳部でも、小樽内川上流の白樺の純林の中に、ヘルベチアヒュッテを持ったのは昭和二年のことである。この小屋は前記のヒンダー氏の作品で、当部に縁の深いグラブラー先生の帰国記念のプレゼントで、山崎春雄先生の協力により完成した。それからもう五十年たった今日でも、立派に使えるのは部員諸君の熱心な管理のためものだが、不思議に思えるのは、このヒュッテに関する記録が、部報には全く記録されていないことである。これは大きな手落である。ヘルベチアに泊すと明記されている記録は、部報四号に至って、年報七三ページに始めて出てくる。これは昭和七年二月の記録である。

尚ヘルベチアヒュッテについてのくわしい記述は「山とスキー」の昭和三年に、山崎春雄先生の書かれた文章がある。それ以後発寒川上流の右股小屋、春香山白銀荘、ムイネ小屋、奥手稲山の家、空沼小屋、中山ヒュッテ、白井川の右股小屋、冷水小屋、砥石山の東日ヒュッテ、朝里岳の朝日寮等々、多数の山小屋が建てられた。

以上のように札幌近郊の山に、かなりの数の山小屋が建てられ、春香山や奥手稲山の家付近のスロープが、アイスバーンになるぐらい多くの登山者が訪れたのも、今では昔話となってしまうた。戦後スキー術の大きな変化は、装備や道具の

変化をもたらし、歩けないスキーの普及は、これらの山小屋を廃屋にしてしまい、はなやかだった札幌近郊の山々におけるスキー登山の歴史を閉じてしまったのは淋しい事である。

冬の石狩岳

伊藤 秀五郎
和辻 広樹

北海道で、その厳冬の姿において、私達に残されていた山岳に、日高山脈と石狩岳を中心とした山々があった。なかんづく石狩岳は、夏季における登山の記録もふるく、おのずから中央高地山岳の盟主たるの觀念を我々に与えていた為に早くから我々の仲間の興味の中心となり、その冬季間におけるスキーによる登頂は、数年来の仲間の問題であった。そしてまた、それは確かに北海道での残されたプロブレムでもあったのである。そしてこの懸案は、ともかく、今年の冬に解決された訳である。ここに誌すところのものは、昭和三年二月上旬、約十日間の行程をもって、その数年来の希望を達することのできた時の登山記録である。

登路について

石狩岳の登路については、かつて佐々木政吉君が「山とスキー」第六十二号において、夏・春・冬の三季間における精密な研究を發表しているから、夏・春二季間の登路については省略することにして、冬季間における登路に関して少しく書いてみることにする。冬季間において石狩岳の登山が試みられたのは、今度が初めてであったが、しかしゾンメル・シーを用いた春の登山は、今までに二回試みられている。その最初の時は、未だ陸地測量部の地形図のできていなかった大正

十三年の五月に、私達が忠別川の松山温泉から、化雲岳、ヌタツパンベツを経て、石狩沢を登ったのであるが、吹雪の為に石狩岳の頂上に近い山稜から引返してしまつた。その時の記録は、藤江君が「山とスキー」に書いてある。第二回目
の時は、大正十五年の五月野中達が、層雲別温泉（编者註、現在の層雲峡）から黒岳に登り、高根ヶ原の山稜を忠別岳に至り、ヌタツパンベツを下りて石狩川本流に合し、前回同様石狩沢を登って成功したのである。このルートは、夏季において最も短時日を以つて石狩岳に至り得るものである。であるから、スキー登山としての初登頂は、すでにその時になされたのであつて、冬季間における登山としては今度が最初であつたのである。そこで冬季における登路の問題であるが、五月と一、二月とはすべての事情が全く異つてきているために、五月のルートも現在では冬季間の登路として可能のものではない。もちろん五月でもあの辺の高さにおいては吹雪の襲来も予期しなければならぬけれど、何といつても五月は、北海道では最も楽に山を歩ける時期であるから、このルートも可能になるのであるが、しかし佐々木君も書いてある様に、厳冬あの北海道としては最高に近い高所を歩き回ること、小屋の設備もない現在では、ほとんど不可能なことに属する。よつて冬の登路として考えられるのは、音更川よりするものと、石狩川の本流を溯る二つだけである。しかしながら、元来十勝国側は石狩国側に比して積雪量が極めて少いのと、石狩岳の山稜はすべて音更側に急であつて石狩側にゆるく、その最後のとりつきは音更側からはかなり困難であることと、更にそれに至る時日も多く要すること等からして、最初の真冬の登山において私達に選ばれたものは、石狩川の本流を溯るものであつた。これは、以前から聞いていた大箱（编者註、現在の大函）凍結の状態を、去年の二月上旬黒岳へ行った小森達が、実際に大箱を越してしらべて来て、その通過可能を知つたからである。もつともこのルートには、大箱という関門があつて、その凍結状態からして、登山の時日にも自ら制限が加えられることになる。去年小森達の行った時には、すでに時期が遅かつたために、河水が氷上を流れていて、多少スキーをぬらすこともあつたということである。ノルマルな氣候の年であれば、大箱が凍結によつて完全に通過出来るのは、通例十二月下旬から二月上旬までであるそつだ。

そこで私達は石狩川を溯ることに決定して、冬季登山の際使用すべき簡単な小屋を、去年の夏私達の手によつて、石

狩川の上流に二つ建てて来た。そのうち、上の方の小屋はスピナイ川の合流点に作ったために、ここを根拠として石狩岳へ至る登路を考える必要があった。それには石狩岳と陸測五万の音更山との間から出るかなり長い前石狩沢を登るか、あるいは五月のルート、すなわち、スタップヤンベツ川の少し下流に合流点をもつ石狩沢を登って、ピーク一、六八二米との鞍部に出て、それより石狩岳からのザイテングラートを伝うか、またははじめからそれらの谷に挟まれた尾根を登るか、この三つのルートが考えられた。石狩沢以上に本流を溯ることは、行程がはなはだ延長されるので問題にならない。以上三つのルートの中、いづれをとるかを決定するのに、私達は確實ということを第一義的に考えたので、吹雪による危険のより多い山稜登高よりも、できるだけスキーを利用して谷を溯るルートを選ぶことにしたため、前石狩沢を溯行して直接石狩岳にとりつく登路を採用した。もつとも谷は雪崩の危険が多く、それに前石狩沢は、地図で見ても解るように、夏季には下りにほとんど、一日を費す程のかなり長い倒木のはなはだ多い歩き難い谷であるから、その冬の状態を實際に踏査した上でなければ、もちろん最後の決定はできなかつた。しかし冬行ってみると、谷は完全に雪に埋っていて、倒木による障害もなく、案外楽なルートであつたから、予定通りこの沢を登つたのである。

準備について

昨冬小森達によって、スキーによる石狩川溯行の可能性が確められたので、いよいよ今年の冬に実行することに決めて早速その準備にとりかかつた。しかし、石狩岳は、それに至る最後の人家たる層雲別温泉から優に三日間の行程を費すべき距離にある。そこで第一に私達の頭を悩ましたのは野營の問題であつた。これは冬の石狩岳が私達の仲間のプロブレムとなつた数年以前から常に私達を考えさせていたものであつて、それがために私達は冬季における野營の経験をできるだけ多くすべく努力してきたのである。しかしながら、石狩川上流の如き地点において、たとえそれが山稜野營におけるが如き危険と困難とはなしとするも、天幕を上流に向つて更に延長するということは、かなり面倒なことであつた。もしも全く天幕だけを使用するとすれば、当然それに付随して起る労力と時間とは、著しく一日の行程を短縮するものである

から、恐らく三カ所に天幕を張る必要があった。もちろん、多くの時間と経費とを予期するならば、その実行は可能であらう。けれどもそれは私達にとつては、はなはだ困難なことである。そこで私達は、冬季の使用に耐える簡単な小屋を建設することに決したのである。小屋を使用するとしても、少くとも二カ所に作る必要がある。その位置については、大體、夏季における私達の経験と、昨冬の小森達の経験とによって、最初には、ホロカイシカリ川の付近とシビナイ川の合流点付近に作ることに決めた。これは、層雲別温泉から大箱すなわちニセイチャロマップ川の合流点までを四時間とみての案である。石狩川上流地方は国有保安林であるから、この小屋建設についてはもちろん旭川営林区署長の了解を得たものであり、冬季登山の際使用に供した薪材は、直接森林主事の調査を経て払下げを受けたものである。

去年の七月下旬約二週間をもつてこの二つの小屋を完成した。その仕事に当つたのは、沢本、小森、伊藤の三人と、層雲別の大工江田および甲村の、都合五人であつた。比較的短時日の間に二つの小屋を作り得たのは、連日快晴で一度も雨に降られなかつたからであつた。実際小屋建設の仕事に要した日数は、下の小屋に三日半、上のシビナイ小屋に二日半である。小屋の大きさは、九人の人数を十分なる余裕をもつて収容し得る程度として、双方共二間半四方のものを作る予定であつたが、仕事の都合で、実際は下の方は二間に三間、上の方は二間に二間で、いずれも軒までの高さ一間、屋根はかなり急な傾斜をもたした。九人という人数は、私達一行六名と人夫三名という予定である。いったいスキー登山、ことに北海道におけるスキー登山においては、一隊の人数は五名ないし六名というのが最も適当した数であると思う。槍、穂高や剣の如き岩山の登攀ならば、おのずからその隊の編成も異つて来るであらうが、余りザイルの使用を必要としない北海道の冬山にあつては、色々の点からみて、五、六人というのが最も合理的な人数であると思う。それに体力やスキー術が均等であれば申し分ない。それで私達は最初から六名ということに決めてしまつたのである。それから小屋は、屋根も壁もドロヤナギとトドマツの皮を用いた。床はもちろん土のまま、小屋の中で焚火ができるようにいろりを作つた。そして冬行つた時に針葉樹の葉を敷いた。山小屋を建てた経験のある江田の保証があつたけれども、冬中安全に保たれてあるかどうか多少の懸念もないことはなかつた。しかし、今年は例年に比し雪が少くもあつたのだが、冬行つてみると、小屋は

二つながら実に立派な確実な姿をもって私達を迎えてくれた。雪も少しも吹き込んでいなかった。夏の間に少し手入れをすれば、まだ数年間は、十分使用に耐えるであらう。登山小屋の少い北海道では、しかしこんな風に割合に簡単に自分達の手で小屋を作り得る特典もある。小屋の位置は、上の方は最初の予定通りシビナイ川の合流点に作ったけれども、下の方は材料の關係で、ホロカイシカリと大箱のほぼ中程に建てた。であるから、二つの小屋の距離が少し遠過ぎて、この間の一日はかなりのアルバイトを要する。

小屋がこのようにできると、私達はもう冬の来るのを待つばかりであった。その他の準備はいつもと同じく、特別に変わったものもない。食料は十日分を用意した。寝具としては、やはり馴鹿(となかい)のシュラーフザックを使ったけれども、これは相当の嵩になるから、現在では価格もかえって安い位な水鳥の羽毛のシュラーフザックの方がいいと思う。

登山の時期は一月上旬ということに決めた。しかし、この冬の氣候はすこぶる変調なるものであった。十二月から一月の初めにかけて、非常に暖かくて、降雪量もきわめて少なかった。それがために、例年ならば大箱の凍結する十二月下旬にも、更に一月に入ってから、その凍結の報知は依然としてもたらされなかった。そこで井田と伊藤が一月八日に層雲別温泉まで行って、実際にその川の状態を調べることにした。その結果はやはり悪かった。大箱までは辛うじて凍結した河の上を溯行し得たが、大箱の入口まで行ってみると、箱の凍結は未だ不充分で、全く通過不可能なることを確めた。そして当分凍結の見込がつかなくなったので、一月上旬の石狩岳登山は中止して、完全に凍結するまで延期することに決めた。

一月の末になってからようやく大箱が凍結した報知があった。それで私達は早速出発したのである。一行は予定の如く、小森五作、和辻広樹、伊藤秀五郎、野中保次郎、井田清、西川桜の六名で、層雲別から人夫二人を頼んだ。この時は、どうしても二人しか得られなかった。未だ登山案内を業とする者のない北海道では、トレーガーを得ることもなかなか困難なことである。併しながら、その中の一人の河村が、箱が凍ると直ぐ、この登山に使用すべき白米一俵を、下の小屋まで上げておいてくれたので、とうとう二人で我慢することにした。そのために私達も人夫達も、荷の分担がかなり多くなった。

以上をもって準備に関する大体を記したのであるが、私達はこのたびの準備についても行動についても、かなり確実に行ったと信ずるものである。愉快に思うのはその点である。

(以上 伊藤秀五郎記)

層雲別温泉へ

ひどく不順な天候に災されて、一月の初めに行く予定が延びてしまつてから、十日たつても二十日たつても、温泉の方からは何の知らせもなかった。おまけにその間に北海道にはずいぶん珍らしく雨を見たりしたので、夏からかかった私達の労力もあるいは無駄に終わってしまうのではなからうかと私達の心はいらいらするばかりだった。ちょうどその時、それは一月の終わりであった。うれしい知らせが、大箱凍る通過可能の知らせが飛んで来た。興奮し、また心せく中にも私達はにっこ顔を見合せたことである。

大箱の結氷の期間もあるので、私達はできる範囲において最も早く出掛けなければならなかった。一カ月以上も前から手筈を決めて待っていたのであるから、出かけ得る準備のでき上るにはそう日数を要さなかった。で私達は最少限度の日数を準備に費して、二月三日の夜、六人揃つて札幌をたつたのである。

四日の朝八時に上川に着いた。寒さは敵しかった。くだらない所で無駄な労力を使うのはまことに無益なことでもあるので、私達は上川から温泉まで二台の馬籠に乗った。チリンチリンと、立派でもない馬の首についた鈴の音を響かせながら、冷たく堅い雪にきしみながら、馬籠が上川を出たのは、もう九時を回っていた。馬籠は一台に四人だったが実に窮屈だった。そして強くはなかったが、吹く西風は痛く私達の頬を刺した。時間がたつにつれて、馬籠は窮屈な上に、猛烈に寒くなって来た。毛皮の上着を着て、首巻をしてスキー帽の垂れを下ろしても、寒さはひしひしと身にこたえる。屋根無し馬籠に乗っていることの如何に忍耐を要するかということ、私はこの時始めて知った次第である。それでも途中の層雲別村で中休みして、ユタンポを入れてもらつてからは少しはしのぎよくなった。時々汽車中の睡眠不足が現われて来て思はずうつらうつらしたりする。伊藤が寒いから歩くと歩いて馬籠を下りて歩き出したが、しばらくすると空身じゃ歩

いてもやっぱり寒いといってまた乗った。よくよく私達はルックを背負うようにできているとみえる。

六里近くのほとんど判らない位の傾斜の路を、橋はゆるゆると馳けることなしに、時々雪を混じえて吹く冷たい風の中を、温泉に着いたのは四時過ぎであった。寒かった寒かった。暖かい温泉には行ってやっと人心地がついたように思えた。以前から顔なじみの河村がもう一人の人夫大場を連れて私達の部屋へやって来た。予定では人夫は三人であったが二人以上どうしても得られなかったので、二人で我慢することにした。大場としてはかなりとっているが実にそれ童顔の持主で、荷も河村なんかよりはるかに背負った。いよいよ明日から本舞台だ。人夫に背負わすべき荷物をすっかりまとめてしまつて、私達は早くから、厳冬の石狩岳の頂を胸底深く刻みながら横になつてしまつた。明日のよき天候を祈りながら。

下の小屋へ

まだくらがりの五時というのに六人はもう床を蹴っていた。ガラス越しに谷合の空を眺めた眼には、キラキラと小さい星の姿がうつる。いい天気なのだ。薄暗いランプの灯の下で、朝めしを食つてしまふ。すっかり用意ができ上つて、湯治客の婆さん達に、行つて来ます、をしたのはちょうど六時半であった。ルックサックの重さは札幌を立つた時と少しも変わらない。皆六貫目はあつた。肩まで背負いあげるのが一苦勞である。この日は下の小屋まで、上川の森林主事尾谷氏が一人同行することになった。北海道の山は、信州辺の山とは違つて、こうして木を伐り、焚火をたいて、幾日も山にすごすには、一応管林区署の方へ申し出ねばならない。殊に私達は、許しを得て建てたのであるが、小屋を二つも建てたのであるから、薪材払い下げのためにも、尾谷氏は同行することとなつたのである。

大箱が凍るとすぐ河村が、一俵の米を何回にも分けて、下の小屋まで運んでいてくれたので、この日の人夫の荷物は米がないだけそれだけ軽かつた。温泉を出て半里ばかりは、温泉の発電所道を歩く。ルックの重みがとてもつらく総身にこたえる。歩き出してしばらく馴れるまでは、皆フウフウである。七時二〇分に鮫沢へ着いた。天候は申し分ないが、この

深い溪谷には、輝かしい朝の光はまだとどかない。銀河の滝が対岸の右上に細く見える。薄青く凍ってしまった、水一滴落ちていない。黒岩の悪所には八時二〇分に着いたが、ここでは相当手間取ってしまった。それでも、米を運んだ河村の足跡があるので、スキーをぬいだり、はいたり、受け渡したりしながらも、余程助かったというものである。

黒岩の悪所を越えてからは河の上を歩けるようになった。早速厚く堅い氷の上を歩く。風もなく積ったのか、その上を二、三分薄く雪が被っていて幾分歩きやすい。ストックの先など立ちもしない。その透徹した碧さ、冷たさ、堅さがスキーを通してひしひしと身に感ぜられる。九時半頃朗らかにこの谷底を照らす陽光を身に浴びながら、軽く食をとった。黒岩の悪所からは、時々小さな瘤の登り下りはあるけれど、路はほとんどんはかどった。ここで一足遅れて温泉を出た森林主事の尾谷さんが休んでいる私達に追いついた。両側の切り立った崖は威圧するようである。重いルックも次第に馴れて来た。

ちょうど十時に、今度の山行の最も問題であり、ひいては成否の鍵であった大箱へ着いた。これの結氷しなかったがために私達の山行はちょうど一カ月遅れたのかと思うと、今更黙々とその挟む流れを凍らして立っている大箱の姿が近寄り難きものにさえ思えた。一面に凍った上には雪が五寸余も積っていた。流れの激しい所は凍らずに、水は岩に擦れては厚く張った氷の下へ流れ込んで行く。一〇分間で大箱を通過し終って、出口へ出たのは十時二〇分であった。通過に際しては何等の不安も感じなかった。大箱を出てからすぐその出口、ニセイチャロマップとの合流点で一休みして食をとった。重いルックをどんと雪の上に置くと、体は浮き上るかと思うくらいに軽くなる。人夫はまだやって来ない。

三〇分以上も休んでから歩き出した。大箱までと同じようなコンディションの行路である。途中に河村の運びきれなかった米が少しく置いてあるのを見た。予定よりも少し早く十二時に小屋を建てた広い河原に出た。ここはちょうど、信州梓川の徳沢の出合の辺に非常によく似ていると私には感ぜられた。左方の潤葉樹の林の中に小屋が見え出した。小屋の前にはスキーを立てて、皆がころげる様にして入ったのは十二時一〇分であった。随分早く来てしまった。小屋を見るのは伊藤、小森以外の四人は初めてで、思ったよりはるかに立派なそれを、まざまざと目の前に見て、思わず賞賛の声を放った。

ものである。

小屋は河村が米を運んだ時落としてくれたので、屋根にはあまり雪がのっていないかった。二間に三間の小屋は広々としていて気持がいい。一休みしてから、伊藤、西川、井田の三人は上流ヘラッセルをつけ方々、よきコースを見に出かけることにして、後の三人、小森、野中、私は薪を切り、小屋の屋根の雪をすっきり落とし、床がわりのタンネの葉を切ることにする。前の三人は一時前に空身で出かけた。一時一〇分に人夫が小屋へ着いた。途中に置いてあった米も持って来た。四時前には、屋根の雪も完全に落とされたし、薪も立派なのが高くつまれるくらい伐られた。人夫の大場は随分力がある。そしてよく働いてくれる。尾谷さんも、薪切りによく手つだってくれた。四時頃三人が疲れて帰って来た。聞けばユニシカリ川まで行って来たという。そしてユニシカリ合流点の手前の箱は、結氷が溶けて、通れないから右の尾根を越したという。重いルックを背負って、低いとはいへ急傾斜の尾根越しの時間と労力のかかる辛らさを口にしながら、一同小屋へ入って、あかあかと威勢よく燃え立つ焚火を囲んだ。薪はまわり七、八寸、長さ一間ばかりのものばかり、贅沢な薪ではある。

疲れた体には、健康な思いと共に、夕食は実に美味かった。思えば冬の使用のために建てたこの小屋は、冬は今日が最初の使用である。そして今日あらんがために建てた小屋なのだ。私達の方で建てたこの小屋に、そして建てた目的のための最初の一夜は、どんなに私達にとっては愉快なそして忘れ得られぬものであったか。焚火の火はいつまでも燃えつづく。

シピナイの小屋へ

昨夜は快よく眠れた。しかし外の気温はだいぶ低かった。午前二時にマイナス一六度で、起きたときの五時にはマイナス一九度だった。天気は昨五日よりもすばらしい。さっさと出かける用意ができてしまった。今日から人夫の持ち得る米の残余は、私達六人で等分にわけて持つのである。この小屋には米五升を残した。その重さは昨日に増して、ルックサッ



音更川より春の石狩岳

坂本直行

クは骨までこたえるようだ。尾谷さんは一人で今日温泉へ下る。六時頃昨日のカンジキの跡を踏んで樹の蔭へ消えて行った。私達は人夫より先に、六時一五分に、小屋を出かけた。

今日は昨日と比べれば、はるかにほるかに長い行程である。やがて数日を待たず、石狩岳を登りおおせて、再びお前の懐で眠れるだろうと、心に思いながら私達は小屋に背を向けた。風は少しもなく空は蒼く晴れあがっていたが、朝まだき頬にあたる空気は刺す程冷たかった。昨日のラッセルの跡を、スキーは心地よく滑る。三〇分も歩くと、ホロカイシカリ川との合流点に出た。ここでなげ出すようにルックサックをおろして休んだ。肩がしびれるくらい重い。

やがて尾根乗越しのところへ来た。少し向うの通過できない箱は下の大箱に比べれば小さいもので、しかももう少しという所で通れないのである。残念だとは思いつながら、観念のほぞを固めて私等は、せいぜい高さは三〇米位ではあるが、極めて急なしかもブッシュの多い傾斜を、サイドステッピングで登って行った。空身ならもっともっと楽々なのだろうが、何分重い荷を背負う身は、思うように動かない。やっと尾根を越しての下りには、またスキーをぬいだりしなければならなかったりして、距離にすればいくらない所をかなりの時間を費してしまった。そして太陽が眼も痛く照り輝く、広いユニシカリ川の合流点に出たのは八時三〇分を少し回っていた。

石狩川は、こちらあたりでまた開らけている。真に河原という感じである。昨日のラッセルもおしまいである。遠く澄んだ蒼空に、白雲岳の連りが、真白に区画づけられているのが見える。私達はただ雪と氷の石狩川を、奥へ奥へと入って行くのだ。この辺はしばらく非常に歩きよかった。九時五〇分から十時半頃まで休んで食をとった。風がないので、じっとしていても、日光は私達を暖くしてくれる。ここから一時間足らずも歩いて、右から入る沢との出合に出た。川の上は積った雪で、瘤ができたり、落ち込んだり、または水が流れていたりするので、その間をうまくたどりながら、右岸を歩いたり左岸を歩いたり、コースの選択はなかなかむずかしい。それでも私達は、引き返したり、大きな回り道をしたりすることなしに、順調に進んで行った。荷がひどく重いので、何回となくひっきりなしに少しずつ休んでは行く。

ヤンベタツプの出合いへ出る三〇分ばかり手前で、ごくせまい間ではあるが、どうしても橋をかけねば通れなくなつて

しまった。最初にどこを渡ろうかと皆で試みた時、井田がちょうど行けそうな小さな小さな氷雪の上に乗って、これなら大丈夫と二、三度ドカドカと足で踏むと、氷雪はたちまちガガボと崩れて流れ出したので、井田は大あわてにあわてて、横岸の雪に蛙のようにスキーをはいたまま飛びついてしまった。皆その時は笑ったものの、崩れた氷雪と共に、堅い氷の下へ流されてしまったら大変である。橋はかなり太い木を三本切ってこしらえた。相当立派なこの橋を作るのに三〇分余もかかってしまった。

橋を作った悪所を出たのが二時前で、ヤンペタツの出合いへ出たのが二時二〇分だった。夏の猟師の小屋が、深い雪に潰れもせず、埋もれて建っていた。

あとはシピナイの小屋まで一時間余と見ればいい。私等は疲れた体に鞭うち鞭うちふんばった。そしてあたりは次第に昼の明るさは消えてきて、しかも腹が減って来た。六人とも、どうにもこうにも腹が減って、シピナイの出合いの少し手前で食べたフランスパンの味は一寸忘れられない。

シピナイの出合いを越えた時―それは四時だった―、高台になった右岸の太い針葉樹林の中に、厚く雪をかぶって、シピナイの小屋は晴れやかに、私等の来るのを待っていた。私等はここへ来る前に、もし雪のため潰れていたらという心配をしないでもなかったが、来て見れば潰れる所か、約束を固く守るもののようにしっかりと建っていた。屋根に積った雪は四尺に近かった。そのまんなかは雪の重みで少しわんでいる。あたりの見事なタンネとよく調和して、素晴らしいでき栄えの小屋である。ほんとうのヒュッテである。私達の小屋なのだ。私はうれしくてならなかった。

どうせ人夫の来るのは数時間後のことであるから、私等はここでできるだけのことはしなければならなかった。暮れやすい冬の日は、もううす暗くなって来ていた。私等は、屋根の雪と入口の雪をとるもの、薪を伐るもの、床用のタンネの葉を切るものと、それぞれにあわただしく働き出した。シャベルは人夫が持っているもので、堅くなった屋根の雪をスキ―でおとすのは容易ではなかった。それでもラテルネを使わねばならないような暗さになるまでに、屋根の雪はすっかりおとしてしまった。煙出しもできた。七時頃から雪が降り出して来た。七時を過ぎても人夫はやって来ない。小屋へ入っ

て見ると中には雪一つ入っていない。二間に二間ではあるけれど、これが石狩岳へのより重要な小屋であるだけに、下の小屋と比べると一層立派なものである。私は真緑の針葉樹の間に立っているこの小屋を、夏見たら定めしいことだろうと想像して見た。水の便はよかった。小屋のあるテラスをタラタラと下りた所を水は流れている。雪は音もなく降っている。

八時になって人も人夫達は来ない。私達は夕食を終わってしまった。ひょっとしたら流れにでも落ち込んだのでなかるうかと心配になって来た。あるいはヤンベタツプの出合いの夏の猟師小屋を見つけて、そこへ入っているのではないかとも思ってみた。とにかく目じるしにと、小屋の外ヘラテルネをつるした。

九時頃になって、遠くでオーイ、オーイと呼ぶ声が聞こえた。彼等は、このおそく暗くなって雪の降るなかを、重い荷を背負いながら今まで歩きつづけて、やっと来てくれたのである。私達は降りつむ雪を払うともせず立っている。よく来てくれたと思った。雪の降り出す前までは、月明りで私達のシュプールを伝って来たが、それからシュプールをたどるのには随分困難をしたという。

十時頃には、ここでも豪勢な焚火に照らされながら、私達も疲れを回復した。人夫達もすっかり落ちついてしまった。忙しくも静かな夜である。あと幾晩かは知らないが、石狩岳に登り終えるまで、この小屋の生活が始まるのだ。床がわり、タンネの緑葉の持つ痛みまで鼻をつく香りも、私達には懐しいものの一つである。焚火にうれしく暖まった体を皆がシュラーフザックの中へしまい込んだのは、もう十二時近かった。外では雪は音もなく降りつづいている。いろりの火はあかあかと燃えたって、シビナイの小屋の最初の夜は更けて行った。

シビナイの小屋より石狩岳へ

昨夜来の雪はすっかり止んで、七日の朝はまたも晴れ渡った。ゆうべの雪は一尺も積った。この日は皆ゆっくりと八時過ぎに起き出た。この朝の、光に浮き出された私達の小屋は、あたりの静けさに溶け込んで、なんと素敵なものであった

ろう。小屋から外へ出て、大きく胸一杯に冷たい大気を吸い込んで、高く大空を見上げた顔へは、針葉樹に積った新しい、軽い雪の花が、朝日にキラキラと舞い落ちて来る。

充分な睡眠によって、昨日の疲れはすっかり回復してしまった。ゆっくり朝食を終って、熱い紅茶で喉をうるおした私達は、今日は予定の登路である前石狩沢を、許される時まで、できるだけ遠くラッセルをつけることに決めた。皆は小屋を十時過ぎに立ち出でた。昨日に比して、なんと背の軽やかなことであろう。小屋から一〇分足らず下ると、石狩本流と前石狩沢との出会いである。ここでアザラシ皮を付けた。どんとんと真直ぐに登る。雪は深くなく実に登りよい沢であった。アザラシ皮がその偉力を完全に現わすところ、それは前石狩沢であろうか。ブッシュは思ったよりもはるかに少なかった。

左から沢の入っている二股へついたのは十二時一五分頃であった。ここから少しく登った所で休んで食をとった。この時分から晴れていた空は、すっかり曇ってしまつて、雪が降つて来た。まだ充分の時間があるので、一時過ぎから再び登り出した。沢は次第に細くなつて行つた。二時近くなつて、雪はひどくそれに風さえかなり強く加わつて来た。二時一五分には約一、三〇〇米の辺まで私達はこの沢を登っていた。今日はここでラッセルをやめて小屋へ帰ることにする。ここで一休みして再び軽く食をとった。ここで、私達は、札幌から持参に及んだ北海道製チーズの、かかる山奥に入つてさえ、そのあまりにも美味くないのには一驚を喫してしまつた。

二時半に下り出した。登つて来たシュプールをそのまま滑つて行く。矢のようという程ではないが、何のショックも無しに、軽く軽く滑つて行く。途中で一寸休んだきりで、そのまま滑つて本流との出会いへは四時過ぎに出でしまつた。

小屋へ帰つたら、入口の雪は人夫によつて大部広く掘り下げられていた。昨日から積もつた屋根の雪も、すっかり落とされていた。大場がその強い力で、遠くまで大きな薪を伐りに行つては、太い奴を運んで来る。雪もおさまつてきた。

落ち付いた今日の、八人揃つての夕食は楽しかった。下の小屋に比べると、ぐるりはすっかり雪に埋もれて、出ているのは屋根だけなので、まるで寒さを感じない。小屋の柱に切られてある、太く逞しいそれ等の木は、いかに心強く私等の

眼に映ったことか。大きないろりを仕切って、色々な荷物を置いて、しかも八人の男は楽々と眠られる。そして屋根のかなり高いことが気持ちよかった。

明日は、我々に残された、そして冬の大きな謎と言いついた石狩岳へ我等の歩を進めて行くのだ。やはり六人の心は知らず識らず緊張した。夕食を終るなり、明日の用意をすっかりしてしまった。これまでは極めて順調に進んで来た。そして明日、天候さえよければ、私達は充分登りおおせる自信はついていた。それにつけても体を充分休ませねばならない。睡眠だ睡眠だ。私等は何事をも忘れて、ただひたすらに熟睡することにとめた。

どこまで私等は幸福であつたらうか。昨七日よりも、はるかによい天気をもって、八日の朝は明けていった。人夫達の、しつかりやっておいでなされ、の声を聞きながら六人が小屋の外に、スキーをはいたのは六時であつた。小枝を揺がす風もない。黙々と蒼空は晴れあがって行く。今日は小屋からアザラシをつけた。ただ一途に昨日のシュプールを、かなり早い足並で登って行った。昨日四時間もかかったラッセルの終りまで、今日は二時間余りで来てしまった。ちょうど昨日引返した所へ八時二〇分に着いてしまったのである。

少し登ってから食をとる。気温が非常に冷たいので、測ってみたたら摂氏零下一四度であつた。大きくはなかつたがここより少し上の右側の谷からのデブリを見た。今日は沢の真直ぐ上部に、石狩岳よりユニシカリ岳に連る山稜が見える。右後の、かすかに見える石狩岳よりの一つの尾根はその肩から、壮烈に雪煙を飛ばしているのが望まれる。高く来たという観念がしつかりと私達の心を捉える。この時上の方は少し曇って来た。そして風は猛烈に強いようである。ここで右、石狩岳から来る尾根にとりついて、それを登ることにした。ここいらの雪はよくなかつた。膝近くまでの深さで、しかも非常に重い。わずか行つてはラッセルをかわらなければならなかつた。二百米もこうして登つた頃、背後に光るもの、それは厳冬のユニシカリ岳（陸測五万音更山）であつた。雲の關係からユニシカリ岳より東北はよく眺め得るのに、石狩岳より西南は、更に眺め得られない。雲は凄く速さで鋭い尾根を掠めて行く。

小さい樺の木の切れる辺りからはや雪はクルステになって来た。ここをスキーデポットとして、私達はアイゼンをはく間に少量のチョコレートを噛った。雲は晴れそうもない。それどころか風と共に、ますます濃くなって来そうにさえ思えた。西側から体をふるわずばかりに吹く強風に混じって、横飛びに飛んで来る霰のつぶてに痛く眼を刺されながら、高山苔を越え岩を越えて、私達は頂へ頂へと細い尾根を伝った。思い切り防寒の身仕度をととのえたのではあったが、その上から強く通す寒さは針の先のように鋭くこたえた。時々、凍ったようになった鋭稜の斜面に、先頭の者がピッケルで、足場を大きく確実に作ったりした。頂上が見える。すぐ眼の前に。大きな岩の塊の横をまわって三米ばかりつと登った。かくして私達は頂上に、厳冬の石狩岳頂上に立ったのである。時計はきつぱりと十一時四五分を示していた。烈しい雲の往来と共に展望は皆無であった。しかし何等の展望はなくとも、ここより望めば定めし壯蔽であろうニベソツの姿は見えずなくとも、まさに爛熟せる北海道の冬において、多年の望であった石狩岳の頂を登りおおせたという自覚が深く胸をうった時、私等は如何ばかり満足したことであろうか。力強く踏みしめているのは、ああ、それは厳冬の石狩岳頂上であるのだ。

十二時になった時、私等はまた登って来た尾根を下り始めた。雲は依然として晴れようもしない。ユニシカリ岳の姿さえ見ることができない。鋭い尾根を過ぎての下りは早かった。約三〇分でスキーデポットへと戻って来た。風が強いので、スキーをはくなり、沢まで一気に、深く重い雪を滑り下った。そしてほっとした気持でここでゆっくり食をとったのである。ここでは三〇分以上も休んだ。皮肉なことには、このせまい谷底で休んでいる時に今まで晴れそうもなかった雲が、急に、輝かしいばかりに晴れ渡った。私等は啞然としてしまった。この晴れかたがもう一時間早いか、あるいは私達の登るのがもう一時間遅かったなら、頂上における私達の記憶は、さらにさらに、立派なものとなったであろう。この深い谷底の沢では、晴れても晴れても、目に入るものはただせまく限られた青空のみである。充分に休んでから、一時半にここを立った。誰でもが味わう、登り終わった後のいとも軽やかな気持で、昨日と同じように登ったシュプールを滑って行った。晴れ渡った蒼空高く輝くであろう石狩岳のふところから、こうやって私等は次第に遠ざかって行く。紫の煙

のあがる小屋へ帰り着いたのは三時に少し前であった。

私等は遂に登った。六人の男は身も心をも一つにして登った。喜びに輝やく友の顔に、ただなんとなしに笑いを浴びせるとき、私の傍からもまた晴れ晴れと笑いは起こるのである。小森は山鳥をとるのだと言って、河村の持って来た猟銃を手には、カンジキをはいてどこかへ出かけて行った。

私等はむしろあつけないと思われるくらいの短期間で登ってしまった。がこれは予定日数での最も短い期間の日数であるが途中何の停滞することも、頓挫することもなく、かく最も確実に、危げなく、短期間に登れたことを、私達はむしろ誇りと感ずるくらいに満足に思うのである。食料は充分にあるし、まだ四日や五日はしたわしいこの山奥の静な私達的小屋に、滞在することはできたのであったけれど、何分これから結氷も次第に溶けて行くやさき、何時どんな暖気のために河を歩くことが不可能になるかもわからないので、たった三日で去って行くのは、残り惜しくて仕方がなかったが、明九日に帰ることに決めた。石狩岳に登った日のために、そして再び来るではあるうが、この冬としては最後であるこの小屋の夜のために掘げられた、たのしい晚餐は、まことに山小屋にはふさわしいものであった。いろいろを囲んだ八つの雪に焦げた顔は、燃え立つ焚火に照らされて赤鬼のようだ。私達はいつまでも、抱きしめてもやりたい程なこの小屋の、最後の夜を語りつづけた。

再び下の小屋へ、温泉へ

思えば忘れられない三晩を過ごしたなつかしい私等の小屋を後に、九日の八時過ぎには、すでに再び重いルックサックを背負って私等は、下の小屋へと下って行ったのである。

これよりの帰り途は来る時と少しも変わらないから、私は簡単に述べようと思う。この日は天気はあまりよくなかった。上の小屋には、まだ春のためにもと、米を一斗ばかり置いて来たが、私達のルックサックの重みは、来る時とほとんどかわらなかつた。三日の間に降り積んだ雪で、私等の来た時のシュプールは林の中以外はほとんど消えてはいたが、大体来た

時と同じコースで帰って行った。私達のかけた橋は頑丈であった。ただユニシカリ川出合いの下の、尾根乗越しの下流で、再び橋をかけねばならなかった。この橋もやはり三本の木をもって渡した。こんなことに時間を費しながら、下の小屋に帰りついたのは三時であった。小屋には大分雪が積もっていた。この日も人夫の小屋へ着いたのは夜の九時に近かったから、それまで私等は、相変らず薪を伐ったり、それを運んだりしなければならなかった。

十日は朝から雪降りである。気温も低く、朝の六時には、摂氏零下一二度であった。私等は知らず知らずにきりぎりすばいよき天候を利用して石狩岳に登ったことになる。またこれからしばらく悪い天候が続くらしい。再び私等の幸運を喜んだことである。九時過ぎに小屋を出た。夏また会えるかも知れないこの小屋に無言の別れを告げて、大箱へ向って行った。

十時半に大箱へ着いた。ここばかりは私等の来る時のスプールが残っている。大箱は、もう余程危なくなっていた。私等のスプールをのつけたまま、氷が割れて、斜めに水の中へ浸っている所がある。スキーの裏を、氷の上をかすかに流れる水でぬらしたりして、かなり手間取ってしまった。雪は降るうえに風が猛烈に出て来た。大箱より下の氷の上を行く時は、高く西側の崖に当って舞い狂う強風に吹きまわられて、随分寒かった。黒岩の悪所にも時間を要した。体中に雪を吹きつけられ、眉毛や睫毛を凍らせて、温泉に再び、湯治客の婆さんに迎えられたのは三時に近かった。今日も相当つらい行程であった。

熱い湯に静かに体を浸した私の想いのなかには、この愉快なりし七日間のことが、走馬灯のように回って行く。

(以上 和辻広樹記)

(部報一号—一九二八—より再録)

解題

相川修

スキー術の我国への導入、スキー用具の改良に伴いゲレンデスキーからツアースキーへ、ツアースキーから本格的なスキー登山へと発展するのは、競技スキーへ移行するのとは別途にして当然の成りゆきであろう。特に兩杖使用、アザラシ皮の発明により冬期登山はより容易になって行つた。大正五、六年の第一次世界大戦後の日本の経済力の向上はレジャー部門にも好影響をもたらし、比較的余暇と小遣錢に恵まれていた当時の学生はスポーツの分野で大きな役割を演じていたと謂える。その頃の北海道の冬山初登頂の殆んどは北大山岳部が創立分離する以前の北大スキー部員によって達成されていた。

その後大正十五年に北大山岳部がスキー部から独立して引続き積雪期初登が次々と行われ、当然中央高地では最奥にある石狩岳が、次いで日高山脈の幌尻岳が目標とされたのである。

これ等の初登頂完成は当時の冬山登山に一大エポックを築いたものと謂い得、その後の部員の冬山登山に大きな自信を与えたものであった。即ち根拠地を確保すれば奥地の冬期登山も可能であるということが示されたのである。然し一方雪中野営は未完成であった。天幕、防寒具、寝袋等は不完全であった。僅かに大正十五年二月八日夕張岳登頂の際に雪中キャンプが行われた記録が見られ、次で昭和二年一月五日天塩岳のキャンプ記録が見られるのみであり、山小屋は一、二の大雪山の石室があるだけで、見るべきものも無かった。部報の年報記録を見ても判ることであるが当時の積雪期登山は未だ主として春山が多く、その殆んどが最終人家又は造材飯場を根拠地としての日帰りのものが多く、天幕を利用したものは五月に於いても石狩岳、天塩岳、暑寒別、十勝岳連峯縦走等の限られたコースのみであった。又前記の石狩岳、幌尻岳

登山の仮小屋も継続して利用されることはなかった。

昭和五年二月三日雄冬山、昭和六年二月六日夕張岳の雪中キャンプの実施以降になって漸く天幕、寝袋等の改良がなされ、ヒマラヤ遠征への夢が培われる様になって、又立教大学のナンダコット遠征登頂に刺戟されて雪中キャンプの可能性は着実に拡大され、冬期の日高山脈が開拓されて行くのであった。

幌尻岳スキー登山

須藤 宣之助

去年（昭和三年）の二月上旬、六名の部員によって、ついに石狩岳——冬期登山においては中央高地中最も困難とされていた——が登られたのであった。そしてそれを最後として中央高地のスキー登山並びに冬期登山はほぼ完了されたとして差支えないだろう。そこで冬期登山の対象が日高山脈——北海道では中央高地に相次ぐ高度を有し、その山勢に至ってはむしろ一般に峻険壮大の感あるところの——の諸峰に遷されてくる事は必然の成り行きである。なかんづくその興味は該山脈中の最高峰たる幌尻岳に集中されている傾があった。もっともこれらの興味は早くより相当根強く潜在していたのであったが、それまでに試みられなかったという事は、石狩岳の場合の如く、いずれも川を遡行するに二日ないし三日を要し、それがため冬期においては、雪中の露営を移動する事の困難なる事、その他防寒具、食料品との関係、またあらかじめ食料その他の必要品を露営地に運んでおけない事等の諸条件から、その当時はほとんど不可能に近いものと見られ、

或はそのために多大の日数と労力を要するゆえに、その機会のなかつた理由に基づくのである。

しかるに去年の石狩岳登山の際、小屋を利用する事によって困難な雪中の露營を省く事を得、それがために容易に川を遡行し得たのである。しかも小屋という好い根拠地を得ているのである。その小屋はほんの一次的の冬期用小屋であったが、私達の手で成つたもので、それが著しい効果をあげている。ところでその小屋が比較的短時日にしかも私達で負担し得られる程度の経費で建てられたのであった。

かようにしてこの顕著な経験を得たので、幌尻岳スキー登山の決行を促すに至つたのである。なお今後かかる川の遡行を余儀なくされる場合も、この方法により容易に解決され、多くのスキー登山を容易にさせるだろう。けだしこの利益は内地の場合は難しいことだろうと思う。

小屋建ておよびその他の準備

この幌尻岳スキー登山の計画は九月にはいつてから相談が持ち出されたのであった。そして種々の準備を降雪前に行なわねばならぬので、急遽パーティを決定する必要がある。山県と小森が主になってその詮衡にあつた。人数を六名としその決定をみるまでに約一週間を要した。パーティは山県浩、小森五作、伊藤秀五郎、野中保次郎、高橋喜久司、須藤宣之助の六名で組織された。

人数の決定をみたので、早速準備打ち合わせの相談を開いた。ちょうどこの計画が具体化される前、その夏に非常に都合な有難い事を高橋が耳にしてきた。それは、この一月にトッタベツ川の一支流のオピリヌブ川に岡崎組の伐材が入るといふ耳よりな話であった。そのオピリヌブ川は八千代駅より三里弱の所に当り、ちょうど半日行動の距離にあつた。正午に八千代に着くと、その日のうちにオピリヌブに着ける訳で、汽車の時間に対して都合がよかつた。また最奥の根拠地と考えた地点がオピリヌブから一日の行程にあたるのであった。それゆえに二箇所にも小屋を造る必要が無くなつたので小屋建ての手法が半減したのであった。

さて相談がまると真先に帯広営林署との間の手続きを始めねばならなかった。それにはもっぱら山県が当たってくれた。入林許可願、小屋を建てるについての許可願、小屋の材料と薪に使用する立木の払下げ願等、なかなか面倒な手続きを要した。

十月に入ると雨が多くなり、それに沢の水が冷たくなるので、九月中に小屋建てに出かける予定であった。その願書の手続きを二回踏んだが、その二回目の営林区署からの返事がなかなか届かなかった。それに、私達の方は、時日は少しも余裕がなく、二回目の手続後一週間程その返事を待ちあぐんだが返事が来なかった。そこで遂に山県が帯広に出かけて直接交渉してくれたのでようやく手続は済んだ。そんな具合で許可の段取になるまでに日数がだいぶ延びたのでいよいよ小屋建てにとりかかれるようになったのは十月中旬であった。

十月十日高橋と野中が小屋建てに赴いた。芽室村から水本新吉、他一名のアイヌを伴い、この二名に大工の仕事をやらせた。

小屋の位置は陸地測量部五万分の一の札内岳図幅のほとんど左端に近い所で、北方一七九四米の山からピイロ岳に続く尾根より最初に本流に流れ入る小さい沢の出会いである。そして小屋は川の右岸に建てられた。

小屋の大きさは予定では二間と二間半であったが、実際にでき上った広さは二間と三間であった、入口は三間の奥行の一方の右端に作り、炉の枠を四尺と七尺に作った。柱はほとんど全部ドロ柳を用いた。屋根および四壁はすべて松柱で張る筈であったが、柱割りに失敗して屋根の片側だけ張ったに過ぎず、他はトド松、白樺、ドロ柳の皮で覆った。もともと松の素性さえ良ければこの位の大きさの小屋を張る位の柱（長柱）ならば一日半あれば充分できるという事である。

小屋には年内にあらかじめ米を運んでおきたかったけれども、時期が晚くて小屋を建てるのが精一杯だったので、それはできなかつた。それで伐材事務所で米をゆずり受ける事とし、また往復に泊めていただく用件と共に、あらかじめ本別の岡崎氏に依頼したところ快く承諾して下さった。

これで年内の準備はひとまずでき上った。この計画は足かけ約二週間は予定しなければならぬ。それに冬休みをなる

べく利用するために、スキー合宿後ただちに出発することにし、その出発日を一月三日と定めた。

そのうち十二月になってから山県がある事情のもとに突然行かれなくなった。山県は非常に乗気になって、懸命に仕事に当たっていてくれたのに、遂に行けなくなってしまったのはまことに気の毒であった。さぞ残念だったろうが、身にかかる情と思つて、諦めてもらうより他ない。しかしパーティの欠員は補わなかった。

昭和四年一月三日——四日

元日、二日と猛烈な吹雪であったが、三日にはようやくその荒れが治つて、その晩私達は出発した。かねて約束してあった水本老人と若い和人（中村某）——こうアイヌは内地人を呼んでいる——の二人が芽室駅で乗合わせた。帯広は非常に寒い朝であった。

先に行っていた伊藤が駅に来ていた。そして駅前の待合にひとまず落付いた。伊藤の話すところによると、十勝も一日二日は近年にない吹雪で、二尺ほど雪が積もつたそうだ。それで製糖会社の鉄道は線路が吹きだまりで全く埋まってしまったので、いつ開通するか見込みがつかないとの会社からの話だという。少くとも今日のところはだめな事がわかつたのでとにかく駅前の三浦屋旅館に泊まる事にした。そして私達も鉄道不通に対して善後策を講じなければならなかつた。鋭意復旧に努力しているとの事だから、少くとも明日には三線の分岐点たる藤駅までは開通するだろうという事に望みをかけて、地図と首引きで距離を出してみたり、馬橋道でもないか主人に聞いてみたりした。

駅前にもかかわらず、宿は意外に貧弱であった。晩方など火の気の少ない小さな炉に皆かたまつて震えていた。翌日目を覚ました時、息が凍つてシュラーフザックの口元の辺が真白になっていたほど寒い晩で、またえらく寒い部屋だった。

一月五日

身を切られるようなひどく寒い朝であったが、真蒼な晴天であった。何としても汽車が開通して欲しいのと、一方今日

もまた見込みないとすると、こんな木賃宿みたいな宿はさっさと引き上げてしまおうと決めてかかった宿に対する憤懣も混じって起きるなり駅に電話で問い合わせたが、無責任な受け答えばかりで、頻りに気をもませる。そうかといって今のところ特別よい思案も浮ばない。九時頃新帯広駅に様子を尋ねに出かけた。するとどうやら太平線だけは——この線は会社の最重要線で一番乗客の多い線である——復旧したから、おそらく十時半頃には発車できる運びになるだろうとの事であった。

十時頃駅に行ってみると狭い待合室は一杯になってた。皆吹雪で閉込められ、列車不通で帰るに帰られなかった村の人々であった。やっと下から列車が着いて、同じ函をひいて十時五〇分発車した。

太平から南太平を経て、トッタベツ川の最奥人家まで出る道程は、八千代よりするよりも一里強遠いが、この線を利用する外はない。現在、一里位の遠回りは止むを得ない。最後の人家までは太平から二里余の距離である。函の中はタコストープは燃えているが、寒いので毛皮の上衣を着込んで小さくなっていた。何しろ寒いので皆元気がない。汽車は馬力をかけて走っているが、至って遅々たるものである。それに駅に停車する間が長い。三時太平の分岐点で下車し、線路を伝い、柏の林を一つ抜けると南太平の部落に出た。五、六軒家がかたまつて雪原の中にしょんぼり立ちすくんだような所で、その中の一番新しく見えた家が雜貨屋であった。そこに立ち寄って石油缶を買い、馬橋道のある事を聞いて一安心して出かけた。

これよりトッタベツ川入口の大浦氏宅まで二里近くの道程を馬橋道を伝って真暗になってからようやく辿り着いた。事情を話して泊めていただくことにした。上にあがって大きなストープの脇に温まった時はほんとに気苦労と疲労から救われたような気がした。途々一人遅れて従って行くと、あたり一面が鈍灰色の雪道に暮れかかり、さながら吹雪になやんで踏迷った一旅行者の様な姿を我知らず空想し、柄のない茶褐色の葉をつけた道ばたの柏の木にゾツとして思わず足を早めることがたびたびあった。

図らずも同氏宅に御厄介になり手厚い歓待をうけたが、かかる行路難さえなかつたならば、八千代駅に下車してオピリ

ヌブの事業所まで行く予定であった。

一月六日

大浦氏宅はトッタベツ川入口の一番奥にあたる人家である。オピリヌブの事務所までは二里強で、それに馬橋道もついているのであるから別段急いで出発するにも及ばなかった。

八時四〇分大浦氏宅を辞し、二〇分ほど進むと柏の丘が尽きて、馬橋道はトッタベツ川に入りこむ。雪は弱々しく降り、薄く道の上を敷いていた。馬橋道は夏の徒渉場で対岸に移っていた。それから続いて一時間ばかり歩いてオピリヌブの伐材事務所に着いた。

午後からスキーの道付けに上流に向かって出かけた。もう本流筋には馬橋道はついていない。人夫達もわかんじきで自分達の道踏みに出かけた。川床はほとんど平坦で雪もさほど深くなく楽であった。滝の少し上まで進んで、二時間半ほど道付けをして引返し、五時過ぎ空腹でへとへとになって戻った。

一月七日（晴）後雪僅かに降る

人夫達は昨日の道踏みでもひどくぬかって、ピリカベタンの出合まで行けたのもやっとだと言ひ、だから荷を軽くしても、小屋までは今日一日では無理だと思つたから、行ける所まで行って、荷をその場所に運んでおき、その日は事務所に戻り、その翌日朝早く事務所を立てて小屋に来るようにさせたかった。しかし人夫達は一晩くらいなら樹の下でも過ごせるから、その方が戻る時間とまたその翌日そこまで行く時間だけ楽になり、そうしたらどうしてもその翌日には小屋に来られるというので人夫達の言うままに任せた。そして人夫達の荷をなるべく軽くしてやるために、米二斗と味噌を持たせただけであった。だから私達の荷の方が人夫達よりむしろ重い位だった。

六時四五分事務所を出発す。人夫達も一緒に出かけた。九時一五分滝に來た。その滝から上半里の間は小さいながら

函になつていて、川筋なりに通ることは難しいように思われたので、左岸の川筋よりは一段高い林の中を抜けた。その高台も数町で尽きて、どうしても川筋に下らなければならぬ。川筋に下りたが左岸は断たれているので右岸に渡った。その右岸も川筋はすぐ通過不能になり川筋を離れて上を登る。函を過ぎてからも川床は概してスキーでは通り難かった。また左岸に移り、右岸に再び進路をみつける。川筋をしばしば離れるので上り下りが多く、非常に疲れた。それに雪が重いので先頭の苦しむことおびたらしい。時間はやたらに要る。一時半頃には雪がチラチラ落ち始めた。こんなに進み方が遅いとすると、果たして暗くならないうちに小屋に着けるかどうか問題で、心細くなった。こんな事を秘かに心配したのはまだエサオマントッタベツ川の出合までにかなりあるように思われた所だった。私達の進み方はそのままで鈍っていた。それより左岸に廻り、また右岸について一時間ほど歩いて、ようやくエサオマントッタベツ川出合の大きな二股に出た。そこで一休みした。これよりは川は幾分小さくなったが川床はずっと歩きやすくなった。それでも案外遠く感じられた。早くも降りて来た夕色に雪が鈍色に見え出してきたが小屋は見当らなかつた。やっと小屋を見出したのは五時であつた。

荷を投げ出せば立ち働く位の元氣は充分出る。もう二〇分程もすれば真暗になるので慌てて仕事を始めた。屋根の雪おとしは訳なかつた。焚木も既に今晚分位のもは小屋の中に藏つてあつたので助かつた。それでできるだけ松の枝をおとす事につとめた。不十分ながら相当下に敷く事ができた。四壁は大きな隙間だけ塞いだ。どうせ今晚は少し位は寒い目に遭う覚悟を据えているのだからすべていいかげんで切上げた。

夕食の始まつたのは九時近かつた。夕食の終わった頃から、急に恐ろしく強い風が唸り出した。そして枝から吹落される細かい雪が遠慮なく隙間から吹込んで来た。たちまち小屋の中は銀粉を撒いたように白くなつた。私達はシュラーフザック（羽毛製）の中に深く埋り込んで難を避けた。狂風は一晚中荒れ狂つていた。人夫達はさぞ難儀しているだろう。そう心には氣の毒に思つていれど、シュラーフザックに埋るとすぐ寝付いてしまった。

一月八日（晴）風は幾分弱くなったが依然強い。

今朝はゆっくり眼を覚ました。野中、高橋、須藤の三人は人夫達を援けに下り、小森、伊藤は居残って専ら小屋の隙間塞ぎに当たった。

人夫達とはエサオマントッタベツ川出合の五、六町下手で遭った。意外に来方の早いのに驚いて聞いてみると、泊まったのは滝の五、六町上で、そこからこっちは余りぬからなかったからだと言う。そして今日も前日のように埋る雪だった。二斗の米を持って来て、もしも小屋まで来られないと困る事になるから、一斗をそこに残して、荷を軽くして出かけて来たせいもあると言った。そして案の定、昨晚の風には散々吹きまкруられ、樹の雪が始終落ちて来て、全く弱り切ったと言っていた。

それだから私達は荷を持ってやる必要もなくなり、そのまま逆戻りして二時前に小屋に戻った。

二時頃から風はバツタリ静まった。それから日の暮れるまでは大勢して内外両側から隙間を丹念に填めて、四壁を充分修理した。

小屋の中は段違いに暖くなった。静かな夜陰がこめ、特に大きく作った土炉にはいい火が燃えた。いい焚火にくつろぎながら、明日の仕事について相談した。

そして明日はとにかくトッタベツ岳に登る登路に目鼻をつけられれば充分である。そして出来得べくは尾根がはたしてどんなものであるか、その目鼻のついた尾根を登ってみる事とした。

また順路として兼ねて沢の様子を調べ、同時に、所要時間の概数を得る事を目的とした。

このトッタベツ岳に達する尾根の適否が幌尻岳登頂に最も緊密重要な関係を有し、この者如何によってほとんど左右されるのである。これが最も私達を悩ました問題であった。

一月九日（快晴）

幌尻岳に冬期登山の目標をおくにあたり、当初より非常に憂慮すべき不利な点が存したのであった。而してそれら諸条件に考え至るに及ぶと、その確実性が少なからず疑問視されてくるのであった。その条件としてほぼ次の三点があげられる。

一、小屋よりの距離が最小であった場合もなおかつ相当あること。（小屋の位置は充分考慮し、また事実において最も適当であったと認める。）

一、地図上で主稜に取付くべき適当な尾根があらかじめ見出し得なかつたこと。（もちろんトッタベツ川を逆行する登路を選んだのはほとんど絶対的であり、またトッタベツ岳に直接に達する尾根を選ぶ必要あつたこと……距離およびそれに関連せる所要時間よりみて。しかしこれは夏期における観察が不充分なるためであつたといえる。）

一、主稜に至るまでにスキーをぬぎすてた場合、主稜の雪が意外に軟く靴のままでは深く埋まり、あるいは輪標（わかんじき）を用いても相当に努力を払わねばならぬ箇所が長く続く場合の起り得る事。（これまでの経験に徴するとかかる場合が多々あるのである。）またかかる場合の疲労と時間の延引およびスキーを携帯する必要の有無を考慮すべきこと。

もっとも、第一の条件はほとんど既定されており、第三の条件はその場合に至って充分考慮すればいいから、これもない事は無い。ただ第二の条件だけは最も苦慮するもので、これ如何により概ねその成否が決められるのである。それでこの第二の条件が憂慮せる如く不良の場合が起こつたとしても臨機の処置をとって、初志を貫徹するに努力する覚悟であつた。その障害を敢然押し切つて初志を貫徹するには大なる努力を要する事はもちろんであつた。

最低気温零下一四度、午前六時三〇分（略同時刻調べ）

六時四五分小屋を出た。普通最後の二股と呼ばれる所まではとにかく沢を登りつめ、その付近で適当な尾根に取りつこうという考えであつた。また北トッタベツ岳寄りの沢は、いずれも急峻で非常に不利であるし、また最も雪崩の危険が

あるので登路としては不可で、その場合二股付近で適当な尾根が見出せなかった時は、沢を引返し、トッタベツ岳東方背稜上の三ツ目の瘤起に続く尾根に取付くか、さもなければ直接小屋付近から登り出して△一七五六米の山に出るかするより他ない。しかし後二つの場合はトッタベツ岳までに背稜を二五町一里一〇町程歩かねばならぬから相当の迂回路となる。これらの登路を経る時は前者に比し往復少くとも三時間一五時間よけい要すると見て差支えないから、これも十中八九不適當な登路と確定してよいことになる。その上風の比較的強い場合はより長時間吹きさらされる苦しさを著しく増すのである。

小屋を出てから四〇分程経て右岸より沢が入って来た。この付近の兩岸一帯は笹の急斜面で雪崩の起きそうな疑いのある場所であったが、一つも起こっていなかった。その沢の出合から教町先で初めて朝焼けした雪稜の一部を眺めた。そして山の見え具合によって雪稜に相当接近していることが判った。七時二〇分、第一の二股に来た。すると正面にピラミッドの如きトッタベツ岳の尖峰が巍然として聳えているのを見た。私達はトッタベツ岳がこんないい形を現わして見えるとは思わなかった。しかしまだ雪稜はほんの樹木のない真白な上部だけが見えるのみで、下部の尾根の状態は判らなかつた。

二股を過ぎてからは沢は次第に急になる。それに伴って沢の両側の斜面もまた著しく狭りたつて来た。夏期では続々段をなして水が奔流する急湍か或いは小さい滝の連続している所である。それに日高地方は概して降雪少なく、ただ今年は今迄に二尺積つたという大降りが一度あつた程度で、谷の積雪量は僅か三尺前後で到つて少ないのである。それであるから二股から上はずつと通り難くなつた。シュネーブリュッケも丈夫そうなのは少ない。

それより二〇分ほど進んだ時、二股からは沢の奥の見通しを邪魔していた左岸が右廻りになつたので眺められる雪稜の範圍が広くなり、初めて、側尾根が樹林帯の相当下部まで現われた。私達は喜んだ。見ればトッタベツ岳の頂上から直接下っている広い尾根がある。傾斜のさほど急でないゆつたりとした尾根である。案ずるよりも生むが易しのたとえ、しかし私達は初めから地図上でこの尾根を棄ててかかつたのは注意が足りなかつた。そしてスキーを相当の高さまで用いら

る望が充分となった。地図の上であれほどまでに悩んだ疑念は忽ちにして破れた。そしてその尾根が第二の二股をわけている事も判った。

九時四〇分第二の二股に着いた。ここでトッタベツ岳よりさらに豪壮な形姿をもった山が右手に眺められた。トッタベツ岳の如何にもノープルな形に对照して、如何にも傲墨な形の山である。トッタベツ岳よりはむしろこの方が谷から眺めた時は厳かに眺められる。

私達はただちにトッタベツ岳に登るべく決した。ただちに二股を岐つ間の尾根に取付き始めた。その取付始めは立込んだ灌木の低い枝にさんざんに苦しめられた。ほとんど横登りで二〇分ほどでその悪場を過ぎ針葉樹帯に入り、やや登った所で中食にした。十時三〇分から十一時の間であった。気温は零下八度。中食後、尾根は次第に広くなり、樹木もまばらになって、スキーには実に好適な尾根になった。雪は数日来ほとんど積るまでに至らず緊切っていて、スキーはほとんど埋らない。この広い斜面は漸次左の谷側に廻るようになって来た。五人が一回先頭を交代したのみで、雪面はややクルステに近い硬い面になった。約一六〇〇米の高さの地点に達し、幹の曲った岳樺の中にスキーデボーを作る。スキーのエツピングが困難な程度で、そのクルステ迄に至らない雪面はシュタイグアイゼンでは相当埋る。約一七〇〇米の高さで、ナカマド、岳樺の比較的大きいのは切れ、尾根はその付近より細くなる。尾根の風あたりの陰には軟い雪が隠れていて、膝頭上まで脚を突込む。その深雪にあえぎあえぎやせ尾根に出た。頂上からは高さ約百米下方でやせ尾根になる。ここに出ると軽い風をうけた。その風は冬期としては寧ろ弱い方であろう。そして一時に北方の雪稜が展開された。雪稜は殆んど岩が露われていないまでに醜々として、円頭と、波状線がみごとに続き、その北端に美生岳の破風が（この破風形の山を最近まで美生岳とばかり思いこんでいたが、実はそれより二つ手前の山であった。）一段と高く聳えている。陽もすでに高くトッタベツ岳に最も近い、目の前の丸瘤の東面は蒼暗色の稜影を画き風はやわからかに吹下して、岩角の数十あらわれた側面を淡い霧影を撒いて過ぎ去る。

私達はいよいよ頂上近く登って来た。深雪からは逃れたが、今度は、時々歯が、雪の下に浅く埋っている何松や矮樺の

枝に、踏込むたびに引っかかって、先頭だけは深雪以上に苦しむ。しかし短い間であったためひどく難渋するに至らず、専心登り路をつくって行く。遂に頂上より六、七〇米下方に達した。頂上の東側はその辺まで最も急峻で、その側縁は頂上まで岩が続いている。先頭がその岩に掛ったが、かなり苦心していた。私達は初めより全然ザイルを携帯しなかったから、僅か六、七〇米の岩稜でも、ザイルを用いないと危険であった。そこで数米下り直し、その岩稜を右手に外れて、北東面を僅か横切り、岩の縁に沿って頂上に出た。

頂上は烈しい霧風であった。雪も多少混じって吹付た。しかし霧は薄いものであったからすぐに飛散する。その切り開かれた前面に蔽かに豪宕な山が現われた。それこそ幌尻岳である。蔽冬に堂々と静坐している盟主である。さらに遙か南方にはびょうぼうとして雪嶺が伸び、その中央に当ってきつぜんとして聳えている一峰、日高側には幾多の秀壁をおとし、その秀壁に大挙し来る襲雲を断乎としてはねつけている嶄峰がある。それが即一、九〇〇米の山である。その山は当然旧きアイヌの山名があつていいと思つた。二、三日後には登られるだろう幌尻岳といい、また近き将来には一、九〇〇米の山（编者註、本文七四頁ではこの山はカムイエクウチカウシと新称されている）も蔽しい冬の最中に、何人かその頂に立つ事を憶い、若人の強い意志と、偉大な科学の力とに想及ぶのであつた。

寒風はきびしく長い頂上の憩いを許さなかつた。しかし私達は耐えられるだけそこに止まろうとした。そして山頂から六米程の鼻先に映つた御来迎を喜びながらただずんでいた。とうとう二〇分ばかり頂上にがんばつた。

下りは登りの足痕通りに下つた。やせ尾根を過ぎると風は殆んど当たらなかつた。頂上から三〇分程でスキーデポに帰り着いた。そこから下の斜面は午前よりも状態の悪くなつたヴィントクルステに悩まされて、スキーの滑降はつらかつた。ターンが自由にならず、キックターンを多く用いて降つた。取付きの灌木中の降りは登り以上に苦しめられた。二股に下りてからは比較的楽になり、次の二股まではたやすく下れた。それからは、歩く所が多く、ことさら急ぐ気もなくふらふら歩き、小屋には五時三〇分に戻つた。

一月一〇日(晴) チラチラ雪片来るのみ。

今日は休養と定めたので気が軽い。図太く寝込んでなかなか起出さなかった。焚火の側よりもシュラーフザックの中の方が楽しみが自分勝手でない。

水本の爺さんは八時頃米をとり下った。私達は昼間も小屋の中にくすぶっていた。夕方五時頃爺さんは戻って来た。暗くなってからは、星が一面に出た。そして私達は明日の幌尻岳登頂をひかえて興奮し始めた。

私達は昨日に依って前掲の第二の条件を完全に解決し得た。幸運にも殆んど意図しなかったところの良好な尾根を見出した事によって、登路についてはもはや何等憂慮を払う必要がなくなった。のみならず、その登路に従う時は、トッタベツ岳までに要する時間は約六時間で、机上で、最良条件の下に予測した時間とはほぼ等しい短時間で行き得る事を認めた。昨日は幌尻岳がよく見えていたので、大略の目測時間を立てることができた。それで往復約五時間あれば恐らく充分であるかとみなされた。而してトッタベツ岳から小屋までの帰着時間を約四時間と見る時は、総所要時間は略一五時間と算出された。

従って明日の出発を五時と決定した。帰着時間は多少晚くなるが、これ以上出発を早くしても徒らに苦しいだけだと考えたからだ。しかしながら、この一五時間というものは、最小時間の予想に近く、その時の状態が比較的悪い時は幾分延びると見なければならぬ。またもしかかる良好な尾根が見出し得なかった場合に、またトッタベツ岳と幌尻岳の往復に尚一時間余裕を見積るならば、更に二、三時間を全行程について増加を見、したがって、少くとも午前二時或は三時の出発を余儀なくされて来る。かかる早朝の出発は、それが冬期に於いては実に大なる不利であるが、私達はそれをも忍従する状態に甘んじていたのであった。

一月一日 夕方近くまで雪、しかしその量は多くない。夜になってやや有望な空となる。

五時出発。昨夜の星空はこの時分には頼りない空になっていた。けれどもほとんど朝らしくなるまでは誰も天候につい

ては口に出さなかった。この歌々たるラテルネの灯に導かれ、暗中の黙々たる行進は、ただ山友の信頼し合った友情に結ばれた堅い結束であると思はう。

六時一五分頃やや薄明るくなつて来た。もう第一の二股に近い所まで来ていた。そして雪稜が眺められる二股に着いて山上の天候のあまり思わしくない傾向を認めた。二股を過ぎてやや先に進んだ所で休み、各の意見を総合し続行するや否やを相談した。どうも荒模様になつて来そうな雲行であるし、風も非常に強いらしい。それで相談の結果、登るのを止める事に決定した。それが七時一〇分であつたから、もう一時間半位後に決定した方が適切であつたとは思つたが、しかし充分荒模様になると察せられた。

小屋までは途中一カ所滑つて遊んだだけで、低級なジャズソングを遠慮なく歌い続けて九時小屋に戻つた。その日の午後も小屋の中でごろごろして過ごした。

一月一二日

昨日は朝まだ早いうちに、天気の見極めをつけて引返したので、その早朝の出発にもかかわらず、その日は充分に体を休めることができた。よつて本日も続いて再挙する事に昨夜相談がまとまつたのであつた。

この朝は零下一七度といふかなりの寒さ加減であつた。昨朝と較べると、風はやや平静に返つて来てはいるが、その間には、昨朝と変りないようなすこぶる信頼し難い怪相をあらはしていた。極めて微かな星光りが辛じて拾ひ数えられるくらい、遠く高いそしてかかる早朝の山への出発に際して、天候の良否を即断し難い閑空ほど、不安と危惧の念を与えるものはない。

午前五時、出発は先日と同時刻とした。小屋の裏手からシュプールのを伝つて直ちに川筋に出た。小屋近くで渡つた流の凍結面は既に危険で通れない。それでその下手に適当な渡場をみつけたが、それに二〇分近く費した。しかし数日来からほとんど降雪を見ず、また強風の比較的吹あれない谷筋には完全にシュプールがのこされているので、かなりの速さで暗

闇を進む事ができた。そしてやや雪面に明る味を帯びて来るまでの一時間余りは皆黙り切ってはやあしに続けられた。

それでも第一の二股に来るまでにラテルネを必要としない程度の薄明を催して来た。私達は天候が気にかかるので、それからは絶えず雲の変移に注意を怠るまいとした。けれどもこの狭い谷の中では確とその附近の気象の変化を識り難い。ではあるが、トッタベツ岳まではたとえ幾分天候が悪くなっても比較的容易に登れるから、そこで充分考慮して最終の決定を下せばいいのである。二股を過ぎてから上部は流の現われている所多く、従って雪橋の数も少なく、またそれに二、三回の通過で崩れてしまったのや、壊れそうになってしまった所ができていた。それでなるべく新しい雪橋を探して登った。そうしている時、たまたま三人目に渡りかけていた伊藤が、そのデリケートな雪橋の真中にかかった際に、不運にもそれが両側から潰れてしまい、援ける隙もなく流の中にずり落ち、続いて両脚ともスキーをつけたまま水に浸ってしまった。そこで直ちに私達はこの小樁事に応急処置を執ろうとしたが、伊藤が直ちに断ったので全然施さなかった。それは、これが為に貴重な時間を費さなければならなかったからだ。それに靴の中に浸潤した水を充分に除き去るには相当の時間を要する事だし、またその禍痕が、その後長時間寒風に曝されるかも知れない所の山稜を歩いている間に、それが凍傷を惹起する可能性ある事を懸念されたのである。これらの事情で、今日の登山を断念すべく思われた。そうしている間にも時間を空費してはられないので、伊藤が深く断念する旨を言ってくれたのを謝し、彼には気の毒と思ったが、ここに彼を残して出かけた。

間もなく正面のトッタベツ岳の淡く朝焼けした健やかな姿が朝霧のはれると同時に現われて来た。そして近くの峰々も眠りを一時に醒し来った。しかし山稜からは雪煙が吹上げられており、その鳴轟が微かに響いて来る。また山稜の背後からは薄い霧雲が所々から次々に現われ、それが消散しないで流騰していた。その雲の集散移動がどうも疑わしいと思いがらも進み進みして三〇分程で第二の二股に来た。

少時休憩した。ここまでに先日よりも三〇分余を短縮していた。これは時間的にみて、非常に有効な結果であった。私達は天候についてはおおむねこの付近で判然と予測がつけられる空模様になってくれるのを望んでいた。休んでいる間

に、今まで微かに燃えていた山巖から山頂にかけてジリジリと耀々と輝き始めた。もはや天候は充分約束し得る状態を呈し来り、それと共に私達ははつらつたる登高の前途を期待する事ができた。

邪魔になる枝は折ってあり、通り難い雪塊や、風雪溝は先日大体崩してあるのでその登り口は大した事はない。それで再びこの尾根を登るのを得策と考えた。一寸登り易そうに見えた左の沢を適当な所まで入って森林帯の切れるあたりで尾根に出ようかという意見も出たが、この高さでは雪は数日ほとんど降らないらしく、昨日降った僅かの雪が風の影響も少いと見えて、スキーにとっては程よくしまっている。先頭もさほど苦しさを覚えなない。先日とほぼ同所で食事を摂った。それから登高は順調に続く。それに今はほとんど無風状態である。前面のピラミッド型の端正なトッタベツ岳とその右手に連なる北トッタベツ岳——急峻な切れ沢を数本落としている所の——の美麗なる山姿を左右に仰ぎながらジグザックに刻んで登る。一昨日の降雪で新雪が三、四寸積っているので、先日よりはよほど歩きよい。やがて針葉樹の疎林が下方にながめられるようになり、それを縫って陰翳する美事な自分達のスキーのあとを度々顧み楽しみながら、次第に高く来つつある自分自身に欣びを想う。表面のクルステは一昨日よりはやや高くなっていた。従ってスキーデボーも五〇米程高かった。

小憩して乾果物を少量とり、シュタイグアイゼンを着けて出かけ、赤旗を結んでスキーデボーの目標とした。既にこの時まで先日より一時間余を短縮し、時間に幾分余裕の生じたのを知った。また天候はいささかの不穏も認められないので、各自の雄心は湧然として湧いて来た。

小森が先頭で登り出した。狭い尾根に出るとやはり風が相当あつた。これも先日と同じ様な積雪状態で、同じ苦しみを続け、岩階に達しない数米下で右方に横断した。その横断した斜面は五〇度前後の傾斜で、この時は堅く凍結し、或はほとんど雪を蔽わないカチカチな草面が混じっていたため、慎重に足場を切って、上り目に行った。恰度頂上の下方五〇米から四〇米の間をからんで、北鞍部に達した。時に十一時であった。

いよいよ本舞台に入るべき場所に到達したのだ。ここに到って、私達はもはや支配されるものは天候如何の問題である

と考へた。ここに出た時は、南方の前面は薄い雲の戸で閉ざされていたが、突然前面が一時に切開かれて、そこに再度敵かに豪宕な幌尻岳を眺めた。この素晴らしい山の叙景が現われたと同時に、不可思議にも、突如風はピタと落ちて、全く無風状態に変わった。風がなくなると非常に暖くなった。太陽は幌尻岳頂嶺近く昇っていた。先日はトッタベツ岳頂上で寒冷い西風にビュンビュンとやられたのに、そして鼻先に浮出た自分達の影絵姿に喜びながらも散々ふるえ上ったのに、今はまたなんと暖い山上の憩いであろう。敵冬のこの二千米近くの山稜で、かくも暖く静かな山上の憩いと壮快な山々の眺めができたのは何たる喜びであつたらう。

廻廊をめぐらせる如き幌尻岳の雪稜と、近く真下の最低部とが際立って輝いている。そして此方に伸びている長大な舌状斜面は濃い陰影を伴っている。また幌尻岳の左側の空の下層は黄金色に輝やく金泥の大海を沸かしている。恐らく日高の海らしい。初めは綾なす雲海とばかり思っていたが、更にそのけんらんたる海を離れて、蒼碧の空に、カムイエクウチカウシの新称の降が幕下の諸群峰を据えて頭角をあらわしている。

私達は雪上に小さい座をこしらえて、山上の温い陽光に恵まれながら食事をした。野中と小森は、早速煙草を出したが、憐寸が掌でおおうなどしなくとも、つけられたので、殊更喜喜としていた。私達はパンを食べながらも始終雲行に気を配っていた。山稜上では広大な山塊の周囲に蒐る氣象状況を充分観究める事ができた。雲はいずれも高いか或は遙か遠方で夕張岳近く停屯していたり、遠い日高の平原に浮いている位のものである。ただ一つ幌尻岳の西側にある小さいかたまりが気になるくらいのもので、それが此方に移動して来ても散り散りに分潰して事なく過ぎ去ってしまう程度のものであらうと思つた。

私達は天候にはほとんど憂慮すべき徴候がないと思つたが、何しろ未だ半途しか来ていない場合で、しかもこれまで以上の努力を要する事を思い、この心地よき憩を二〇分にして辞し、最低部目掛けてトッタベツ岳の西南面を降つて行つた。だがこの斜面を降りつつある時に、幌尻岳の右肩に蟠居していた雲団が動き始めたのを見、それが一瞬にして拡大され、私達が最低部に着いた頃は騒然として乱脈に崩れかかって来た。

暗い心影がサッと私達の頭中を過ぎる。たちまち幌尻岳の嶺は、その頭上すれすれに奔る雲におびやかされ、そして怪重な灰白色に濃くなって行く。やがて山容の上半部は全く隠蔽されてしまった。私が、最低部に停っている三人の小さい一塊を写真に撮った頃はもう風さえも起され、それと同時に厳しい寒気の逼って来た事を素手に明白に感じた。

各自毛皮の上衣を着、一同耐寒の身仕度を充分あらためて整えた。何らさえぎるものなき寒風に少くとも三、四時間さらされ続けられたら非常に苦しい事である。

その最低部からは暫くの間左側の崖になった岩べりを伝い、所々崖べりの岩を上下して進む。この崖べりを過ぎると、稜はやや広くなって笏状の斜面になる。雪面は堅さの二、三異なったヴィントクルステを作っていて、二米程も稜線から離れるとそのクルステは二、三寸の厚さで、踏む度毎に靴の型だけに砕けてゴソッと落込んで仕末が悪い。またそれを引抜くようにして足を運ぶのがたび重なるのでつらくなる。たびたびそのクルステに踏込むが注意して稜線上の硬いクルステを選んで一歩一歩小刻みに登った。

この斜面を約三〇分登り続けて廻廊状の狭く細い上部雪稜の末端に着いた。休み無き登りつづけに両脚がじんじんふるえる。ここまで登るともはやほとんど登りはない。距離も数町の近くに接近して来た。しかし前方は雲のため三、四〇米先は見通しが利かなかった。ただ平になった山稜の続きが足下を照して雲の奥に隠れている。そして一、二分足を留めて後れた者を待ち、一意頂上へ向かう。その雪稜は漸次左廻りに緩い上りになる。三度瘤起に欺かれて越下り、やや広い額の如き雪台が見え、頂上を求める心切に動く。そして高さ四米程の岩の段を踏上って出てみると確かに頂上であった。傾斜いた一本の柱が見出された。

一同はそのシャポテンのような柱の傍に腰を下した。何にも替えられない欣びに浸漬って、今この二千米の幌尻岳の頂に立っている。未だ曾て何人にも踏入れられなかった厳冬の幌尻岳に今登り着いたのである。

皆の顔は頭巾の中に深く保護され、眼はその奥に喜びを湛えて輝いている。なかんづく小森は悦々として愉快そうだ。今日まで常に冬期登山に対して熱情をもって努力し、開拓し来った彼の心中如何に、そうしてまた今この喜びを特に分つ

べき二人の山友達、伊藤と山県の犠牲的精神に報ゆる感謝の念を無言の辞に替えよう。

野中は寒暖計を取出して外気に当てた。たちまち水銀柱はグングン低下して零下一八度を示した。こんな低い気温で、まして襲雲に混じる飛雪と寒風に吹曝れているのだから寒い筈だ。ほとんどじっとしていられない。四囲は陰々たる漠雲にさえぎられて、全く展望なく、辞するに辞し難くして頂上を護っていた。

思えば、相当頭を悩ましたにもかかわらず、予定の約二分の一の時間で達せられた事は意外であった。もちろん休みなく登り続けたのであったが、僅か一時間二〇分しか要らなかつた。

暫時の後一同寒さに耐えられなくなつて頂上を去つた。残りの乾杏の袋をポケットにつっ込んで、岩の段を降り、往路を引返した。齒型と靴痕に安全に導かれて帰路は心軽く歩む。たちまちにして回廊の末端に来てしまい、最低鞍部まで調子付く下りに移つた。そしてこの低い場所を通り切る間は最も強く吹付けられた。やや勢いを増して来た寒風と雪片に、左頬を横様にあふられて苦しんだ。頭巾が絶えず風で眼鼻口の方に吹廻されて息苦しい。その上先が見えなくなるので、いぶん手こずつた。

崖べりを過ぎてトッタベツ岳の上りにかかると思はれて、非常に楽になり、そのまま左巻きに登つて鞍部に来た。疲れた足を休めて、その場に行めば、暗澹たる雪雲はなおも山を閉ざしている。既に幌尻岳へとその主山稜を往復し戻つた時、もはや心配すべき域は脱しているのだ。後はただ安靜な溪側に降りさえすればいいのだ。そのまま運びを続けて鞍部を横切つて、山稜から別れて溪側に降つた。

このトッタベツ川側面は西風は山稜にさえぎられて概して微々たるものであった。寒さから逃れると元気が出た。尾根が広くなるあたりから、銘々勝手な場所を選んで、ポコポコ深く埋りながら、思い思いの速さで降つて行つた。スキーデポに着いたのは三時近くだった。

パンは石のように堅くなつてゐるが、空腹には耐えられない。その石のような塊を歯で噛割つて我慢して吞下す。また煙草に疲労をいやす。そして二度目の煙草を口にくわえて、スキーの下降が始まつた。雪は適度の良質で、広い針葉樹の

斜面を自由に——けれども今まではほとんど休みない歩行で、疲れ切った全身は重い——滑り下りた。第二の二股に下って小憩し、第一の二股まではシュプールを伝っているからかなり滑った。そこからは滑りも鈍く、疲れが出て来て、ばかに道程が長く感じられ出した。夕陽はついに小屋に着かないうちに沈んで、谷に下りてから二時間後に、真暗になった雪道をたどって小屋に着いた。

小屋の中は皎々として焚火が燃えていた。そして静かな夜陰が小屋の周囲に静々と訪れた。幌尻岳に登り得た喜びが、その夜長く長く続いた。一二時間という短時間は予想外だった。これも凡てについて状態がすこぶるよかったためであった。

それから明日の行動について相談した。私達は幌尻岳に登り得た事で、充分その目的を達しているのであった。私達は食料を調べたが、米だけは二日分位残っていたが、副食料は尽きているので帰降する事に定めた。ピバイロ岳に登ろうという計画が残っていたが、ピバイロ岳へは幌尻岳より更に登路の撰択に困難で、実際にその登路を調査するに二日を要すかも知れない恐れがあったのでやめる事にした。

一月一三日（快晴）

九時一五分小屋をはなれた。陽はうららかで谷の中はほんとうにのんびりしていた。函の中は滝の近くまで通る事ができた。事務所に着いたのは三時であった。そしてまたここに御厄介になった。

一月一四日

八千代線は復旧したという事であったから、八千代駅発午後一時の列車に乗れるように、八時半事務所を出発した。トッタベツ川から離れると道は左側の丘陵について曲る。その低い丘陵がゆるくなる平地のへりに設けられた牧柵に沿って、遠く雪原の中に望まれる鐘櫓を目あてに、村人がつけたらしい残条を伝った。

十一時半八千代の部落に着き、駅前の雑貨屋で休んだ。その土間の長いテーブルに坐り込んで昼食を注文した。そのテーブルは下が炉になっていて、テーブルの四囲は毛布が垂れているので、いい気持ちに温って、発車時間まで二時間ほど占領していた。

(部報二号—一九二九—より再録)

幌尻岳・イドンナップ岳・ カムイエクウチカウシ山

中野征紀
相川修

一、まえがき

昨年(昭和七年)七月末から八月上旬への十日間を費して、私達は日高山脈の、幌尻、イドンナップ、カムイエクウチカウシの三山に登った。是等の頂や溪谷は全然未知のものでは勿論なく、私達の仲間も、幌尻岳、カムイエクウチカウシ山の二岳には断続的に数回登頂し、殊に冬期に於ける登山にさえ既に成功している。私達の此行の興味の大部分は比較的に未知な国境西側、即ち日高の国側の三川、額平（額平）、新冠（新冠）、シュンベツの上流溪谷地帯の形貌をはっきり知る事、及びその聳立する位置深奥なるが為に登攀は比較的に難渋と推測されていたイドンナップ岳への登攀であった。

科学的な別個の興趣ある分野の感得には私達の貧弱幼稚な動植物学及び地質学の知識を以てしては望み得べくも無かつ

たし、又標高幾何も無く雪線以下の北海道の、日本の山岳に於ては純然たる未登頂への興奮と部分的な地形の悪場は在存するが、溯行不可能とされた溪谷への苦闘とを強いるもの殆んど無くなった現在、この行も単なる漂泊の山旅に過ぎなかった。

密生錯雑したナナカマド、熊笹、偃松の尾根と急峻な岩稜とを有する日高山脈と、深淵、飛瀑の連続、断崖屏立し悒暗な日高水脈との彷徨には少なからぬ悲惨なアルバイトに耐えねばならぬが、時には人氣なき圈谷に名も知らぬ山草に眼を奪われたり、熊の踏跡縷々と続く高峰のお花畑に寝ころがって雄渾重疊たる山々に眺め入ったり、晴れた暖かな頂から遠々大河の数多注ぐ白い一条の日高の海岸線を見下したり、或は平明な広き河原に白き石を拾ったり、清冽な水に岩魚釣りに夢中になったり、思わぬ処に原始的な、しかも寸分のすきもなく建てられたオガミ小屋に素朴なアイヌの面貌に接したり、巖に逢ったりして、それだけ複雑な懐しい記憶を残すものであった。

フューラーローゼの安易さを願う為に、少々の不便は勿論忍ぶ覚悟でこの行の準備計画は出来得るだけ簡素にした。十日分の食料と天幕等総てが二人のルックの中にはいってしまった。そしてそれに私達は充分耐えたし、又自由な歩みを楽しむことも出来た。(中野記)

二、頂—溪—頂

——日高の山旅のひとつ——

I

胆振の国の東端近くに置き忘れられた様な占冠(しゅむかっぷ)の村、それは程良く打ち豁けた川沿いの明るい山邑であった。石狩の国と日高の国とから預やかな峠で隔てられた山間の邑であった。断崖の多い沢沿いの曲り曲った自動車道に従って金山から一つの峠を越えて達することの出来る様な、そして更に青々とした笹の中の美しい白樺の疎林を登りに

も降りにもスラロームを画く峠道が遙々日高路へと続く様な。

その日高路の北隅に偏って峠から程近くにある村。それは右左府（うしやっぶ）という山懐に抱かれた村であった。この様な山深くでは思いがけない程に明るい感じのする山際迄も開墾された村邑であった。迫まるでもなく遠去かるでもない青緑の笹原の緩やかな曲線を持った四囲の山々、疎な白樺の林、これ等は一層村を明るく見せていた。川沿いには水田が青々としている。畑地は豊かに豌豆の紅の花、白い花、馬鈴薯の伸びの好い薄紫の花、百姓家の四囲の恰好の良い果樹等、村の豊饒と平和とを示す象徴であった。

その日は真夏の太陽とはいえこの山間では春の様な温かさを与えていたし、蜜蜂は耳元に微かな快い唸声をあげていた。十日余りもこれから沢から降へ、頂より溪へと漂泊い歩こうとしてここに自動車を降りた二人は直ちに山を目指して歩み去ろうとはしなかった。どっしりと身にこたえるルックサックを道傍に棄て置いて誰からともなく村の中を呑気に歩き廻った。それ程にこの小さな盆地の山村は旅人を引きつけたのであった。

風景ばかりでなく村人も又素朴そうであった。一軒しかない宿屋、それは北海道の奥地には何処にでも見出すことの出来るであろう駅通の小母さんは親し気な微笑で吾々を見送り、人の好い白髪のお爺さんは快く挨拶を交し、又そこより千呂露へと汗ばんだ身体を運ばせている二人は田舎の子供にありがちな羞恥を見せない小学校帰りの子供達と何にかに語りいつつ背の重みも忘れていた。

x
x
x

千呂露川とは上流の方が凡て函より成るとの意味を持つているが、下流の方は闊かな穏かな流れであった。四年前に唯一人ここを溯って行った先輩伊藤秀五郎氏の話ではずっと上流の方は案内外案であったが、むしろ中流の辺が非常に悪かったと聞かされていた。「函の象を形成している沢」と言う所からかなりに手強い函を期待していたし、又開拓心とも言うべき心情が秘かに隠されてもいた。未だ人の歩いていない沢、未だ人の登っていない峠、例えそれが如何に容易なものであっても——一般に北海道では残された沢は多くは函の甚だしきと言われるが為に敬遠されたものが多く、残された峠は

高度が低く偃松に囲まれたものが多いのだが——最初にそれを行くことは何と又大きな期待であらう。全くこの額平川には相当の期待を持っていた。事実に於てそれには岩魚釣が随分奥の方迄入っていたのだ。それ程に比較的楽な綺麗な沢であったが、別に土地の人から予備知識を得ていなかったし又この様に奥深くでは地図も細部にわたって頼りに出来な
い為私達は仲々緊張味を与えられていた。

千呂露川に沿うた最後の人家を残している福島団体の辺りに小さな支流が西から注がれている。「上と下の鹿の登る沢」なるベンケユクトラシナイとバンケユクトラシナイ——陸測五万分の一のバンケ、実際にはベンケの沢を通って村人は楽に額平川に乗越すという。その路は幽かな本当にあるか無しかに絶え絶えと続いている踏み分け径であった。

「ああ額平さ越しなざるかネ。それならこの沢を行きなされ。これを暫く行きなざるとて、つばう、がありますで、その二つ目ので、つばう、の直ぐ下で左から入る小沢を溯ると良いですテ。尚少し行きなざると押し出しがありましてナ、そのどちらのツネをでも越しなざると向う側は額平ですヨ。唯注意しなざると押し出しの終る所に桂のデッキ倒木がありましてナ、その終る落の中に徹かに踏跡が付いていて楽だが、ハテ初めての御方には見付けなざるのはちと難しいです
テ。」

お陰で額平川への乗越しは思ひかけない程に楽をしてしまった。

額平川の本流へ入る迄の一里半ばかり。それは至って楽なものだった。川幅一杯に流れている傾斜の急でない沢、しかし随分と小さな曲りが多かった。それで大分時間もかかり右から可成り水量の多いバンケユクルベシユベ沢の入る辺りで既に本流との合流かと思わしめた程に。だが本流には未だ少しばかりの距離があった。まあいえば函状をなしているともいえる兩岸に苔蒸したテラスを持った暫くの歩みがあった。

本流に出た後も暫くの間は穏かな明るい沢であった。河の曲りに従って心地好げな河原がありその岸には川柳、榛ノ木等が絶ゆる間なき流れに望み、又所々には岩魚釣の掛小屋が或は新らしきままに、或は燻った骨組の残っている名残を見せて唯溪流の響を友とし、何時訪れるとも知れないその主を待ち受けているのだった。

その割合ひらけた沢の正面には岩の多い瘠尾根が——最も高い二岐岳の辺りは雲の面紗に包まれて屹立していた。

やがてはその二岐岳の西側より発する支流の注ぐ辺から——それは地図で水線をもって示される程大きくなく、又僅かの距離を置いて二本程同じ位の沢が落口は美しい滝となって注ぐ辺から兩岸は次第に迫って来た。これからが愈々額平なる名の示す函を成している。淀むと思えば瀬となり、瀬を成して流れていると思えば忽ち漣となり、岩壁は曲り曲ってその行手手手を遮っている。先の様子の全く知らない二人には何時この函が通行を許さないことになるかと氣を揉ませられるのであったが、いざ通るとなると好い工合に足場があつて別に苦にもならず、先へと歩を進めることができた。一度も高くからむ必要もなく、或は水の中に足場があり、或は岩の中段に出張りがあり、又どうしても同じ側を行かれずと見れば浅瀬があり、倒木があり、左瀬かと思えば岩魚釣りのこしらえたであろう手掛り足掛りが巧みに作られてあつたりした。如何にも原始的な木の枝の確保、木皮で結ばれた足場が。

誠にこの様に氣を揉まされながらも比較的楽に通過できる函というものは興味の多いものである。沢歩きの妙味、即ち夏の北海道の夏の山歩きの好きは、かかる所に随所に見出し得る。それは流送人夫をでも連れなくてはならない様な自然との闘もなく、さりとて平凡な石塊道を喉を乾干にさせて、唯頂を目指して焦る様な登りでもない。と云つて必ず通過できるかどうかとも判らない、或は到底通過出来そうにもない難場が有るかも知れない危惧を多分に持ちながら行けば、そこには先へ先へと進む手掛りがあるのだからやめられない。これは恰も水平に延長させた岩場ともいふべく一歩一歩と足場手掛りを求め、しかも落ちれば流され生命に危険のないこともない。そこに緊張味が生まれ真剣味が現われてくる。そしてそれに処するには絶えざる慎重の態度と、或る程度の大胆さが何よりの安全性をもたらず。

この様な夏山にのみうかがい知ることのできる楽しい函も間もなく過ぎて後は渡渉と水縁りの歩みとの繰り返しとなつた。歩みとしては平凡な気楽な沢歩きとなつた。今迄の函の鋭い陰影と光の対照を離れて柔らかい線の茂みと清冽の水と円味がちな石塊は浩やかな諧調を保つて心に映つて来る。歩みはおのずと暢びやかに憩いは長引いて来る。ただ残り惜しく思われたのは、その日は雲が低く沢の真東に向う辺から正面に端麗の姿を現わすであろう戸蔭別岳が、深く隠されてい

ることであつた。

II

日高の山々では何処も左様なんだが、殆んど例外もなく残りの高距千米がぐんと聳立している。北の方にある二千米近くの山は勿論、ずっと南に寄つた楽古岳、日高十勝岳の如き千五百米に充たない程のものですらも。

その山容の雄大なる幌尻岳、山頂近くに美しい圏谷を懐いている日高山脈の盟主も、その浩く緩かな圏谷に達する千米余はかなりに切り立っている。けれどもこの額平川の上流には殆んど苦勞を必要とするような滝は見い出されなかつた。

勿論何の沢にだつて滝の一つや二つはないことはなからうと言われるように、一、二〇〇米付近に二つ程の滝を見出し得たけれども、大きな岩の段階と一枚岩の盤状の傾斜を流れる沢を一步一步高く攀じる時、汗ばむ身体に雪融けの水に始まるであろう冷涼が心地好く浸みわたる。その頂へ達しようと言う日は何と幸なことか、前日迄の低雲は何処へか、空は碧空。後を省れば戸鶯別の尖峰より美生岳へと続く国境が、くっきりとその鋭角を青空へ突き出している。

沢の急傾斜が緩やかな圏谷のお花畑へと移る処、それは又喘ぎと憩の境でもあつた。頭の上のし懸る様な岩塊の間から突如として奔り出る激湍はあたかも悠々の白雪を浮かべた碧空の忽ちに凝集して来るかの如く思わせ、それは行手を妨げる何者をも許容しない奔々の溪谷の始まりであつた。しかも一度頭上の岩塊を越す時、そこは静寂の極致を象徴するものであつた。忽ち平面的に拡がる圏谷のお花畑には残雪が午近き太陽に映え、長閑に陽炎をゆらめかしその融け行く水は流れるともなく流れている——せせらぎの音すら立て得ずに。水際の可隣なエゾコザクラ、付近一帯のツガザクラ、ガンコウラン等、そして黄花草桐木等、この一年を通じて幾日か数える程しか無い生命の歓喜に満ちた日を享樂している。唯に植物のみではない、——蒼空高く鷹が、偃松に被われた岩間には木鼠が、鳴兔が、そしてその偃松と低い榛ノ木のしげみには名知らぬ小鳥が温和な日射しを樂しみ、又私達も心地好きガンコウランの群落を良き茵として満ち足りた憩いに浸つていた。

雄大な幌尻岳の頂上、ここではすぐる年訪れて何時暗れるとも知れないガスの中に、唯延々と打ち続く日高山脈の全貌

を一日眺めたいが為に、一途俛俸を望んで待ち暮した頂であったが、今は北の彼方、戸蔭別、美生岳の方は雲霧の往来に時折り眺めを遮られてはいたけれども、西の方はイドンナップ岳よりその肩近くにささやかな園谷を懐きしめている滑若岳、南はエサオマントッタベツ岳より遠々として続く国境の山又山、東の彼方には国境よりの分脈が——札内岳、十勝ポロシリ岳の各々の独自の相貌がその何れにも或は鋭く刻まれた雪渓を、或は寛敞の園谷をだしている姿が見渡された。

III

丈の低い、歩けば柔らかな弾力の足底に感ずる偃松の尾根の降り、そこから沢迄の急なガンコウランの下り、そして浸々と滲み出る水源迄のガラガラの岩屑の下り、それは中途に園谷を持たない新冠川の一支流への削がれた峻嶺の降りであった。一步一步身体の引摺り落される様な二時間余り。ふと、前方は深い断崖に打ち絶たれていた。水は総てその奈落へと吸い込まれて行った。その滝壺も、又それから再び流れでる溪川も見下すことの出来ない程高く削立った絶壁であった。唯、微に沿々の響のみが耳に達するのであった。それを巻いて一時間余り左から注ぐ小沢の合流迄藪こぎをした後は沢は至って穏やかであった。この日午後になってやや天気が悪くなり始めたけれども溪間の夜に暫く振りの星空を眺めることが出来た。水際の狭苦しい河原に天幕を張った頃には夏の日もたそがれて行き、兩岸から覆い被さる様な梢の間から去来する雲間を透しての星の輝きは又無く美しかった。

そこからは二、三町も歩くか歩かぬに新冠川の本流が滔々と左から合わさっていた。一時に水量は多くなった。けれども水流は穏やかで川の中には中洲が明るく続いていた。やがて川筋が直角に迂回すると地図に示されている辺は、恐らく殆んど通過を許さない函がありはしまいかと思惟されていたが、この中洲の一隅にアイヌの作った御粗末な、だが何より巧みに出来ているオガミ小屋を見出してから二人には先の懸念は一掃されてしまった。それは如何に困難な函があつても一度なりと人と名付ける者の通ったことがある故に。果たして間もなく——一時間程も歩いた頃——川幅は急に狭く兩岸は迫り削り立って来た。水際は岩が覆い被さる様にさしかかり、その下を急に集められた水量は凄まじく岩を噛み、岩を越えて走り去る。そこからは左岸を高く擲まなくてはならなかった。けれども微かな踏跡が、殆んどそれを期待せずには

見出されまいと思われる踏跡が、縷々として函の上を、泥付きの急斜面を、或は苔蒸した岩の傍を登り降りして私達を導いて行ってくれた。これも忘れることのできない沢歩きの妙であった。しかも私達はアイヌの跡を辿るのであり、彼等は熊の足跡を追うているのであり、そして再び熊がこれを通うことでもあろう、所々に山の親爺の糞が置き忘れられてあった。

この辺りを地図上では直角に南に、更に西に、そして北にと川筋が迂回する様に示されているが、決してその様に明瞭に折れ曲がっているのではなく——なるほど幌尻岳の頂上からは地図の様に直角に折れ曲がっているかの様に見えるが——川の小さな曲りと共にいつしか真南を向きそして真西を向いていると言った風であった。ここらが最も苦勞する函の難場と考えられていたが、それはむしろ最初程には險悪でなかった。相変らず函状に続いているが別に摺む程のこともなく或は水辺の小さな洲、又は岩石の上、水中に足場のある岩のトラバース等の連続であった。

朝から怪しい空合であったこの日の昼頃からポツリポツリと降り始め次第に強くなって来た。大急ぎで天幕を張ってもぐり込んだ場所は、向い側から、即ち南側から一本の支流が注がれていた。そこは決して直角に北に折れてはいなかったが沢の様子及び支流の注ぎ工合と、翌朝五〇分程下流へ様子を見に行ったことから推して、地図で北に向うと示されている所に相違なかった。——又後になって確かに間違いはなかったことが知れた。そこに南から注ぐ支流は水苔の多い滑り易いイタドリ等の被い覆った歩き難い小沢であった。やがて小さな二股となってからは次第に傾斜を増し、細くなつた流れば糸の様に滝状に懸り、果てはガスの中へと薄れて行つた。それはどこ迄もどこ迄も際限無く続くかと思わせる水の連りであった。ふと、それは沢の中の大きな転石の下へと消えていた。

前日その大きな転石の下で雨を含んだガスを避けてそのまま宿らなくてはならなかったそのガス、翌朝も八時頃迄晴れそうな気配すら見せなかったガス、その真只中に一条の青窓が出来たと見る間にその青色は一面の乳白色を自が碧色に染め上げ、向いにはくろずんだ幌尻岳を大きく画き上げていた。



イドンナップ岳へと続く一、七五〇米の瘤に発する此のささやかな支流の源を育む所、それはナナカマドの密林であり、偃松の群落であり、榛ノ木、岳樺の矮林であった。けれども一步尾根を反対側に、南側に踏み出す時そこは柔い、明るい御花畑の斜面であり暖い南の陽差しを極限に迄受け入れている美しさを持っていて。

そこからイドンナップ岳への尾根歩き、これはまたなき喜悅であった。高低の余りない御花畑の一続き。短い偃松の一叢。それをつないでいる絶え絶えの径、此れは時折の熊の通路であった。それを荷物を置いて茶と少しばかりの馳走を携えた身軽な身体が弾んで行った。頂上は緩やかな草地から一段高く突き出た円錐の上にあった。周囲は偃松に守られ二坪にも充たない草のしとねを持って。西へは鋭い岩尾根を派出していた。そして三角点はその低い瘠尾根の一隅に立っていた。「蟻の塔のある山」なる此の尾根の何処にも蟻の塔は見出されなかった。そしてむしろその山容はイドンナップ即ち蟻を思わせる姿を持っていた。あたかもその頂の円錐が彼の頭となる様に。

そこは最も良い日高山脈の展望台であった。イドンナップの山自身も——或はピリガイに続く尾根から、或はエサオマンから、或はポロシリからと今迄幾度となく眺めた時には、左程魅力は感じなかったのだが——傍に寄って見ると仲々に棄て難い良い山であった。併もその頂望の素晴らしさ、容易にその側面を見渡すことのできない日高側が大きく広く眼前にひろがっている。それは晴れた日、此の山に登ってのみ許される特権であった。そして私達二人にはその特権を恣にする事ができたのであった。山を離れて見渡す時、山は泌々と深く心の中に味われてくる。苦しかった山、楽しかった山、その対象が一つ一つと眺められる時、想い出はひとしと心を打って来る。それは一つの山旅を終えて遠く平原から眺めやうた甘い感傷でもない。又山旅を初める前にチラと眺める軽い興奮とも違っている。何かもつと力強い、何か自分の最も親しいものを眼を細めて見るあの心持であった。しかもその山脈は一度は離れ再び近づこうとする故でもあったろう。三度訪れようとするカムイエクウチカウシ山は微笑みかけていた。エサオマンは招いていた。そして幌尻は静かに二人を想い出していた。

二人は唯靜かに深く深く山の心を見つめていた。

一七五〇米の瘤から南側へ春別川へと下る沢は急な御花畑に始まっていた。真夏の太陽を真正面に受けたその沢は明るく、流れ奔る水は幾段もの滝となつて下へと落ちていた。兩岸には露出した褐色の岩肌が濃い明暗を画いて続いていた。或る時はその岩にしがみ付いて一步一步足場を探り、或る時は岩の上を高くからんだ。そこには滝がかかっていたのだ。左から水線の入っている沢が合さる辺からさすがに沢も緩かに流れる様になった。流れを横切る度毎に岩魚は活発な影を動かす、足音に追われる沢鳥が黒い小さな軀を急がしく岩から岩へと運んでいた。流れの片隅の砂洲の上や水際の丈なす款冬、虎杖の折れた間に真新しい山の、親爺の足跡が見出された。かなり広い河原の上で流木の贅沢な焚火をしたその傍にも翌くる朝、まだ乾きやらぬ足跡がついていたりした。

V

此の沢のカムイエクウチカウシ山から来る沢と合わさる所は其の奥深さを思わせない程に広く、朝の爽かな燦々の光を受けて映る底石の上を流れる水は暢やかに川幅広く滑って行った。小砂利の河原は所々に大きな倒木を横たえ柳の茂みをもつて尚暫く続いていた。その上流には国境の尾根、岩肌の露われた沢頭が白く滝を懸けているのが眺められた。二〇分程歩いた頃沢は二股になつていたが、これは昨日歩いて来た沢に注ぐ筈であつた滑若岳より発する沢であつた。これ等は地図上の誤りであり、イドンナップ岳への尾根の上からも明らかにその誤りが指摘されたのだつた。その滑若岳と云うのはイドンナップ岳より国境に続く尾根上の、小ぢんまりと格好の良い御愛敬のような小さな圓谷を抱いた一七九九米の三角点を指すのである。

初めの程は沢は至つて楽であつた。美しい肌をした花崗岩の一枚岩の上を流れる瀬、春に相当物凄しいグルンドラヴァーネを想わせる白樺の倒木を盛り上げた押出し―それはこのような大木がと思わせるようなのが無雑作に引裂かれていた―。岩魚のスイと影を流す淀み、それにはつい食指を動かされて小一時間程釣糸を垂れてまんまと昼食の時に充分なエネルギー

の補充をもたらしたのだった。けれども下の沢が穏やかに緩く流れていけばいるだけ後の高距千米余りの困難が甚だしくなつて来る。

この沢とても例に洩れはしなかった。沢の傾斜の増加と共に両側は次第に削り立って来て中の通過は許されず、何時も何れかをからまなければならなかった。それも沢の水の見える位の高さを、時々水際に降りては又からむ間は良かった。小さな二股を成して両方共滝となつて落ちてゐる処より——特に私達の登ろうとする右側は大きな滝となつていた——そこから沢は岩壁の中を電光形に落ちる滝の連続であつた。その曲りの度に深い滝壺を湛えていた。それは絶対に人を寄せ付けようとしなかつた。

長い間の密林の尾根攀り、風雨にいびられ雪にひねくれたナナカマドの密生のへずり——それは如何に山歩きが好きとは云へ、少しばかり悲哀を感じた程に苦勞を要する登りだつた。身体も心もへこたれて偃松の尾根の漸く身を置くに足りる平地に腰を下した時に、陽は既に西の彼方に低く、今日の日の最後の輝きを山の頂に、茜雲に止めてゐるのみで、薄闇は平野から沢に、沢から前山にとはい上がつて来た。向い側の国境一九〇〇米の岩壁は真紅から灰色に灰色から黒にと薄れて行つた。四囲の次第に闇に包まれ、一しきりの茜色もやがて金銀の星に置き換えられた頃、寒冷はしんと身に感じられて来た。

カムイエクウチカウシの頂は何時もながらに天候に恵まれた頂であつた。微風さえ無く夏の朝の太陽は昨夜の寒さに縮んだ身を長閑にしてくれた。ヒメシヤクナゲの可憐な花、ツメクサの清楚な花、その間を飛び交う蝶、蜂の二、三、それはあたりくりひろげられた山波を背景に今日の太陽を染しんでいた。一刻余りの激しい偃松尾根の急な登高の喘ぎの後の快い休息と、小春日和を思わせる陽の暖かさに、山に吸い付けられ山を眺める眼は何時しか薄れて行つた。柔い草地に腹這い、うとうととする耳元の蜂の唸りは又たまらなく嬉しい子守唄とも聞かれた。心の底から甘い甘い想出がくすくすと身を揺り動かし、何処かしら遠い彼方に導こうとするように。……「オーイ」と微かな呼声の二度三度に快い仮寝を呼び覚まされ、はつと起き上つた眼にチカチカと雪渓は眩しく輝いていた。その上に二つの黒点が、二匹のおどけた熊が戯

れ眺ねていた。——それは直ぐ下の偃松の中から飛び出して行ったものだと言う。——この山旅の最後の嶺のその美しい眺めを、陰影の多い鋭角の朝の山脈を、二人は再び^{しよじよ}泌々と見渡した。南の彼方には遠い山の連りの果に太平洋の一角が微白く、東の彼方には大きな山脈に圧されて十勝平原が遥か靄に薄れて広がっていた。

心行く許りの眺望と休息をほしのままにした私達はやがて短い偃松の、ガンコウランの弾力を快く身に受けて一途の下降を続けて行った。時には雪融けの冷い触覚、落ち込むような滝の這ずり、或は密なブッシュ漕ぎに心残りの山への想いを引き止められ等して。けれども沢の歩みもグンと手応えある岩魚釣りの一刻と、その夜の広い河原に流木の山なす焚火に、この上無い喜悦を与えてくれた。

その翌日、十日の恵まれた山旅を終えて二人は友の経営する牧場へとヒタヒタとひろやかな札内川を下って行った。

(部報四号 一九三三—より再録)

解 題

相 川 修

昭和二、三年頃の北大山岳部の夏山登山は札幌近郊、中央高地が多く、又本州方面の北アルプス、南アルプス等の企画が多かった。日高山脈に入ったのは大正十四年七月の美生岳、戸蔭別岳、次で昭和三年四月美生岳、同年七月札内岳、カムイエクウチカウシ山が初期のものであった。同時に慶応大学山岳部の連中も入山している。当時は主として一つの沢から頂上へ向い国境尾根を多少縦走して、他の沢に降るといふ登山形式が多く、又一パーティが一、二名の案内人兼人夫を雇って登ったものであるが、これはその頃夏山でもヨーロッパアルプスの登山形式を踏んで山案内人を伴うものが殆んどであり、部の初期の先輩達も本州出身者に殆んどを占められて居り、又日本山岳会の創設者グループと交遊関係にあるも

が多く、登山は所謂殿様スポーツに属する観があり、従つて山案内人同行の登山形式が採られたものであろう。我々が入部後の昭和五、六年頃迄は同様の形式が踏まれて来たのであった。

然しその後、未開拓であつた日高山脈についても主なる登路が略々既知のものとなり、又部員に道産子が多くなるにつれ経済的にも安直に仲間同志で出かけることが多くなり、それらの登山が何ら不都合なく遂行されるにつれ、種々煩わしさを伴う人夫連れは敬遠される様になつていった。又事実本当に役に立つ熟練の狩人達が減少したことも之に力を貸したことになる。その上北海道には山小屋とて無く、人夫のみに重荷を背負わせて旦那は空身に近い姿で歩く等は思いもよらず、それ相応に荷を持つので得にもならず、小生等にとってははより多くの登山を行う為には自前で経費節減を計る必要もあつたのだ。

この様に気の合つた連中で日高山脈に入つてみると、最初の中は一つの沢から一つの頂へ、又主尾根の縦走も行われていたのであるが、一通り登つて行くと主尾根以外に魅力ある頂きが幌尻岳もその一つだがイドンナップ、滑若岳、一八三九メートル峰等とそばだつてゐる。又興味をひく河川が数多く入り込んでゐる。それは上流迄溯るのに数日はかかるのであるし、登山道も林道も開かれてゐない当時では一八〇〇メートル標高以上は偃松、岳樺、樺の木等は倭小で高山植物のお花畑の点綴で歩き易いが、一七〇〇メートル以下の鞍部は密林で通過に困難が多く能率の上らない歩行を努めなければならぬ、そのようなことから一度は上つてみたい二つ以上の峯々への登頂を望むなら、特に中部日高山脈以南では谿から頂きへ、更に沢の上流へ下つて次の頂きへという登山方法が考え出されたのであつた。このような歩き方によつて単独峯か、尾根上の二、三の頂きを一つの沢からそれぞれ一週間以上を費して往復するよりも効率の良い山歩きができたのであつた。

されば種々のパリエーションルートが採用され、其後の日高山脈の踏破をより興味あるものにしたであらうことは否めまい。これも登山道など無い原始の山々であつたればこそその恩恵でもあつたであらう。

一月の石狩連峰

徳 永 正 雄

I

厳冬期における石狩連峰への憧憬はかなり以前からであったが、何しろ我々は一月以外にまとまった休日を持ち得ないという事と、この一月には石狩川の大函が未だ凍結しないという大きな難関があつて、石狩川の本流を遡行して冬の石狩連峰を登る事は我々には望み得られないものであつた。従つて我々は石狩川と反対の音更川の方面から登ろうという考えを数年前から抱いていたが、この側からの登路もまた同地方の降雪の少いことや、音更川本流の水量の多い点等諸種の事情からして未だに実行にうつし得なかつたのである。ところが、偶然、以上の兩ルートの外にもう一つ大変いい登路を見出したのである。即ちそれが今度我々のとつたイトンムカ川から国境をユニ石狩川に乗越して音更山とユニ石狩岳との間から来る支流に入り、ここにベースキャンプを張つて石狩岳、音更山、ユニ石狩岳の三山を登るルートなのである。

この石狩連峰へ行く計画をしたのは、一昨秋部報第四号の発行のために二カ月間「のとや」の編集室生活をしていた最中であつた。編集室に共に起居していた本野の「なるべく多数の人員を伴つて、相当な山へ登り得べき計画」にして、しかも所謂ポーターメソッドというような形をとつてやってみるのも面白からうという提案に対して選んだのがこの石狩連

峰であった。かく多人数でかような方法をとることによって初めてその登頂を可能、若しくは確實ならしめるといふような、いわば方法の爲の登山にあらずして、登頂の爲の最もよい手段としてかかる方法を選び得るといふが如き、山及びその登路としては今度の計画が最も適当しているようであったからである。

積雪期の石狩岳の登路について「山とスキー」第六二号において、佐々木政吉氏は冬期登路として石狩川本流を遡るものと、音更川より登るものとの二つをあげて、前者を有利なりと述べているが、果して第一回の石狩岳冬季登山は昭和三年二月大函凍結の僅かの期間を利用してこの方面より行なわれた。音更川よりの登路は既に我々は数年前から折にふれて話題にのせていたが、今度の登路については全く初めて気がついたものであった。

所謂ポーラーメソッドというべきものは、我が国においても以前から行なわれているが、その方法を確然と意識して一つの統制の許に各隊の連絡、携行品等に特に注意を払って行なったものの好例としては、昭和六年暮から翌年にかけて京大パーティの大沢口よりの富士登山である。全員一〇名を分けて連絡の単位を三班とし、漸次キャンプを前進せしめた点は今度の我々の連絡方法と相似たところがある。しかし我々は初めから登頂する時には全隊員が一緒にやろうという考えであったから、器具、食糧等の運搬に相異がある。また日本登高会の会報第二九号によると、一九名が人夫二名を伴い二隊に分けて一昨年暮より一月四日まで一週間、唐松岳八方尾根における「雪中露營の集団的生活」なるものも、我々の今度の計画とはほぼ同様な意図になされたものの如くである。とにかくかかる方法においては比較的多数の人員を要し、また各露营地間の距離も割合に近くしなくてはならない。そうして食糧、器具等の運搬、連絡をスムーズに行うことに充分留意しなければならぬが、これによって最も確実に、しかも安全にその登山を遂行し得るといふ事は最もすぐれた点であると思う。この方法の規模をもっと大にしたものは昨冬の京大一行の白頭山遠征があるが、これらの点について今後の登山に参考となるところが多い。

II

我々は一行の人数を最初一二名と決めた。一二人という人数はどうして出したか。それはこうである。全員の中の行動を一人一人についてきめては、それに対する器具、食糧等の配当、運搬、連絡等を案出することは相当複雑極まるものになり、この計画では頂に向う日には全員が一緒に行動するものとの前提を置いてあるから、大部分の天幕、及び寝具等も最奥の露营地に運び上げる必要がある、各員の行動に相当制限が与えられる。そこでこれらの煩雑を避けるために連絡の単位を三班として、一班につき天幕一個の収容人数たる四人をもって組織し、合計一二人という事になった。ところが、実際に行く事になったのは一〇人で、従って四人、三人、三人というように分けた。しかしこの数は我々の準備し得た天幕の大きさからみて、かえってちょうどいい人数であったし、またどの班も班内で分かれて行動する必要も起こらなかったのので、荷物の運搬、連絡も予期以上にスムーズに運んで行った。

一行の班別及び各員の役割は次の如く定めた。

A班 豊田春満 井深英夫 石橋正夫 杉 顕夫

B班 徳永正雄 本野正一 太田嘉四夫

C班 水上定一 石橋恭一郎 西村 正

記録 石橋(正) 会計 杉、石橋(恭)

食糧 A班豊田 B班太田 C班西村

器具 A班石橋(正) B班本野 C班石橋(恭)

連絡 A班井深 B班徳永 C班水上

今度はいつもの時よりも露営回数も多い上に、天幕の移動も少くも三回やらなければならぬ。しかし我々は雪上の野営は充分経験を積んで来ているし、真冬の寒気に対しても少しは耐久力を持っている連中である。けれども何れにしろ準

第1表 行 動 表 (1933~1934)

月 日	12/29	12/30	12/31	1	2	3	4	5	6	7	8	9
天 候	晴	曇	雪	曇	晴	晴	快晴	快晴	晴	晴	曇	小雪
登 頂								有 石 物 虫	有 石 物 虫	有 石 物 虫		
C IV (Base Camp)								↓	↓	A.B.C.		
C III _a												
C III												
C II												
C I (小屋)												
造材事務所												
五十号驛邊												
留 邊 葦												

備は大切である。数回集って特に装備品について相談した。今度の山行のために特に新調したものといえは、毛皮の長靴二個位のもので、その他は今まで我々が常に使用していたものばかりである。食糧は露営日数の比較的長いためと、運搬のことを考えて、なるべく容積と重量の軽減をはかり、必要なものの数量を正確に算出するため、あらかじめ全期間中の毎日の食事献立を製作した。

III

留辺葦より登山し、再び帰着までの各班の行動を表示すれば第一表の如くである。

昭和八年十二月二十九日 晴

宿屋の人に教わって未だ暗い六時頃官行の事務所を訪ね、汽車に乗せてもらう交渉をして承諾を得たので、これは非常に好都合であった。ここから軌道の終点までは九里余りもあるから、もし鉄道がなければ馬樞二台に荷物を積んで我々はスキーで一日一杯平地を歩かなければならぬ。夜明け前の冷え冷える空気の中に、体をガタガタさせながら、小さい貨物車に大きな荷物を積み込み、スキー

とストックとは客車の中に持ち込んだ。客車といっても街はずれによくある屋台店を想起せしめるもので、座席はもちろん板張りで我々一〇人で超満員である。六時半発車、この愛すべき小型の汽車の燃料は薪でスピードは案外出る。車の中で会話がでかかえるほどえらく雑音をたてて揺れるが、これがかえって我々を寒さから防いでくれるのであって、停車すると急に寒さが全身に襲ってくる。夜が明けるに従って空は気持良く晴れ渡り行く手に武利、武華の山稜が真白く輝き、この原始的な汽車は相当感しを出させるものであった。

我々は上武華の駅通に泊まるつもりであったが、汽車は何の会釈もなく我々を終点の造材事務所まで運び上げてしまった。駅通は一〇町ばかり下である。それで造材の人々の厚意によってここに御厄介になる事になった。事務所の大部分の人は歳を越しに今日街に下るのだそうだ。だから今日我々の乗った汽車が上に来る最後の便で、街に下る人達を乗せ下ってしまうともう今冬は運転中止になるところであった。

造材事務所に着いたのは八時半頃で、我々は午前中充分睡眠をとった。午後から石橋（正）、水上、石橋（恭）、西村の四人はラッセルをつけに出かけ、他は残って食糧の配当、包装等をやりここで本式の荷造りを完了した。

十二月三十日 曇

C班は造材事務所にもう一晚泊するため荷を軽くして、A、B班より一時間半前すなわち七時に出発、ラッセルをしながら前進。A、B班は各員共相当の荷物である。事務所より約一里は将来層雲峡へ通ずる自動車道である。積雪少く一尺以下であるが林道があるので困難しない。イトムムカ出合から少しばかり登って下ると例の谷地の所である。八一八米の二股に営林区署の小屋がある。ここから左の支流に入り、林道が尾根に取付く所に着いたのが午後一時半近い。C班は既にここに荷を置いて下って行った。A班、B班相談の結果ここに荷物を置き、必要なもののみを持って八一八米二股の小屋に泊まる。予定ではCIを張る筈であるが、小屋を利用する事にしたので、言い慣した通りこの小屋をCIと我々は呼んだ。この小屋は大変暖く出来てはいるが、ストーヴも煙出しもないのでけむたさにひどくいじめられた。

十二月三十一日 雪

C Iの小屋付近は積雪約一尺五寸の上に新雪数寸。各班共この日はラッセルに相当時間を浪費した。A、B両班は八時半過ぎ出発。尾根取付の場所に残しておく荷物の品名を紙片に記してこれを赤旗に結びつけ、小屋の戸口にかけてC班への連絡とした。道は尾根取付付近やや急に、しばらくすれば大したこともなくなる。積雪は登ると共に増して来る。峠付近はさすがに一、〇〇〇米の高所、積雪三尺以上あり、北見側はひらけて感じのいい峠である。この付近尾根は針葉樹の密林である。下の取付から一時間の登りであった。峠より二〇分余り下れば九六〇米二股の小屋である。これもしっかりした小屋であるが煙出しがない。これより新雪深くラッセルになやむ。積雪は案外少く、右岸の林道を進むの外なし。一時五〇分頃八八〇米付近に天幕を張りC IIとする。

昭和九年一月一日 小雪後曇

前日来の降雪約一尺。A班は特にラッセルに苦しみ、音更山、ユニ石狩岳間よりの沢との出合着は零時半であった。ここでは架橋に約一時間を消費する。支流に入っつてすぐの函ではスキーを脱ぐ等苦心惨憺し、約一時間半を徒費。函を出てただちにC IIIを張る。

B班はC Iに残しておいた荷物を取りに行く。荷軽く五時間にて往復した。C班とは小屋（ユニ石狩岳側）付近にて出会う。

C班は相当の荷を負うていたが、先日のラッセルがあるため行程はかどり、零時半C IIに到着。夜は焚火をして濡物を乾かした。

一月二日 晴

A班は八時二〇分C III発。本日中に予定の根拠地まで進むつもりであったが、依然積雪不十分にて架橋一箇所、倒木甚

だしく、またある場所はラッセルも深く、予想外の苦闘のためついに九〇〇米付近に野営。我々は便宜上これをCⅢと呼ぶ事にした。

C班は八時半、B班はこれより約一時間後CⅡ発。初めシールをつけずに歩いたが、林道の上り下りあるため途中からシールをつけた。前日A班の架設した二股の橋はスキーのまま渡れて大変良かった。函ではやはりスキーを脱いで通過。CⅢへはC班は午後一時、B班は二時過ぎ到着。なおCⅡへは天幕T₂を張ったままとし、食糧F₂を残しておく。これは帰途使用するためである。この日はできる事ならB、C班はもう少し上まで頑張っておくべきだったと思う。元来CⅢを最初の予定ではA班の泊まったCⅢ₁付近にまで進めておくはずであった。従って翌日はB、C班はベースキャンプまで相当の強行を余儀なくさせられる事となった。

一月三日 晴

A班は九時CⅢ₁出発、約五時間にしてベースキャンプCⅣを大体一、〇八〇米付近に架設する。

B、C両班は九時半頃CⅢ₁発。徳永は一昨夜来の風邪のため体の調子悪く、B班の荷物一部をC班に分配して負うてもらった。積雪少いため倒木および叢生が多く露出して苦心した。八五〇米二股より少し上にA班の架設した第二の橋あり。赤旗に結びつけた紙にA班よりの伝言次の如く記してあった。

「架設後、午後二時半、ラッセル及び倒木に悩む。ベースキャンプには明日午前中に着くの外なし。一月二日A班」

即ちA班はCⅢよりここまで約一里の間相当の悪戦苦闘を嘗めたことが想像される。我々はこのようなことを予想してA班のメンバーを他の班より一名多くし、しかも比較的全員の足を揃えておいた。B、C班はCⅢ₁の跡には午後一時頃到着したのもっと上に泊まることにして前進したが、天気もよくラッセルもあるので、遂にベースキャンプまで強行することができた。C班は四時、B班は四時半到着。先着のA班も手伝ってB、C班の天幕を張り焚火をたく。到着時間が遅かったため、キャンプワークは夜に入り、折から満天の星の快晴で気温低下し、この夜業中二、三名足部に軽微の凍傷

を負うた。

一月四日 快晴

全員滞在 休養

午後二時より石橋（正）、水上、本野の三名はラッセルをつけに行き、他は天幕の張り直し、薪切り等に従事。午後四時前記三名帰着。夜は焚火を旺んにして、シュラーフザック等を乾燥。C IV付近の積雪は四尺内外。この付近には水は出ていないが、少し上流に一箇所出ている所があった。水のない所にベースキャンプを張った事は確かに良くなかった。雪を溶かして炊事することは水を使いより二倍近くの時間とアルコールを消耗する。しかし我々は晩はなるべく焚火を利用することにしたからアルコールを節約できた。

一月五日 快晴

全員音更山を経て石狩岳に登頂。

午前二時起床。ラテルネの光を頼りに五時出発。昨日のラッセルを進む。全員のコンディション絶好。星満天に輝く。一時間にしてラッセルの終点に到着し、ここでラテルネの灯を消す。谷はC IVより約四〇分にして叢生なく、真白に埋まっており、傾斜も相当に出てくる。ラッセルの終点にて二股を右にとる。尾根は両側とも急峻である。キックターン毎にぐんぐん高度をたかめて行き、ユニ石狩岳、武華山、武利岳等があらわれてくる。今度は右に入ってより左側三本目の小沢に入る。何れも急傾斜である。六時四〇分四本目の右よりの沢に入る。落口は滝で非常に急であるが、これを越すとやや緩斜面となり二股となる。ここで小憩後左を登り、更に次に右にとる。その小沢を登りつめてスキーを脱いでデポーとした。時刻は既に九時をまわっていた。膝まで入る軟雪の急斜面を少し登ると岳樺もなくなり、雪面も硬く、ここで第一回の食事をとり、アイゼンをはく。

一〇時出発。相当の急斜面である。約二〇分にして国境山稜に出て、音更山頂に一〇時四〇分着く。天候絶好、眺望よく殊にニベツ山の鋭い山容は印象的である。石狩岳の音更側もなかなかよい。一一時出発、五〇分にして山稜伝いに石狩岳に向う。この間概してアイゼンはよくきいたが部分的に少しばかり埋まる所があった。微風石狩側より吹き、厳冬の候とは思われぬ程で、あたかも三月の尾根歩きのような気分である。零時半下山の途につき、再び音更山を経てシーデポに帰ったのは二時近くであった。三時頃ベースキャンプに無事戻る。

石橋（恭）が石狩岳から下る際に、アイゼンの歯を一本（右足前方外側）折損したのみで、他に何等の故障なく登頂できたことは非常に幸いであった。天幕に帰ると休む暇もなかっただちに薪切りをやるもの、焚火の周囲を広く掘り下げらるもの等、各々良く働き、夜は焚火のまわりに針葉樹の枝を敷きつめてここで晩飯をとった。

一月六日 晴

全員ユニ石狩岳登頂。

八時四〇分出発。キャンプより三〇分余にして一、二〇〇米水線入二股を左に入る。少し進んでより次第に左尾根を上りつつ、キックタインを繰り返して比較的緩斜面を登る。十一時森林帯を出てシーデポとする。ここで約三〇分休憩して食事をとる。これより二五分にしてユニ石狩岳の頂上を踏む。やや風があるが気温高く、零下九度を示している。音更山前衛の瘤東斜面には昨日の足跡が明瞭に認められる。空模様はやや下り気味で、石狩岳、音更山付近は石狩側より雲が上昇し始めていたが、我々の方へは来る様子がない。約二〇分にして頂上を辞し、シーデポにて小憩後午後一時出発、気温高いため雪やや重くまた深いため、疲労した体はいうことを利かない。キャンプへ戻ったのは一時五〇分であった。

一月七日 晴

ベースキャンプを引払って八時二〇分出発。一日以来全く降雪なく登りのラッセルはそのまま残っている。積雪の少い

ために倒木その外の凹凸が多く、重荷を負うている体は一層後滑りを招き、シールをつけて下った。各班毎に適宜に食事をとり、CⅢ跡着は一時半。ここより全員再び一緒になり、ユニ石狩本流の林道に出たのは二時半であった。多少倒木があってもやはり路は遙かに楽である。ここで小憩後出発。CⅡ到着は四時半過ぎで既にうす暗くなっていた。先日張ったままにしておいた天幕T₃の外に天幕T₁およびT₄を張る。

一月八日 曇後小雪

一〇時四五分CⅡを引き上げる。途中ユニ石狩川の小屋及びCⅠの小屋において休憩して食事をとり、無加川との合流点に三時半到着。これより四〇分にして広い道路に出て、五時森林鉄道の軌道に出る。軌道は全く雪に埋められている。造材事務所に先般の好意を謝し、残しておいた荷物をとって五十号駅逓に泊まる。

駅逓の宿帳は大正十四年以降の宿泊客の氏名が記載してあり、昭和二年七月の熊根尻山塊への一行、三年三月の武利岳方面へのメンバー、五年五月の武利岳より支湧別岳へ縦走の連中等の名があつて懐しく見た。

IV

荷物の中の主要なものは、食糧、天幕、シュラフザック、炊事用具及び燃料（アルコール）等であるから、これの運搬割当をあらかじめ定めておいた。

造材事務所よりベースキャンプ（CⅣ）への食糧及び器具類の運搬状況は第二表の如くである。而して一月四日、五日、六日は根拠地であり、七日以降は全員同一行動をとって下山したのであるから荷物はすべて全員にて適当に分配して運搬し、普通の登山の場合と何等異るところがないから省略する。

T₁ 四人用軽量天幕

T₂ 三人用軽量天幕

第 2 表

造材事務所→CIV	12月30日	12月31日	1月1日	1月2日	1月3日
A 班 (4人)	事務所→CI	CI→CII	CII→CIII	CIII→CIII _a	CIII _a →CIV
	T ₁ , T ₃ 4S F ₁	T ₁ , T ₃ 4S K ₁ , K ₂ 4Al F ₁	T ₁ 4S K ₁ 3Al F ₁	T ₁ 4S K ₁ 3Al F ₁	T ₁ 4S K ₁ 3Al F ₁
B 班 (3人)	事務所→CI	CI→CII	CII→CI	CII→CIII	CIII→CIV
	F ₂ F ₄ F ₅	3S F ₂ F ₄ F ₅	T ₂ F ₆ (大部分)	T ₂ 3S F ₂ , F ₄ F ₅ (一部分) K ₂	T ₂ 3S K ₂ F ₂ , F ₄ F ₅ (一部分)
C 班 (3人)	事務所→CI	事務所→CI	CI→CII	CII→CIII	CIII→CIV
	T ₂ , T ₄ 3S K ₁ , K ₂ , K ₃ 6Al	3S F ₃ F ₆	T ₄ 3S 2Al F ₃ F ₆ (一部分)	T ₄ 3S K ₃ 2Al F ₃ F ₅ (大部分)	T ₄ 3S K ₃ 2Al F ₃ F ₅ (大部分)
備 考	C班へ上記ノ荷ヲCIニ輸送シテ事務所ニ引返ス	T ₃ ハCIIニ張ツタママ残シオク	B班ハCIニ残留ノ上記ノ荷ヲCIIニ運搬A班Al1個ヲ紛失F ₆ ハCIIニ残シオク		

T₃ 四人用天幕……C IIまで運搬し帰途同所に宿泊まで残し置く。

T₄ 五人用天幕

S シュラーフザック……羽毛製の上に防水布製のものを併用する。

Al アルコールタンク……表中A班運搬のもの最初4 Alのものが3 Alとなったのは $\frac{1}{4}$ 立入一個をC IIにて紛失したに
よる。

K₁K₂K₃ 炊事具……各コッヘル一、飯盒二を以て一組となす。

F₁F₂F₃ 各A班、B班、C班がそれぞれC IVに到着するまでに消費する食糧、従って日々その量は減少する。

F₅F₄ 全員がC IIIにて、およびC IIに戻るまでに消費する食糧を二分する。

F₆ 全員が帰途C IIより駅通に到着するまでに要する食糧。

従って各区分は人員、日数等によってその容量は異なるものである。

留辺蘂から五十六号の官行造材事務所まで森林鉄道に輸送の便を依頼できたのは、何より有難いことであった。一行の荷物は大きな張り切ったリュックサック一〇個の外に、天幕や防水布のシュラーフザックに包んだもの大小三個、それに一〇人分のスキーとストックである。悠に小さな貨車一台を一杯にするだけの容量があった。

器具、食糧の分配、包装は造材事務所において行なった。外から見て内容のわからぬものには包装の上に品名、番号を記載した。全食糧を前述の如く六分したのは非常に良かった。もちろんこの各分割した食糧には若干の予備食糧をも含めてある。第二表に示したように、何日には何班は何と何をどこからどこへ運搬すればよいかという事をあらかじめ決めて、これを各人がノートしておいたから、荷物の輸送は極めてスムーズに行なわれた。各人のリュックサックの重量は最初は相当なものであったけれども、一般に大したものではなかった。むしろ重量の割に嵩張ったのに不便を感じた傾きがある。この荷物の嵩を減らす事に留意し、また一般にもう少し大型のリュックサックを作っておいてもよいように思う。我々は重量に対してはもっと耐え得るのであるから。もっとも、一、二のリュックサックは実にすばらしいキャパシティー

を有していた。

V

我々の携行した装備品や食糧はほとんど大部分今まで我々がいつも使用していたものばかりであって、別に目新しいものはないから、一々品名をあげるほどの事もなからうと思う。

天幕の下敷は携行しなかった。これはこの地方では沢に露營する場合は、針葉樹の枝を豊富に敷き得るから無くともよいのである。

シュラーフザックは近頃はトナカイの毛皮製のものは全く使うのをやめた。羽毛製のものは重量と嵩ばかりでなく、天幕の下敷がよい場合にはかえって寝心地も勝っているからである。そしてこの羽毛入の上に防水布製の袋を併用する。いくらまでもなく防水のためである。また防寒性を増さしむることはもちろんである。たとえ羽毛入寝袋の外被を防水性にしてあっても不完全で、しかもこの上に防水の袋を併用する時は、非防水の外被のものよりかえって不都合である。氷がその両防水布間に一面に真白く凍りついていた事をしばしば発見した。防水布は凍るとガバガバになるが、防水布でないのは硬化しないから袋に入りやすい。また重量も防水布で包んだものの方が重い。最近一般に重量と嵩とのみを考えて羽毛の量を減じたため、かんじんの防寒性を著しく低下せしめ、甚だしいのは冬期の使用に耐え得ぬものがある。非常に寒い場合、寝袋のままリュックサックに足をつつこんで寝ると大変暖かいものである。我々のリュックサックはたいして膝まで入るから相当有効である。

毛皮の長靴を我々は雪中露營の場合必ず携行するが、これは非常に便利である。天幕を張ってしまおうと靴を脱いで中に入るが、靴は凍らないようにきれいに雪を払って袋に入れてシュラーフザックの中に入れておく。だから一寸天幕の外に用事のある場合スキー靴をはくことは面倒だから毛皮の長靴をはく、今まで使用していたのはトナカイ製で底は生皮を用いてあつて非常に優秀であつたが、新調したのは子牛皮で、底も普通のアザラシ皮であつたから、凍って硬化すると足が

充分入らない欠点があった。重量もトナカイやアザラシの方が軽くてよい。

全期間の献立表を作るにあたり、主食物を米、餅、フランスパン、ロールドオートの四種としたが、これは結果が良好であった。米の大部分は干飯にしておいたが、容積、重量、調理の簡便等あらゆる点で白米よりはるかに優秀である。出納現場のデリシヤスチーズを少し持って行ったが、凍結すると風味もひどく低下してしまった。真冬の山へはかえってプロセスしていないチーズの方がよいように思う。ソーセージは凍結してもチーズ程のことはない。ミルクパンをポケットに入れておいて、腹の空いた時に随時食べたが能率上非常によい。これをフランスパンの代りに主食物とすることは不適當だ。

VI

この度の山行においてわれわれは天候には非常に恵まれたものといわなければならぬ。冬季このように晴天の続くことは稀であろうと思われる。しかも風の強い日の一度もなかったことは不思議に思う程である。また気温も一般に厳冬期としては低い方ではない。今までのわれわれの経験からみるとむしろ暖かかった方だろうと思う。殊に音更山から石狩岳への山稜は、絶好の天候とほとんど風の吹かなかったために、あたかも三月頃のような気分であつた。

この冬は正月頃は一般に降雪すくなく、北見地方もまた例年より積雪がすくないために、官行造材の鉄道がまだ運転を続行しておつて、われわれはその最後の車に乗せてもらえたのは何よりの拾い物であつた。イトンムカ流域も、ユニ石狩川の方面も積雪は予想外に少く、若し林内歩道が無ければ先年の正月の熊根尻山塊へでかけた時のように相当困難したろうと思われる。国境の乗越付近は三尺位は積っているが、ユニ石狩川を下ってゆくに従つて積雪も減じ、倒木もあり、重荷を負っているので案外時間を要した。この積雪不足と倒木とは林道から離れて支流に入つてからはますますひどく、それが為にA班はベースキャンプに到着の日が一日のびた。函の通過にスキーを脱いだり、二度も架橋を余儀なくされた事は前年のニベソツ川以上の苦勞であつた。しかしベースキャンプ付近は既に標高も一、〇〇〇米以上あり、積雪は三、四尺

あつて、それから上流は積雪不足による困難はなかった。

積雪期における石狩連峯への登山は、今回が七度目である。そのうち冬季においては二度目であつて、他の五回はいずれも五月ゾムメルシーで忠別岳方面、あるいはニペソツ山の方から山稜縦走によるものであつた。

(部報五号—一九三五年—より再録、一部省略)

解 題

太 田 嘉 四 夫

この山行に私が参加したのは予科二年の冬であつた。同級生として、札幌出身の故西村正君の他に私と同じ本州出身の石橋泰一郎君と杉頭夫君とが参加している。今にして思えば私たち予科二年生は一種の幹部候補生として訓練されたのかも知れない。

徳永さんも緒言にのべておられるように、ポーラーメソッドはこの頃既に本州では行なわれていて、特に京大の山岳部はヒマラヤを志向して既に訓練にはいってゐた。

北大山岳部にもヒマラヤ志向が無かつたわけではないのであつて、部報四号の金光論文などはその一つの表われである。

この山行についていえば、目的は二つあつて、一つは日数を多く要する新しいルートをとつたのでそれには極地法が適當だといふことであり、もう一つは「日頃親しくなつてゐる多くの仲間」と山中で長い間過すといふ事であつた。直接にヒマラヤを志向した訓練だつたわけではない。そしてこの二つの目的の遂行は十分に成功したように私には考えられる。極地法は長距離の荷物運搬にはたしかに良い方法であり、計画は緻密にそして良くできていたと思ふ。アルバイトは私

たち新人にもそんなにきついものでは無かった。そして私たちには冬の露営生活に一举にして慣れるという多大な教育効果があった。またベースキャンプに全員一人名が集まり、幸い天候に恵まれてキャンプ生活も楽しかったし、二つの登頂も楽しいものであって、北海道の厳冬の登山入門としては私たちにこの上なく好適なものだったといえよう。

登山ではリーダーや先輩が最も重い荷物を負い、最もきついアルバイトをするのだ、という事を私たちはこの時知ったのではないだろうか。そしてそういう事が山仲間の友情が永続きしている諸要因のうちの大きな一つをなしているのだと思う。こういう事はなにも北大に限らずむかしの登山者の常識であったのだが、近年登山訓練に伴なういろいろな不詳事があったので、特別に思い出す。

極地法による登山は北大においてはその後昭和十一年に本野らによって、三月の音更川から石狩岳、ニベソツ岳の登山に用いられている。そしてこの年に立教大学山岳部が日本人としてはじめてヒマラヤ遠征をし、ナンダゴット登頂に成功している。

しかし私たち、はじめての北海道の極地法に参加した新人たちはついにヒマラヤ遠征など計画せず、それは次の時代の人たちの仕事となった。戦争がなければ、私たちのうちの誰かは計画したかも知れない。

忠別川溯行

石橋 恭一郎

一
秋であった。

僕は一つ二つと澄み渡った大気を胸一杯に吸い込んだ。今朝札幌を発って、正午過ぎ此の東川の部落まで煤煙とガソリンに黒く汚れた胸が一息に秋の空気で満されて行くのを感じた。アカシヤの木立に縛りついた野葡萄の葉が紅葉しかけている。僕は握飯を噛りながら、玉蜀黍(とうきび)の波の彼方に霞む大雪の連峰を眺めている。モクモクと吹出した旭岳の煙が蒼空に溶けて行く。

バスは開墾地を走っている。開墾地と言っても随分前に開けた所らしい。肥えた黒い土、時代の着いた胚ぶきの農家、落葉松の防風林。奥に進むにつれて愈々秋が深い。収穫の近い小麦が、丘に豊饒なうねりを見せている。

二

昨夜も止められた、今朝も言われた、忠別川は到底溯行出来ない相だ、お止めなされ、今も此の川に入った鉸山師が二人怪我をして湯治していますよ。成程川幅の広い此の付近でも相当深い、行けなければ行けないで見物して来ますよと言

ったものの引返す気は無かった。行けない事はあるまいさ、と一人旅の気軽さ、キリリと久方振りに草鞋をしめて朝露を踏んだのであった。暁の日ざしは此の深い谷の折り重った出尾根の遙か上のタンネの森林を照して、此の踏跡の続く谷底はしっとりとして湿って、一足毎に玲瓏な秋の空気が毛穴から体の隅々まで溶け込んで来る。

滝の音が響いて来る。羽衣の滝だ、いよいよ水に這入らねばならぬ。ゴソゴソと露とドロ柳とを分けて川原に下り渡渉の為の杖にと手頃の柳をつかんだ。

水の色も冷い。思い切って渡った最初の此の渡渉に驚いてしまった。深いとは知りつつも他に適當の場所が無いので丁度四五度の対角線に渡った積りが、中途で足先を水勢にあおられて、予定した所よりも五、六間も下流に押流された。まだ沢の様子は險悪ではないが、水量と水勢とは相当に多く且強い。

只一本の杖を頼りに全神経を足先に集中して危くバランスを取りながらの渡渉が何回か続いた。地図で見ると水源の浅い此の沢の溯行は、朝比奈、林達の引返した今年七月の溶雪期には不可能かも知れないが、長髪の言った如く九月の減水期には案であらうとの想像はすっかり外れて、川幅の狭い故か、ずっと二股迄此の泳ぐ様な最も真剣な渡渉が続いたのであった。

行手に飛沫が見えて来た。第一の滝だ。左岸を巻いた。ここから右岸に移らねばならぬ。然し本流は深淵を作って奔流している。渡るすべも無く、其のまま左岸を岩と灌木とを頼りに五〇米の高さに捲く事二回、最後の岩場をやっと水辺に降りたって一服つけた。第二の黄色い滝が掛っている。其の彼方に遙か高く、断崖が打続いて、中途よりは滝を掛け、どうやら本流は左転している様子、見える断崖は本流の右岸にそそり立つものらしい。果して沢の様子が悪くなってきた。兩岸は行く程に傾斜を加え、木立も少なく、岩肌も頭に、沢の中は兩岸より落下したのであらう、家屋大の岩塊が折り重って之を攀じ登りせり下り、其の上に亦左岸を約一時間捲かねばならなかった。

沢が愈々左転した、と見る其の右岸のすばらしい断崖、行手遙かに約五百米の赤褐色の壁は延々と続いて、白く泡立つ沢辺より垂直に切り立ち赤く爛れた岩壁の中腹より数条の小滝を吹き出している。

本流が左転した、今度は函だ。あの本流の水勢が重く激み、兩岸は高く天を摩して、長髪の言つた猿も取り付けない岩壁は函の左岸に覆ひ被つて来ている。左岸は到底登れない。右岸は或は巻けるかも知れない。然し暗澹たる函は此所でぐつと拡つて奔流している。渡るのは危い、引返すか——時間は未だ一時だ、天気もいい、よし行こう——何回目かの泳ぐ様な渡渉であつた。

七〇米ばかりガレを這い登れば案外楽な出尾根の一端である。此所から上流に開けた景觀は亦実にすばらしい。此の函も足下で終り上流は右転し、其の間約四丁の滝と淵。兩岸の上半分は断崖、下半分は闊葉樹に覆われ、右岸は此低^までは進めそうもないが、左岸は楽に進めるらしいと一人合点して兎に角水辺に降らねばならぬ。此の瘦尾根には熊の足跡がある。之を伝えば何とかなるだろう。かつて中ノ川でやはり熊の足跡に導かれて函を越した事がある。此の足跡を逃すまいと登つて行つた。百米、二百米、まだ降りられない。足跡も上へ上へと上つている。断崖も近くなつた。下れないのかも知れない。とするとあの断崖を登り切つて二股迄五百米の高さに巻かねばなるまい、これは大変だ。充分一日はブッシュを漕がねばなるまいと悲壮な決心をして一步一步と足跡を追つて進んだ。愈々断崖も頭の上に乗せて来た。丁度約三百米、本流は遙か下に一条の白線となつて俯瞰される。此の時急に出尾根の一端が台地になつて来て、何時しか熊笹も茂り足跡も消え僕は右へ右へと丈なす藪を泳いで居たのであつた。此所の地形は階段状になつて、旭岳の裾野が延延と黒い森に包まれて南に延び忠別川で切断せられ、約二百米の断崖を作り、此所の台地で一息入れて、再び三百米を河岸迄一気に落込んだ形であつた。

約半町、台地地形が消え、急なガレが壁迄這上る手前で下りに掛つた。降つた川岸は函の直ぐ上流に当り足下には数段の滝が掛り股々と両岩岸の壁に衝して、暗澹たる函の中に吸い込まれて居り、上流はこれまた滝と淵との連続で、水煙猛々と立込め、暮れ易い秋の暮色は一人陰惨の氣を加え、僕は此の雰囲氣に圧倒されて、しばし今宵の泊りも、明日の行程の事も打忘れて、唯一人ポツネンとルックに腰を下して居たのであつた。

冷氣を寒々と感じた、今宵の宿を求めねばならない。此所右岸に立っている所は一張のテントを張る充分の砂地があ

る。然し右岸上流は片側の函をなし滝を掛け、進む事は容易ではないが左岸は大きな岩を階段状に昇って行けそうだし、今宵雨でも降ると明日渡渉出来まい。それに林道は左岸の尾根についている。今一度今日の最後の渡渉をして左岸に移ろうと、水勢を注視したが相変らず早く深い。此の右岸も上流は二〇間とは伝へない。下流は前記の如く函と滝で渡れる所がない。然し今日中に渡って置かねばならぬ。二〇間上流の小滝の掛る相当大きな淵を利用する外は無かった。幸い勿論背は立たないが水勢が此所だけゆるい。此の淵を去ると本流は奔騰して函の前の連続した滝に掛り、函に吸い込まれる。帽子をルックに入れ、バンドを締め直して、ザブンと飛込んだ。此の試みは幸に成功した。僕は対岸の岩に食い下つていたのである。

其の付近の僅かの砂地にテントを張った。水音は谷に籠り、水煙は深い霧の宵の様に濛々と立込めて、陰惨な谿の底は刻一刻と暮れて行った。紅に染った夕雲が激しい早さで帯の様な視界を飛んで行く。風も強いのだろうが森林を揺り動かす風の音も水音に打消されて聞えて来ない。ぞくぞくとした寒さに襲われて、急いで焚木を集めた、火が燃えると体も心もすっかり暖くなって夕方余りに焼け過ぎた星空に明日の快晴を祈った。

翌朝は薄曇の日で運悪く雨も近い様子であった。今日中には二股を越えなければならぬ。地図を案ずるに僅か四、五町しかない。最早之から先は楽の様だし、今宵は国境尾根の水源まで行き秋色を満喫しよう。数坪のお花畑の褥は灌木に囲まれ、一条のせせらぎが其の側を流れていて、四囲の色彩は五色の配合だろう。——いや、もっと進んで国境尾根の沼地の側に宿を定めようか。雲海が十勝川の森林をすっかり包んで、ゆるやかな移動を見せ、折しも石狩、ニベソツの彼の鋭い頂が夕日を浴びて淡紅色に輝いている。僕は夕飯も終って煙草を片手に此の雄大な風景を恣にしている。やがて淡紅色の山腹が徐々に紫に、コバルトに変わり、暮色が一段と深くなった。とサツと焚火の煙が横に流れ、沼の面が騒ぎ始めて、今迄眼下にゆるやかなローリングを見せていた雲海が見る間にモクモクと尾根を、谷を這上って、何時しか四界は閉ざされて、冷い霧が前の這松の一带まで迫って来る。今宵は此の霧の中に包まれて、——などと僕は勝手な想像を、彼れこれと廻らしつつキャンプ地の上流岩塊の疊積した四、五丁の間を、霧と立昇る水煙が朝日を真向に受けてキラキラと光り

まるで幻想的な虹の世界に踏み迷った気持で登って行った。此の分なれば二股も近く、広い川原にドロ柳の林を挟んで美しい河原が出合うだろうと思う間も無く沢が左転した途端、左右の岩壁は急に狭り、直下には前にも増して急湍が岩をかみ、兩岸高く待ち、何れも捲く術も無く本流は屈曲して前途の状況も伺えず、昨日の函にも増して暗澹たる気持に追込まれたのであった。幸い兩岸の岩壁は一枚のそれではなく、凸凹の手掛り、足掛りのある崩壊した岩石であったので、僕は前途に極度の不安を抱きつつも右岸をへづって進んだ。或時は僅かの手掛りに足下の急湍に怯え、或時は進退の途を塞がれ、運よく深淵に張出した岩棚を胸までの水を漕いで進み、何時しか再び沢の左転する様子に前方を見れば、愈々暗く、愈々狭い一板岩の函が控えている。僕は初め此の真黒い一条の直立した線が何であるかわからなかった。今迄通過した函は割合広く、且岩肌の関係もあり明るい感じであったので、此の暗い或物を何物ならんとしてしぼ凝視していた。それが遙に高く聳え立つ岩壁の間に深く切れ込んだ幅二間とは無い凄惨な函であるとわかった時、僕は驚嘆と失意とに茫然としたのであった。二股までには此の函を越えねばならぬ。左右何れを巻くべきか、昨日以来何度かの失意の中にも進むべき途を見出して来た。進もう、せめて函の入口迄、今一〇間も進まなくては左右共直立の岩壁で如何ともし難い、しかし右岸は最早進めなくなった。急湍を、今日の初めての泳ぐ様な渡渉を試みた。実に不安な気持で暗い函の入口へと左岸を二〇間もへづると山側は急斜面のガレでホッとした気持の中にも眼前に迫った暗澹たる函に魂を奪われて了った。函の入口の今立っている岩床には小滝が掛り、飛沫を浴び乍ら僕は函の中に光る白い物を注視していた。それは此の先の僅かしか光の届かない函の奥に落下する滝であった。眼の慣れるにつれて僕は嬉しさに思わず声を揚げた。二股だったのだ。其の函の奥、滝の掛っている方に白雲岳より南流する沢が掛り、僕の進むべき本流はそれと九十度の角度に暗く濺んで流れている様子であった。それとは分明にはわからぬが、と目を揚げると、約百米の高さに黒々と森林が聳え、恰も街のビルディングの一角が一つの路を三分するが如く、鋭い岩角は本流を左右に割然と分けていたのであった。

今立っている岩床よりはガレを伝って函の上に登る事が出来るだろうと、明るい気持になって既に霜枯れ始めたガレに生えた雑草を手掛りに登り切って来し方を眺めた。昨日心を奪われた彼の右岸五百米の断崖は漸次高度を低めつつ延々此

の二股まで延び、同じく左岸に聳えていた断崖も此のガレの上部で終り、丁度二股が其の兩岸の断崖の合する所、形容すれば袋の口であったのである。此の二股より岩相も一変し、柱状節理の岩肌が各々の深い函を作って黒い密林の中を流れている。

僕は前述した函の手前の滝の飛沫を浴びていた小沢に降り立った。粘土質の黄色い沢で本流の水面とは百米も高く左岸の岸壁の裏を回っている小沢である。気持の悪い小沢だった。河床に入れた足がズブズブと何所迄も這入って行き、其のままではすっかり体も粘土の中に埋れて了う様であった。急いで一度渡ると二股上流とに挟まれた尾根に取り付いた。凄いい密林であった。河床の様子も更にわからない、恐らく例の函がずっと続いているのであろう、としばしば此の尾根を進んで幾度か立木に攀じ登った後本流へ注ぐ支流へと見当をつけて下った。其所は此の支流（松山温泉よりトムラウシへの登山道尾根一、六〇〇米付近より流下する地図上水線無き沢）が本流へ合する少し上流であった。まず本流の物凄さに愕然としたのであった。足下遙か滝の下には暗黒の本流が滝をなし、淵をなし兩岸は柱状節理の函を作って僕の立っている所は其の函の中腹で、前方の区切られた仰ぐ空は蛇の様に続いている。降り立った場所に引返して今朝作って置いた握飯を噛った。此所は今見た彼の函とは違った。如何にも中央高地の沢らしい密林の中の沢辺である。赤蜻蛉が背にスイスイと飛び交っている。

今日の悪い所はもう直き終るだろう。数年前忠別岳の頂より眺めた美しい河原も近いのだろう。あと二時間も藪を漕がねばならないだろうか。空は益々悪い。仰ぐ顔に一滴、二滴と落ちて来る。出来れば河原で泊りたい、急がねばならぬ。再び本流を巻き始めた。函が仲々に長い。下の様子がわからないので、もういいだろうと湿った沢状の地形を伝って下る事数回、其の度に失望して又登り再び巻き始めるが、幸な事に此の沢状の地形が幾本も本流へと落ち、其の各々の間には互に湿地の連絡があって約十丁位の間を案外楽に横にと進む事が出来た。本流の状態も下って見る度毎に明るくなり、遂には前方に涼々と泡立つ澄んだ水と、広い河原とを見出したのであった。

河原だ。此の旅の初めての安息所だ。僕はドッカとリュックを降し、ゴクンゴクンと甘い水に口をつけて立ち上ると、

双手を拡げてぐるんぐるんと廻し始めた。今迄の何物かに圧倒された、追われる様な気持から、今こそ開放されて思い切り深い息を吸い込んだのであった。

此の附近の河原は血液の凝固した色を呈している。其の色は陰惨と言う感じは与えず、寧ろ紅葉はじめた周囲の闊葉樹に調和して明るい感じを与えている。

心も暗々とヒョイヒョイと飛石伝いに、或はザクザクと砂を踏んで、快い足裏の感触を楽しみ、又或時は既に水々しさを失った落の林を分けて沢歩きの楽しさを味い乍ら、此の様子なれば今日中には国境尾根の眺められる所に宿れるだろうと、沢の狭って来る様子にも気を掛けず、上流へ上流へとひたすらに進んで行った。愈々迫って来て滝の音が聞える。約三十米、美しい滝が一八二一米の西南に掛っていた。右岸を巻いて、と或る狭い川原にテントを拡げた。上から見た事のあるあの美しい川原に泊りたかったが今朝よりの曇天が遂に雨となって来たからである。

雨に煙る谷間に紫煙がゆらゆらと低く流れて行く、鳥も鳴かない、静かな宵であった。

霧雨だ。秋の雨は冷い。久方振りの旅に疲れた。今日は休養だ。沢辺に立つと冷気が身に沁みる。滝があるので岩魚も居ないし、一日こんな時の用意にと持って来た書物でも読んで寝て居よう。見上げる北方の空に霧が流れて、秋色に彩られた美しい峰が現われた。一八二一米らしい。愈々明日は国境の道に出るのだ。

ゴソゴソと狭いテントに這い込んだ。過去の停滞の日の事どもを思い出す。渴いた咽を雨滴に求めた悲壮なブッシュの中の停滞、暗い函の中のあの日、山を出る前の日の雨を幸い岩魚を釣って暮した一日、最早これで夏山の北海道にもお別れだ。僕は山日記の一頁に書留めた。——一人旅呼びかけ見んか赤蜻蛉。

三

きれいだ。十歩歩んでは眺め、二十歩進んでは止った。実に美しい。僕は心を躍らして最も恰好の場所に荷を下した。出発してよりまだ二十分とは経たない。前を見ても左右を眺めても、後を振返ってもいい。荷を背負って狭い沢を左に回

ると、朝日の届かぬ暗い樹影の彼方に夢の様な淡紫の忠別岳が忽然と現われた。其の時僕の心ははずんだ。一步一步と風景は開けて行き、遂に此の荷を下すまで、夢中で四囲の美しさをむさぼって歩いて来た。今迄に斯様な自然の美しさを見た事がなかった。其所は実に五つの沢の合流する実に広々とした河原で、柔い尾根はすっかり紅葉し、其の裾には幾条かの白糸の滝が掛り、僕は只々造化の神の美妙さに恍惚と時のたつのも忘れて了っていた。

一段一段と沢はせり上り、愈々秋も深く、国境尾根の這松も益々緑に浮出して、やがて一掬の忠別川源流の泉が切れた時、尾根道まで後二十米とはなかった。此の附近は熊が多い。爪跡が斜面に縦横に印せられ、天候の悪化と共に無気味さが漂って、追われる様に尾根道に這い登った時、気まぐれな秋の雨が沛然とやって来た。雨に追われてとある這松に囲まれたお花畑に飯のテントを張ったのが、何時しか夜となつて了った。寒い夜で夜半寒氣に一睡も出来ず、嵐はゴウゴウと吹きまくって、僕は幾度か弱い支柱を押えねばならなかった。

暁が訪れると共に、夜中の嵐も静まり、いつしかうとうとしたのか、サッと天幕を染める日ざしに、しめたと首を伸ばせば、今しも太陽は石狩岳の一角に現れ、昨夜の薄い降雪に秋色は一段と美しく、カチカチに凍りついた地下足袋もそこそこにつっかけて、僕は此のはてしない秋のお花畑のさ中を、痺れる足先の冷さのままに、朝日を背に一杯に受けて、走る様に歩いていった。

トムラウシの投影が此の薄氷の溶けかかった沼に一杯に拡がっている。実に静かな朝だ。十勝川の沢の音も聞える気がする。四界何一つ動く物も無く、秋一色に包まれて、あのトムラウシ西方の高原の色彩のすばらしさはどうだ。其の高原がゆるゆると下って紺碧の無数の沼に蔭を落すタンネの木立の台地の神秘さ、僕は幾時間も、此の沼の傍を離れる事が出来なかった。

ふと出たヤッホーが向いの忠別岳の壁に笈まするのを知って、僕は何度も、ヤッホーヤッホーと呼び乍ら、すっかり秋色に酔って夢心地で、林道を下って行った。

(部報六号—一九三八年—より再録)

再録に當つて

石橋 恭一郎

早いもので、この山行の時から四十一年の歳月が流れ、私はすっかり相貌の変わった札幌の街の旅館でこれを書いている。本文を綴ったのは、昭和十三年の現役入隊前、神戸の独身寮の一室であつて、これが絶筆となるかも知れぬと、わびしい氣持であつたが、今日こうして札幌の地で再録解説の筆を取ろうとは夢想もしなかつたことである。

数日前には旧松山温泉を偲ぶよすがさえない程に近代化された天人峡温泉から敷島の滝（本文の第一の滝）まで歩道をつたつた。それは、市販の案内書に「高さ二〇米——東洋のナイヤガラといわれる云々」とあるので、その真偽を確かめたいと思つたからであつた。案内書の記述は觀光目的のためのオーバーな表現であることを確認した次第であつたが、連日の好天にもかかわらず、沢水は多く、その岩をむむ急流はとても渡渉出来る状態ではなかつた。

昭和十二年の春の頃、畜産一部の里教授を中心とする興安嶺學術調査の計画のうち、山の方を先生の教室にいた故本野正一君と私が担当して具体化を急いでいた。その頃の登山の中心であつた大学山岳部の海外遠征は、今日と違ってその数も少なく、先ず第一に資金の点で困難し、同時に大学山岳部のあり方の見地からも、その可否が論議されて、私共の計画もかなり批判されたと聞いている。スポンサーは鐘紡であつたから、資金の点では問題がなかつたが、幸か不幸か、関東軍の都合で中止となつた事情がある。

余談であるが、若し実現しておれば、私共二人は卒論が未完で卒業延期となつたに違いない。中止となつたお蔭で、次の年の春には二人揃つて鐘紡に入社したのだから皮肉である。

とまれ、大いに出身をくじかれたので、在札最後の山行として計画したのがこの忠別川であつた。その頃、道内夏山の

いわゆる処女峰は無くなったものの、バリエーションルートとして、日高にはまだ多くの未知の沢が残っており、中央高地でも忠別川が溯行困難として残されていた時代である。私共の同期の仲間は大自然のロマンを求めて山を歩いた傾向が強かったが、勿論新しいルートは我々がと言う気概に欠けていたわけではない。この山行は太田嘉四夫君と二人の予定であったが、同君は身辺に不幸があつて、私一人となつてしまった。

戦中戦後にかけて、日高の沢の直登が盛んに行なわれたとの由であるが、物心共に不自由な時代に、残されたルートの開発に情熱をそそいだ若い人達の心意気は、私が忠別に行った時のことを思うと、どうやら似かよつたものがあるように思われ、そうした時代の先駆の一つであつたのかも知れない。

(昭和五十三年六月末札幌の旅宿に於て)

追記

- 一、駄足ながら、あの当時はカメラを完全防水する自信がなかつたので、持参しなかつたため、一葉の記録写真もない。
- 二、ある道路マップには、二岐附近に奥天人峽の名称がつけられているが、橋本誠二君によると、ダム建設調査のため、旭岳側及び天人峽——化雲岳道の中から、二岐附近へそれぞれ尾根道がつけられており、沢通しの歩道は敷島の滝までとのことである。

さすらいの日高

山口 淳 一

「腹がすいた。ともかく、動きたくない。果してこんなことで、これから先、身体がもつのか。」という一抹の不安がふと頭をかすめる。これが夏の日高入り第一日目の偽わらざる気持だった。とにかく腹がすいてどうにもならぬ。丸一日の沢歩きの後に辿り着いたキャンプ地で、夕食用の薪を集めるのもままならない。こんなことなら俺だけなせ秘かに「くいもの」を持ってこなかったんだと悔まれる。「食う」っていうことが本当に大事なんだなあなどとボンヤリ感じる。これは他の連中も多かれ少なかれ、その鈍い動き具合から察して同じ様なことを考えているに違いなかった。何でもいいから口に入りたい。誰かこの切なる願いを聞き入れてはくれないものか。でも、ここではおのれ以外に頼れるものはいないのだ。自然は何もしてくれない。自分で動いて自分の口に入れる以外には……薪を集め、火を起し、小屋を作る。腹が減っていると人間なんてあわれになっちまうもんだなあ。水溜りにオタマジャクシがいる。こいつを食おうかななんて気も起る。

こんな計画が間違っていたのか。早くも破綻が第一日から襲ってきたのか。ある程度は切実な問題だった。とにかく現に腹が減っているのだから。でも一つだけ救い道がある。まだ目的の魚を一匹だって確保しちゃいないんだから。でもこれだって、これから先釣れないかもしれない。あわれなことよ。

我々の持ってきている食糧は、カロリー源として（一人一日当り）、小麦粉及び豆類が二〇〇gと、ラード、マーガリンが一〇〇g、砂糖が五〇g、そして調味料として、コンソメ、カレー粉、味の素、塩、コショウ、ポタージュ、紅茶、コーヒーである。

小麦粉と豆類の比は、二対一で、豆類として小豆、大豆、いんげん、えんどう、そら豆と多種を出来るだけ揃え、調味料と共に調理の単調さから免れるべく配慮した。又、ラードとマーガリンとを半々に用意したが、マーガリンを使用したのは主に経済的な理由で、ラードの約三分の一ですむ。一日の食費は八十円である。これだけでまず一日に必要なと思われる二千カロリー近くを確保しているのである。それにあとは繊維源としての野菜（フキ等）、蛋白源としての魚（イワナ、ヤマベ）を現地で調達し、不足のカロリーを補おうとするものである。

装備としてはビニールシート（小屋掛け用、二×二・五m）二枚、鋸、鉋、細引、針金、水筒、ナイフ、鍋、ヤカン（小）、フライパン、飯盒など。個人装備としては、ワラジ五足（不足分はオヒョウの皮で作ることとする）、シュラフカバー、セーターなどである。ラジオはなし。観天望気に頼ることとする。これらがすべてで、出発時の総重量一人当り四貫目。勿論サブザックで間に合う。

我々の本計画の発端は、現在でも当然行なわれているかもしれないが、昔のアイヌなどはイワナ釣りに少量の米と味噌を持って何日も山深く入って過ごし、又猟師がその軽快な身で、雪の上を何日も過ごしているということを聞くにつけ、そのプリミティブな山での生活の仕方にひかれたのである。

そこで今回は次のようなことを目的として山に入った。まず第一に軽量化、及びそれから派生するものとして、最近の科学一点ばりの登山より離れ、科学のその合理精神は残すも、食糧、装備の点で出来るだけ自然のふところじかに飛び込み、生活すること。第二にこれからの夏山、冬山ともを含め食生活の改善をしていきたいということ。

大体これらのことを発想し、計画し、又実行出来るのは、この日高が最もふさわしい場所のようである。日高山脈……その名はなんとなく原始的なあらゆる可能性を含んだ処を思わせる。先輩の開拓のあと。日本で唯一とも言える未開の山

塊。楽しさ。その底抜けに明るいつ歩き。暗い函。深く淀んだ滝壺。瘴猛な道松。湧きあがる白い雲。緑。素早い魚の群。そしてきつと待っていてくれる、あの想い出深いカール。この日高にこそ、この計画の素材は出来ていた。ただその自然と融合していこうとする面をより強く押し進めたものなのである。今回は求めてではあるが、ある種の冒険的なものを免れ得ず、春別川を遡り、もうポビュラーになった札内川を下るといふことで、ルートの日高まあ中級のところにとり妥協した。一日間の行動距離も通常の半日分とし、残りの時間を釣にあてた。

さてこの計画にあたったメンバー四人。まず今回のアイデアのみなもと、ダン吉として人も知る渡辺隊長、勘当息子の岡山出身神谷、ちょっといい男のイチンこと市村、それに意外に悪党の山口と部でも何やらをやらかさんとする、いずれ劣らぬ一癖ある連中であつた。

さて、その第一日目であるが、例の如く駅で一夜を明かし、トラックを乗り継ぐこと三回にしてようやくイドンナップ川との出会いに着く。聞くところによれば、昔は本当に苦心して目的とする沢に入っていたらしい。我々は、最近のダム工事、造材の開発が進んでいるため、何の苦勞もなく入れる。

でも、ここで吊橋を渡ると、そこは昔そのままの自然が広がる。日高においてはトラック道のみが唯一の人間社会へ通じる道なのだ。これで幾日間かは四人だけの社会となる。わずらわしいことはさりと忘れ、過去の日高行などを思い出しながら、小半刻も過ぎた頃、驚いたことに、前日に出発していた牧パーティーに出会った。難渋している奴らのでっかい、でっかいキスリング姿を横に見やうて、我々の自慢すべき機動力を発揮し、軽く先行する。

きれいな水——沢水の感触はたまらない。曇天の日は憂うつなものだが、幸い今日はすばらしい天気だ。しかし、あまりゆっくりは楽しんでられない。今日の予定は、深く長い函を巻き終らねばならないのだ。以前はこの函があるばかりに、上アブカサンべ沢よりチャワンナイ沢に乗越して春別川に入った位強力なヤツなのである。今は、左岸のテラスにかすかながら鹿道があり、どうやら楽に越せる。約百メートルも上を高捲くこと二時間にて、広い河原に出る。河原を行く

こと幾許もなく、まずは絶好のキャンプ地を見つけ、小屋掛け。といっても、ここに辿り着くまでただ腹が減って腹が減って、函を捲いている時の緊張の解けた河原歩きでは、食物のこと以外は頭に浮かばない。大体、昼メシがいけなかつた。ホットケーキにすべき重曹を忘れ、又、それなら砂糖は入れてもしようがないというので、たった百グラムのうどん粉の、塩入りラードパンとなった。これはまずく、その上食欲をそらせる結果になった以外のなにもでもなかった。百グラムの小麦粉のパンといったらヴォリュウムもしている。こんな調子じゃこれから先が思いやられる。それ故、小麦粉をパンにするのは一時的にせよ満腹感の上からは損だと気付き、この経験から以後すべてスープ形式にするとの結論に達し大変参考になった。

とにかく、この日の小屋掛けは飯のしとねであり、天気も悪くなることはないと思われたので簡単に作った。献立は途中の河原で見つけたアイヌネギの入ったダンゴ汁、及びフキのラード焼。期待の魚はまだ釣り上げていない。夜は快適で昨夜の静内駅のベンチの方がよっぽど寒い。きつと寒い空気は下界へ流れて行くのだろう。屋根のシートを通して、星さえ見えそうだ。これから先のことでは話は尽きない。期待と不安。

あくる朝は、食当は（といっても四人のうち二人なのだが）早く起きる。すでに明るい。高い空に巻雲があり、晴天疑いなし。涼しくて、全く気持がよい。寝ている奴らを起こしたい位だ。この沢だつてそう何人も入っていない。おまけに、立木を倒しての小屋掛けと焚火。流木のあるところでの焚火はうれしい。いくらでも大きいのが出来る。しかし朝はメシさえ炊ければよい。我々四人の気分も良好。

キャンプ地より五百メートル上流にて昨日の牧パーティーに出会すが、釣を楽しみながら、又そうでなくても気ままな我がパーティーはしばらく行くうちに追いつかれてしまう。途中の函で又も追いつくが、実は連中釣をしていて、二、三匹上げているところだったので、我が方も負けじと釣針を入れるが戦果なし。このあたり、現地食主義をとっていた我がパーティーの面目は丸つぶれの体だ。これ以後、何回か抜きつ抜かれつしていたこのパーティーとも別れてしまう。

釣をしながら、チャワンナイ合流に達する。少し入ったがこの沢は全然釣れない。こういう沢には用がない。次のカシコツオマナイ沢出会いに着く。この間は快調なペース。大きく広い河原。時に胸までの渡渉もしなければならぬが、ほとんどは大したことなし。雲が出てきて、少しずつ水に入るのが億劫になり出す。沢歩きはやはり晴れた日にかぎる。出会いに飯のしとねを作り、まだある日暮れまで晩のおかずを取りに行く。イワナ、ヤマベがやっと五、六匹で、あとはドンコばかり。全くこいつらにはまいるが、ツキのない我々はこれをつかまえずッべに入れる。結構食える。丸ごとだからうまいものだ。アイヌネギは食い馴れたが、去年の夏も食った何やら名のわからないキク科の植物もズッべに入れたところ、多過ぎたので異臭が付き、食べにくくなってしまった。補うために、又、フキのラード焼など作る。

次の日はボンイドンナップ沢に入る。偵察の結果、魚のいそうもないカシコツオマナイ沢は避けたのだ。ここをつめれば勿論イドンナップ岳へも行けるが、偵察を兼ねて本日の最大の目的を釣と決めた。この山行ではまだ充分に蛋白源となるものを食べていない。なんとかこいつを満足させにや、おさまらない。

ところが、しばらくの間はほとんどかからない。そのうち数は多くないが、どうやら釣れ出す。と見るまに、出会いより二、三百メートルでぐいぐい釣れ出す。初めは三匹になったの、五匹になったのといっていたものが、一〇何匹目になると、今度は大きさを競い出す。五〇匹を越したところで一休み。昼食を作ると共に、獲った魚を天火及び煙にて燻製に加工する。すぐ腐敗して味が悪くなるのを防ぐのと、将来のための貯蔵だ。内蔵を出して笹の茎に刺し、乾すだけのことだが、干し上ったものは丁度身欠にしんのような味になる。そのままでもうまい。

昼食もそこそこ先を競って釣に行き、最初の二股につき当る。ここには大きい滝があるのでこれ以上はイワナといえども上へは行かないと思われる。昼食後ここまでに又、二〜三〇匹上げる。こんな快調な日があつてよいのかしら。これで、一日に一〇本食つても一週間以上もつ。やっと安心感が出る。夜には豊漁祭として大きい焚火。ここで午後の分も全て燻製にする。午前中は曇りがちだったのに、今は月はあくまでも明るく、星は数え切れない。知っている星座が無数の

星に消え入ってしまった。煙が樹間を縫って、星をゆらめかす。明日はナメワッカ沢出合までだから距離もしている。釣をしながらだつて半日で充分だ。今晚は早く寝る必要もない。明日は久し振りにゆっくりしよう。

ベッピリガイ沢は面白くない。デレデレと広いところかどこまでも続く。樹が多い。でっかいヤマベを一匹釣り上げたのみ。ナメワッカ沢の出合には、立派な小屋を建てる。少くとも四、五日は逗留の予定だ。カムエク直登沢も見に行きたいし、ナメワッカ岳、イドンナップ岳にも行ってみたい。

小屋の設計はこの頃になると、大体一定したものになってきた。直径五センチ、長さ二メートル半の木を家型に組み、これにビニールシートをかぶせるのであるが、これだけでは、シートが下に垂れたり、風でまくれたりするので、木組みに縦横ともに三、四本の紐又は細い木をわたす。この上にシートを張れば垂れることはない。要所を針金で止め、更にこの上に持参の補助ザイルをX型に張り、飛ぶのを防いだ。今までこうしていくつか作ってきたが、一番やっかいなのは両側の三角形に空いたところで、それだけにいろいろ工夫を要した。片側を小枝やフキで編んだり、石と木を積み重ねて完全に防ぎ、もう片方を出入口とし、シートで内側からなんとか止めた。完全に密閉するのは容易でない。しかし小さな穴は心配いらぬ。これだけ出来れば充分だ。持って歩くのはシートとナタ、ノコだけ。ダンちゃんじゃないが、テントを背負って歩くやつが、カタツムリに見える。

翌日は早速、偵察兼食糧調達。ナメワッカ沢とカムエク直登沢とに分かれた。カムエク直登沢は、始めのうち開けていて、それに雪溪もあり、今までと大して変らないが、右股に入り、地図のコンタがつまってくるあたりから、雪溪はズタズタだし、急に狭くなり、それに雨も降ってきたので、暗い感じ。雪溪の下を潜ることも度々。これでは飽くまでも進むぞという一大決心をしないかぎり、容易でない。いまの我々にとって求めるところではない。どうせすぐ大高巻きをせねばならないのだろう。日高というのは、この中流あたりがとくに悪く、上は大体お花畑に続く。それ以上進んだら帰りが

消耗しそうなところで前進をストップ。ザイルさえ必要だ。帰りは、又釣だ。一〇匹以上あげた。

偵察の結果、ナメワッカ沢よりイドンナップ岳をアタックすることにする。夏にイドンナップに入ったのはごく少ない。各自が焼いたラードパンとイワナ燻製を持っていく。沢の中は何とも言えず快適。小滝の連続。釣竿を持たないことにしたので、いくらでも飛ばせる。きれいな流れだ。傾斜を増し、大きな段々状になり、水が切れるとお花畑。これが稜線の鹿道に続く。しかしこのイドンナップの稜線は最低だ。猛烈なブッシュとブヨ、ヌカカ。小さな登り下りの繰り返しが二キロメートルも続いているので、背より高いブッシュ帯に入ると位置が皆目わからなくなる。こんな調子で約二時間。三角点ははっきりわからないが、どうやら最高点らしいところで、一気にポンドンナップ沢へ下ってしまった。下半はすでに釣に入っているの、全然知らないわけではない。三時間ぐらいでどうやら合流に着く。例の滝より上にもイワナの姿を見るが、道具を持っていない上に急がねばならないので、残念ながらその影を追うのみ。稜線で時間をとられてしまい、すでに十七時三十分。急げばキャンプまで薄暗くなっても着けると思ったが、前に小屋掛けしたところだし、夕焼がすばらしくきれいだったので、簡単に屋根をシートでふいて、河原にゴロ寝する。勿論、でっかい焚火。太い木をどんどんくべる。誰いうともなく自然に寝入る体制に入り、しばらく経ったなと思われる頃、寒くなり目を覚ます。気がつくとき、雨が降り出していて、全身ビシヨ濡れ。小さなシートの下に四人がかたまることになる。時計を見やればまだ二一時だ。ガッカリ。朝まで長いことよ。とにかく今は動けない。こんな中でも焚火にくべた大きい木はまだ燃えていた。暖かいんだか、寒いんだかわからない。今となっては火を断やすことは出来ない。流木を集めては火を燃やす。昨夜から殆んど食っていないので腹が減る。予備食としての唯一の砂糖をなめる。なんとか落ち着く。すでに、ケ・セラ・セラの境地だ。

最大限の努力は無駄ではない。薄明るくなると同時に行動。渡渉せんとするが、すでに五〇センチメートルも水位の上

った川は人間を寄せつけない。泥水が怒濤のように押し寄せる。仕方がないので、このまま左岸沿いに何度か巻きながらキャンプを目指す。時には二〇〇メートル位も高巻かねばならなかったし、一かかえもある岩といっしょに首まで水に浸ったこともある。河原に建てた小屋が心配だが、今は無事を祈って急ぐのみ。気はあせれど、前進はままならず、ついに渡渉が出来ないまま半日もかかってしまった。小屋の無事な姿を見てホットする。以前に増水して水が流れた形跡はあるが、今のところ安泰。上流で流木が堤防の役目を果し、これが壊わされない限り大丈夫だろう。いざというときの逃路を考えて、小屋に落着く。濡れていないものはまずない。着ているものからシュラーフカバー、サブに入れていたセーター類も完全にアウト。夜も何度かの偵察。腹に入れられるものは砂糖と燻製のみ。

雨は次の日一日降り続けた。一体どうしたっていうのだ。何度も寝返りを打っては横になっているのみ。ついに、ローソクで豆を炒ったり、ホットケーキを焼いたりもする。

ああ、次の朝の太陽を見たときのうれしさ。五〇時間以上も降り続けた雨が止んだんだ。沢はまだまだ水が多くて歩けない。晴天停滞。すべてを引っぱり出し、着ているものを脱いで干す。この小屋も危ないところだった。あと数メートルで洪水禍を受けるところだった。裸になって身を洗いこれも干す。カムエクを狙った医大の連中がここまで逃げてくる。彼らのラジオによれば、この雨は三〇数年來のものとか。各地で被害が大分あるとのこと。昼から状況偵察を兼ねて一人で釣に出る。水はまだ多い。あちらこちらの川岸が削られていて、以前と様相が全く変っている。イワナの奴ら腹を空かしていたと見えて、結構釣れる。

今日は久し振りの御馳走を作った。いんげん豆入りカレースープに、フキとイワナのラード炒め。コーヒーと紅茶。残す食糧はあと数日分のみ。そろそろ札内川に乗っこす日が迫ってきた。

翌日は早く飯を食って出発の用意をするが、曇り空からは雨が降ってきた。九時の気象通報では、これからもあまり楽

観は許せないようだ。よし、それなら早く安全圏に逃げた方が勝と、十時に出発。春別のあの大函を戻るよりは早からう。すでに軽くなったサブザックを背負って、しとしと降る雨の中を一路分岐点目指して進む。最後の大きな二股までは今までと同じく快適な河原歩き。ここからはさすがに悪く、晴れていさえすれば楽しいのだろうが、少々気が滅入る。岩は硬いし、滝も二、三〇メートルを越さない。最後のつめは大分イヤらしいガリーに入った。面白からうと取りついたが悪い。中程でザイルなど取り出す。すぐお花畑に飛び出すが、雨の日には楽しくない。一気に分岐点まで。まだ小雨は降っており、そのうえ風はあるし、たまらなく寒い。稜線を九ノ沢もなにもかも飛ばして、二時間で八ノ沢夏尾根下降点に着く。カムエックは皆ずで行ったことがあるのでネグる。道があるといってもこの尾根はひどかった。大体立ったまま笹の上を滑って行く感じだ。何しろ早く河原まで出たい。そうすればなんとかなる。薄暗くなってきたので間違えたか、道も途中で消えてしまい、手探りで河原に下り立つ。まだまだキャンプは出来そうにない。出合いまでは行けなくても、もう少しましなところと、なおも下る。先頭と後尾ではかなり離れてしまい、姿さえ見えない。どこがどこやらもわからないところで、又も小屋掛け。二〇時。面倒くさいのでメシは食わずに寝る。

ビバーク地から出合いまですぐだった。昨日、二人の時計が止ってしまい、ラジオもないので、太陽を睨んで適当に時刻を見計らう。小屋掛けと焚火。昨夜と今朝の分を一緒に食べる。山に入って幾日経ったのか定かに思い出せない。長いようで短い。

最後後と思つて記念沢に入る。魚がいるということですのでに定評のあるところだ。なるほど出合いから二キロメートル位から釣れるわ釣れるわ、二、三〇匹が群をなして泳いでいる。数えるのも面倒だ。このイワナは春別のと違って腹に赤い斑紋がある。三、四貫釣ったか。釣り過ぎても意味がないので、切り上げる。

これだけ長く、食糧調達のために迫られて釣をしていると、自分でもかなりうまくなったような気がする。コツがあるのだ。用具のうち、竿はそのあたりに生えている木で充分。長くて柔らかく軽ければ問題ない。それに糸と針。浮きなん

ぞはいらない。針は大きめのもの。餌は何でもよい。飯粒、川原の虫、蠅、果てはイワナ自身の目玉、内蔵、その他の昆虫。このうち経験から言えば蠅が一番よい。きっとその柔らかさとうまさぐがマッチするのだろう。捕えるのに苦勞はいらない。イワナの一匹でもそこに置いておけば、どこからともなく集まって来るのでそれらをフキの葉で叩けば一度に五、六匹とれる。釣り方としては、竿を水面下に入れて持っていてもいいし、流しながら食いつかせてもいい。イワナというやつは貪欲であるから、胃までも針をのみ込んでしまう。要するに、いそうなところを感で見つけさえすればよい。深く大きい淵であることもあれば、浅くて今にも干上りそうなところでも以外に大きな奴がいたりする。一般に小滝の連続している支沢に数が多いような気がする。そして人が入ったことがなければ絶対だ。どんな釣り方しても釣れる。味はイワナよりヤマメの方がニジマスに似て高級な感じがする。獲れたばかりのを笹の茎に刺し、塩をふりかけて焼いて食う味は最高だ。

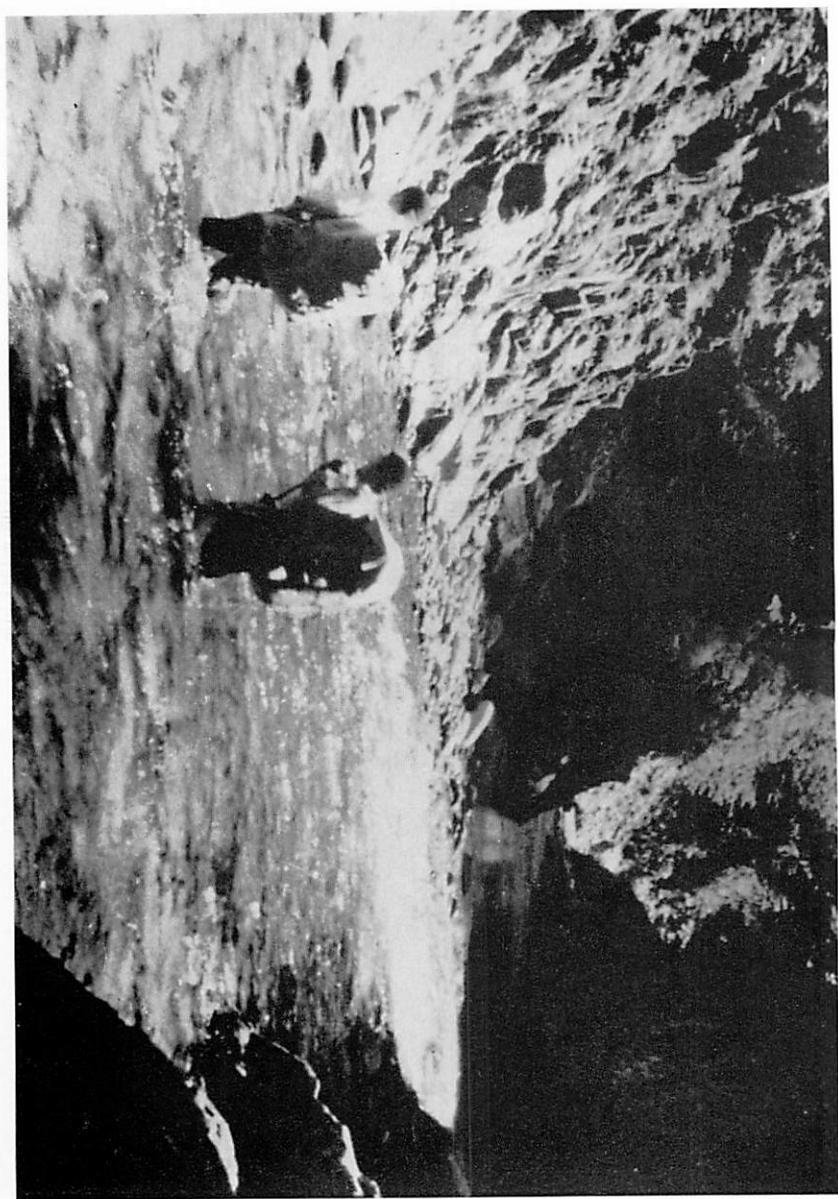
沢の中で昼寝をしたりして暮れゆく夕日を見送る。獲った魚をラード焼や、塩焼にして食いたただけ食った。その後はこの山行納めの夜を楽しむ。夜半過ぎまで、歌ったり語ったりしていた。

最終の日はこれまたなんという快晴だ。やはり我々はついているね。まだまだある腰までの渡渉も苦にならない。どうやらコイカク合流も近くなったようだ。こんどの山の旅のことを考える。我々はいかにも現代社会の便利さに馴れ過ぎてしまって、その恩恵を忘れていく。昔に戻れそうなんてことではなく、便利さに無感覚となっていた神経にちょっとばかり刺激となったのではなからうか。実際、あの雨の中では為すこともなく、自然の偉大さに対して頭を下げざるを得なかったし、人間が自然にほっぽり出されたら、なんと一日のうち大部分を食う為に費やさねばならないか。この経験を生かしての未来。過去のことを懐かしんだって進歩しない。我々は飽くまでも明日の為に、今日を力一杯生きるのだ。

(部報九号—一九六二年—より再録、著者加筆)

コイカクシエシビチヤリ川の溯行

伊藤紀克





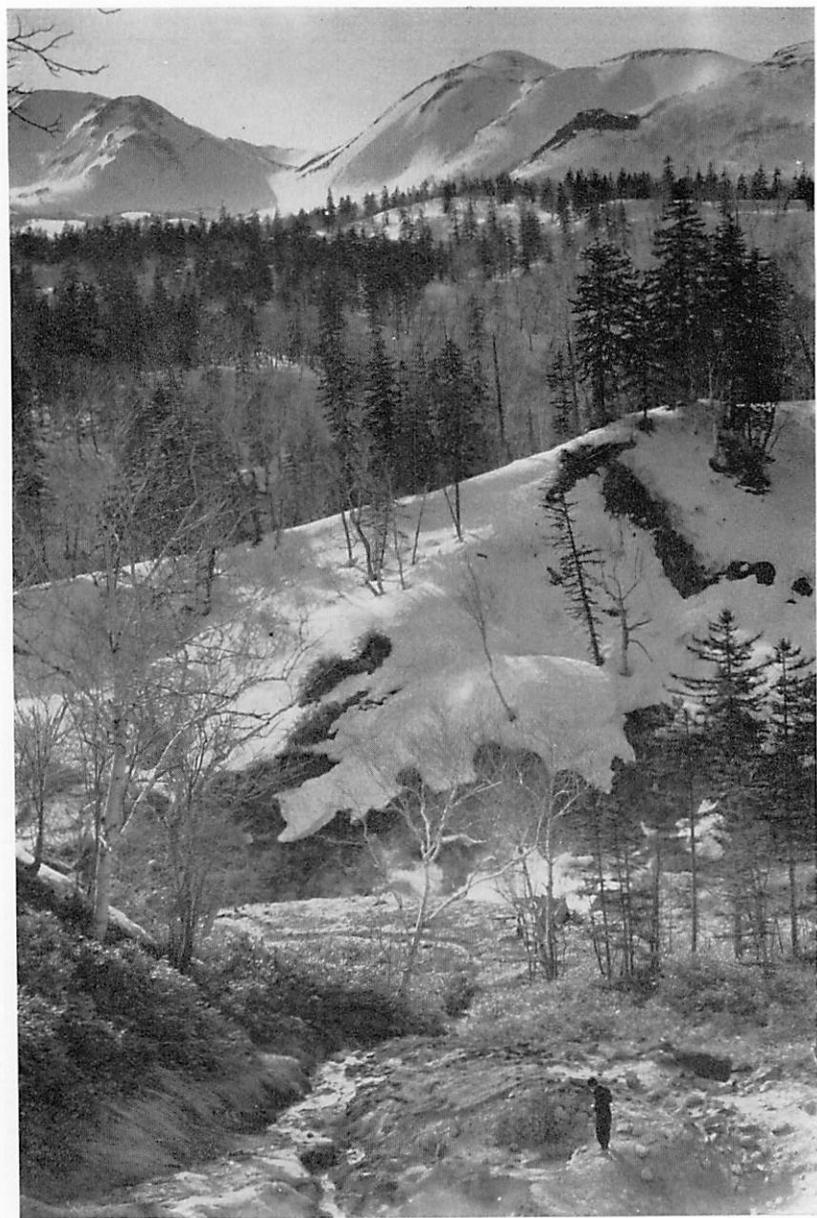
カムイエグウチカサツ、八の沢カール

鮫島惇一郎



美瑛岳より十勝川源流

橋本 誠 二



トムラウシ源流の温泉

橋本誠二

十年以上も前の山行での楽しかったこと、辛かったことなどがいろいろ想い出されるが、その当時書いた文章以外の実感には既に薄らいでしまっているのが残念だ。ただ言えることは、夏の日高や、岩登り、そして冬山と場面こそ違え、ある程度は一生懸命に行動したことは間違いないし、また地球が自分を中心に廻っていることを信じて疑わなかった。そんな一コマをいま読み返してみると、拙い文章ながら昔の仲間の顔が浮かび、当時のルームの雰囲気が見えるものも考える。

それにしても遂に山ヤになり切れず、どういう風の吹き廻りか大学生生活を続けることになってしまった。ひょっとしたらヒマラヤやアルプス・アンデスなどに行き続けていたらなと夢想することもある。更にもっと勇気があったなら、新疆省くんだりで羊群を追うチャンスもあった。

しかしながら、日本からどうして三隊も期せずして北極に行くようなことになったのか。偶然の一致にしても、日本社会の一端を垣間見る気がする。己れの人生を創るべくまだまだ努力しなければならぬ。(昭和五十三年四月 記)

大雪山十日の物語

矢野実

第一日は親切に送られる

ジングルベルの余韻を残して賑う歳末の夜札幌駅を発ち、総勢二一名入山の期待と不安を胸に中富良野の駅に降り立った。朝もまだ早く、ストーブにあたっていると、駅員が熱いお茶をサービスしてくれて感謝感激する。そのうちに、駅長が、「八時になったら役場のバスが来るからそれに乗んなさい。私、言っただけあげますから。」と言って車の手配までしてくれた。しばらくして、八時ちょうどに、図体のかいバスが駅前にやってきた。「さああれに乗りなさい、気をつけてな。」と、駅長に見送られ、丁重にお礼を言って、バスに乗り込んだ。もともとは民営のバスで、採算が合わないので町役場で管理し付近の住民の便を図っているものらしい。「料金は」と尋ねると、中富良野の駅長のとりはからいで、料金はいらぬとの返事だった。こうなること半分期待してはいたものの、入山日から、これほどの親切を受け、我々の入山の喜びをこの人達と共に分かち合えるような気がして、非常に嬉しかった。

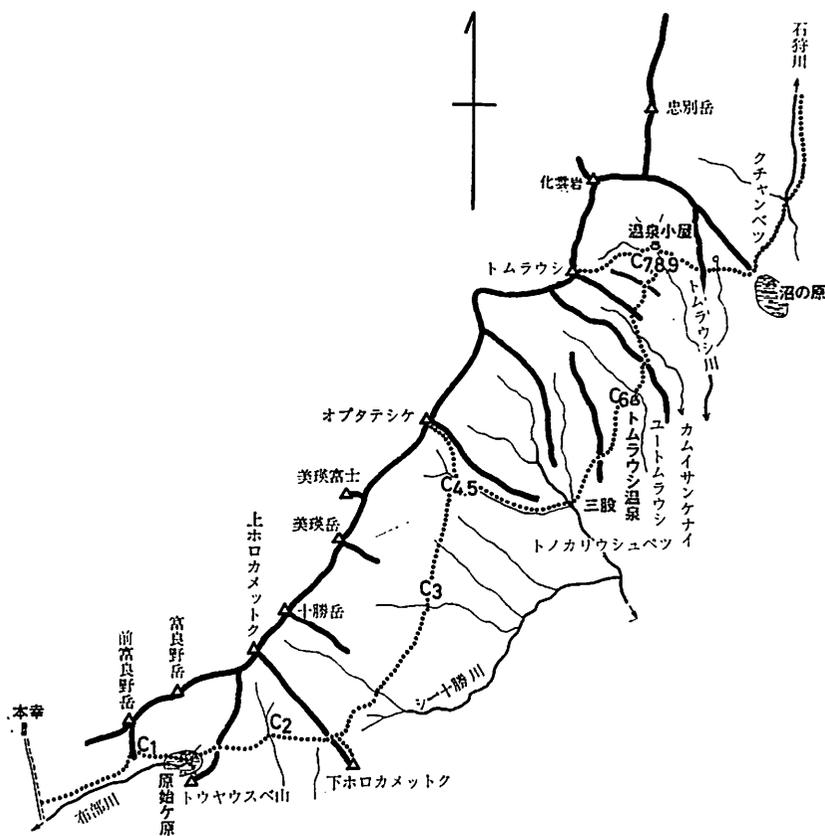
バスの終点、「本幸小中学校」の前でバスを降りると、市街方面に向かう人達が列を作って待っていた。外は、寒気が一層厳しく、手足の先がチリチリと痛みはじめた。

第二日は原始ヶ原を抜ける

前富良野岳から下りてくる二本の大きな沢をなんとか渡り終える。重い荷物を背負って、毎日カタツムリみたいに宿を移動するのはつらい。先頭に立ってラッセルするために、ザックを放り出して、二〇メートル程の急斜面を登り終える。すると、突然真白い庭園が眼の前に開けて、どうしてこうもきれいに並んだものか、広い平ら地に垣を作るかのように、雪をかむったマツが整列しているのが目に入った。その並んだマツが判然と区別できなくなる程に遠ざかった更に向こうに、富良野岳の南斜面がグリーンと雪雲の中に消えていつているのが見えた。フーッと一息つく。適当に汗をかきながら、膝までのラッセルを、只一人で踏み固めていくのはつらいけれど、爽快な気分だ。時折ヒューッと吹き抜ける風も苦にならず、真直ぐなシュプールを振り返ってもまだ誰も追いついてきやしない。いい加減に戻ろうかと思いつつも、せっかくだから、一人だけで素晴らしき天地を楽しもうと、さらに歩を進める。もし、「ホーッホ」と仲間の呼ぶ声が聞こえてきても、返事などしませぬ。タンネに囲まれた小平地をいくつか越えるたびに、「はてな、あんな濃い林を抜けられるものかな。」と心配になるくらい、昔のままの、濃いタンネの林が残っていた。こんな、原始ヶ原だった。

第三日は地図にない別世界に踏み込む

大きな谷、シー十勝川を渡ってから、しばらく木の殆んど生えていない真白い裸地を歩いていった。そのうちに、地図上ではどうしても出くわしっこない大きな沢にぶつかってしまった。十勝岳の裏側は、どこを歩いていたら、今夜の宿はお月さまにでも相談しましょ、ぐらいにしか思っていない放浪族をも暖かく守ってくれる程安全な山裾と思っていたので、「なんと不思議なことかしら。」ぐらいにしか思わなかった。我々の土地に対する動物的なカンは相当なものだ、と常に過信していたので、「さてはこの地図怪しいな。」と過ごしてしまいたいところだった。しかし、何年か前の日高山脈あたりの白黒の地形図ならいざ知らず、近年測量し直された三色刷のものに、顕著な川が隠されているわけはありはしな



い。心配ではないものの、どこをどう歩いているのか定かでないというのも上級生の威信にかかわるので、何もわからぬ一年生に対しては平然と構えながらも、その実、一生懸命あたりを見回すのだったが、チラチラ舞う雪の向こうに山頂が見えるわけでなし、眼下に広がる黒々とした森の中に顕著な目印が見えるわけでもなかった。地図によれば十勝川の北には、同じような川が、何本も東へ流れている。ともかく川を渡っていくことにして、どんどん先に進むと、へんてこりんなハイマツとタンネの庭に出たりで、いよいよお手上げ。はっきりしていることは、我々はずっと森林限界付近を通ってきているということで、常に左手には真白な斜面が、右手は黒々としたタンネの林が続いていた。寒さでス

ツキリとしている頭で、全能力を働かせて考えてみるとこうだ。朝の出発が一、三〇〇メートル地点でやや下りきみであったが、たいして下ることもなく、シー十勝川を一、〇〇〇メートル一寸上（これが実は誤りのもと。あとの話）で渡ったからこの辺はだいたい一、二〇〇メートル位だな、と。そういうことになる。と川の数が合わない。今渡った大きな川はなんだ。イライラ、チクショールと思うにつけ、どうもザマーミロとばかり小馬鹿にされているようで、白い顔の凹凸が恨めしくなったりした。ここぞ、ここぞと合点しようとする、どうにもわからぬふしに、ウッだ、ウッだとかからかわれるのだった。

第四日は憩う

無事にピンチを切り抜けたのは言うまでもない。我ながら、いい尾根に目をつけたものだと思心せざるを得ない程の、当を得た、オプタシケ山のふところにやってきた。トノカリウシユベツの最上流部で、沢の水は得られないが、露営生活するにはもってこいの場所だ。明日のオプタシケ山往復の目途をつけて戻ってきて、用意してあった焚火にあたりながら、まずはブランデーをキュッと飲みほした。これまでは、連日、四時頃までの行動で、設営し終ると真暗になってしまっていたが、今日ばかりは時間があるので、それではと焚火を大きくすることにした。新雪で雪まみれになったマツは相当重く、肩にかつくと、木にくっついていっている雪が、すっかりそのまま我等の頭から足の先までひっついてしまう。おまけに動き出すと、とんでもない深みにドボツともぐって全身雪まみれ。内側は汗をかいてぐっしりとなつているのだから、火がつかなくなったら泣くにも泣けやしない。うまくつくつかぬかは、最初のくすぶりでわかる、あとは天をも焦がす様な火になるのを待つばかりだ。こうして苦勞して灯した大きな焚火に煖まっていると、やっと芯から山に入っているんだな、という気がする。春の日高のチロロ川で、毎日三時間位移動しては、あと日の没するまで木を伐り出してきて小屋掛け、焚火をして、タクタタにくたびれていた山行を思い出す。やはり山にはこの火が欲しい。晩メシも終って、焚火が大きな穴に落ち込んでしまう頃には、皆、各自のテントの中に入っていった。グリーンと冷え込んでいるし、星もまばた

いているし、どうやら明日はオブタテをアタックできるだろう。

第五日は一寸胸の透くことをする

今日はスキーとアイゼンの話だ。部報一号で、ある先輩がこう述べている。「志す一つの峰へ攀じての帰るさ、軽く疲れた足からアイゼンを外して、喜ばしい気持で再びスキーを穿いて、緩るやかな、又所々急な樹林帯のスロープを、木の間を縫いながら悠々迫らず滑り下るその味わいと気持のよさは、一寸胸の透くものがある。」こんな気持がわかるようになったのは、いや、わかるだけでなく、その当時から五〇年近くも経た今日の山登りにおいても、これこそ雪山の心持であるなあ、と感じるようになったのは最近になってのことだ。

昨日のトレースに沿って、マツの黒々とした森を抜ける。カンバのざわめく疎林を越えて最後の緩傾斜地で、スキーをぬいだ。あいにくの吹雪ぎみの模様で、スキーを外すのもつらく、凍えた手でアイゼンをつけるのはもつとつらい。ようやく、出発。目頭を押さえホホをこすりながらギンギン風に逆って歩き始めたところに、ガキのようにしゃきつとした。零下二〇度もなんのその吹きさらしでも喜々としはじめるのだから。グリーンと迫るオブタテシケ山の斜面を仰いで、足に気持よい雪面を選んで進んだ。時々、バキッと偃松の中に足を踏み抜いてしまう。スキーをぬいでからというもの、目の前が白いのと、足首が力んでくるのとは、すつと相変らずで、具合が悪くて遅れた一年目と一緒に、他の連中が、てんでんに登って行くのを見ると首が痛くなる程の傾斜にいつしかなっていた。どうやら頂上まで着いて、皆で握手し登頂を祝う。まつわりついたガスは晴れそうできてなかなか晴れず、しばらく待ったが、頂上を辞して一目散にかけ降りることにする。飛び降りるようにして斜面にとび出すと、白いとてつもなく大きな斜面が足元をさらうように広がり登頂できた喜びに加えて、新しい世界を発見できたような気分になった。時折頂上から吹き降りてくる突風のたびに、ビッケルでバランスを保ち、それが止むと、また一目散に駆け下った。いい加減、足がガクガクしてきた頃、やっとシーデポに到着。放り出すようにアイゼンを外し、スキーをひきぬいて、流れ止めをゆわえて、いざ滑降の準備ができあがった。風にたた

かれた雪は重く、残念ながら昨日ほどの快適さはない。しかしそれでも両側に粉雪がふわりと盛り上がっていく様はまさに雪艇の名にふさわしく、古風な、かじ取りの若干面倒くさい、帆船を繰っているようだ。もたもたしている一年目を元気づけるが如く、俄かに青い空が広がり、正面には、ニベツツ、石狩の山々が、銀の文鎮のように端座しているのが見えはじめた。歓呼。勿論まっすぐに下りてしまうことはせず、我々の私設オブタテスキー場に何本ものシュプールを描いた。紅茶を沸かして飲んだりして適当に疲れてから、「悠々迫らず」「一寸胸の透く」滑降を、タンネの森めがけてはじめた。暗れあがった頂上の方を振り返ってみると巨大な真白な豚の鼻のような格好をしたオブタテシケ山のしかかってくるように迫ってきていた。

第六日は紅白歌合戦を聴く

大晦日は、久しぶりに床の上でくつろげることになった。マツを通して漂ってきたイオウ臭に導かれて、トムラウシ温泉にやってくると、ポーリング跡の青い氷塔、誰もいない飯場など、急に人臭くなって感じ悪いような懐かしいような複雑な心持ちになったりした。「カワイコチャン」に会いに行くんだと、川下の旅館にみかんを買って新年を迎える準備を終えた。氷点下二〇度もなんのそのルンペンストープに守られて、みな早いうちに夢心地で、「紅茶できたぞ。」という声にも反応を示さなくなってしまう、恒例の紅白歌合戦を聴くものも、年寄りだけになってしまった。シンデモアナタト、クラシテタイト……。「毎年聞いているな、去年なんかも、ひどい熱でうなっていたけど、眠っては覚め、のあいだじゅう歌だけは聞こえてきたもの。」「いつも元旦は停滞だから、なんていって、遅くまで起きてるけど、いつも次の日行動にしちゃってるんだからな、明日こそ停滞にするぞ。」「それにしても、今年も終りか、全く大変だったですな、この一年。」「ほんと、下にいると、早く、山に入りたいって思ってたさ、山に来ると落ち着けるもんね。」「だけど良かったな、大人数できて。一年目なんか殆んどラッセルできねーんだから、五、六人できていたら、いったい一日どれだけ動けたかわからないんじゃないか。」「でも、もう結構荷も軽くなったし、慣れたから楽だろう。くたびれちゃっ

たね。絶対あしたは停滞にするぞ。」「ああ、そうだな。それにしてもなんかおもしろいことないかね。」「おもしろいことか。山にきて、こんなこと言ってるなんて、お互いに年とったね。」「ミナトハコダテ、トウリアメ……」

第七日は温泉小屋に向かう

新年はなんと快晴で明けた。温泉の裏手を登っていく時、目にチラチラ、「星のさざやき」が訪れ、足元に幾重にもなつて舞い降りていった。さて、新年の太陽が高く、そして傾きはじめた頃には、カムイサンケナイの森を抜けて、茫々漠々としたトムラウシの雪の原に出た。いつこうなつたものか、後には誰の影もなく、二人して歩いたあとには、やたらと遠くまでただ一条のシュプールが、高く、低く見え隠れしているのが見えた。小高い偃松地に立ってポイントムラウシの岩屑の丘を振り返りながら「ついでこねーな、なにやっつてんだろ。」と、残りの連中を待つことにした。そのうちに雪粉舞い上がり、キラキラ光る遠くの山の端に、雪の砂漠のラクダよろしくエッチラ大きな荷を背負つた黒い影がポツリと立ち止った。「ホーッホ」とコールをかけると、これに応えるように、斜面を切つて、手前の谷底へ滑り下りてきた。続いて二つ、また一つと、やっと、彼等の顔が見わけられるようになった頃には、我々の体も、すっかり冷えきつて、こんな寒い所はおさらばだ、とばかり逃げるようにして、タンネの森に向かって滑り降りた。トムラウシの東の裾は、大小の尾根、谷が、高く低く流れていて、なかなか目的地が見えて来ない。五色ヶ原も沼の原もぐーんと近づき、石狩岳なども相変らずの姿を見せていた。しばらく登り降りを繰り返すうちに、緑のマツのカゲに白い煙らしいものが見えるような気がした。自然足が急ぎ、とある高みを登りきると、がぜん眼前が開け、半円状に迫った高台から伸びてくるなだらかな尾根の末端、丁度扇の要の位置に、シュルシュルと湯気を上げている黒い谷が見えた。「もうじきだな。ホラ、温泉小屋だ。」まるで懐しい人にも会つたような気持で、しばらく一列にならんたまま、突つたつていた。

第八日はゆっくり初夢でも見ることにする

「オーイ、どうする。」「……。」返答がないので、隣りのテントを見に行くと、入口がヒラヒラたなびいちゃって、「あれ、出かけたのかな。」とありもしないことを怪しみつつ、顔をつっ込んだら、入口はおろか、一番奥まで雪を白くかぶって、みな眠っていた。「入口を開けっ放しとは。ところで今日、どうする。」「どうするって、雪降ってんだらう。」「ひどい雪降りて結構積もる気配。やっとなこさ休養できるのか。彼等はいつになつたら起きるのかわからない。こっちのテントの連中もいつ起き出すかわからない。それでまた、ゆっくりと初夢を見なおすことにして、シユラフにもぐり込んだ。

第九日はトムラウシの頂上に着く

とうとうトムラウシまで登ってしまったな、それもこんなひどい悪天の時に。何も見えないのに誰も文句を言わない。トムラウシの頂上はひどく風が強い所だというが、今日はなんとということだろう。主稜線の出ぎわに立った時、悲しいくらいに強い風だったのにこの頂上はそよ風だった。なにね、この向かいにも頂上があるからさ。夏はあっちに登ったんだから今日はこっちでいいさ。どっちが高いかって、今はこっちが高いに決まっている。春には、この間にある沼まで降りたさ。この一年間、この頂上にはひどく心踊らせられながら、かけ登ったものだけど、その度にかえてむなしさを感じた。トムラウシの頂上には妖女が住んでいると聞かされていたけれど、僕等にはあまりにも神秘すぎたのだからか。あまりにひきつけられたものだから、春夏秋冬通ってきたりした。しかし、これが終りになるかな、落ち着いた、ひどく落ちていた頂上に来るのも。風と雪とガスの中、全然躊躇なくここまでたどり着いたのは、僕等の力のせいじゃないかも知れない。夏に台風であれほどひどい目に会わされたりで、冬はどんなにか、と思っていたけど案外だったじゃないか。頂上で手と手を重ね、無言のうちに笑顔を交したが、本当に静かなもんだ。

第十日は山を下りる

下山にふさわしい静かな日となった。トムラウシも今日登れば良かったのに、と言わんばかりに白く高く聳えていたし、複雑なタンネの森も一寸も迷うことなく通り抜けることができた。沼の原の西の鞍部を越え、石狩川に下るなだらかな尾根を自走することなくラッセルで、川辺に降り立った。後を振り返りもせず、ただひたすら歩きに歩いた。石狩川奥深く入ってきている林道に出ても、三〇センチメートルほどのラッセルで、少しも楽になりやしない。何回か腰を下ろして休んでは、また歩き続け、見知った所では、あとのくらいかなと思いつつ先を急いだ。適当なところで泊るかなという考えも当初あったが、この苦しみに報われたいと、もうなにがなんでも、風呂とビールを確保するつもりになっていた。ヤンベタツップの高原温泉からの道路と合し、今に飯場でも出てくるさ、と思いつながら歩くうちに真暗になってしまった。こうなったら意地でも国道まで歩いてやるぞと、半ば絶望的な気分で先を見やると、なんと、灯りが点々と見えはじめた。ほーれとばかり近づくと、煙突からブンブンと煙りも出ている。泊めていただけでないか、と交渉に行くと、自衛隊の訓練だった。しばらく上官と話を交すうちに、泊めてやることはできないが、層雲峡まで車を出してやる、ということになり、バタバタとスキーをたたんで、兵隊よろしくトラックの後に乗り込んだ。幌いっばいに寒風を受けながら、層雲峡へとトラックは下って行った。その寒かったことは言うまでもない。大雪国道の後続の車のライトがとっても懐かしく思えたのも今日の道のりのせいだろう。トムラウシでも感じなかった程の足の冷たさをガマンしながら、頭をポケットと空っぽにすることができた。

解 題

矢 野 実

この紀行は昭和四十五年十二月二六日から翌四十六年一月四日まで、丁度十日間の、初年班を対象とした冬山山行の時のもので、部報十一号に書いたものを少し短縮して再録した。

この山行が行なわれるまでの一年間は、謹慎休部中ということで、山登りの精神、組織活動のあり方について、何度も何度も部員の間で討議が繰返された。世の大勢は、「より高く、より困難を」目指す、先鋭的クライミングが主流となってきた中であって、一年間の討議の中で、北海道のいたるところ、未開の山野であった頃の山登りの姿に、登山の精神的な原点をたどる、たどりたいたいといった考え方も芽生えていった。山登りの中に生活を求め、自然と対話する場として、大雪山が残っていた。しかも、その東面は十分にその目的を果たしてくれたと思う。

十分安全な山行でなければならぬ、それぞれ小人数パーティーを組めるだけ人的余裕もない、といった、この時の部のおかれた事情もあって、比較的大人数による、縦走ならぬ、森林彷徨が行なわれたのである。

座談会 — 北大山岳部五十年の歩み —

司会 朝比奈英三(昭14)

発言者 中野征紀(昭10)、伊藤紀克(昭11)、太田嘉四夫(昭13)、
林 和夫(昭15)、有馬 純(昭19)、山田真弓(昭20)、山崎英雄
(昭27)、杉野目 浩(昭28)、白浜晴久(昭28)、木村俊郎(昭29)、
小林 年(昭31)、橋本正人(昭37)、渡辺興亜(昭40)、岡田勝英
(昭40)、松田 強(昭41)、神谷晴夫(昭42)、小野寺弘道(昭44)、
伏島信治(昭47)、矢野 実(昭48)、下沢英二(昭48)、越前谷幸平
(昭48)、高橋一穂(昭49)、北村一夫(現役)、八木欣平(現役)

以上 二十五名

朝比奈 今日の座談会は、とくに東京及び関西支部の方から、五十年記念誌の内容試案について、北大山岳部の精神面の流れを追う点で不十分であるという意見がありました。それを補う意味でやってみようということになったわけです。それぞれの時代を何人かの方に担当して語って頂き、当時の山登りの在り方を精神面の流れとして表わしてみたいと思います。また自然に溢れてきたという形で望ま

しい部の将来像の話が出ればなおよろしいかと思えます。では最初に大正十五年から昭和十年まで創立の頃の皆の気持ちを中野さんからお願ひします。

中野 私は大正十三年に予科に入っただんですが、当時は山は危険だと言って旧制高校では文部省が山岳部を禁止していましたので、旅行部と称して実際には山登りをしていたんです。北大は明治の末ごろにスキー部が出来たんですが、その中にも山に熱心な人がいて、例えば六鹿さんという人など富士の積雪期登山をしたり、板倉さんが三月の槍ヶ岳に登って来て記録を発表して、みんなが憧れたんです。しかしインターカレッジのスキーの大会という時代になって山に登る人はおかど違いということで、それではとういのでスキー部に山班をつくり、ますます盛んに登るようになりまして。しかしやはりスキーと山は分かれた方がいいというので、当時スキー部の反逆者などと言われた方がら伊藤秀五郎とか、沢本三郎、松川五郎、板橋敬一といっ

た優秀な人達が頑張つて大正十五年十一月に山岳部の発会式をやりました。この時は大学教授達も加わつて七〇人ほど集まりました。山岳部はスキー部から分かれた時から人材も多く、実力もあり、私も大いに感激して部の末席を汚していたんです。北大山岳部はスキーの大家がベテランということでしたが、沢本三郎が「山スキーの手引」を出版すると方々の大学からそれを分けてくれるように言つて来たのを覚えています。伊藤秀五郎は、彼の詩や紀行文などが非常に名文で皆から注目されていたし、慶応にも知人がいて日本山岳会の事務所へ行つても人気者でした。秀五郎は酒は飲まないし、沢本三郎も山では絶対に飲まない。だからスキー合宿でも絶対に酒は飲まなかつた。それから話し振りも友情と信頼といったモラルの話をよくするものですから、鈴木限三先生といつて非常にロマンチックでいい方がおられて、「山岳部の会は修養会の会みたいですね。」などと言われました(笑)。

朝比奈 では次に日高の夏山が盛んにやられて、沢から沢へのロマンティックな旅の最盛期のころ、部の中心の一人であつた伊藤さんお願いします。

伊藤 私が昭和五年に山岳部に入つた頃は丁度さつき長髪が話していた「修養の会」と言われた時代で、吹上温泉の合宿にそれがよく表われていたと思います。確かに酒は飲

禁でした。唯、二階の一番奥の先生の部屋では、ちょいちょい飲んでいたようです。その頃東大を出た渡辺武男先生という理学部の若い教授がおられたのですが、山岳部の合宿に来られて、その非常にまじめな山に対する真摯な空気を愛しておられたようです。しかしその頃でも部の中には、山を楽しめばいい、頂上に登る登らないはともかくといった考え方も一部にはあつたと思います。しかしそれも包容していく幅がありました。当時登山の服装は夏はワラジで靴はほとんど持つていない時代でした。ウィンドヤッケなども素直に受け入れる風はなく、何か排他的でもあつたのですが、理学部の石橋(正夫)君がスキーに新しいパッケンをつけたりしたのが、それを崩して行く最初ではなかつたかと思ひます。

朝比奈 では最も山を楽しんだ方の一人として……

太田 私は昭和七年に入つて十三年に出ました。同級には石橋恭一郎、杉頼夫、伊藤周一、福地文平などがいて、上には中野さん、伊藤さん、下には林君達がいた。私達は丁度移行期だつたと思ひます。共通の気持ちとして山を修養の場なんて余り考えず、スポーツと割切つて考えていました。合宿では酒を飲まなかつたんですが、ヘルベチアに学校をサボつて行つて、ヘルベチア会議と称して酒を飲んで大騒ぎをしたものでした。朝比奈君もそうだったよ

(笑)。僕等の時代にはヒマラヤ志向はあまりなかったですね。次の代、岡彦一君あたりがそういうことを言い出した。社会情勢としては、戦争が始まり、次々と仲間が兵隊にとられて行き、世の中が暗雲に覆われ、どこか圧迫されている気持ちが山登りのそれに混っていたように思います。

朝比奈 その頃迄でもいろいろな時期に、山登りに困難なものを求めて行く傾向が出ているわけですが、今太田君の話されたローマン的な山登りの次の時代に、そういう気運が盛り上って来たわけです。その代表的な一人として林君に話を……

林 そんな難しい話はないんで……。僕は昭和九年に入りました。今話がありましたように部にはいろんな流れがあっただけいいんだし、無理に分けることもできないと思えます。只傾向的にはどっちかと言えばおおらかに山を楽しんでいたようです。我々の時代は戦前としてはアクティヴにいろんなことをした時代だったと言えるかもしれません。具体的には岩登りも随分しましたし、冬の高所露営もやりました。海外登山は戦前唯一のヒマラヤのナンダコートを立教の堀田さん達がやった。それが非常な刺激になって、我々もヒマラヤだのアラスカだの話していました。もう一つ部の歴史として忘れられないのはベテガリの冬期登山

で、これは我々の時には達成できないで、あとに今村君、佐藤君が戦中のあの食糧の困難な時代によく頑張って登頂しています。その一番とっかかりは僕と西村さんで昭和十三年三月にした山行ですが、やってみてそんな小さな形式では駄目だと判り、所謂ポーター・レーメソッドでやろうという気運が出て来たわけです。

私は昭和九年に入った時、すぐ日高の夏山でエクウチカウシから札内川に下りた時に間違って日高側に下りちゃった。最後には一日分の飯を六日間食い延して、もう一度エクウチカウシに登って下山したのです。それが僕の最初の山で、その時長髪さんや伊藤さんが迎えに来て、実に堂々としておおらかにいたわりながら面倒をみて下さった。私は空腹でくたばりそうになりながら「これは山登りは面白いな」と感じました。それが山の始まりで、北大を出る時にはベテガリで沢山の仲間を失いました。いわば私の部の生活は、遭難に始まって、遭難に終わったようなものでした。そんなことで学校を去ったのですが、本州に行つてから日本山岳会に入って、戦後の建て直しにもあたつたんですが、本州に行つて色々他の学校の出身者につき合つてみて、やはり自分は北大に育つた人間であると感じ合つてきました。それから山口さんと小平さんなどと東京で一緒になつたりし、最近ではカナダの山と一緒に登つておつき

合いしてみると全くおおらかで、「これが山登りだ」なんてカリカリしないで一生楽しんでおられる。こういう立派な先輩に接して、北大というのは幅があつて色々な人を包み込んでよいのだと思います。今つくづく北大山岳部に在籍して山登りをしたことを有難いことだつたと思つていきます。

朝比奈 では次の昭和十五年から二十年迄、ベテガリの遭難があつたかなり画期的な時期だつたんですが、有馬さんお願いします。

有馬 昭和十年頃迄に中央高地から日高と夏山に次いで冬の山がほとんど登られて、昭和十三年に私が部に入つた頃は、北海道の山登りのパイオニアの時代は終わつていたんです。ただ夏では日高の無名沢（今は名無し沢と言つてゐるようですが）が残つてゐることと、冬のベテガリとイドンナップが未登頂で、冬のベテガリは部の目標だつたと思ひます。ベテガリは昭和十二年の一月二月に第一回を初めてポーターメソッドによつて試みたのですが悪天候のため失敗しました。しかし葛西、有馬、林ら十数名が殆んど予科生だけでこれに取り組んだことは、それ自体当時の部にとつて意味があつたと思ひます。

昭和十三年十二月の下旬に十勝の合宿で山岳部最初のアクシデントがあり、瀬戸、高田両氏が亡くなりました。そ

れから凡そ一年置いて昭和十五年一月に第二次ベテガリ隊があつた悲惨な遭難に終わったわけです。ベテガリの冬の登頂はその三年後、昭和十八年一月に今村、渡辺、佐藤らが果したんですが、その方法はポーターメソッドではなしに、コイカクの頂上にイグルーを作つて、好天に恵まれて一気にアタックしたんです。考えてみますとそれは偶然ではないんで、やはり冬のベテガリという目標を置いて、たゆまぬ努力と研鑽を積み重ね、その当時イグルー、雪洞が冬山のテクニクに取り入れられた結果だつたと思ひます。

山田 有馬さんより二年あと、昭和十五年に入つたんですが、ベテガリの遭難の直後で、山岳部に入るのを家の者に大分反対されたのを覚えてゐます。私の入つた頃はまだベテガリで亡くなつた人の遺体もすつかり収容されてゐない時で、その作業のために札内川に捜索隊が出たりしてゐました。やはり多数の先輩達を失つたベテガリの遭難は部にとつて大きな打撃だつたと思ひます。

昭和十五年というと既に日中戦争が始つて居り、次の年には大東亜戦争に入り、山に登りたい気持ちは今の人達と同じように強かつたんですが周囲の事情から山行は困難なものになつて来た時で、山岳部の名も「剛健旅行班」というのが正式なものでした。ですから海外登山などは夢の夢でした。伊藤秀五郎さんが部長で、戦争中は時代と学生の

生き方について発言されたり書いたりされ、楽しみに山に行くのには反対のようでした。昭和十七年、十九年には合宿もだんだん困難になって、行く直前になって十勝の合宿ができなくなつてニセコと愛山溪に分れて苦勞してやつたこともありました。昭和十九年、二十年の頃は山らしい山にはもう行けませんでした。なお冬のペテガリを目標に雪洞やイグルーの研究が進められたことに関連して、その頃イタリー人のマライーニが北大に留学中、イグルーの紹介をしたりしていたことを思い出します。

山崎 私は昭和十七年に入りましたが、その頃は戦争がひどくなつて予科ももう三年が二年に短縮された頃で、十勝の吹上温泉の合宿も最後でした。翌年は俘虜収容所の建物に使うということで解体して運ぶことになり急拠ニセコの馬場温泉で合宿したことがあります。私が最初に行った日高は楽古岳ですが、一緒に行った岡見さんが途中で兵隊検査に遅れては大変と下山して了うというようなせつばつまった気持でした。終戦で生命の心配は急になつたんですが、食糧事情が極端に悪くなり、一週間山に行くとなるとイモやカボチャでルックをはち切れんばかりにして行き、黄色くなつて帰つて来る有様でした。戦後合宿は吹上温泉がなくなつて白銀荘が始まつたんです。その頃私は山しか人生はないような気持ちで農学部に入りなおし昭和二

十七年に卒業しましたが、長髪さんのように本当に実質的な長い期間ではなかったんです(笑)。足掛十年北大にいましたが実際に山に登つたのは終戦後やっと元に戻つたという時からでした。その頃の事件としては、コイカクでの花岡さんと札内川九の沢での奥村先生の遭難でした。さき程から山岳部の精神面の話が出ていますが、確かに秀五郎さんを頂点とするピュウリタンの精神があつたと思えます。それがいいか悪いか私は判りませんが、悪く出ると排他的になり民間の山岳団体を見下すようなところがあつたような気がしなくてもいいですね。私の父が北大にいました山岳部に関係があつたことから私の小さい時から古い山の大先輩が家に来られ、ヘルベチアに連れて行かれ何となく山が好きになつたように思います。中野さんがここに居られるんで中野さんにゴマをすつても仕様がなんでしょう(笑)、中野さんのような行き方が北大山岳部の精神的なものに相当大きな影響を及ぼしていると思うのです。他の大学の山学部の人を知っていますが、中野さんに象徴されるような行き方は一寸他では見られないと思ふんです。それからヘルベチアの存在が心のよりどころになつていたように思います。今度あそこにダムが出来て水没するかもしれないというのを聞いています。もしそんなことになつたら部の雰囲気が変わつてしまうのではないかという気が

しないわけではないんです。

杉野目 私は昭和二十二年に入ったんですが、食糧事情も多少はよくなった戦後復興の最初の頃でした。山崎さん、木崎さん、長井さんなどの先輩達が張り切っていました。丁度部報が長く途切れていた時で、十数年の空白があり、発行に手をつけましたがながびき、橋本(正人)君らの協力を得て、やっと発行にこぎつけました。山登りだけが生きがいだというひたむきな気持ちの一時期もあったわけでありまして楽しくてよい時代だったと思います。山の本は当時は非常に僅かで「アルプス記」、「山行」、大島亮吉の「山」といった本が非常な影響力をもっていました。丁度登山の大衆化の前の時代でしたが、日高には冬の未登の稜線などがまだ残っていましたし、それに大雪の縦走もございました。そういう点では今とはちょっと違っていました。昭和二十八年に山崎さんが最初にヒマラヤ(マナスル)に行き、ヒマラヤも身近になって来ました。時代的には戦争中途途切れていた山登りをまた始められるようになった時代ということですよ。

白浜 私の身体には背中の中真中に引込んだあとがあるんですが、これはイモ一俵背負って大雪に十日間程行った時背中にできた豆がつぶれた傷あとなんです。そういう時代でした。しかしだんだん山に登れるようになって、個人的

に楽しんで山に登る登り方からグループで何か考えて山に登る時代になって来た。事業的に何かやるよりも好きな者同志でやるという北大山岳部の伝統から少し変わって来たように思います。あの頃昭和二十三年でしたか、早稲田がペテガリを東尾根から登りに来ましたが、われわれにはとても考えられないような下の方から尾根にとりついて、ポーターメソッドで登った、グループとしてペテガリを登るという事業をしたわけです。その時は若い人がでかい荷物を背負って、小さいルックを背負ったリーダーにしごかれながら登っている姿を見て驚きだったんです。北大はそんなことはなく、リーダーがメンバーをいたわって、自分が一番重い荷を背負うといった気風だと思えます。しかしとに角われわれも一人でできない登山をグループでするようになり、いろいろ議論はありましたが、そういう形式で十勝大雪の縦走とか、カムエクの集中登山などをやりました。また物のなかつた話になりますが、スキー靴からザックまで自分で作ったもので、木村さんが金井さんというおじさんを見つけ出して(笑)やらせたのが今の秀岳荘になったというわけです。

木村 当時はやはり総合的な登山を考え始めた時代で、入学した翌年の昭和二十六年に、十勝大雪縦走に参加させてもらいました。まだナイロンなどなくて、冬山の装備を

いろいろ工夫したのですが、アンナブルナの成果が日本に入ってから来ました。その翌年、京大の伊藤洋平さんが知床の縦走をした時に、ナイロンを使っていて、帰って来た時なるほどと思って座談会を聞いたことを覚えています。大学の修学期間が短かくなり、山の基礎技術が低下するというので、合宿を強化することと単独パーティを出すことを再び始めたいです。夏山はもう大体分っていたけれど、冬山にはまだ未知のルートが残り、探検的な気風もありました。本州の魚津から剣岳までを目標にして計画を立てたんですが、沢の偵察中に事故があり、鈴木康平君を失いました。で、原点に戻って考えてみようということになりました。

小林 今話をされた木村さんもそうでしたが、私も新制になって入った方で、昔六年でやることを四年でやれといじめられた方です。その頃ヒマラヤに行きたいという話が大部分ありましたが、その前に冬の剣岳ということで、昭和二十八年の夏に偵察としてブナクラ谷からのパーティと、三の窓から上に登るパーティに別れて剣をねらったんですが、ブナクラで鈴木康平君が遭難するということで実現せずじつに終わりました。翌二十九年にボーラーメソッドで日高のカムイからカムエクとポロシリを、部の総力をあげて登りました。昭和三十年頃南極の話が始めて、北大に極地研究会ができて、犬糧や犬の食料の研究などをやっています。

した。私はこの研究会に入って、犬の携帯食料をやったのが手始めで、その後中野さんと一緒に南極に行ったのが私の時代です。

橋本 私は昭和三十一年の入学ですが、私の頃は繁栄の時代に入りのおんびりしたものでした。私の同期は四〇名位いましたが、四年で卒業した者は半分もいません。その頃ポート部と山岳部の落第が一番多いということで、当時の学長の杉野目先生に部長の原田先生が呼ばれて叱られたんだそうです(笑)。山登りは一所懸命やりました。昭和三十一年は日高山脈の全山縦走の年です。これで一段落してそのあとはどうしてもヒマラヤへ行こうとして、すべての焦点がヒマラヤに合わされていたと言ってもよいと思います。このために岩と氷のテクニクとボーラーメソッドを研究しました。冬は専ら北アルプスで、随分背伸びして冬の滝谷や、北鎌から剣をボーラーでやろうとしました。しかし何れも成功しなかったんです。しかし結局ヒマラヤ、ヒマラヤといっていたことが、そのあと何年か経って実ってチャムラン、ナルカンになったんだと思います。この間、登山の装備は格段に良くなったと思います。装備と言えば金井さんのお得意の半分は北大山岳部で、殆んどみんな金を払わないもんですから、私の会計幹事の時に「済みませんが半分でも払って頂ければ……」などと言われまし

て(笑)、今やあんなに立派になってしまつて……(笑)。ヒマラヤのことでは何年も続けて研究会を設け、毎週集まつて英文の資料を読んだんです。それから私の頃部報を出したことから、「日高山脈」の編集をしたんですが、手伝つてくれた人達の半分位は十の沢の遭難で亡くなつたんです。

渡辺 私が入つた頃は戦後大学山岳部の最盛期に当る時期で、大量入部で苦勞しました。毎年一年生が五〇人位入りました。同時にヒマラヤの話は極地研究会などが探検派の温床になり、また本州の高神山岳部などを通じて、早稲田や法政といった当時の大学山岳部の第一線の先鋭的登山の洗礼を受けた人々が入部して来て、ヒマラヤ、大量入部、先鋭的アルピニズムの三つが奇妙に混合して、ある意味では非常に不安な時代だつたように思います。ですけれど一方遭難も心配されたわけですが、ヒマラヤが目の前にあり、山岳部は実にアクティヴな時代でした。とくにチャムランの登頂の時など、部を挙げて募金をしましたし、一番張切って生きていたような気がします。ともかく昭和三十年代から始まつた一つの最盛期でありました。

神谷 私が在籍しましたのは昭和三十七年から四十二年ですが、大量入部といへば、私の同期は五〇人位もいまして、春の合宿は利尻、芦別、十勝と分かれてやるという状態でした。その頃山登りの主体性ということが打出され、

自らの発案で山に行けと強くいわれたのを覚えています。昭和三十七年から三十九年は装備と食料の軽量化で、夏山の最後に残つた直登沢の全盛期で、約四百〜六百メートルの高度のところ泊り、一日に直登沢を登つて次の沢へ越えて次のキャンプ地に下りて来る、ということを繰返して二週間位かかつて歩いたのでした。北大山岳部には個人山行システムというのが一つの伝統としてあるわけですが、ある時期になりますとこのやり方を発展させ全体として何かやってみようということになつたんです。

その頃には、新入部員が少くなつて上級部員が多い逆三角形のような人の構成になつたんですが、昭和四十年冬にペテガリの集中登山が試みられたわけです。その後同じ年の三月に札内川十の沢の遭難があり、これは部としては二番目に大きな遭難です。それからジंकクスとして、遭難は二年続けて起こるといふのが実際に起こりまして、次の夏札内川六の沢で山際君と木下さんが流されて遭難しました。今思ひますと戦後の登山の盛り上がり最後の時期にひっかかつて、そのとどめをさされたのがあの遭難だったような気がします。それで北海道内の山を北大山岳部がかなり自由に歩き廻れた一番最後のところにひっかかった世代ではなかつたかと、僕なんか感じております。

朝比奈 それではペテガリ集中登山と十の沢遭難の頃の

ことを岡田さん続けて下さい。

岡田 今迄ずっと先輩方の話を伺っていきまして、山岳部の全般の気風は変っていないという風に受け取りました。

ヒマラヤを志向する人達から、森林帯をラッセルして歩くのが好きだという人まで、我々の時にも幅があったと思います。しかし、少い人数では認め合えることでも、多人数になると部としてのまとまりに欠けることもあるようになります、もう一つは上級生が大きな力を持っていた時期でしたので、二つの意味から部として集中登山をやってみようという事になったんです。目標にはやはり伝統の日高で、かかり合いの長かったベテガリを選びました。当時は結果は成功だったのですが、あとになって考えると、積雪期の日高の登り方、特に沢の用い方などに問題があったように思います。たとえば、ベテガリ集中の時に、ヤオロマップの溯行とサツシビチャリ溯行がなされ、それぞれ稜線に出ることはできたんですが、たまたまうまくはいったものの、このことが後の十の沢の事故にもつながっていたのではないかと思うのです。沢田さんの遭難の時、私は本州で黒部川の支流に入っていたんですが、後で佐伯さんに「あんなところは絶対に行かないんだ。」ともの凄くおこられましたね。

そういうことで、私達は戦後の大きなピークの余波にい

た時代だったと思います。

松田 ベテガリ集中がある程度成功した直後に十の沢の遭難になるわけです。その頃は、部としてのかなり力があつた、あるいはあると過信したともいえるのでしょうか、ちょこちょこ事故はあり、遭難に対してかなり神経を使っていたにも拘らず、身近な者が事故にあらう。十の沢に続いて、山際君達とか、西君のアクシデントがあったので、確かに本質的な遭難もあつたのでしようが、ついていないという面もあつたと思います。そういうことで、盛り上がっていた山岳部もショボンとしてしまい、海外にも個人的に行くという風がとくに出始めたと思います。

矢野 私は昭和四十二年から四十六年迄の部の状態をお話ししたいと思います。部報十一号にもありますように、ひと口に言って混乱の時代でした。四十二年に入った時は十の沢の遭難、六の沢の遭難と続いた翌年で、部の在り方、山登りの仕方について悩んでいました。とにかく冬山でも春山でも自由な山登りができない、それでなんとか自分達の実力を出し切るような自由な山登りをしたいと思って、勉強会やら、サッカーの大会をやって訓練をし、また組織について討論を重ね、何か上向きな時代でした。岩登りも盛んになって、沢を登るにしても、函の高巻などせず、何があんでも真直ぐに行くという行き方になりましたが、四

十三年にソエマツの直登沢で当時の六年目の一人が遭難し、続いて定天で事故があり、自分達に実力のないことを反省するようになり、自信がなくなつて、気が減入つて来たような感がありました。そうこうするうちに、昭和四十四年の春からの大学紛争に巻き込まれ、夏も冬も変則的にやらざるを得ない時代に入りました。部員の中にもノンポリや闘士みたいな者もいて、お互い精神の拠り所がバラバラになつてきたように思います。それが一応けりがつくと、今度は四十五年の冬に大麻吸引事件というのが起きまして、事実上休部になつたわけですが、精神的にも荒廃し、それが表面化し、そのために力を落した下級生も居りました。

朝比奈 それでは、十の沢、六の沢の遭難の後、部の力をつけようと一所懸命だった小野寺君に、岩登りとかかわりを下沢君の方から、それから休部中下級生でいろんなことを感じながら悩んできて今に至っている高橋君にその辺の話をして頂き、あと現在に至る現役との関連について伏島君に話をして頂きたいと思ひます。

小野寺 我々の頃は日本経済の高度成長時代だったわけですが、恵迪寮の焼酎事件、十の沢、ソエマツと遭難が続き、その間十名の部員を失なつたのでした。よく議論をして山岳部の位置づけなどを再検討しました。より高く、よ

り困難なものへ、より未知のものへというマンメリズムと水平派という二つの意見がありました。議論をしながらも組織作りも進め、AACCHの最初の文字Aはアカデミックということ、極地研究会や雪崩の研究などをやり、一方サッカーなどをやり部の意気を高めようとしてました。

下沢 僕達の時代は、組織論が話し合われる中で登つた頃でしたが、議論よりもかく登りたかつたんです。歴史的には食料や装備が非常に良くなって、僕達はその恩恵を受けていたといえます。ですから直登沢をやるにしても高まきをせず沢の中を登つた。そしてその中には岩登りの要素が含まれていたわけです。安全性とか、四年間でどうしたらリーダーのレベルに達していくかなど話し合われました。ソエマツに続いて、定天、また積丹での番しからぬ事件などがあつて、僕達がしていたことと、持っていた実力との差が大きいのではないかとということがわかつてきたわけです。大麻事件で一年間の休部の中で、どんな山登りをして行くかということで、現役とOBと話し合つたんです。古いOBとの間には意見の対立もあつたわけです。しかし休部中に世代の断絶とは逆に、十勝を語る会、合宿のOB参加ということをやりました。合宿は十勝を離れて、新たにリクマンベツでやつたりしまして、新しい土地の中で山に対する判断力考え方を合宿の中で育てようとしてしまし

た。ただ合宿という形が皆の討論を生むという考え方でしたが、個人の意見を伸ばすという、当時の学生運動の思想とは噛み合わない所があったように思います。

高橋 昭和四十四年に入部したんですが、遭難の後、大麻事件などで、山岳部が言論部かわからないくらいよく討論しました(笑)。高度成長の中で山登りの大衆化という状況の中で、議論ばかりしていたわけです。山にも林道がのび、日高でもモーターゼーションによって、一日で登頂して帰って来れるようになり、北海道の自然にも未知の残された部分が少なくなり、日高の直登沢も登りつくされ、金さえあれば容易に海外に行けるといふ時代になっていました。その中で変わらないのは自然の本質ということで、後になると、ちょっと吹雪かれるともろさをさらけ出すなど、昔には考えられないような遭難も起こったようです。それでも山の中でまだ焚火ができるという、本州では考えられないようなところ、何というか、まあメルヘンのものが残っているというのが山岳部の状態ではないかと思うのです。未知の部分がなくなり、ロマン性を求めるにしても、もう予測ができるようになって、山登りの方法論や、あとアカデミック性に徹するしかなかったんですね。では私らの時代から、現役の時代へとつないでいきます。

伏島 現在の山岳部に視点を移して行きたいと思いま

す。今の人達にとって山登りがある種の難かしい時代に来ている。で、それは一つの平和な時代、学生紛争があり、経済生活の派手な面、若者文化的なものが主流にあると思わんですが、その中でやはり北大の伝統的ロマンティズムは生きていますし、北大山岳部の伝統とは何かという意識が部の中にあり、総じて、模索の時代が続いているといえると思います。その模索の中から、この次にお話しして頂く越前谷さんの「現役で行ったマッキンレーの登山」が生まれて来るのですが、これからの展望ということとは現役の皆さんに語ってもらうことにして、その前に昭和四十七年頃からの山岳部の動きというものをお話します。

昭和四十七年にはリクマンベツの冬期合宿をやって、これは下沢さんのお話にもありましたように、組織論の議論の中から出て来たものでしたが、その夏にマッキンレーの登頂に成功しました。四十九年春に北アルプスで雪崩の事故がありまして、これは幸い無事でしたが、あの後で雪崩研究会というのが発足しまして、これはルームとしてのアカデミック性ということでした。それからトリスルの遠征、五十年に入りますと、ルームの移転というようなこと、そしてこの冬は凌雲の北尾根で凍傷といった小さな事故があり、五十一年初冬にも旭岳で下山中、一名が行方不明になるといった事件が起こり、幸いこれも無事だったのです

が、小さな遭難が続きまして、ルームとしてもメルクマー
ルになるようなものを見つけ難い時代だと思えます。

越前谷 最近十年間のいわば困難な時代は、私達にとつ
てみれば、逆に夢を語ることなしには生きて行けない時代
だったともいえます。マッキンレーを打ち出したのは、そ
ういう状況での夢を現実化しようとする、一つの試みであ
ったわけです。何故にマッキンレーを選んだかということ
は、報告書の中にも書きましたが、日高の開拓は終わって
しまい、道内の登山界の状況も昔とは変わり、ルームの記
録だけが日高の唯一の記録である時代ではなくなりまし
た。そういう状況に育った私達には既にノイエスは残って
はいなかったわけです。北大山岳部を育むために一番重要
であった日高という聖域は、ある意味で失なわれてしまっ
ていたということです。さらにAACHの歴史の流れの中
のヒマラヤへ向う意志というものは、脈々として承継が
れてきており、近年にも多くの計画が提出されてはいたの
ですが、殆んどが途中で挫折してしまっていました。そこ
で私達は私達なりに、ルームでもできる所をということで
マッキンレーを考えたわけです。結果としては新しい聖域
のある形を見出し得たということでは満足していません。で、
さらに次の新しい夢ヒマラヤへということでもトリスルに参
加しましたが、不本意な点が多く、未だに断腸の思いを捨

て切れないのですが、結果は失敗に終わったわけです。ト
リスルの計画は、ある意味ではクラシックな形式のもので、
今の社会人山岳会のヒマラヤ登山のように、自己資金で小
人数でゆく機動力に富んだ登り方とは違っていたと思いま
す。今の社会人山岳会の登り方だけがよいとは決して思っ
ていないのですが、これからの大学山岳部のヒマラヤ登山
も社会人山岳会の良いところを取り入れて新しいパターン
を求めていくことは重要だと思えます。

北村 ルームの現状は、まず昔からの伝統はかなり濃く
残っているといえますが、日本には未知の所が殆んどなく、
山の記録は北大だけではなしに、社会人の山岳団体からも
沢山出されている状態の中で、僕達は、夏は日高の沢に行
き、また本州へも登りに行っています。冬も未登の山が無
くなってしまっていますが、個人山行という形で稜線を歩
いています。昭和四十九年から五十一年にかけて、雪崩と
か凍傷とか遭難が続ぎ、一歩間違えば死者を出すようなこ
とがあって、自分達の力がどの位あるのか、それを部員相
互にどの位わかっていのかという話を話合っています。
これからはその小さいミスをなくすようにしたいと思
います。今はルーム全体でやるうとする展望が殆んどな
く、先鋭的な人間もいることはいらんですけれど、一方
山を楽しむという者もいて、この点かなり幅広い山登りを

していると思います。

八木 現在入っている山岳部で最初に教えられたのは、「とにかく原始の心を持って」ということだったんですが、今迄お話を伺ってきて、今と違うなと思ったのは、今僕達が山に行くとは何処でももう既に誰かが登っているということなんです。今は別に缶やビニールの袋が落ちていなくてもやはり未知の感じはない。やはり昔とは違うんだなと思うと、何か悲しい思いがします。今はそういう時代だと思いません。この頃、簡単な事故が起きて、伝統の継承がないといわれているけれども、それは目標がないからです。捜せばあるはずですけども、たとえば雪崩の研究などをしていても、別に山に挑戦するわけでもないし、パッとしませんでした。そう僕なんか思ったわけですけども、これからはもっと外に目を向けてもいいから目標を持ってやってみたいと思っています。

朝比奈 皆さん非常に熱心に語って頂いて有難うございました。皆さんの話を聞いていて長髪さんが感じられたことを一言語って頂きます。

中野 長い間いい話をして頂いて、創立時代から現在までの部の雰囲気の流れというものがよくわかりました。渡辺興亜君の頃から現在の越前谷君の話を聞いていますと、ノイエスとか神秘性がないし、もう何か絶望的といえます

か、山に登る気もしないというような雰囲気を感じまして、「皆さん絶対にそんなことはない。」という事を私はいたいんです。大学四年や五年で一流のハストンやブルヤスコットのようになれるわけがないんです。「希望を持って下さい」とアクティヴな人々にはいうのですが、八千米峰に酸素吸入器なしで登るといのが、人類最高の理想です。それを大学四年間でやろうというのは土台無理なんです。ハストンでもメスナーでも十年以上の訓練をしているんです。さ迷うのが好きな人はそれでいいんです。人が行こうが山の美しさはそんなことでは変わらないんです。

それから最近、零下十度でオーバーシュエズを穿いたりしている人がいますが、あれは全然だめです(笑)。零下二十度位迄は軍手で行くようではなくては……(笑)。ヒマラヤで八千米に耐えるには寒冷馴化ということが一番なんです。これは生理学的に寒さと高所での酸素欠乏とは非常に似た現象ですから、寒さに徹底的に慣れることが大切です。零下三十度でもシュラーフザックに潜り込んだりせず、首を出していきなくちゃ駄目です(笑)。私は高所登山の研究の本を読んで調べているのですが、どれも結論をはっきり下すことをしていません。しかし根本は訓練した人間と、していない人間の疲労した時の余力の差が高度馴化の差になるんです。スウィン・ヘディンや植村直巳君もちゃ

んといっているんです。だから皆さんも一日中ラッセルをする訓練をして、社会人になってもヒマラヤの八千米峰を酸素なしで登りに行くということを最終の夢として、望みとして希望としてもって山登りをしてほしいと思います。決して絶望しないで頂きたいというのが、私の希望です。

朝比奈 それでは、これで座談会を終わることにしたいと思います。この機会に何か一言という方がおられましたらどうぞ。

有馬 実は私、四年程部長をやっていますので皆さんにお話ししたいと思えます。

今現役の方から話が出るんだろうと思っていたんですが、出なかったものですか、ちょっとがっかりしているんですが(笑)、実はただ今絶望的のような話でありましたが、現在カラコルムに行くという話が出ておりました、山の会のヒマラヤ委員会からも承認されております。そういう気運もルームにあるということを報告しておきます。

朝比奈 どうもありがとうございました。

(昭和五二年九月一七日 札幌豊平館にて)

冬のペテガリ岳

——初登頂まで——

林 和 夫

ペテガリ岳は中部日高山脈の国境線上にある一七三六・二メートルの頂きである。北海道にあっても決して高いとは言えないこの山が有名になったのは何故であろうか。それは一つは冬山としては勿論、夏の頂きも容易に登山者を近づけない遙かなる山であったからであろう。地形の急峻、藪のひどいこと、この頂きに発して十勝側に注ぐヤオロマップ川、ポシヤオロマップ川、中の川、日高側に注ぐサツシビチャリ川、ペテガリ川などの廻行が著しく困難なため夏も冬も非常に近づき難い山であった。理由の第二は、昭和十五年一月、その頂きを目指した北大山岳部員一〇名の中八名が、コイカクシュサツナイの渓谷において雪崩に遭い若き生命を失った一大事故であり、その第三は昭和二十三年一月、村木氏を隊長とする早大山岳部が、大がかりな極地法により、ペテガリの東側の長大な尾根伝いに冬の第二登を果したことが挙げられる。

夏の初登頂は、昭和七年八月慶応大学山岳部の斎藤貞一、渡辺英次郎、人夫二名の隊によって果されている。同氏らは七月三〇日日高の歌笛を出発し、ケリマップ川からイベツに乗越し、メナシベツを廻行したが、増水に悩まされてやむなくコイカクシュとコイボクシュシビチャリの合流点から尾根に取付き、長い尾根を登って一八三九メートル峰に達し、ヤ

オロマップ岳、ルベツネ岳を経て出発後一〇日目、遂に目指すペテガリ頂上に立った。その時の喜びは次のように記されている。「百メートルばかり胸をついて登ると急に細く緩やかな山稜となる。これを過ぎ右側の草の斜面を馳けるように進むこと四、五丁、一段高く笠形の頂きが美しいお花畑に彩られて現われた。遂にペテガリ岳の頂上に立つ。この喜びを何にたとえようか。一同のやせ落ちた頬も、落窪んだ眼窩も歓喜の色に輝く。悦び胸に溢れて暫し一言も発し得ない。皆黙々と草の上に腰を下す。足下には可憐に咲いたミヤマキンバイの一群が微風に音もなく揺れている……。」（登高行九年より）。その後齋藤氏は第二次大戦で戦没されたが、渡辺氏には筆者は戦後、東京でたびたびお目にかかる機会があった。そして筆者らが昭和十年夏に一八三九メートル峰に登った折、尾根の上に同氏らの焚火の跡を見出した話をきっかけとして色々当時の様子を伺うことが出来た。その渡辺英次郎氏も昭和五十一年病没されて今は亡い。遠く本州から渡道され、未開の山々に足跡を残された先覚者達に対して心からの敬意を表したい。

その翌々年、昭和九年夏には北大山岳部の三隊が相次いでペテガリに登頂した。即ち中野、相川はコイカクシュサツナイ岳より国境線を南下して頂上に達し、中の川を下り、石橋（恭）、三宅と人夫一名は中野達と逆コースから登頂し、豊田、杉はオロマップ川に入り、ルベツネ岳の肩より派生する尾根に取ついで国境線に出、ペテガリを往復して札内川に下った。その後、冬の初登頂までに四隊がそれぞれ新たなルートによってペテガリに登頂している。

ここで筆を転じて、その当時のわが国の社会、札幌の様相や山岳部の様子などについてふれてみたい。筆者が北大予科に入り、同時に山岳部に入ったのは昭和九年春である。それからの六年間の学生生活は、その後の職業、ものの考え方、山登りなど、自分の生涯にかかわる大きな影響を与える充実した時期であったのだが、当時はそんなことは深く考えず、のんびり過したものである。

大都会では自由を謳歌し、爛熟と退廃の華が咲く反面、農村は疲弊と窮乏に苦しむ矛盾と破綻の時代でもあった。その不満の捌け口を海外進出に求め、軍部が次第に力を得て、やがて第二次大戦に突入する前ぶれの時代でもあった。昭和十一年冬には世に言う二・二六事件が勃発し、多くの軍幹部や政治家が暗殺された。その朝、月寒連隊グンタウの青年将校に引

率された兵隊が北大構内を馳け抜けて示威運動をしたものである。これに対して予科英語教師の高杉栄次郎先生が、ファシズムの台頭を嘆き、自由の尊さを説いて各教室を廻られたのが、今もって残る鮮明な印象である。しかしその様なことはあっても、筆者の卒業した昭和十五年頃までは、札幌の街にも、北大にも、リベラルの気風は強く、楽しい学生生活を過すことができた。仲間と新緑の石狩川でボートを漕いだ日のこと。小樽高商（今の小樽商大）との野球定期戦の応援に血を湧かした想出。文学、音楽、美術などの美しさに目を開いてくれたよい環境。当時の学生生活はまだまだ恵まれたものであったと言えよう。

ここで当時の山岳部の様子についてふれてみよう。筆者の入った当時の山岳部は、創立十年に満たない若い部であったが、スキー部時代からの実質的歴史は既に長く、部員も多かった。老学生の中野チヨハツ、金光、相川、豊田、伊藤（紀）など頼もしい上級生を中心に、楽しい中にもびりっとした雰囲気があった。また教授陣には、枋内先生、山崎先生、鈴木先生、犬飼先生、原田先生、渡辺（千尚）先生などまことに多士済々、ミーティングにもよく出て下さり賑やかなものであった。また米國留学を終えた伊藤秀五郎先輩を畏敬の念をもってお迎えしたのもこの頃である。

創立当初の部員の多くが本州出身の良家の子弟であり、音楽など愛好の教養人が多かったのが、次第に道産子部員が増え、野性味を増して来たとも言えよう。まだ道内に未知のルートや冬期の未登峰も残っており、ヒマラヤへの夢も混えて先抔りの明るい気風があった。

登山の実力としては、道も小屋もない未知のルートを探索し、小人数で次々とテントを移動して進む縦走形式によって鍛えられた粘り強い力があつた。また厳しい北海道の寒さと雪に耐えて次々と未登峰を落して行く逞しさは持っていたが、雪崩に対する研究が不十分だったことも事実である。このことは後に北大山岳部が繰返し痛烈な打撃を蒙る原因となつた。

その第一は昭和十三年十二月の十勝合宿を機として起つた。同月二七日、上ホロカメットクからD・Zへと山稜を降りつつあつた湊正雄をリーダーとする隊が厚板状雪崩（所謂底雪崩）に遭い、瀬戸三郎、高田徳の二名が若い生命を失つた

のである。この事件は、筆者が昭和九年部に入った時、上級生が「北大山岳部は創立以来遭難事故を起していない」と語っていたいわば部の誇りとする伝統の如きものを無残にも打ち壊わす結果となった。瀬戸・高田の雪崩による事故死はやがてわが山岳部に次々と起ったアクシデントの幕開けとなったと言ってもよい。

さて以上述べた様な社会環境と部の状況の中で何故冬のペテガリ頂上に立つことが熱望されたかについて考えてみたい。第一には原始性を保って来た北海道の山も、この頃になると殆どの頂きが、少くとも夏には登られていた。そうして冬の未登頂の山としては、中部日高から南部にかけてペテガリ岳、イドンナップ岳、中の岳、神威岳、ソエマツ岳、ピリカヌプリなどを挙げ得るが、これらの未登降の中でも最もアプロチが長く、最も難しく、それだけに魅力の大きい山がペテガリであった。第二には当時の日本の岳人の間に、ヒマラヤの頂きに立ってみたいという熱望が、深く沈潜している夢から現実性をもったプランとして燃え上り始めた状況とのかかわり合いが考えられる。ヤングハズバンドやラットレッヂのヒマラヤ行が優れた翻譯で紹介され、さらにドイツのクライマー達のカンチェンジュンガやナンガパルバットでの尖鋭的登山が紹介されて若者の血をかき立てた。加えて昭和十一年立教隊のナンダゴット登頂成功の報は日本の登山界を強く刺激した。古い歴史のある学校山岳部がヒマラヤ行を種々計画していた時、それに先馳けて比較的歴史の浅い立教の人達が堀田弥一氏を隊長に、少数の精鋭を集め、手頃な目標をガルワルに見出し、これに成功した手際は見事なものであった（そしてこれが日本人による戦前唯一のヒマラヤ登頂となった）。

北大山岳部でも、毎晩のように集ってはその可能性と、どこから手をつけるべきかについて熱心な討議がなされた。その中で、もっと冬山の実力を高めようとの気運が盛り上ったのは当然の成り行きであった。そしてその練磨の場としてペテガリ岳へのルートが選ばれたのが一つの動機であったと考えられる。

ところで既に冬のペテガリ行のプランは、慶大による夏の登頂前から立てられ始め、実行に移されていたのである。勿論それらは従来からとられて来た少数精鋭による登山の形式で繰返し試みられた。昭和七年三月、坂本直行、相川修の二人は、中の川をつめてペテガリを目指したが川が悪くて失敗した。続いて昭和九年三月、豊田春満、伊藤紀克、西村正の

隊は、コイカクシュサツナイ川のBCからコイカクシュサツナイ岳、ヤオロマツプ岳を経て一八三九メートル峰の冬の初登頂には成功したが、あわよくばと狙ったペテガリ岳には全く手が届かず、その後BCを撤収し、転じて札内川本流をつめ、その上流の山々を登った。

昭和十一年三月、西村正、林和夫の隊は主目的にペテガリを選んだ最初の隊と言えよう。豊田隊と同一コースを選び、BCから上はヤオロマツプ岳付近に前進キャンプを設け、そこから頂上を往復する計画であった。しかし二つのキャンプを設けるための装備と二週間分の食糧は各自に猛烈な重荷を強いる結果となり行動は鈍った。中間キャンプを経てBCを張り終えた後、左股中程まで偵察したが、その夜日高の春にしばしば襲う大暴風雪に叩かれて退却することになった。この山行によって、冬のペテガリは、もはやこのような少数人数による登山形式の対象ではないことを思い知らされたのである。

右のような歴史を背景とし、当時の山岳部の力を結集して大規模な計画がスタートしたのは昭和十一年の夏であった。実際の計画と行動に参加したのは殆んど全員が予科三年生であった。極地法による隊の運行の研究、装備や食糧の工夫等、着々と準備が進んだ。葛西晴雄を隊長とする総員一名を次の四班に分けた。A班（登頂班）葛西晴雄、中野龍雄、林和夫、B班 岡彦一、及川盛也、坂本直行（OB）、C班 有馬洋、福地宏平、駒沢欣一、D班 星野昌平、橋本誠二 昭和十二年一月二七日行動開始、ルートは豊田隊、西村隊と同様コイカクシュサツナイ川奥二股にBCを設営、コイカクシュサツナイ岳頂上にC₁、ヤオロマツプ岳を越した地点にC₂を設け、ここからペテガリを往復する計画であった。C₁用には大型カマボコ型テント、C₂用には底が将棋の駒形をした耐風性のテントを製作し、出発前に十勝の合宿で十分性能を確かめたのである。登山の行程はかなり順調に捗り、BC、C₁を設営し、二月一日にはC₂を張り終えて攻撃態勢は全く整った。しかしこの夜から天候が崩れ始めた。それでも翌二日A班は一五九九メートル峰迄往復して偵察を行った。その夜猛烈な暴風雪となり各キャンプとも危険に曝された。C₂は雪に埋没、事実上のBCとなるべきC₁のカマボコ型テントでは真夜中に靴にアイゼンをつけたままポールを支えていても、ガバガバと底から持ち上げられる程の強風と吹雪で、明方に

はポールは折れ、布地は裂けて滲漚たる有様であった。もはやこれ以上尾根に止まることは許されず涙を飲んで退却した。

失敗の直接の原因はこの猛烈な暴風雪に耐えるだけの高所露営の研究不足にあった。なおまた隊員の殆ど全てが予科生であったこともこの隊の精神面の脆さを暴露することになったと言えよう。しかしこの失敗にも拘わらず、装備その他技術的点から精神的問題に至る迄、部として得たところは大きかった。

この山行は北大山岳部にとって、かつて徳永（正）隊が昭和九年一月にユニ石狩川―石狩岳で行った大規模な極地法登山を初めて尾根上に発展させたものであり、また厳冬期の本格的な高所露営の先がけとなり、さらに冬のベテガリに対する執念の火を一層強めるきっかけとなったのである。

昭和十四年一月、二つの隊がベテガリを目指して計画されたが、出発直前に前述した十勝の合宿での遭難事故のため中止となった。しかし一貫したベテガリ登攀史として見た時、この二つの計画は方法的にそれなりの意味をもつと思われるので以下略記したい。

一、登頂隊 葛西晴雄、有馬洋、中野龍雄、林和夫、支援隊 星野昌平、住宮省三、新美長夫、浅野芳彦

当時の部の実力から考えて再度大がかりな極地法をとることも可能であったが、一つの試みとして背後の守りを厚くし、安全感をもって登攀を進めて行くという極地法の目的とするところを汲みつつも、外観は小じんまりとした隊を組織した。ルートは前回と同様コイカクシュサツナイ川から国境尾根を南下してベテガリを目指し、尾根上を往復するものであった。この場合、コイカクシュサツナイ川のBCとコイカクシュサツナイ岳に設営するC₁との間が遠く、C₁が事実上の根拠地となるため、これを強固な長期間に耐え得るものとしたのち、支援隊は完全にBCからも撤収してしまい、一方登頂隊は天候を見きわめて適当な位置に一つの中間キャンプを設け、そこからベテガリを往復する計画であった。C₁には修理して丈夫にしたカマボコ型テントを用い、その後の研究からテントの壁面に密接して雪の防風壁をつくり補強するつもりであった。

二、橋本誠二、羽田喜久男、清水誠吉、片山純吉、渡辺盛達、近藤達

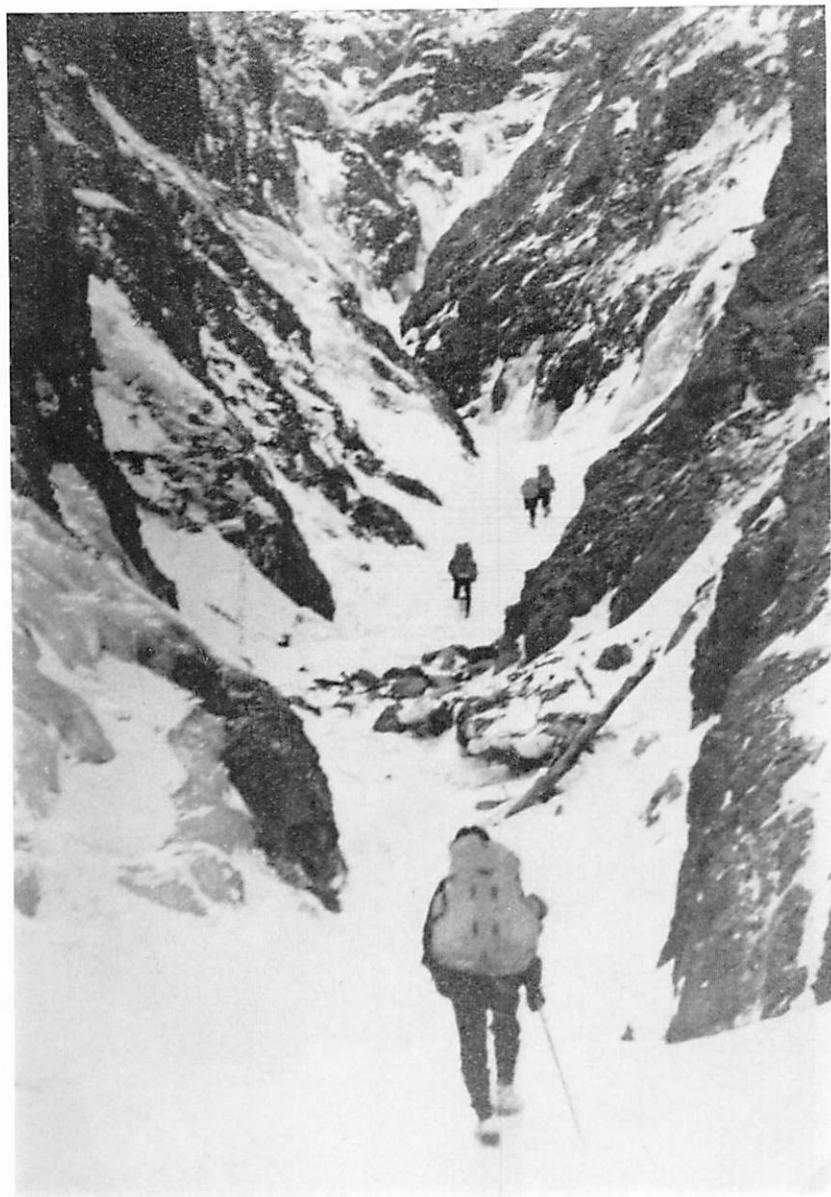
この隊は中の川を遡行し、出来れば谷のどんづまりのキャンプから一気に頂上を狙う予定であった。

昭和十四年暮から正月にかけて、再び極地法による登山が計画され実行されていた。メンバーは前回の山行に加わった葛西、有馬、橋本らを含めた一〇名で、三班に分けた。A班(登頂班)葛西晴雄、清水誠吉、近藤達、B班 有馬洋、戸倉源次郎、片山純吉、橋本誠二、C班 内田武彦、羽田喜久雄、渡辺盛達

この当時北大山岳部は極めて充実した状態にあり、大がかりな極地法をもう一度同じルートで、しかも今度こそ完全に近い形で駆使し、ペテガリ山頂を極めようという計画であった。葛西と有馬は学部三年、内田、戸倉は学部二年、それ以外の六名は何れも学部一年で個人的力量もかなりのレベルに達していたし、また相互間の気持のつながりという点でも全く間然するところがなかった。

昭和十四年暮も押し迫って行動は開始された。三年前のペテガリ行と全く同一のコースをとり、コイカクシュサツナイ川にBCを建設した。一月五日、静かに雪の降るうちに夜が明けた。風邪気のためBCに残る橋本を除く全員はコイカク頂上にC₁を設営すべく出発した。コイカクシュの沢の状態は三年前と違って前夜の積雪がかなりあった。交替でラッセルを繰返し、左股の標高一三〇〇メートル付近を登高中、国境線近くに発生したと思われる乾燥新雪雪崩は一瞬にして九名を呑んで了った。奇蹟的に一番遠くまで押し流された内田だけが生命を拾ったが、八名は遂に還らず、北大山岳部としてはもとより、わが国登山史上最大のアクシデントとなった。負傷した内田の沈着さと、彼を労わりつつ橋本のとった正しい処置は、この後の搜索隊の行動を極めて有利に導いた。五日の遭難が麓に知れたのが九日、搜索隊が現場に到着したのが一二日であった。連日の厳しい寒気に悩まされたが、搜索隊は七名の遺骸を発掘し得た。唯一人戸倉の遺体はこの年六月に雪融けを待って発見された。

この遭難に関する反省は、本誌の別の章でなされるのでそれに譲るが、過去において数隊が無事故の中にコイカクシュ



厳冬期のコイカクシュサツナイ川上流

一 彦 岡 小 澤 隆 夫 上 の 線 路 上 の キ ャ ン プ 場







石狩川にて

橋本誠二

の沢の中を登り降りしたことは、この沢が常に安全であるとの保証にはならず、逆に状況の判断を誤らせたと言えるのではなからうか。

この遭難で亡くなった八名が部の中心的存在であっただけに山岳部にとっては壊滅的打撃となった。筆者はその後始末もそこそこに、全く打ちのめされ失意の中にこの年三月に学窓を去った。

しかしその後も弱体化したとは言え、山岳部の若者達は、しかも時局が第二次大戦に突入しつつあり、諸事不如意となった状況下で、なおもペテガリ冬期登頂を志し、執拗な努力を続けて行った。

まず昭和十六年三月下旬、朝比奈英三、橋本誠二の隊は、前回と同じくコイカクシュサツナイ川をつめ、雪崩を避けて左股の右手の尾根（先輩中野征紀の発見を記念して通称長髪ルートと呼ぶ）を伝って稜線に出た。ここに特記すべきは荷を軽くすることと安全性を高めるため、高所露営には二カ所とも雪洞を用いたことである。三月三〇日にはコイカク頂上直下にC₁の雪洞を、四月二日にはヤオロマップ東側の鞍部にC₂の雪洞をつくることが出来た。三日はひどい強風をついてルベツネ岳まで達した（積雪期初登頂）が、悪天候のためペテガリには達することが出来ず引返した。

同年四月下旬、今村昌耕、住宮省三の隊は、朝比奈、橋本らと同じルートでペテガリに向った。露営には全て雪洞を用い、五月四日午前五時ヤオロマップ岳東側のC₂を出発、同九時五五分ペテガリ山頂に立つことに成功した。厳冬期と比すべくもないが、とも角積雪期にペテガリ登頂をなし終えたのであった。なおまたこの山行は来るべき冬の計画への偵察として意味をもつものであった。

昭和十六年十二月、太平洋戦争が始り、国民生活の様相が大きく変わり、学生生活、山岳部の活動ともに著るしく制約を受けるようになった。そのような中でおもペテガリ岳を目指す山岳部員の努力は続き、昭和十八年一月、事実上これが戦中最後という登行が成功裡になされたのであった。

昭和十七年暮に行動開始、メンバーは登頂隊 今村昌耕、佐藤弘、サポート隊 渡辺良一、上杉寿彦、荘田幹夫。ルートは従来と同じ。登山方法としては、人数は少いがサポート隊により相当長期間の山行に耐えうる極地法を採った。特記

すべきはこの山行に初めて高所露営にイグルーを用いたことである。イグルーは当時部の若手OB橋本誠二らが札幌近郊の山で作り方を研究し、次第に実用に供せられていたのであった。(なお当時北大医学部に留学中のイタリーの登山家フオスコ・マラーニも相前後してイグルーの作り方を世に紹介したが、その形式・技術は部のそれとはやや異なるものであった)。

以下この隊の登行記録を記しておこう。

昭和十七年十二月三十一日南札内小学校泊、十八年一月一日(晴)小学校を出て一隊はトムラウシ合流点に中継キャンプを設け、他はコイカクシユサツナイ合流迄ラッセルし、涸沢出合の造材飯場に戻って宿泊。

二日(晴)飯場発(七・〇〇)―BC着(二五・一五)、二週間以上頑張るべく完全なBCを設営す。

三日(晴後曇)BC発(八・二〇)―長髪尾根取付シーデポー(九・一〇)―コイカクシユサツナイ岳頂上(一四・三〇)、直ちにイグルー建設にかかり一時間半で完成、登頂隊を残しサポート隊は下る、BC着(一七・三〇)

なお最初の計画では一日目コイカク頂上迄ラッセルに費し、二日目にC₁を作る予定であったが、天気良く雪のしまり方も申し分なかったので全員奮闘して一日でC₁を設営し得たのであった。

四日(曇)イグルー発(一一・〇五)―ヤオロマップ岳(一二・二〇)―一五九九メートル峰への最低鞍部より少し上の地点(一二・四五―一三・一〇)―イグルー帰着(一四・三五)

この日半日を偵察に費した。そして慎重に状況判断した結果、ヤオロマップを越した最低鞍部にC₂を設ける最初の計画を変更し、C₁からベテガリ頂上を一気にラッシュして往復することとした。即ち天候がこの時点では安定していたが間もなく崩れることが予想されたこと、雪の状態が良いこと、登頂隊員が二人ともベストコンディションの体調であることを考えた上での決定であった。なお佐藤は昭和十五年三月、ベテガリ隊遭難第二次搜索の折と今回一月四日の偵察によりヤオロマップ迄二回尾根上を歩いており、また今村は昭和十六年五月、ベテガリ頂上迄国境稜線を往復した経験もち、二人ともコイカクからベテガリをアタックする際、夜歩かねばならない部分を知っていることなど考え合せ、今の好天の一日

をC₂建設に用いるよりは一気に頂上往復を決行しようと思を決めたのであった。なお、この日サポート隊の荘田は、前日荷上げの際ちょっとした油断から耳を凍傷したのが鶏卵大の水疱となったため、応急手当をして下山の止むなきに至った。

五日(快晴) イグルー発(三・二五)―ヤオロマップ(四・四五)―一五九九(七・〇〇)―七・二五―ルベツネ(九・三二)―ペテガリ(一一・一〇)―一・二五―ルベツネ(一三・一五)―ヤオロマップ(一七・〇〇)―イグルー(一八・三〇)

イグルーを出ると満天の美しい星。風も強くない。懐中電灯の光で前日のアイゼンの跡を辿りながら進む。一五九九メートル峰の登りにかかる頃から夜が白み、山々は金色に光り輝いて美しい。天気はますます定って来た。午前十一時遂にペテガリの頂きに立つ。唯感無量。寒さと長い帰路を考え一五分で退去。ペテガリとルベツネの間にあるカール上部の最低鞍部で初めて落着いて三回目の食事をとり、今日がああ悲しむべき一月五日の記念日であることや、その当時の憶出など言葉少く語り合い亡き八名の友の霊よ安かれと祈った。ヤオロマップを越す頃から再び懐中電灯で夜道を照らす。コイカクシュサツナイの最後の登りがひどく長く思われたが、漸くイグルー帰着。軽い食事をとって寝た。かくして皆があれ程念願した日は、大自然の峻厳な美しさの中を長時間にわたり、しかも全き安全感をもって行動する中に終えたのである。

六日(晴後曇) サポート隊の渡辺と上杉BC発(七・一〇)―シーデポー(七・四〇)―C₁着(一一・〇〇)
サポート隊はかなり下からエホーを交わす中、今村、佐藤らの登頂成功を知る。感激一入なり。イグルーに入って喜びの食事を共にす。サポート隊と交替して今村、佐藤はBCに下る(一三・三〇)。天候が崩れ始めたようなので渡辺、上杉も明朝下ることにし、この日午後ヤオロマップ迄往復した。

七日(晴) 天気は意外にもまた晴。上杉は膝関節を痛めて午前中休養。渡辺は単独で一八二三メートル峰に登りイグルー帰着(一三・四〇)。直ちに荷を纏め住み慣れたイグルーに思いを残しつつBC目指して一気に駆け降りた。

夜、ご馳走としては何もないが、大きな焚火の周りで質素な食事をとれば、火の粉は白樺の梢を赤く染め、腹の底まで安心と暖かさが込み込む。

八日（晴）山を下る日、BC発（九・二〇）―南札内小学校（一八・〇〇）

男沢先生ご一家はこの成功を心から喜んで下さり、いつもと変わらず厚いおもてなしを受けた。

かくして昭和十八年一月の山行をもってペテガリの冬期登頂は幕を閉じた。初めから登頂迄に約一〇年の歳月が流れ、八名が雪崩に斃れ、さらにこの登攀に力を尽した仲間の中、中野竜雄、星野昌平、住宮省三の三名が南の戦野に逝き、再び愛する祖国の山河に見ゆることの出来なかったのも、人の世の移り変りの激しかったことを物語る。

冬のペテガリ岳は日本に最後まで残った処女峰であり、遙かなる、美しい、近づき難い頂であったが、これに登れたことが当時の日本登山界に何ほどプラスするものを残し得たであろうか。恐らく当時は既に戦況も悪く、この登山の成功は殆んど世に知られることはなかったのではなからうか。しかし少くとも北大山岳部においてはこの登頂の意義は決して小さなものではなかった。その間の部の試みた山行はむしろ失敗の連続だったかも知れない。しかしそれはささやかな山岳部が、世の移り変わりの中にあって、一つのを憧れる熱情を受け継ぎ続け、前を歩んだ者の失敗を反省しては小さなケルンを積み重ねて行き、祖国の行手がかなり不安な様相を示し、登山などというものが一般には全く省みられなくなっても、なお許される範囲で懸命な努力を尽し、漸くにしてその長い夢を実現した部としての貴重な経験であった。冬のペテガリ登山の試行錯誤の一〇年間の歩みを通して、部員達が自分達の登山の方法について、雪崩について、高所露営の方法、その他多くのものを含む広い意味の登山技術について、さらに精神的な面にわたって学びとったものは決して少なかった。

冬期十勝岳・大雪山縦走

木崎 甲子郎

一、そこに至るまで

戦後、幌尻岳の冬期第二登頂にはじまった北大山岳部の日高山脈への情熱は、滑岩岳（昭和二十三年）、イドンナップ（同年）の冬期初登頂、札内岳よりカムイエクウチカウシ山へ国境稜線を長駆南下する新ルート（二十四年）の開発をもたらした。二十五年冬、現役部員一二人によって、極地法によりコイカクシュ札内岳より国境線を北上してカムイエクウチカウシ山への新ルート開発および一八三九米峰への完登が成功に終わったとき、部の雰囲気はひとつの頂点に達していたと考えられる。しかし、この時われわれはすでに生れつつあった部の沈滞を予感していた。しかも、新制大学への切替えにともなう年限短縮に対する不安を、昭和二十五年度の冬山の低調な現実によって、いやおうなしに思い知らされたのだった。

ここで何らかの対応策がとられないかぎり、部の前進は望めないことを痛感したわれわれは、旧制最後の部員が主体となり、新制の教養部在籍部員の訓練を兼ねて、ひとつの大きな山行を考えていた。その対象としては、日高山脈の唯一の未登頂の山である中ノ岳があげられたが、山そのものに魅力がない。また、日教や経費の問題も考慮に入れなければならぬ。そこで新しく十勝岳・大雪山縦走がとりあげられ検討された。日高山脈の屹立する稜線にたいして、大雪山群の、極地をほうふつさせる高原の魅力はわれわれの心を把えた。たとえ、山らしい山がないという理由で不満を感じた者がい

たととしても、千八百米を前後する広茫としたいくつかの高原を、その処々にそびえるドーム群を越えていく八〇軒にわたるキャラバンの旅は魅力のあるものにならなかった。

北海道でもっとも大衆的な山のひとつである十勝大雪山系の厳冬期縦走が今日まで残されていたのは不思議なくらいである。昭和九年暮、吹上温泉を出発した石橋正夫、徳永正雄、伊藤周一の一行は美瑛岳、美瑛富士を巻いて美瑛川に下り、そこからトムラウシ山を往復し、尾根を越えて俵真布に下った記録がある。これが十勝からトムラウシ山を狙った最初だろう。昭和十年から十七年までの間、北大山岳部により二回、旭川山岳会によって前後七回もこの縦走が企てられたが、悪天候に災いされて、敗退を重ねてきた。戦後では、昭和二十五年春、部員森田寛が単独で、十五貫の荷を負い、十勝岳白銀荘を出て、雪眼に悩まされながら、トムラウシ山を越え化雲岩を巻いて松山温泉に下った苦闘は刮目に値するものであった。

このように、十数年の試みがすべて失敗に終わっている事實は、この行程が二週間程度を行動範囲とする小人数のパーティによる行動の限界を越えているために他ならないと考えた。したがって、今回の計画にあたってはサポートを用いる形式、つまり悪天候に耐えて長い日数を頑張るような態勢を整えなければならないことを強く感じたのである。

二、計画の概要

かくて、昭和二十六年度の冬山の目標として、十勝岳・大雪山縦走がとりあげられ、如何にして合理的かつ確実にこれを完成させるか、行動・装備・食糧・気象などの分担に応じて具体的に研究されはじめたのは九月になってからだった。

サポート方式については、ふつうに行われているような極地法では、十勝岳から八〇軒に余る縦走路と、隊員の数と実行動を一〇日として、四日に一日の行動可能日を想定し、撤収までの最大所要日数を考え合わせると、われわれにはいささか手に余るものがある。そこで、同一地点（白金温泉）から出発し、縦走班はどこまでも尾根すぢを忠実に歩き、これにたいするサポート班は、前半は側面からこれを援け、銀杏ヶ原で縦走班と合流し、以後は背後から援けていくという方

法をとった。この場合、もっとも懸念されるのは、縦走班とサポート班との連絡である。最初の子定では短波の無線電話が使用できるはずであったが、出発まぎわになって、ささいな手ちがいでもそれが不可能になったため、直接の連絡方法がなくなった。しかし、種々の条件を考えて、サポート班が縦走班の到着前にキャンプ予定地で待っていられるように、両班の出発時期を按配することにした。

縦走班は自分の天幕と五日分位の食糧は常に持って歩き、サポート班はそれ以外の食糧その他を補給するのであり、従って縦走班の荷物は最初のオプタテシケ山手前と、最後の忠別岳でサポート班と別れる時は、各自九貫以上になるという有様で、縦走班にひどく重みがかかってくるのであるが、計画の性質上致しかたのないことであった。さらに、縦走班が層雲峡温泉に到着した時の連絡については、黒岳まで迎えに登る班が欲しかったが、班員の不足のため不可能になり、電話で白金温泉に連絡し、出来れば、D班が撤収後層雲峡にまわることになっていたが、実際は、縦走班が白金温泉にやってきた。

行動は、十勝岳合宿の経験から、だいたい四日に一日の行動可能日を予想し、そのうえに立って食糧が計算された。したがって、縦走班およびA、B班の分は優に一カ月は暮せる量が上げられるはずになった。隊の構成はつぎの通りである。

縦 走 班

T班 野田四郎(旧二)、越野正(新三)、木村俊郎(新二)

サポ ー ト 班

A班 井上正惟(旧三)、白浜晴久(旧二)、有波敏明(旧二)

B班 木崎甲子郎(大学院、隊長) 早稲田収(新三)、野口裕(新三)

C班 杉野目浩(旧二)、岡本丈夫(新二)、森厚(新二)

D班 中村利一(旧二)、中島秀雄(新二)、石谷邦次(新二)、千葉幹雄(旧二)(中村と交代)

E班 山崎英雄(旧三)、網倉俊雄(旧三)、三尾龍民(旧二)

キャンプ予定地と、それに対する荷上げ量は次のごとくである。但し実際にはここに記したC₂とC₃の間にもう一つキャンプが作られたので、本文の中ではC₃以下の番号は一つづつ下っている。

C₁ 美英富士鞍部(ウインパー変形三人用)二十八貫

C₂ オプタテシケ山北方鞍部(同右)九貫

C₃ 銀杏ヶ原(カマボコ形六人用)百四貫

C₄ 化雲岳(ウインパー六人用)六十貫

C₅ 白雲岳(クレッパー変形三人用)三十貫

C_m 美英川中流中間キャンプ二百十貫

BC 美英川上流(家形四人用四張)百六十二貫

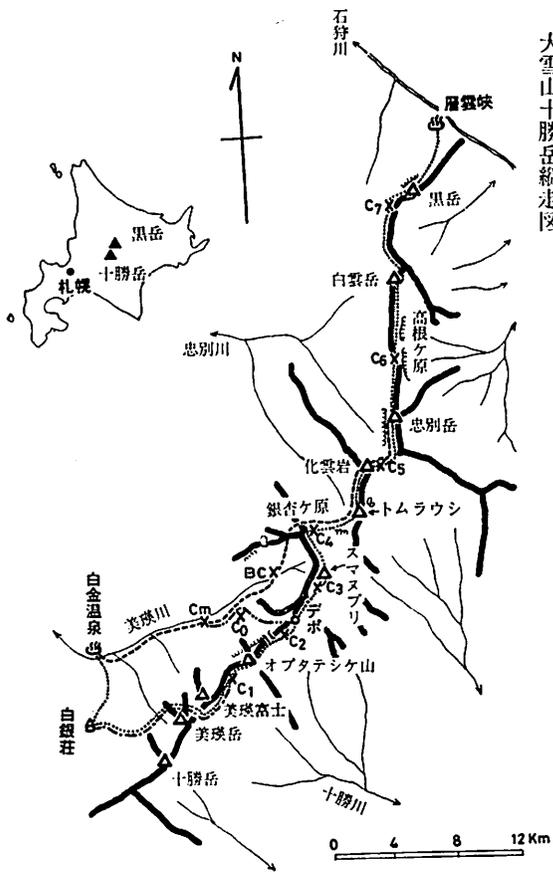
こうして、計画が進められている一方、資金の面に関しては、先輩の寄付、あるいは毎日新聞社の援助が本ぎまりになり、食糧、装備の購入、箱詰・梱包に忙しい毎日が過ぎていった。これよりさき、十一月末には木村、中島の両名が美英川より銀杏ヶ原に登ってC₃予定地の偵察を行い、また地元白金温泉との交渉もすみ、出発を待つばかりとなっていた。

三、行 動

昭和二十六年十二月二〇日 夜行にて桑園駅より出発、先発および合宿中のE班を除いて一三名。原田部長はじめ家人、先輩、僚友の見送りを受けて、新聞社のフラッシュの中に動き出す。常ならば、ひっそりと列車の片隅に乗りこむ仲間ではあるが、今宵ばかりは、何時になく紅潮した頬に夜風が冷い。

十二月二一日 晴 早朝、美英駅に降り立てば、先発の早稲田、野口が手を振って出迎える。手筈は整っている。役場で朝食をごちそうになり、バスで白金温泉に向う。ぎうぎう詰めこまれて、笹の葉のまばらに現われた雪面が走り去るのを見つめているだけの二時間半だった。

十二月二日 快晴 マイナス8℃ 川辺の宿からテレスの道に上って眺めると、十勝岳、美瑛岳、美瑛富士、オプタテシケ山の連山が、雄大な量感を示して眉を圧し、タンネの梢はるかに、目指すトムラウシ山が、あれと指させば、あつあれかと頷くほど小さく、純白に輝いている。遠いなあ、ふっと誰かがつぶやく。途中まで荷を運んでくれるはずの馬糞が遅れて、歩きはじめたのは昼近くだった。時たま樹間にちらりと白い肌を見せていたオプタテシケが全貌を現した時、ナイフでえぐったような鬘まげを見せてなぎ落ちるバットレス、いつも十勝岳の合宿で知っている美瑛岳あたりからはこうは見えず、新しい山を発見した喜びに胸がうずく。何時かまたこれにまみえる日もあろうと。中間キャンプ（C_m、以下キャンプ地は地図参照）に着いた頃は、すでに四時をまわっていた。ほんの木の燃えない焚火にむせながら夕飯を終ったのは八時頃だったろうか。A、B班は泊り、C、



D、T班は真暗の中を温泉に帰り着いた。
 十二月三日 曇後雪 軽く荷を持ってBC予定地へラッセルに出かける。やがてタンネの樹林もまばらに、凍りついた沢の中を雪まじりの風がまき上る。有波がスノーブリッジを渡りそこねて水に落ち、丸太棒のようなスキーをひきずっ

て、一人引返していった。BCまで行けず。大きなタンネの下に荷を置いて引返す。しんしんと降る雪の中、冬の日暮れは早い、とつぷりと闇につつまれたタンネの森の中に、ヘッドランプのちらちらする黄色い光だけが暖い。C、D、T班はC_mまで荷上げ、T班のみ温泉に帰る。

十二月二四日 小雪後暗 マイナス9℃ A、B、D班はBCへ荷上げ。平均八貫。新人のD班はどうしても遅れがちだ。BCは、広々とした谷間のタンネの疎林の一隅、晴れ上がった空の彼方には、真白な銀杏ヶ原の稜線が一直線に望まれる。夜は赫々と燃え上る焚火を囲んで濡れものを乾し、お茶を飲みながら、これからさきのことを語り合う。C班は、本流から途中で別れて、C_o予定地に荷上げをし、C_mへ帰ってくる。T班は白金温泉から白銀荘に登る。

十二月二五日

T、E班 風雪 マイナス13℃ 昨夜来の風がまだ強かったが、六時半ラテルネの光をたよりに出発する。泥流に出ると下から巻き上げてくる風は、息も詰まるばかりだ。行く程に風は益々強くなる。引返しに決し、荷をデポーして帰る。

A、B、D班 雪 風も無く、灰色の空からしんしんと雪が落ちてくる。昨夜の星空は、一夜のうちに五寸の新雪に変わってしまった。燃えない焚火に苦勞して雑炊を作り、C_mを撤収してベースキャンプに向う。昨日のシュプールはかすかに残っているだけであったが、ぐんぐん行程が捗る。途中でC班は、手を振って林の中に消えていった。ベースキャンプではタンネの大木の四本ばかり並んだ下に、焚火場を掘り、そのまわりを囲むように天幕がしっかりと吊下げられた。今日は明るいうちに飯が食えるぞとばかり、エゾ、トド、白樺などが切り倒され、たちまち薪の山が出来上る。二米も掘り下げられた焚火場の火のまわりで、ベースキャンプ完成の喜びが笑声となってひびきわたる。

C班 A、B、D班と別れて三時間あまり、標高千百米ばかりの地点、ひらけた沢にキャンプ(C_o)とする。薪は豊富、水も便利、「露營も楽し」である。

十二月二六日

T、E班 快晴 東の空が白む頃、出発する。昨日とはうって変り、美瑛岳を巻く頃は気温も上り、三月のような気分だ。吹き上る雪煙は逆光に輝き、美瑛岳の岩峰に七色の虹がかかる。国境稜線にぐんぐん登っていくと、大雪山群がはるかに雲海の上に顔を出し、一同奇声をあげて喜ぶ、美瑛富士が大きく眼前に迫ってきた。斜面はしだいにクラストし、這松についた巨大なエビノシッコに、スキーでは少し無理だったが、鞍部まで強引に登ってしまった。十二月末に、こんな天気にはそうざらに出会わずものではない。幸先よろし。昼食後E班は白金温泉へと下っていった。T班の荷物はぐっと重くなり、スキーをひきずってC₁予定地へと歩き続ける。

A、B班 快晴 今日こそは、この山行の重要地点銀杏ヶ原まで登れるとばかり張切る。太陽が輝き始めた。広い谷間は、深々と雪を冠ったタンネもまばらに、ラッセルも軽い。雪は結晶のひとつひとつがキラキラと宝石をまきちらしたようだ。メルヘンウィーゼならぬメルヘンタールの一時は過去未来を昇華した陶酔のそれだった。仰げば右手には、オプタテシケの連山が逆光に紫色に鈍く、左手は銀杏ヶ原に続く稜線と突几と聳えるかぶと岩が、銀白の岩肌を見せてのしかか。銀杏ヶ原への尾根を間違えて一時間ばかり無駄骨を折ったが、沢も狭まってくる頃、尾根にとりついた。急斜面をジグザグに切ってぐんぐん高度を高めていく、午後三時、尾根を登りつめた処で引返す。(標高千六百米)

D班 C_mを完全に撤収して、ベースキャンプに登ってきた。これで役者は揃った。

C班 晴後曇 国境上の鞍部に着いたのは午後二時、這松の雪面に箱を置き大きなテポール旗を立てる。この旗は小スマスプリの南斜面に約二〇米間隔に尾根を横断して一列に立てた四〇本の赤旗の末端に当る。いま、赤黄とあやしくも可憐にはためく旗を見、その旗竿を持ってきたわが肩をなでて、その効果の最大なるを願いつつスキーを返す。

十二月二七日

T班 薄曇後ガス 風はほとんど無く下は一面の雲海だ。荷はいっこうに軽くならず、スキーを後にひきずりながら一歩一歩オプタテシケに登っていく。心配した北東のリッチは風が無いために思ったより楽だった。ここから広い斜面を、地図と磁石をひきくらべて下って行くうちに雲海の中に入りこんでしまい、視界がきかず、C₂予定地を断念して天幕を

張る。

A、B、D班 曇時々小雪 マイナス21℃ ふたたび銀杏ヶ原へ荷上げに行く。天気はあまりよくないので昨日のデポで引返す。沢までは、岳樺のまばらな快適なゲレンデだ。自信のない者はシールをつけたまま、足に覚えのある者はシールをとって、スキーの雪を払い、てんでにクリスチャニア、ボーゲンと競ってすつとぼす。時には悲鳴とともに雪煙の中に姿を消すもの、その横を「お先に失礼」とニヤニヤしたのが軽く抜いていく。登りには重荷にひしがれて一時間も喘いだ尾根も、下りは一五分とかからなかった。

こうして一週間過ぎた。連日の荷上げで、ようやく皆に疲れが出てきたようだ。荷も半分以上は尾根に上っていることだし、ここらあたりでひと荒れきて、一日のうのと寝ていたいと思う気持が出てくるのも無理はない。しかし一日も早く、銀杏ヶ原のキャンプ(C₂)を設定しなければ、という焦り、T班がわれわれより早く来る筈はないと思いつつも、連絡のとれない今となつては、不安が消え去るわけもない。

C班 停滞休養

十二月二八日

T班 晴れたり曇ったり 小スマヌブリの手前で、真白な斜面にデポ旗が点々と並んでいるのを発見した。その旗を追っていくと、東側の鞍部で二箇の食糧箱を見つけたが、これ以上は持てないので、取りに帰ることにして進んだが、天気が次第に悪くなってきたので、まだ昼ではあったが、泊ることにして二人引返す。デポまで来ると、オプタテシケに登りに来たC班とぼつたり出会った。むしろに嬉しくて、ただ「御苦労さん御苦労さん」というだけだった。銀杏ヶ原のサポートが遅れているから、あまり無理をしないで、晴れた日を持って銀杏ヶ原に登った方がよいとのこと。話も尽きないが、遅くなるので、名残りを惜しみながらC班と別れてキャンプ地へと向う。

A、B、D班 曇ガス後風雪 五時頃外へ出て仰ぐと、満天の星だ。各天幕にぼうとローソクの火が点り、ラディウスの唸りが聞え始める。だが、夜が明けると共に、星はかくれ小雪がちらつきだした。しかし、雲は薄く青空がすいて見え

るようだし、西の空は青空が拡っている、天気予報では風雪特報が出ているので、しばしとまどったが出発に決定。A、B班は個人装備をまとめていよいよ銀杏ヶ原だ。千六百米のデポーから登るにつれて、風は漸く雪をとめない、灰色の雪原は皆目視界がきかず、処々にデポー旗を立てつつ、原の南端の崖沿いにシュカブラを踏んで東へ。途中D班を帰す。午後二時半頃、露岩のある小高い斜面を背にし、風を避けたやや吹き溜り気味のあたりにカマボコ型天幕を張る(C₄)。標高千八百米、予定地より少し手前らしい。風が一番気がかりだったので、充分掘り下げて、ブロックを天幕の高さまで積む。連日の強行に疲労困憊した一同は、雪を払って天幕に入るや、乾パンをかじって寝袋にもぐりこんでしまう。

十二月二十九日 風雪

T班 停滞 連日の行動にいささか消耗していたので、嬉しい停滞だ。一日中のんびり寝ている。

A、B班 停滞 ラジオの予報も、今日明日は悪いことを告げている。どうせ荒れるならかため一度に吹いてくれ、と寝て過す。風邪気味の者には注射を、消耗した者にはビタミン剤を打ったり飲んだりする。氣象通報で天気図をひいていた白浜が、よくなりそうもないとこぼしている。

D班 C班の二人がサポートを終えてやって来たが、焚火は燃えず、みじめな日を過す。焚火場を改造したが駄目、やつの思いで汁粉を作り、天幕にもぐりこんでしまう。

十二月三〇日 風雪

T班 停滞

A、B班 停滞 朝起きると真暗だ。天井が下って低い。調べてみると、四カ所も支柱が折れている。しまった。外へ出てみると見事に埋っている。壁が高過ぎたのだ。ブロックをかき落して雪を除ける。張綱を締め直すとかもちそう。午後、A班はD班の置いて帰った荷をとり出る。その間B班は食糧倉庫と便所になるイグルーを天幕にくっつけて作る。やがて吹雪の中らぼろっと黒い影のように三人が帰ってきた。イグルーの中で悠々とブラシを使って雪を払い、用を足して天幕にもぐりこむ。これで何日荒れても大丈夫と、気持も落着いた。夜は気分も明るく、庭師(農)、造材屋

(林)、救医者(医)、山師(鉱)などから駄じやれが乱れとび、にぎやかに暮れる。

D班 幸いにも吹雪。今日は焚火をあきらめて、寝て暮す。

十二月三十一日

T班 曇時々雪 今日あまり好い天気ではないので、いよいよここで年越しかと思われたが、ガスが晴れてきたので天幕をたたむ。スマヌプリを越えると、銀杏ヶ原は鞍部を隔てて真向いである。カンカンにクラストした斜面にシールのすり切れるのを気にしつつ鞍部に下り、銀杏ヶ原への登りにかかる。銀杏ヶ原の稜線に黒点が三つ、東に動いている。早速ヤッホーと呼びかけると、向うでも何やらどなっているらしい。どうやら荷上げに來たD班らしい。やがて向側に消えてしまった。銀杏ヶ原への最後の登りは、春には巨大な雪庇が出来ていると聞いていたが、案に相違して、雪が氷化しているだけで、あっけなく上に出てしまった。あとはD班のシュプールを辿るだけだ。キャンプでは、二十三日に別れて以來のなつかしい面々に迎えられて荷を下す。

A、B班 ガス後曇 今日は大晦日だから、そばのかわりのうどんをバクバク食おうということになり、どうせ暇をもて余している身のことだ。注文をとって、もりだのかけだのと酒落たのがまちがいのものもどだった。九時頃からかかって、うでたり、たれを作ったりしているうちに、眼が痛い、頭痛がすると言いだした。ラディウスのパッキングが悪くてガソリンが洩れていたらしい。そうこうしているうちに、一同心悸亢進がはなはだしく、ついにラディウスはイグルーに出し、ベンチレーターを全開し、換気に懸命になる。有波は状態もつと悪く、イグルーに這い出してしばらくは昏倒状態にあり、他の一番元気な者でも、頭を持ち上げると眼まいがして動悸が激しくなるほどであった。井上は自身真蒼になってふらふらしながらも、皆の瞳孔反射を調べ、脈搏をとってメモし、ビタカンファーを打つなどおおわらわだつたが、ついにのびてひっくりかえってしまった。チョコレートやウイスキーボンなどを配って、うつらうつらしている頃、井上がやにわに起きあがって、「ヤッホーが聞える、D班だ」と叫んだ。ぎょっとして彼の顔をのぞきこんだが正気らしい。きき耳を立てると、なるほどかすかではあるが聞える。あわてて外へ出ようとするが、凍ったオーバーシューズにはなかなか

か足が入らない。D班はもうキャンプの前まで来ていた。よろよろ這い出てくるA、B班の青ざめた顔は、さんさんD班のカモになってしまった。T班がやってくるのが見えたと言う。二時頃、銀杏ヶ原の一端にポツンポツンと点が三つ現れた。こちらにやってくるようだが、じれったいくらい近ずかない。D班はT班と入れかわりに、BCに引上げていった。久しぶりの邂逅に話題は尽きない。夜はT班をカマボコ天幕に招待して、大晦日の夜の大コンパは、チョコレート、羊かん、氷砂糖、キャラメル、蜜柑等々話とともに尽きず、果ては山の歌の大合唱に一九五一年も暮れていった。

昭和二十七年一月一日 風雪

A、B、T班 一九五二年は風と雪の中に明けた。這松の枝を立てた門松も吹きとばされ、ロビンソン風力計は凍りつたのか、一〇米位までしか針が動かない。入口に下げてあった温度計も割れてどこかへ飛んでしまった。

D班 朝ちょっとよかったが、朝食の終る頃から急にくずれてきた。いくら火を起しても、屋根にしたタンネの葉から滴が落ちるので、天幕にもぐりこんでトランプに過ごす。

一月二日 曇小雪

A、B、T班 A、B班は千六百米のデポーまで荷上げに下り、T班はカマボコとウィンバーの間のトンネルを完成させる。デポーでは、BC、から登ってきたD班に会い、荷は全部銀杏ヶ原のキャンプまで上げてしまう。二つの天幕の間のイグルーとトンネルは完成した。悠々と立って歩けるトンネルの壁際には、食糧箱がずらりと並べて積み上げられ、壁には、アイゼン、ワカン、ピッケルなどがつり下げられ、片隅は深く掘られて、ごみ捨て場と便所になっている。箱の一つに腰を下して煙草をくゆらしながら、豊富な食糧と、完成したイグルーを眺めては悦に入る。

一月三日 晴後ガス

A、B、T班 雲は高い。オプタテシケ山、旭岳も、陽がささないままにすっきり見える。化雲岳のキャンプを設定すべく出発。昨夜天気図をひねくって考えていた白浜の予想通り、やがてさんさんと陽がさし始めた。トムラウシの西側をまいて北の鞍部を越える頃は天気も最高潮だった。旭岳、白雲岳は雲の上に白く輝き、あれが五色ヶ原、その向うに忠

別岳、そして高根ヶ原と、これからのルートが遙かに広茫と展開する。アイゼンにかえたり、またスキーをはいたりしてひきご沼に下り、坦々たる雪原を登り気味に化雲岩の予定地に着く。ここでは、吹きさらしの堅雪の上にウィンパー六人用を張る。夕焼けに映えるニベソツ、石狩の連峰が沼の原の彼方に遠く望まれた。A、T班と別れたB班は、ガスの舞い下りてきたトムラウシの鞍部を再び越えて銀杏ヶ原に下りて来た。巻き上るガスは一面にピンクに染まって、それもやがて灰色にあせた頃、ほとんど消えたシュプールを辿り、次々にガスの中からひらめき現われる真紅のデポー旗に導かれて、銀杏ヶ原のキャンプに帰り着くと、D班がベースキャンプから上って来ていた。

一月四日

A、T班 ガス後風強く小雪 気象係の予報では、今日も悪くないはずだが、一向によくならない。一一時頃急に明るくなったので、それとばかり飛び出す。忠別岳まで荷を運ぶことにする。カチカチのシュカブラと強風に露出している地面に、シールはみるみる切れてしまう。帰りは激しい風雪の見舞を受け、ともすれば感覚を失い勝ちな顔をこすりながら化雲の天幕に急いだ。

B、D班 ガス後時々晴 運ぶものは運んでしまったし、のんびりと雑煮など作って楽しむ。夕方外へ出てみると、青空にガスが乱れ飛び、銀杏ヶ原では、西から東へ風が雲の蔭を落しながら、雪煙を巻きあげて移動して行く様は見事だ。

一月五日 終日激しい風雪

A、T班 停滞

B、D班 ベンチレーターがぶんぶん唸っている。こわれたとと思っていたロビンソンが二二米を示していた。時々外に出て天幕の除雪をするが、もし潰されたら、イグルーを拡張して移転するまでだと覚悟をきめ、一日中食っては歌い駄弁って過ぎてしまう。

一月六日 晴

A、T班 今日駄目だとの予報係の御託宣なので、あきらめて、一〇時頃から炊事を始めるべく、雪をとろうと外を

のぞくと、綺麗に晴れ上がっている。「それあわてろ」と雑煮で腹ごしらえをして出発したのが一一時。忠別岳を越えれば、渺々たる高根ヶ原の雪と氷の高原だ。ここでいよいよサポート最後のA班と別れることになった。お互の姿が点々と、シュカブラの彼方に消え去るまで、振り返ってはストックを振って別れを惜しむ。T班はまた三人だけとなる。その荷物は十貫近くあるが、傾斜が無いので行程は捗どる。凍ったシュカブラの上をカラカラと音を立てて、北へ北へと白雲岳を目指して進む。午後四時頃、白雲岳手前の瘤でキャンプ(C₆)。風は無く、天幕は使い初めのクレッパード。悪かろうはずはない。

B、D班 埋れた天幕を掘り出したり、カバールの無い為、じっとり濡れたD班の寝袋を乾すやらで一日すぎってしまった。

一月七日

T班 晴後ガス 今日も晴れた。いつになったら軽くなるかわからない、いまましいルックザックをゆすり上げては、物も言わずに歩く。白雲岳を越え、北海岳を越え、黒岳の小屋の前に天幕を張る(C₇)。とうとう来た。ありったけの食糧を出して、天幕は喜びではちぎれそう。

A班 ガス ガスが晴れそうなので、撤収して出発したが、再び灰色のガスに埋められてしまった。来た時の記憶をたよりに、所々にデポー旗や竿を見つけては意を強くする。トムラウシを越えた処で新しいシュプールを発見する。B、D班が迎えに来たらしいが、もう帰ったのか人影もない。C₄に帰りついてみると、カマボコはすっかり埋れて、屋根が雪面より下になっている。

B、D班 ガス A班を迎え旁々トムラウシに登りに出かける。風もなく、アイゼンが素手でつかめる程暖い。待てど暮せどA班は来そうもない。きつと今日のはんびり寝ているのだらうと、引返して一服していると、ヤッホーの声と共にA班が帰って来た。短い別離にもしろ話にはぎやかだ。夜はカマボコに集って成功の前祝いコンパ。

一月八日

T班 晴後曇 今日はいよいよ層雲峡だ。のんびりとパッキングをすませて、余った食糧は石室の前に置き、荷も心も軽く黒岳へと登る。振返って見たところでトムラウシは見えず、僅かに白雲岳のドームが望まれるだけだ。出発してはや半月だが、まるで昨日のようだ。年来の宿望はこれで完成される。充ち足りた想いを夫々の胸に抱いて黒岳の大ゲレンデを大きくボーゲンを描いて下る。

A、B、D班 晴後曇 キャンプ撤収。朝の銀杏ヶ原は素晴らしい眺めだ。埋れた天幕を掘り出し、住み馴れたキャンプを後に、ふりかえりふりかえり、銀杏ヶ原を下る。十二日ぶりのベースキャンプは、雪に埋れてはいるが、中はタンネの匂までも出発した時のままだ。折からラジオのニュースは、縦走班が層雲峡に到着したことを知らせている。野田、越野、木村達の弾んだ声が聞えてくる。顔を見合わせてニヤリとする。

一月九日 曇 身の丈あまる荷をつけて、里馬力も物すごく、一挙に白金温泉に下ってしまう。二〇日間にわたった山の生活も、浴槽の湯気と共に洗い流されてしまった。

夜半、縦走班の三人がやって来た。

一月十日 美瑛発。翌朝札幌着。

四、装備および食糧について

カマボコ型六人用天幕はC₄の位置選定に誤りをおかしたうえ、防風壁を積みすぎたため、三日目にして支柱が折れ曲るといふ失態を生じてしまった。なにしろ、十数年前の古い天幕であったためか、竹ベニアの支柱は意外に弱かった。

冬期屋根上の長期滞在の場合、寝袋その他の防湿が常に問題になるが、空気マットのような優れた敷物を持たないわれわれは、いまだこれを解決できないでいる。今回は、ビニールのシートをグラウンドシートの下に敷いた結果、縦走班は終始乾燥を保ち快適な生活を続け得たが、カマボコ天幕の場合、シートを儉約して背中の中の当る部分だけにしたため、最後

の頃は、グラウンドシートも寝袋もじっとり湿り、低くなったところでは水溜りが出来るほどで、不愉快な思いをした。また、コルクマットの裏側にビニールのカバーをかけたが、これはその間に水蒸気が凝結して、かえってマットがぬれる始末で、失敗だった。

ガソリンは、三人で朝夕二回雑煮を作り、お茶を飲みうるだけの量を一日分、約四〇〇ccとし、小樽製缶会社に依頼して、五号缶に一缶四三〇cc宛缶詰として、それぞれの函に食糧と共に詰めて運んだが、これは秀逸だった。

他のおもな装備をあげると次のようになる。

カマボコ型六人用 一張。ウインバー六人用 一張。クレッパー変形三人用 一張。ウインバー変形三人用 一張。夏用家形四人用四張。ビニールシート三枚。コルクマット九枚。ラディウス四個。スコップ(鉄製有孔取付式)六個。ザイル三〇米 一本。鋸五本。鉋。背負子。ブラシ(馬用)六個。携帯用ラジオ一台。乾電池(単一)二〇本。B電池一個。ロビンソン風力計一個。温度計三本。アネロイドバロメーター二個。ガソリン四三立。アルコール四立。

食糧に関しては、だいたいわれわれが例年使用しているものがやや豊富にあったというにすぎない。

献 立

	沢	朝	昼	夕
尾根停帯用	尾根用	米・味噌汁	乾パン・バター・チーズ・キヤラメル	米・味噌汁・メザシ・ミカン
	雑煮	同	同	雑煮・ミカン
	うどん	同	同	うどん・ミカン

各食後の茶は、紅茶、コーヒール、ココア、レモンを適時使用、蜜柑は一人一日一個の割で、別にビタミン錠剤と注射薬を用意した。長期間の「飽き易い」ことを防ぐために、味のつけ方に変化をもたせ、カレー粉、胡椒、七味唐辛子、味の素を配し、黄粉、さらしあんで単調をさけるようにした。熱量については、行動日、約三千四百カロリー、停滞日、約二千四百カロリーを有し、蛋白質約九〇瓦であり、栄養学的にみた保健食の条件を満している。

梱包は、主食副食を別々に、三人の一食を一包とし(但し乾パンは一人一食一包)、数のはっきりしたものはばら、で箱に詰めた。箱はボール箱を用い、キャンプごと、各班ごとに詰め、キャンプごとにポスターカラーで色分けしておくことも何時ものとおりでである。各箱には内容のリストが入れてあり、その控を各リーダーが持っていた。

品名	総量	一人一食量	品名	総量	一人一食量
餅	五斗	二合	紅茶	八ポンド	1/3個
米	六斗五升	二合	砂糖	一貫百匁	
乾パン	三十二貫	五十四匁	カレー粉	五匁	
乾うどん	十三貫三百匁	五十匁	唐辛子	四匁	
豚肉	七貫	十匁五匁	蜜柑	四百三十二個	一日一個
ブラッドソーセージ	一貫百匁	十匁五匁	煉乳	四匁	
おらんだ揚げ	二十五枚	十匁	サツカリン	二瓶	
野菜(玉ねぎ)	八貫八百匁	十匁	黄粉	二瓶	
味噌	三貫二百五十匁	十匁	さらしあ	四袋	
バター	二十二ポンド	1/12ポンド	めざし	三百八十四本	
チーズ	七ポンド	1/12ポンド	キャラメル	百五十個	
マリーガリン	九ポンド				
佃煮	四百五十匁				

五、気象について

気象が登山の成否を決定する重要な要素のひとつであることはいうまでもない。まず計画の基礎において、その地方の気象の資料を集めることが最初の仕事である。今回の計画では、低気圧の来襲する周期と、毎年の十勝岳合宿の経験から、「中央高地では四日に一日行動可能の日がある」との前提の下にすべての準備がなされていった。

山に入ってから、毎日ラジオの気象通報による天気図の作製と、日々の気象観測を行ったが、後者は器具の破損のため、後半はほとんど資料皆無の有様となった。

冬になると、大陸と千島・北太平洋との間に、いわゆる西高東低の気圧差が出来て季節風が吹きはじめる。そしてその間、大陸沿岸地方に低気圧が発生して日本付近を通り、東または北東に抜けるという現象が、大体四日から七日の週期で繰り返えされる。低気圧が北海道より西にある時は、季節風も止むが、発達しながら東方に去ると大陸の高気圧が張り出してきて、季節風は、とくに山上で猛威を振うのである。入山中に、北西の季節風が強くなるような気圧配置をとった日は、十二月二三日夜から二四日、二七日、一月二、四、五、七、八日であったが、七、八日を除いては、いずれも大陸の高気圧は比較的に発達しなかったので、気圧傾度は緩く、例年にくらべて恵まれたわけであった。

この時の低気圧は皆、北海道南方あるいは南部を通っているが、これももし宗谷海峡を抜けたとすれば、停滞する可能性が強いので、風は一層弱かったかもしれないが、化雲岩より南はぐずぐずした天気がかなり続いたものと思われる。一月七、八日には、気圧傾度がかかなり急であり、当然猛吹雪が予想されたにもかかわらず、両日とも午前中は晴、七日夜は月が静寂の銀杏ヶ原を皎々と照らしていたほどだった。後で気象台に行つて聞いてみても、そのはずはありません、下でも降っていたし上空は大荒れのはずです、と首をかしげていた。

前にのべたように、低気圧はだいたい本道の南部で太平洋にぬけ、北東に進んでいちじるしく発達するものと、宗谷海峡付近を通りオホーツク海に至りここで衰えるものと、この二つの型が多い。前者は太平洋に出ると急に発達し、これが

千島方向に進むと、季節風はかなり強くなる。またこれに不連続線を伴う時、南側が開いている化雲岩より南がとくに天気が悪くなり、大雪山群は化雲岩―石狩岳の線で不連続線から守られるために比較的天気はよいと考えられる。

また、低気圧が本道の北を通る時は、あまり発達しないので強い風が吹くことはすくないが、その性質として足が遅くなるので、オホーツク海に停滞しぐずついた天気になる。この場合、風は南西となるから、やはり化雲岩以南の山がより悪天候となる。このように化雲岩を境に、北と南で天候に差があることは今回はじめて明瞭になったことである。

以上のことを考え合わせて、われわれの計画の基礎になった、平均四日に一日の行動日が得られるという予想はだいたいい正しかったと言えるが、ただ化雲岩以北の行動においては、白雲岳のキャンプに一週間分の食糧を用意したことは幾分蛇足の憾みがないわけではなかった。

つぎに、われわれがもっと知りたかったのは、この山の地形に応じた、実際に役に立つ観天望氣の法であったが、わずかにつぎの事実を知り得たにすぎない。天気が崩れてくるときは十勝岳の方から崩れる。雲海が不安定で舞い上ってくるようなときは悪天の兆しであることは、よく言われていることだが、濃霧の際、風が収めてくるに従って晴れるという傾向をたびたび経験した。これは上昇気流による霧であることは明らかなので、実際悪天候の兆しかどうかは、ラジオの気象通報によって見当をつけておかなければならない。

あとがき

以上は「山岳」第四六・四七年（昭和二十七年）に掲載された報告に基づき、これに多少の加筆削除を行ない稿を新にしたものである。残されているむづかしい制限漢字や尺貫法はいかにもこの二十五年の歳月を感じさせる。しかし、四半世紀前のこととはいえ、それを経験したわたしには、ついこのあいだのこのように鮮やかに想い出すことができる。

戦後の数年間は北大山岳部にとってひとつの昂揚期にあったと思える。戦中の技術的な空白を埋め、残された初登頂や新ルートの開拓をめざす現役と、それを援け、ひきあげていこうとする先輩たちの暖い眼のなかで、夢中で登っていたよ

うな気がする。装備などはまだ戦前のものが、ルームの戸棚に積みあげてあった。十勝合宿で初班のリーダーが着ることになっていた樺太夫の毛皮コートはなつかしい。トナカイの寝袋もあった。この縦走で使ったカマボコ天幕はこのときはじめで、戦前の埃を払って戸棚からとり出したものだ。つまり、この時になってようやくカマボコ天幕を尾根の上で使えるほどの力量になった、というわけである。

その前年、昭和二十五年冬、コイカクシユ札内岳の稜線にベースを作り、北にカムイエクウチカウシ山、西に一八三九米峯とさらに南へ一五九九米峯まで達した山行は、現役だけで実施した戦後最初の冬山行であった。そのとき、日高の稜線に初班をあげるのは危険だとかそうではないとか、大まじめに議論した。そんな時代だった。

その時でも、コイカクのキャンプはイグルーだった。イグルーはそれなりに長所があり、小人数隊の行動範囲を拡げることが出来る。しかし、裏がえしてみれば、稜線に大型テントを持ち上げるほどの重量のある隊を組めなかったことを意味する。その点でカマボコ天幕を尾根にあげて半月の生活を可能にした十勝大雪縦走の完成によって、部の実力が戦前のレベルまで回復したということが出来る。

携帯ラジオを使ったのは、コイカクのイグルーが最初だった。その時は、とにかく日高の稜線上ではじめてラジオから女の声が聞えてきたわけだ。それだけで驚き、違和感さえ覚えたものである。翌年の十勝大雪縦走では、ラジオは現在と同じように天気図作製、そして予報のために活躍した。これは気象係であった白浜の努力に負うところが大きいが、稜線上のキャンプで天気予報にラジオがはじめて活用された記念すべき歴史的山行であったといっても過言ではないだろう。ただし、電池が減るといので他の番組はまったく聞かせてもらえなかった。

この成功を境にして山岳部の活動は新しい時期にはいる。中ノ岳登頂や日高山縦走などとともに、一〇年後のチャムラン遠征への道が開けはじめる。本文中にメルヘンウィーゼとあるのは当時われわれの愛読したナンガバルバート、ドイツ隊のベースキャンプの置かれた谷間なのである。

冬期日高山脈全山縦走

西 信 博

一、全山縦走にかかるまで

昭和二十七年、われわれが北大に入り、山岳部に入部した頃、新制の連中は、云々、という声が聞かれた。丁度この頃は、旧制の北海道大学と、新制の北海道大学との接点であった。三年の子科、三、四年の本科をもつ旧制大学の山岳部と、二年の教養部、二年の学部しかもたない新制大学の山岳部とは、当然ながらその在り方は大違いである。

昭和二十六年の十勝、大雪縦走が成功裡に終わったあと、旧制の大部分の先輩たちは第一線を退き、昭和二十八年、主任幹事も、旧制最後の有波敏明から新制の木村俊郎にひきつがれた。新制の連中は……との声を背に、われわれは新制北大山岳部の基礎をかためにかかった、合言葉は「旧制に負けるな」であった。当時、山岳部の中核となって活動したのは木村俊郎、高田光彦、岡本丈夫、森厚、河内洋佑、小林年、長友久雄、和田一雄、西信博、永光俊一、安藤久男等である。

海外では、ネパールの登山解禁について、アンナプルナ登頂、エベレスト登頂等のニュースが次々と聞かれ、新しい文献も入手できるようになり、我々の山への憧れをそそる材料は事欠かなかった。

しかし戦後の現実はきびしく、部員はみな貧乏だった。山行の費用はもとより、学費、生活費まで、アルバイトに頼る

部員も多く、月五〇円の部費も滞納がたえなかった。装備も乏しく、米軍が、朝鮮戦争で死体輸送に用いた寝袋の中古品が貴重品扱いであった。米軍の中古の軍靴に鉄を打って山靴に用い、日常の登山には地下足袋を使うといった有様であった。一つの山行が計画されるごとに、先輩の所をかけめぐって、ピッケル、アイゼン、靴、はては、ザックをまで借りあつめるのがリーダーの仕事でもあった。

昭和二十八年、マッキンレーへの計画が樹てられた。しかし海外渡航の困難性、資金難から、これはペーパープランに終わった。次いで、極地法による剣岳登頂が計画され、ルートとしては毛勝・猫又・剣が挙げられた。八月、偵察を兼ねて、小林パーティと石谷パーティが剣岳をめざしたが、石谷パーティの事故もあって、計画は中止の止むなきにいたつた。十二月の十勝合宿のあと、いくつかのパーティは、日高へ、又中央高地へとむかったが、これだけでは、増えはじめた部員のトレーニングは不充分であった。

昭和二十九年、ゴールデンウィークを用いて、われわれは春の芦別合宿を行った。新人のスキー練習、山へのオリエンテーションが主題である。芦別岳の新道コースから、熊ノ沢を経て地獄平に入った。くたびれかけた夏天幕を張り、大きな焚火を囲む合宿は楽しかった。幸い好天に恵まれ、本谷、第一尾根、夫婦岩、北尾根、布部岳等へのトレーニングは、新人にとっては相当のシゴキであった。はじめての雪上露營、スキー登山、ルンゼの昇降などは、新人の能力を試すのには恰好の試みであった。

この前後から、赤岩、銭函天狗等のゲレンデで、岩登りが活発に行われるようになった。山岳部にあったザイルはすべて戦前のヨレヨレのマニラ麻だった。ようやくナイロンザイルが導入されたが、高価なので漁網店からナイロンロープを買って用いた。赤岩の西壁、中赤岩、などのゲレンデでの練習、更に東大壁の小林ルート、函ガレの初登などが試みられた。やっと吊上げ、アプミが導入され、動的確保が提唱された頃である。

この年は新人の入部も多く、夏の日高には多くのパーティが入り、活況を呈した。夏山が終わったあと、主任幹事は岡本丈夫から河内洋佑へとかわり、われわれは十勝合宿と分離して、日高山脈での団体登山を計画した。三年目、四年目に冬

山のリーダーとなるためには出来る丈早く、実戦に参加させる必要があったからである。登路にはエサオマントッタベツ合流から、神威岳北東稜をとり、国境稜線にとりつき、南へキャンプをのぼしてカムイエクウチカウシ山、北へキャンプをのぼして幌尻岳を登頂することにした。チーフリーダーは河内洋佑で、総員は一九名、極地法による登頂隊支援の方法を採った。なお参加メンバー中、四年目は一名、三年目は七名、二年目は七名、一年目は四名である。

十二月二日の入山以来、好天にめぐまれ、二七日には、長友、元木、永光、佐野が、カムイエクウチカウシ山の登頂を果し、二九日には、長友、小林、西、永光、小西が幌尻岳を登頂した。この間滑落事故、凍傷などがあったが、幸にも大事にいたらなかった。全員三一日に下山、全計画を終えたが、実力不足、装備の不充分、リーダーシップ、メンバーシップの問題、パーティの掌握の問題など多くの問題点が提起され、真剣な反省がつけられた。しかし新人を含めて多くの部員が冬の日高の稜線を体験したことは、山岳部の実力向上に有意義な試みであったし、小規模にせよ極地法の経験を得たことは貴重であった。なお、トッタベツとエサオマントッタベツの間の稜線は厳冬期の記録であり、エサオマントッタベツ岳は冬期第二登であった。なおこの登山には、一三万円の費用を要し、個人負担の他に先輩からの寄付、映画会等による資金集めをせざるを得なかった。

この登山の当時は、なお帯広から八千代への十勝鉄道が通っていた。また携帯ラジオは一台もなかった。国境稜線に出るまでは、石油の使用は制限され、一四〇〇米のキャンプで焚火をして米飯を炊いたのを覚えていた。またこの登山と並行して十勝岳合宿も行われ、主にスキー技術のトレーニングに当たった。

昭和三十年に入ってからには全山縦走が目標となった。部員は急増し、ルームには熱気が溢れていた。冬山に参加した者も増え、ゴールデンウィークの声別合宿の成果もあがっていた。日本山岳会のマナスル遠征に参加した山崎英雄、橋本誠二両氏の話も我々の夢をふくらませるものだった。道外の大学山岳部、社会人団体の冬の日高への計画も報ぜられ、われわれは、三十一年三月を予定して積雪期日高山脈全山縦走を計画した。文献の整理、ルートの検討、装備の充実、日程の調整をつづけ、殊に夏山は、冬の登路偵察を兼ねていた。十二月の十勝合宿は二年班の充実を計り、雪中露營訓練、水雪

技術訓練に重点をおいた。

丁度この頃、第三回国際地球観測年の事業として、第一回日本南極地域観測隊が派遣されることになり、殊に犬ソリ、設営、地質研究等に北大グループの参加が求められた。殊に白紙の状態から出発する犬ソリの研究は多くの人手を要した。本格的なエクスペディションへの参加に意欲を燃やす先輩、現役も多く、殊に全山縦走計画の中核となっていた主任幹事の永光俊一をはじめ中堅部員の多くが北大極地研究グループに参加した。このため一時登山活動から離れる部員も多く、三十一年三月の計画は中止のやむなきに至った。結局、南極へは、中野征紀、菊地徹、佐伯富男、小林年の四〇Bが参加することになり、現役部員の参加は許されなかった。隊員は公務員またはこれに準ずる者として制限され、学生は唇をかみしめて出発を見送ったものである。

昭和三十一年も入部者は多かった。ゴールデンウィークの合宿は十勝を選んだ。先輩を交えて三九名の参加があり、全山縦走の話題が出た。しかし一度頓挫した計画への盛りあがりは意外に乏しかった。学部移行、卒論、就職等のために、幹事会のメンバーを半年交代にしたのはこの頃のことである。

七月、当時主任幹事であった私は、新人六人と共に北日高に入った。他のパーティと会ったり、はなれたり、春に冬に辿った稜線のあるき、雨のカールで停滞した。当時新入部員だった遠藤禎一、橋本正人、酒井和彦らとのたのしい山行のうち、全山縦走への夢がひろがっていった。

一方では、この頃日高山脈の地域開発が始まり、造材、造林の他に、主に日高側で大規模な電源開発が緒につきつつあった。このため以前に比し交通その他の便宜が増して、日高山脈へのアプローチは短くなりかけていた。

二、全山縦走

夏休みの終わったルームで、全山縦走は急速に具体化した。いつものことながら、リーダーの不足、中堅メンバーの意

識、未経験の新人の実力が心配されたが、時日は刻々と迫りつつあった。チーフリーダーは西信博、縦走隊リーダーには永光俊一が当り、久木村久、高橋利雄、宮地隆二、元木暉里、鈴木弘泰が計画、準備に当った。メンバーは左記の通りである。

	チーフリーダー	西 信 博	医 五
	縦走隊リーダー	永 光 俊 一	獣 四
	メンバー	久 木 村 久	農 三
		高 橋 利 雄	工 三
		安 間 荘	理 二
サポートI班	リーダー	元 木 暉 里	工 四
	メンバー	森 康 通	理 二
		遠 藤 禎 一	教 一
		志 牟 田 隆 男	教 一
		北 古 味 雄	教 一
		上 田 原 偉 雄	理 一
サポートII班	リーダー	西 信 博	医 五
	メンバー	宮 地 隆 二	農 三
		高 野 了 乙	経 四

木幡 貢 農二
石井 清一 教二
橋本 正人 教一

サポートⅢ班

リーダー 鈴木 弘泰 法四
メンバー 増田 定雄 工三

越智 博 工三
今村 正克 教一
岩崎 祐三 教一

参加メンバーは総計二一名のうち五年目が一名、四年目は四名、三年目は五名、二年目は四名、一年目は七名である。縦走の範囲について議論はあったが、我々は幌尻岳から豊似岳の間を対象に選んだ。更に日高山脈の特性から、極地法をとらず、側面サポート方式による縦走方式を採用した。縦走を南から始めるか北から始めるかについては、起伏の多い未知の稜線を含む南日高を先に踏破する方が有利と考えられた。稜線への登路には議論がつついたが、荷上げの量も多く、スキー技術に劣る下級生の多いことから、長くても容易なルートを求めた。

十月二日から二四日にかけて、西と森康通は南の春別川に偵察に入った。日高幌別からルテンベツ合流に入り、そのまま、本流を辿り、二〇キロ上流の二岐にBCを設営すれば、一日行程で国境稜線に上りうる事が確認された。しかもこのルートは降雪が少く、沢も比較的平坦である。以前には沢ぞいにかなり奥まで林道があったらしいが、今では廃道になっている。山の経験、スキーの経験の少い新人の多いこと、荷上げ量の多いことを考慮してわれわれは登路としてこのルートを用いることにした。

縦走隊のエスケープルートについても検討を重ねたが、登ったルートを戻るか、次のサポート地へ行きつく方が、安全かつ確実と考えられた。このためには縦走隊は勿論、サポート隊も充分強力なメンバーを確保するように計画した。

縦走隊のルートは、ピリカヌブリより、国境稜線を北上、エサオマントッタベツ岳に至る間とした。登路は前記の春別川をとり、下山路は昭和二十九年に使用した、カムイ岳北東尾根をエサオマントッタベツ合流に下るルートを採用した。なおこの間の稜線は大部分が踏破されていたが、ピリカヌブリとソエマツ岳の間は未踏であった。

サポートI班は、春別川より縦走隊を支援し、縦走隊を送ったあと、余力があれば、トヨニ岳を登頂する予定とした。サポートII班は、コイカクシュサツナイ川から、冬尾根を経てコイカクシュサツナイ岳に上り、南は一五九九米峯、北は一八二三米峯に荷上げをしたあと、縦走隊の到着を待つことにした。なお場合によっては縦走隊とのメンバー交換をも考慮にいった。任務終了後は一八三九米峯の登頂を予定した。

サポートIII班は縦走隊の下山路確保と、食糧等のデポ設営を主眼とした。荷上げ終了後は単独でテントをのびし、幌尻岳を登頂することとした。

全計画が無事終了した時には、トヨニ岳から幌尻岳までの稜線をつなぐことが出来る。全行動日は予備日を含めると四〇日になった。航空写真と地図の照合、装備の点検、発注、食糧計画の作製、発注など、毎日のように会合を開いた。

予算はいくらきりつめても、二四万円を要した。個人負担の他にアルバイトをしたり先輩からも寄付を仰いだ。英国映画「ハムレット」を借りて市民会館で映画会を開いたこともあった。このときの五万円の収入はありがたかった。少しでも予算を安くあげようと、先輩をたより企業めぐりもした。雪印乳業を訪れたとき、子会社の雪印食品で大量のコーンビーフのハネモノが出た。これは市価の三分の一だったので、即座に食糧計画をきりかえて、肉類はすべてコーンビーフとした。これは非常に好評であった。また同社では発売したばかりの「ラーメンの素」の提供をうけた。まだインスタントラーメンが発明されない頃である。

当時、ポータブルラジオは辛うじて各パーティー一個ずつ確保できたが、トランジスターではなく真空管式で性能は悪か

った。トランシーバーは勿論ないので、NHKとHBCに協力を求め、もし何らかの事故、又は緊急連絡が必要な時には、ニュース放送を通じて連絡をつけることにした。幸いに事故はなかったが、各パーティーはラジオの情報を聞きサポーター隊の下山、縦走隊の動向を聞くことができた。

出発直前に装備の点検をかねて、十一月二三日から二五日にかけて羊蹄山で訓練合宿を行った。スキー術、アイゼン、ピッケルの使い方、雪中露営の実際などをあらためて確認したあと、われわれは全山縦走のスタートを切った。各隊の行動の概要は左記の通りである。

縦 走 隊

- 十二月一日 札幌発、日高線に入る
- 一日 幌別より春別川造林宿舎
- 一七日 B・C入り
- 一八日 荷上げ
- 一九日 荷上げ
- 二〇日 国境稜線一五—三米にC₁を建設
- 二一日 風雪停滞
- 二二日 サポートI班と共にピリカヌプリ登頂、C₂建設
- 二三日 ソエマツ岳登頂、鞍部にC₃建設
- 二四日 神威岳登頂、頂上にC₄建設
- 二五日 風雪停滞
- 二六日 中ノ岳直下にC₅建設

- 二七日 風雪停滞
- 二八日 ペテガリ岳直下にC₆建設
- 二九日 ルベツネ山を経て一五九九米峯にC₇建設。サポートⅡ班よりの荷上げを確認
- 三〇日 ヤオロマツ岳を経て、コイカクシュサツナイ岳登頂、サポートⅡ班と会う。C₈建設
- 三一日 サポートⅡ班と共に、一八二三米峯登頂。C₉建設
- 一月一日 風雪停滞
- 二日 カムイエクウチカウシ登頂。C₁₀建設
- 三日 風雪停滞
- 四日 エサオマントッタベツ岳登頂、頂上にC₁₁建設。サポートⅢ班の荷上げを受領
- 五日 カムイ岳北東尾根より、国境稜線を離れ、下山、小屋泊り
- 六日 八千代へ下山、旅館に泊る
- サポート I 班
- 十二月二日 札幌発、幌別泊
- 一三日 春別造林宿舎(BH)泊、荷上げ
- 一四日 荷上げ、中間キャンプ
- 一五日 BC建設
- 一六日 荷上げ、縦走隊と合流、BH泊り
- 一七日 荷上げ、BC泊
- 一八日 一五一三米峯への出尾根に荷上げ
- 一九日 中継キャンプ

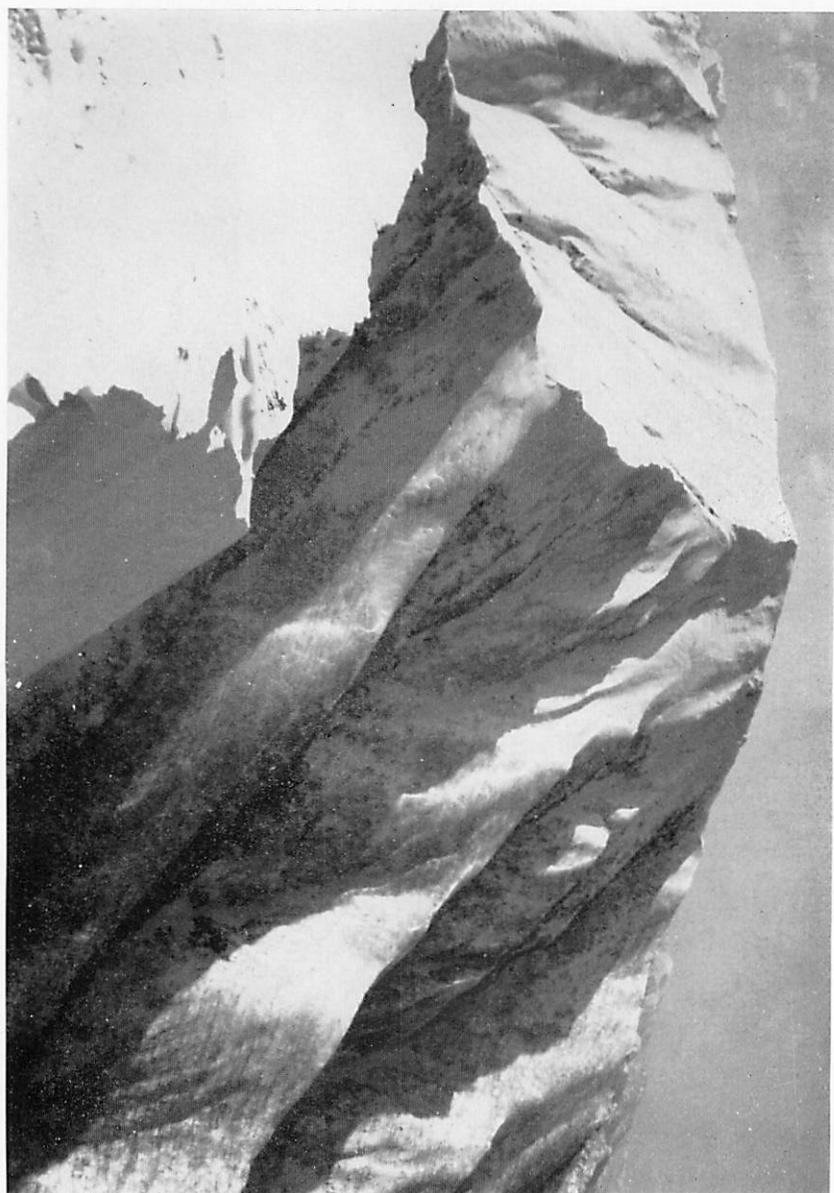


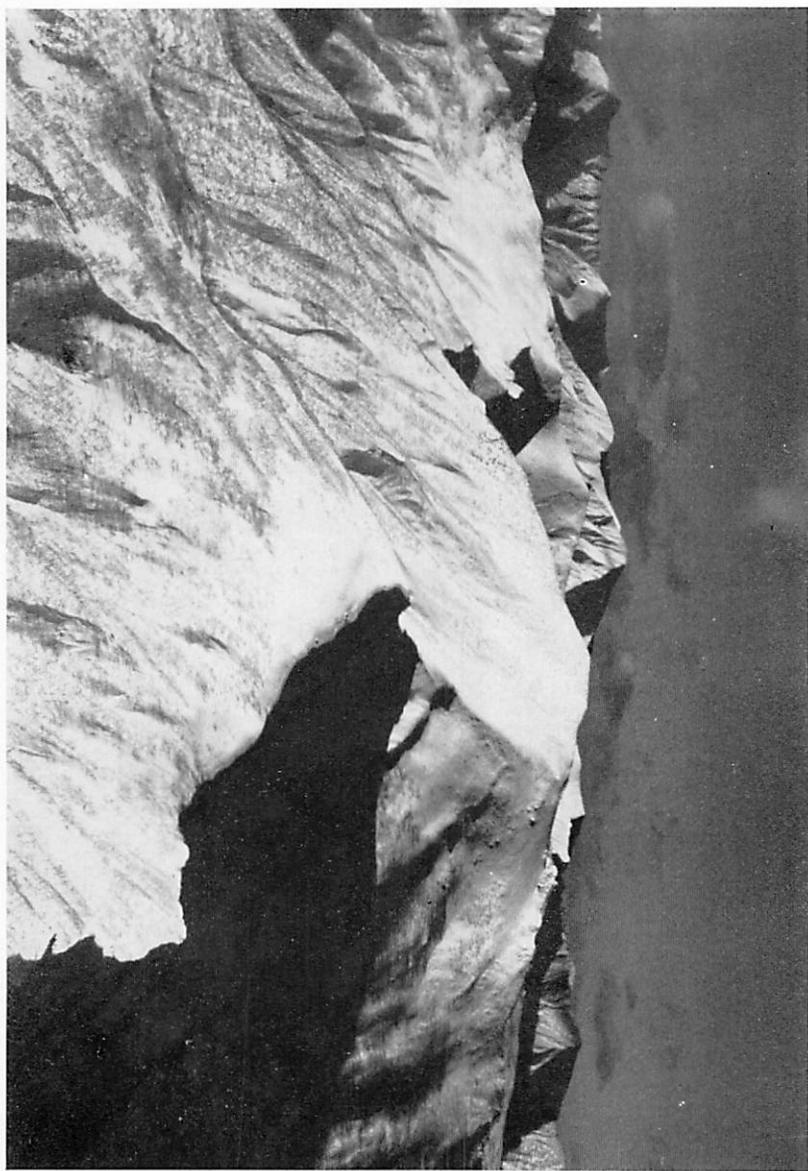
神威岳

岡田勝英

ヒリカスネリ南面

岡田勝英





神威岳よりヘテガリ岳

岡田勝英



礼内岳より鯉尻岳

岡田勝英

サポートⅡ班

十二月十五日

- 二〇日 一五二三米峯登頂、キャンプ
- 二一日 風雪停滯
- 二二日 縦走隊を支援、ピリカヌブリ登頂、往復
- 二三日 国境稜線を南下、トヨニ岳往復
- 二四日 下山、BC入り
- 二五日 BH入り
- 二六日 幌別を経て、札幌着

札幌発

- 一六日 帯広を経て、札内川に入る。コイカク合流に荷上げ
- 一七日 荷上げ、コイカクシユサツナイ川、上二岐にキャンプ
- 一八日 荷上げ
- 一九日 冬尾根から荷上げ
- 二〇日 荷上げ
- 二一日 風雪停滯
- 二二日 風雪停滯
- 二三日 国境稜線、コイカクシユサツナイ岳登頂、頂上付近にキャンプ
- 二四日 荷上げ、設営完了
- 二五日 風雪停滯
- 二六日 一五九九米峯、一八二三米峯へ荷上げ（縦走隊用）

二七日 風雪停滯

二八日 風雪停滯

二九日 晴天停滯

三〇日 縦走隊到着

三一日 縦走隊支援、一八二三米峯登頂

一月一日 一八三九米峯登頂

二日 下山、そのまま、トムラウシ飯場入り

三日 上札内を経て帯広、札幌

サポートⅢ班

十二月二二日 札幌発

二三日 帯広を経て、エサオマントッタベツ飯場へ入る

二四日 カムイ岳北東尾根より荷上げ

二五日 荷上げ、国境稜線キャンプ

二六日 荷上げ

二七日 風雪停滯

二八日 荷上げ、中間キャンプ設営

二九日 エサオマントッタベツ岳登頂、縦走隊用デポ建設

三〇日 停滯

三一日 国境稜線北上、トッタベツ岳手前にキャンプ

一月一日 幌尻岳登頂、往復

二日 撤収、下山、エサオマントッタベツ飯場泊

三日 八千代、帯広經由下山

かくて全山縦走は終った。開始から終了まで、実際は二八日間を要した。殊に縦走隊四名は、厳冬の日高山脈の主稜線に一七日の生活をつづけ、一一のキャンプを次から次へと設営し、あるきつづけた。

計画はすべて完遂した。目的の山はみな確実に踏破することができた。天候にも恵まれ停滞の日も少なかった。幸いに事故はなかったが、雪庇、雪崩等の危険性を改めて確認したことは何回かあった。

三十二年二月一日、報告会を開いた。多くの先輩があつまって成功を祝ってくれた。永光俊一苦心のハミリ映画も好評であった。

三、全山縦走をおわって

われわれの計画に前後して、早大、立大、東京薬大、京大等の山岳部、更に多くの社会人団体が冬の日高に挑んだ。その中であってわれわれの山行は最大級の成果をあげ、日高山脈登山のバイオニアとしての北大山岳部の地位を確保することができた。いままで断片的にしかなられなかった厳冬の日高山脈の中核部の状態を確認し、縦走方式、側面サポート方式の有用性を立証した。更にこの山行を通じて得られた山岳部のまとめりと、個々の部員の技術的、精神的なレベルの向上は著しいものであった。

当時の装備は貧弱であった。自前のアイゼン、ピッケルを持っていたのは半数にすぎなかった。エアマットは全員にゆきわたらず、縦走隊以外はコルクマットを持ち運んだ。ビニロンの天幕を新調したが、これはまだ試作段階で、毎日ちぢんでいった。縦走隊の毎日の仕事の一つは、ボールの切りちぢめであった。ビニールシートは漸く普及しはじめた頃だっ

た。冬天幕の下に敷きつめて、水の凍み上りを防ぐのは新しいアイデアであった。燃料は沢ではすべて焚火とした。尾根では石油ストーブを用いたが、石油は北海製缶の友人に依頼し、四六〇ccの缶詰とした。これは三人の一日量と決めた。余談であるがこの缶はテント内の排泄に丁度よかった。

食糧、燃料の予算は一〇万円にすぎなかった。久木村、森が中心となってレーションシステムを作り、食糧表もかなり複雑なものとなった。主食は、米、餅、ビスケット、ホットケーキ、ラーメン等であった。インスタント食品としては、アルファ米が出来ていたが高価で多くは用いられなかった。一日四千カロリーの要求量に対して苦労は多かった。雑煮もラーメンも汁も、ほとんど、ラーメンの素⁶で味付けをして、多量のラードをぶちこんで脂肪とカロリーの補給を計った。野菜、果物は最小限にしぼり、ビタミンは体内での蓄積を考慮して、計算上は無視した。予算を横目でにらみながら、キスリングをかついで、安い店をさがしての食糧の買いいれも仲々大変なものであった。

計画段階から多くの先輩の御助力を得た。当時の原田準平部長をはじめ、相川修、橋本誠二、木崎甲子郎、杉野目浩、岡本丈夫、森厚、小林年等の先輩のはげましは有難かった。しかし、計画、実行はすべて現役部員で行うことができた。とは言っても、新制大学の弱点である年限の不足、部員の新陳代謝の早さを痛感させられた。全山縦走の予備段階であった二十九年の団体登山のメンバーのうち、二年たつて全山縦走に参加したのは、西、永光、元木、鈴木、高橋の五名にすぎない。止むなく計画準備段階から、一、二年目にも大幅に仕事をまかせた。幸いチームワークもよく、計画は順調に進行了。この当時メンバーの中には留年者が一人もいなかったのは、当然ながら面白い現象である。

しかしこの短期間の大学山岳部生活でも計画の樹て方、リーダーの教育によっては相当程度の高い登山が可能であることを確かめたのは嬉しかった。

この山行のあと、北大山岳部の計画は質、量ともに急速に発展した。日高の沢への意欲的なルート、北アルプスの岩と氷のルート、日高の冬のバリエーションルート。尖鋭的な岩登り、地道な海外登山研究等である。数年たつて北大山岳部、北大山の会の海外登山が相次いだ。全山縦走をめざしてスクラムを組んだ仲間から、岡本丈夫、小林年、永光俊一、

久木村久、安間莊、遠藤禎一、橋本正人らが、チャムランへ、ナラカンカールへ、バタゴニアへと遠征し、それぞれ充実した成果をあげて帰ってきた。

われわれの全山縦走は、こうして旧制の北大山岳部の伝統をうけついで、新制の北大山岳部を発展させるための一ステップとなることができた。この冬の日高全山縦走の公式報告は、部報第八号に記載されている。本稿は当時主任幹事として立案、実行にあたった私の感想を主に記したものである。この山行のあと日高山脈への登山は部の内外でますますさかんとなり、最近では四月から五月にかけてではあるが、芽室岳から楽古岳までの、荷上げなし、サポートなしの単独縦走もなされた（大橋政樹、北の山脈、No.二一、六八―七二頁、一九七六）ことを付記したい。

直 登 沢 へ

——北大山岳部が辿った一つの沢登り——

神 谷 正 男

「直登沢」とはどんな沢のことを言うのだろうか？ ひさしぶりに山岳部のルームを訪ね、現役の部員に聞いてみた。まず、普通にピークにつきあげている―直登している―沢であることとか、ある種の憧れを込めて、日高における最も困難で第一級の沢という意味を含めるといふ者もいた。この場合、ピークへつながる沢であるとしてもカールへつきあげて

いる沢は直登沢とはよばれていない。したがって、北日高には直登沢とよばれている沢はほとんどない。まれに、日高以外の、たとえば、芦別山塊のポントナンベツ川・南喜岳直登沢とよばれているものもあるが、どうも、「直登沢」は日高山脈に生まれ、現在のところ中部と南部日高に、特に、登場しているようである。

こう考えてみると、ここで直登沢を語る場合、どうしても日高山脈における沢登りの記録——その大部分を占める北大山岳部の夏の記録を辿らなければならないことになる。本州においては溪谷開拓時代は尾根歩き時代の後にやってくるのであるが、「北海道の夏山では常に自然の路であるところの川歩き……」（大島亮吉「山——研究と随想」）が先行しており現在もおお、夏に日高山脈のピークへ至る主要なルートは「自然の路」——沢を抜きにしては考えられない。この特徴的な山行の歴史を辿るには、幸い「北大山岳部々報」があり、その中から、いくつかの山行記録を選び、直登沢への流れを説明できるものを拾いあげて、直登沢の位置づけを試みることにした。

伝統的な沢登り

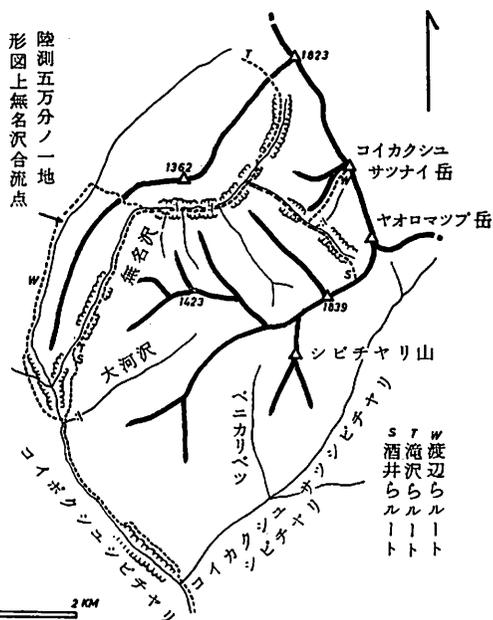
夏における日高山脈の主要なピークは一九二三年（大正十二年）七月、松川五郎らの芽室川から芽室岳にはじまり、一九三四年（昭和九年）慶応大学の斎藤氏らによるベテガリ岳の初登頂の間に、ほとんど登られた。続いて、夏山では残っているもつと困難な沢を遡行する努力が払われるようになる。その中で、興味のあるのは無名沢（戦前はムメイ沢と呼ばれた）である。妙な名前がついたものだが、この沢をめぐる遡行の記録には従来、北大山岳部が持っていた探検的なロマンチズムに加えて尖鋭な山行の両方の要素を満足させてくれる贅沢さがあり、我々の山登りのすべてがこの無名沢にはあったようである。

無名沢はコイカクシュ札内岳の直下より西へ向いメナシベツ川上流コイボクシュシビチャリ川に注ぐ相当大きな沢であるが名前は無い。陸地測量部五万分の一の地図に誤りがあり、コイボクシュシビチャリ川との合流が長い間判らず無名沢に入ることさえできなかった。

一九二九年（昭和四年）福西らは初めての無名沢をめざしたが、地図のまちがいに気づかず無名沢のつもりでコイボクシュンピチャリ本流を遡って、一八三九米峰のつもりで一八二三米峰を登頂している。また、おらかな時代であった。一九三八年（昭和十三年）七月、片山純吉、林和夫、橋本誠二は、やはり沢の入口に到達することはできなかった。翌年七月、清水誠吉、片山純吉、有馬純は再度、無名沢をめざしたが入口を見逃し、地図上の合流点より約四キロメートル下流に位置する「第一番目の沢」として定めた沢こそが無名沢の入口であった、としている。見逃したとはいえ「遙かなるベテガリへ」の全行程二週間にわたる山旅の記録には、一度、日高の沢に足を踏み入れた者なら誰にでも思い出されるさまざまな情景が見られる。国境線に湧きあがる雲、明るい花崗岩の滝、憂鬱な黒味を帯びた函、岩魚釣り、流木の焚火、友との語り、コンチキショーと苦しんだカンバやハイマツの中での機械体操、そして、ポロポロの姿で里へ出てくる。これらが全部一組になったのが日高の沢登りなのだ。かくして、位置が確かめられた無名沢ではあったが、一九四〇年七月（佐藤弘、高田敦徳、山口俊也）と一九四一年七月（渡辺良一、枋内晃吉、菊地徹）のさらに二回にわたる試みにもかかわらず、後者のパーティが入口を確認しただけで、その険悪さのため断念せざるを得なかった。そして、その翌年、最初の試みから、実に十三年後の一九四二年七月、渡辺良一、橋本芳郎、菊地徹は中心部の遡行に成功している。

一九四一年（昭和十六年）には太平洋戦争が始まり、学生生活そのものを変えざるを得ない時代を迎えるのであるが、食糧不足などの困難を克服して北日高を中心に沢登りは続けられていた。そして戦後の混乱期にあっても登高への意欲は衰えていなかった。

サツシビチャリ川からベテガリ岳、一五九九米峰へ（山崎ら一九四八年六月、奥村ら一九四八年七月）、春別川からイドナップ岳へ（長井、野田、一九四九年七月）、ニシュオマナイ川から神威岳へ（山崎、熊野、一九四九年七月）、ベテガリ川からベテガリ岳へ（森田ら一九五〇年六月）と困難な南日高の沢へと興味が向けられるようになった。当時の沢の状態は、現在とは較べものにならない程困難であり、札幌を出て国境稜線へ辿り着くだけで約一週間を要している。この頃はまた、初期の日高山脈の登山と同じくアプローチで充分シゴカれていたので国境稜線へ到着し、主稜線から目指すピー



無名沢附近概念図

ぼくらは呆然とした。ザックを置いて何とか登ろうと試みる。高さは六、七米程であるが……ハーケンがあれば何とかなのであるが、誰が日高に三つ道具を持って来るだろうか。」(部報八号)と述べている。また、同じ年七月、サツンピチャリ川の源流(矢作栄一、浅井章一、小口洋右、椋本宏)とベテガリ川からベテガリ岳(西信博、高橋利雄、芝勝朗)へと廻行している。後者については詳細な記録がないのだが、直登を試みたようだ。その後、一九五七年七月、酒井和彦、上田原偉雄は無名沢より一八三九米峰を登っているが、特筆すべきことは、シュラフ、テントを持たず、装備の軽量化を計っていることである。

この頃になると、「直登沢」という言葉こそ使われていないが、はっきり直登沢は意識されていた。最初未記録の険

クへ到達する登山形式を自然な形でとっている。したがって、まだ、直登沢を登攀ルートにするという意識はなかつたようだ。

一九五三年七月には岡本、野坂、小林(年)により新冠川の初完全廻行がなされている。

一九五四年(昭和二十九年)には十五号台風で沢の様子が著しく変貌した。特に、険悪な函が埋まり、中の川、ヤオロマツブ川、無名沢などの函の部分の通過が容易になった。そんな頃、一九五五年七月、滝沢政治、岡部賢二は無名沢の完全廻行と一八二三米峰の直登を目指しているが尾根に追いあげられてコイボクシュシビチャリ川へ降りている。その時の様子をうかがってみると、「……その奥に真っ白い滝が二段連なって落ちていている。瓶の底での滝だ。」

悪な沢が登りつくされ、その後には直登沢が登攀の対象として登場するのである。

一九五四年（昭和二十九年）の十五号台風によって変貌した沢に加えて、一九五八年（昭和三十三年）頃には電源開発のため日高側の各沢には道路が原始林に食い込むように入り、また、木材の搬出とその後の植林、砂防ダム等のため日高の沢は一変した。長い険悪な沢を省いてアプローチは短くなった。この頃、造材のトラックの荷台にしがみつきながら、「昔の人はよくこんな所を歩いたナー」と函を上からのぞき込むこともあり、たまには荷台からころがり落ちる者もでてきた。このように、名前は以前と同じでも内容はずいぶん変わった沢登りとなってくる。

直登沢の登場

一九五八年（昭和三十三年）の夏には、鈴木良博、松下彰夫によりサツシビチャリ川より一八三九米峰直登沢の偵察がなされ、「記録的に非常に価値のあることと思われる」。（部報八号）として、ここに初めて「直登沢」が登場する。この年にもシュラフ、テントを持たないパーティや、ベースキャンプよりサブザックだけのアタックなど重い荷物の制約をまぬがれようとする山行が目立った。

一九五九年（昭和三十四年八月）松下彰夫、三浦章司、木村恒美は無名沢から一八三九米峰の直登ルートの一つである三の沢を試みた。一方、サツシビチャリ沢では、一八三九米峰の右股直登沢（吉谷川、中村、渡辺興、住吉）が登られている。

一九六〇年（昭和三十五年）の夏はサツシビチャリ沢からベテガリ西面直登沢（酒井、末兼、牧）、平均斜度三〇度、高度差一一〇〇メートルの無名沢から一八三九米峰北面直登沢と、無名沢からコイカクシユ札内岳南西面直登沢（増山、鶴巻、黒川、河野）、春別川から、上部を尾根に逃げるのだが、カムイエクウチカウシ岳左股直登沢（西村、橋本、内藤）、ソエマツ沢からソエマツ岳（高巻きの連続であったが）とピリカヌブリ岳へのそれぞれの直登沢（大井、中沢、福島正、坂田、岳石）などの記録のない直登沢の廻行がいずれも、アタックまたはそれに類似した形式によって登られている。

直登沢のラッシュであった。

ユニークな沢登り

一九六一年（昭和三十六年）にもまた多くのパーティーが直登沢を目指した。ニシユオマナイ沢から中ノ岳アタックと神威岳の直登沢（高橋、本間、安田）、ペテガリ川、中ノ岳北面直登沢（黒川、鶴巻、河野、大山）などの初遡行がある。この年、ユニークな沢登りが現われた。目指したのは直登沢ではないのだが、「まあ日高の中級」とは言っているが、その後の直登沢への沢登りにおける生活技術に最も大きな影響を与えたと考えられるロビンソンクルーソー的山旅である（渡辺興、市村、山口、神谷正、一九六一年七月、本誌「さすらいの日高」の項参照）。春別川から札内川へ降りるコース三週間を一日三五〇グラムの最低限の食糧を持ち、不足分はイワナと山菜で補うことにして食糧計画をたてた。装備と言われるような物は特になく、出発時の総重量は一人四貫目の軽快な沢登りであった。貯蔵用の身欠鯉風のイワナに蛆のわいたものを食べなければならぬこともあったのだが、イワナの燻製を弁当に直登沢の偵察や意欲的な沢登りをしていく。それほど痩せることもなく、燻製イワナのお土産まで持って山から出てきたのである。悪天候による洪水など、自然に頭をさげなければならぬところでは頭をさげ、イワナが釣れるか釣れないかという不確実さからくる空腹を経験しながら、適応できる生活の幅を広げている。また、この山行は食糧、装備とも相当の部分を省くことが今後可能であることを示唆していた。これらのことが、後の直登沢の登攀に大きく影響していったのである。

新しい直登沢へ

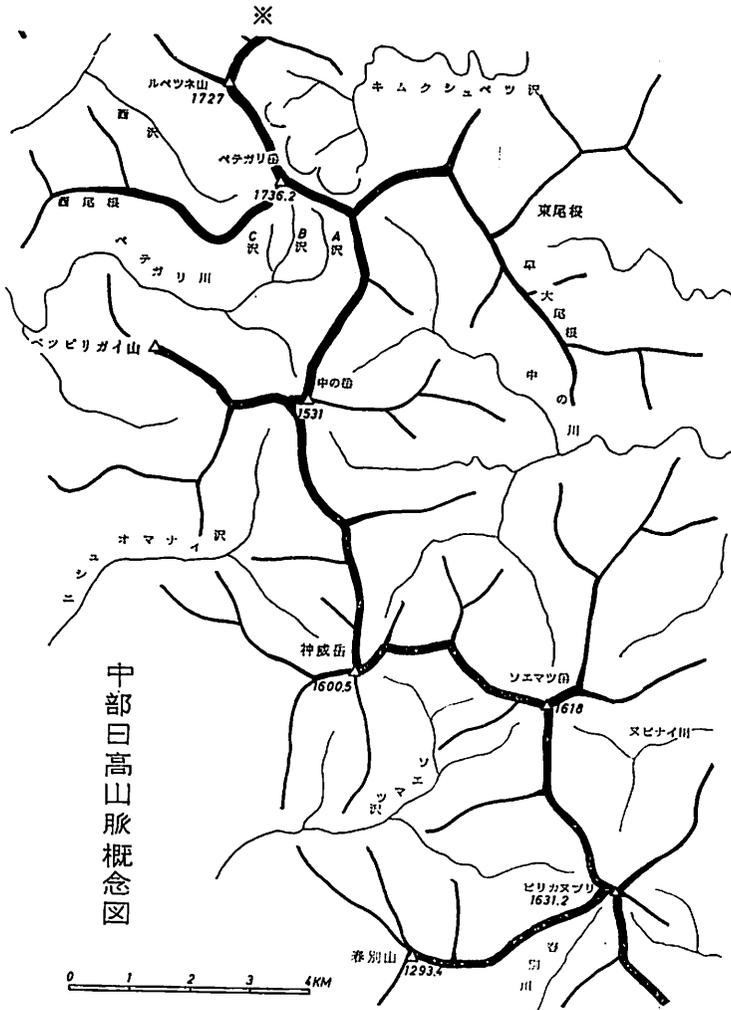
翌年、一九六二年（昭和三十七年）になると、先のロビンソンクルーソー的山行の経験から学んだことが、実際の直登沢の沢登りに応用されるようになってくる。神谷正、伏見、瀬戸は行動日七日、停滞日五日で、西沢→ペテガリ岳→中ノ川二股→中ノ岳→ニシユオマナイ沢→神威岳→中ノ川奥二股→ソエマツ岳→ヌピナイ川のコースで登りに四本、下降到

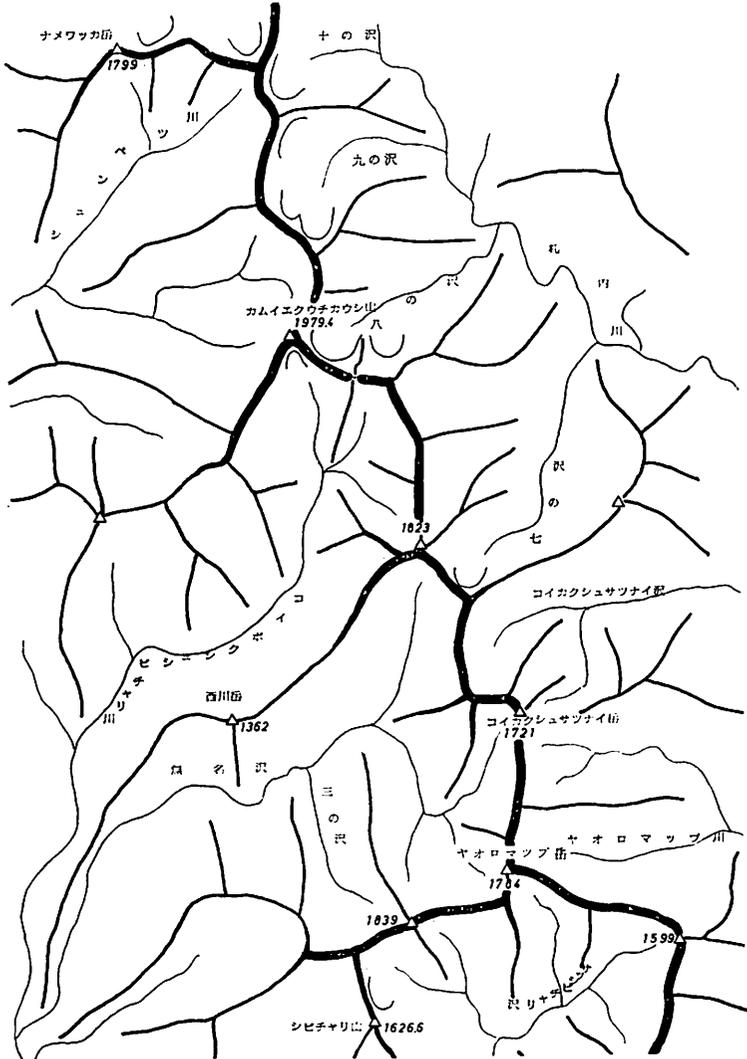
三本の直登沢をトレースしている。これは、いままでのワンダリング形式の生活とアタック形式の山登りの行為の両方を結びつけたものである。前年の渡辺興パーティーがイワナを食糧の計算に入れて空腹にのみたその分だけ余分に食糧を持って行ったこと、前年、小屋がけに用いたビニールシートのかわりに軽いリッポン・テントを使用したこと、ヌカ蚊の攻撃をのがれるためと、保温のために、シュラフ・カバーを持って行ったことなどを除けば、軽量化はほぼ、前年の渡辺パーティーに準じている。また、ザイルは軽くて簡単に、億劫がらずに使用できるφ八ミリメートルの四〇メートルを一本使った。サブザックは大型でヤブこぎの際にひっかかりにくいということでポケットも何もついていないものであった。その当時、ルームで流行しはじめ、のちに、本州で、北大の「日高ザック」と称されるようになったのはこの頃のザックがはじまりと考えられる。キスリングはそれ自体の重さのためだけでも、夏の日高から姿を消そうとしていた。

同じ年、春別川、ピリカヌブリ南面直登沢（増山直義、上野八郎、藤野明治、橋本甲午）サツシビチャリ沢、ヤオロマッブ岳南面直登沢（尾崎顕一、沢田義一、庵谷晃）などの困難な直登沢が初めて登られた。

一九六三年の夏になると、前年、軽量化によって可能になったアタックしながらワンダリングする形式が既に一般化している。ソエマツ沢、神威岳南東面直登沢（瀬戸純、米道裕弥、小河孝、松田疆）、ニシュオマナイ川、神威岳直登沢（沢田義一、神谷晴夫、高松宗彦）が登られた。また、伏見らはベテガリ岳からソエマツ岳を沢↓峰↓沢で結んでいるし、橋本甲午らは同様の方法でソエマツ沢、ソエマツ岳南西面直登沢を目指し、上部で尾根に逃がっているのだが、これらはいずれも、連続登攀といえれば大げさであるが、ワンダリングとアタックと両方を満足させる山行であった。

その後、更に尖锐な直登沢の登攀がなされているのだが、その主なものをあげると、無名沢、一八三九米峰北面直登沢（岡田勝英、須田長良、斎藤捷一、一九六四年七月）、サツシビチャリ沢、一八三九米峰南面右股直登沢（佐野芳雄、岡沢孝雄、大谷文雄、遠藤一、一九六七年七月）、無名沢、一八二三米峰南面直登沢（西信、岡田勝英、岸本正彦、一九六七年八月）などの初登がある。この時の無名沢から一八二三米峰への直登沢にはかつて「誰が日高に三つ道具を持って来るだろう」（滝沢政治、部報八号）と言わしめた二段滝があるが、このあたりのことについて岸本正彦は部報十一号に「マコちゃん





※
(右頁の左上端につづく)

(故西信)は、なし崩し的に登りだした。この沢の特長は一見絶望的に思えても諦めてはだめだという教訓的な面を持っていること。なかならず水カーテンの下の岩は少々滑り易いけれど、微妙なホールドやスタンスがある。結果から言えば、我々は登り自体には三つ道具もザイルも使わなかった。しかしいずれ日高でもアブミ、ボルトが登場するに違いない。これがまあ時の流れというものだし、次の時代の人々が非ドミノ理論的にそれらを使いこなせたなら、当然というものだ。」と記し、次に流行するであろう直登沢の登行形式を予測している。そして、一九六九年八月、神谷晴夫、佐野芳雄、大村富士夫は中の川、中の岳南東面直登沢を三つ道具を駆使して、沢身を少しも巻くことなく、初めて忠実に登っている。直登沢の都合から頂上まで偵察も含めて四日を要している。この山行を境に直登沢は更に限定された新しい直登沢として岩登りの対象となり、この頃までには主稜線のピークへあがる直登沢はほとんど登られ、のちに支稜線のピークへあがる直登沢、例えば、キムクシュベツ沢、ボンヤオロマップ岳西面直登沢(一九七五年七月、岸川啓二、土田直行、太田裕司、平岡申行)などが登られるようになる。

このような直登沢ラッシュの状況下のなかで、我々は一九六八年(昭和四十三年)八月、ソエマツ沢、ソエマツ岳南面直登沢に仲間をまた一人失うことになる。一八二三米峰直登沢を「なし崩し的」にザイル無しで登った時のリーダー西信は、滝の高捲き中、転落死した。

ここでひとまず、この当時のルームの様子を語っている部報一一号、「七年の歴史、紀行、研究」の中の昭和四十三年四月～九月の幹事会の報告を引用して、あえぎながら辿り着いた「直登沢」への道のクロニクルの区切りとしたい。

夏山の計画は一八パーティが大きな山行として出された。過去六の沢遡難当時の夏山計画は二〇パーティを越えていたが、この期の計画はその質においてより高度であったと言える。夏山一回戦と称する日高の沢歩き(ニュアンスでは沢登り)は二年班において、当時各頂上への直登沢中、その中を廻行することが、大きな滝等ではほとんど不可能であると思われる五つの未登沢を、三つのパーティによって登ろうと考えていた。

日高の直登沢にルームがなし崩し的に取り組み出したのは三七年頃からであり、それ以降またたくの間に未登の沢は消え失せた。当然のことを言うが未登は消えたが沢はあり、困難さは何時まで也行く者の側の容量と比例しているだけである。この頃残されていた沢はいずれも過去幾パーティカが行こうとし結局尾根に追いやられたものであり、その中の悪さは想像にかたくない。今一度述べるならば、未登、既登の間の問題は山自体の数量的なある種の濃度ではなく、行く者の好みといわゆる疑問の多寡にかかっている。我々の持っている技術や把みどころのない意欲といったもので果して充分に対処できるのか、という疑問は少数の上級生により指摘されていた。

直登沢——その意味するもの

これまで、積雪期のことには何も触れないまま、この「自然の路」をたよりに直登沢へ至る北大山岳部の長い踏跡を辿ってきた。その間、筆者の脳裡をかすめるのは、その時々に出会った日高の沢の遭難のことである。遭難のたびに、一部修正、例えば冬であればどの位までスキーを使って沢を遡行し尾根に取り付くのが良いかなどということが決められた。また、うち続いた遭難事故の「つかの間の晴れ間」の時代にあつて昭和三十四年当時の橋本正人らの幹事会では、冬の日高の標高八〇〇メートル以上では沢をつめるルートはとらないという申し合わせなどがあったのだが、北大山岳部独自の山行形式——それは絶ちがたい沢への執着、冒険への意志、直登沢への憧れなどによって形成されているものなのであるが——それは揺ぐことなく伝承されている。この山行形式、特に、夏の直登沢へと辿った思想がそのまま、北大山岳部の冬の山行形式の大部分に影響しているのではないかと思わせるような冬と夏の類似点を認め、そこに、遭難の遠因を見る思いがするのである。沢から離れられなかった宿命であつたり、日高の山旅のツキ物のせいにするには先にみまかつた先輩に対して、また、これから育っていくであろうパイオニア達に対して、あまりに無責任ではないかと考える。ペテガリ岳をめざして、コイカクシュ札内川を遡っていった先輩八名を雪崩に失ったあの山行は、まさしく、直登沢、しかも冬の直登沢の沢登りであつた。そして、長髪ルート（冬尾根）を開拓することによって、一部ルート修正がなされたにすぎなかつた。「天下に不明を謝す」とした北大山岳部は、再び「一九六五年札内川雪崩」によって十の沢の出合の雪洞

の中に眠っていた六名の仲間を失うのである。「平均斜度六度の緩やかな本流に長さ一キロメートルにわたり埋め尽した日本国内の雪崩としては最大規模」などという説明はなんの慰めにもならなかった。ルートの一部修正では、この遭難を避けることはできなかったのである。

一九四七年（昭和二十二年）早稲田大学山岳部は小島六郎監督のもとに、暮れから約一カ月にわたって、中の川とヤオロマップ川を分けるペテガリ岳、東尾根（通称、早稲田尾根）を辿りペテガリ岳に到着した。この戦後の日高山脈の幕あけにふさわしい記録に対して、「スキーを駆使して自由に沢を歩き、小人数のスピーディな登山を得意とした北大山岳部の行き方」とはただ「異質なもの」（北大山の会編「日高山脈」一九七〇年、茗溪堂）としてとらえているだけで、そこから何物も汲み取ってはいない。筆者が参加した数少ない山行の中にさえ、随所に、何の疑いもなく「沢ツメ方式」を受け継ぎ、何の裏付けもなく後輩に伝え、僥倖を頼りに登り降りした沢のなんと多かったことか。ここに自責の念を込めて具体例を記しておく。

一九六一年（昭和三十六年）暮「冬の無名沢」（部報九号）は雪崩の巢の中にいるようだった。それが幸いし、函を埋めることになり、結果的には楽に一八三九米峰に到達している。（のちに札幌山岳会の横田英雄他三名は一九七五年一月コイカクシュサツナイ岳から無名沢へ下降し、一八三九米峰の北面中央リッジを登っている。）一九六二年には「冬の札内川」（部報一〇号）を夏の沢登りのように丹念に遡行している。筆者は、コイカクシュ札内川出合いの飯場から橋本甲午と一緒に一日で往復したヤオロマップ岳や、七の沢からの一八二三米峰、六の沢より十勝幌尻岳、キネンベツ沢から札内岳、そして最後に、本流をつめエサオマントッタベツ岳を登った。その途中、十の沢の合流に泊っているが、その場所は「一九六五年札内川雪崩」遭難の雪洞地点とほぼ同じであった。一九六五年（昭和四十年）春、我々は日高の沢歩きを黒部川の源流に持ち込んでいる。そこはカモシカの楽園であったのだが、本州での沢のルールを冒してまで人は近づこうとはしない危険な楽園であったのかもしれない。（春の東沢谷遡行、部報一〇号）。これらは結果的には遭難には至らなかったのだが、この頃の山行記録には、かろうじて生還といえるような同様の形式の山行を見出すのはそれほど難しいことで



スビナイ川上流

鮫島惇一郎



中ノ川，中ノ岳南東面直登沢

神谷晴夫



チャムラン隊員とシェルパ

チャムラン遠征隊



チャムラン登路

チャムラン遠征隊

はない。例えば一九六一一年暮、増山パーティは糠平川で入山三日目の荷揚げの帰途、全員七名小さい雪崩に遭い、完全に埋った二、三名を救出したということである。その時のことを、「沢の状態も非常に悪く今日通って帰って来たのも幸運であるような気がする」と簡単に記しているが、我々のこの頃の山行に対して、「登山というのは我々の掌握しきれぬ範囲は小さく、不可抗力とかカバールしきれない面が沢山ある。」などとほんとにも言えないであろう。

十の沢の遭難以後、「沢ツメ方式」についても真剣な討議がなされてルームなりの結論を出している。「危険だからと一概に沢筋ルートを禁止することは意味がない。そうした雪崩の危険度というものは、あくまでもその時点での状態によるものであるし、又、単に危険である、ということでも禁止するなら登山そのものすら否定しなければならないだろう。誤解のないように一言付け加えるならば、それは何も無為無策のまま危険を犯してよいということではない。」(部報一―号)、として科学的データへのうえにたつて計画の検討をすべきであるとしている。そして現在、冬の日高においては主稜線へ取り付く尾根はほぼ決まっているようだが、それは自然に対して頭をさげる度合がすこし多くなつたということ、従来の山行形式がひっくり返つたということではないようだ。これまで、「直登沢」へ至る思想が北大特有の山行形式を規定しており、冬と夏の山行形式は、はっきりと分離されているとは言えず、類似していること、そのことが遭難の遠因となつたのではないかとここで述べてきた。はたして、十の沢遭難以後に行つた山行形式の変更は、北大山岳部の沢に対する意識の変革にまで至つたかどうか、答えはまだない。

直登沢の沢登りは、先輩達が歩いた開拓期の日高の沢歩きに較べれば、比較にならぬほど未知の要素のすくないものになつたかもしれないが、直登沢は北大山岳部が日高の沢に「なし崩し的」に追い続け、辿りついた頂点に位置するものと考えられる。

現在、地形的な意味で主稜線上のピークにあがる直登沢はほとんど登攀されてしまつたが、支尾根上のピークや分岐点へつきあがる沢など困難度において主稜線への直登沢を凌ぐ未踏の沢がまだまだ残っている。しかし、やがては直登沢の出合いの壁にペンキで矢印がつけられ、ダケカンバやハイマツの中に登山道が切り拓かれる時代が来るにちがいない。

しよせん、人類の發展史において「ある時代の終った道楽」なのだから、未踏、既踏はもはやそれほど問題ではない。我々が日高に求めたのは地形的な意味の直登沢だけではなかったはずだ。『直登沢』は今でも我々に何かを誘いかけてくれるのではないか。孤独な、何のお手本もない、バイオニーヤワークが問われる未知の世界への旅立ちを。それはピークを気にしないでのブラブラ歩きなのか、グアテマラの沢筋をはい回ってブユを求めている男のめざしているものなのか、冬の沢を捨てて長い支稜線を辿るのか、ネパールの氷河の研究に没頭する仲間のめざすものなのか、人それぞれの直登沢を求めている旅立ちであり、答えはない。何故なら、『直登沢』へは道はないのだから。

一部の山行をとりあげて、全体の流れを説明することはとても難しい。ここに引用しなかった記録、特に、他大学ならびに近年輝しい記録を持っている社会人山岳会の記録や、何も語らなかつたバイオニヤの行為の中にもっと魅力的な『直登沢』があつても不思議ではない。残念なのは、たとえそのような記録を発見してもそれを表現できなかつたであろう筆者の限界である。(タイ国への調査を数日にひかえて、昭和五十三年七月)

北大山岳部とヒマラヤ

渡 辺 興 亜

昭和三十七年五月三十一日、北大山岳部は東部ネパール、チャムラン峰（七三一九米）の頂にその最初の足跡を残した。それは創立以来三十六年目の、山岳部の歴史の一つの節となる出来事であった。それから十四年、山岳部は創立後五十年の日を迎え、新たな登攀の目標が模索されつつある。どのような山が選択され、どのような登攀が構想されるかはここからの課題であるが、その前に、北大山岳部の中で、ヒマラヤについて、何が、いつ考えられ行動されてきたかの歴史を振り返ることは無意味ではあるまい。

冬期ベテガリ登頂、日高金山縦走などとともに北大山岳部にとっての一つのエポックメイキングな出来事でもあるチャムラン峰登頂も決して一朝にしてなされたものではなく、中央高地や日高での登攀とその行為の中で培われてきた絶えることのないヒマラヤ登攀への傾倒がその背景となっている。またチャムラン峰登頂以降の十四年の空白の意味するところも大きい。次なる登攀にとって、それは埋めざるを得ない空白であり、またその空白の中に意味あるものが含まれているならば、それを明確に認識し、新たな発想のもとでの将来の登攀の一つの礎とせねばならない。

登山者にとって、山はさまざまに異なった抽象として在存している。日高の冬の峻厳さに、あるいは又、夏の沢の清冽さに印象を抱くものもいるように、ヒマラヤ山脈への発想、憧憬、そしてそこでの行為からの感動はさまざまに形をとる。

それが登山の思想の中で抽象されるとき、それは一層複雑な、時には発揚した、また時には屈折した論理となり、行為に還元される。北大山岳部におけるヒマラヤ観の変遷は、それ自体が五十年の歴史の中の部の登山思想の流れの一つでもある。山岳部にとって、かつてそこでその歴史の幾分かの担い手となった者にとっても、その歴史の検討は、これから歩むべき方向の中に、ヒマラヤがどのような形で存在してくるかを考えることであり、それはまた、登山の現代的意味を築く上での興味ある課題となるろう。

かつて北大山岳部がスキー部から分離し、独立したとき、「山登りとは何か」についての真摯な議論が為されたはずである。その多くは歳月とともに風化し、形骸となってしまったものもあるが、五十年を経た今、再びその今日の意味を問ひ直すべき時期にきているのではあるまいか。かつて多くの未知を含んだ日高山脈が意味ある議論の前提となったように、今ヒマラヤ山脈がそれに代るものとして、われわれの前に存在しているのである。

二

昭和十一年度

談話会 六月四日 学生ホール五号室にて、エクスペディションの意義と登山精神に就て

談話会 六月十日 学生ホール六号室にて、前回の議論の発展

部報六号の年報の中に右のような記事がある。北大山岳部の記録の中で、エクスペディションについて公式な最初の記事である。詳しい内容については右の記事以上は何も残っていないが、エクスペディションの語が当時も「海外遠征」と解されていたならば、当然この議論の中でヒマラヤ遠征が大きな話題となっていたにちがいない。

十一年秋、立教大堀田弥一らはナンダ・コットに遠征し登頂した。日本人として最初のヒマラヤ登頂である。

立教大のヒマラヤ遠征は当時の大学山岳部に大きな衝撃を与えたであろうことは想像に難くない。六月四日、同十日と一週間をおいて二度続けられた談話会では白熱した「何かこれに関連した」議論があったはずである。

翌十二年一月二十五日、ペテガリ岳登山計画発表会が行なわれ、その翌年からはじまるわが部のペテガリ攻略の幕が明けられた。このペテガリ計画の前提となった先駆的冬期登攀には四年、トッタベツ川より幌尻岳（須藤ら）、七年、同じくトッタベツ川より戸蔭別岳（照井ら）、それに引き続く八年、札内川上流の山々の登頂（坂本ら）、など冬期日高開拓期の山行があるが、八年暮れから九年にかけて行なわれた徳永正雄らによる極地法による石狩岳、音更山、ユニ石狩岳登山の影響は見逃せないであろう。徳永が部報に書いているように、この計画は明確にポーターメソッドの運用に重点が置かれたものであって、石狩連峰が選ばれたのは、その地域がその展開に適していたからである。日本におけるポーターメソッド適用の先駆としては六年暮から翌年にかけての京都大、西堀栄三郎らの大沢口からの富士登山があり、西堀らの試みは後に京都大、今西錦司が率いる白頭山遠征に引き継がれ成功を収めている。極地法の導入は、単に目新しい登山技術の習得といった程度の興味にもとづくものではなく、当時北大山岳部にとって最大の課題であった冬期のペテガリ登頂への手懸かり、あるいはそれをふまえての何処かへの『海外遠征』の一里塚としてとらえられていたと思う。徳永正雄の夭折に際し、相川修は追悼の中で次のようにのべている。「中学を卒業し、予科を経て本科へと、札幌近郊の山々から中央高地、日高山脈へと続いた。果てはヒマラヤへと黙々と領いて居たのもあった。（中略）かくして部の独立した時代の感覚的登山、情操的登山から理論的なる登山への飛躍の気運を作つて来た。」

相川の徳永正雄に対する追悼文は、山岳部独立当時のやや精神主義的登山から、近代的アルピニズムへと転換していった、当時の山岳部の雰囲気をよく伝えている。徳永正雄、本野正一など、その中心となった人々の心の中に、登山の近代化の行く先にヒマラヤ登山が据えられていたと想像することは許されるだろう。合宿方法の合理化、高所露営の新しい技術の導入など活気に満ちた当時の山岳部の有様が年報の行間ににじみ出ている。

十一年からペテガリ遭難の前年十四年までの部報中の年報には次のような記事がみられる。

昭和十一年度

幹事会 五月二十九日 於学生ホール内ルーム、先年度卒業生記念寄贈「ヒマラヤ地図」の購入の件

木暮理太郎氏に物を聞く会 十一月二五日 氏の思い出話、ヒマラヤ、エクスペディションの話等々をうかがう。

昭和十二年度

金曜会 五月二八日 一九三四年カラコルム遠征隊に就て 有馬(洋)

昭和十三年度

研究会 十一月四日 カラコルム、ヒマラヤの登山史 有馬(洋)

研究会 十一月二四日 シッキム・ヒマラヤの登山史 林

研究会 十一月九日 ネパールヒマラヤの登山 林

研究会 十一月一六日 一九三八年度ヒマラヤ登山 林

翌十五年一月五日、ペテガリ登頂を目指した葛西、有馬(洋)ら八名はコイカクシュ札内川で雪崩に遭遇、ヒマラヤ遠征の宿望を懐いたまま不帰の人となった。一方中国大陸での戦雲はこの頃以後次第に厚くなり、たとえ彼等が札幌に元気に帰っていたとしても、ヒマラヤ遠征そのものが遠い夢となっていたであろう。

七、八年頃から、ペテガリ遭難の直前十四年頃までは、北大山岳部が最も活発であった時期の一つであり、多くの有為な人材を輩出した時期であった。ヒマラヤ登山も単にそこがれの段階ではなく、金曜会、研究会の記録にみられるようにヒマラヤ登山の動勢に関しての真摯な研究が進められていた。登山技術、戦略の研究とともに高所における生理学的諸課題、特に高所順応の問題については金光正次が部報四号(昭和八年)に「高山における風土馴化作用と酸素吸入について」と題して論文を寄せている。高所順応の生理機構は現在にあっても高所登山における基本的課題であるが、金光のこの時期における研究は驚くべき卓見といえるだろう。またヒマラヤ登山をスポーツ・アルピニズムの展開以上の、ヒマラヤ山脈の自然認識を含めた総合的登山としてとらえているのは興味深い。ヒマラヤ登山において、タクティクス以上にヒマラヤの自然の正確な認識が、より高度の登攀を可能にすることは現在においてもますます重要となっているのである。

七、八年からの北大山岳部におけるヒマラヤ志向は、一つの流れではあっても、山岳部全体の潮流ではなかった。山小

屋派から岩登り派、あるいは水平志向から垂直志向まで、北大山岳部は幅広い志向を貴ぶ気風があり、この個人の志向を大切にする気風はとぎれることなく現在も続いていると思う。戦前におけるヒマラヤ志向は特に葛西、有馬（洋）、林など札幌一中出身者が中核となり、一つのエポックメイキングな時代を作った。ペテガリ遭難前の黄金時代には、これら前衛派の人々と古い時代の人々との間に、北大山岳部の伝統に関する議論があったと聞く。十一年頃北大山岳部の目標に關しての現役と先輩のディスカッションがヘルベチア会談として数度にわたって持たれたと聞くがその記録はない。おそらく、チャムラン遠征前夜の、現役、若手先輩と古い先輩との間の議論に似た、鋭くはあっても閉鎖的でない、共に山岳部の未来の展望では共通した議論であったにちがいない。

三

多くの人材を失った昭和十五年のペテガリ遭難のあと、冬期ペテガリの登頂の企ては続けられ、次第に登山資材や食糧の調達が困難となった十八年一月、渡辺隊の登頂成功によって一つの終止符を打った。そしてこの山行は、戦前の山岳部活動の終了でもあった。数年間の空白ののち、二十三年暮から二十四年にかけての山崎らによる北戸蔦別岳冬期初登頂は戦後山岳部の幕開けをしるすものとなり、再び活発な山行が再開された。ペテガリ岳冬期登頂から八年目の二十六年から二十七年の冬期に行われた十勝大雪縦走は、山岳部が一つの高まりに達した出来事であったと思う。

戦後の山岳部における公式行事の中にヒマラヤの文字があらわれるのは、「昭和二十五年、研究会（九月二一日）ヒマラヤについて 野田」が最初である。⁽⁴⁾

翌二十六年九月、サンフランシスコで講和条約が調印され、一つの戦後が終った。まだ日本人が自由に海外に飛び出していくには制約の多すぎる時代であったが、折りしもネパールの開国とあいまって占領下の桎梏から解放された若者達には、この解放感がヒマラヤ志向となり、いつかは再びヒマラヤ遠征が実現する期待としてとらえられたのである。

ヒマラヤ遠征は意外に早く、現実として始まった。二十七年には、マナスル偵察が京都大、今西錦司らによって行なわ

れた。翌二十八年には日本山岳会によって第一次マナスル登山隊が派遣され、北大山岳部からは山崎英雄が参加した。日本隊は、七七五〇米の地点で登頂を断念したが、その同じ年に英国隊は長い宿望を果たし、ヒラリー、テンジンの二人がエベレストの頂に立った。

わが国の山岳界にとってはこの時が、ヒマラヤの時代への幕明けとなり、ヒマラヤは大学山岳部にとっての明確な目標となっていた。京都大学、早稲田大学、慶応大学らのヒマラヤ、アンデスでの活躍は目ざましいものがあり、海外遠征は大学山岳部にとって、現実の課題となった。

戦前に大きな高まりを見せたにもかかわらず、北大山岳部にとってのヒマラヤ遠征はマナスル偵察からさらに十年の年月を要している。山崎、橋本（誠）らのマナスル隊参加にもかかわらず、少なくとも表面的には、札幌に何らの海外遠征の動きはあらわれなかった。現役は日高に熱中し、十勝大雪縦走から五年目の三十一年、懸案の日高全山縦走の成功に至っている。しかしこの十年、海外遠征への志向は確実に胎動していた。

北大山岳部における海外遠征志向は、山岳部が大きな登攀目標を設定し得たとき、そしてそれが実現されたときに最も高まっている。戦前のベテガリ攻略期はその一つの符合期であるが、戦後では十勝大雪縦走、日高全山縦走の頃がそれである。再び二十五年、十勝大雪縦走前夜の頃からチャムラン登頂に至る時期の山岳部の年報を見ると³⁾

昭和二十五年度

研究会 九月二一日 ヒマラヤについて 野田

昭和三十一年度

例会 六月一日 木崎OBを囲んでエクスペディションについての座談会

昭和三十三年度

例会 二月七日 ヒマラヤ研究会について

例会 二月一四日 ヒマラヤ研究、探検について

翌一五日、ヒマラヤ委員会の新設を発表、遠征に全力を注ぐとある。それからの数年はチャムラン遠征前夜ともいえる一つの時代を迎えることになるが、その前に、北大山岳部の最後の動き、思想に大きな影響を与えた一つの流れの発生についてふれる。

四

エベレストが登頂され、わが国からも第一次、第三次マナスル遠征をはじめ、アンデス、ヒマラヤに遠征隊が送られるようになった昭和二十年代の後半から三十年代の前半にかけては、札幌では十勝大雪縦走という戦前のペテガリ攻略以来の組織的な山行に成功をおさめ、改めて山岳部が戦前の最盛期の實力に復帰したことへの自覚から、さらに盛り上ってきた登山への意欲が日高金山縦走の構想となりつつある時期であった。この時期の初期は、大学制度の改革期にあたり、三年間の予科をもつ在学年数六年の旧制北海道大学から在学年数四年の新制大学へと切り換わり、在籍年数の短縮が山岳部の實力にどのように影響するかが真剣に検討された時期であった。外的な大きな刺激と内に潜む多大な不確定さが混在した時代といってもよからう。

三十年、北大山岳部に最初のヒマラヤ研究会が設立された。最初の研究会には木崎、河内、和田、永光、加納（正）、安藤らが出席している。⁽⁵⁾ 彼等の多くはその後のわが部におけるヒマラヤでの活動に大きな影響を与えた人々であり、その意味からしてこの研究会の発足は歴史的に大きな意味をもつものであるといえるだろう。

さて、ここにはじまった明確なヒマラヤ志向の流れについてのべる前に、わが部の登山思想の潮流についてふれておきたい。

わが部には創立以来いくつかの登山思想の流れがあったと思う。これは一つの仮説として提示したい。その源流となった人々は伊藤秀五郎（一九〇五—一九七六）、中野征紀（一九〇四—一九七八）、および加納一郎（一八九八—一九七六）の三人である。山岳部の創立に大きな役割を果たしたこれら三人の人々は、その後の五十年に亘る山岳部の歴史を通じ

て、人々に大きな影響を与え、いずれも不帰の人となった。伊藤秀五郎が「精神主義的傾向の強い修養登山」思想の源流とすれば、加納一郎はその対極であり、「探検的登山」の源流である。中野征紀はその幅広い登山歴や第一次南極越冬隊に副隊長として参加し、さらに五〇代を越えてからチャムラン登山隊長として第三キャンプ（六三〇〇米）まで登り、陣頭指揮に当って登頂成功の原動力の一つとなったという輝ける経歴が示すように、「実践」を重んじた人であった。徹底した「遊び」の思想がその底流にある。

戦前の山岳部では修養主義的登山が「正統的」であり、少なくとも山岳部「正史」の中には「探検的登山」や「遊び」としての登山の思想はその正当な位置づけを得ていない。

ヒマラヤ研究に集まった人々が「探検的登山」ないし「探検」をその根底志向として持っていたことは、その後のこの研究会の歴史が示しているし、また加納一郎の直接のおよび間接的な影響を受けていることも無視し得ない。その観点からすれば、三十年代からの山岳部は、それまでになかった、少なくとも戦前の山岳部では表立って在存し得なかった登山思想が新たに「一つ」付け加わり、それまでの山岳部とはやや異なった体質をもつに至ったといえるだろう。

三十一年一月、この研究会に参加した人々によって、おりからはじまった南極観測に対して、犬ゾリ導入のサポートの為極地研究会が設立された。この設立には加納一郎、西堀栄三郎の直接的な働きかけがあったといわれる。この研究会は「極研時報」というかなり高度な極地研究報告を残した他、小林(年)を第一次南極観測隊員として送り出している。当然、中野、佐伯などの第一次越冬隊参加とも無縁ではない。木崎は第四次南極観測に参加し、やまと山脈への初トラバースに重要な役割を果たし、またその後の南極観測の、特に内陸調査に、研究、人材の両面にわたって大きな影響を与えた。

ヒマラヤ研究会が残した記録の中の一つにガルワル・ヒマラヤ登山計画書がある。おそらく、この計画書は文書として残る北大山岳部にとって最初のヒマラヤ計画である。その目標は当時の未登峰、ティルスル東峰などであるが、興味深い点は、この計画が明確に軽遠征隊（ライトエクスペディション）を旨指した点にある。現在では、七〇〇〇米級の登山ではそれがむしろ普通であるが、当時まだヒマラヤ遠征といえは重装備の、悪くいえば大名行列的なものが常識であった

点からすれば、当時の日本ではかなり卓抜した発想と云ってよからう。その当時の大学山岳部が一般に大合宿主義をとり、個人の山行より組織としての山行に重きを置いていた中で、北大山岳部は一つの伝統として個人山行を主体としており、また登攀戦術としてラッシュ・タクティクスに重きを置いていた系譜が、軽遠征思想の基礎となっていたといえるし、また『探検的登山』への志向が国家的事業―重遠征の図式に反発したともいえる。

ヒマラヤ研究会はその後も中断、再開を繰り返し、時には極地研究会として再開もあったが連綿としてチャムラン遠征に至るまで続いている。ここに一冊の記録「ヒマラヤ研究会」のノートが残っている。その中の記事から研究会での議論をうかがい知ることができる。

三十一年 十二月八日 アビ・ナンパ山群の登山、アルパイン・ジャーナル記事の紹介 宮地

現地食について『メモ』、外米のまずさ。果物は少ない。シェルバはラマ教徒也。

三十二年 五月二一日、探検的な方法をくみ取るため、中央アジア探検史研究を行う。純スポーツ的にあらず、純アカデミズムにあらず。英会話の練習を各自で行う。

ある人々にとっては、この『探検』志向の新しい潮流は北大山岳部の伝統に対しての一つの不協和音と考えられていた事も事実である。だがこの新しくおこった流れは途絶えることなく、その後の山岳部の中に、時には大河として、またある時はせせらぎとして流れつづけた。

五

昭和三十三年、四年から四十年にかけての数年はそれ以後にはじまる高度経済成長時代を前にしての、いわば最後の戦後の時代とも言える時期であった。外貨の持ち出しは依然としてきびしい制限下であり、また経済情勢もその後の時代とは比べものにならず、海外遠征は個人的負担などでは手にとどくものではなかった。エリート集団としての大学山岳部の、しかも戦前からの伝統をひきつぐ有力山岳部だけの独占事業に近いものであった。

その頃、海外遠征への一つのはっきりした動きが札幌に起っていた。当時この動きの中にあつた鈴木は次のように書き残している。⁽⁷⁾ヒマラヤ研究会について述べたのち、「今後は名前を『極地研究グループ』と改めて、研究会が再発足することになった。これはヒマラヤも砂漠も、何もかもひっくりくるめて『極地』と呼ぼうという、われわれ探検派を自称する者のうぬぼれの結果からつけた名前だった。スポーツ登山というより探検的行動の好きなきな者、あるいはスポーツ登山で海外遠征を夢見ている者の集まりだったのである。(中略)ところどころの『極地研究グループ』——いわゆる『極研』——がいくつかの分科会をつくって、積極的に研究を始めたのは三十四年の春からだ。このころまでに、カラコルムやネパール・ヒマラヤ、ブータン・ヒマラヤなどの文献調べもかなり行なわれてはいたが、結局、海外遠征の第一候補地としてアラスカのセント・エライアス山群が選ばれた。計画の立案もすすみ、夏休みには上京した学生が某船舶会社を訪れ、運賃を値切ることに成功してきた。アラスカ大学への照会もすすめられていた。(中略)しかし現役の学生たちにできることはこの辺が限度であつた。」しかしこの失敗に終わった最初の企てもそのまま消えることなく、チャムランに至る道のはじまりを告げていたのである。その後、アピ計画、カンジロバ計画と計画だけは次々に出されたが、実現に至るには未だほど遠い状態にあつた。しかしこの若者達の熱心さは確実に何かを生みだしつつあつたのである。一部のOBがこの動きに同調したのをきっかけとして、三十四年一月には山の会臨時総会が開かれ、ヒマラヤ委員会発足の決議をとりつけるまでに至つた。しかしこれはいささか事をいそぎすぎた趣きがあつて、会則が改正され、ヒマラヤ委員会が山の会の正式組織として認知されるに至るまでには更にその後一年を要している。

それからチャムラン遠征に至るまでの経過は山岳部報九号の公式報告に詳しい。最初の遠征目標はカンジロバ・ヒマールであつた。なぜか当時の山岳部には西部ネパールへの志向が強かつたようである。その時代の西部ネパールは知られざるヒマラヤとしての要素が強く、カンジロバ・ヒマールの主峯もさだかではないという状態であつた。

隊長として中野征紀が推挙された後、七月には遠征隊員が決定した。副隊長の岡本は十勝大雪縦走にサポート隊員として参加した戦後派の中堅であり、小林(年)、永光、久木村はヒマラヤ研究会、極地研究会の設立に参加し、また永光、

久木村、安間（荘）は日高全山縦走隊のメンバーであった。最年少の鈴木は唯一の現役山岳部員である。翌三十七年三月、登山目標をチャムランに変更して、彼等はヒマラヤに発った。送った者達は、彼等が日本を出発できたことで、遠征は五割方の成功を収めたと考えた。そんな時代でもあった。

六

チャムラン遠征隊は三つの報告を残している。公式報告の二つは「北大山岳部報 九号」と「山岳 五十八号」に収められ、残る一つは岡本、久木村、安間、鈴木による「チャムラン—ヒマラヤの詩と真実」（ベースボール・マガジン社—昭和四十年）である。この三番目のいわば私記ともいえるものは、当時出版された数多いヒマラヤ紀行の中でも、その率直な真情の語りは白眉である。以下この中からチャムラン遠征についてのエピソードのいくつかを紹介する。

チャムラン遠征隊にはその遠征全体を通じて三つの難関があった。その一つは、当時の海外遠征のおきまりである日本出発までの過程である。資金難はさておき、外貨割り当ての獲得に難渋し、最終的には学術調査隊の形で出発した。これは結果的にはその後に多くの影響を残した。二つめはアプローチ旅行中のホング・コーラの廻行時に、最後のそれはチャムラン登路の発見に至る段階での出来事である。

ダーラン・バザールを発ったのは四月一七日であった。ダンクタ・サルバ峠を経由してグーデルに達し、ここから街道をはずれホング・コーラにアプローチ・ルートをとった。すでに四月二七日となり、当初の予定より相当の遅れとなっていた。しかし現地での情報では五日もあればグーデルからチャムラン降近くのメラ・カルカに達することができ、直ちに登攀に取りかかれればこの遅れを取りもどすこともできると楽観していたのである。だがホング・コーラの廻行は想像以上に困難であった。

「四月三〇日、四月も今日で終りだ。今日は朝から雨が降っている。この天気ではポーターたちがまた騒ぎだすだろう

と心配したが、今朝はおとなしく歩き出す。杞憂に終わったのはありがたかったが、なければならぬで、また彼らにしてやられたような気がしてくるから妙なものだ。」

「五月一日、今日は、ソルグ・コーラの左岸にある急傾斜の雪渓を登らなければならない。永光の偵察報告によると、固定ロープを張らなければとても登れないだろうという。(中略)しばらくすると、サーダーだけがひどくむっつりした顔で戻ってきた。この二、三日サーダーの機嫌がよくないのだが、今日はとくにひどいようだ。ルートの状態が想像以上に悪いのだと判断する。ポーターたちは今朝もだまって歩き始めた。今日は出がけに必ずひと騒動あるだろうと予期していたのだが、彼らもあまり道がひどいので毒気を抜かれてしまったのかもしれない。」

予想以上の悪路と時期遅れの深い残雪、その上の悪天続きに見舞われ、日程はどんどん遅れ、プレ・モンスーンの終りは近づく。

「五月二日、私(久木村)はキャラバンの先発隊として、岡本副隊長、アン・ゲルグ、道案内のバドゥールとともにホング・ルグンからワテルマ・コーラへの道を急いでいた。初めの計画では、今日あたりすでにベース・キャンプを設営し、第二キャンプか第三キャンプの作業をしていなければならない時期である。なのに、われわれはまだ目的の山にさえ近づけないでいる。われわれはみなあせっていた。ベース・キャンプができたときにはモンスーンが来てしまうのではないだろうか? 今度の遠征は登路偵察だけで終わってしまうのではないだろうか?」

だが彼等はこの困難を持ち前のチーム・ワークで乗りこえ、五月九日にはベース・キャンプの設営を終え、翌一〇日より登路の偵察が開始された。そして最後の難関を迎える段階によく至ったのである。

ノーマン・ハーディ(ニュージラランドの登山家)の助言に従い、チャムラン西尾根を偵察した隊員は、そこに雪のまったく付いていない黒々とした岩壁を見出した。さらにまわりこんで見た西北面は高い城塞の壁を見上げるように、その守りは完璧でとうてい人を近よせないものであった。

「沈黙に支配された無惨な退行が始まった。これは只事じゃないぞ! という気持が無気力な脳裡に浮んで消えてゆ

くが、その後の解決や対策がさっぱり浮んでこない。」⁽⁸⁾

遅れに遅れたキャラバン日程、やっとたどりついたチャムランの麓で見出したのは余りに予想とたがう状況であった。この絶望的な状況から脱け出す為には一人の男の洞察を必要としていた。あるいはこの日のために北大山岳部が準備していた人間かもしれない。このときの状況としてこう記録されている。「重い足を引きずりながらテント(仮のC)までたどりつくと、返ってきたのはなんと中野隊長の声ではないか。隊長が一人で登ってきたのだ。きつとルート偵察のことが心配でじっとしていられたのだらう。それを思うとまたしても気が重くなる。報われなかった一日が、ほんとうにうらめしい。(中略)三人とも早口にまとまりのない報告をしやべり始める。今日一日の結果をいかにうまく表現しようかと、それぞれいっしょうけんめい話すのだが、支離滅裂になるのはやむをえない。絶望をそのままさらけ出すのはめんどろにかかわる。しかしそうかといって事態は深刻なのだ。それに、第一われわれ三人の意見が統一を欠いているのだから、だまって聞いている隊長にはわからろうはずがない。(中略)やおらわれわれの言葉をさえぎった隊長は、まず一日の労をねぎらってから、隊長としてのルート決定に関する見解を述べ始めた。それによると、これは意外、われわれが予想さえしなかった南尾根に手ごろなルートを発見したというのである。われわれ三人の努力を無視するでもなく、ルートは南尾根にとったほうがずっとよさそうだと、隊長お得意の第六感の予想をとつとつとわかりやすく説明してくれた。」⁽⁷⁾

長髪ルートの発見以後は、再び若者の力と意欲が主役となり、頂上への道を次第に切りひらいていった。そして五月三一日、その頂をきわめた。

「徐々に高まっていく氷の斜面を長い時間かかって登りつめると、やがて斜面はゆるくなった。前を歩いてきたサーダが突然ピッケルをさして立ち止まり、近づく私に斜面の先を目でさし示した。『頂上だ。』そこには、巨大な氷のひさしの最後の高まりが青空と霧の接点に消えていた。」⁽⁷⁾安間はこう回想している。

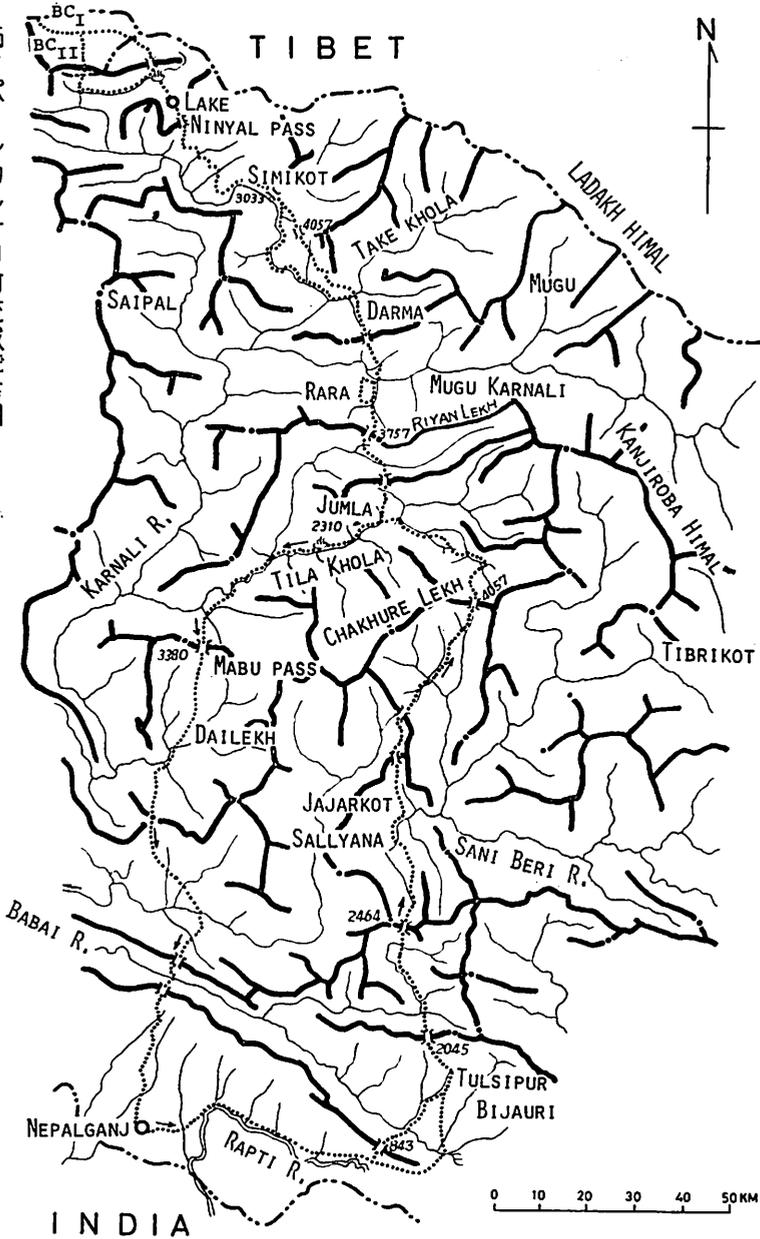
チャムラン遠征隊の持ち帰ったみやげの中に、ナラカンカール峰への登山許可書があった。ナラカンカール峰（七三三五米）は西ネパール最北西部に位置し、カルナリ河源頭の山である。近くにグルラ・マンダータ（七七二八米）が、また有名な聖湖マナサロワールにも近い。一九五五年、英人シドニー・ウイグノールはこのナラカンカール峰を目指し、国境付近で中華人民共和國軍に捕われ、タクラコットの獄窓に長く留められた。

なぜナラカンカールが北大山岳部にとつての次なる山として選ばれたかの経緯は詳らかでない。しかし、チャムラン遠征前の西ネパール志向の時代に、その最も辺境の、しかも知られざる地にある山としてのイメージがすでにあったと聞く。古くから山岳部に伝わる長谷川伝次郎「ヒマラヤの山旅」は、当時ヒマラヤを志向する者にとつての身近な古典であった。その中のカイラス山、マナサロワール湖およびチベット人の町タクラコットなどの秀れた映像がこのネパール最北西の地への親しみとなっていたのかもしれない。

ナラカンカール遠征隊は安藤久男を隊長に宮地、遠藤、橋本（正）、渡辺（興）および現地参加の小野田（東大）の六名からなり、昭和三十八年七月、日本を出発した。ナラカンカール登頂と西ネパールの地質調査を目的としたこの遠征隊は二つの記録を残している。「ナラカンカール紀行」（山岳 五十九年）および「北海道大学山岳部西ネパール遠征隊報告」（一九六四）である。

ナラカンカール遠征は登山行というより、むしろインドからチベット高原へ至る旅としての色合の強いものであった。八月二日、インド・ネパール国境の町ネパールガンジを発ち、灼熱のテライの密林を五日かけて抜けた後、シワリーク、マハバラートの山旅を続けた。白きヒマラヤの峰々が望見されたのはキャラバン開始以来一八日目であった。このカンジロバ山群の西端に位置するバトラン・ヒマールおよびシスネ・ヒマールはより北の峰を目指す遠征隊にとってはいずれもはるか南の山波となるはずの山々であった。九月七日、遠征隊はジュームラに到着した。そこは西ネパールの行政の中

西ネパールカナルナリ河流域概念図



心地であり、物資補給が可能な最後の町である。ここはまた、ナラカンカールへの道のほぼ中程にあった。ここからシミコットまでの道は英国の植物学者ウィリアムズの調査隊以外、誰も通った者はいない。探検行というにふさわしい旅が続いた。キャラバンの様子もチャムラン遠征の舞台となった東部ネパールとは相当異なっていた。

「東ネパールにくらべ西ネパールではナイケ制度が発達していないために、人夫集めには苦勞する。(中略)それでもジユムラ以南では五、七日ぐらいの行程をまとめて契約することが出来たのだが、ジユムラより北ではますますことがめんどうになって、人夫は村から村の一区間しか契約出来ないようになる。次の村が一マイル先にあればその村までしか荷物を運んでくれない。したがって一日に三つの村を通過するのであれば三回人夫集めをやって三回賃金の支払いをしなければならぬ。煩雜なことおびただしい。これは単なる習慣ではなくフラク制度といって人夫事情の悪いこの地域で政府が軍隊や役人の移動をスムーズにはこぶためにこういう制度をしているのである。」

数百年昔とかわらぬ旅であった。フラク制度も現地の人々にとつては有難くない仕組みで、遠征隊のためにジユムラから同行した警察官と村人とのトラブルは絶えず、その度ごとにキャラバンの進行はとまった。その上、自給自足の体制が強く、貨幣経済がほとんど発達していないため、いくら金を積んでも食糧を得ることは極めて困難であった。

九月二一日、シミコットに到着、キャラバン開始以来四十一日目であった。この時点ですでに当初の計画より十日以上の遅れとなっていた。シミコットはネパール人とチベット人の交易上の接点であり、ここより北はチベット人の世界となる。外国の遠征隊でここより先に行ったものはない。シミコットを過ぎると、地形はそれまでとは一変し、道はほとんど氷蝕地形の中を通過していた。五二〇〇米のニインヤル峠を越し、大きなU字谷を下り、最後の巨大なモレーン丘をすぎればらくの後、チベット人の村ジャンガがあらわれた。これまでの行程でナラカンカールの姿はついに見られず、この最後の村でナラカンカール峰そのものの所在を何としても確かめねばならなかった。

タクチェ・コーラとよぶカルナリ河の支流には三つのチベット人の村があり、それらは一つの共同体を営んでいた。ジャンガはその最上流の村である。遠征隊という奇妙な訪問者の訪れの報はジャンガより他の二村に伝えられた。集まった

三村長とも「ナラカンカール」の名前を知らず、この付近での一番高い山はとの間に「ニャモナニール」を答えた。そこへはタクチェ・コーラを遡行し、途中より西へ折れ、ブルキ・ラダを経由して達することを教えてくれた。

十月二日、二五頭のヤクに荷を担がせジャンガを出発、ニャモナニールへ向う。ブルキ・ラダはチベット高原のはじまりであった。そこからなだらかな地形が続ぎ、その先に、雪をいだいた巨大な峰が望まれた。それがニャモナニール峰であった。

道はブルキ・ラダから北西にむかい、再びタクチェ・コーラの上流に合する。この付近のタクチェ・コーラはチベット高原上に刻まれた氷蝕谷の巨大なU字の底を流れている。その源頭はモレーン丘となっており、巨大な礫の堆積はヤクの通行を許さず、そこがベースキャンプとなった。標高五六〇〇米、そこからニャモナニールの壁は、なだらかな尾根をささみ、一気に二〇〇〇米の壁となっていた。ここに至ったとき、キャラバン開始以来五十五日が過ぎていた。登路の偵察とともにC1の荷上げが開始された。六〇〇〇米のニャモナニールIとIIのゴルにC2地点の偵察に登った隊員は、ゴルから北東に下る氷河のあなたに巨大な湖を見た。この湖がマナサロワール湖であるとすると、ニャモナニールはグルラマンダータそのものの可能性が高い。高所障害にふらつく頭に感激と不安が錯綜する。一方、ベース・キャンプ付近の地理探査に当たっていた隊員は、ベース・キャンプ先の小高い丘の向側に流れる河はタクラコット方面に流れており、国境がこの小高い丘である可能性が強いと結論した。すでに越境している可能性が高い。前進キャンプ設営中の隊の早急の撤収が指令され、集結後、遠征隊は南へ下り、本物のナラカンカール探索行となった。村人の話からニャモナニールに次ぐ高さを持つ山はタクブ・ヒマールといい、先のベース・キャンプから二日行程にあるという。タクブ・ヒマールからの氷河の末端が第二のベース・キャンプ（五二〇〇米）となった。そこからいくつかの雪を抱く山がみられたが、いずれも六〇〇〇ないし六五〇〇米程度を越さない山々である。再び地理探査がはじまり、一隊はタブク・ヒマールの背面へ、他の一隊は六〇〇〇米のスノーピークと名付けた山に登ることとなった。スノーピークに登った隊はその西に雪煙を上げる山を見出し、それこそ求めていたナラカンカールと確信した。しかし、タクブ・ヒマール背面地域の地理探査に当たった隊

は、問題の山は測量結果からみてたかだか標高六五〇〇米程度にすぎず、七三三五米のナラカンカールは当地にも存在しないとの結論を得ていた。

いったい、ナラカンカールは何処に存在するのか、というよりむしろ遠征隊は次第にナラカンカールなる山は本当に存在するのかと考えるようになっていた。最早や準備した食糧は余すところ二週間となり、タクブ・ヒマールでの第一次探査行が終ったあとの、以後の行動に関する隊員会議では白熱した議論が続き、深夜に及んだ。それは、六五〇〇米程度の山でもあくまでも所期の目的を完遂すべきとする者と、この地理的未知を明らかにすることこそが遠征の任務と考える者の議論であった。真摯な激論の後、それはある程度、世界観の相異に基づくヘルベチアで幾夜も続けた議論の延長であったが、結局は登山を放棄し、地形および氷河に関する学術調査に残った日を費すこととなった。

ナラカンカールの存在問題に結着をつける上で重要となった、タクブ・ヒマール背面の河の流路調査に出かけた宮地とアン・テンバは地形の確認が結果的には越境の自覚でもあったが、中国領の村人に捕らわれ、タクラコットに抑留された。事情を理解した中国側は三日後に彼等を帰した。長谷川伝次郎以来はじめてタクラコットを訪れた宮地は写真で馴じた丘の上の城が今も夕陽にそまり赤く輝くのを見たという。

安藤は遠征隊による地形測量、地理探査の結果から、また帰路ネパール・中国国境地図を見る機会を得て「ナラカンカール問題」について次のような見解を示している。

ニャモナニールはグルラ・マンダータ（七七二八米）と同一の山である。遠征隊がシミコットより測量し作製した地図から見るとニャモナニールの位置はグルラ・マンダータに合致する。グルラマンダータに誰にとがめられることなく近づけた理由については「グルラ・マンダータに東南方から近づく沢は、従来の地図では北方のマナサロワール湖に流れ込むように書いてある。しかし実際には南行し、ネパール領に入りカルナリ河の支流タクチェ・コーラとなっている。そのため、チベット人はこのタクチェ・コーラの流域部を昔からネパール領と考え、ここで放牧を行い生活している。すなわち、地図上の国境と現地人の考えている国境が合致せず、約二十キロのへだたりがある。この誤解のため、幸運にもグルラ・

マन्दラータの直下まで近づくことができたのである。」⁽¹⁰⁾

グルラ・マन्दラータは今も未登のまま残っている。ナラカンカールについては、「国境地図ではナラカンカールの標高は六六三五米となっている。インド測量局の二四〇六四フィート（七三三五米）は誤りなのである。事実われわれも、七三三五米に相当する山はニャモナニールを除いては発見できなかった。国境地図のナラカンカールの位置は、タクブ・ヒマールの主峰と一致する。標高も本隊の測量班のものと同様である。」⁽¹⁰⁾

結局、七三三五米の標高をもつナラカンカールは存在しないという結論になる。ネパール・中国国境地図についても、いくつかの不審な点、例えばこの地図上でのナラカンカールの北方に七三三五米のピークが依然として存在するなどがあり、ネパール西北国境付近の地理は完全に明確にされているわけではない。

八

昭和三十年代の初期にはじまった、新たなヒマラヤへの意欲は三十七、八年の二回の遠征隊の実現として結実し、またそれによって終焉した。この二つの遠征隊は三十年代の熱気の雰囲気とその背景にもった同根のものである。チャムラン隊は中野征紀を得ることによって、一つの登攀を実現した。彼等によって選ばれた次なる山、ナラカンカールは山こそ実在しなかったが、その旅が見出した壮大な未知の世界の魅力は、次の時代に大きな影響を与えた。

この二つの遠征隊はその計画性や合理的な運営という点では満足すべきものではなかった。例えばキャラバン一つを例にとっても、一方の経験が他方の効率よい運営に生かされたわけではない。というより、ネパールの東と西という、同じ国であっても全く異なった種族が住み、生活も風習も異なった地域をそのはじめての旅の舞台として敢えて選んだのである。彼等にとって、その事自体の意味するものは経験するまで未知のことであったかもしれない。確かに彼等の計画の多くはネパールについての研究が充分に為された上のことではなく、時間や資金的余裕が限られたものであったにせよ、遠征や登攀に関する技術的準備、例えば装備に関する工夫なども決して充分に行なわれたというわけではない。単なる幸運

だけで切り抜けた難事も一度や二度ではない。批判されるべき、また今後とも充分検討されるべき多くを内蔵した遠征でもあった。

だが、この二つの遠征の構想は雄大であり、またその実現に対して彼等が果敢であったことは認めないわけにはいかない。見方を変えて、もし彼等が世俗的な知恵に長け、そして功利的に事を運ぼうとしていたならば、キャラバンの楽な山を選び、もっと登路に関しての資料の豊富な山を見つけ出すこともできたかもしれない。また、次々に単なる成功を収めるだけを遠征の目的とするならば、一度得た経験、見聞を大いに活用し、見かけの実績を増やすこともできたのである。しかし彼等は未知への憧れにより忠実であった。ここに、この三十年代の熱意の原動の本質と意味があったと思う。

この二つの遠征に対する部内の批判には、その登山の成功、不成功とは別にきびしいものがあつた。それは主として遠征終了後の事後処理の拙なさに由来している。当時の批判を十年の時間をおいて今考えてみると、その中には、むしろ彼等を送り出した組織そのものの体質や構造に帰すべきものもある。ともあれ、これら二つの遠征の経験が、何故後に続くヒマラヤ遠征へと組織的に継統され、生かされなかつたかなどは、現在でも充分に検討する価値があると思う。

かくして三十年代に熟成された一つのロマンチズムは発散され、収束したわけである。

九

昭和四十年代はいわば個人のヒマラヤともいうべき時代である。高度経済成長の時代ともいわれるこの時代は、生活水準も上昇し、外貨事情も著しく好転した。海外遠征が個人のレベルで考えられるようになったのである。

この時代のヒマラヤないしその周辺への北大山岳部関係者の足跡を記しておこう。

三十八年、鶴巻、山口(淳)、神谷(正)ら、イランのデマヴォンド峰登頂。

四十年、渡辺(興)、高松(秀)、石田、益田、伏見、市村ら中央ネパールへ地質、氷河調査行 チューレン・ヒマールへ接近。

四十二年、古川(宇) マナン地方で長期滞在。

四十二年、坂本(直)、山田(知)、神谷(晴)らカリガンダキ上流部ゴザインクンド、クンプ、カシミール地方へ旅行。川道、ゴザインクンド、ドランディ地方へ調査行。

四十三年、松田(壘)、石井、浜名、白石らカラコルム、パツラ峰へ偵察行。古川(宇)、マルシャンディ流域トンジュ村で民族学調査。川道、エベレストスキー探検隊に参加。クンプ・ペルチェで越冬。

四十五年、佐伯、橋本(正)、伏見等エベレストスキー探検隊に参加。

四十七年、坂本(直)、松村らマディコーラ地方を旅行。

四十八年、伏見、名越、小須田らクンプ・ペルチェで越冬気象観測。

四十九年、伏見、クンプ氷河の調査。

この他にも、記録に残されていない旅行も多いと思われる。これらのヒマラヤ旅行は個人的な目的ないし、山岳部とは異なった集団の企画によるものであり、四十年代における山岳部の組織的なヒマラヤ計画は見当らない。いくつかの遠征計画があったと聞くが、いずれも実現に至っていない。四十年代の世相の激変は、組織的遠征にはなじまなかったのかもれない。だが、この四十年代にも、かつてのヒマラヤ志向が質を変え、新たな時代感覚の中で胎動しつつあった。

四十年代を特徴づけるものが大きな社会的変革の波であるとすれば、大学紛争とそれに引きつづく学園の混乱はその最も典型的な社会的事件であった。大学山岳部もその激動の流れに超絶した存在ではあり得なかつたが、その中で一つの胎動がはじまりつつあった。それは、それまでの時代のものとは異質な、新しい登攀の息吹きである。

その一つの結実は、四十七年の現役によるマッキンレー登頂となった。この新しい意欲の将来は、これからの北大山岳部の歴史の中に、あるいはヒマラヤ登攀史の新しい頁の中に登場してくるであろう。

もう一つの胎動は、四十年代の個人的ヒマラヤ行の中のあるものを連ねて流れる科学としてのヒマラヤ研究の発想である。かつては登山とおおよそ無縁と考えられた科学も、ヒマラヤという巨大な未知の自然をその舞台として得ることによ

り、新しい自然認識の方法としての山岳研究が誕生したのである。その誕生と成長には、少なくとも登山行為のもつ開拓性とその有力な原動力であったろう。

山岳部の歴史の中では、むしろ伏流ともいふべきヒマラヤ自然研究の発想の源流は古く三十年代に遡る。

十

昭和三十年、マナスル偵察隊に参加した橋本誠二はカトマンズからマナスル山の麓、サマ村に至る道すがら構造地質および岩石の性質についての調査を行なった。

その結果から彼は、スイスの地質学者T・ハーゲン博士らが提唱していたヒマラヤ山脈のナッペ構造説に強い疑問を抱いたのである。かつてヒマラヤの地であったテーチスの海は、その南方にあった古い大陸によって押しちぢめられ、その結果による側圧はテーチスの堆積物を褶曲、上昇させ、さらに盛り上がった地層は倒れて他の地層の上部に覆いかぶさり、ナッペ構造を作り上げながらヒマラヤの山地を形成したとする説への懐疑は、ネパールを訪れた北大の地質研究者―その多くは山岳部の出身者であったが―に大きな影響を与えたのである。チャムラン隊に参加した安間(荘)はアルン河流域の、ナラカンカール隊に参加した安藤、遠藤、渡辺(興)はカルナリ河流域の地質構造について調査し多くの知見を得るに至った。彼等の本来の目的ではなかったにせよ、これら一連の調査活動は、結果的にネパールをほぼ三等分にわけるとなった。彼等の本来の目的ではなかったにせよ、これら一連の調査活動は、結果的にネパールをほぼ三等分にわけるとなった。この中には、橋本の考えを支持する事実も見出され、本格的な地質構造研究の気運が熟成されていったのである。

四十年代にはじまるヒマラヤ研究発想の背景には、このような推移があったのである。本格的な地質構造研究は、他の分野の研究意欲を誘発しつつ、四十年代を通じて精力的に続けられた。その為の数多い調査隊の中において山岳部出身の研究者は主要な役割を果たしている。これら一連のヒマラヤ地質構造研究は、四十九年、橋本、木崎、安藤、石田等によって *Geology of Nepal Himalaya* の大著にまとめられている。この成果に対し、山岳研究の顕著な功績として、五十年代

の秩父宮學術賞が授与された。

地質研究とともに山岳部出身の若手研究者らによって、生物学、地球物理学、文化人類学などの分野でも多くの成果を挙げるに至った。彼等がネパール・ヒマラヤに残した足跡はおそらくその全土の八割を越す地域に及んでいる。その中には、學術上の目的もあるが、「来るべき日」を期しての越冬気象観測も伏見等によって行なわれてきた。ヒマラヤの自然に關しての、これら一連の研究によって得られた知見は膨大なものとなっている。われわれは今や、三十年代當時とは比較にならない程のヒマラヤの知識をもつに至ったのである。この知識が新たな登攀の息吹きと相まって将来のヒマラヤ登山の中で生かされたとき、それが何をもちたらずかは、想像に難くない。

登山が山のもつ「困難さ」に対する個人の闘いである側面と、山のもつ「未知」に対する憧れの発露としての側面をその行為の原動の中に共存するものと考えることが許されるならば、四十年代のヒマラヤ活動を特色づけるものは、未知への憧れがより強い原動力としてあらわれた時代と見ることが出来るだろう。山岳部に流れる登山思想の時代による揺らぎは、結局この二つの原動の個人内のあるいは集団内の相克、あるいはそうした背景からの影響による一方への傾斜と見ることができよう。

山岳部の創立当時から、時には伏流としてまたある時には激流として脈々と流れつづけたヒマラヤ志向を構成したものの一つに、ヒマラヤがもつ雄大な「未知」の感覚があったことは想像に難くない。だが北大山岳部の長い歴史を振り返るとき、「二つの形をもった登山思想」が伝統としてあるいは流儀として伝承されているのを見出す。経験の確実な伝達を宿命的な課題としてもつ山岳部にあつては、それも必然ではあるが、「未知」への憧憬を正當に評価する思想を抑制する因子となったことも事実であろう。その意味からすれば、三十年代後半のヒマラヤ遠征の体験は、その伝統の桎梏からの離脱のきっかけでもあつた。登山活動の点では不毛な、しかし別の面ではヒマラヤでの活動が最も活発化した四十年代という時代の評価には、北大山岳部における登山思想の系譜とその轉換についての認識を欠かすことができない。

四十年代は、発想の轉換の時代であり、その拡大した発想が伝統と新たな自由さの中で一つの原点を模索した時代で

あったともいえよう。

十一

昭和五十一年、北大山岳部は創立五十周年を迎えた。十年前とは比較にならない程多様化した登山思想を内蔵するこの集団は、五十年目を記念するにふさわしい登攀の目標を模索した。その経緯は「北大山岳部創立五十周年記念事業―海外遠征事業―に関する資料集」(部内記録)に詳しい。この資料集に含まれる多くの興味ある議論の評価は、今後の実践と達成された事実によって定まっていなくてはならない。

終戦後間もない頃ヒマラヤ研究の再開を計った野田は、いつ達成されるかも知れぬヒマラヤ冬期登攀事業の最初の偵察行の隊長として、奇しくも北大山岳部が最初にヒマラヤ登攀の目標としたガルワル・ヒマラヤへ四人の隊員と共に向った。しかし、五十年十二月に出發した野田隊は、キャラバンの開始後ポーターのストライキという思わぬ事態にあって遠征を中止せざるを得なかった。冬のヒマラヤは想像以上に厳しく、遠征隊員自身の総合的な能力が要求されるばかりでなく、このような大きな未知を含む遠征計画に対する検討、事前の調査が不充分であったことを、われわれは身をもって知った。

ともあれ、冬期ヒマラヤ登攀の第一歩は印され、北大山岳部にとっての五十一年目をはじめだったのである。

参考文献

- 1 山岳部部報 六号 (一九三八)
- 2 山岳部部報 七号 (一九四〇)
- 3 山岳部部報 四号 (一九三三)
- 4 山岳部部報 八号 (一九五九)
- 5 ヒマラヤ研究会記録ノート (一九五五)

- 6 極研時報 1~5 北海道大学極地研究グループ(一九五六)
- 7 チヤムラン―ヒマラヤの詩と真実 岡本丈夫、久木村久、安間荘、鈴木良博 ベースボール・マガジン社(一九六五)
- 8 山岳部部報 九号(一九六三)
- 9 北海道大学西ネパール遠征隊報告(一九六四)
- 10 ナラカンカール紀行 安藤久男 山岳第五十九年(一九六四)
- 11 テーチス協会年報 1(一九七八)
- 12 山岳部部報 十一号(一九七二)
- 13 マナスルの地学的観察 橋本誠二 マナスル 一九五四~六(日本山岳会編) 毎日新聞社(一九五八)

マ ッ キ ン レ ー

越 前 谷 幸 平

ま え が き

一九七二年のマッキンレーは、今や我々にとって遙か昔の想い出となつて了つていて、いざ書こうにも筆を運ぶ前に記録やら写真やらを引張り出さねばならないのが実情である。むしろ個人の所感としては、それよりもいくらか新しいトリスルの方が遙かに書き易いと言える。しかし誠に残念なことに、五十周年記念事業の一環として行なわれたトリスルが失敗し、五十周年記念登山抜ききの記念誌になつたとあつては、その本来のヒマラヤ遠征計画への布石としてしか存在しなかつた筈のマッキンレーが最近の北大山岳部の唯一の海外遠征計画の成功例として、載ることもまた止むをえまいとも

思う次第である。

考えてみれば、過去私が山岳部へ入部して以来数年の間に設案された海外登山計画は、可成りの数にのぼっている。ダウラギリIV峰、バツーラ、ティリチミール、マッキンレー、あるいはラブサンカルボ、そしてトリスル、更にその間に壮大な跋冬期八、〇〇〇メートル峰登頂計画もあった。従って、どう筆を進めてみても、マッキンレーはその誕生から終了に至るまで、或いは終了以降の余勢ということから言ってもこれ等の相前後する諸計画と関係なくしては語り切れないものがある。マッキンレー以降六年を経た今、再び現役部員は、カラコルムの未踏の六、〇〇〇メートル峰へ出掛けようとしている。彼らと話をしている驚くのは、将に彼等の考えていることが七年前の私達と殆んど変わらないと言うことである。マッキンレーが出るまでの経緯は、すでに登頂報告書の中でも簡単に述べられているように、山岳部休部以降の復興期に出されたティリチミール計画に端を発するのだが、その計画が挫折したときの我々の感性和類似したものを今回カラコルムへ行く現役部員達が持っているように思えてならない。おそらく、彼等にとってトリスルは大きな希望であったに違いないのだが、それが失敗したことが丁度我々にとってティリチミールが挫折したときと同様の状況を創り出しているからなのかもしれない。

免も角、今述べたように、マッキンレーはティリチミールの挫折から始まったと言っても過言ではない。山の会内部で若手OBや現役が無力であることをまざまざと思い知らされた、その時点我々の成すべきことは、自らの力を出来る限り短期間の内に増成させることであつた。国内山行においては夏冬問わず殆ど全てのルートは開拓され尽しており、新しいパターンで急速にしかも適確に高度な登山形式を産み出して行くことは、非常に困難であつた。将に我々にとってそういう意味で国内において登るべき山は存在しえないと言つてよかつた。更に一つ問題であつたのは、余りにも国内の山々が諸々の形式で登り尽くされたために、従来の方法を変えずに登り続けている我々にとっては、我々自身が一体どの程度のレベルにあり、また他の人達が行っている山行のどの程度のものを危険を伴うことなく成しうるのか分らない、ということであつた。従つて我々が更に一歩進もうとした時、我々の課題の基本となつたものは新しいパターンの山行を試みることに、

更に我々自身の実力が適確に認識できるような山行を試みることであった。

前者の条件を満たし、且つ後者の条件も満たす山行を行なうことは一見矛盾する面を持っているように見える。即ち、前者を満たすには前述のような理由で海外登山が好ましいが、後者を満たすには地域そのものが普遍性を持っていなければならず、これには国内山行の方が向いているからである。しかし、海外であっても比較的普遍性の高い、すなわち既に登られていて、その困難度についても定説のある山域は世界各地に幾つか存在していた。例えばヨーロッパ・アルプス、或いはカナディアン・ロッキー、アラスカ、ネパールヒマラヤの一部などである。しかしヨーロッパ・アルプスはその自然性で我々の感性と相入れない部分もあり、更に経済的な意味でも遠く、ネパールヒマラヤは遥かな憧憬でもあり次の目標であるため外され、カナダかアラスカかと言うことになる。六、〇〇〇メートル峰を有し広大な自然性を包含するアラスカに歩があった。アラスカには実に多様な自然が存在している。一ヶ月間続けてワンダーリングをすることも、四、〇〇〇メートルの氷壁を登ることも、二〇キロメートル以上スキーで滑降りつつづけることも、六、〇〇〇メートルの高度に達することも全てが可能である。我々はこのうち、前述の基本に沿って六、〇〇〇メートル峰に登り、氷壁にも少しなじみ、且つ又、スキーも出来、ツンドラのワンダーリングも楽しめる計画を立てた。それが、マッキンレー南北両峰へ比較的容易なウエストバットレス経由で登り、北面の七〇〇メートルの氷の尾根を下り、ツンドラを数日間歩いて、ワンダーレイクへ達するという、行動二十三日、停滞十日の計画であった。

この計画は当初目的に沿って、山岳部そのもののレベル、あるいは山行様式の再確認という意味合いからも、同質の人間達が国内で山行を行う時期とほぼ同一の時期に行うのが好ましいと考えられたために、六月末より夏山行の時期に行うこととした。したがって計画は七二年度の変則の三年班の夏山行として捉え、計画の検討も他の夏山行と同様に行なわれた。パーティとして問題であったのは、他の計画と異り経済的な負担が大であることと、対外的な諸々の交渉が多いということであったが、経済的な問題に関しては航空運賃を月賦払いとするとということと切り抜け、対外的な交渉の方も各メンバーが全て個々の任務分担を持つよう必要な労力を分散させることで短期間のうちに実行可能な状態へ持って行く

ことが出来た。我々がその過程で特に心配したのは、山の会のヒマラヤ委員会がどう検討するかと言うことであつたが、部長の東先生を始め有馬、木崎先生の激励をいただき、何なく審査をパスすることが出来た。事実上、我々がこの山行の或る程度の成功を確信したのはその時であつた。その後の学生部・各学部の担任教授等との最終的な交渉は東先生が全て引き受けて下さつた。休部事件の処理からティリチミール計画の挫折に至る間、我々の心に重くのしかかつていた山の会に対する不信と半ば増悪にも似た感情は、諸先輩と話し合い、計画が進んで行くうちに、別の形態の理解へと変性していった。

山行は本来楽しいものでなくてはならない。学生は学業が本分であり山行は極めて超越的な道楽だと思われろのだが、山行中は本末が全く転倒して本業の方は道楽もどきとなる。そこで我々は山中で本業を遊ぶために個々の専攻する業を研究と称して行うことにした。或る者は高所生理を調べ、或る者は氷河上の昆虫類の調査を行い、又或る者は装備を創る上に材料工学を生かすという風にある。これ等のうち成し得たものに関してはいずれも報告書中にしたためられているが、道楽だと思つてする勉強もまたなお一層、興のある楽しいものであつた。例句の果てには、当節流行の尻上げの走りであつたかも知れぬが、北米を眼下に睥睨し乍ら尻を上げるということになり、また決して経済的な理由からだけでは無いのだが、山行中に食するものは平時我々の食べ慣れている雑炊のみということにもなつた。装備について言えば、これ又、たかだか六、〇〇〇の夏山に新装備とは片腹痛しという強者がいて、結局新しいのはザイル一本、標識用の竹棹、自家製保証付のスノーバー、防虫網位のものが用立てられたに過ぎなかつた。

ウエストバットレスまで

蓋し人生において忘れ難き一瞬というものがあるものならば、マッキンレーを巡つての我々のそれは、セスナの窓越しに遙か彼方に巨大な白い山塊が雲の上に聳えているのを見出した一瞬でもあろうか。既に、出発するまでの煩雑な仕事や、アラスカへ着いてからの買い出しや、車窓から見える針葉樹の林や沼地や田舎街のたたずまいは、全て我々の後方に

あつた。思わず私はその時、我々がここへ来たのは誤りではなかつたのだろうかと考えた。しかしここへ登るために来たからにはそれが誤りであつても登らねばならないと思つた。その不定形な不安はセスナの着陸点に着いた時さらに増大した。背後に聳えるハンターも、正面に見えるフォレイカーもいづれも一、〇〇〇メートル以上ある氷壁を従え、我々がかつて見たことのある山々とはかけ離れたスケールで聳り立っていたからである。しかし何時の山行でもそうであるように、一歩歩き出した時に不安は消失し、困難さに向う定形の恣意へと姿を変えて、広い氷河に歩を進めて行くうちに瞬間に国内山行の時と同様のパーティの雰囲気が出来上がった。

高度三、三〇〇メートルのカヒルトナパスまでは緩やかな氷河の登りで、我々は見た瞬間、せいぜい一日半もあれば到達することが出来るだろうと考えていたのだが、実際に登つて行くと、いつまでたつても周囲の風景は変わらず、少なくとも見た目の二倍以上の時間を要し、逆に謂えば、見た目の二倍以上の距離がこの氷河上の実際の距離なのだといふことが分つた。好天の日が続ぎ、陽が上がるのは僅かに数時間の日没から日の出までの時間であり、氷河上の昼間の体感温度は六月山行並みとなつた。昼夜を問わず陽がかければ慌てて歩き出し、再び陽が照り出せば、一時間半程歩いて暑さに耐えられなくなつた時、テントを張り入口を全て開放して敷いたシュラフの上に寝転がってまどろむというタイムスケジュールが繰返された。睡眠と覚醒のリズムは二四時間の周期を失い、殆ど我々自身の疲労とそれからの回復に当てられる時間が一日のサイクルとなつた。

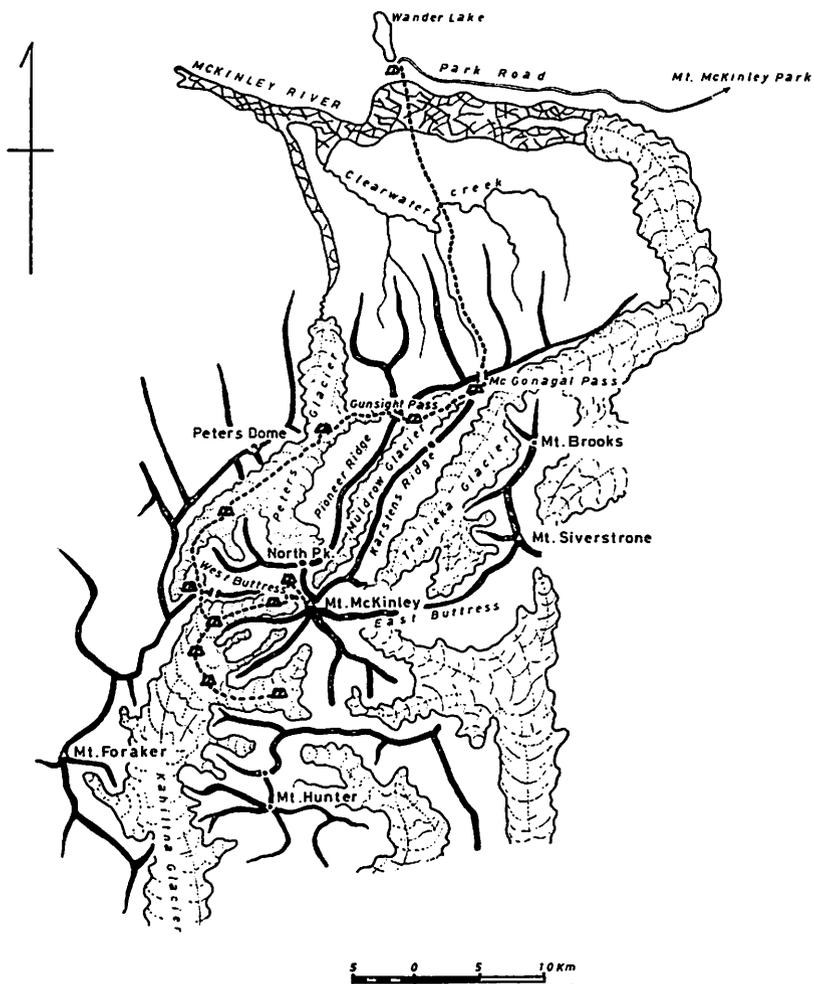
三日かかつて着いたカヒルトナパスには前に来たパーティの残留食品等が彼等の使用したイグルーの中に豊富に残つていた。興味も手伝つて試食してみたのが病みつきになり、この後登頂して再びパスまで戻つて来るまでの間、もっぱらおやつは先行パーティの放棄したものと相成つた。国内山行と同様の雰囲気は、かくの如くここかしこに感じられた。我々は北面の長い氷河を下りツンドラを歩くための食糧と装備とをデポし、ここをベースキャンプとした。その日、テントの中で午睡をしていると、上からスノーラケットやスキーをてんでに履いた八人のパーティが下りてきた。中には、六〇歳を越えなんと思われる白髪混りの老人や金髪の綺麗な女性も混じつていた。彼等はカリフォルニア大学のパーティで

三人が登頂したが下りの途中でクレバスに落ち一人が肋骨を折ったという話をした。取り留めもない四方山話の後、我々が差し出した紅茶を美味そうに飲み干し、慎重にゆっくりと彼等は下って行った。

バスから上部は氷河の傾斜もきつくなり、始めてアイゼンワークを強いられた。登行路の対岸は巨大なアイスブロックが青い断面を見せて、整頓されていない積木箱のようにひしめき合っているのが間近に見えた。幾つか越えたクレバスは、恐る恐る中を覗き込むと倏に四〇メートル以上の深さがあるものもあり、ザイルを持つ手に思わず力が入ったりした。再び傾斜が緩くなり尾根形を越えて別の氷面に出る所はウィンディコーナーと呼ばれ、既に高度は四、〇〇〇メートルを越え、一步一步が我々六人の最高到達高度を更新していた。この頃より歩く速度と息切れの度合とのバランスが少しずつ経験したことの無いものになり始めた。一番強いメンバーが調子が悪いといい出したのもこの頃であった。背にウエストパットレスの急な雪面を負い、見渡せば広い雪原の切れた果てにハンター西壁が夕陽に輝く所にチャムランの時使ったテントが張られ、アドバンスペースが定まった。その夜、メンバーの二人が頭痛を訴え嘔吐した。

翌日は、高度馴化の意味も兼ねて、三、六〇〇メートルまで下り、上部へ向うための装備と食糧を荷上げした。頭痛を訴えていたメンバーの症状は全く消失し、その翌日はいよいよウエストパットレスを越えることにしてやや長目の睡眠をとった。翌日は、四、六〇〇メートルまではスキーを上げたがそれ以上は傾斜が急になったためいつものように横に並べてシーデポーし、デポ旗を立てた。上部は段違いになった狭いクレバスを隔てて、パットレスの稜線の岩壁まで四〇度程の傾斜の氷面が続いていた。驚くべきことにその間はフィックスザイルが数本ベタ張りされ、御丁寧に丈夫なフィックスパーで止めてあった。半ば失望、半ば儲けものという気持でコンティニューアス、或いはスタカットクライミングで登って行く。張ってあるザイルの色もけばけばしく、早くこの壁を抜けて了いたいと思った。稜線は氷混じりの岩稜で穂高の稜線よりは易しいのだが、高度のために息切れが強まり、とてもスイスイと登ってはいけなかった。もう少しもう少しと自分にも言い聞かせ乍ら岩稜を登り切り、ようやく五、三〇〇メートルのアイスベーンに着いた。五、〇〇〇を越えた頃より風はやや強まり、薄青い程に締った固い雪の上にテントを張る場所を探すうちに、雪面が段になっている蔭にひよっこり

Mt. McKinley 周辺概念図



氷洞の入口があるのを見つけた。中へ入ってみると、先刻のザイルの驚きに次ぐ驚き、何と我々にはまるでホテルかとも見紛う程の広さで立派な設備を持った人工の氷洞であった。その広さはおよそ二〇畳もあるだろうか。前室に次ぐ氷の廊下の両側は一段高くなっており六畳程の広さで分厚い合板が敷き詰められていて食糧の袋や燃料の缶が残っていた。早速、オイルサーディンとナッツの詰め合わせを戴き、次いでお世辞にも美味しいラーメンの夕食をとった。高度のせいと一日で一、〇〇〇メートル以上登ったこともあって全員が何となく頭が重く、そのうち四名は嘔気もあって、仕事をした割には食事は大して喉を通らなかつた。

登 頂

外に出てウエストバットレスの岩稜上のテラスに立ってみれば、カヒルトナ氷河は太い帯となって滔々と南へ流れ、フオレイカーとハンターとを裂き、遠くの漣波のように霞む山並みの中へと消えていた。丁度、夜半を越えようとしている黄金色の太陽は北面に拡がる雲海の上に見え隠れしながら、沈むとも昇るともなくその位置を西から東へと移していた。マッキンレーの南峰は見えず、目前に高度差四、五百メートルの雪壁が高みへと延び、鞍部のすぐ北側には北峰の肩が黒々とした岩壁を見せて対峙していた。天候は既に一週間以上も晴れた日が続いていたが、好天期の終りを示すように南峰の辺りを薄い笠雲が覆いかけていた。マッキンレー周辺の六、七月の天候の周期はおよそ一週間であり、そろそろ次の悪い周期に入ってもよい時期であった。だが平地から荷を背負って五、三〇〇メートルに達するのに要した日数は僅かに七日であり、この高度に対する我々の馴化は全く成されていないと言つてよかつた。メンバーのうち二名は明らかに変調を来たしており、そのうちの一名は風邪を伴つて特に消耗していた。登り続けるか、一度降りて天候とメンバーの高度障害の回復を待つか、決め兼ねるままに眠りに就き、そして次の朝を迎えた。

予想に反して天気は絶好の登頂日和であつたが、変調を来たしたメンバーの状態は變つていなかった。意を決して全員で兎も角、五、六〇〇メートルの南峰と北峰の間のコルまで最終キャンプの荷上げし、その足で南峰を往復しようかと考

えたが、もう一日だけ待てば或いは風邪がおさまり高度障害も軽快し、全員が南北両方のピークに立てるのではないかという想いが残って、結局体調の良い三名だけでコルまで荷上げを行った。しかし時間を追って一名の高度障害は進み、天候も決して回復したのではなく悪くなりつつあることが、量を増し流れの速くなった雲の動きから見とれた。この日遅く、我々は北峰の登頂と全員登頂を諦め、早期に南峰のみに登頂し最終キャンプとなったこの氷洞を撤収することに決めた。

翌日、風は少し強まっていたが行動可能な五名で南峰へ向い、コルへの急な登りの後はクレバスも岩稜もない平坦な氷の尾根を急ぎ、ピークへと近付いた。六、一〇〇メートル付近は殆ど平らな雪原となっており、八千米級を目指す者はこれしきの高度では何でも出来ねばならぬと思い、全力疾走を試みたが五〇メートルも続かず、途中で眼の前が霞んできてピッケルにしがみつかざるを得なかった。最後の六〇メートル程の雪壁を一〇メートル置きに休み乍ら登り切った途端に長かった登りはあと僅か一〇メートル程しか残っていないことを知った。平坦な丁度冬の日高の豊似岳のような頂上であった。紅茶を廻し飲みした後で、はるばるザックに括りつけて持って来た凧を上げにかかったが、頂きを越える風は下降気流となっていて六、一九一メートルでの凧上げは失敗に終わった。

氷洞に帰り着いて、残したメンバー一人が心配で中へ飛び込み、大丈夫かと尋ねたが、登頂を喜んでくれたその顔は浮腫のため紫色に膨んでいた。元来気丈な彼は小便をしに外へ出ようとするのだが、立ち上がるどころか独りで坐っていることさえ出来なくなっていた。半素人の私にすら、はっきりと分る程肺雑音も増強していた。すぐに利尿剤を大量に飲ませ症状の軽減を図り、他の者の疲労の回復を待つて下山することとした。二時間程経つと頻繁に小便が出始め、またろれつがまわるようになり、顔のむくみも少しずつ取れ始め、翌朝には支えれば足を運ぶことも出来るようになったので、前後から三人で彼をアンザイレンし、残り二人がステップを切って慎重に岩稜を下った。利尿剤の効果と下降とは確実に彼の復調を促し、シーデポーに着いた時には足許もしっかりしていたが、スキーで滑ることは未だ仮ならなかった。

北面への下降

アドバンスベースに降りて来て始めて、我々は登頂の喜びと安心感とを味わうことが出来た。我々のテントの近くには新たに他のパーティのテントが張ってあり、病人に飲ませてくれと言ってオニオンスープの差入れがあった。人間いたる所青山ありと言うが、これぞ将にスープの中のブルーマウンテンの味であろうと思ひ乍ら六人で有難く飲んだ。従って病人の筈のメンバーの所にもきっちり六分の一しか廻らなかつた。翌朝、我々のテントから少し離れた所にアメリカ陸軍のヘリコプターが着陸した。そのパイロットと話をしていた隣のパーティがやって来て聞かせてくれたのは、この山で別の日本隊が遭難し女性が三名行方不明だということであつた。下界との連絡用のトランシーバーはカヒルトナパスのベースキャンプに置いてきたので、忽々にアドバンスを撤収し下山の途を急ぐことにした。我々のパーティの高度障害を被つた者もさらに回復はしていたが、安全を期してツボで下り、デポーの下のクレバスの全くない所まで降りた後、アンザイレンしたままスキーを履いた。

ベースに着き、ゴチャゴチャの装備の中からトランシーバーを探し出し、日本語と英語で、女性隊と入山している筈の名古屋山岳会隊と呼んでみたが、何度繰返しても応答はなく、日本人らしい発音の女性の声を一度耳にしただけで交信音はそれきり途絶えて了つた。夜半近くまで繰返し交信を試みたが、結局入感のないまま日を終えた。翌明け方「コンニチワ」という挨拶で目を覚ました。名古屋山岳会隊であつた。彼等によると行方不明の三名は絶望で、残り二名のうち一名は高度障害が酷く、健在なのはリーダーだけであるということであつた。彼等は昨日、我々のところへ、患者を診て貰うよう連絡を頼まれて出発したのだが、その後の交信で、患者は昨日遅くアメリカ陸軍のヘリコプターでアンカレッジの病院へ運ばれたことを知つたという。さらに残る三名の搜索もアメリカ陸軍が行うということで、我々の肩の荷は一応下りた訳だったが、やはり気は重かつた。日本にいる仲間も同じ山城に入っている我々のことを考えて心配しているだろうと思つたが、直接の連絡手段を持たない我々にとっては、焦つてみて仕方のないことであつた。

高度障害にかかった者もスキーを履いて滑れるようになり、北面へ下降することは差支えないと思われた。天候は明らかに悪い周期に入り始めたらしく、半日はガス、半日は晴れという具合であった。だいぶ氷河の様子にも慣れ、すっかり見慣れたウエストバットレスの岩峰を眺めていると、どう考えても国内の春山山行の停滞日という気がしかなかった。総数六冊のマッキンレー文庫を繙き、駄読、駄弁、駄食、駄眠の時を過し、晴れ間が見えれば拾ったソリを使い、コースを造ってボブスレー大会などと洒落込んでいるうちに三日間が過ぎた。

六名共同体が完全に復し、いざ降りなるとする日はかつて無い程ガスの濃い日であった。大きく口の開いたクレバスと脆そうなアイスフォールに緊張しながら、風の強い稜線に出た。気温も風が更に強まるにつれて下降し、久方振りにピリピリした空気を味わって嬉しくなった。ペーターズ氷河へ下りるリッジはガスの中で発見出来ず、その日はマウントキャップスの頂きにテントを張って泊った。翌朝、ガスの中に下り口が見え隠れし始めた。シートラーゲンして一五〇メートルも降りると、そろそろ大きなクレバスが目立ち始め、セラックが我々を煩わせるようになって来た。

楽な下降路を探すため、ザイルパーティーを三つに分け、一〇〇メートル程降りて調べた結果、三五度位の氷壁が途切れることなく続く西面の状態が一番よさそうだと、ということになった。登る時には一本も使わずに後生大事に持っていたザイルとスノーバーだが、ここでこそは使わざるを得ない。背中には一週間分の食糧と北面の氷河を乗り切るための装備等の他にスキーが載っているために、急な氷の斜面では出る足も鈍りがちになった。氷の表面は、夏が近いためか、五センチ位は大きな結晶層が続いていた。このため、アイゼンのツアツケで結晶層を蹴り落さなければステップを切れず、酷く我々をてこずらせた。このような氷層は南面の氷河にはなく北面に入って始めて現われたものであった。しかし、そんな悪条件におかまいなしにヒラリヒラリと、まるで合宿のトレーニングのように降りて行く三年班の背に、私は思わず罵詈雑言を浴びせかけた。最後の氷壁をアブザイレンで降り、クレバスを飛び越え、スキーとザックを回収した所で緊張の七時間は終わった。スノーバーも殆ど打ち尽し、入山以来始めて何かをやったという充実感を味わいながら、狭いクレバス帯をスキーで快調に乗り越えて、氷河上を流れる川の岸辺にその日の安息の場を得た。ついきのう間近に聳えていたウエス

トバットレスの岩峰も今は遙か頭上に遠く、その下部は二、〇〇〇メートルの大岩壁となってペーターズ氷河まで切れ落ちていた。

風の強い夜を過し、翌朝は又もや濃いガスの中を地図と磁石を頼りに川に沿って下った。不時着して二つに折れ曲った軽飛行機の残骸の横を通り、ペーターズドームから落ちていた氷河の合流点が見えなくなる頃、氷河は様相を変えてズタズタのクレバス帯に入った。視界がさっぱり効かず、地図もクレバスが相手では使い物にならず、ルートを出るだけマッキンレー北壁のウィッカーシャム・ウォール寄りに求めて進む。クレバスは、進むに従いますます深く幅広くなって、掛かっているスノーブリッジにも緊張させられた。小一時間も歩いた頃、ようやくクレバス帯を抜けた。

側壁から落ちて来た岩がゴロゴロしている所で一服入れ、ツルナ・アイスフォールの巨大なセラック群の中へと下り始めた。ガスの中に幽然と屹立するセラックは土砂を被り、その間をぬって下りて行く我々に、幻想の溪谷へ迷い込んでしまったかのような錯覚を与えた。先が全く分らないということは少々不安ではあるが、その半面楽しいこともある。少くともあらかた知り尽くしたホームグラウンドの山々を歩いているのとは異った趣きがある。北海道から追出されたアラスカへ行けばいいというのが我々の口ぐせでもあった。そして我々は今、アラスカの殆ど記録のない氷河を下降している。確かにそれだけで我々にとっては充分に素晴らしいことであった。クレバスにも少し慣れて来て、クレバスとクレバスの間の靴の幅程の氷のリッジをスキーを履いたまま横這いに歩いたり、滑って転んで跨がったりしながらも大して恐ろしい思いもせずに、この山行最後の難関ツルナ・アイスフォールを下り終えた。

やがて氷河の上に大小の堆石が見られるようになり、氷質も変化して表面に多くの浅い孔を認めるようになって来た頃、氷河は大きく東へと向きを変えた。氷河の表面には次第に水流の筋が多くなり、所々には息を飲む程透き通った青い氷の底を持つ陥穴が散在している。降り出した雨の中を黙ってモタモタと歩き続ける。氷河の表面の起伏や陥穴のためスキーで歩くのは可成り難儀だが、それでもまだ徒歩で下るよりは遙かに速く、しかも安全であった。氷河の両岸に高いモレーンの堤が連なり、その上に点々と緑を見付けて思わず歓声を挙げる頃、スキーはもう使えなくなった。堆石に覆われ

下流に氷面の見えなくなったところで、ついに長い間慣れ親しんだ愛用のスキーを棄て、堆石の上にテントを張った。

帰 路

翌朝は前日とは打って違って変ってスカッ暗れとなり、一気に四、〇〇〇メートルの水壁となってマッキンレーの北峰まで突上げているウィッカーシャム・ウォールが我々を圧倒した。下流には累々と堆石の山が連なり、その彼方に緑の丘陵が見えた。喜び勇んで出発したものの、遠くからはさほど歩きにくくなさそうに見えた堆石も、その間に山あり谷ありで、随分時間がかかって、ようやく緑で覆われたターミナルモレーンに辿り着いた。丁度、大雪の夏を想わせるような所で、黄色いケシの類や赤みの強いイワウメなどが群落を成して咲き乱れ、一息入れるには最適の場所であるかに見えたが、藪蚊の大群に襲われ、忽々にガンサイトパスへの登りへ足を運ばざるを得なかった。泥に足をとられ、深雪のツボもあって、荷が肩に応える頃パスへ登り着いた。

振り返れば、今將に沈まんとする夕陽を浴びてウィッカーシャム・ウォールは炎のように燃え上り、既に蒼味を帯びて沈み込んだ氷河の中程には、ツルナ・アイスフォールだけがウォールからの反照でバラ色の光を放っていた。対岸の稜線は遠く、その蔭には我々の下つて来たベーターズ氷河の源頭がある筈であった。北峰へと連なる長く鋭いバイオニアリッジを隔てて新しく眼の前に開けたムルドロー氷河は、我々の足許で大きく屈曲して大氷原となって下流へと流れていた。その夜は氷河の側壁直下の小さな沼の端に泊り、旅の終わりが近いことを感じつつ眠りに着いた。少しずつ夜は長くなつて来ていた。

翌朝、今にも降り出しそうな雨雲の中を出発。四キロ程歩いた頃、案の定横殴りの雹の混った雨が降り出し、全身ズブ濡れになって最後の乗越しマゴナル・パスに着いた。歩くのも嫌になり行動を中止して、テントに潜り込み温い物を食べ、食糧は底を尽きかけており里心は募るが、生憎の雷雨では水汲みに出ることすら假ならなかった。次の朝、合羽を絡めて脱兎の如く山を下る。日高のカールのような風情のところに来ると、ゆっくりと休みたい気持ちはあるのだが、妻ま

じい蚊蚊、しかも日本の蚊の数倍もありそんな奴に群らされては小走りに歩く以外に方法はなかった。幸い顔と首筋だけは持参の虫除け網で保護出来るのだが、服の破れ目、手首、その他ありとあらゆる露出部は見る間に膨れ上って了った。追いつてられるようにして、ツンドラの丘を越え沼を越え、終に河幅一マイル程もあるマッディ・リバーの彼方に目的地のワンダー・レイクが見える丘の上まで来た。グレイシャーミルクの河を靴のまま渡り、針葉樹の森の中を最後の里馬力でキャンピング・グラウンドへと駆け抜けた。長かった夏山行は終わった。

翌朝は、我々は無料バスに乗りワンダーレイクを後にした。同乗の人達にお祝いを言われ、写真のモデルになり、国立公園管理事務所に登頂報告をし、登頂者ノートにサインをしてはみたが、やはり感慨はいつもの夏山行と全く同じものであった。晴れていれば壮大な姿が見られるというマッキンレーはついに車中からは一度も姿を見せなかった。バスから降りた我々は、国道沿いにあるマッキンレーパーク駅近くの木造の瀟洒なホテルに部屋をとった。

中野先生から、登り終ったらステータキを食べるようにと言われて戴いたお金は、ここで骨付きハムとベーコンの塊とに化けた。久し振りに風呂に入り下着も取替えて、軟いベッドの上で大の字になって我々は心地よい夜を過した。翌朝、前日のバスの中で予め頼んでおいたヒッチの車に乗り、心も軽くフェアバンクスへ出発した。如何に大きいクライスラーと言えども大人七人子供二人では手狭であったが、二日前の雨のテントを考えれば何のその、陽気なアメリカ人親子と怪し気な英語で歓談しているうちにフェアバンクスへ着いた。

アラスカ大学の北極生物研にOBの川道さんを尋ねたが、不在で困っているところへ、医学部の第二生理から出向している土居先生が通りかかり、泊めて戴くことになった。翌日は、アラスカ祭りを見物し、ドライブに連れて行って戴いた上、日本料理まで御馳走になった。名残り惜しかったが、そろそろ帰りの期日が迫って来たので、三日目の朝、充分に礼を尽くせぬまま、再びフェアバンクスを後にした。二日後にアンカレッジで落ち合うことにして三つに分かれたパーティーは、それぞれに道路端に立って親指を挙げ車を待った。カナダ国境まで行って戻る予定の組と、南のバルディーズの町まで行ってフェリーでアンカレッジへ戻る予定の組とがあったが、ヒッチをしようにも道路が好い割には車が通らず、両方



カヒルトナ氷河上の一服

竹田英世



アサバスカを望む

丹羽由紀夫

とも途中で断念して直接アンカレッジへ戻った。時速八〇マイルで飛ばす車窓に映る風景は、日本の四倍もあるというアラスカの広さを垣間見せ、次から次へと展開する氷河を抱いた山群や深い針葉樹の森は、我々が再びこの地に戻ることを誘うかのように見えた。アンカレッジへ着いた翌日、我々は日本へ戻る飛行機へ乗り込んだ。大きく翼を翻した飛行機は僅か数分間で陸地を抜けた。窓の下には、海岸線に点在する小さな湖沼群が見え、そしてすぐに又見えなくなった。

あとがき

帰国後、我々はすぐに次の計画に着手した。若年者のみの小パーティで七、〇〇〇メートル峰に立つことが我々にとつての次の目標であった。マッキンレーに対する部の評価は、我々を含めた我々と同世代の部員が、その後何を志すかという点と、次に続く世代が、これをどう捉え、如何に我々を越えて行くかという点で示されるのだ、と我々は考えた。更に、継続して価値ある登山を成していくことによって、我々がこのマッキンレーで目指した客観的な実力の認識が体系化され、部は全く独持の、そして共有の知識と判断とを以て、遠征計画を検討しうるようになると思えた。従って、八、〇〇〇メートルへの視坐を持つためには、七、〇〇〇メートルから七、五〇〇メートルへの過程を踏まねばならぬと思つた。その時の我々の判断では、心の内でバイオニアであり最終的にバイオニアであることが出来れば、七、五〇〇メートルへの過程では、登ることよりも許可を取得することの方が困難な未踏峰に拘泥する必要はないということであつた。

しかし、現在私の手許に残っているそれ以降の数多くの資料は、我々がその基調となる考え方を堅持し得なかつたために種々の迂余曲折を生じたことを教えてくれる。このような迂廻路に如何に貴重な時間を費したのか。トリスルの失敗の原因は我々が多分この過程で、最も登攀に適したルートを見失なつて了つたことにある。基調に帰り、今までの多くの困難により培われた知識をも加え、共有の認識の場から再出発しなければならぬ。登る喜びを共有し得る仲間であれば、退くくやしきも又、共有し得るものであるのだと思う。私がかきに現役のカラコルム隊のことを挙げたのは、彼等が我々の情念を引き継いでいると信ずるからなのであり、我々も又、彼等と共に再出発したいと考えているからなのであ

る。最終の目標に到達することなく我々の道程は終らない。八、〇〇〇の頂をAACHが自らの手で極める日まで道は続く。我々はその道を行く者の一隊であり、我々にとってその道はこのマッキンレーから始まったのである。

最後に、我々を支えてくれた多くの人達に再度、感謝の念を込め乍らこの文をしたためたことを記して筆を置きたい。

隊の構成

リーダー。越前谷幸平（医学部四年）二十四歳、医療担当。

アシスタントリーダー。竹田英世（農学部四年）二十三歳、渉外担当。

メンバー。鏗 邦芳（教養医進二年）二十三歳、装備梱包担当。古川幹夫（教養理類二年）二十一歳、食糧担当。

池上宏一（理学部三年）二十歳、会計担当。安藤朝夫（工学部三年）二十歳、登攀装備製作・記録担当。

行動記録

六月二五日 全員東京発→アンカレッジ着。

六月二六日 アンカレッジで食糧買出し。

六月二七日 アンカレッジ発→タルキートナ着。

六月二八日 タルキートナよりセスナ機でカヒルトナ氷河（二、〇〇〇メートル地点）着。

六月二九日～三〇日 カヒルトナパスへ荷上げ。

七月一日 カヒルトナパス着。（三、三〇〇メートル）

七月二日 停滞。

七月三日 三、八〇〇メートル地点へ荷上げ。

七月四日 四、三〇〇メートル地点にアドバンス・キャンプ設営。

- 七月五日 三、八〇〇メートル地点の荷を回収。
- 七月六日 アドバンス・キャンプよりウェストバットレス経由で五、三〇〇メートル地点の氷洞へ。
- 七月七日 停滞。
- 七月八日 デナリパスへ偵察と荷上げ。
- 七月九日 氷洞より頂上往復。頂上着一七時五〇分。
- 七月一〇日 氷洞よりアドバンス・キャンプへ。
- 七月十一日 アドバンス・キャンプよりカヒルトナ・パスへ。
- 七月一二～一三日 高度障害の回復待ち。
- 七月一四日 マウント・キャップスへ。
- 七月一五日 マウント・キャップスよりペーターズ氷河のベースンへ。
- 七月一六日 ペーターズ氷河下降。
- 七月一七日 ペーターズ氷河よりガンサイト・パスを越えムルドロー氷河へ。
- 七月一八日 ムルドロー氷河を歩きマゴナゴル・パスへ。
- 七月一九日 マゴナゴル・パスよりツンドラを歩きワンダーレイクへ。
- 七月二〇日 ワンダーレイクより公園バスでマッキンレー国立公園ホテルへ。
- 七月二一日 ヒッチハイクでフェアバンクスへ。土居先生宅に宿泊。
- 七月二二～二三日 土居先生宅に滞在。アラスカ大学見学。アラスカ祭見物。
- 七月二四日 ヒッチハイクでフェアバンクス発。
- 七月二六日 全員アンカレッジ着。
- 七月二七日 全員東京着。

現役たちの山

伏 島 信 治

芦別岳にて

朝がいつの間にか私たちを囲んでいた。平野の彼方から吹いてくる、さらさらした風。人気のない駅前のだだっ広さ。睡むような顔。どこかで確かに出会ったような気がするのにはっきりとは憶い出せない光景。六月山行に何年か振りで参加したときのことである。

モルゲンロートの方向へ、何事もなさそうな足どりで先行するのは二年目だ。ゲスト参加のOBは気ばかり重くて、足はやっと前に出ている感じである。前後の開きはあっという間に拵がってしまい、早くも同じパーティとは思えない有様となった。アスファルトの一本道はやがて、沢沿いの林道に変った。先頭の姿は全然見えない。

現役的な中年OBとして知られるネン氏がようやく一息つけたのはユーフレ小屋である。早速、朝飯前の一寝入りと甘えさせてもらう。ウトウトとしたのも束の間、現役たちのコッヘンは素早く容赦がない。「できましたよ」。きつい山の明け暮れはこれからなんだと覚悟させられる。

朝の食卓に、母親たちが「まるで犬の食器じゃないの」と面白がるアルミ製のボールが並ぶ。最初は誰だってどうしてこんな大きな食器にするんだろうと訝る。プラスチック製の手軽なやつがあるのに、と。その理由は春合宿の時にわかり、六月山行になると欠かせないものと納得する。一年間の山登りを経て、彼らの食器は焚火の煙に燻され、へこみを

作り、一人前の顔付きになっている。

小屋の外に出ると大勢の登山者が出発の準備中である。本州の谷川岳あたりで見ると変わらぬ。装備は良いし、皆酒落た服装で女性の姿も少くない。一方、我らが現役諸兄は華やかさでは劣るけれど装備はなかなかのものである。ピッケルはメタルシャフト、ザックは、アタックザックと通称される雨蓋付きのすこぶる機能的なデザインである。キスリングや日高ザック（注一）そして北大帽（注二）、これらはオールドファッションとして昔話に登場するに過ぎなくなった。ヘルメットにしても、作業用のそれを代用して変に粋がってみせた一九六〇年代の勇者たちの姿は、もう見られない。ニッカーボッカーに、蹠の上まで入る外国製登山靴といういでたちを見れば、いかにも岩登りの達人が居並ぶ按配である。ついて行けるのかしらん、少々不安になる。

沢の豊かな流れは間もなく雪溪の下になった。相変わらず現役たちの足は早い。「ネンさん、まあぼちぼち行きましようや」ということになるが、胃の手術後の体なのにあれだけ飲めるんだからと大して心配もしない。このため、後に狸小路の「つる」あたりで叱られることになる。「おまえたち、ちっとも待ってくれないだもん」と。そのネンさんにヒヤッとするのが起きた。枝沢からのブロック雪崩が、遅れて歩いてきたネン氏に集中攻撃をかけたのだ。場慣れしてない下級生たちはおるか、雪崩学を一通り勉強した上級生もそれほど経験がある訳じゃない。口々に言葉にならない言葉をわめく。ガラガラドシンドシンと本谷じゅうをゆるがす雪崩がおさまって、ネンさんは「シャッターチャンス逃した」と言いながら私たちのところまで登ってきた。

本谷から第一尾根をたどって頂上に着いた。先発した別の二年班は、フランケ（側壁）の登攀を無事に終えて私たちを待っていてくれた。

「どうだった？」

「ウン、大したことないですよ」

狭い頂上は私たちの仲間がいっぱいになった。帰りは本谷のグリセード大会である。さすがにネンさんの滑り方はうま

い。現役たちは見事なウェーデルンスタイルをあれよあれよと見ているばかり。花の二年班もしばらくは形なしであった。

小屋に戻って夕食を済ませると、誰かが歌おうと言いだした。山岳部特製の歌集もあって宴らしくなる。しかし、みな夜行列車の疲れが出たのだから、一人二人とシユラフにもぐり込んで、いつかな静かな山の夜になった。翌日は現役のK君に引率されて夫婦岩に出かける。先に取り付いている二年班の三パーティは赤岩で十分に足慣らしをしたものか、勢いよくザイルを伸ばしていく。K君は、そんな彼らを「連中、まだまだですよ」などというがこちらは岩を見ただけで「もう駄目」である。さんざんわめきつつ脆い岩壁を抜け出ると、陽はすっかり高くなっている。小さな頂で大勢の現役たちの代わりとなって迎えてくれたのは、ひょうひょうと峰を渡ってくる大きな風と這松の香りであった。

ルームの四季

今のルームは、教養部キャンパスの一角にあって、夕刻に訪ねれば、隣のテニスコートからはポーンポーンと快い響きが伝わってくる。プレハブ造りのクラブハウスの前で旧式のオートバイをいじっているのは、どうやら現役の五年目のアオキやジッタたちらしい。古いAACHの看板のかかるドアを開けると、テントやザイルが部屋中に広げてあり、見知らぬ人たちが何やら相談事をしている。

部屋の広さは文連時代（注三）とあまり変わらない。書棚やロッカーやテーブル、皆昔のままである。誰が作ったものか知らないが、「アンタッチャブル」と書かれた郵便入れも健在である。北のキャンパスにすっかり溶け込み、新しい時を刻むルームの姿がそこにあった。

現在の部員数は四〇人程、本州の大学山岳部に比べれば大世帯の方である。よく飲みよく語ることは以前よりも少なくなつたと聞くが、山はしたたかに登り続けている。

春のメイン山行が終わる頃、ルームは新しい人たちを迎える。入部した動機はさまざまであるが、昔とそれほどの違い

はない。極地に行きたい、原始生活での技術を得たい。日高、北海道の山、北大山岳部の名に期待してきた者。これらのいわば伝統的な志願者と山岳部という確かな組織に我が身を委ねて来た者に加えて、「なんとなく」門を叩いた人たち。その中にはルームの雰囲気になじめないですぐやめてしまう人たちもいるようだ。

四月も末になると五月合宿の準備であわただしくなる。恒例の合宿賛否論は、春山前に済んでいるものの、近年は小屋を使用しなかったり、今迄合宿をしたことのない地域で行うことも少なくない。幹事の苦勞は並大抵ではない。この五月合宿が無事に終わると、新入生歓迎コンパを兼ねた空沼祭り（注四）となる。祭りは「いつも荒れる」と上級生は言う。私たちの時代もそうだったから「ウム」などと言ってごまかす。たった十年位で人類の英知が進歩するはずもないから。飲んだくれて、小屋じゅうがゲロゲロになったって、AACHが滅びる訳でもなかるうと、OBたちは知ったようなことを言う。

空沼小屋は、今でも鼠肩にする者が少なくないが、老いた印象は否めない。先輩たちが作ったというベランダも目に見えて朽ちて、今では小屋全体が傾いている。身内の者はいざ知らず、訪れる若い人の目には価値の無さそうな骨董品でも眺めるよう。由緒ある小屋だけに時の流れとはいえ無慙である。

五月はまた岩登りシーズンの幕開けである。小樽赤岩の整備された歩道は多くのヘルメットをかぶった男女で賑わう。天気の良い日曜日ともなれば、三級ルートで時間待ちをするのは当り前となっている。山岳部とて同じこと、下山連絡を受ける部長先生の御心配は如何ばかりかと思う。こうした岩登りの隆盛は単純に登山人口が増えたという理由だけではなさそうで、スポーツ、レクリエーションの多様化と市民化が赤岩まで訪れてきたと穿った見方をする人さえいる。

素晴らしいスピードで難しいルートを登っていく達人や、単独登攀者が目に付く傍ら、易しいルートにひしめき合う人たち。

五月の山に楽しく遊ぶうちに大学祭が近づく。日高、大雪、暑寒別、積丹の山々が、初めてたおやかな山容を私たちに見せてくれる。

北海道の山登りに言いしれない魅力を感じるのもこの季節である。北の山を走るように歩く。友だちのコールが光の谷に響く。短い夏が花開くように私たちの夢を誘い、遙かな峰もしばし親しい仲間となる。

沢登りが活発になる頃、夏山のパーティ編成、計画検討とルームは再び会議に明け暮れる。記録の少ない山城やルートを選ぶことが多く、札幌在住の若手OBにお声のかかることもある。

ここで、ルーム全体で行なう検討会のことに少しくふれよう。戦前には特に検討会と名ざされたものはなかったらしいが、札内川十の沢遭難など山岳部を揺がせたアクシデントの反省と教訓から、山行計画を事前にチェックするシステムが確立された。筆者の頃（昭和四十年代後半）は上級部員会議と例会の検討を経て主任幹事が最終決定をした。

ところで、現在の最終決定権はパーティのリーダーにある。この考え方は五、六年前からルームに定着した。だが、それ以前には検討の考え方やシステムそのものが常にルームの大きなテーマになっていた。

山岳部は何んのためにあるのかという議論や、「安全性」、「主体制」論が盛んにたたかわされた時代があった。そうした背景があるため山行の決定が難渋することが少なくなかったのである。一方、最近の検討会は比較的スムーズに進行することが多く、計画当事者と検討側が激しく渡り合う場面はほとんど見られなくなった。とはいえ、シビアな検討態度は以前と変わらないが、最近の検討会では計画を提出する側が当初の計画内容に固執することが少なくなり、変更勧告も受け入れられ易くなったと見ることもできる。

かつては多くの人々が「なぜ検討するのか」「どこまでが検討可能なのか」「その幅を拡げるためには何をすべきか」という問題に頭を悩ませた。その挙句ルームを去った者さえいた。「他人の山登りを完全に検討することなどできない」と。また、ある者は自分の山行を認めない山岳部という組織に絶縁状を叩きつけて。現在のルームにこのようなやりとりが皆無というわけではないが、全体的な気風はいつしか変わってきている。

このように、最終決定をパーティのリーダーが行うという現在の考え方は、アクシデントの反省と教訓を父とし、個人々の志向性を母とし、おびただしい論議という難産のすえ生れた子である。それだけに育て上げる事も難かしいとい

える。

夏山は二回戦が普通になっている。一回戦は道内で、二回戦は本州へというパターンが多い。これは帰省を兼ねている他に、北アルプスや谷川岳で岩登りを楽しむ人が増えたからだ。日高の沢から、東北や南アルプスの沢に転戦するのも一つのパターンとなっている。

秋はほとんどなく休息期のようなものである。しかしヘルベチア祭りが過ぎ雪虫が飛ぶようになると、そろそろ冬山のことになり出す。あまりスキー談議を聞かないこの頃だが、雪山をめぐる研究活動は盛んだ。

雪崩研究会は五年前に発足して「雪崩の危険と遭難対策」という冊子をまとめあげた。現在ではアイゼン研究会が新たな問題提起をしている。山行中のアイゼントラブルが無視できないほど増えているからである。しかし、メーカー側の反応は鈍く、「折れない使い易いアイゼン」を登山者の側から追求することはなかなか難しい面があるようだ。このアイゼン問題に限らず、市場に多く出廻っている登山商品のなかには、得体の知れない付加価値を高めただけの代物も少なくない。その全てが堅牢ではないところに厄介な点があるわけだが、ともかく売れる。アイゼン研究会の意図するところは極めて重大な今日的課題を持っているといえる。

冬山前は一年で最も緊張感にあふれた時期である。各種の勉強会にも一段と熱が入る。それでも小さなアクシデントは起きる。昭和五十年十一月末の冬山準備山行に頻発した凍傷事故。新聞報道された五十一年初冬の旭岳の遭難騒ぎ。人為発生雪崩もまた後を絶たない。この十年程山岳部では幸いにして死亡者を出していないが、四十九年春の鹿島槍雪崩事故のように幸運としか言いようのない例も少なくない。

冬の合宿が終わるとパーティ毎の正月山行となる。一年班は北日高や大雪へ、二年班は中部日高や北アルプスへと慌しく出かけていく。

年が明けて皆が揃うと札幌近郊スキーツアーの幕開けとなる。ヘルベチアヒュッテも空沼小屋同様たいぶ老けこんだが、現役たちを暖かく迎えてくれることに変わりはない。現在の部員でも「冬のヘルベチア」を齎える者が依然として多

い。しかし、あまりの環境の変化に、ヒュッテの将来を諦観する者も次第に増えてきた。この北大山岳部五十周年記念誌が出版される頃、朝里岳に「定山溪高原札幌国際スキー場」がオープンする。高原橋から少し先は、華やかなスキーヤーたちの天国になり、ヘルベチアヒュッテはスキー関係の雑誌に小さく紹介されるだろう、「こんな古い山小屋がある」と。かくして、この素晴らしいヒュッテを拠点とした古き佳き時代のスキーツアーは、歴史のなかに埋れようとしている。北

のおそらく山と人間の関係は、原始的な山登りの概念だけではとらえられない時代に入っているのではなからうか。以前とあまり変わらないルームの四季のどこかで、山登りの考え方は少しずつ変化している。そんなことを感じさせるヘルベチアヒュッテの移り変わりである。

ルームの足跡から

北海道の山は半世紀をとうに経て、至るところ足跡だらけになったと言われる。

昭和四十年代には、日高をめぐるパイオニアワークの最終課題として注目された困難な直登沢開拓も事実上終結した。もちろん他の山域も同様な状況である。北大山岳部のパイオニア精神は、こうしたなかでルームの象徴あるいは母胎としての位置に留まりながらも、その積極的な意味付けを徐々に失っているように思える。ためらわずに言えば、長い間北海道の山登りの中心にあった北大山岳部の営みは、結果として、日高に代表された「そこにある未知」から「自分にとっての未知」へと現在の志向を導く傍ら、ルームの山登りの考え方や行動の多様化（あるいは拡散）を促してきたのではなからうか。

時代の移り変わりとともにルームの気風も趣きを変えている。現在の部員が「現代っ子」であるという意見には、少なくとも一般論では賛成しなくてはならなくなったからである。たとえば、熱烈なロマンチストは姿を消した。検討会の進行に見られるように、物事に多くこだわらない姿勢をとる者も多くなった。他人の行動に無関心な層も増えた。そうした

彼らを現代っ子と総称するのは易しいし、確かな面があることを否定することはできない。しかし、山と人間の以上のような変化をとらえて近年のルームの全てとするわけにはいかないだろう。

数年前までの山岳部の在り方を詳細にたどったものに部報一―号があるが、今のルームの雰囲気はその当時とも異なる。つまり、多くの意見が対立しあい、さまざまなアクシデントが相次ぎ、山岳部という器がひととき清脆く見えた昭和四十年代に対して、現在は奇妙に安定した時代といえる。短い間にもルームの状況はとめどなく変わっているのである。

ところで山登りの形式（狭義の意味での）はあまり変わらず、個々の山登りを取り上げれば以前に劣らず活発である。ただ、彼らは伝統と新奇なるもの（たとえばス―パーアルピニズム）の両者に対して均しく冷静であり、賑やかな舞台からは遠いところで自分たちの山登りを淡々と楽しんでゐる風情が感じられる。こうしてみると、移りゆく現在を直截に言うに当てることは可能のようでありながら、実は大きな誤ちをおかしやすい危険をはらんでいるように思える。

一つのシーズンを例にとつてルームの山登りを概観することにしよう。昭和五十三年春のメイン山行、この時期に各地に入山したルームのパーティは計六隊であった。その内訳は一年班四隊、二年班二隊、後者の数は少しく寂しいような気もするが例年多少の変動はあるものである。一年班はそれぞれ南日高、知床、北アルプス、東大雪へ、二年班は中部日高と北アルプスに入った。とりたてて新しい試みがなされた訳ではないけれど、それぞれの計画は大きく、最近の山登りをよく示すものであった。知床班は、その代表的なパーティであろう。このパーティは海別岳から知床岬まで抜けたのち、海岸線を相泊まで歩いたところで「沖の船をヒッチした」という。

以下は春山報告書から抜粋した行動記録の一部である。

三月二一日（入山日）

ウトロから峰浜までバスで戻り歩き出す。ポン海別と海別のコルの北尾根コンタ五一〇のタンネの中に設営。

三月二七日（七日目）

再び重くなった荷を担ぎあげていざ出発。が、リーダーのワイヤーが切れたのを皮切りにエビ金が折れたりシールが

切れたりトラブル続出。トラバースルートを使って羅臼平までスキーで行き、空身で羅臼に登る。三峰の登りはシートラーゲンで登ったが重荷のせいでピッチがガタ落ち。オッカバケはスキーを置いて東側をネグレクトし、トラバース気味に知円別のカール状地点へ。斜面を掘り下げ、ブロックをテントより高く積み上げて、近づいてくる低気圧に備える。

四月一日（二日目）

朝、風が少し弱まり出発。ガスの中、東岳をまき気味に登り稜線を北へ。ルシャ岳の尾根では強烈な風でスキーが宙に舞う。

四月三日（一四日目）

スキーを置いて東側を滑りながらウィースブリへ。ピークは無風、全くの静寂。稜線を忠実にたどるがスキーはダンゴで大消耗。突然燈台に出てすべては終わった。東の海岸の番屋でC₁₄。スキーを捨てる。

四月五日（一六日目）

懸念されたウナキベツの前半は水中に出た岩礁を飛び伝う。つづくヘツリはリーダースタッフで水にステップを刻み先を偵察するとあとは何もなさそうなので一安心。観音岩の雪壁をアップザイレンで下ると砂浜。相泊からは沖の船に乗せてもらい岬町へ。

「人臭くなったことは否めないがそれでも知床は良い所であった。その良さはやはり半島を遙かに旅して来て岬に立った時に味わえるものに思える。また海岸歩きは山行の終わりに相応し欠かすことはできない。」京都出身のK君は感想をこう記している。

南日高を追分峠からトヨニ岳まで縦走したA君は、自ら率いた山行を次のように総括した。

「天候にも恵まれ、二年前の苦勞がウソのような南日高であったが、ラッセル、ブッシュユこぎ、雪洞、生活技術などメン

パーにはいい勉強になったと思う。アシスタントもよくやってくれた。無感動なリーダーは別として残りの三人の目に南日高はどのように映ったのだろうか。とにかく僕の四年間は終わった。日高に始まり行きつく所はやっぱり日高であったようだ。」

日高の変わりようは多くを語る必要もなからう。かつて延々と中流部の函のなかを旅したことなど現在では確実に夢物語に属する。私たちが見たことのない風景を写した写真の多くはそうしたものである。とはいえこの山系の存在は今なお大きな魅力を持っているようだ。

昭和五十三年の夏には、一年班二隊と二年班四隊が山岳部のハイマートともいべき日高の山に入った。しかもそのうちの一隊は十一年目のOBが自らリーダーになったほどである。日高に始まり日高に終わるといふA君の言葉は、あなたが彼一人の思い入れだけではないようだ。

しかし、どれだけ難しいルートを選ぼうとも、ハイマートとしての魅力が次第に相対的なものとなってきたことだけは指摘しておきたい。たとえば一年生が夏山の二回戦に北アルプスの主稜線を選ぶとする。彼らは初めての日高と比較して、槍や穂高を「ゴミとハエの山」と呼ぶ。一方、南日高の二年班のリーダーは「林道でめっちゃめっちゃになった」中流部に白々とした感じを抱く。このように、二、三年目ともなると、自分たちの山登りが置かれた状況もわかってくる。憧れの日高は確かに原始的であるが、予想した以上に開けてきたと思いつるのである。「遥かなるベテガリ」は林道の発達した今日、日帰り山行すら不可能ではなくなった。未踏の沢も小さな枝沢にしか残っていない……。従って、やる気があればあるほど「心の山」が高くなってくるのではなからうか。

それは日高に限らない。合宿地としての十勝は、通常の合宿形態を放棄させるほど変容した。こうした状況のなかで自分たちの山登りをやりぬくには、軽やかな足取りで「自分たちにとつての未知」を訪ねる他はないだろう。たとえば厳冬の大雪リクマンベツの合宿、東北地方の沢、冬の穂高屏風岩、そして道北や十勝川上流の森から山へのワンダリング。それぞれ志向したものを一つの言葉でくくることは困難であるけれども、北大山岳部のある人々は「心の山」を求め、現

実のものとしてきたのであった。

海外登山もこれらの行動の延長として位置づけられるべきであろう。

六年前に夏山山行の一環としてマッキンレーを登頂したのに続き、この夏はカラコルムの無名峰に現役を含む隊が入山している(註五)。どちらも自分たちの登れそうな山を自力で準備して、全員登頂を目指すというやり方である。国内の山行と同じ発想で登ること、これを裏返せば、国内の山々を歩くことに確かな考えを持っているともいえよう。

未踏の山やルートがきわめて少なくなり、伝統的な山岳部のパイオニアスピリットのありかたを求めることは難しい時代にあって、各自がそれぞれの山登りを気張らずに楽しむ傾向はかえって自然であり好ましくもある。そうしたなかにあつて、考え方は以前と少しく異なるかもしれないがパイオニアワークを志向する者も決して少なくない。

多様化する志向と現代っ子、山岳部への愛着が薄れたなどと言われる現在、彼らの行動や考え方に批判めいた声が起こるのも不思議ではない。山岳部の全体としての雰囲気は確かに少しづつ変っている。しかし、現役たちの山を訪ねていくと、案外そうでもないなと思わせるところがあり、私たちの時代を含めて山岳部の伝統が色濃く残っているのもまた確かなことである。彼らの一部はまた多分に十年前の私たちと劣らぬ面をもっている。「おれたちは、頭の悪い子元氣な子」。あるとき、ある酒場で、誰かが十年前の私たちのキャッチフレーズを口にした——。

この夏も、日高の山は元氣な子供たちで賑わっている。

注一 ポケットのないキスリングの通称。沢登りや躑ごぎに適するが、帆布製で重かった。

注二 大きな顔覆いの付いた冬山用帽子。自家製で十年位前まで盛んに使われた。

注三 明治三十六年に建てられた白亜の旧農経・農政学講堂。のちに農学実科、教養部などに使われ、現在は「文化団体連合会館」(略称文連)となっている。数年前まで山岳部のルームがここにあった。位置は現在の農学部前である。

注四 空沼小屋はもとスキー部の管理であったが昭和三十二年から山岳部が管理することとなった。

注五 この隊は、石村明也(隊長)、河合範雄、花井 修、八木欣平(以上OB)、毛利立夫、清野啓介(以上現役)、遠藤高夫、吉田祐一(以上札幌医大)の八名で、一九七八年八月一七日カラコルムの未登の六、四四七米峯に登頂した(この項 本文脱稿後附記)。

コロンビアアイスフィールドの山

——創立五十周年記念登山——

木 村 俊 郎

それに至るまで

コロンビアアイスフィールドから融け出した水は東に流れてハドソン湾を経て大西洋に注ぐもの、氷河の下をくぐってから西側の太平洋へと注ぐもの、さらにはまた遠路、北極海へと注ぐものに分れる。それはグリーンランドを除くと北半球で有数のアイスフィールドだと言われて居り、カナディアンロッキーのほぼ中央に位し、ブリティッシュコロンビア州とアルバータ州との州境付近に跨っている。カナディアンロッキーの最高峯はマウント・ロブソン(一一、九七二フィート)で一九一三年に登頂されているが、我々に最も馴染の深い山は一九二五年に榎有恒・三田幸夫氏等の快挙を残したマウント・アルバータ(一一、八七四フィート)であり、このコロンビアアイスフィールドに隣接して聳えている。

我々北大山の会東京支部は林和夫を中心にして山岳部の創立五十周年の記念行事として、このコロンビアアイスフィールドの山々を目標に選び、カナディアンロッキー第二の高峯マウント・コロンビア(一一、二九四フィート)とキャツスルガード・マウンテン(一〇、〇九六フィート)およびマウント・アンドロメダ(マウント・アサバスカの西南に続く尾根上の

ピークで約一、三〇〇フィート、地図上では無名峰になっているが A CLIMBER'S GUIDE TO THE ROCKY MOUNTAINS OF CANADA (この名の記載がある) の三峯に登頂することができた。記録の記述の前にその経緯について一寸触れておく。

山岳部創立五十周年の記念行事としては種々の企てが計画されてはいたが東京支部ではこの五十年の年代の層を一つに纏めて何かをやってみようではないか、そのためには第一に今までに蓄積した山の会の力で直ぐに実現できるものであること、第二に各年代を全部包含でき、第三には参加した各人のメモリーに残る企画でなくてはならないということであった。その結果選ばれたのが、この世界で最も美しいカナダのジャスパー・バンフ国立公園の奥に位するコロンビアアイスフィールドの山々であった。登山の対象としては、アルバータが先ず候補に上ったが時間的制約を考えて、計画の段階で落とされ、この山脈第二の高峯であり、登頂の可能性が大きいという観点からマウントコロンビアを第一目標とした。

この稿を執筆している今では、コロンビアアイスフィールドの下部のルートはツアーのコースとして、もうよく知らわっているが、当時これを我々が計画している頃には未だ知る人も少なく、旅程の編成にも一苦勞したのであった。参加人員が少なければ、この計画の趣旨に沿わないこともさることながら、先ずは航空運賃の大幅な割引制度の適用を受けられず経費面でも苦しくなるし、逆に人数が多過ぎた場合は目的が山行である以上、安全面での自信が少々怪しくなるといったジレンマもあり、幹事一同かなりの苦勞をした。また、現地の偵察を行う余裕はなく、唯一のガイドブックである、先に挙げた英文小冊子と、バンクーバー在住の菊地徹先輩から送られた一枚の地図をたよりに、何度も幹事会での検討を重ねた。

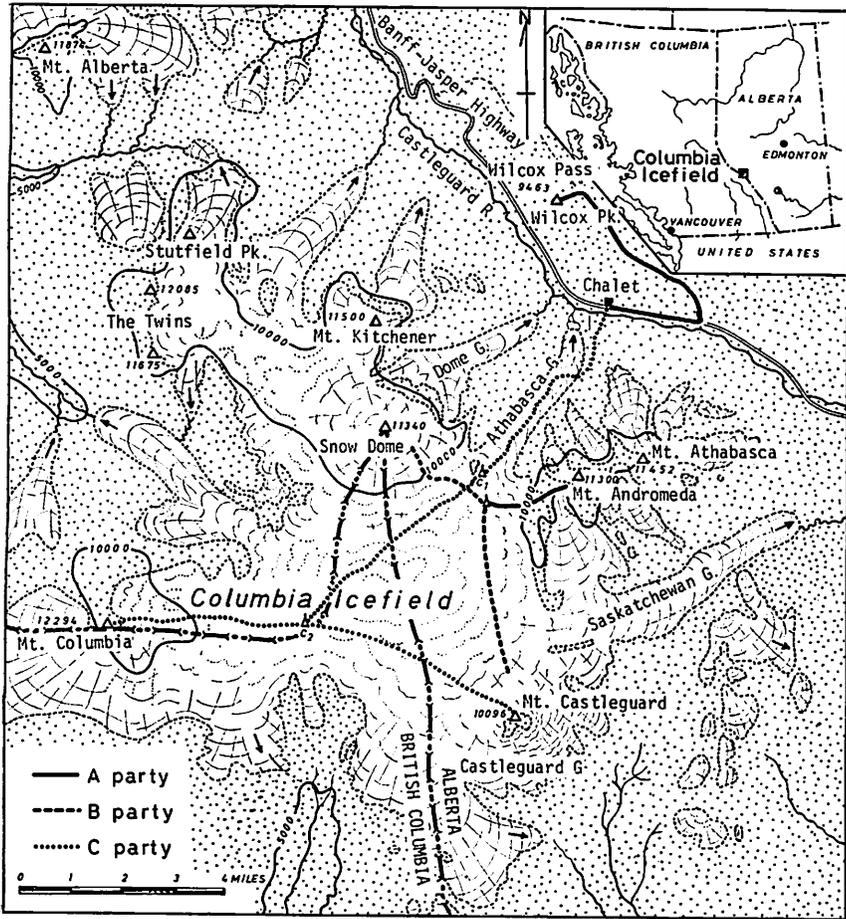
ともあれ、このような経緯を経て予期以上の人数と年齢層が集結して昭和四十八年八月七日、一六日間の日程で羽田を出発することになった次第である。年齢層は当時六十六歳の小野鉄之助大先輩を筆頭に、最年少は江幡三郎氏の令嬢アミさん十八歳で、この五十周年の行事の名に相応わしく、五十歳の年齢差にわたっていた。総員三十二名のメンバーを班分けに従って記すと、左のようである。

	團長	山口健児							
	隊長	林和夫							
	副隊長	木村俊郎							
	A班	坂本直行(L)	丹羽由紀夫(SL)	小野鉄之助	山口健児	山県浩			
		小平俊平	和久田弘一	金光正次	林和夫	増井幸雄			
		平田克己	坂本ツル	由良珠江	安田美穂子	東弘道			
		石島美保	森章	江幡アミ					
	B班	橋本芳郎(L)	山県義道(SL)	江幡三郎	井上光子	岡田安正			
		岡田幸子	塚本孝一	安積三朗					
	C班	木村俊郎(L)	岡田勝英(SL)	矢作栄一	小枝一夫	小口洋佑			
		新津英夫	石崎貞子						

(注 会員の家族・知人を含む)

日 程

八月七日夕刻、羽田からカナディアンパンフィック四〇二便でバンクーバーまでノンストップで直行、日付変更線を通過するのでバンクーバーには同日昼過ぎに到着。予定では翌日夜行列車でジャスパーに向い、車窓からカナダの大自然を眺めつつマウント・ロブソンまでも遠望できる筈だったが、鉄道はストライキの最中で一両日中には解決しそうもないとのこと。急遽予定を変更、バスのチャーターなどの交渉もしたが、結局は翌々日の飛行機でエドモントンにゆき、そこからバスでジャスパーに入るのが最良の方法と決った。このあたりは和久田の知人で特別に参加した三井航空サービスの役員をしている平田氏の腕の見せどころとなった。ストライキは、いずこも同じと諦めたわけだが、もし個人の旅行の場合



は定期バスでジャスパーに行くこ
 とも可能であり、この場合シーズ
 ン中はバスが満員の場合には何台
 でも増発することが法で義務づけ
 られているようで、乗りはぐれる
 ことはなく、さすがは人間優先の
 お国柄と感心させられた。人間優
 先と言えば、バンクーバーの町も
 横断歩道はチャリと信号が出て人
 が歩き始めさえすれば人が歩いて
 いる間は車は走らないことになっ
 ていた。バンクーバーの滞在が一
 日延びたので余暇を充分に利用し
 て、公園や郊外の各所にある池な
 どを見物する傍ら、山口、和久田、
 木村はカナダ山岳会のシャーマン
 会長に挨拶に参上し種々のサジュ
 スションを受けることが出来た。
 別れ際に彼は、当地はこのところ
 天気が悪かったので、あと二週間

は好天気だろうと言ひ、この予想は幸にも完全に適中する結果となつた。

バンクーバーに二泊の後エドモントンへ飛び、そこからチャーターしたバスでジャスパーに向う。車窓からは牧草地と麦島が延々と続く。一〇〇マイル近い時速で走る車で一時間もの間に家が二、三軒と言つた広大な土地。「ここも貧乏農家だなあ」と、坂本(直行)の嘆声も洩れる。途中まで空路を利用したおかげでジャスパーには概ね予定の日時に到着できた。早速、地図やら食糧の買入れに奔走。

翌十日午後、チャーターしておいたバスで予定通りにコロンビアアイスフィールドから発するアルバータ氷河の舌端、エンドモレーンの脇にあるコロンビアアイスフィールドシャレーに到着。眼前には、その形だけは頭に描いていたアサバスカがイメージ通りに聳え、その下にはアサバスカ氷河が深く入り込み、その奥の雲をかぶつたあたりにコロンビアアイスフィールドがある筈だった。シャレーの近くで、ポケットからビスケットなどを取り出していると、これをねだりにリズなどが寄ってくる。ホテルの前の小さな湖からは巨大なムースが姿を現わしたりして目を楽しませてくれたが、B班及びC班は明日の早朝の出発に備えて手分けをして氷河の登り口の偵察、ホエーブスに使う石油の購入、そして森林管理事務所のハンス・フューラー氏に入山届を出し、登山のアドバイスなどを受けた。

一日から一六日までの六日間はA・B・Cの三隊に分れてそれぞれの行動に入ったので、その記録は次項で述べるが、概括的に書くとC班は登山隊としてアイスフィールドの上に二つのキャンプを延ばしてコロンビアとキャッスルガードに登頂、B班はアイスフィールド上を縦横に歩いたほかアンドロメダに登頂、A班は標高六、五〇〇フィートの位置にあるホテルをベースにしてアサバスカ方面に向かいこれの登頂は成らなかつたが、氷河の散策などを楽しんだほか、三名はアンドロメダの西峯に登頂した。

一七日は前夜の吹雪で一変した冬景色の中で最後のヒュッテンレーベンを楽しみ、報告と交流を兼ねた夕食には前述のフューラー氏とその家族をも招いて和久田の流暢な英・独の通訳まで混えてフューラー氏から時間の延長を申し出られる程の楽しさ。そしてロビーでは奇しくも、出発前に当地の情報などを戴き、大変お世話になっていた中央大学北米大陸登

山隊の黒川氏と会う。

一八日、住み馴れたシャレーとアイスフィールドを後にして帰途につく。タクシーでパンフに至り一泊、翌日はカルガリーに一泊、日曜日のためデパートやレストランは休みで、街はゴーストタウンのよう。動植物園などを見物して時を過ぎ、翌日空路バンクーバーに戻って一泊の後カナディアンパシフィック四〇三便にて途中アンカレッジに一時間ほど着陸の後、八月二二日一九時、全員無事羽田に帰着した。

登山と行動の記録

C 班

八月二一日早朝、氷河にやっと朝日が当って氷の表面が少し緩んだ頃を見計らって出発。B班とともにアサバスカ氷河の末端から右岸のモレーンの上に付けられた道を通って標高七、〇〇〇フィートの位置から氷河へ降る。初めは氷河の中央部を一時間ほど歩いたがクレバスが多くなったので左岸寄りのルートをとった。しかし左岸からは落石が多いので細心の注意が必要だった。この危険を避けるためには午前二時頃に通過するのが最良らしい。しかし始めての氷河なので暗闇の中を歩くよりも、クレバスに注意しながら、左手からの落石と右手のクレバスとの「取引き」を考えながら、できるだけ氷河の中央を歩くのが賢明な方法と言えよう。まる一日を、この氷河の登行にかけて、最上部の標高約九、〇〇〇フィートの位置にウィンパー二張を張って第一キャンプとする。

一二日テントを撤収して九時三四分に出発。マウント・スノードームの南側の裾を巻いて左手にキャッスルガードを眺めながら、石ころ一つ木の枝一本も見当らない広大なアイスフィールドを、シールをつけたスキーでひたすら歩き一七時頃コロンビア氷河の源頭、堅い雪原に第二キャンプを設営。緯度が高いので薄暮は九時頃まで続き、キャンプワークは気分的にゆとりがあつて誠に楽だった。

一三日快晴に恵まれたので早速第一目標のコロンビアを目指して五時二五分出発。夜明けのアイスフィールドは堅く

クラストしていたが標高一、〇〇〇フィートの位置までスキーを使用し、ここでデポーしてアイゼンに履きかえる。南稜からのルートが岩混りのしつかりした尾根のように見えだが、我々は眼前に拡がっている手近かな南東の大雪面を登ることにした。途中、腰を没するラッセルや、アイゼンのツアックがやっと立つブルーアイスに悩まされ、一名は本日三度目の身体の不調を訴えたのでリーダーの木村が付添って頂上直下約三〇〇フィートの位置から戻り、残った五名のリーダーは小枝が引受けた。頂上の手前の巨大なクレバスも無事越えて一四時五八分に登頂。下りは氷の質も悪化してスクリューハーケンが利かず、氷壁の下降にはかなりの時間を費したが、シーデポーからは既にクラストしたザラメ雪に、スキーの威力を発揮し、全員がキャンプに帰着したのは二〇時四〇分であった。一五時間を越える行動だったが、天候にも恵まれて早々に第一の目標を完遂した喜びは大きかった。

一四日、前日の行動での疲労が大きかったので休養日のつもりだったが、昨日偶然にできたトランシーバーの交信でB班は一二日にキャッスルガードに向ったが頂上直下の岩壁で時間切れになってキャンプに戻った事を知っていたので、この日木村、矢作、岡田の三名で第二キャンプから長駆キャッスルガードに向うことにした。三時三〇分起床、五時五分出発。満月が南西の空にかかって氷原を不気味に照らしていた。キャンプから約三〇分は、ガッチリした硬氷にアイゼンを快調に利せて登る、遠くに目標の山の見え出した高台の上でスキーをつけ、ガリガリの氷原を飛ぶようにして一路キャッスルガード目指して降る。途中細かいクレバスを越えるのに肝を冷したりはしたが、約三〇分で最低鞍部に到着。山はもう目の前に迫っていた。今度はスキーに細引きをつけて腰に結びつけ、犬を連れてくるような恰好で三段階になっている雪の急斜面を登って八時二五分この山塊の基部九、一〇〇フィートの位置に到着、スキーをデポーして八時五五分、南側の尾根に取りついて登る。風は冷く、岩は脆かった、頂上直下の岩壁は、北東へのびている小さな氷のリッジの側面に取っついて氷のバンドを伝わって、頂上に突き上げている岩に挟まれた急な氷のクロアールに入り、ここを攀じ登る。緩やかな雪の稜線に出ると、すぐ先のガレた平坦な所が頂上だった。時に一〇時一五分、三六〇度の展望を満喫し、頂上で化石などをひろう余裕を見せて、一一時一五分帰途につく。シーデポー着一一時五五分。最低鞍部までザラメ雪に変わった

急斜面を再びスキーで滑り降る。

登る時にクレバスの位置は確認しておいたので何の不安もなくスキーの速度に物を言わせたシーンだった。鞍部からキャンプまでは往路とは逆に、完全に腐ってしまった雪原を重いスキーで一步一步ひたすら歩き、一五時三五分四人が待つキャンプに帰着。

一五日第二キャンプを撤収して八時五〇分出発、一〇時一五分、アイゼンをスキーにはきかえて一二時五〇分B班のキャンプ跡に到着。残されていたデポール旗には、行動日を一日短縮して一六日に下山せよと記されていた。明日はザ・ツインに登りたいと思っていたが中止と決めて、途中で我々の第一キャンプに残しておいた帰途の食糧と燃料を持って、アサバスカ氷河の上段まで降ってキャンプする。ここには氷原の中に池があつて快適なキャンプサイトである。氷河はこの数日の好天気のせいか、来た時よりもクレバスが極端に開いたように思えた。対岸の懸垂氷河からは時折り耳をつんざくような鋭い音をたてて雪塊が落ち、岩に当って華蔽の滝のようになって下の氷河へと散っていった。

一六日七時四五分出発、左岸からの落石を避け、中央部はクレバスが多いので、その境界を狙ってルートを取りながら注意深く下降。一〇時には観光のスノーモビルの乗り場まで戻り、A班の心遣いの迎えの車で一〇時五〇分シャレーに到着して、この登山を終えた。

B 班

八月一日C班とともにシャレーを出発。C班のキャンプよりも更に約三〇〇フィート程上の九、三〇〇フィートのアイスフィールド上にウィンパー一張とイグルーを設営。

一二日一〇時四〇分、キャッスルガードに向つて出発したが、スキーを持たなかつたこともあつてアプローチの広大な雪原の湿雪に悩まされて頂上直下で時間不足となる。岩壁にも阻まれて一六時に約九、九〇〇フィートの位置から引返す。

一三日前日の疲労のため休養日とし、イグルーを完成させ、二名はC班とのトランシーバーによる通信のためスノー・ドームの途中まで登る。案の定、交信の場所としては絶対でコロンビア頂上直下に迫っていたC班との交信に成功し、有

効な情報交換ができた。

一四日 橋本リーダー以下八名の全員でアンドロメダ（約一一、三〇〇フィート）に向い一二時四五分に登頂。

一五日昨夜ベースヒュッテのシャレーにいるA班とのトランシーバーによる交信で、予定より一日早くベースヒュッテを引き上げて帰途につくことになり、C班への申し送りをデポー旗に記し、四日間使用したキャンプを撤収してシャレーに下る。

A 班

八月一日以降一六日までの間に林隊長、坂本リーダー、丹羽サブリーダーは数名ずつの組み合せでベースヒュッテのシャレーから三度に亘ってアサバスカ（一一、四五二フィート）への登頂を試みたが、北面からのルートには新雪が溜っているため、雪崩の危険を避けるため北西からのルートを求めたが残念ながら登頂は果せなかった。

またこの期間中に数名ずつのパーティを作って、氷河を散策したり、エメラルド色の湖を眺めに出掛けて木蔭をさすったり、はたまた、ウィルコックスパスあたりで茶筌を取り出して野点と洒落こむ山口、山県大先輩など。レンタカーで釣りに出掛けて巨大なムースに出くわして仰天する人、これを無心にスケッチする人など、優雅に時を過していた模様。後に写真ですっきり分ってしまった次第。

なお一六日には和久田、金光、由良の三名はB班C班が発行に利用した、アサバスカ氷河からコロンビアアイスフィールドへ出るルートを経て、アンドロメダの西峯への登頂を果たした。

装備、食糧、天候など

広大なアイスフィールドの上は、一木一草は勿論、石ころ一つ見当らない銀世界である。

高度は一二、〇〇〇フィートと言っても北緯五二度位の位置なので夏でも零下二〇度以下になることも珍しくないといふ。今回の行動中の最低気温はわずかな零下三度であったが最終日の吹雪の様子から考えて、零下二〇度は決してオーバ

装 備 一 覧 表

団 体 装 備			個 人 装 備 (B班)	
班別	装 備 名	数 量	道 具 類	服 装・着 衣
C 班	テント(ウィンパー型)	2 張	シュラフザック	網 シ ャ ッ ツ
	コ ッ ヘ ル	2 組	エ ア マ ッ ト	コットンシャツ下着
	ホ エ ー ブ ス No.3	2 台	ビ ッ ケ ル	綿カッターシャツ
	ス コ ッ プ	1 丁	ア イ ゼ ン	ス キ ー 靴 下
	鋸 (雪を切るため)	1 丁	ソ ン メ ル シ ー	チ ョ ッ キ ン
	デ ポ ー 旗 の 桿	20 本	ス ト ッ ク	長 ズ ボ ン
	デ ポ ー 旗	20 枚	ス キ ー 修 理 具	長 ス パ ッ ツ
	テントのベッグ	1 組	ウ イ ン ド ヤ ッ ケ	帽 子
	ビニールシート	1 枚	ス パ ッ ツ	ゴ ー グ ル
	ザ イ ル	2 本	ポ ン チ ョ	手 袋
	ハーケン	10 本	地 図, 磁 石, 鉛 筆	日 本 手 拭
	スクリュウハーケン	10 本	カ メ ラ, 双 眼 鏡, 手 帳	ハ ン カ チ
	修 理 道 具	1 組	万 能 ナ イ フ	毛 メ リ ヤ ス 上 下
	灯 油	5 ℓ	懐 中 電 灯	セ ー タ ー
	携 燃	3 ケ	水 筒, 食 器	キ ル テ ィ ン グ
ロ ー ソ ク	5 本	風 呂 敷, 紐	5 本 指 手 袋 (予備)	
薬 品	少 量	チ リ 紙		
ト ラ ン シ ー バ ー	小 2 台	歯 ブ ラ シ		
B 班	テ ン ト (夏 用)	1 張	常 備 薬	
	コ ッ ヘ ル	2 組	非 常 食 3 食	
	ホ エ ー ブ ス	1 台		
	ス コ ッ プ	1 丁	備 考	
	鋸	2 丁	上記の外 C 班及び B 班が個人的に携行して便利を感じたもの:	
	デ ポ ー 旗 の 桿	30 本	シュラフカバー, シール, サブザック,	
	デ ポ ー 旗	30 枚	オーバーシュウ, 白金懐炉, テルモス,	
	テントのベッグ	1 組	防風ズボン	
	修 理 道 具	1 組		
	灯 油	4 ℓ		
携 燃, ロ ー ソ ク, 薬 品	小 量			
ト ラ ン シ ー バ ー	大 1 台			

ではないと思われる。表に示すように、B班C班は冬山の装備を持参したが、短い日程で機敏に活動するために、できるだけ軽装を旨とした。しかし我々にとっては未知の場所であるだけに装備は重くなりがちで個人差はあったが三〇キロ内外にはなってしまう。今回の最小限の装備の目安として最も要領よく切り詰めた江崎の個人装備を表に示した。

食糧は行動食の餅とインスタントラーメン、特殊な非常食以外は殆んど全部ジャスパリーのスーパーマーケットで購入したが、それで充分であった。

天候については、今回は稀な好天気と言われたが、アイスフィールド上の状態は丁度四月頃の北海道の中央高地の感じだと言えよう。

但し最終日は一夜にして吹雪となりこの状態は北海道の二月末から三月上旬の風雪を思わせた。

おわりに

待望のカナダへの旅は成功裡に終わった。三三名のメンバーと五十年の年輪が、このユニークな山行を完成させてくれたと思う。この旅の最終日にカルガリのホテルでのパーティの席上和久田から提案された「ヒマラヤの全貌を見よう」という計画は、種々の経緯はあったが、東京支部と札幌との合同で木村、小林が事務局となり、和久田団長、湯川隊長以下一七名で四十九年一月二六日に出発。更に北半球上の、もう一つの極を探るべく桜井が団長となってラブランドへの旅を計画し、五十一年七月一日、一二名で北極圏に向い、ラブランドの最高峰ケブネカイセ（二、一二三メートル）に木村他三名が登頂した。

五十周年には「何かを」やってみよう、という東京支部の発想はこのようにして実現し、予期以上の想い出を残すことができた。しかし、今となってみれば「なんとか、やってみました」というのが幹事一同の偽わらざる感想である。なお、この山行について種々アドバイスをいただいた三田幸夫氏、情報を伝えていただいた黒川氏に厚くお礼を申し上げます。

北大山岳部における登山合宿

北大山岳部における登山練習合宿は、その初期からスキー合宿の名で呼ばれていた。当時の北海道の冬期登山において、登山技術としてのスキーの役割の重大さを考えれば、これはきわめて当然のことであった。勿論われわれのスキー練習の目的は、単なる滑降技術の上達のみではなく、スキーを利用することによって、安全に、またすみやかに登山を完了することにあった。従って合宿も、地図を読みながらの登りかた、ラッセルのつけかたから始まり、シーデポー以高のアルバイトを含む行程において、総合的な冬期登山の能力を養う場であった。また冬山でおこりうる危険に対して、総合的な判断力を養うためにも、合宿の形式は最も危険が少く効果の高いものであった。さらに山岳部のメンバーが数十名に達したころに、そのほとんど全員が同時に参加できる山登りは、この合宿を除いてはなかった。で、大先輩から新入部員までが最も親愛感を増す最高の機会として、この一週間の山での生活が役立った。

合宿の場所は、ニセコ連峯の新見温泉で行われた最初の二回を除いて、戦前期には十勝岳吹上温泉に固定し、十勝連峯のもつ優れた自然条件に加えて、吹上温泉旅館を経営する飛沢家の山岳部に対する長年の好意によって、十勝合宿という言葉は、山岳部員は勿論、広く北大の人々にとっても比類なく楽しい登山練習の場として知れわたった。回を重ねるにつれ、さすがに広い十勝連峯にあって、踏み慣れた登路に変化を求めて、数々のパリエーションルートが開拓されるようになり、高所露営等も加味されて、昭和十三年からは呼び名も冬期登山練習合宿となった。

このように恵まれた十勝合宿は、昭和十六年の開戦後まで連続十四回行われたが、ようやくマンネリズムの兆があらわれ、また昭和十三年の上ホロカメットクの遭難は、合宿中の正規のルート上での雪崩による遭難として、われわれの雪崩に対する認識の甘さを痛感させた。昭和十七年に至り、経営者の変った吹上温泉より合宿開始の直前に宿泊

を拒否され、急抛大雪山の愛山溪とニセコの新見温泉（初年班のみ）に分れて合宿を行うことを余儀なくされた。

昭和十八年の合宿は再び吹上温泉に戻って行われたが、食糧調達之苦労や、配属将校の随行など戦時色の濃い合宿であった。太平洋戦争の敗色濃かった昭和十九年末にも、また敗戦直後の二十年末にも、多大の困難を押し部員が合宿を遂行したことは、山岳部におけるこの冬山合宿が、いろいろな意味で部員の生活に深く根をおろしていたことを思わせる。食糧事情の極度に苦しかった戦後の数年間も合宿は一年も休まず、それも吹上温泉こそなかったが、伝統の十勝岳で行われ、部員の連帯感を育くむ上に大きな役目を果たしていた。これには当時のOB達の献身的な協力があづかって力があつた。

このように昔の形式に近い合宿が毎年無事に行われ、十勝大雪縦走に成功する程山岳部の実力も戦前に劣らず向上してくると、平穏な、あるいは日常化した合宿にあきたらず、合宿の形式にも変化が求められるようになった。二十九年五月の芦別地獄谷合宿などがこの変化の始まりである。戦前と異り、戦後は合宿の参加者が部員に限られ、又在学年数も短くなったので、新入生を教育する立場から春の合宿は重要な意味を持つようになった。こうして年二回以上の合宿が恒例となり、春には新入生のスキー練習を主

目的とし、冬には氷雪技術や露営に力を入れるようになった。またこの頃になると、年末の十勝合宿は、主目的とする冬山の前のトレーニングの意味をもつ場合が多かった。

こうして昭和三十年ごろより合宿の形式は変って来たが、いくつかの異ったゲレンデによる総合的登山練習によって、山岳部の登山のレベルは、殊に岩登り、氷雪技術等に進展があり、チャムラン登頂を一つの頂点とする戦後の山岳部の国内、国外での活躍に大きな貢献をしたのであった。

昭和三十年代は部員が常時四〇人―七〇人に達する大部隊となり、当時の山登りの思潮の影響もあって、部員の山行に対する考え方も一段と幅広くなったが、毎年十二月の合宿はやはり十勝岳（勝岳荘）を舞台として行われていた。当然情性的な合宿に対する批判は以前より一段と活潑になった。またマンネリ化を避けようとして、かえって合宿が新入生に対する速成登山学校的なるおそれもあった。そしてこれらについての論議が毎年のようにくり返されたが、やはり翌年の合宿は続けられたのであった。

昭和四十年以後も、春冬の合宿のうち少くとも一回は十勝岳で行われて来たが、このあたりの環境開発がすすみ、山行レジャー化の波がここにも押しよせ、山らしさが減少したことなどから、四十七年頃から、原始ヶ原とか、オブ

タテシケまたは美英岳の森林限界付近で天幕をベースにした合宿が行われるようになり現在に至っている。

以上アウトラインを述べたように、われわれの合宿は、本来全く自由な各個山行を主体としてきた北大山岳部にとって、全部員の参加をたてまえとする唯一の年中行事的山行であって、これまでの数々の批判にもかかわらず、創立以来少くとも五十年間は、いかなる困難な時代であっても、一年も休むことなく続けられた程強力なものであった。もしも北大山岳部の特色の一つが、個人としては非常にバラ

エティーのある登山思想の持主の集りであっても、団体としてはよく調和した楽しい雰囲気をはぐくめるところだとすれば、このような気風の熟成に合宿は大きく貢献したにちがいないし、そしてそれこそが、この記念誌の上に合宿を採り上げた理由でもある。

以下の記述は、山岳部の合宿がいかになったかを、それぞれの時期に合宿の中心にあつて努力して来た人々が、分担執筆したものである。記述の形式は不統一であるが、このなかには、山岳部五十年の流れがそのままに良く現われているといつても過言ではないであろう。(朝比奈記)

戦前の合宿（昭和一〜十四年）

朝比奈英三

第一回より第五回に至る合宿については、そのころの合宿の中心になつて働いた一人である江幡が部報の三号に詳細なおぼえ書きを載せている。以下初期の合宿の記述は主としてこれによつた。

新見温泉合宿

第三回目から合宿の場となつた十勝連峯は、大正九年春三月の十勝岳積雪期初登頂以後、十三年一月には、越冬期

の十勝岳登頂が、板橋ら六人の部員によってなされたといえ、創立当初の山岳部にとっては、まだまだ未知の領域が多く、最初から合宿を行える程親しい山ではなかった。それで、札幌の近郊では最も降雪が早く、積雪量が多いニセコ連峯の中で、新見温泉が選ばれ、昭和元年と二年の二回の合宿はこゝで行われた。

「温泉宿は実に粗末なものであった。玄関も乾燥室も、スキー置場も、浴槽も、ほとんど何の設備もなかった。スキーとはどんなものかも恐らく知らない温泉の人達にとって最初の合宿であったから無理からぬ事かも知れなかったが」(以下本章の「」内は江幡のおぼえ書きより引用)。新見温泉では、初年班は温泉付近のゲレンデでスキー練習、二年班以上は目国内岳、名無山(現在のシャクナゲ岳)、三段山(現在の白樺山)、チセヌブリ等の登山を行った。

第一回合宿には四八名が参加したが、初年班は只一班的で、そのリーダーは当時主任幹事として多難な山岳部設立の仕事に当り、またその直後の最初の合宿の中心になって働いた沢本三郎(サワモ)であった。「当時の北海道のスキー術は(中略)、ずい分スキー界の尖端を歩んでいたが、登山スキー術としては、未だズダルススキー派の因襲にかなりとらわれたスキー術しか持っていなかったのである。勿論天才少年スキーヤーであったハンネス・シュナイダーの

それにも比すべきスキー術を、北海の天地に育まれて把握していた部員も、当時において幾人かはあったけれども、将来の登山スキー術はこれではなければならぬと理論ずけて、アールベルグ派のスキー術をわれわれに説いてくれたのはサワモであった。(中略)其頃において、既に登山スキー術の方向を示し予言した沢本さんのセオリーの造詣と熱心な指導に、我が部の特徴ある山岳スキー術は実に負うところ多大なものがあつたと思う」。

「この合宿は温泉の設備こそ悪かったが、山岳部最初の合宿であつたためか、創立当時の熱情と意気が合宿の空気に漂っていたようで、気持よく秩序あるものであつた。怪我人は足をねんざしたものが一人あつたきりで、梅屋製のスキーが丸太のように頑丈であつたことによるのかも知れないが、スキーを折つたのも見当らなかつた」。

翌昭和二年の合宿も新見温泉で行われたが、参加人員は八〇名に急増し、温泉の貧弱さを歎いた。「この年は取次ぎのスキーは小谷に作らせた。前年の梅屋のから見ると大分良かつた。アザラシ皮が私達の間で用いられたのは数年前からであるが、この年は、部でも個人でも作つて、このシーズンから手稲山級以上の山岳にはアザラシ皮を大いに活用した。この頃においては山岳部員の外に、それを用いる人は見当らなかつたので、ラッセル泥棒を完全にあご

を出さすことができた。「この合宿のため特に「登山スキー術の手引」なるプリント刷りのパンフレット（スキーテクニクの方は沢本さんが、スキー登山についての注意は伊藤さんが執筆して）が作られた」。これは其後数次にわたって作られた北大山岳部のスキー術手引の前身であった。

この合宿は天候が悪く六日間吹雪き通しであったが、前年同様活気がありよく登った。しかし合宿地に対する不満が大きく、遂に翌年からは十勝岳吹上温泉で合宿を行うことが部員の大多数の賛成を以って決定された。

十勝吹上温泉合宿

第一回の新見合宿以後、部員によって十勝連峯のほとんどの頂が登られ、その付近の地形に対する多くの資料が得られた結果、十勝岳一帯の地形研究が部報の一号に発表され、部員全体のレベルも合宿を冬の十勝岳でやれる程に向上した。またスキー合宿地としての設備も、吹上温泉は新見温泉より段ちがいに勝れていた。こうして私達はいよいよ本格的な冬期登山練習ができるようになった。装備の点でも、スキー技術本位の域を脱して、この合宿からシュタイン・アイゼンやシール（アザラシ皮）の取次販売を行い、これらの装備を二年班以上の必需品とした。この他各班のリーダーにはピッケル、輪かんじきと、非常食糧一日分を必

ず携行させた。

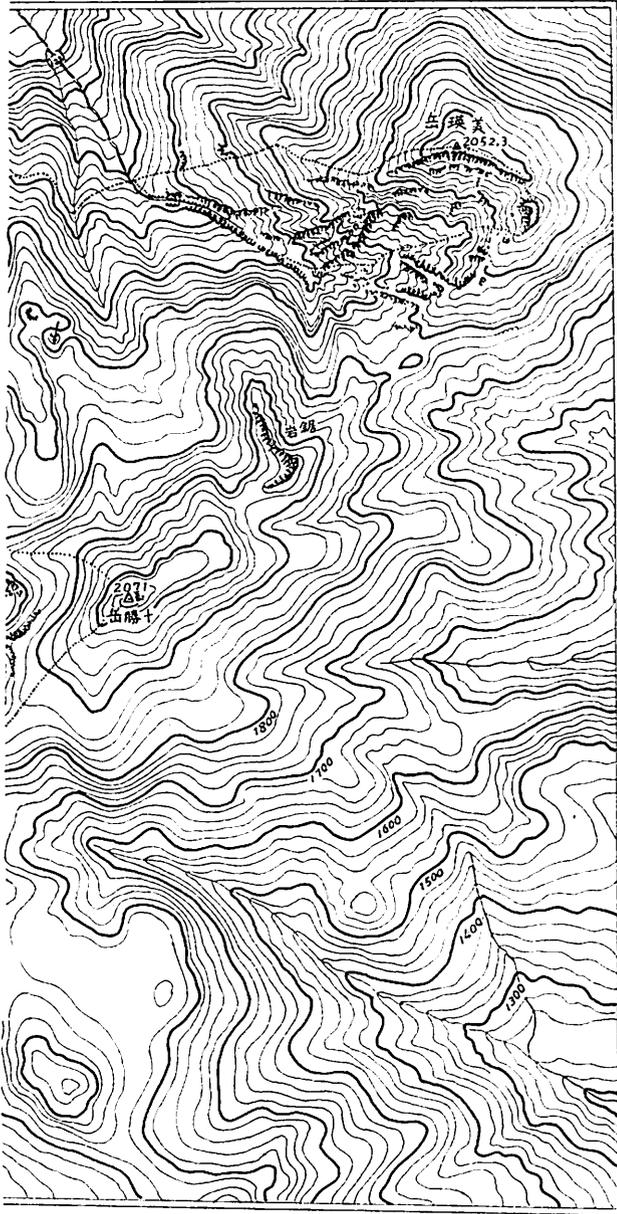
合宿への出発は毎年十二月二十日ごろ、夜一〇時の列車で本隊が札幌を出発する。借り切った客車は旭川駅に夜半から翌未明富良野線の列車が出るまでとめおかれるので、私達はストーヴの赤く燃える駅の待合室や、付近のおでん屋で、スキー雪の鳴る酷寒の夜を過すのが常であった。

翌朝、もしそれが晴れていたら、列車が上富良野に近づくにつれ、なだらかに広がったくろくろとした樹林帯の上に、白銀の十勝連峯——オプタテシケから富良野岳まで続く白亜の彫像のようなパノラマ——を見ることができた。

上富良野駅につくと、吹上温泉の主人である飛沢氏や、上富良野の青年団（婦人会？）のかたがたに迎えられ、朝モヤの中で温かい牛乳のサービスがあった。その当時百名内外のスキー客が毎年シーズン始めに必ず自分達の村を訪れるということが、直接間接にこの村の経済に役立っていたのかも知れなかった。上富良野の市街を出はづれると間もなく中茶屋につく。ここからは初年班の多くの者は徒歩で、二年班以上はスキーをはいて、昔の硫黄鉱石運搬の索道の跡の、前十勝の泥流の斜面から原野まで一直線に下っている路をひた登りに登っていく。はじめは白樺の粗林であった両側の林も登るにつれ潤葉樹がへり、高度一、〇〇〇

十勝岳附近図 改訂第四版 (昭和十六・一〇・九)

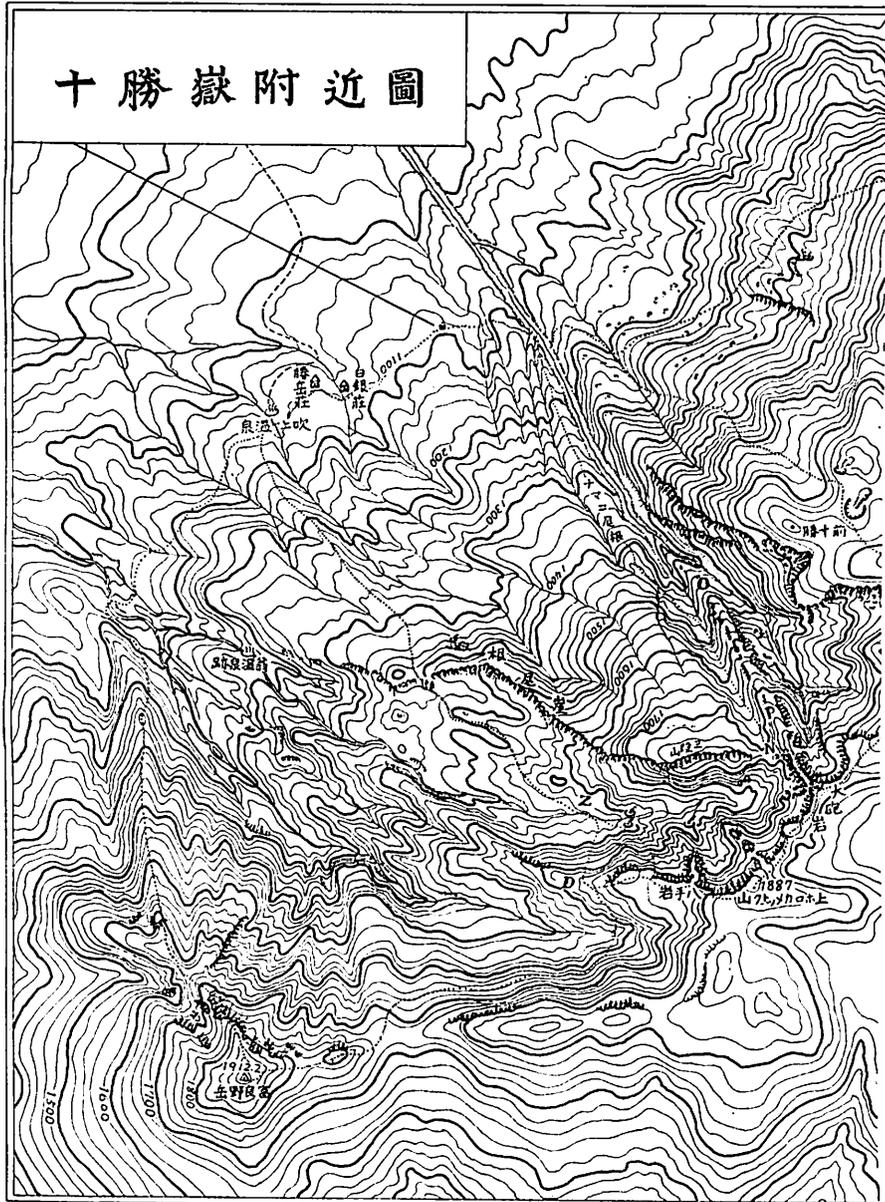
昭和十三年ごろより、石橋正夫、中村象夫らが中心となって二万分の一の十勝岳地形図がつくられ、毎年改訂を加えて戦後までにわたって合宿で愛用された。



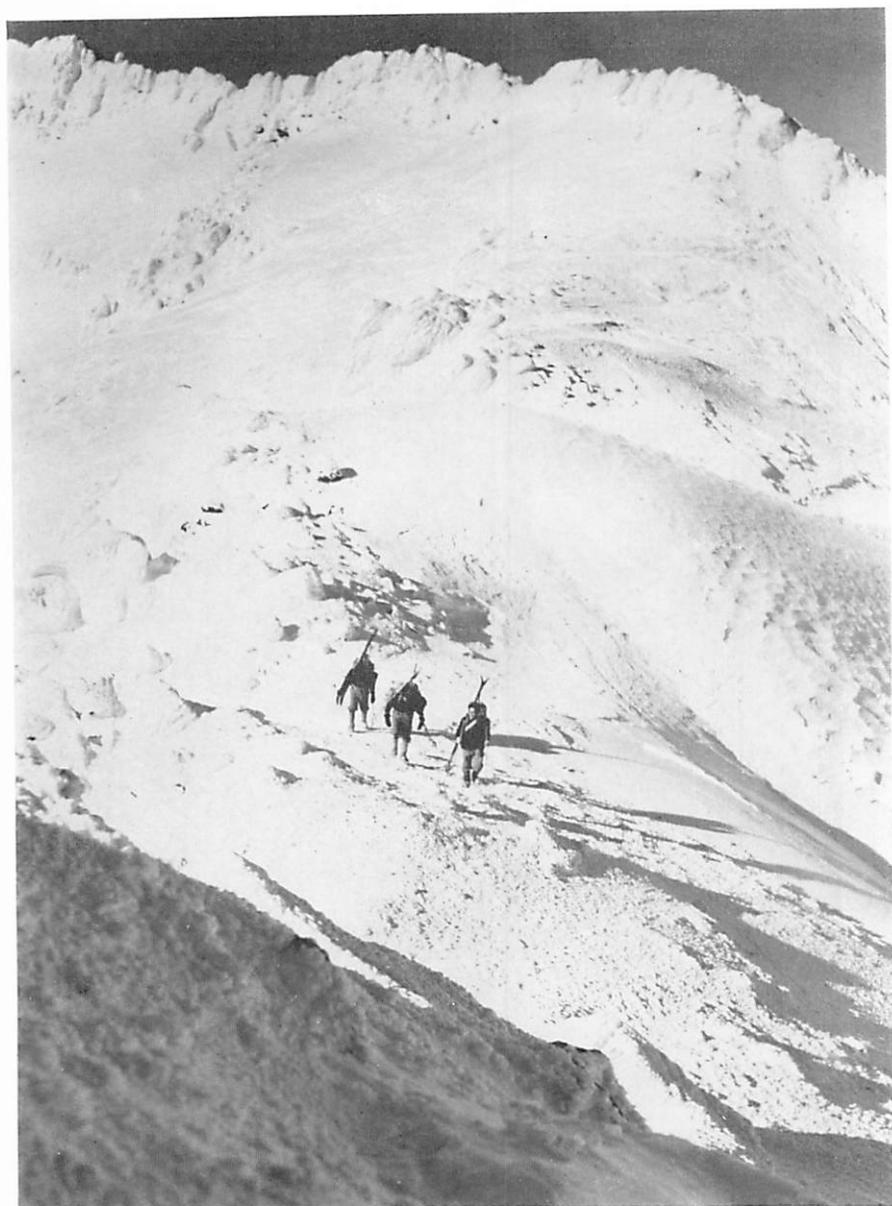
16・10・9 第4版

00 3,000

十勝嶽附近圖



米 0 500 1,000 2,000



美瑛岳の稜線にて

橋本誠二



ハ ッ 手 岩

倉 林 正 尚



硫黄山でイグルーづくりの練習

東 晃



吹上温泉の夕暮

朝比奈英三



十勝岳白銀荘付近

鮫島惇一郎



オプタテシケ合宿の初年班

古川 幹 夫

メートルを越す温泉付近では、ふたかかえ以上もあるタンネの巨木ばかりが、あの有名な十勝の粉雪をふかぶかと身にとまると、聖夜の画のような姿で私達を迎えてくれる。こうして待望の一週間の合宿が始まるのである。

一、合宿の組織と運営

参加人員は昭和七年の一一三名を最高としてほぼ八〇名から一〇〇名におよぶ大勢であったが、和昭十四年（六一名）以後は世相を反映して急減した。この参加者を、およそ初年班四班、二年班四班、三年班二または三班に分け、各班の人数は八名以下が標準で、この他に人数不定の先輩班と先生班が加わった。二年班と三年班には、すべてリーダーの他にアシスタントリーダーをつけた。メンバーのうち部員の占める割合は、初年班で五割、二年班で六割、三年班で七、八割という状態であった。戦後の合宿に比べて、合宿の門戸がひろく北大の人びとにひらかれていたことはこの時代の特色である。この理由のなかには、合宿を機にして新入部員がくるという実益も期待されたが、そのころの山岳部は文武会という北大全学の校友会の一運動部であり、経済的にも文武会費による援助を受けていたので、文武会の全員を対象としたサービスがこの十勝合宿であるという気持があった。実際に十勝合宿を学園の懐し

い思い出として北大を巣立っていった学生や教官は少なかったのである。

リーダーの資格は、部の気分を充分に体得している部員で、冬期登山の経験豊かなことが第一の条件であった。初年班のリーダーだけは、その性質上優れたスキー術の持主であることが望ましいが、適格者が少い場合には、第一の条件を優先させた。

吹上温泉の規模からみて百名に及ぶ人員を同時に食事させることは不可能なので、全員をはや班とおそ班の二つに分け、初年班と先生班は常におそ班、二年班は合宿中の半分の期間がそれぞれおそ班およびはや班、三年班は常にはや班とした。朝夕のスケジュールは、はや班が六時三〇分起床、七時食事、七時三〇分出発、おそ班はそれぞれ三分おくれる。帰着は順序が逆になり、おそ班が四時、はや班は四時三〇分とした。昭和十二年以後には能率を上げるため朝のスケジュールを両班ともそれぞれ三〇分早めた。

毎年十一月の前交渉から始まる合宿の事務は、従来その年の幹事が協力して当って来たが、前例にならう事項が多くなったとは言え、百名に及ぶ大勢が森林限界以上の高所を含む登山活動を、六日間にわたって一糸乱れず行うためには、運営組織として少なからぬ苦勞があった。それで昭和十二年から合宿幹事として、リーダー以外の部員を二名

専任して事務の円滑を計ったが、この結果は予想通りであった。合宿の運営は、従来の幹事会が作った計画に基づいて合宿幹事が細目をきめ、合宿期間中は合宿幹事を含むリーダー会がこれを行ったが、事務的な決定はすべて合宿幹事に任かせた。

二、合宿の内容

初年班、十勝合宿の初期には、ここに来てはじめてスキーをはく人が少くなかったが、メンバー中の部員の割合が増すにつれ、合宿以前にスキー術の手ほどきをすることが可能になり、昭和十二年以後は全員が中茶屋からシールをつけて登れるようになった。スキー術練習のやり方は、原則的には初期の合宿と同じことを踏襲していたが、スキー術の上達が毎年速くなるようにみえた。この結果、後年の初年班では、Nの鞍部や三段山に登ったり、シーデポーまで上って二年班以上の活躍を望見し、又吹雪の日などはタンネの森影に焚火を囲んで汁粉のコンパに興じたこともあった。しかし滑降技術だけについて言えば、この六日間でステムターンを何うやら山で使える程度に会得し、ステムクリスチャニヤで何とか曲れるというのが初年班の平均的レベルであった。

二年班 ここでは北大山岳部の標準的な冬山練習が行われる。すなわち森林帯の登降、シーデポーの選定、アイゼ

ンやピッケルを使う高所での登山訓練など、それに何よりもましてパーティとしての良識ある行動が求められた。といてもそれは強制されるような形式ではなく、リーダーとアシスタントの行動を見ならうことによって、ほとんどが以心伝心に習得されたのである。いわゆるしごきめいた習慣は全くなく、パーティの中で一番の重荷を負っているのは、いつもリーダーとアシスタントであった。また二年班は、スキー術の登山への適用を、各種の地形的、気象的、そして疲労のような生理的条件にも応じて学ぶ場であった。少くとも北海道においては、優れたスキー技術は冬の成功率を高める最大の要素の一つであるとわれわれは確信していた。実際に前年初年班を終った部員の二年班におけるスキー技術の上達は目覚ましく、ほとんどの者が荷物を負って森林帯をスラロームでできるようになった。このような精進の結果として、昭和六年以降には二年班でも十勝と上ホロは勿論、天候にめぐまれれば富良野岳と美瑛岳も登頂する例が増えて来た。

三年班 その年の部員のレベルを示す実力充分なメンバーを含み、年毎に新しい試みが行われていた。富良野岳と美瑛岳の登頂が未だ容易ではなかった初期の合宿では、この二つの頂に立つことができたのは三年班だけという年もあった。スキーをトラージンして縦走形式による複数の

山の登頂や、オプタテシケ、奥十勝（下ホロへの尾根上
一、八三七米峰）、ブン十勝（奥十勝の東南の岩峯）の登頂
がなされた後、さらにヴァリエーションルートを求めて富
良野岳北面や、美瑛谷、旧噴火口よりの上ホロや八ツ手岩
に新しい登路が開拓されていった。又昭和十一年からは、
当時計画されていたベテガリ登頂への含みもあって、高所
露営練習が幾度か行われた。このような新しい試みを行う
ために、かつて江幡が部報五号の覚え書きの中で希望した
ことが現実となり、三年班の中でも精鋭を集めた班が作ら
れるようになった。このためわれわれは残りの三年班の中
に消耗班ができることをおそれたが、結果は杞憂に終り、
他の班も負けずに頑張るといふ好結果を得た。

三、装備、食糧等の開発

十勝合宿は当時の北大山岳部の全員が参加する唯一の合
宿であったから、その頃の冬山用の装備等がこの場におい
て試用、開発或いは普及される最もよい機会であった。和
久田の開発した札幌門田製のピッケルとアイゼン（部報四
号、一一七—一二八頁。アイスピッケル及びシュタイグア
イゼンの材質に就いて）は合宿のおかげではとんだの部員
に急速に普及した。

昭和十二、三年頃までの部員の冬山用服装は、学生服か
背広を改造した黒いサーヂの服が圧倒的に多かった。ファ

スナーなどというものは無かったから、上衣のボタンの数
を二倍にして風を防いだりした。厚いラシャのスキー帽は
特注で風よけや垂れを大きく作り、寒ければさらに毛の耳
輪を用いた。ゲレンデにおいてもピッターとゲートルを巻
く習慣であったから、円山あたりのスキー場でも山岳部員
は一目でそれとわかった。オーバークートとしてすそを短
く切ったラシャの外套が常用され、ウィンドヤッケが導入
されたのは昭和十一年以後のことであった。手袋は純毛の
物の上に二本指の革手袋を用いるのが寒気に最上とされて
いたが、風が少なければ乾いた軍手だけで寒さに慣れるこ
とが奨励された。

高所露営は、昭和十一年特別に試作された七人用のカマ
ボコ形テントと三人用のクレッパ変形テントを使って、
富良野岳の独立岩を越した吹きさらしの尾根に三年班が宿
泊し、種々のテストを行った。これらのテントはその時の
天候が良かったため、十勝岳では快適な居住性を立証した
が、翌年一月のベテガリ攻略では、このテントの耐風性が
劣っていたために無慙な敗北を喫した。高所露営が行われ
るようになると、シーデポー以上でのオーバークート、
着用は珍らしくなくなった。昭和十年頃には、それまで
フィットフェルト式締具と、スキー木部を貫いていたバッ
ケン（トワイアン）に代表されていたスキー用具にいろいろ

るな新型が現われ始めた。しかし北大山岳部には、良くいえば伝統的な慎重さ、悪くいえば新らしい物嫌いの習慣があった。カンダハーの金具は昭和十年始めて合宿に現われたが、スチールエッジと共にこれが普及したのは更に数年の後であった。このような新装備を積極的にとり入れ、合宿でのテストの役を果してくれたのは、当時の中堅のリーダーの一人で、若い連中の信望厚かった石橋正夫であった。

合宿中の食事は朝夕は温泉宿が用意したが、昼食は山岳部の自前であった。これには初期からフランスパンが常用され、バター、ジャム、ソーセージ等が併用されたが、これを美味しく食べるためには、前夜からの用意が必須であった。このため野外で取出せばすぐ食べられる味のついたパンの試作が、昭和十一年からしばしば試みられた。バター・ジャム・レーズン等を色々なやり方で加えたが、何れも温かい室内で食べればかなりうまいが、零下一〇度以下の野外では、テルモスの紅茶のおかげでムリヤリ腹を充すに足るしろ物であった。昭和十四、五年ごろから合宿用の食糧の用意が次第に難かしくなったが、合宿幹事の献身的な努力によって、まだまだ合宿の昼食は昔変らぬウエスターンスタイルで、バターがマーガリンになり、ソーセージがポーターン（棒状のサツマアゲ）に代るといった程度で

あった。

四、地形図、映画等の製作

すでに部報一号の和辻の「冬の十勝連峯」に詳らかなように、この山岳一帯の五万分の一地形図には非常に多くのあやまりがあった。その上複雑な火山地形であるため、天候が悪化した場合などルートを選定に迷う場合が少なくなかった。それで昭和十一年ごろから稜線の迷い易い部分の概念図をプリントして各リーダーにもたせたが、さらに昭和十三年の合宿中における雪崩による遭難を機に、新しい地形図の製作が石橋正夫を中心に行われ、昭和十六年までに改訂四版を重ねた。

また当時の合宿の状況を記録するため、昭和十二年末の合宿中に部内用の八ミリ映画が朝比奈らによって製作され、同じ頃札幌近郊のゲレンデで撮られたスキー術の映画と共に、戦後何年かにわたって部の会合に彩りをそえた。

五、評価と反省

この当時の北大山岳部にとって、十勝連峯は望みうる最高の合宿地であったといっても過言ではない。大正十五年五月二四日の十勝岳大爆発によって、森林帯の優れたゲレンデが無惨に流されてしまったといわれる硫黄山の泥流スロープでさえ、冬の十勝の素晴らしい粉雪のおかげで、初年班にとっては絶好の練習場であった。また二年班の練習

内容からみれば、十勝連峯のそれぞれの登頂は、全くその目的に合った模式的登山であり、十勝連峯の厳冬の気象とあいまって、冬山訓練の絶好の場を与えてくれた。三年班以上の熟練者にとっても、まだ数多くのヴァリエーションルートが求められ、しかもその多くは初めての試みでさえあった。十勝合宿は登山練習の場であるばかりでなく、参加した先輩を含めて部員のはとんど全員が北大山岳部としての連帯感を味わう年に一度の楽しい機会であった。この合宿の間に若い部員達は、もう部報の上でしかその活躍をしない伝説上の先輩達と親しく山行を共にし、また温泉浴室での山の歌の合唱や、夜のコンパを通じて同じ仲間としての親しみを増したのであった。

しかしこの素晴らしい十勝合宿も、経験をつむにつれ、次第にマンネリズムの傾向があらわれ、また慣れによる過失に敏感でなかったため大きな危険をはらんでいった。もともと合宿中の毎日の吹上温泉への帰着時間は、おそくも午後四時三〇分とされていたが、二、三年班が時間一杯に近い行動スケジュールを組むにつれ、天候の変化や、メンバーの疲労、スキートの破損等の事故のために定刻を過ぎることがおこり、特に昭和十一年以後には毎年の合宿で、遅着班応援のための夜間出勤があった。その最たるものは、昭和十三年の第九班の場合で、美英岳よりの帰途、一メン

バーの疲労甚しく、遂に夢遊状態となった。午後九時ごろ部員多数に出迎えられて吹上温泉に到着し、折よく合宿に参加していた先輩金光正次の適切な指示と、一同の懸命の手当のおかげで辛うじて危機を脱し、両手の指の凍傷程度で終った。この例は明らかに十勝の地形に慣れきったリーダーがメンバーの実力や疲労度を読みちがえた結果といえよう。

このような充分予想された危険に対する鈍感さは雪崩に對しても現われていた。毎年同じ山を同じルートから登り、相当な悪天候でも必ず登頂できたという経験は、次第に登山中の慎重さを失わせる結果となった。これまで合宿中に小さな雪崩を目撃することもあったが、日高ではとにかく、十勝での緊張感は未だうすかった。昭和十二年以後、三年班が困難なヴァリエーションルートを沢に求めた場合には、実際に雪崩の洗礼を受けた例もあったが、十三年の上ホロカメットクのノルマルルートでの遭難という不幸な教訓を味わうまでは、われわれの目は覚めなかった。後からかえりみて考えれば、昭和十二年のフラノ直登沢の雪崩はもとより、NよりO—P尾根のノルマルルートでさえ、十三年には多数のメンバーが、フリコ沢や旧噴火口へ四〇〇メートルにも及ぶ距離を流されていて、大事に至らなかったのは全く僥幸としか思えなかったのである。

ともあれ戦前期の合宿、特に昭和三年より十四年までの十勝合宿は、その末期に悲しい教訓を残したとはいえ、当時の山岳部に生きた者にとって、現役時代をふりかえる最

も懐しい哀歎の場であったことは、誰しも異論のないところであろう。

戦時中の合宿（昭和十五〜二十年）

山 田 真 弓

昭和十五年一月のペテガリ遭難で多くの現役部員を一挙に失ったことは、山岳部に大きな打撃を与えたが、四月にはまた何人かの新入部員を迎え、秋には例年の十勝の合宿の準備に入った。この年は十一月十四日に第一回の合宿準備会が行われ、さらに数度の準備会が行われた。この年の準備会では、種々の実際的な打合せのほかに、この年に新たに就任された伊藤秀五郎部長から合宿の精神的意義が述べられたりした。大戦（大東亜戦争）は未だ始っていなかったが、非常時であることは間違いなかった。

準備会では、スキーや靴のことはもちろんのこと、衣服、手袋、帽子など携帯品についての細々した注意が与えられ

た。この頃一般にはすでにカンダハリの金属縮具がかなり普及していたが、山岳部ではまだほとんど使わなかった。これはかかとが余り上らず、登りの歩行に差支えることのほかに、万一切れた時の補修ができない、ということが理由であった。またスチールエッジも全く使用しなかった。これも修理が簡単ではないというのが理由であったと思うが、すぐに新しいものにとびつかない保守的な体質も山岳部にはあった。また服装については、ウインドヤッケが次第に普及したほか、オーバーシューズ、オーバーズボンなどもこの頃から使われてきた。手袋も毛のものの上に皮製のものを重ねるのが望ましいとされたが、この頃にはもう

昔のような皮製の大型の手袋は、なかなか求めるのが大変であった。昭和十五年頃の様子を思い出すと大体右のようであるが、もうこの頃から少しずつ物資が不足し始め、こゝとに皮製品が高価になっていた。スキー靴も価格が高くなる上、だんだん質も落ちていった。

しかしこの頃はまだ合宿そのものは、その数年前（昭和十年代の前半頃）とほとんど変わってはいなかった。場所はもちろん十勝岳の吹上温泉、朝晩の食事も充分あった。参加人数は大体四、五〇名、初年班・二年班・三年班・先輩班・先生班など、約七、八の班に分れて行動した。初年班はほとんど硫黄山でスキーの練習、二年班は三段、十勝、上ホロ、富良野などへ、三年班は美瑛などへも足を伸ばし、また時に尾根にテントを張ったり雪洞を作ったりして野営をした。

この頃、天候には余り恵れないことが多かった。昭和十五、十六、十八年の合宿中（十七、十九年は後述のように十勝で合宿はできなかった）十勝の全山が姿を現したのは一度もなかったと記憶している。

二年班は天候の許す限りあちこちへ登ったが、尾根へ出るとシーデポーをして、あとはアイゼンにはきかえて登り、ピッケルの使い方などもリーダーから教えられた。晴れていなくても頂上に立った時は嬉しかったが、じっとしてい

ると体の芯まで冷えるようで、また風のある時などは高更であった。テルモスの紅茶を少しづつ廻し飲みして直ぐに頂上を後にするのが常であった。この頃、昼食はまだパンで、他にバター（マーガリン）ポークなども持参した。熱い紅茶をテルモスに入れて持って行ったが、何分雪中で堅い冷たいパンやバターをかじる昼食は余り楽しいものではなかった。

昭和十五年一月のペテガリ（コイカク）遭難、またその一年前にも十勝の上ホロで遭難があり、何れも犠牲者を出したのであったが、これらは共に雪崩によるものであったので、この頃の合宿でも雪崩についての関心はきわめて大きかった。上ホロの遭難のあった附近を通っても、それ程の急斜面ではなく、どうしてこのような所で雪崩が、と思われる程の所であったし、数年後にフリコ沢を何人かで登っていて、この何ともないような所で薄い表層雪崩が起き、一人が足をとられたりしたこともあった。どうしたら雪崩を避けることが出来るか、それはこの頃の合宿での大きなテーマであったが、「むづかしい問題だ」というのが皆の気持ちであったと思う。

スキーの練習は二年班も随分やった。主に三段でやることが多かった。この頃山岳部では合宿用に毎年「山スキーの手引」を謄写印刷して合宿へゆく全員に配布していた。

これは古く沢本三郎先輩の執筆になるものを少しずつ修正したもので、「返しのボデースイング」とか「島村効果」とか、仲々むつかしい内容で、ゲレンデではもちろん、宿へ帰った後に夜もスキー術についての議論が続いた。スキーの技術についてはこの頃橋本誠二、佐藤弘少しあとでは山崎英雄が抜群で、皆を羨ましがらせていた。

夜はまたスキーや靴の手入れ、服装などの乾燥等でも忙しかったが、例の少しぬるい温泉に入ったり、皆で唄を歌ったり、楽しいことも多かった。カメララデンとかワンダールフォーゲルなどドイツの歌のほかに、朝比奈英三作詩、渡辺良一作曲のいわゆる「山の四季」が作者御兩人達の指導で歌われたのもこの頃であった。

このような十勝の合宿の雰囲気自体は翌年の昭和十六年の暮にもほぼ同じであったが、外部の条件はもうかなり変わっていた。昭和十六年の合宿直前には大戦が始ったのであるが、それに先立って北大文武会が報国会に改組され山岳部も鍛練部山岳班と名称が変わった。このためこの年の合宿には学生課員一名、教練教官二名が参加したが、彼等はむしろ山岳部員の規律正しい行動や、きびしい登山訓練を驚異の眼でみていた。

吹上温泉での合宿は翌十七年も同様に行われる筈であった。次第に時局が切迫し、すべてについて厳しい時節とな

ってはいしたが、その年も秋になると合宿幹事が例年通り準備に追われていた。ところが十二月の中旬出発直前になって、吹上温泉から宿泊を拒絶されたのである。吹上温泉では長年北大山岳部の合宿が行われ、温泉宿の主人である飛澤氏とその一家の人々からはきわめて好意的なもてなしを受けていた。しかし温泉宿の経営者がこの年から変わったこともあって、出発直前まで幹事が奔走したにも拘らず、結局この年は吹上温泉での合宿は不可能になった。時期も切迫していたので急遽計画を変更して初年班だけはニセコの新見温泉で、他は大雪山の愛山溪温泉で行うこととなった。わずかな時間でこれらの準備をしなければならなかった幹事の労苦は実に大変であった。愛山溪では、毎年の合宿で勝手の分った十勝とちがって、何かととまどうことの多い毎日であった。宿は何分スキー客本位に出来ていなかった。種々不便が多かったし、また肝心の山登りも天候が悪く、愛別岳や永山岳に登頂することは出来なかった。この温泉宿では狭い部屋に寝泊りし、食事も充分ではなかったと記憶するし、またコンパなどの思い出も残っていない。いっぽう新見温泉に行った初年班の方は、温泉宿もマアマアで、スキーゲレンデには事欠かなかった。何かとスキー術練習の目的は達することができた。しかしいつも参加する先輩や先生はきわめて少く、また北大からは学生

部のお目付役として体操の奈良岡教官が同行した。奈良岡先生は非常に協力的だったので、合宿の気分は別に固苦しいものではなかった。陸軍被服廠からスキー用具のテストの名目で二人の召集将校がやって来たが、その世話はいっしょに参加して下さった犬飼先生にほとんどおまかせしてしまつた。スキー用具とは洗濯板のような形のゴム板で、これをアザラシの代りにスキーの下面の足の直下に着けるのであるが、着脱に不便で、降りに滑らず、登りには重いと、いう始末の悪いしろものであつた。

昭和十八年になると、戦争のための困難さは更に大きくなつた。食料も、また山登りやスキーの用具などについても、何かと不足勝ちになつてきた。しかし早くからの交渉があつた故か、前年のようなことはなく、この年はまた十勝の吹上温泉で三三人が参加して合宿が行われることになつた。温泉での朝夕の食事のための米などを特に用意して持参したりはまだしなかつたと思う。しかし昼食用のパンについては野崎健之助先輩の経営する恵庭の野崎牧場に特にお願ひして小麦粉をわけて頂き、それを天使院内の工場でパンに焼いて貰つて持参した。また乾パンとかバター、ハムなどをやはり特別に入手して持参し合宿中の昼食用にあてた。

この頃はもう今までのような山登りやスキーだけの合宿

は許されないような時代になつていた。大学当局(学生課)からの様々な指示を受け、合宿も身心鍛練と更に国防精神の高揚がその目的に加えられることになつた。そのため学生課の職員一人と、その他に当時の予科の配属将校一人とがこの時は同行した。学生課職員は前十勝や三段あたりまで登つていたようであるが、予備役の老配属将校の方は仕方なしに参加したといった様子で、われわれと一緒に行動する元気さも、またスキーの技術もなく、結局毎日朝出発する時と夕方帰つて来た時とに、宿の前の広場にならんで簡単な教練まがいのことをやつただけだつた。

またこれは直接合宿と関係したことはないが、この頃山岳部に北千島遠征問題というのがあつた。たしか北千島の占守島で、冬期に陸路の交通が全く途絶するので、山岳部が冬山の経験を生かして、この島の各拠点をつなぐるルートを歩いてくれないか、という北部軍からの依頼があつたのである。何人かの部員を中心に冬山の装備や野営方法などのレポートを作つて軍当局へ提出した。そしてこれを行うとなると、その年の十勝の合宿も予定通りに行えるかどうか心配だつた。しかしこの頃北千島へ行くにはもう普通の船は危険で、海軍の潜水艦によらなければならず、これに対しては大学当局から中止するよう指示があり、結局北千島行は実現せず十勝の合宿は予定通り行われたのであつ

た。思えばこの昭和十八年暮の合宿が、十勝吹上温泉で行われた最後のものではあった。

戦争は更に日一日と深刻な様相になり続けていた。勤勞奉仕の動員もあり、ゆっくりとした山登りはもう望むべくもない時代になっていった。しかし昭和十九年の暮にも合宿は行われた。十勝の吹上温泉はもう利用できず、結局ニセコの馬場温泉へ行った。参加したのは全部で十六人であった。ニセコでは以前より北大のスキー部(山班)の合宿が毎年行われていたが、山岳部では余りニセコへは行っておらず、そのため附近の山についての知識も充分とは云えず、また天候も余りよくなかったため、充分な山登りはできずに終った。

昭和二十年八月によく戦争は終った。しかし直ぐに諸状況が元に戻るわけではなかった。だが何人かの部員の努力で、この年も暮の合宿が準備された。戦争は終ったが吹上温泉はもう使えず、結局そばの山小屋の勝岳荘で行うことになった。そのため食料などもすべて札幌から運ばねばならなかった。参加したのは全部で十四名であった。札幌を汽車で発ち、旭川を経て上富良野へ行き、その日はその旅館で一泊した。しかしチックキで別送したスキーその他の荷物がつく筈の翌日になっても到着せず、更に又二晩もその旅館に泊って荷物を待たねばならなかった。又帰り

の汽車の切符の手配にも特別に一名が当らねばならないような有様だった。

参加の十四名は三班に分れたが、実際に行動したのは僅か二日にすぎなかった。それでも富良野岳と美瑛岳の途中までゆき、また一日は全員で上ホロに登頂した。

以上が戦時中および終戦直後の冬の合宿の概略である。最初にも記したように昭和十五年一月にペテガリ遭難で多くの部員を失ったことの影響がその後数年にわたって続き、また一年一年と戦争が進むにつれて、何かと山登りが不自由になって行った時代であった。そのため、合宿でも高度の登山技術の修得という面では余り見るべきものがなかったのが偽らざる所であったと思う。しかし、この頃合宿に参加した人々には、いろいろの苦難があった反面、またそれだけの喜びもあったわけで、当時の仲間たちとの合宿の日々を懐しさと共に想い出すのである。しかし又同時にそれらの親しい仲間たちの内の何人か(住宮省三、栃内晃吉、など)は、卒業後または卒業を待たずに戦場へ赴き、ついに再び帰らなかつたことを悲しく想わざるを得ないのである。

戦後数年間の合宿（昭和二十〇～二十六年）

鮫島 惇 一 郎

太平洋戦争が終息した昭和二十年、疲弊と飢えのなかにあっても、山岳部の山に対する憧憬と渴望は十勝岳合宿を實現させた。山へ行くという行為だけが、登山の本命とはなり得ないが、山岳部の存在は、単に思考し、摸索するだけでは成り立たない。合宿という行事が、非常に困難なこの年にあってもなおかつ遂行出来たということは、たかだか一四名の参加人員であったとしても、北大山岳部の心を示したものといえる。吹上温泉はすでに倒壊しており、全く使用不可能な状態にあり、勝岳荘で自炊によってなされた。

新しい部員も増え、戦争という悲惨な体験から、部の立ち直りが、意欲的にしかも積極的にはかられたのは、昭和二十一年以降とみることが出来る。いろいろな意味で低下している山への知識・技術そうした総合的水準の向上が

はかられている。

そのあらわれが、二度、三度の合宿準備会であり、また冬山研究会の開催であった。農学部会議室を使用して、湊正雄の「雪崩」、橋本誠二による「イグルー」などがくわしく述べられ、両先輩の体験とその対策についてかなりのつつこんだ意見がなされたことなども、その一つのあらわれであった。当時の大先輩も積極的にこれに参加し、戦前の山岳部の水準にもどすべく、努力していた。

二十一年度合宿が、二六名の参加者を得て、白銀荘（旧白銀荘）で自炊という形で行われたが、その構成は、初班が二班、二年班、三年班がそれぞれ一班ずつであった。この中で、初班、二年班のリーダーがすべてOBであった。三年班が当時の山岳部の中核的存在であったことは、戦後の部の情勢を端的に示している。

二年班のリーダー（山田真弓）、アシスタント（岡見吉郎）が口うるさくメンバーに述べたことは、

「お前達は早晚リーダーをつとめなくてはならないのだから、その地形、目標物を一つでも多く記憶しておくことだ」ということであった。次期の合宿、その次の合宿をよりスムーズに行なうための周倒な準備であったと受けとめられる。いづれにしても、山の会、山岳部ともども戦後の早急な水準向上に力が注がれた。

食糧事情は極めて悪く、昼食としてはコッペパン二個で、下山日の昼食を非常食にあてていた。特別のルートでもなければ、バター、チョコレート、ピーナツバターなど手に入らず、マーガリンですらも手に入れることは大変であった。配給切符と引換えにコッペパンをルームで手に入れる情景など今ではもう見たくても見られぬものである。

スキーは軍払下げのイタヤの単板が多く、スキー靴、靴下、ズボン、手袋、帽子、ヤッケなど材料が代用品のものがかかりみられ、それぞれの創意、工夫が試られ、手作りのものもかなり見うけられた。金井商店（現在秀岳荘）との出会いもこの頃だったと記憶している。

戦前から使われていた山岳部自作の二万分の一地形図「十勝岳付近図」は毎年コピーをとって部員に配布され、少くとも昭和三十年ごろまでは大いに活用されていた。ま

た毎年必ず心得のあるものが出て「リーダーブッフ」なるものが手書きの謄写刷りで作られたのもこの頃であった。「山の四季」以外はほとんどがドイツ民謡で、合宿ごとに新しい曲を誰かが披露するしくみであった。

昭和二十三年の合宿になると、戦後の混迷期はすぎて、一応の合宿馴れというか、マンネリ化というか、そこから脱出しようというきつかけが作られた。行動日程が五日と限られたなかで、合宿の意義、ありかたについてかなり議論がつけられたように思う。

美瑛岳登頂をねらう執拗な試み、天候を度外視した連日の同一目的のための班行動と、その日その日の天候、いかえれば環境条件に順応した形で、最大限の訓練を試みる、という二つの立場の論争だった。合宿というものが、常にその後にはひかえている冬山の準備であり、かつまた十勝岳は、冬山の訓練の場として広範囲な条件をそろえているのであるから、新しく生まれ、また交替してゆく指導者たちにしつかりとこの場を掌握してもらわねばならないとする意見と、ひとつの頂きをめざしてかなりの悪天候の中でも遂には登頂するという訓練をすることによって可能な限り冬山を体得すべきであるとする意見に分れたように思っている。おそらくこの論議は今なおつづいているのではないだろうか。

この合宿から初班の日程が一日追加され、なか五日が六日になった。このことは、合宿後にひかえている冬山に、スキーを経験していない新入部員が参加することに対しての配慮であった。またこの年の合宿は勝岳荘で行われ、小屋を灰にしたかも知れぬボヤを出したが、危く難を免れている。

戦後いくたびかの合宿が比較的円滑に行われ、部の実力が向上し、充実されてくると、ようやく沈滞の空気が流れはじめてきた。恵まれた十勝岳の環境のなかで、初歩のスキー術から、高度の雪中露營や氷雪技術まで、思うままに練習できるという恩恵に対して、物足りなさを感じるものなかもしれない。技術の向上もさることながら、合宿が、限られた期間で共通した目的のための生活共同体づくりに役立つ場であることも見逃すことはできないが、着実に安定した方向に進んで行くというお互いの認識は、むしろ目標をとらえにくくするものなかもしれない。安定のなかの不安定とでもいふべきであろうか。

昭和二十六年の合宿に引つづいてなされた冬山「十勝岳―大雪山縦走」は部に新風を送り込んだものだった。合宿が冬山への前提条件ではあるが、この二つのものなから何れかを選ばなければならぬ部員も多かった理由から、この期の合宿を中止するかしないかでかなり論議さ

れた。

いずれにしても合宿には合宿本来の重要な目的があり、冬山と合宿を両立させる方向で解決された。このことはのちに実施され、輝かしい業績となった「厳冬期の日高山脈全山縦走」の起点をなした。こうした試みは小パーティーによるいたわりと協調が主体となる登山形式から、団体登山としての全体の中の部分部分の完遂という要素を盛り込んだ山行への変革をもたらすことになった。こうして合宿に新たな要素、つまり漫然とした冬山への指向から、集中討議によるより大がかりな部全体の共通目標にしばられたトレーニングが加味されたと考えられる。

昭和三十年前後の合宿

西 信 博

私は昭和二十七年に入部、三十三年に卒業した。この間に十六回の合宿が行われたが、参加したのは九回である。以下この期間の毎年の合宿をそれぞれ簡単に記録する。

二十七年十二月一七～二二日

ヘルベチア・ヒュッテ 二六名

例年のように十勝合宿の準備をすすめているうちに、炭労ストによる国鉄ダイヤ混乱のため、スキーの列車内持込み禁止、小荷物扱いの禁止という、最悪状態となる。やむなくヘルベチアにおけるスキー合宿にきりかえる。朝里岳、白井岳、余市岳周辺にて主にスキー練習を行う。例年にならない寒さのため、凍傷その他の事故が多かった。

二十八年三月一四～二〇日

十勝岳・勝岳荘 一九名

前年十二月の合宿中止のために、三月合宿を行った。初年班を設けず、二年班以上として氷雪技術を加味したトレーニングを行った。好天にめぐまれて、各人十勝の地形をよく把握することが出来た。富良野岳、美瑛岳、美瑛富士へも足をのびすことができて、新人にはよいトレーニングであった。夕食後、数人で吹上温泉あとの屋根だけになった野天風呂に入りに行った。湯はぬるかった。

二十八年十二月一五～二四日

十勝岳・勝岳荘 二八名

初年班、二年班、三年班を編成し、スキー練習から、バ

リエーションルートに至る広汎なトレーニングを行った。

二十九年五月一～五日

芦別岳・地獄平にてキャンプ 三〇名

あたらしくゴールデンウィークを利用したトレーニング合宿を開始した。新道より熊の沢を経て、本谷に入り地獄平にテントを張った。新人のオリエンテーション、スキー、氷雪技術の訓練を主に行った。本谷、北尾根、出尾根からのルンゼ等を中心にルートをとった。

二十九年十二月一八～二六日

十勝岳・白銀荘 二一名

北日高の団体登山（カムイエクウチカウシと幌尻岳）と並行して実施した。主に初年班のスキー練習、雪中訓練を行った。

三十年四月二九日～五月五日

芦別岳・地獄平にてキャンプ 二七名

新人の参加が多く、初年班二パーティは主にスキー練習を行った。二年班は、第一尾根や、夫婦岩のルートにとりつき、多くの成果をあげた。好天に恵まれ、北尾根から、布部岳を往復したパーティもあった。しかし参加者の増加

につれて、雪上のテント合宿、焚火による炊事には問題が出てきた。

三十年十二月一七～二三日

十勝岳・勝岳荘 四〇名

部員の急増で四〇名余の大合宿となった。初年班はスキーの練習にあけくれ、二年班は雪氷訓練と一泊の雪中露營をスケジュールに組んだ。途中悪天候にみまわれ、降雨、氷結があり雪崩に会ったパーティもあった。

従来、上富良野から中茶屋を経て入山していたルートを、美瑛駅、白金温泉を経由することにしたのは、この時からであった。

三十一年五月二～七日

十勝岳・勝岳荘 三九名

参加者の増加のため、芦別岳合宿は限度となり、また冬期合宿のためのオリエンテーションの意味もあって、ゲレンデを十勝にうつした。好天に恵まれ、スキー練習にも熱が入った。本峰、上ホロカメットク、美瑛岳、富良野岳へ足をのびしたパーティも多かった。

ただ、勝岳荘では高校生、その他一般団体と同宿になったため、合宿の雰囲気の問題があったことは否めない。

三十一年十一月二三〜二五日

羊蹄山・キャンプ 二一名

日高山脈全山縦走をひかえて、羊蹄山五合目にキャンプ、訓練合宿を行った。

各パーティにわかれ、装備の点検、ラッセル、アイゼン技術、スキー技術、ザイルの使い方などの基本を再確認した。なお全員が登頂したが、視界は悪かった。

三十一年十二月一六〜二一日

十勝岳・勝岳荘 一五名

日高山脈全山縦走に参加できなかったメンバーのため合宿を行った。主眼はスキー練習と、雪中訓練であった。

三十二年四月三〇日〜五月六日

十勝岳・勝岳荘 四四名

参加がますますふえて、個人装備の充実がめだつようになった。スキー練習から、パリエーションルートまで、冬には試みられないルートをいくつか開発した。他の登山者がだんだんふえはじめた。

三十二年十一月二二〜二五日

芦別岳・熊ヶ池キャンプ 二二名

熊ヶ池にキャンプ、頂上周辺にてアイゼン、ザイル技術、滑落停止訓練、スキー練習を行う、メンバーを五パーティに分けた。

三十二年十二月一六〜二三日

十勝岳・勝岳荘 四六名

冬期合宿もだんだん大規模となり、運営もなかなか大変になってきた、十勝合宿では不充分という声もあがるようになった。

三十三年四月三〇日〜五月六日

十勝岳・勝岳荘 人数不詳

主に新人トレーニングが行われたが、上級部員二二名による、合宿のための十勝岳上流温泉小舎建設が企画された。これは美瑛川よりトムラウシを経て入山、の予定であったが、悪天候のため、トムラウシ登頂のみで引返した。

三十三年十一月二一、二八日

芦別岳 一、二次隊

北鎌尾根より奥穂高岳の冬山の訓練合宿として実施された。

三十三年十二月一九、二二日

十勝岳・勝岳荘 二九名

部の主力は、北鎌尾根より奥穂高岳への冬山登山に向った、総員は一八名であった。

残りの新人を主とした訓練合宿を行ったが、合宿初日に、小竹幸昭、加藤幹夫、西安信のパーティが、遭難し、小竹加藤の二名は二日に死亡した。このため合宿は中止となり北鎌尾根のパーティも計画を中止、下山した。

この頃は、旧制と新制の切りかえの時期であり、更にエベレスト登頂、マスマル遠征を含む海外登山への夢がもりあがってくる時期でもあった。従前の『サロンの雰囲気?』の山岳部から、急増する部員をかかえ、超スピードでリーダーを育てあげようと焦る、いわば『かけあし山岳部』の時期でもあった。

一方、経済的にも学生生活は、おしつめられた時期であり、最小限の個人装備を揃えるのもむずかかった。アイゼン、ピッケルはもとより、ザック、寝袋にいたるまで借りあるき、いわば団体装備の一部として扱わざるを得ない時期でもあった。

この中で、われわれの合宿は従前の十勝合宿の踏襲から、半ば合宿を兼ねた冬山の団体登山、ゴールデンウィークの芦別、十勝合宿。更に冬山の前の短期間のトレーニング合宿等いくつかの新しい試みを加えていったものである。

部員の急増にこたえて、新しい登山方法への発展、殊に岩登り、氷雪技術の獲得に、そしてそれを基礎にした海外遠征への足がかりを、われわれは合宿を通じて築こうと試みた。しかし四年間の学生生活は、実質的には、三年間にすぎず、山岳部の水準維持、リーダーの育成はまことに難事であった。

ともあれわれわれの時期の合宿から、北大山岳部を代表する多数の登山者が輩出したことをいささか誇りとするものである。

昭和三十四—四十年頃の合宿

鶴 卷 大 陸

私が入部した昭和三十四年頃はいろんな意味で一つの時代の曲り角であったように思う。「六〇年安保」をめぐって学内も騒然としてきており、これに対してというより高度成長という社会の要請に応じて大学当局の学生管理がよ

うやく厳しさを増し、「札幌農学校」的雰囲気を残すキャンパスで夢見がちな学生に吹く風は冷くなりつつあった。勤勉な学生を養成しようという体制側の新しい大学管理方式が所期の効果を上げたかどうかは定かでない。短期的には少くとも北大ではそれらしい効果があったとは思えない、それどころか逆効果さえもたらしたようでもある。一番の狙いであった学生運動にとってこのような管理強化は、むしろ「独占資本」による「大学支配」の証拠として受けとめられ、彼等の怒りを一層燃え上らせることになり、昭和三十五年騒乱の中で岸内閣が崩壊したのもまさにその結果

だったと言ったらいすぎかも知れないが、影響がゼロであったはずはない。

ともかく井上靖の氷壁という甘っちょろい小説（ベストセラーになったことがあったっけ）のせいかどうかは異論があったが、山登りがやたらに流行し、山岳部員の数がどんどん増えたうえ、それらが留年でひまになり、おまけに安保、安保で警官ともみあっているうちにすっかり反(半?)体制的姿勢の気楽さを知るに至ったのか、このころは全く誰も勉強などしない時代だった。そしてその逆に本当に山登りに打込めたのもこの時代だったように思う。それにしてもそのエネルギーの根源は一体何だったのだろうかとも不思議に思われる。

部の活動は、合宿やルームの在り方も含めて、当時の部員の数、エネルギーの量を反映していた。備品はいつも

定期山行の時に足りなくて、ひどい状態のテントやスト
ブのあつたバーティは災難だった(この状態はチャムラ
ン以後大分改善された)。幹事会ではどうしたら部員を減
らせるかということで大真面目で議論しあつたが、結局一
二年部員の数に合せてリーダーを探してきてやつたりす
るのに窮々としていた。幹事会は皆の意見を反映するには
規模が小さすぎるし、例会は意思の疎通を図るには大き
すぎる。こんな理由から上級部員会議が発足したのもこ
ろである。このため、定期山行前後のリーダー会も入れ
れば、実に週のうち少くとも四晩もギヤーギヤー同じよう
な議論を繰り返すことになり、正直うんざりすることもあ
つた。部員を減らすことに関しては、一年目を徹底的にし
て脱落を奨励する案とか、逆に何も面倒を見ずに完全
にほったらかしにして、残った奴だけを育てようという、い
わば温室栽培に対する「雑草育成論」も出たし、小屋にし
か行かないような「小屋派」などは切るべしなどという「武
断派」的意見が出されたこともあつた。しかし、どれも殆
んど実行に移されるほどの賛成を得られなかつたのはル
ームのシステムとサイズが既に一部の極論ではどうにも
変わりにえない(ということとは伝統的なやり方に無反
省によりかかるといふ弊害にもつながるのだが)ところまで
来ていたと見ることもできよう。一年目をしごくとい
つても、棒でぶつ

たたけるほどの勇氣を持った上級生などいるはずもな
かつたし、せいぜい夏山で南日高にはじめて初年班を
連れていった程度であるが、人間はおかしなもので、
ギリギリの力で所て必死に努力することに喜びを見
出してしまふものらしく、怖じ氣をふるうような目
に会いながらも誰れも退部を申し入れて来ず、名案
(?)も見事失敗してしまつた。ほつたらかしのする
案も人間性への無理解に基づいていたらしく、教える
ことに無上の喜びを見出す上級生に禁欲を強いること
の出来た幹事会は一つもなかつたようである。「小屋
屋派」を切るといふのもお笑いで、当時の部員の中
で空沼もヘルベチアも嫌いといふのはまづい
なかつたわけだから、小屋派を特定することも
できなかつたし、第一そういう存在があつたとしても
言葉の定義からして彼等は備品も使わず、定期山行
のリーダーも要求するはずはないのだから、部の運
営の邪魔になるおそれはあるはずがなかつた。
さてこの時代についてわれわれが何を考へていたか
は既に部報九号の「論談いわゆる十勝合宿について」
に記述したが、当時の合宿の記録のあらましは次の
ようであつた。

昭和三十四年	五月	十勝岳勝岳荘	五三名
	十二月	十勝岳勝岳荘	六三名
昭和三十五年	五月	愛山溪温泉	五七名

昭和三十五年十二月 十勝岳勝岳荘 五七名
 昭和三十六年 五月 十勝岳勝岳荘 五八名
 十二月 十勝岳勝岳荘 三八名
 昭和三十七年 五月 芦別岳、利尻岳、
 十勝岳勝岳荘 六〇名余

昭和三十八年 十二月 十勝岳勝岳荘 五三名
 五月 愛山溪温泉 三五名

昭和三十九年 十二月 十勝岳勝岳荘 四一名
 五月 十勝岳勝岳荘 四七名

昭和四十年 十二月 十勝岳勝岳荘 四〇名
 五月 ヘルベチア周辺 二五名
 十二月 十勝岳勝岳荘 三三名

ともかく部員数の多さ、レベルの違い、山登り観の相違など多くの問題をかかえつつも当時の部員は基本理念である「個人山行主義」にいささかの疑念もはさむことなく、むしろこの基本理念を貫くためにこそ合宿をするんだという意識に支えられていたことは前述の論談を今読んでも伝わってくる。

常時四〇人、時には七〇人近くの合宿では、親睦といっても無理矢理やらされる歌やかくし芸などが続けばシラケるばかりだし、緊張感もないただ歩くだけの日帰り行動は苦痛にさえなる。当然廃止論がでてくる、これが二〇人位

の部であったなら廃止はすぐ決まったかも知れない（その前にそもそも合宿などしなかったとも考えられる）。しかし、六〇人をこえる部が個人山行だけしかやらない状態はおそらく部を無責任な「備品貸出機関」的存在にしてしまふのではないかという心配があった。今ならそれで何が悪いという意見もきつと多くでてくるだろうが、当時は部はまだロマンチストの集団であった。だからことあるたびに一生懸命考えて結局は個人山行も守る、しかも多数の部をまとめて行く上で必要のことも出来る限りやるといふ欲ばった困難な道を選ぶのが常だった。当然日常のルーム活動は前に述べたようにしんどいものであり、合宿や定期山行も時にはたてまえとかけ離れてしまうようなものもあつたように思う。

合宿の一つの問題は、技術や装備の改良、山へのアプローチの短さ、情報・知識の集積により、もはや昔と同じことをやってもそれは訓練にもならないし、満足感も得られなかったということである。同様な理由で益々ヴァリエーション指向を強めていった定期山行では、前より一層高度な技術が必要とすようになっており、最大の問題はその認識に欠けるリーダーやメンバーがヒョイヒョイ運まかせで危ないことをやり出すようになっていたことである。したがって合宿は必然的に段々と登山学校的にならざ

るを得なくなっていた。そしてそれに対する反撥も前述の「論談」の中でもよく示されているように、かなりの説得力を持つようになった。十勝をやめて愛山溪でやったり、芦別・利尻にも分散して見たりしたのも、結局とかく情性に流れかねない登山学校の合宿に何とか新鮮味を盛り込み、より本物の山行（これこそ皆が最もやりたがっていたものだが）に近い意欲をかき立てようとの努力によるものだったと思う。確かに目新しい場所での合宿は面白かったが、適当な場所がそう幾つもあるわけではなく、慣れるとやはり前と同じような問題にぶつかってしまった。

ロングアタックと称して愛山溪から白雲岳、十勝白銀荘からオプタテシケ、或いは下ホロカメットクなどへの日帰りアタックが行われたこともあったが、最初のパーティーはそれなりの面白さを味わったようでもあるが、二番目からはただひたすら歩くだけのことで、これも長続きするようなものではなかった。所詮、個人山行主義と合宿システムは相反するもので、妥協的なやり方には無理があったものと考えられよう。

さてこう書いてくると合宿を余りにブルーに表現しすぎたかも知れない。確かに必死にやっている一、二年目を除けば、合宿は退屈な繰り返し部分が多かったが、他方で合宿ならではの楽しさもあったことは確かである。真冬の

十勝という舞台がまず最高だったことが最大の要因であるにしても、安全性が一応確保されている条件で、吹雪の狂う稜線を磁石だけをたよりに斜になって歩いている時の快感とか、大勢で声をかけあいながら三段のスロープを風のように舞い下りる（？）楽しさの思い出は何年たっても昨日のことにように感じられる。また合宿は一種のコンパの連続という側面も持っていた。下山前日など三々五々ストーブの前に集まって、やれやれという顔で失敗談に花を咲かせたり、誰からともなく始まる十勝場所相撲大会なども最も愉快な笑いの場だった。飯時のすごい混雑や報告会・反省会の若干の白々しさのようなものもあったが、東京あたりの大学山岳部では合宿中は最寄りの駅でOB連が逃げ出してくる奴を見張っている、なんて話を聞いてもまったく信じられないような気持だった。まあこの辺のところは合宿反対論者といえども大抵参加していたし、一度も廃止の憂き目に会わずに合宿が続いて来た所以かも知れないと思う。

合宿も、部活動一般も、現実の条件に依じていろいろ変化するのが本当であろう。私の現役時代の部は、多数の人間がひまとエネルギーをもてあまし（？）ており、チャムランを始め刺激的な海外遠征も実現しつつあった。対象も夏では日高の直登沢の難物の残ったのがまだかなりあり、

冬ではカムエック集中、ベテガリ集中に代表されるヴァリエーション的登山に想をこらす時代となっていた。こうした背景で皆が一生懸命山のことを考え、山に登り、とにかく山に費やす時間がその以前、以後と比べて非常に多かったと思う。あれだけの人数があれだけの時間山に入っていて、それでいてあの四、五年間遭難が皆無だったというのは、その後から比べると非常にラッキーだったと思われるらしいが、それだけで片づけてもらいたくないように思う。同じようなことをやっているように見えたとしても、ある方針が打出されるまでに費されたエネルギーの総計はすごいものにのぼっていたし、それが結局当時の部の資産だったのではなからうか。私はその資産と若干の運のおかげで在部の間面白い山登りができ、多くの親友を得たことを今でも感謝している。

昭和四十年以後の合宿

高橋 一穂

この時期にあてはまる部報十一号を読むと、歴代部報とはかなり異なった印象を受ける。そのような意味で昭和四十年代というのは、山岳部にとって、一つの変わり目と言えよう。そこで、まず変化の要因と思われるものを、簡単に整理しておく。

一、内的要因

- 1 相次いだ遭難事故 日高十の沢の雪崩、日高六の沢の徒渉事故、日高ソエマツ直登沢の転落事故、利尻の落石事故、定山溪天狗の負傷事故など合わせて九名の死者を出し、昭和四十年から毎年事故がうち続いた。

- 2 四十五年度の大麻事件による一年間の休部。

二、登山界の一般的要因

国内、海外とも、著名な未登峰や、未知な場所がなく
なり、バリエーションルート、岩壁直登など、より困難

さを目指す、いわゆるスーパーアルピニズムの風潮が主流となってきた。

三、社会的要因

- 1 日本経済の高度成長期とぶつかったこと。環境開発の促進、モータリゼーションの発達、海外旅行自由化、その他社会的変化の大きい時期で、変化のスピードも加速されてきた。

- 2 山岳部の構成員が、いわゆる戦後生れの世代になり、意識的変革がおきたこと。

他にも要因はあろうが、それぞれが単独ではなく、複合されて山岳部に変化をもたらしてきた。しかし、山岳部においては、未知、より困難、より原始的そしてロマンを求める伝統的精神は継承されてきた。むしろこのような精神を持ち続けていたからこそ、時代の変遷という大きな壁に

突き当たったとき、精神的な流れの場を見失なうて混乱をもたらしたと言えよう。ともかく合宿もこのような時代の状況に合わせて論議され、実行されていった。

合宿の山城

合宿について話し合いがもたれるとき、まず個人山行システムとの対比によって、合宿を行うべきか否かという問題がある。これについては部報九号の「論談—いわゆる十勝合宿について—」（鶴巻大陸、黒川武）でも触れられているように、山岳部にとっては普遍的な命題のようだ。その後、おなじみの手順でその合宿の意義づけなどへ話が進む。そして結論として、ほとんど中止される事はなく、合宿は、春、冬と定期的に行われてきている。次いで出てくるのは山城の選定の問題である。昭和四十年から四十五年迄は、後にも触れるが、毎年遭難が続き、安全性が大きな問題となっており、あきたらなさを感じながらも訓練の場として最適であり、伝統的な場所である十勝の吹上温泉付近の小舎をベースに大半が行なわれてきた。しかし、十勝岳周辺については、四十五年頃から環境開発の波をさけることが出来ず、これ迄とは違った意味で山城についての検討をしなければならなくなってきた。この事と、次章以下の記述のために、部報三号の伊藤秀五郎の「山の振り」と

人間化」から一部を引用する。「北海道の山岳の最も著しい特色の一つは、それが豊かな振りをもつということである。ここに振りとは、高さに対する言葉であって、山の深さとは異った意味である。（中略）登山口まで交通機関が延びていて、いよいよこれから山へかかるといような所が少い。いわば北海道の山は平原までもその振りをもっていてもみられる。即ちその山としての内容を平原迄広げているということが出来よう。（中略）北海道の山岳の特色は、山が人間化されていないということである。人間化されるということは（中略）人間の意志が山岳にかけられた時間の長さが、おのずから吾々の心のうちに作り出させる第六感の感情である。千年前のマッターホルンも百年前のマッターホルンも現在のそれとその実質に於ては殆んど変化はないであろう。しかしマッターホルンはその人間化されてある事を吾々に感じさせる。（中略）しかしこの第六感的なものも、山岳の状態（空間的形象）も、ひとしく年と共に移り変わっていくのは免れ難いことである。（昭和六年）。北海道の山岳が、山の振りを失い、人間化されたのは、相当以前から徐々に進行してきたのである。昭和四十年代に入ってそのスピードは加速度的なものとなった。十勝にも四十六年にスキー場にリフトが出来、麓は山の人間化というより急に人臭くなってきた。それ迄

ベースとして使っていた小屋も、春合宿中などは山岳部だけでなく、他の登山客でにぎわうようになった。そして、メシを炊くにも十円銅貨を入れてプロパンを使うような、商業小屋の雰囲気になっていった。本州程ではないにしても、北海道の山でも、いかに人臭さを避けるかという見方で合宿地選びをしなければいけなくなってきた。そのため四十七年以後は、十勝岳周辺にしても、原始ヶ原とか、オプタテ、美瑛岳などの森林限界付近で、テントをベースとした合宿が現在に至るまで主に行われている。山域も十勝だけでなく、大雪のリクマンベツ沢とか、様々に選択され、最近では毎年違った場所で行なわれている。五十三年の春合宿は、大雪山忠別川の上流で行なわれた。私自身、小屋合宿とテント合宿の両方を体験しているが、その形態、雰囲気なども小屋合宿の頃とは相当違ってきている。テント合宿の場合、まず入山が大変で、春合宿の新入生など、一日でベースに入らず途中でビバークする事もあった。そのため食料なども平常の山行と同じスタイルとなり、生野菜を大量に持つ事も、鯨の生肉を箱ごと持って行く事もなくなった。また、焚火は勿論、テントのポールに使う雑木さえ切る事はばかられている。そのため、皆で一緒にメシを食う事や、ストーブの傍で、他のパーティーの者にその日の出来事や、スキーマのホラ話などをする機会が少なくなった。

小屋合宿の楽しみを知る者にとっては淋しい事かもしれない。このような状況の変化は、特に四十七年以降であるが、私の在学中わずか五年間の出来ごとである。

スキー登山について

前章で述べた時代による変化は、北大山岳部とは切っても切り離せぬスキー登山とも相関が見られる。合宿において、十勝であきたらなくなってきた時代感覚というのは、まさに以前のスキー登山的なものに対して向けられたものだろう。そしてあきたらなさという感覚から、その雪とのたわむれに対して反感すら感ずるといふように進んでいった。このように書くと、スキー登山に対しての感覚に誤解を受けかねないと思うが、決してスキー登山を忌避しているわけではない。それはむしろ、北海道の山岳が山の魅力を失い、かつてのスキー登山が持っていた、山登りの困難さを欠落していった時代の状況に符合するものである。つまり、平原迄も山の内容を持っていた時代においては、スキーで歩きまわる事自体が、すでに山登りの領域であったと言える。その頃スキーは山登りの道具であると同時に技術であった。しかし、山がその魅力を失うにともない、スキーの登山技術としての地位は単なる道具へと低下していった。明確に時代を追う事は出来ないが、あきたら

なざという表現は、部報九号（昭和三十五年度）昭和三十八年度）に出てきた。反感に進んできたのは部報十一号（昭和四十年年度）四十六年度）である。具体的に言うとう、山岳自体の領域が森林限界以上や、岩稜にしかなくなってきたような山域においては、スキーは、そこまで行くアプローチの道具としての意味しか持たなくなってきた。ただし、反感という表現には、それとうらはらなものも見いだせる。私なども、スキーを駆けめぐらせて未知や困難を求めていった山行の中で、さらに大きなロマンをも見い出せた時代に対しての憧憬を感じざるえない。また残念な事には、スキー登山や山旅が持っている、ワンデリングの楽しみとか、自然の大きさを私達は味わう事が少なくなった、そして、かつて山岳部が共有財産としていたスキー技術や、うたいつがれたドイツ民謡をも失なっていたような気がする。

合宿の内容

合宿は、春・冬と行なわれてきたが、最近の冬合宿は、冬山の為の準備山行的に捉えられているので、内容については、主に春合宿のものについて触れたい。スキーがアプローチのための道具になったと言っても、北海道の雪山にはやはり必要不可欠な道具である事には変わりがない。その為一年班については、新入部員の大半を本州出身者が占

めるため、訓練をかねたスキー登山が主体となる。高校時代に山やスキーに多少の経験がある新入生でも、山スキーに四苦八苦するのは、かつてと変わらぬ光景かもしれない。ただし、スキーで滑る事だけを主体とするのではなく、アイゼンを使つてのピークハントもかなり行なっている。十勝であれば、尾根から本峰、美瑛、上ホロ、富良野などを目指す事が、一日の行動となる。しかし、天候の悪い場合などは無理をせず、基本的には山登りの入門的内容を消化している。

なにもかも初めてでとまどっていた新入生も、夏・冬の定期山行を終えた頃には、一通りの山登りの方法をのみ込んで、さらに次なるものへ目を向けだす。このへんから、かつての時代とのギャップが始まりだす。以前ならば、日高の未登峰なり、より困難な場所へ向かって、スムーズに目標を移行して行けたであろう。しかし、山岳の領域が狭められ、記録も蓄積されて行くと、次へのステップの幅がだんだんと大きくなり出す。また山岳界の動向も四十年代からはバリエーションへの挑戦の時代であった。それで、合宿においても、とくに二年班では技術的により高度な事をやろうとする傾向が起きてくる。場所も四十年代前半では、芦別や利尻へという声が多くなった。だが、この頃は前述したように遭難が続いていたため、安全性の問題が山

岳部において非常に大きな課題であった。「山登りと遭難」は、アルピニズム発生以来の命題であろうが、大学山岳部においては、その責任の一端が、社会的なものとなって組織へかかってくる。そのため幹事会と、二年目、三年目の部員の間には、しばしば摩擦を生ずるようになった。合宿の安全性などの問題や、一年班も一緒に出来る所という事で、二年班は満たされないながらも四十六年迄は十勝で行なわれてきた。二年班の内容については、ルンゼ、岩稜登りが主体で、ロングアタックを一日組み入れるのが、通常の合宿のプログラムであった。富良野直登沢とか、上ホロカメットク山のXルンゼ、美瑛谷のルンゼや岩稜などが主な対象であった。さらに春ではあるが、八ツ手岩など三ツ道具を持つての岩登りも行なわれた。ロングアタックについては、下ホロカメットク山、トウヤウスベ山、オプタテシケ山などへ、ベースから十時間位で往復するのが一般的な行動であった。意識的には先走っていても、二年目とっては、ザイル・ピッケル・アイゼンなどを、一応本格的に使うのは始めてであるし、三年目にとつてもリーダーとして行行年度初めの山行であるので、やはり楽しいものであった。私自身も、新入生のときには、あんな壁みたいな所を登るのかと眺めていたルンゼを登るのはうれしかった。またロングアタックも体力的に大いに自信をつけた。

そして小屋に帰ってから、上級生の行動を驚愕の目で見ると新入生に「なにこれ位の事はあたり前さ。」という顔をするのも、自分の成長を測るようであつた。合宿というのは、山登り自体の持つ楽しさが、大勢で行く事によって倍加されてくるものであつた。

リクマンベツ合宿について

昭和四十四年迄は、内的要因として安全性という大きな問題があつたが、山岳部として順調な山行が続けていられたなら、その後の外的要因もうまく処理する事が出来たかもしれない。しかし、四十五年に起きた大麻事件による休部によつて、山岳部は、先に述べた変化の要因を処理出来ず、混乱に陥いつてしまった。休部といつても実質上山岳部としての活動は続けられていたのだが、休部中に遭難事故は起こせないという事から、山行の質的な大幅レベルダウンが行なわれた。その為、二年目、三年目は欲求不満となつた。また折悪しく大学紛争の影響も若干からんで、弁論部ではないかと思ふ位に、連日連夜、なんらかの話し合いがもたれた。論議は山行にからんで、組織論から、人間性、社会性の問題と多様に幅広く及んでいた。それ故に結論など出るはずもなく、部員は山登り以前に消耗してしまつた。また山岳部の伝統への懐疑も生まれ、部員は、各個人的な

方向へ走り出した。これらを打破し、山登りの原点に戻る事により、新しいものを創造しようとして出てきたのが、四十五年冬のリクマンベツ合宿であった。先ず合宿における伝統の地十勝と訣別しようとして、リクマンベツが選ばれた。この時の感覚を部報十一号における下沢英二の「陸萬別」より抜粋する。「リクマンベツが十勝でないと同様、リクマンベツに見えるものがかつて十勝で見えたものでもない。恐らく僕達を感じているのは十勝の前にあつたものであり、僕達の山登りの向こうにあるものではないだろうか」。このときの合宿は、テント形式ではあつたが、マキストープなどを荷上げて、タンネとビニールシートで小屋がけをしてミーティングルームをこしらえた。場所も原始的なたたずまいで、なかなか良い場所ではあつたが、大雪の厳しい天候によってさしたる行動も出来なかつた。一年生がスキーで足の靱帯を切るなどのアクシデントがあり、結果的には当初の論議をなんら達成する事が出来なかつた。原因は、新しい事を行うには準備不足であり、部員の氣持が揃つていなかったためであつた。そして、二年目、三年目の部員の大半が、この合宿を前後して部を去つていった。しかし、摸索のうちに終つたけれども北大山岳部の新しい方向を見いだそうとした事は評価されるべきではないだろうか。伝統として受けつぐべきものは、そこに流れ

る精神であつて、形式ではない。

最近の合宿に参加して

私は、五十二年、五十三年の春合宿にOBとして参加した。五十二年は美瑛岳のふもとでのテント形式の合宿であつた。この年は、三十八年入部の名越、四十一年井上、四十二年矢野、四十四年高橋、四十七年花井とちょうど四十年代の合宿を体験した各世代が揃ひ、合宿について話し合う事が出来た。同じ四十年代の合宿といっても、私のころを境になにか変わったと感じていたようである。小屋とテントの違いだけではなく、山岳部の雰囲気とか、全体的イメージの違いがある。テント形式だと、個人山行の延長的なものとなり、合宿の捉え方にしても、特別な意識はもちにくい。個人山行とは違う合宿個々の緊張感も希薄となるであらう。ただし、これは小屋形式に戻したからといって、変わるものでもないであらう。山登りの在り方そのものが、時の流れによって変化して行く。すなわち意識の違いが具体的な現象として出てくる。例えば、海外遠征にしても、昭和四十年頃迄はかなり遠い夢であつたが、現在は比較するまでもなく容易になつてきた。そうなると、情熱のかけ方も違つたものになる。このように各時代の合宿の意識上の違いは、状況の変化によつてもたらされるものであらう。

五十三年の春合宿は、勇駒別温泉から出発して、忠別川へ羽衣の滝として注ぐアイシンポツ沢の右岸沿いにトラパスし、旭岳から連なるコブ尾根を乗越し、忠別川本流の千三百メートル付近にベースを張った。ちょうど白雲岳と忠別岳へ沢が分かれる分岐の下である。雪の多い地帯であるので、小沢は多いがスノーブリッジがかかっている。勇駒別より四時間間で入山することが出来る。ベースからは、旭岳、白雲岳、忠別岳へ直接アタックできる。二年班として訓練を行う所は少いが、ベースキャンプの付近は原始の姿も残されており、静寂な気分の良い所である。天候には恵まれなかったが、北海道の山らしさは充分に味わう事が出来た。しかし、遠慮しつつ立ち枯れの木を見つけておこなった焚火の煙を見つめながら、合宿地としてこんな奥まで入ってくるようになったのかと思つた。北大山岳部の伝統的精神というのは、やはり北海道の山の特色と深い関係にあるだろう。山岳部に入部してくる人の意識は、あまり変わっていないと思うのだが、今後開発が更に進み、北海道の山らしさがなくなってくると、山岳部も変わってくるのだろうか。また最近のメスナーのエベレスト無酸素登山などのニュースを聞くと、山登りの究極的なものはどうなっていくのだろうかと思う。しかし、山岳部の伝統的精神としてもち続けてきた、未知なり、困難なり、ロマンを

求めてゆく心を失いたくない。そして、山登りとは違った世界に飛びだしてゆくにしても、山岳部での体験が大きな原動力となることを祈る。

遭 難 小 史

—— 北大山岳部における ——

橋 本 正 人

北大山岳部五十周年記念誌の編集委員会で、この五十年間の遭難をふり返ってみては、ということも当初の話題の一つであった。それぞれの遭難はすでに何らかの形で報告されているのであるし、今それに論評を加えるということは大変にむづかしいという消極的意見、また、それらの遭難を一つにまとめ、現在の目で見なおしてみるのも意義のあることではないかとする積極的意見があい半ばした。

北大山岳部報、北大山の会会報、それにペテガリ岳に關しては日本山岳会会報などの資料に基づいて検討の結果、死者を出した遭難に限って小史をまとめることに決定された。

執筆者については、それぞれの遭難当時山岳部と密接な關係にあつて、その遭難をよく知っている人、ということを一条件に、また編集方針の打合わせなどではしばしば集

まるためには、札幌在住の人という条件を加えて、橋本誠二、小林年、橋本正人、神谷晴夫の四名が選出され、橋本正人が世話役に指名された。

死亡者を出した遭難は昭和十三年十二月の上ホロカメツトク山付近に起つた雪崩から、昭和四十三年ソエマツ沢における転落事故まで一二件、遭難の総数は二七名である。

小史をまとめるに当り、遭難の経過についてはすでに詳細な報告があるので、簡略にとどめ、現在の目でその遭難を見なおす、という意味をこめた反省の項に重点がおかれることになった。

それぞれの遭難の題名、記載の形式の統一、どの遭難を誰が担当するかについては、前記四名の執筆者の協議の結果をもとにして、編集委員会で次のように決められた。直接の關係者ということ、上ホロカメツトク山、ペテガリ

岳については橋本誠二、剣岳は小林年、穂高岳吊尾根、十勝岳、札内川十の沢は橋本正人、札内川六の沢、ソエマツ沢は神谷晴夫が担当した。

鳥海山、コイカクシユ札内川、札内川九の沢、空木岳については、主として時間的制約等の理由から直接の関係者に依頼せず、橋本正人が担当し、反省の項は、公にされた報告のみに基づいて執筆した。

北大山岳部は五十年の間、より高い山、より困難なルートをめざして、何らかの意味で前人の業績を越えるような山行を常に行つて来ている。このような登山につきものの危険については、山行前にその予測、対策について慎重な検討が行われている。この遭難小史を通読して感ずることは、このような危険をとまなう困難な山行の、しかも予測された危険な場所での遭難はほとんど見当たらないということである。唯一つ、ベテガリ岳の場合は、このような危険な山行に入るであろうが、遭難の場所は、当時の常識では、かよいなれた安全な沢で、山行前にこの沢の雪崩の危険性について充分検討されたという話は聞かない。その他の山行はいずれも、そのパーティの能力の限界に挑戦するほど困難に満ちた危険性の高い登山とはいえないものばかりである。単独、あるいは親しい仲間だけでの比較的気楽な登山、新人をいれてのやさしいルートの訓練登山、そこに心

のゆるみが全くなかったとはいえないのではないかと考
える。

この小史、特に反省の項には、死者を鞭打つような、あるいは御遺族にとつて看すごし難い記述がないとはいえない。これらのすべては、今後このような遭難を少しでも減らすためのものと考えて御赦し願いたい。これからより高い山へ飛躍しようとする若い人達が、この小史から、登山の本質について、またそれにとまなう遭難の問題について、より深く考察を進めるための何らかの示唆をでも得られれば、それが死者を弔う最良の道であろう。

上ホロカメットク山

—なだれ—

橋 本 誠 二

一、登山計画

このなだれ遭難は昭和十三年十二月十勝岳冬期登山練習合宿の五日目、すなわち十二月二十七日におきた。この年度の合宿は参加人員一一八名。初年班五班二九名、二年班三班一八名、三年班四班二〇名、先輩班三名、先生班七名および幹事一名の編成であった。

二、行動および遭難の経過

なだれに遭遇したのは、第八班（二年班）および第一〇班（三年班）で、構成はそれぞれ班長 及川、メンバー 塩月、佐藤、大津、小木、班長 湊、メンバー 高田、喜谷、瀬戸、山崎（当日風邪休養）であった。

当日は、温泉—崖尾根—旧噴火口—D・Z—化物岩の尾

根伝いに上ホロカメットク山往復の予定であった。

温泉発（七時）旧噴火口から化物岩西側の急斜面（D・Z）までは比較的軽い、ラッセル、化物岩の尾根上は堅い風成雪。その尾根の南斜面をまき気味に登り、八手岩分岐地点の手前の斜面にシーデポー。雪質は堅くアイゼンの歯がささる程度である。両班は、八手岩分岐点の右側の「緩斜面」をまき、国境線へ登り、上ホロカメットク山へは一一時三〇分に着いた。一二時頃下山。国境からの降りには吹雪で歩調は不揃いになり、二つのグループに分れた。湊、高田、瀬戸の三名が先行し、八手岩分岐点の下手をまき気味に見えかくれするシーデポーに向っていた。

この時なだれが発生した。「大砲の様な音と共に大きなひびが入り、ザーという冬期屋根の雪が落下する時のような轟音が一齐にこれに続き、同時にバーンという音が連続

して其の辺り一面に発生した。ひびは三人の歩いた箇所
せいぜい三、四メートル上方に入り落下したと見られ、速度
は始めはかなり緩慢なものであった。」しかし、突然の出来
事で、「歩いてきた平坦な道が急に傾き転落したように感
じられ」、やがて転倒崩落する雪にまきこまれた。

その頃、後続の班員らも国境稜線下の斜面で表層なだれ
にとらわれていた。すなわち、三、四番目の小木、喜谷の
二名は足下から発生した面発生表層なだれに流されたが、
夫々ピッケルで確保し脱出した。

彼らは、身近に起きたなだれに注意をうばわれ、湊らに
注意していた者はいない。しかし、二名が登ってきた時
に、前方に落下しているなだれを見たのである。彼らはこ
のなだれが事故をひき起していたとは思わなかったが、デ
ブリ上に脱出した湊を認め、湊も「上はと見上げた稜線に
は一瞬風が止んで、残った友がシードポイ目かけて駆けて
ゆくのが見えた。」湊は、直ぐ及川に瀬戸、高田の不明を
確かめ、崖尾根に在ることの予想される先生班への急報を
指示した。一二時四〇分のことであった。

ただちに佐藤、小木が伝令となりZ・Dを直滑降で降
り、崖尾根へ事故を報じた。残りの班員は、まずデブリ上
を搜索の後、ピッケルでゾンデを開始した。しかし、広い
デブリにただかんとたよりの搜索で手懸りはなく、応援が

必要であった。及川は、近くの富良野岳を登っていた三年
班に救援を求めた。

三、搜索記録

急報をうけた崖尾根には三年班五名、先輩班もおり、合
宿医を含め一〇名が現場に急行し、一時間後に富良野岳か
ら四名、さらに吹上温泉への通報で、シヨベル、医療器具
が飛沢氏ら三名ではこぼれ、先輩一名も加わり、湊の停止
位置を中心にゾンデとトレンチ発掘が行われた。午後五時
日没とともに風雪、寒気もいちじるしく凍傷のおそれのあ
る者の第一次帰還。残りはラテルネのわずかの灯をたよりに
作業をつづけた。午後六時三〇分第二次帰還。しかし、
現場には四名が残り最後の力をふりしほった。合宿に設置
された搜索本部からの全員帰還の指令は現場に午後八時三
〇分伝えられ翌午前〇時三〇分吹上温泉に全員帰着した。
緊急救出は不成功に終わった。

合宿は再編成され、二八日、部員二八名地元の援助七
名で出発したが、吹雪激しく現場に達することができな
かった。

二九日、三七名が現場にデブリ末端から幅二メートル、
深さ三メートルの溝を三メートル間隔に三本掘り始めた。
午後一時二五分事故当日のトレンチを含め九本目(最上部)

の溝から高田の遺体を発見した。作業は午後三時まで続行した。遺体を運搬し、一室に安置、焼香した。合宿はこの日に解散、初年班員などは下山。三〇日、一部の部員など一八名、現場に向ったが吹雪のため引返す。他の部員は上富良野村による告別式に参列。三〇日、三五名、午前八時三〇分より六本のトレンチを掘ったが不成功。厳寒猛吹雪の日であった。この日なだれを佐々先生が調査した。昭和十四年元旦、吹雪、全員休養、二日、現場に達することができなかった。この日、大学から作業打切りの要請があった。三日、二七名で作業を行ったが、零下三〇度以下の寒気、強風に午後一時中止。現場に標識を残し、搜索は融雪期に延期された。

融雪期に至る間、幹事会では今後の見通し、後処理につき協議が重ねられ、四月下旬より五月の間に三回偵察ならびにトレンチ発掘が行われた。六月三日、第四次偵察の際、雪面に生じた小孔から瀬戸を発見し、五日、村の関係者も交え、遺体を収容し、上富良野村の告別式が行われた。

四、反 省

この事故は、北大山岳部発足以来はじめてのものであったが、合宿中のことでもあり、鈴木限三部長、犬飼、原田

両先生ならびに多くの先輩の適切な指示と、部員の一致協力、さらに上富良野村、ならびに青年団の支援によって事故発生後の処理はまことに円滑に行われた。

なだれは、三〇〜三五度の這松斜面に生じた幅七〇、長さ六〇メートルの面発生全層乾雪なだれで、断面は最大三メートル平均二メートル、西と下方に薄くなっていた。一方後続の班員の流されたものは、幅最大四〇、長さ一二〇メートル、厚さ約三〇センチであった。全層なだれの切断面の雪層は、地面から一五〜二五センチの間がサラサラのザラメ雪で、その上部はきわめて堅いカタシマリ雪であったが、内部に二、三の成層面があり、最上部の面は深さ二、三〇センチでもっとも顕著で、後続班員の遭遇した表層なだれ面に当ると考えられた。デブリは、幅約三〇、延長一二〇メートルで、その形状、雪質から底なだれが対岸にのりあげ流下したことが推定され、表層なだれが底なだれに先行した可能性が濃かった。

この合宿期間中、二四日は猛吹雪で、三段山の樹林帯のなかでのスキー練習も困難なほどであった。この吹雪が、十勝岳全域に異常な積雪と風成雪をもたらしたことは疑いもなく、二五日には振り沢頭（OP尾根の斜面）、二六日には美瑛沢で面発生表層なだれが起きている。上ホロカメットク山の表層なだれもこれらに類するもので、樹林限界

上にとくに不安定な風成雪板ができていたと考えられる一方、底なだれは積雪基底のザラメ雪がすべり面である。この年は例年にくらべ急に積雪があり、霜ザラメの形成され易い条件であった。前記の約一五センチのザラメ雪がみない脆弱な霜ザラメであったかどうかは明らかでないが、きわめて不安定な状態であった事は想像できる。だが、それが登山者の通過で崩れる程クリティカルであったかどうかは微妙な問題である。

遭難地域は旧噴火口からの風と、沢ぞいの西風とがぶつかり尾根の南面に巨大な吹きだまりが当時できており、浜らはその吹きだまりのふくらみを「緩斜面」と思っていた。この異常な吹きだまりは早春には国境への急斜面にも生じていることは稀でない。

事故発生時には異常な堆積は八手岩分岐点付近に限られていたようであるが、十二月二四日の吹雪による不安定な風成雪は国境斜面にも生じていたと考えられる。二つのなだれ発生の際の時間的前後関係は必ずしも明らかでないが、底なだれが遅れて堆積したと判断されている。表層なだれが底なだれを誘発したこともあり得るし、デブリの形態は両者の落下速度のちがいに由るためで、両者の因果関係を示すものでないとも推測できる。しかし、問題点は当日の気象条件に支配されなだれが発生したのではなく、既に発

生条件が具っていた処にある。冬季の十勝岳は寒気が持続し、一旦生じた不安定な雪層はなかなか安定化しない。とくに二四日の吹雪による不安定な風成雪層の形成は、二五、二六日のなだれで明々白々であったにも拘らず、すこしもなだれに対し警戒せず、合宿において注意の喚起されたこともなかった。もしも当時なだれについての若干の知識があったならば、底なだれに関してはともかく、面発生表層なだれは避け得ていたと考えられる。

ペテガリ岳

—なだれ—

一、登山計画

このなだれ事故は昭和十五年一月五日、ペテガリ岳の最初の関門、コイカクシュ札内岳にて発生した。ペテガリ岳付近の河川は地形的に通過困難であったので、ペテガリ岳へはもっとも容易な札内川支流、コイカクシュ札内川からコイカクシュ札内岳に登り国境尾根伝いに達するルートが可能が高所露営も研究されていた。

このルートは昭和十二年にも試みられ、不幸にも暴風雪のため計画は失敗に帰したが、コイカクシュ札内岳への登路や国境上のキャンプ地はほぼ把握されていた。このルートからの計画は可成り長期にわたらざるを得ない。ペテガリ隊は三班から編成され登頂(A)班、葛西晴雄、近藤達、清水誠吉、支援(B)班、有馬洋(リーダー)、戸倉源次郎、片山純吉、橋本誠二および支援(C)班、内田武彦、渡辺盛達、羽

橋本誠二

田喜久男、総員一〇名となった。

二、行動および遭難の経過

昭和十四年十二月二十九日、十勝岳合宿終了後帯広に向い、三〇日、広尾線中札内下車、男沢先生の南札内分教場泊り。二台の馬繰にて荷物を運搬した。この日気温上昇しみぞれまぢりの雪降る。三十一日、吹雪ぬれ雪、トムラウシ川合流点泊り。昭和十五年元旦、快晴気温下る。コイカクシュ札内川合流泊り。二日、晴、コイカクシュ札内川上二岐にベースキャンプをつくる。この間荷物の担送は各班ごと往復を繰り返して行った。三日、雪、風もいくらか強かったが、隊員は上流偵察、荷上げおよびキャンプワークを夫々行った。橋本風邪のため休養。四日、強風、橋本を除く全員コイカクシュ札内岳へ向ったが、二の滝(標高約九二〇メートル)に荷物をデポして戻る。

五日、しずかに雪が降っていた。橋本を残し全員コイカクシユ札内岳へ。二の滝デボーは雪に埋れていた。狭い沢ぞいにキックターンを繰り返して行った。コイカクシユ札内川は通称石門まで勾配は緩い。石門の上から沢はせばまり屈曲し、所々に滝がかかり急になりだす。二の滝までの傾斜は平均約二〇度、そこから次第に急になって約四〇〇メートルで落差五〇メートルの三の滝（標高一一〇〇メートル）になる。三の滝の上流部も屈曲が多く、傾斜は平均約三〇度である。標高一三〇〇メートルに五の滝がある。滝の上から沢の傾斜は三五度をこし、下流部につづいた函もとぎれ、兩岸はブッシュの斜面になる。そして標高一四五〇メートル付近からは稜線まで真白な急斜面が広がる。

ほとんど常に葛西を先頭に登っていった。五の滝にさしかかっていた時、先頭の辺りから小さななだれが落ちトツプの二人以外は約十数メートル程流されて停った。ルックを外しスキーなどを探し始めていた時、上流部に発生したなだれに襲われた。「何にか太い棒でも打たれたような衝撃を全身に感じて転倒し、烈しい勢でなだれに巻き込まれた」と唯一人の生存者内田はのべている。煙り型のなだれであったに違いない。内田は「全身に言うに言われぬいやな圧迫をうけ乍ら流され、眼の前は明るくなったり暗くなったりし、呼吸は苦しく、口中に冷い雪がぐんぐん押し

込んできた」が「気がついて見るとなだれは停止し、自分は雪の上に殆んど埋れることなく俯伏せの状態で横たわっていた。額と口からは血が滴り落ち、起きて立ち上るのがやっとである位に疲れていた」。彼の停止点はなだれの遭遇点から三四〇メートル下流であった。内田の血の滴りは一メートル近く雪に浸透していた。しばらく失心していたのであろう。破損した彼の時計は午後四時少し前を示していた。失われた仲間を探し大声で呼び暫く登ったが、帽子も手袋も失った彼は自分自身を守ることが精一杯であった。内田は降り始めた。デブリは柔かく腰までぬかった。石門を下った辺りで迎えに登ってきた橋本と出会い、その夜二人で善後策を講じた。夜半から烈しい風になった。

六日、橋本はデブリの末端まで行った。食料、装備のリストを作り七日札内川出会まで下り、八日最奥人家泊り。トムラウシ合流近くでベースキャンプを訪れることになった。いたフォスコ・マライニ氏のシュプールを見た。九日上札内から札幌に急報。

三、搜索記録

悲報をうけた札幌では遭難現場の地形、状況から危険を避けるため山岳部員により搜索作業を行うこととし、九日夜搜索隊長中野征紀以下九名、搜索責任者山崎春雄先生他

学生課員が二名出発した。一〇日捜索第一隊はコイカクシ
ム札内川ベースキャンプまで強行する。同日杉野目晴貞先
生、第二隊八名出発。一日第三隊五名発、一三日第四隊
一〇名、一五日第五隊六名および応援のスキー部山班五名
と相い次いで捜索隊は強化された。

遭難現場では一二日デブリを末端部および中部から二班
に分れ観察したが、四の滝付近で偶然にも捜索隊員の足が
ふれて渡辺が発見された。遺体は石門の下に安置した。

一三日、三の滝下流のデブリは余りに厚いので、三の滝か
ら上流に向けゾンデにより捜索をした。三の滝上流約一〇
メートルの沢の屈曲部で一メートル下から葛西を発見、
またルックサック二、シール五、スキー二本もゾンデによ
って見出された。

一四日、葛西の発見された地点を中心に作業を集中し、ゾ
ンデとトレンチ掘りを併用したところ、雪面下二メートル
五〇ないし三メートルから近藤、片山、羽田、有馬の遺体
が相い次いで発見された。一五日、これまで続いた晴天が
崩れ、この日約二〇センチの降雪があり、午後吹雪になっ
た。現場では午後になって二メートルの深さから清水の遺
体が見出され、戸倉を残すのみになったが、可成りの積雪
を見たためなだれの発生が憂慮され、作業は打ち切られ、
全すべての遺体は石門下に運ばれた。

一六日からはブッシュを伐り、雪を踏みかため道つくり
が進められる傍、ツトにくるんだ遺体運搬が始められた。
この日地元上札内青年団、消防団の方々が応援に出動され、
一七日深更になって道路終点付近まで運ぶことができた。
一八日すべての遺体を南札内分教場に収容、検屍、納棺。
キャンプの撤収は二〇日に行い、二一日札幌にて山岳部葬
が行われた。

残された戸倉の捜索は融雪期を待たねばならなかった
が、融雪による増水で遺体流出のおそれもあり、上二岐に
網場(アバ)が帯広営林署、清兼、本名造材の支援で三月
二五日から四月二日の間につくられた。中野征紀他四
名、営林署員一名、造材から九名、他に男沢氏ら二名が参
加した。

六月に偵察が行われたが、沢の残雪はなお多量で何物を
も発見できなかった。

第二次偵察は七月六日部員三名、清兼造材高木氏ら三名
で行われた。六月より残雪は一メートル以上減じて居り、
いちじるしい増水であったが、滝つぼを一つ一つ検索して
登り現場に達し戸倉を発見した。残雪中に仮埋葬し本隊の
到着を待った。遺体は一〇日伊藤秀五郎、中野征紀他七名
および造材高木氏らで非常な困難を克服して収容し、上二
岐において茶毘に付した。三の滝では遺体はオーバーハン

グの岩壁を宙吊りで降した。

四、反 省

この遭難の原因については、先ず第一に屈曲しているとは言え、急峻な谷をルートにとったことがあげられなければならぬ。昭和十二年の折にもこの谷はルートにとられ、その以前にもコイカクシュ札内岳への登路として用いられていた。昭和九年の際には三の滝付近から右手の尾根に取りついて居り、昭和十二年には雪は堅く、石門からアイゼンを用いている。そして降雪後には頂上から郡界尾根を下降路にとっていた。

事故発生当時の気象は、十二月三〇、三十一日はぬれ雪が降り、三十一日は激しい吹雪であった。そして一月三日には再び湿雪が降り四日は強風となった。五日は風は和らいだが降雪があり終日しずかに降りつづいていた。この雪崩発生の原因について山岳部報七号で次のように述べられている。五の滝で最初に生じた小なだれは一行のひき起したものであるが、致命的ななだれは遥か上方から落下したもので、発生地点、時間差などから考えると登山者によってひき起されたものではなく、五日朝来の積雪の自然落下が直接の原因となつたと推定される。

しかし、十二月三〇日以降の気象の推移から考えると、

風の烈しい山の上では三〇、三一兩日、三日の降雪は吹きだまりの生じ易い沢のなかに、いくつもの不連続面をもつ軟雪板状の雪層をつくつていたと考えられる。事実、事故発生後五の滝の上方には沢の左岸に雪層の切断面が認められ、表層の新雪の崩落とともに面発生表層なだれも起きていたのである。すでにクリティカルな状態にあった雪層が五日朝からの新雪の荷重によって面発生表層なだれを惹起したこともあり得よう、また国境稜線近くの急斜面に生じた新雪なだれによってそれが誘発された可能性もある。しかし隊員はすでに平均斜度三五度を超える危険域に立ち入って居り、しかも自らなだれを起していた。このなだれが致命的な大崩落の引き金となった可能性も否定できない。ベテガリ隊の遭難にも、当日の気象ばかりでなく、それ以前からの気象変化によってなだれの危険が雪層内部に胎まっていたことの認識の欠除が指摘できる。また屈曲の多い谷は目視範囲がせまく、その範囲のなかではまだ大丈夫と登りつづけ、致命的な地点まで立ち入ってしまった結果であろう。しかしなだれは勢いがつけば、谷の曲りなどは問題にせず、遠くまで流れる。

積雪が安定しているかどうか判断することはきわめて難かしい。しかし安全なルートの選択はこれに較べるとはるかに容易なのである。

鳥海山

— 凍 死 —

橋 本 正 人

一、登山計画

リーダー・門脇久、単独行、登山計画の詳細は不明

二、行動および遭難の経過

不明

三、搜索記録

昭和十六年四月二十九日、北大山岳部は、朝日新聞の記事により、部員門脇久の失踪を知った。四囲の情報から、彼は鳥海山に単独登山を行ったのではないかと推察された。鳥海山一帯を搜索中の酒田スキークラブ員の手によって門脇のリュックサックが発見された。五月六日より、北大山岳部員による搜索が開始され、五月七日御浜神社付近の斜

面で遺体が発見された。遺体は頭を下に、すべり落ちたような形で両手とも手袋ははめていなかった。

四、反省

搜索の状況から遭難時の門脇の行動について多くの推測がなされているが、真実は不明である。

発見されたリュックの重量は約八貫目、充分な装備と食料がはいっていたが、遺体とは別な場所にあつて、それが使用された形跡は殆んどなかったという。

多くの場合、このような遭難で死亡した登山者が生命の危険が感じられる状態におかれた時の判断、あるいはその判断の基準には、冷静に四囲の状況を判断できる状態にある第三者には予測もつかない異常さがあり、それが異常な行動につながっているように思う。

最後まで平常心を失わず、冷静な判断力で生きるための最善の努力を続け得る強靱な精神、これは多くの経験を積んだ後でなければ得られないものである。そして、このような強靱な精神が冬の単独行者の一つの条件でもあろう。

コイカクシュ札内川

—— 転 落 ——

一、登山計画

リーダー・花岡八郎、メンバー・向川信一、期日・昭和二十二年七月二三日より行動一〇日、停滞五日。ルート・ケリマップブーイベツ沢―サツシピチャリ川―ルベツネ山中ノ川

一、行動および遭難の経過

七月二三日、入山

この遭難では、登山計画が幹事会に提出されていない点が大問題であるが、もし計画が検討されていれば、当時の部員歴から判断して、門脇にとってこのような単独登山は避けた方が賢明であると判断されたであろう。

橋 本 正 人

七月二九日、入山以来の悪天のため遅れて、この日一八三九米峰に登頂、予定を変更して札内川に下ることを決めた。七月三〇日は悪天のため停滞。

七月三一日、一八三九米峰とヤオロマップ岳の中間の窟を午前八時一五分に出発、一二時五分にヤオロマップ岳を経て、午後四時三〇分コイカクシュ札内岳に達した。札内川に向けて下山すべく中央の頂上の左側の沢を下降しはじめた。兩岸とも岩が露出しており左岸をまいて下降中、花岡は約二〇米の高さを墜落した。午後六時三〇分であつ

た。向川は花岡の応答がなく、夕暗がせまってきたため、その場にビヴァーグした。

八月一日、向川は左岸を大きく高捲きして花岡の墜落した地点に達し、その死亡を確認し、遺体をザイルで固定して下山を開始した。

八月二日はコイカク合流でキャンプ。

八月三日に中札内について遭難を打電。

三、搜索記録

八月五日に搜索隊、入山。

八月七日、九時三〇分に現場に到着。

遺体は八月八日冬尾根までひきあげられた後コイカクシュ札内川上二岐のベースキャンプにおろされ、ここで検屍の後茶毘にふされた。

四、反省

部の公式山行であり、計画に問題があったとは思われない。このパーティは向川の回想によれば、サッシビチャリ川から一五九九米峰とルベツネ岳の鞍部へ出る予定を、誤って、一八三九米峰へ登ってしまったものらしい。当時のこの付近の五万分の一地形図には重大な誤りがいくつあったが、そのほとんどは北大山岳部の登山経験によって訂

正されており、このパーティの誤りは登山技術の未熟を示しているといわれてもしかたがなからう。一八三九米峰頂上に立って誤りに気付いたパーティは、ベテガリ岳縦走を断念して、コイカクシュ札内川に下ることにし、これが遭難の伏線となった。コイカクシュ札内岳から札内川への夏期の下降路は国境稜線から尾根をたどるのが普通であり、夏尾根と呼ばれて現在も用いられている。このルートは、当時すでに北大山岳部内ではノルマルルートとして定着していたと思われるが、このパーティはなぜかこれをとらなかつた。エスケープルートに関する研究の不足であらう。急峻なゴルジュの高巻きに際しての転落事故は私にも経験があるが、死亡にまで至らない例はさほど稀ではないと思われ、嚴重な注意と、ザイルの使用など安全策が必要であらう。

札内川九の沢

— 転 石 —

橋 本 正 人

一、登山計画

リーダー・奥村敬次郎、メンバー・背戸田信男、八代利雄、期日・昭和二十四年八月五日より行動七日停滞四日。ルート・トッタベツ川—エサオマントッタベツ岳—カムイエクウチカウシ山—札内川九の沢

一、行動および遭難の経過

八月五日札幌発、予定通りの行動で八月一〇日九の沢カール泊。

八月一日、午前中にカムイエクウチカウシ山を往復、午後〇時三〇分キャンプを出て北側カールを下る。流れはブッシュを被った石のゴロゴロした斜面となり、水はくぐって少くない。この沢を左岸のブッシュにつかまりなが

ら一〇〇米ほど下った。この時、先頭は奥村、次は八代、背戸田の順であった。沢の中央に長さ、幅各一米、厚さ六〇センチほどの石があり、奥村がその石の上から右側に沿い手をふれながら巻き、その石の下に行った時、石が落ち、奥村を倒し、約一〇米下で止まった。午後一時一五分であった。奥村は、頭部を石にはさまれたらしく、昏睡状態となり、約一七分後に死亡した。

背戸田、八代は、右岸のブッシュを切開いて遺体を安置した後、下山を開始し、八月一三日、南札内に着いて遭難を報じた。

三、搜索記録

搜索隊は八月一七日現場を確認、翌一八日現場で検屍の後、遺体は九の沢カールに移され、ここに埋葬された。

四、反 省

奥村敬次郎氏は、当時、北大山岳部部长であった。登山計画は公式に検討されたものであり、装備、食料にも問題は無い。

遭難地点はカールボーデンから流れ出す沢がブッシュにおおわれ、大きな石の間をほとんど伏流となっている部分で、日高山脈のどのカールでもよく見られ、登山者の大多数が、現在でも通常のルートとしている場所である。左岸

空 木 岳

——凍 死——

一、登山計画

メンバー・田中耕二（部外）、井上正惟、期日・昭和二十八年五月二日より行動三日、停滞二日。ルート・倉本——東川休泊所——北沢小屋（泊）——木曾殿越——空木小屋（泊）——

のブッシュに半ば埋もれた石が、増水時の水流で下面の泥をえぐられ、微妙なバランスを保ってとどまっていたと推測される。人間が手を触れながら、その傍を通った。そのわずかな衝撃でバランスがくずれ、不運にもその人間が石の直下に位置した時に落下した。

発達した文明社会の中に住んで、自然とのかかわりのうすくなった我々に、自然の恐ろしさを教える事故であり、あらためて、自然に対し、敬虔でなければならぬと思う。

橋 本 正 人

池山小屋——赤穂

二、行動および遭難の経過

五月二日 東川休泊所に泊る。三日、高曇りの中を午前九時出発。北沢小屋は一一時前に通過、高度二〇〇〇メー

トルより雨が降りだし、昼すぎにはひどくなってヤッケ、ビニールクロスを着るも下着までぬれる。残雪があらわれ、毘越小屋への道がわからず東川岳より西南にのびている尾根を登り、そのうち登り過ぎたのがわかったので毘越の方へトラバースする。途中、田中は着換えをしたが、井上は動くことが辛かったのか着換えもせず雨にぬれていた。やがて道に出たので田中は井上を待たせて、空身で小屋を捜しに出かけ「一五〇メートル先に水場、三〇〇メートル先に小屋あり」という道標を見つけ水場を確かめたのですぐ戻った。井上はセーターと背広を着て待っていた。又ザックをかつぎ歩きでしたが、雪溪にかかると井上はわずかな傾斜でも歩けないので、ザックを置いてステップをきり、抱えるようにして励ましながら進む。水場の雪溪より手前で井上は「もう歩けない」と訴えた。小屋を見ていない不安、未知の道の不安、このような状態で小屋まで行くか、ここで寝るかの岐路にたち、ビヴァーグすることに決めた。田中はひき返してザックをかつぎ戻り、ドロップと残りの飯を井上に食べさせた。夕暮れは早く、田中にも井上のザックを取りに行く元氣はなく、ひとつのシュラフに二人で寝た。井上はブルブルふるえたり、寝息をたてたり、時には叫び声に似たうわ言をいっていた。そのうちシュラフから飛びだしてしまう。田中がかかえ入れるがまた

出る。そうしているうちに井上は立ち上った時に足をすべらせて道より落ち、下の雪溪に転がり落ちた。午後一〇時頃であった。田中は木を伝いながらかけおり、「ヤッホー」を連呼したが、雨風の音しか聞えなかった。田中は夢中でかけ上り、シュラフに入った。

五月四日 天気は粉雪に変わり、田中は一日中シュラフの中に入っていた。

五月五日 晴 田中は先日二人で登った道を一人で降り、午後六時半頃、最奥の民家に着いた。

三、搜索記録

五月六日 現地を下村三郎氏他五名よりなる搜索隊が組織され、五月七日には北大山岳部佐伯、および井上の家族も現地に到着したが両日とも悪天のため搜索は行なわれなかった。

五月八日 搜索隊七名は、午前二時四〇分に伊那川小屋を出発し、七時過ぎに毘越小屋着、七時三五分に遺体を発見した。遺体は同日中に北沢に移され検屍の後同地で火葬が行なわれた。

四、反省

この山行は部外者との同行で、部の公式山行ではない。

装備は五月の悪天に耐えるためには十分でなかったと思われる。

遭難の経過は、定型的な疲労凍死である。井上は風邪が治ったばかりで体調が完全とはいえなかったという。遭難の日、出発時は高曇りとあるが、その日午後から翌々日まで続く悪天は、天気予報に注意していれば予知できたと思われる。経過を追えば、まず五月の雨の中を強行して下着までぬれる。雪渓にあって道を失い三時間近く無駄に歩いて疲労し、引き返す機会を失う。一人がルートを探すため

剣岳白萩川のブナクラ谷

— 鉄砲水 —

二人がはなればなれになる。ルートを発見した時には疲労のためザックを捨てる。日が暮れ小屋まであと一五〇米とわかっていながら、そこへ行く気力を失って悪条件でビウアグする。まだ大丈夫と思いつながら、その場、その場の判断が裏目にて初歩的なミスを重ね、ついに大事に至ったものと推察される。あとたった一五〇米だったのにと考えるのは山をよく知らない人である。最後の一五〇米がいかに重大であるかが理解できるのは多くの経験を積んだ後なのであろう。

小林 年

一、登山計画

リーダー・石谷邦次、メンバー・鈴木康平、加納正敏、期日・昭和二十八年八月一四日より行動七日、停滞四日。ルート・パンバ島―白萩川ブナクラ谷―赤谷猫又山の鞍部

―大窓―小窓―三の窓―剣沢―キウラ谷―内蔵の助平―剣沢―弥陀ヶ原―声峠寺

二、行動および遭難経過

八月一四日、薄曇時々雨、石谷、鈴木、加納、牧野の

四名、一四日午前富山駅で落合う予定であったが、連絡の不徹底から牧野が来ず、三名で一日待つ事にし富山で泊る。

八月一五日、薄曇、牧野が来ないため三名で出発、電車で上市へ、そこから北陸電力のトラックで伊折発電所へ向う。発電所の三松氏宅に泊る。

八月一六日、雨時々曇、夜中から雨烈しく、朝川の増水著るしいので行動を一日見合わせる。午後、晴間に二軒上流のパンバ島小屋及び橋の状態を見に行ったが、何等異常を認めず、発電所迄下り荷物を持ってパンバ島小屋に入る。

八月一七日、曇後時々雨、七時出発、好天とはいえないが曇も比較的安定し、昨日の増水もひいたので出発する。数回渡渉しながら白萩川を遡行し一〇時ブナクラ谷の合流点につく、昼食後出発。ブナクラ谷は下流川幅狭く、出合は二〇米位で河原もない階段状の急流、しかも当初予想していたよりも水量がかなり多く、ザイルを使用しないと渡渉困難な地点が各所にあった。このため行動が捗らず、多くは右岸をまいて進み、また渡渉毎に寒さを感じるようになった。鞍部迄は困難と見たのでキャンプ地を探しながら遡行し、午後三時半、河原の殆んど見られぬこの谷に珍らしくややひらけた河原に出たのでキャンプ地とした。ブナ

クラ谷の白萩川出合と鞍部までの中間、五万分の一地形図「立山」中ブナクラ谷のブのあたりだろう。兩岸はかなり傾斜を持った樹木の繁茂する斜面で所々ガレ状の水道が見られた。この地点は古いキャンプの跡があって、水面から二米の高さをもち、キャンプ地としては適当であると考えた。キャンプ地から二〜三米位で高さ三米位の台地が二〇米位続いており、その台地から上は三五度位の樹木の密生した急斜面となつてゐる。対岸は水面からすぐ樹木の密生した急斜面となつてゐる。河川の水面勾配は略々二〇度位である。

八月一八日、雨 早朝から降雨が続き午後二時半頃まで降った。停滞と決め雨が止んでから焚火をし昼食とも夕食ともつかぬものを四時頃済ませた。その時雨がバラバラと降ったがあとは落ちついた。その日は午前中かなりの降雨にも拘らず殆んど増水もまた水の濁った様子も見られなかった。

八月一九日、雨後曇 未明三時半頃、テント内の浸水により目を覚した。テント内四〜五寸、増水の危険を感じ石谷は急ぎ水の状態を見に行く、非常な増水であったが、パッキング可能と考えてパッキングを行い、待避しようとしてテントの傍の崖へ登り口を見に行った。その時鈴木はテントの所におり、加納は荷物を片方の肩にかけて崖の傍に

行った。その時石谷等は水の音、押し寄せる黒い水を感じ、崖に垂れ下っている木にしがみつき難を逃れた。石谷は崖の上に立った後、出水時に鈴木がいたと思われる場所から考えて到底彼の無事は期し得ぬと思つたが、鈴木の名を連呼した。しかし、石谷が耳にしたのは少し離れた所から崖の上に登つた加納が石谷の安否を問う声のみであつた。出水時に鈴木が立っていた所から崖の下部迄は二、三米位離れており、急激な一時的増水（鉄砲水）はあたかも津浪の如く約一米の高さで襲いかかり瞬時にして彼を押し流して了つたものと推察される。彼の死体は殆んど水を呑んでいなくなつた。目を覚してから崖の上に待避する迄約六分程であつた。

この夜の降雨状況は石谷がテントから一〇米程離れた水辺に状況を見に行つた時、雨は可成り降つていた。夜中は皆寝ていたため不明確であるがテントの濡れ具合、張網の様子、周囲の状況等の検討から豪雨でなかつたものと思われる。石谷、加納の両名は三時半から七時二〇分迄待避、すでに鈴木は姿はなく七時三〇分出発、途中雨が烈しくなつたため一時岩の下で休み、午後三時白萩川ブナクラ谷合流点に着き、少し下流でビバークをした。

八月二〇日、快晴 八時出発、白萩川の河原または右岸を巻いてパンバ島対岸一時着、そこで休憩、夕方四時発

電所の人に対岸より発見され、遭難の様子を伝える。

八月二一日、晴時々曇 橋が流され対岸への渡渉不能のため、八時三〇分一〇時三〇分迄ザイルを張つて渡渉する。白萩発電所着一、二時、休憩中二里半下流の建設所から死体発見の報を受け、自動車に便乗し発見場所に到り鈴木と確認する。この時、小林、長友（剣岳冬期登山ルートの偵察に赴いたもの）救援に建設所着、下半身土砂に埋つた死体を発掘し、夜九時自動車で上市に向い、本警寺にて通夜を行った。

三、反 省

当時山岳部では、ヒマラヤ遠征の前段として、積雪期の毛勝山を越え、猫又、剣岳をむすぶ長大な尾根を利用しての極地法による登頂を計画していた。このパーティは、ブナクラ谷からのサイドサポートの可能性と大窓、小窓、三の窓間の稜線の状態及びキャンプサイトの偵察の目的で入山していた。

このパーティが遭遇した豪雨は、白萩川流域を見舞つた、数十年來の局所的集中的なものであつた。私達が八月二〇日、河口にある鉄橋を渡る時、ものすごい濁流に目を見張つたものである。又、伊折の発電所の取入れダムは堤防の高さまで土砂で埋めつくされ、堤防の上にある取水調

節のハンドル（堤防の上よりの高さ約四米）に太い流木が引かかっていたのには驚かされた。

このような集中豪雨は別にしても、道のない山にわけ入る時、どうしても沢筋が登路として利用される。このため、増水による危険や渡渉による危険が常に内在している。特に、上流部分が樹木のない所などは、わずかな雨で、驚くべき速さで、急激な増水に見舞れることがしばしばある。

穂 高 岳 吊 尾 根

——滑 落——

橋 本 正 人

一、登山計画

リーダー・遠藤禎一、アシスタントリーダー・橋本正人、メンパー・北古味雄、関根敏夫、鈴木良博、前田一夫、森村克美。期日・昭和三十三年三月二四日より二〇日間。ルート・上高地より北穂高岳南稜經由北穂高岳頂上にベースキャンプを設け、前穂高岳往復および滝谷の登攀。

就寝中は、疲労のため熟睡していることが多いので、激しい降雨にも気が付かない場合があるためキャンプ・サイトの選定には十分気をくばる必要がある。数十年来の集中豪雨の上に鉄砲水の発生であれば、神ならぬ身の人間にとっては、不運であったとはいえ、このような雨天続きの時に逃場のない狭い谷の中に停滞したことが致命的になったことは明らかである。

二、行動および遭難の経過

昭和三十三年三月二四日東京発、予定通りの行動で三月三十一日北穂高岳南峰直下にベースキャンプを設けた。

四月二日、晴 この日の予定はベースより前穂高岳の往復であった。森村一人を残してテント発七時、稜線上には明らかな踏み跡があり、難場にはフィックスザイルが張つ

てあり、アンザイレンもせず快調にとぼして八時五〇分奥穂着。一〇分間の休憩の後、前穂へ向う。九時一五分、前田は吊根最低鞍部よりやや奥穂よりの地点で岳沢側へ滑落した。現場はクラストした雪面に所々岩の露出した傾斜約三〇度の斜面であった。前田は最初何かにつまづいたように、前にのめるように転んで滑り落ちはじめた。すぐにストップの姿勢に入ったが、ピッケルは何度か岩にあたって浮き上った。十数米落ちた所に五〇センチほどのギャップがあり、ここでアイゼンの爪が雪面にひっかかり、体をひき起され、前穂の方に二、三步進んだ後転倒、頭を下にして滑落し始めた。再びストップの姿勢に入ったが、ピッケルは岩にあたってはねとばされ、手から離れた。そして、そのままの姿勢で視界から消えた。

滑落した斜面の先は急な崖となって滝沢へ落ちこんでおる「ヤッホー」の叫びに答える声は聞かれなかった。まず、北古味、鈴木を連絡のため、ザイテングラード經由で上高地へ下山させ、残り三人で前田の滑落した場所まで下降しようとして非常に困難で、雪崩の危険も予測されたために中止、岳沢から入って搜索することにする。関根は一時に北穂のキャンプ着、遠藤、橋本は午後二時三〇分上高地着。

三、搜索記録

四月三日、部外の多くの方々の応援を得て搜索開始、滝沢は雪崩のため日中の行動は危険とのことで、午前二時四五分上高地発。滝沢の第一の滝の右岸の尾根に登って滝沢上部を遠望するも手がかりなく下山。

四月四日、滝沢の第一の滝の滝壺左岸で前田のサブザックが発見され、その後間もなく七時四五分に第二の滝上部で遺体が発見された。遺体には多発骨折が認められ、即死と判断された。

四月五日、遺体は上高地へ移され、夜検屍の上茶毘にふされた。

四、反省

氷の稜線からの滑落事故である。パーティ全員の体調は上々であり、天気もよく、稜線のクラストはアイゼンのツアッケがちょうどささる程度、踏み跡があり、難場にはザイルがフィックスしてあったこともあり、アンザイレンもせず北穂から奥穂を経て、前穂へ向い快調にとぼしていた。ラストにいる私の前を歩いてきた前田は、一瞬前のために倒れて滑落しはじめた。「へい、ストップ、ストップ」、私は叫びながらあとを追った。滑落の速度はゆるやかであ

り、前田はストップの姿勢に入っても停止するだろうと思われた。しかし結局ピッケルははねとばされ、その姿はすぐに視界から消えた。

前田の登山経験は一年、しかしこの一年間、彼は五月の十勝岳合宿で足を捻挫したため、他の新人と同様の十分な登山訓練は受けていなかった。そのことを考えれば、彼だけでもアンザイレンすべきではなかったか、とも考えられるが結果論であろう。滑落しはじめてからも、いくつかの不運が重って停止できなかったように思われるが、これも

十 勝 岳

— 凍 死 —

見た目以上にむつかしい斜面であったのかも知れない。

上高地帝国ホテル冬期小屋の番人であった木村氏の記憶によれば、吊尾根から岳沢への滑落死は前田が六人目で、他に二人が滑落したが、アンザイレンしていたため、ザイルが岩にひっかかって停止した例があるという。われわれは不幸にしてこれも知らなかった。

前田の愛用していた、当時ではめずらしいシモンのピッケルは夏に発見され遺族のもとへ返されたという。

橋 本 正 人

一、登山計画

チーフリーダー・岩崎裕三、合宿参加者二八名、期日・昭和三十三年十二月一九日より六日間。ルート・合宿形式で十勝岳周辺の日帰り登山。

第一班（初年班）リーダー・小竹幸昭。メンバー・加藤幹夫、西安信。期日・十二月二〇日。ルート・硫黄山―前十勝岳―十勝岳―大砲岩―O・P尾根―振り子沢―なまこ尾根。

二、行動および遭難の経過

合宿初日の十二月二〇日、午前八時、勝岳荘発、出発時高曇り、前十勝頂上附近より、風雪強く、視界きかない。一二時一五十分勝岳頂上で昼食、第四班、第五班と合流、この時、風は強いが視界は良好となっており、計画を変更して上ホロカメットク山へ向かう事を第五班に伝えた。O・P尾根分岐点にスキーをデポして上ホロカメットク山に向かうも、天候悪化のため手前のコルから引き返す。この時、午後二時頃であった。O・P尾根から振り子沢・なまこ尾根経由で勝岳荘へ帰ろうとしたが、吹雪の中で、O・P尾根からN鞍部への下降点を発見出来ず、ここで一時間以上の時間のロスがあったと推測される。旧噴火口に降りても、崖尾根経由で小屋へ帰着出来るとの判断でO・P尾根から斜面を下り始めたが、スキーをトラレーゲンしての急傾斜の下降は困難をきわめ、日も暮れたため、この斜面に雪洞を掘ってビヴァークした。

十二月二一日、夜中、ほとんど一睡もせず、七時過ぎ、激しい風雪の中、三人は雪洞を出て小屋をめざしたが、西はつぼ足、小竹、加藤はアイゼンをつけたため、腰までのラッセルで足どりは遅々として進まなかった。

一〇時頃、小竹が脱落、一〇時三〇分には加藤も倒れ、

西のみ旧噴火口の土の露出した地点に至り、ここでビヴァークした。

十二月二二日、風雪は依然衰えず、西は、より暖かい場所へ移動してこの夜もビヴァークした。

十二月二三日、晴、西は、沢ぞいに下り、崖尾根を遠望した時、その上に多くの人影をみつけ、「ヤッホー」を叫んだ。

三、搜索記録

十二月二〇日、第一班の帰着遅延のため、ただちに搜索隊が組織され、午後一〇時、吹雪の中をなまこ尾根、振り子沢経由、N鞍部まで達したが何らの手がかりも得られなかった。

十二月二一日、四隊が、前十勝、旧噴火口、なまこ尾根を搜索したが、風雪強く、手がかりは得られなかった。

十二月二二日、旧噴火口へ向かった搜索隊は上ホロカメットク山直下の尾根末端に小竹の遺体を発見した。この日も風雪強く、搜索隊は生存している西のすぐ近くを通過しているが互いに気付いていない。

十二月二三日、晴、旧噴火口に向かった搜索隊が、その入口で自力下山中の西を救出、その口述により加藤の位置を知った。加藤の遺体は夫婦岩直下の本沢の岩かげで雪に

埋没しており、その位置は、最上部の噴気口より三〇米上流で、小竹の遺体の位置はさらにその一〇〇米上流であった。

十二月二四日、自衛隊員の協力を得て遺体は上富良野町へ運ばれ、火葬された。

四、反 省

この冬の十勝岳合宿は、例年と異なり、北大山岳部の主力メンバー一八名を極地法による北鎌尾根から槍・穂の登頂計画に送り出した後の残存者のみによる合宿訓練で、全体が弱体であった。冬山前の幹事会における槍・穂登頂計画、十勝岳合宿を含めての総括討議は何度も行なわれ、弱体の合宿で決して無理をしないことが、繰り返し強調されていた。十二月二〇日、合宿初日、初年班・第一班の十勝岳登頂後、スキーをトラレーゲンして登路と別のルートから帰還する計画は通常の合宿においてすら多少無理と考えられる。従ってこの計画を承認した前夜の合宿リーダー会がまず責めを負わねばならないであろう。合宿のチーフリーダーは、幹事会の構成メンバーである岩崎であるが、彼は三年目であり、初年第一班のリーダー小竹は上級生で、幹事会のメンバーでなく、幹事会の事前の協議の内容を熟知していなかった事も、この計画の承認された一因であった

かと推測される。

十勝岳頂上において、計画を変更、上ホロカメットク山登頂をめざした事は、無謀といわざるを得ない。久方ぶりに冬の十勝岳頂上に立ったリーダー小竹はおそらく大きな感激にひたっていたと推測されるが、冬山初体験の新人二人をひきいて、もう一つピークをと欲ばったのは、不運にも魔がさした、としかいいようがない。

上ホロ手前のコルで天候悪化のため引き返す。この天候の悪化は、朝からの行動中の天気から考えて、予測可能であったろうと思われるが、それにも増して、前夜のリーダー会における天候予測のあまさが指摘されねばならない。

O・P尾根から振り子沢源頭・N鞍部への分岐点がわからず、ここで吹雪の中、一時間以上の時間をロスしてさまよっている。そしてここで始めて、メンバー二人は、リーダーが、O・P尾根―N鞍部―振り子沢のルートに未経験であることを知った。リーダー会がこの計画を承認したリーダー達のうち何人がこの事実を知っていたであろうか。N鞍部へ降りられないと仮定すれば、前十勝経由の往路を引き返すか、旧噴火口・崖尾根経由で帰るかのいずれかである。N鞍部へ向かって下降し、たとえ誤って旧噴火口へ出ても崖尾根経由で帰ればよいという判断は誤っていないと考えられる。

果して、彼等が下降を始めた斜面は、始めはゆるいが、すぐに急峻な断崖となる、旧噴火口の火口壁であった。

もう二〇〇米か三〇〇米、O・P尾根上を下降してから左の斜面へ入れば、容易に振り子沢へ出たと思われるが、一時間も考えた末の決断がわずかにずれた。不運といえは不運であるが、あるいは、リーダー小竹に、崖尾根の経験はあるが、振り子沢の経験はない、そのへんが微妙に作用したのであろうか。

猛吹雪の中、スキーをトラレーゲンしての急斜面の下降がいかにも困難であったかは察するにあまりある。日が暮れてこの斜面で雪洞を掘つてのビヴァークはいたしかたなかったであらう。

翌朝までほとんど睡眠はとらなかったという。これは誤りで、この様な状態では交互にでも睡眠をとる努力をし、いくらかでも体力の回復をはかるべきであらう。

二一日朝四時頃に携燃に火をつけようとしたが、よく燃えなかったという。雪洞内の気温は低く、湿度は高かったと推測される。

七時頃、風雪は依然として衰えをみせていないのに三人は雪洞を出た。これは最後の決定的な誤りであらう。高湿度の雪洞の中で、ひどく湿った着衣は、外の風と低温でたちまち凍りついて体温をうばう。一〇時には小竹が、その

三〇分後には加藤が倒れた。この三時間の苦闘で、三人が移動した距離は一キロメートルに満たないであらう。

この後、西は、小屋へ帰着すべく、三段山の斜面を登り始めたという。崖尾根の経験がなく、五月にN鞍部へ振り子沢を経験しているための判断と推測されるが、つぼ足で旧噴火口からN鞍部への登行は非常に困難である。幸いにも彼はすぐにその不可能に気付き引き返して、加藤の死亡を確認し、そのすぐあとに、噴火口の煙を発見した。前にも述べたように加藤の死亡地点から最上流の火口まではずか三〇米しか離れていないのである。

小竹、加藤があいついで倒れ、西のみが生還した、その差は何であつたらうか。

三人とも北海道の出身である。小竹には四年の山歴があるが、他の二人は四月に山登りを始めたばかりの新人である。リーダー小竹は卒業を間近にひかえて論文の仕事が忙しく、しばらく山から遠ざかつており、あまり良いコンディションではなかったと思われる。又O・P尾根上を行きつ戻りつしたと思われる一時間あまりの時間、彼の疲労が最も激しかったであらうことも容易に想像される。さらにビヴァーク中にも北大山岳部の良きリーダーの常として、新人二人をかばって自分を最も悪条件下においたであらう事も推測される。

西は小樽に育って、小さい頃から雪に親しんだスキーの名手で、新人ではあるが、兄が北大山岳部員であったこともあって、冬山に関するある程度の知識はもっていた。スキーによる十勝岳登頂に際して、他の二人より疲労が少なかつたであろうことは容易に想像されるし、その後の経過中にも、寒さに対するこまかい配慮で加藤にまさり、体温の喪失、ひいてはエネルギーの消耗の度合が加藤より少なかつたであろうと推測される。

最終的に、西を救つたのは噴火口の暖気である。彼は噴火口の傍の露出した土の上に寝て地熱で暖められ、わずかに二食分の非常食で丸二昼夜を過ごし、自力で小屋へ向かつて歩きだすだけの余力を回復していた。

このような遭難における直接の死因は、体温の喪失であり、それを引き起こす因子は、低温と着衣の湿気の蒸発、それを助長する風であろう。地熱によって救われた西の生還はこれを裏づける一つの証拠でもある。

加藤の死亡地点から噴火口までの距離はわずかに三〇米、小竹の死亡地点からでも一〇〇米にすぎない。このわずかの距離を頑張れたら、あるいは彼等も助かつたかも知れないと考える人も多いであろう。しかし、この最後のわずかの距離が決定的に重大であることは空木岳遭難の項でも述べた通りである。

この遭難に関しては搜索の側にも問題がある。遭難当日の夜、日中の行動で疲労した隊員による搜索が、吹雪と暗やみにはばまれて無為に終わったのはやむを得なかつたであろう。しかし、この結果は当然予想されるものであり、遭難パーティが翌日まで持ちこたえる事を信じて、翌日までエネルギーを温存することも考えられてよいであろう。

二日目の搜索は、遭難パーティの状況から、彼等が、大砲付近の稜線で迷つたか、N鞍部へ下降しそなつて旧噴火口へ降りたか、あるいは前十勝経由の帰還に変更してそこで迷つたか、このあたりを予測すべきと考えられ、事実、合宿のリーダー会もこう予測して四隊の搜索隊を出している。通常の北大山岳部の力であれば、どんな猛吹雪の中でも、旧噴火口の最上流部、(即ち遭難パーティが七時から一〇時まで悪戦苦闘していた地点)振り子沢からO・P尾根、あるいは新噴火口の硫黄採掘の小屋、この辺までには到達可能と考えられる。しかし、悲しいかな、弱体の合宿のメンバーの搜索隊は、いずれもこれらの地点へ到達することが出来なかつた。

これは山行前からある程度予測されたことであり、この故に、山行前の幹事会で、合宿では決して無理をしないことが繰り返し議論されたのであつた。

札内川十の沢

—なだれ—

橋 本 正 人

一、登山計画

リーダー・沢田義一、アシスタントリーダー・中川昭三
メンバー・橋本甲午、田中康子、松井作頼、坂井丈寛。期
日・昭和四十年三月一日より行動九日停滞五日。ルート・
札内川十の沢左岸の尾根―カムイエクウチカウシ山往復―
カムイ岳―幌尻岳―トッタベツ川

二、行動および遭難の経過

三月一日、曇のち晴、中札内―営林署コイカクシユサ
ツナイ沢事業所

三月二日、快晴のち曇、七時二〇分発―コイカク合流
(七時五〇分)―六の沢出合(一一時)―八の沢出合(午後
二時)、イグルーを作りここでキャンプ。

三月一三日、雪、七時二〇分発―九の沢出合(八時三〇
分)―十の沢出合(九時三〇分) 本流左岸のテラスに雪洞
を掘る。

*以上の行動記録は、田中康子の日記による。

三月一四日、午前二時頃、雪洞は雪崩によって埋没、中
川、橋本、田中、松井、坂井は即死、沢田のみ四日間生存
したが、デブリの中より脱出できず凍死。

*この項、沢田義一の遺書による。

三、搜索記録

第一次搜索

沢田隊の最終下山予定日は三月二四日であった。三月二
六日になっても下山の報告がないため、同日、北大山岳部
内に遭難対策本部が設けられた。同夜、ただちに沢田隊の

入山、下山路の両方から予定のルート上を搜索すべく、二隊計八名が札幌を發つた。又、ただちに始められた情報収集活動により、

(1)北大スキー部のパーティが三月一三日に札内川十の沢合流部左岸のテラスに雪洞を掘っている沢田隊を見かけている。

(2)三月一三、一四日、稜線上は猛吹雪で、一五日は快晴、この日東京都立大学山岳部のパーティはイドンナップ岳への分岐点からカムイエイクウチカウツ山までの稜線上で全く人影を見ていない。

(3)東北大学遭難救助隊及び東北学院大学山岳部のパーティは三月一八日から二四日までの間、カムイ岳付近の稜線で行動中、沢田隊を見ていない。

(4)三月一八日に札内川十の沢付近を通過した帯広畜産大学山岳部のパーティは、札内川本流沿いに流れ、十の沢合流付近の本流をうめつくす程の大きさのデブリを見たなどの事実が判明した。

さらに第一次搜索隊によって、十の沢の沢田隊のキャンプ地は雪崩の下であることが確認され、また下山路のトッタベツ川、カムイ岳からイドンナップ岳分岐点への稜線上に何らの手がかりも得られない事が報告された。

ここで、沢田隊は三月一三日か一四日に、札内川十の沢

付近で雪崩によって遭難した事がほぼ確實視されるに至った。

雪崩現場の搜索は、先發搜索隊によって三月二八日から開始された。

雪崩は、国境稜線上、札内岳分岐点付近より発生し、幅五〇〜一〇〇メートル、深さ最大一五メートル、全長三キロメートルにおよび、本流沿いに約七〇〇メートルを流れ、雪崩風の当たった兩岸の斜面は場所によって沢底から八〇メートルの高さにわたり、岳樺などの大木が吹き飛ばされていた。

沢田隊のキャンプ推定地と雪崩末端との中間地点にトレンチを掘ったが、デブリは硬くしまっており、ピッケルの先がようやくやくささる程度で作業は非常に困難であった。

四月一日から搜索隊は二三名となり、大小三七カ所のトレンチが掘られ、大きなものは幅一メートル、長さ一五メートル、深さ五メートルに達した。また、これと平行して十の沢左岸の尾根から国境稜線付近の搜索も行なわれたが、結局何らの手がかりも得られず四月五日に第一次搜索は中止された。

第二次搜索

雪融けとともに、遺体流出を防ぐための、網場建設が必要と考えられたため、五月五日から四名の偵察隊が雪崩現

場を調査し、これにもとづいて五月一三日より二〇日まで
の間に、雪崩の末端から四〇〇米下流の標高八九〇メー
ルの地点に三基の網場が建設された。

この時も捜索は行なわれたが、何らの手がかりも得られ
なかった。

第三次捜索

六月に入ると急速に融雪が進むため、一週間ごとにバ
トール隊を出すことになり、六月三日に最初の隊が出発し
た。デブリは前回捜索時より一メートル近く減っており、
デブリの末端では河原が露出し始めていて、ここでストッ
ク一本が発見された。これは帰札後中川のものであること
が確認された。沢田隊の初めての手がかりであった。

第二次バトール隊は、六月一〇日に現場に到着、一三
日昼すぎに、沢田隊のキャンプ推定地より約一五メー
トル上流の地点に前日にはなかった穴をみつけ、中を調べると
遺体が発見された。沢田義一であった。

六月一四日夜に札幌を發つた遺体収容のための先発隊は
一五日夜には現場に到着、一六日には、沢田の遺体発見場
所を發掘し、沢田隊の雪洞あとと、シュラフに入って睡
眠中であつたと思われる他の五遺体を發見した。

一六日には本隊も到着し、その夜、沢田の遺体は現地
で茶毘にふされ、一七日には、中川、橋本、田中、坂井、松

井らの遺体も同様茶毘にふされた。

四、反 省

沢田は、前年夏に新人をひきいて、この冬の計画の偵察
をかねた山行をしている。私もこのパーティに加わって
いた。国境稜線から札内川本流を下り、札内岳よりの沢との
合流より少し下った左岸のテラスにキャンプを張つた。冬
の雪洞と全く同じ地点である。この日は岩魚が沢山つれた
から、たき火を囲んでの夕食は楽しいものであつた。「いい
キャンプサイトですね。冬でも大丈夫でしょうね。」と問
いかける沢田に「うん、まず大丈夫だろうね。」と答えて、
私は、左岸の尾根は雪崩など起きそうにないし、右岸に入
る急な小沢の雪崩はキャンプサイトよりもう少し下流を襲
うであろうと考えていた。本流は約一キロにわたつて、幅
の広いゆるやかな傾斜の河原が続いていて、キャンプ地
は、そのほぼ中間にあつた。

国境稜線上、札内岳への分岐点付近に発生した大規模な
雪崩は、本流の幅広い河原を約七〇〇メートルも押し出し
て、沢田隊の雪洞を完全に埋めた。しかも、春の大規模な
雪崩は、日中気温の上昇した時におこるといふ常識とは反
対に深夜、睡眠中であつた。

隊員の中にも雪崩の予感があつた。田中康子の三月一三

日の日記に「今日は半日行動、一日中の降雪で雪崩が心配」とある。単に彼女がそう感じたただけなのか、あるいはパーティ内で何らかの議論があったのかはわからない。しかし雪崩の危険を感じたとして、この場合、それをさけるためのどんな処置があったであろうか。稀にしか起こらないと推測される大雪崩の日にその下にいたのが不運、としかいいようがない。

計画の段階でこのキャンプ地の雪崩の危険についてはほとんど議論されていないようである。問題があるとすればこの点であろう。この様な大規模な雪崩とそれによる遭難は日高山脈では記録がない。しかし、この様な大規模な雪崩が本当に一〇〇年に一度の稀なものかどうかについては、私は疑問に思う。

三十三年夏、札内川八の沢の標高八〇〇から九〇〇メートルの間、三十四年夏、ヤオロマツ川、キムクシユベツ沢の標高八〇〇から九〇〇メートルの間、三十五年夏、トッタベツ川本流の標高九〇〇メートルと一〇〇〇メートルの間、この三カ所で私は大規模なデブリを見ている。いずれも泥をかぶった雪溪の上にもぎれた岳樺の枝が散乱しているという状態で規模こそやや小さいが、札内川十の沢のデブリの六月の状態によく似ていた。この三カ所と今回の札内川十の沢合流点、標高にして、九四〇メートルから

一〇〇〇メートルの地点、いずれも似たような標高で、急峻な沢が急にゆるやかになって、比較的広い河原を形成する、すりばちの底のような、よく似た地形であることがわかる。そして、このような地形は日高山脈の地図を見ると、特に十勝側ではほとんどの沢に存在している事が知られる。これらの地点では今回ほどではないにしても、大規模な雪崩がさほど稀ではないのかと推測されるのである。さらに、最初に述べたように、夏期にこれらの地点に至って、冬期の状態を推測しても、雪崩の可能性の判定は困難であることを念頭に置かなければならない。この遭難の直後にも日高山脈の雪崩地図作成の必要性が叫ばれたが、十数年を経た今日、その作業はあまり進んではない。夏期登山の際のデブリの記録とともに、もし出来れば、多量の降雪の後のヘリコプターによる偵察なども、雪崩地図の作成に有用であり、今後、登山者の安全の点ばかりでなく、いろいろな面で有益であろうと考える。

札内川六の沢

— 徒渉失敗 —

神谷晴夫

一、登山計画

リーダー・山際清司、アシスタントリーダー・高松宗彦、メンパー・木下知子、高野房雄、高橋孝三、滝川逸司。期日・昭和四十一年七月二日より二三日。行動八日停滞三日。ルート・ヌカビラ川—幌尻岳—七ツ沼カール—新冠川—札内川—カムイエクウチカウシ山往復

一、行動および遭難の経過

行動は計画通り進み七月一八日、八の沢出合キャンプ、一九日木下を除きカムイエクウチカウシ山往復後、六の沢出合までくだりキャンプ。二〇日、二一日と雨のため停滞。二二日増水激しく、一〇時三〇分まで減水待ちをする。左岸沿いに進んでいたが午前一一時初めて右岸へ渡渉する。高松他三名は無事渡渉。山際は、木下が背負っていた

ザックをささえながら渡渉中、木下が流され、山際はこれをささえきれず、ともにながされ行方不明となる。

三、搜索記録

七月二二日「六の沢下流一キロメートルの地点で渡渉中、木下が流され、山際が助けようとして流される。砂防ダムの二キロメートル上流にて山際の遺体確認。木下は目下、行方不明」との遭難の報が登山本部に入る。同夜、第一次搜索隊一名札幌発。二三日、山際の遺体収容、木下未発見。第二次搜索隊一〇名札幌発。二四日砂防ダムより三〇〇メートル上流で木下の遺体を発見し収容した。

四、反省

十の沢の遭難から一年後、遭難は連続して起った。北大山岳部の登山の重要部分をしめる沢登りにおいて渡渉失敗

による溺死はこれをはじめてであった。部での渡渉方法は、かなり大胆に、時には胸を越える深みと急流をこなすものであった。しかし、流れのいきおいに負け、流されたが大事にならないようなできごととは決してすくなくなかったといえる。今回の場合、山際は流されたのちしばらくして発見されたが頭部を岩にぶつけ脳しんとうを起し、そのまま溺死したものと考えられた。このような場合、水泳能力はさしたる問題にならないが泳げるかどうかは余裕をもって渡渉できるかどうかに影響するということは論をまたない。瀬とよどみが短距離で連続する河川では、少々流されても溺死するなどのことはないというのが一般的なとら

ソ エ マ ツ 沢

——転 落——

え方であったように思える。しかしながら今回のように二人とも水泳能力は低く、このことと増水による流れの早さが関係して二人は体勢をたて直すことができなかつたのであろう。また急流の渡渉時、ザイルは勿論、棒をささえに使用していなかったことも意外の感がある。このようにこの遭難は山岳部での技術の伝承という点に問題を投げかけ、渡渉技術ひとつにしてもいかに曖昧であったかが浮きぼりにされた。また、この夏は異常に寒い夏で融雪が遅れ、全体に水位が高かつたことも原因のひとつで、この点を把握しておく必要があつたらう。

神 谷 晴 夫

一、登山計画

リーダー・岸本正彦、アシスタントリーダー・西信、メ

ンバー・下沢英二、吉田進、期日・昭和四十三年七月三日～八月六日。行動七日、停滞三日。ルート・シュンベツ川―ピリカヌブリーソエマツ沢

一、行動および遭難の経過

シュンベツ川からのピリカヌプリ直登沢―ピリカヌプリからソエマツ沢への困難な登はんを終え、ソエマツ岳直登沢出合についたのは、八月三日でそれまで停滞日はなかった。翌四日雨のため停滞、五日晴、ソエマツ直登沢に入り、四時間後約八五〇メートル地点左岸の高捲時、西が行方不明となった。約二時間の搜索後、西を遺体で見見。安置し往路を下る。ルテンベツ乗越キャンプ、六日、西舎より登山本部に遭難の連絡。

三、搜索記録

八月六日、午後一時、登山本部に「五日、ソエマツ岳直登沢八五〇～九〇〇メートル地点で滝を高捲中、西信が転落し死亡。遺体は八五〇メートルの沢中に確保し安置」の遭難の連絡がはいる。ただちに第一次收容隊が、札幌発、七日、第二、三次收容隊が相次いで札幌を発つ。第一次收容隊はソエマツ直登沢出合にベースキャンプ設置、八日、遺体を茶毘予定地まで搬出し茶毘準備完了、九日、收容隊全員ベースキャンプに合流し、現場に向い検屍後茶毘にふす。一〇日、お骨を持って下山にかかるも雨のため増水し困難。一一日、西舎着。

四、反省

昭和三十六年頃から装備、食料の軽量化をはかり、困難な直登沢が次々と登られていった。しかしながらソエマツ岳直登沢は、この時まで三パーティが入っていったが、未登であった。シュンベツ川からピリカ直登、ピリカからソエマツ沢の下りはともに困難な沢であるが、今回のパーティがこの沢の登攀を主目的としたらうことは明らかである。

事故発生時は滝の高捲き中であり、西は下降路をさがし先行していたが、適当な場所がなく、後続のメンバーに、さらに高捲きを続けるように指示した。この時西は樹の枝の上に乗っているのを、一人が目撃しており、これが彼を見た最後であった。その後他のメンバーは高捲きをつづけ上流の河原に降りたち、西の到着を待ったがあらわれず、行方不明となり、二時間の搜索後遺体となってゴルジュの中に発見された。したがって、西は他のメンバーに指示後、乗っていた枝がおれて転落し、頭を強打し死亡したと推測するのが順当であろう。一見不可抗力な遭難に思える。しかし、今回の場合沢の水音とブッシュにさまたげられたのであろうが、困難な高捲き時、メンバー各人が他の人を把握出来るような位置にいなかったことが問題として

残る。この点は事故発生時に迅速な対応策を講ずる上から
いっても必要なことであった。山岳部の沢登りでは、往々
にしてバラバラに歩く傾向があり以前から指摘されてい
た。しかし、今回の場合、西は、四年目のリーダーの判断
を越えた別格的在存であった。医学部生であった彼は、六
年目であり現役時の山行を一応四年間と限定する山岳部に
おいて、彼の技術と経験は山岳部内ではトップクラスであ
った。この彼が沢登り中転落して遭難したということは、
札幌内川十の沢、六の沢と続いた遭難から立ちなおし、活発
な登山活動を始めていた山岳部において、再び原則的な
登山と危険性、あるいは、リーダーシップというような
問題を投げかけた遭難であった。



山の歌——北大山岳部の場合

渡 辺 良 一

選暦も間近になると、しきりに青春時代が回想され、当時の山仲間にも会ってみたくなる。

昨日まで神戸市で公衆衛生学会が開催され四晩神戸に滞在した。関西北大山の会の纏め役を自ら引き受けている増井君が毎晩つき合ってくれ、神戸は勿論、京都、大阪と山の連中の集まりに出席して三十数年ぶりの再会を楽しんだ。

戦争が終わってジャワ島から引き上げ、内地に帰った時は、後は余世と感じていたのが余世が本物の人生になったような感じである。

戦後、札幌に比較的長く滞在したのは、昭和三十年頃に公衆衛生学教室に籍を置いた時である。私の研究のテーマは「札幌のスモッグ」。それを空から観察したり、紫外線や SO₂ や visibility など。要するに、今でこそ「大気汚

染——公害という世界語の一番初めに登場した日本の、しかも札幌の冬を舞台にしたものであった。飛行機やヘリコプターに乗らなければ仕事にならないもので、冒険ではあるが大変快適ともいえる時期であった。

ある夜、街を歩いていると、テレビから歌、しかも下手な男声合唱が流れていて、最後に「只今のは北大山岳部の歌で合唱は北大山岳部の皆様でした。」とアナウンスがあった。数日後、橋本ヤンチョ宅を訪問した時に、「先日北大山岳部の歌というものをテレビでやっていたが、聴いたような記憶がある。」と言ったところ、「ガツも大部南方ボケがひどいようだな。あれはガツの作曲した歌じゃないか。」という返事。

ここから私の回想が始まり、だんだん冴えて来るのである。

山と歌は切り離せない。山登りは生活の中心であり、日常生活の総てを包含する故に、生活技術万般に通じている必要があるが（少し大げさ）、歌もその中の大きな部分を占める。しかも大自然の中の生活であるから、街の酒場の歌は合わないし、やはり似つかわしいものでなければならぬ。北海道はまた内地と風景が違ふし、近代登山も伊藤秀さん時代からで、内地の古い宗教登山の修験僧の開拓と違い「守れ権現、夜明けよ、霧よ」などの歌は合わない。

山の連中が最もよく皆で歌ったのは、当然ではあるが十勝の吹上温泉での冬山合宿の時である。一週間の猛訓練――六時起床、九時就寝で零下一三〇度、高度千百米の森林限界での合宿であるので、そう呼んでもおかしくないだろう―の中でも四日目頃に夕食後大コンパが開かれるのが常であった。初年班は専ら山岳スキー術、二、三年班はアイゼン・ピッケルワークの訓練で、三年班はバリエーションルートとザイルワークに力を入れていた。私の初年班のリーダーは福地（富山）宏平氏（現在名古屋大学教授）で、二年班の時もそうであった。十勝岳泥流のスロープを直滑降で滑るところから始まる。初年班はステムボーゲンをごなせるまでを目標にしていた。山岳スキー教程が理論的に記述されていて、専ら力学・物理学を基本に、クリスチャンニアは「往きのボディスイング、返しのボディスイング

グ」というような言葉で、理論づけは沢本三郎氏であった。福地宏平リーダーは教程通り往きのスイングを大きくやり、返しのスイングを大きくやり、仕上りは弁慶が足を開いて斜面に向かって立ち、両手を右腰の刀に手をかけるような姿勢で終るといふようなものであった。二年班も福地リーダーで、その年は往きのスイングはそんなに大きくやらないで、途中で止めれば返しは自然に入り、「島村効果」といふ現象が起こって、スキーは自然に回り滑るといふ次第であった。アールベルグスキー術を駆使してスキー術の黎明を作ったシュナイダーが主演で、アールノルド・ファンクが監督するスキー映画が日本でも教本封切りされ、大反響があった。二年班の頃、アールノルド・ファンクが日本で原節子という美人女優を主演に「新しき土」という映画を作った。その時一緒に来て来たスキーの名手達が白銀荘に泊まって十勝泥流スロープにジャンプ台を築いてさかんに練習をしていた。我々はしかし、これぞ北大山岳部スキー術であるぞと、往き返りスイングでそのまわりを滑っていた――というような時代である。

少し歌から話がそれたので、歌に帰ることにしよう。合宿の四日目のコンパは六時頃から始まる。大体、その日を目指して色々替え歌を作って、けなしたりほめたり、まあ他愛ないものであった。中には本格的にベートーベンの第

だけ覚えたフランス語で、この「巴里祭」を歌った。アバリダンシヤクフォブルの出だしであった。歌い終わったら別の班のリーダーの林氏が、「あの歌はとても良い歌だが、なんとという歌かね」と聞くので、「あれはアバリダンシヤクフォブルという歌だ」と言ったら、「なる程」と納得したようだった。彼は、山岳部に初めて入った時、「君達は山が好きで山登りするべきで、海に行こうか山に行こうかなど、遊びで行くような気持で行くものではないんだよ」と教訓を垂れた。これにうんと感心して、専ら山に打ち込むことになった次第である。

その頃は、「山に登る意義」を哲学的に解明しなければ気が済まない気分で、さかんに議論し、その態度にあきたらない先輩などが自然に離反したりして、吾々は、何故あの人は来なくなったのだろうかと思ったりした。伊藤秀さん以来の伝統的なものもあったのかも知れないが、その頃はアルピニズムは「頂上を目指し初登攀こそ意義がある」と考えていた時代である。夏山初登攀時代は終わり、厳冬期初登攀に精力を注ぎ、特に目指すは、「遙かなるペテガリ」であった。ポーラーメソッドが尾根伝い登頂に取入れられ、何回か荒天にさえぎられた。最後に、先輩八人を雪崩に失う壊滅的打撃を受けた。内田氏と橋本ヤンチョが先輩として残ったが、まじかの先輩が皆やられた。我々は

はり冬期イドンナップ岳初登攀を目指して新冠川から入っていたが、天候悪く引返し、駅に着いたら、大きく目を射た「ペテガリ遭難」の記事——このあと、佐々保雄氏をリーダーとして札内川に救援作業に入り、冬山入山一カ月半を記録した。札幌に帰り、続く告別式——我々が銭けに捧げるのは Kameraden Lied であった。

Ich hatte einen Kameraden, einen bessern findst du
——これが日本の「戦友」——ここはお国を何百里——では、意味がわかるだけにびったり来ない。お経と同じで、我々にはこの方がびったりだった。その頃は、「いつか山で死んだら」などという歌もなかった。これら先輩達の死は大きな断層を作り、山に登ること、雪崩の恐ろしさに極めて鋭敏に反応し、慎重になった。慎重は沈滞にもつながる。

ある日、Yちゃんこと朝比奈英三氏から一片の紙片を渡され、「ガツ、僕はこの歌を作ったが、これに曲を作ってくれないか」という。Yちゃんはこの沈んだ空気の転換を図ろうと考えたと推察した。所謂「山の四季」である。私は引受けて、次の冬山合宿で披露した。何回か練習して、大体皆歌えるようになった。この時、もう一つ志気鼓舞のためと思い、「十勝岳の歌」を作詩した。

いざいざ 行こうよ あの山へ

皆々共に打立たん 山は招くよ 粉雪だ

今日は登ろよ あの手へ ラララ 行こう
皆々共に 風を切つて 十勝岳―煙り上る
今日の快哉 ラララ 煙り上る山

ベルグ ハイル ポンポン

というものである。この曲はロシアのもので確か「ポリスゴドノフ」と思う。当時は、ドン・コザック合唱団のレコードが出て、「紅いサラファン」の裏にこの曲があった。マーチ風で、勇壮で、山登りに向う気持によく合う曲だと思ひ、マークしていた。この詩のミソは「十勝岳」と「煙り上る」の重なりである。ケーの重なる所で、ドン・コザックは極めて自然にソプラノ担当が入って来るところである。残念ながら、わが山岳部にはソプラノはいないので、不満であった。感じがヴェスピアス山の「フニクリ・フニクラ」に似ている。(フニクラは掛声と思つていたが、昨年内と結婚三十周年の名目でヨーロッパを回った時、スイスのルツェルン湖畔のホテルモンタナという所に泊まった。ホテルから道路まで自動式フニクラで上下するようになっていた。Funicular を自分で運転するのだが、張り紙に Funicular はどうのこうのと書いてある。初め、何のことだかわからなかったが、昔歌った歌「フニクリ・フニクラ」を思い出し、ケーブルカーのことと判明した。歌の効能である)。

さて、ここでまた初めの部分に戻るわけだが、ヤンチャに「これは君の作つた歌じゃないか」と言われて、「なる程、そう言われてみればそうだった」あの時、Yちゃんからもらつた詩を、どういふ曲想にしようかと考えた。やはり、我々のゲレンデの日高を舞台にしよう、長い長い沢登りのアプローチ、男沢先生宅を最後に、浅く広い沢沿いの道、飯場や炭焼小屋、時にテントを張つて、コイカク札内合流、九の沢合流などを考えながら、これはワルツで行こう、ゆっくりとリズムカルにという訳で、三拍子目を軽く上る調子にした。沢を登りつめて、いよいよ急激な沢や尾根登りにかかる所で、「いざ行こう、我が友よ」という所から、尾根上に出て、いよいよ目指すピーク「さらめの尾根を飛ばそうよ」で頂きを極める——という曲想であつた。テレビで私の聞いた北大山岳部合唱団の歌は全くそのへんの所の使い分けも何もなく、お経のような感じであつたので、思い出すどころでなかつた訳である。

今年に入って、ニカ所から、曲を作つた当時の状況を知らせろ——と依頼が来た。一つは、関西北大山の会、一つは北大寮歌集編集者からで、——部歌を歌集に入れたいが、楽譜が三つあつてどれが本当か——というものであつた。見ると、三つとも違つていたので、新しく書いて送つた。それが北大寮歌集に載つているものである。

昭和三十年頃、「札幌市民の山好きの会」があつて、私
がその作曲者だと聞いて、歌を教えてくれというグループ
があり、その求めに応じたことがある。中にすぐ「お玉杓
子」に書き上げる人がいて立派な譜ができ、また持ち帰っ
て二重唱に作り上げ二重合唱曲にした。

茗溪堂で「山の歌」の歌集を出版し、初めは「山の四季
―北大山岳部部歌」とあり、作詩作曲者不明とあつた。そ
のうち、作詩朝比奈英三、作曲不明となつた。世に残る歌
に作曲者不明のものも多いが、かえてその方が面白い雰
囲気が漂う場合が多い。北大寮歌集に初めて作曲者渡辺良
一と名前が載つた。

幾多の山の歌があり、「守れ権現」を別にして、「雪よ岩
よ」が「オー・マイダーリン・クレメンティン」からなど
と替え歌が多い中で、「山の四季」は、オリジナルであるこ
とを誇つてよいだろう。

さて、吹上温泉での冬山合宿がその発表場所であつただ
けに色々思い出も浮んで来る。訓練が終わつてから、長い
長い凍った廊下を滑りに注意しながら脱衣場に着き、寒さ
を我慢しながら温泉に飛び込むと、生温い湯が肌になじん
で来る頃、自然に歌が出て来る。薄暗いランプの下で丁度
声帯もゆるみ始めて、所謂「風呂中」の歌になって、良い
調子が出て来る。そんな状態で歌っていると、暗闇に段々

人が増えて来て合唱になることがしばしばあつた。

戦争の足音もどんどん進んでいたが、乏しい食糧の中で
も、我々にはそんなことはどうでもよかつた。山登りが生
活の中心であり、年を重ねる毎に、計画通りの山行ができ
ることに目標を置き、小さな忘れ物の一つあつても自分で
減点とした。歌もその中の重要部分を占め、山に合いそう
な歌は一つでも自家薬籠中のものにしよう、誰よりも一番
早く――という訳であつた。

福地文平氏、有馬純ボコと私と三人で、ある年の二月に芦
別岳に入るべく車中の人となつた。会うなり、三人期せず
して歌い始めたのが、*It's easy to be gay, if you but try*
―で始まる、当時人気絶頂だつたダイアナ・タービン主演
の「オーケストラの少女」の中に出て来る歌であつた。Ea-
sily to bed, early to rise, makes you healthy, wealthy and
wise ―と、う「早起き三文の得」式の歌だが調子の良さ
では抜群なので、三人で大声で歌つた。主旨は、口笛をふ
くのが最高だというもので、当時は敵性語に入りかけてい
たが、まだそこまで行かぬ頃で、車中の乗客には眉をひそ
める人達もいただろうが、そんなことは構わなかつた。山
に入ればそこは別世界で、里に帰れば、「わが軍は何処を
占領した」というような記事ばかりであつた。まあ、言葉
を換えれば、当時の「非国民」であつたのだろうが、街の

中でないので目につかなかっただけのことだろう。

「何の為に山に登るのか」が、長い間の懸案であったが、誰もはっきり言える人はいなかった。当時の主任幹事だったバブ（葛西晴雄）も「山は頂上を極めるために我々は登る。その途中で雲の流れを眺め、路傍の花を賞でる心も山登りの中に許される」と主任日誌の中に書いてあった。雪崩による遭難も、十勝の上ホロカメットク山の尾根で起り、瀬戸三郎、高田徳両先輩が亡くなり、湊さんが間一髪で這い上がった。バブの日誌には、「若し僕が雪の下に閉じ込められたら——もし力を与えてくれ、力を下さい、と叫ぶだろう」と書いてあった。その彼もコイカクシュ札内川源頭の雪崩に巻き込まれ、そう念じたかどうかわからぬまま死んでしまった。上ホロの雪崩の時には、もう一つ、Yちゃんをリーダーとする美瑛班の帰着が遅れ、暗くなってもまだ到着せず、我々は泥流近くで大焚火をして、それを目標物とした。暫くして暗い中を氣息奄々とした一行が帰って来た。Yちゃんだけが軽くて気密性のある総絹製のアノラックが功徳して元気であった。合宿が終わっても瀬戸さんの遺体を発見すべく、崖尾根からZ―Dを越えて雪崩現場に通った。結局、その時は見つからず春の雪融けまで待たなければならなかったが、ベテガリ隊のコイカクシュ札内川の時も戸倉源ちゃん一人だけ雪融けまで待った。

源ちゃんの喋り声は、響くよい声であったが、歌わせると響かなくオンチであった。何時も遺体が出る和我々は歌った。Ich hatte einen Kameraden —— 一番何回も歌ったのがこの Kameraden Lied だったのである。

山の歌ではないが、先頃、北大山岳部創立者であった伊藤秀さんが亡くなり、その追悼会が未亡人出席のもとに新宿の三井ビルで開かれた。追悼演説も終りに近づき、ビールの酔いも手伝い、私はどうしても歌を捧げたい気持になり、司会役の林氏に歌いたいと申し出た。林氏は、渡辺ガツが歌うというが、彼は「北大山岳部部歌」の作曲者である云々と紹介してくれた。伊藤秀さんを知っている人の集まりであるので、皆相当のロートルが多く、北大山岳部部歌なんてあるのかというような顔をしていた。この時、私は「マイ・ウェイ」を歌った。この歌は作詩作曲ともルポ―氏で、ポール・アンカ編曲で、フランク・シナトラがカムバックした時の歌である。岩谷時子が訳詩しているが、この歌は、日本語訳が歌を生かしている。

やがて 私もこの世を去るだろう

長い年月 私は幸せに この旅路を今日まで越えて来た

何時も私のやり方で——

心残りも 少しはあるけれど

人のしなければならぬことならば

出来る限りの力を出して来た

何時も私のやり方で――

(マイ・ウェイ)

我々が長いこと議論し、何時も答えがなかった「何故山に登るか」――私など山岳部に体力をつける為かと思つて入った。先輩に、山に行くに肥つて帰りますか、と聞いたら、死んだシャモ(片山純吉)に、いや、大体やせて帰るね、と答えられて、それじゃ体力づくりじゃなく体力消耗じゃないか、という幼稚な発想で山岳部に入った。そして

ヘルヴェチアヒュツテの二十五年

山崎春雄

北大山岳部は本年度で創立二十五周年を迎え、その所属のヘルヴェチアヒュツテも、同時に建設二十五年の祝典を挙行した。この小屋は封建社会の士民間によくあった様に、生れる前から山岳部と許婚の間柄にあつて、双方が二十五歳に達すると共にその銀婚式を祝つたのである。

十月六日の午後、部のOBたちと共に、定山溪から営林

歳をとり経験を積む毎に次第に迷路に入つて行つてしまつた。エヴェレスト初登頂の後でハント隊長が、問いつめられて「山がそこにあるから」と簡単に答えて、世界中がなんとなく納得した格好になっている。人生なんてそんなもので良いのだらう。ともかく、山登りの最中、テントの中、風呂の中、歩きながら、我々は山での歌が一つの生き甲斐でもあつたのだ。

(昭和五二・十・三〇記)

署のトラックに乗つて、私だけはじめでたい式に列席する親代わりの老人らしく運転台に乗せてもらつて、小樽内川の車道のいつもながら目の覚める様な紅葉の山々を送迎しながら、私はつきることを知らぬ回想に耽つていた。

十五年前の山岳部の十周年の記念祭の折には、北大でJACの木暮会長を招待して中央講堂で盛んな講演会を催し



ヘルヴェチア・ヒュッテ

東 見

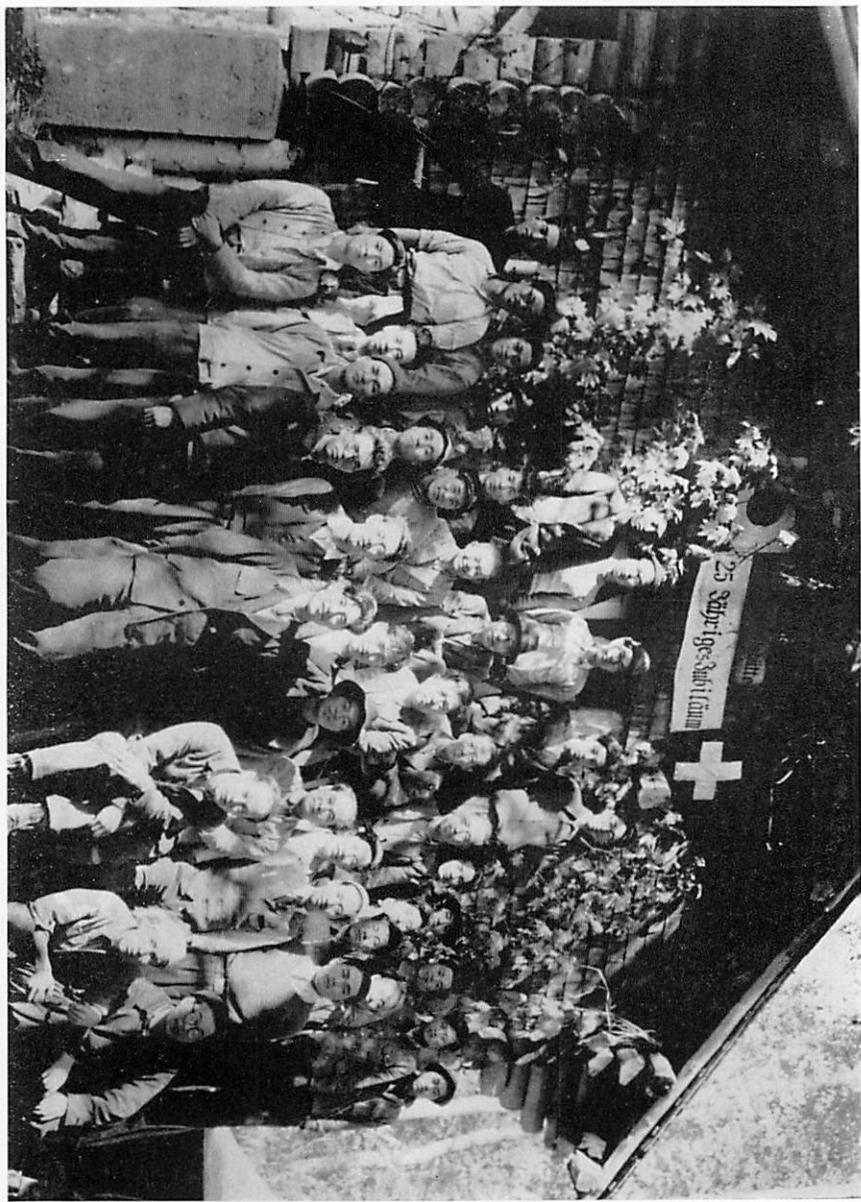


北日高ルペンペン山付近のキャンプ



五月の限三池付近

今村昌耕



二十五周年ヘルヴェチア祭

たのであったが、時期が悪かったためか、小屋の方の祭りの記念写真には木暮さんの顔が見当たらないのである。

次に五年前の二十周年の時には、好運にも忙中閑を見出した松方会長を迎える事ができて、同じ紅葉の道を同じトラックで小屋へ往復した。

その日は天気も悪く、夜はランプに石油もなく、乏しい蠟燭の火も消えた真暗な小屋の中で、部員たちは姿の見えない松方氏の声に耳を傾けた。その力強い若人への示唆の言葉は、実に当夜の、物には乏しくとも再興の希望に満ちた祝典への豊かな贈物であった。

本年の祭典も五年前のそれとの良い均衡の為に、再びJACの会長を迎えたいと熱望したのであったが、外的事情のために実現を見られず、ヘルヴェチア即ち瑞西小屋の二十五年祝典に、「グリンデルワルドを第二の故郷とする」への姿を見られなかったのは残念であった。

二十五年前即ち一九二七年の七月下旬に、小屋の建設のために銭函峠の夏路を登って行った縦列は次の少数の人々から成っていた。

ヘルヴェチア側は建築家マックス・ヒンデル、福島高商のドクトル・ワーゼル。日本側は恵庭村の旧土人水本等三名、新土人は私の他に植田、徳永、加茂の学生の三君、即ち三

つの人種を代表する九人の人である。

恵庭村の水本小利治はヘルヴェチアヒュッテの建設の恩人である。彼の血の中を流れる抑えることのできない自然への本能的愛情が五十五日にわたる困難な山上生活の精神的支柱となったのである。彼は千歳川の沿岸で並ぶものがない丸木舟作りの名人と言われ、ヒュッテのくり抜きの流し、恐らく小屋と共に不朽の寿命を保ちそうに思われる丸木の流しは彼の造船術の余技に成ったものである。

彼のつれてきた仲間の一人は、村で「はびろ」使いの名人といわれ、白樺の丸太小屋の仕事の為に水本が選んで連れてきた男であった。

白樺の樹幹は、林内の立木としては蠟燭の様に真直にみえるのに、材として見れば必ずひねくれ、コルク抜きのように螺旋を描いているものだった。ゲエテの植物変態論の中にその第二の「成長原理」である「螺旋的成長」の代表者のひとつとして白樺の幹が例に挙げられ、その性質のために到底建築材として用をなさないと記されているのを私は後に知って、ベチュラ嬢の美しい容色に誘惑されて、我々が散々にその不良性のために苦勞した事を想起したのである。

立木の白樺を伐採して小屋の建設地点まで運ぶのは、瑞西のドクター及び北大の学生たちの仕事であったが、その

丸太から小屋の壁体の材とする為に、二つの平行の面を削り落とすのがこの男の任務であった。その名の由来する大斧を真向から振り下すと、彼の足で、踏んで居る樹幹から白い大きな木片がビッケルの打撃で飛散する氷片の様に遠くへ飛んで、見るものの肝を冷させた。

水本はその種族の名替ある伝統を承けて、すぐれた狩猟者であったが、種族の今一つの名声の方では彼は全然落第者であった。彼の欲するものは鉛の玉でなければ、罪のない鉛製の銃弾で事足りるのであった。それに反して他の二人の仲間はその方の名替にかけても相当の執着を持っており、ことに刃広使いの名人はしばしば名人らしい周期的のど濁きの発作を起こして、翌日は仕事場に姿を現わさないことがよくあった。

「あの人はきつとクリスチャンです。あの人がよく安息日守ります」と、ヒンデル君が「理解充分なる寛容」をもって学生たちに戯れるのであった。

私は長期にわたる山上の「現場」の「帳場」をつとめたから、当時の私の手帳には、工事と生活に必要なたった一切の物資が記入されていた。峠を越えて運ばれた物品の中で、特に特別の強い飲料がその数量で目立っていた。

ヘルレンの側では当時この銘柄の品は用がなかったから、その消費は専ら二人の原住民が引受けたのである。彼

等のような自然人でなくては、林内の二カ月に近い原始生活は到底不可能なことであったし、この仲間のエネルギーとグーテ・ラウネの維持の為に、この生命の泉は絶対の必需品だったのである。

その夏の八月一日の瑞西の建国祭を我々は山上で迎えた。その夜のキャンプの火は特に大きく、ヒンデル君はその日の為の取つときの瓶の栓を抜いて、異邦人の我々と共にこの瑞西最大の祭日を祝ったのであった。

この夜から五年経過した一九三一年の夏に今度は私が、グリーンデルワルドで同じ八月一日の祝日を迎えたのだ。ザミ・ブラバンドの母親が経営していたパンション・ゾンネンベルグ（後にJAC会員御定宿となった）では、これも兄と同じく村の学校教師をしているザミの義弟が三階の屋根の高い棟の上に馬乗りになって、夜天にそびえるアイガーと高さを競わんばかりの意気込みで打揚火花をあげていた。しかし下の村はお客のあまりなかったその夏の他の瑞西避暑地と同様、この夜もひっそりと静まり返っていた。

私は五年前他郷の日本の山上で、たき火の火光で真赤な顔をしたヒンデル君が「世界中の瑞西人の中で我々ほど幸福に今夜の八月一日を迎えた人間があるだろうか」と言っ

て杯を挙げた時の言葉をその時思い出していった。きつとそ

の時、芸術家の創作の歓喜がその脈管の中を渦まき流れていたのではあらう。

今年の祝典はすばらしい快晴にめぐまれ、眩しく黄葉した白樺の円柱に取り囲まれた小屋前の空地には、向こう側が小さく見えるような大円周を描いて、物凄く豪華版のテーブルが配置されていた。この巨材は、上流の橋が落ちて小屋の後の河原に、無償の流木として山積したものであった。但しコンクリートで築かれた橋脚は流れて来なかったから、この空前の大円卓にも脚まではついていなかった。四十余人の文化人は皆太古の姿に帰って、ずらりと円卓の後にうずくまっていた。

林内の日が暮れると、円卓の中心の巨大な焚火が明るくなり、下からの照明を受けた我々の頭上の樹冠の円蓋は、星光の寶石をちりばめた夜天の大穹窿の下に更にその調和と形の純正とで素晴らしい裝飾的效果を持つ木の葉模様天井を作っていた。

二十五年前の小屋のキャンプの火の上にもこの裝飾画の天井があった。何万年この方、森の中で人類が火を焚く頭上には、いつもこの二重の天井があったのである。

地上の円卓の上では、山海の珍味が賑やかな「静物」を作り、部員の特別サービスの強い飲物がその間を流通しは

じめた。その濃度を現わす三十五度という数字が、私の近くに陣取っていた老兵たちの間に、ことに深い感銘をよび起こした様であったが、私にはこれがまた、二十五年の歲月を一瞬に逆転させる魔術の働きをなしたのである。

ああ、これこそその昔のヘルヴェチアの帳場が、何度となく山のあなたの人里に注文しては取り寄せた、あの幸福の泉の水ではなかったか。根性のひねくれた不良少女のベチュラ女史を相手に正面からぶつかって、素直で堅気な小屋の用材として役立つまでにたたき直す困難な労作は、無学な自然人の献身的奉仕によってなされたのであって、これらの自然人の精気の根源として、この三十五度と註された液体が最大の役割を果たしたのである。

小屋の二十五年の祝典に、その四壁に滙いで神の庇護を祈る聖水が必要とするならば、小屋の洗礼の泉の水と同じ液体がこんこんと溢れ流れた此の夜の宴こそは、最も神々の御意にかなった祝祭の形であったのであらう。

この聖水の威力は、次第に円卓の文化人にも働きかけて、その二次的甲殻からの脱皮作用を起こさせ、火光の強い明暗の階調をもって描き出された奇怪な群像は、まさに有史前の森の宴の画題に最適の様相を呈していた。

早く小屋の中に逃避して寝袋に横たわっていた私は、例によってなかなか安眠が得られなかった。しかし、登山の

古典によれば、山上では、往々瓶のガラスを透して内容の液体が減少する不思議な現象があるという。

私にもこの夜は三十五度の液体の蒸気が、ガラスの壁を透して強く働いたのであろう。

戸外の歌声や、舞踊のステップの様な物音が、いつとはなしに私の魂を、遠い祖先の神々の天へと飛揚させてくれた様であった。

ヒンデル君はすぐれた建築家であった。日本にある同君の作品は東京の上智大学、角筈の聖母病院、北日本、北海道のカトリック教会、修道院、学校、住宅等が多数数えられるが、その中で少し変な点があるとしたら、それは建築主の財籟ないし頭腦の貧困が災いしていた場合であろう。

ヒンデル君は日本での自分の建築の中では、ヘルヴェチアヒュッテが一番気に入った作品だと言っていた。

又同君は、建築を作るならば、略ゆく人の喜びとなり、わざわざ回り路してもその前を通りたい様なものでなくては建てる価値がないとも言っていた。

小樽内川上流の美しい白樺の林の内に、自然に在るものの様に立っているヘルヴェチアヒュッテはそういう芸術品の一つである。

今度の大戦の始めに、丁度札幌に来ていたヒンデル君が

独乙宣戦の報を聞いて、急に欧州に帰る決心をもって私たちと袂を分ったときにわざわざもう一度自分の小屋を見て帰る為に、定山溪からあの山道を越えて札幌を去ったのもそう言う気持からであったのだと思う。

私たちはそれ以来、杳としてヒンデル君の消息を聞かないでいる。二十五年の明るい祝典の気分には、一抹の暗い影がさすのはそのこと一つのためであった。

(北大山の会報第二十五号——一九五一——より再録)

ヘルヴェチアヒュツテ建設おぼえ書き

アーノルド・グブラー

建築家ヒンダー コーラー教授の義兄（コーラー夫人の兄）。ヒンダーは一九二三年（大正十二年）大震災の後、来日し、一九三〇年代迄札幌・函館・東京・横浜にて建築に従事した。日本を去ってオーストリアに行き、その地で死去。ヒンダーは一九二七年（昭和二年）に主たる事業にヘルヴェチア・ヒュツテを建築、その際数名の協力者とアイヌ一名が働いた（註一）。

山崎春雄教授（医学部） かつてスイスのチュウリッヒ大学に遊学し、札幌で一九六一年（昭和三十六年）死去した。山崎氏はこの事業（ヒュツテ建設）の中心的存在で、彼は建設のためすべての面で勞した。彼なしには計画は成就し得なかつたと思われる。

イ・オスカー・ワーゼル博士 スイス・チュウリッヒから来日し福島でドイツ語教師をした人。後、一九六六年（昭和四十一年）チュウリッヒで死去。彼は数日間グブラーの代りに建築に参加した（グブラーは一九二七年の夏はスイ

スに滞在していた）。

グブラー 一八九七年（明治三十年）チュウリッヒに生れ。ヒュツテ建築に必要な経費を調達すべく努力した。現在チュウリッヒのキユスナハトに在住。

北海道帝大の学生 ヒュツテ建設に可能な限り働いた。農学部の一学生の尽力はとくに著しかった。彼は第二次大戦で死去した（註二）。

一九二八年（昭和三年）秩父宮が来札されヘルヴェチア・ヒュツテに來られた。

註一、山崎春雄「ヘルヴェチアヒュツテの建設」、山とスキー 第七年（一九二八）二四〇—二四六頁によれば、助力したアイヌは三名である。

註二、同じく山崎によれば、ヒュツテの建設に大きく助力した学生は植田、加茂、徳永の三名で、戦死した農学部学生とは誰に当るかは不明である。

芦別岳北尾根の池

鈴木 限 三

五月中旬と言えば北海道ではまだ寒い。昨十三日の夜札幌を立て夜汽車で午前一時過に慌しく布部の駅へ下車した。芦別岳へ連れて行ってやるとの事ゆえ、早呑み込みには山部で降りるものと思っていたら、真夜中に、うつらうつらしているところを先生降りるんですとの呼声に、夢中でルックザックを肩にして暗黒のステーションに立った。同行五人（石橋恭一郎、福地文平、太田嘉四夫、岩間喜吉、小生）の人影は大きなルックザックにゾンメルシーを二本、暗い夜空に立てて小さなステーションの待合室に入った。

駅員に頼み小さな待合室の長椅子の上に横になった。

微かなるランプが天井に一つ、手荷物扱口の硝子戸の向側には駅員が一人宿直して毛布にくるまって寝ていた。横では嘉四ちゃんが寝袋の中でもう肝を立てて熟睡し始

めた。

北海道は午前三時ともなれば明るくなってくる。駅員の沸かしてくれた湯で朝の食事をすする。

明るくなるにつれて四辺の景色が漸く自分達の位置を判然させてくれた。北海道の汽車線路に有り勝ちの幅二、三〇町の耕地村落を帯の如くに挟んで丘が連続しており、その奥には雪を頂いた山岳が聳えているところだ。

ステーションの窓から見れば、線路を距てて西の方に白雪で被われた連山が見える。よく晴れて、山の巖一つ一つが判然と見え、今日入って行く沢も一目で見渡される。雪の間に黒く抜がる針葉樹の林、その上にスカイラインを区切る岩の崖、真西の稍右手には今日登ろうという一、三四五米の瘤が見える。この山稜伝いに左手の方遙か南に聳ゆる芦別岳へ数日の山旅をしようというのである。

一、三四五米の瘤の北に一つの小さな池が、陸地測量部の地図に載っているのを、諸君は見らるるであらう。恭さんは言う「山上千古の水を湛えて俗人未到の池」。その水を飲みたいというのが我々一行の目的である。

明け放たれた朝の空気のうちを、我々は、歩き出した。疎らに散在するステーション前の民家の間の道を左に、線路を横切って空知川の木橋を渡り、十一号線のところへ出てくる沢に入って行くとういのである。

空知川の川岸には土筆が夥しく生えていた。正面の丘へとりついて左へ左へと沢の入口の方へ登って行った。雨が少しばらばらし始めたけれども、山腹の傾斜地の新らしく拓かれた開墾地には、清新な力の美しさが溢れていた。残された切株と、一草をも根こそぎ取った新らしき土とは、軽疎な土の軟かさを以て、蒔かれる種子を待っているように躍動していた。

開墾小屋の農夫に道を聞いて、いよいよ笹の茂った蝦夷松の原始林へ入って行った。林道があった。エゾエンゴサク、キバナノアマナ、エンレイソウが樹下に咲き乱れていた。溪流を左に、林道を奥へ奥へと進んだ。遂に林道も尽きれば、沢を右へ左へと徒渉し、積雪の残れるところへ来て、ゾンメルシーを履いた。

エゾリュウキンクワが一面に黄ろく残雪斑らの林中に咲

いている。人跡稀れなる原始の森の中に、賑かなる春の奏楽である。心賑かならざるを得ない。

梢を洩るる日光の明るきところで写真を撮った。

この沢の溪流をどんどん溯れば、山上の小池に到るつものところ、午後三時頃に至り、沢は狭まり行手には涼々と雄大なる瀑布の音が聞え出した。谿せまくして全景を見渡すことができないけれども、見上る九天より飛瀑は迸出している。

行手を阻まれ止むを得ず、左手の急傾斜の尾根を登る。

幸いにも小灌木、笹などの密生する崖なる故に手がかり足がかりありて攀じ上る。少し後へになりたる人の姿は見えぬ程の傾斜である。三百米も攀じ上りたるならんか、登り始めた場所などは無論急傾斜のため見えざれども、一つの瘦尾根の上に五人とも立つことができた。

九二〇米あたりのこの尾根より南方を望めば、夕暮れ空の彼方西がかりたる方向へ、椴松樹林帯の谿を距てて芦別岳の奇峰、藍色に聳えて見えた。

この細き尾根の上には椴松の間を縫うて一条の小径が通じていた。村と村との境界線か或は何処へ到る小径にや知るよしも無かった。

意外の阻止ありしも、絶壁登りの思の外に楽しき労力に時を費し、最早夕暗迫り来りしこととて、尾根を少し進み

て右手に低き林中の平地にテントの準備をした。鋸を携へたる Bunch 君と嘉四ちゃん、枯木を倒し、Gamma 君はテントの中に榎松の葉を運び、恭さんは焚火の為に雪中に穴を掘った。穴というよりは立派な塹壕である、これは事物を徹底的にやる彼の精神の恐るべき現われである。盛んに唱うは Bunch 君、伴奏は嘉四ちゃん、献立係は山に入ってはあらゆるものを材料とし、一度は食って見るとの噂のある恭さんである。麓で採って来た土筆も晩飯のお菜になった。暗黒の山中に何物も忘れ、焚火の照らす雪中の森林、十間四方が我等の生くる暖かき宇宙であった。

翌十五日は薄曇りの午前に、ゆっくりとテントをたたみ、割合になだらかなる針葉樹の林を、スキーで進みつつ、山上の小池を目指した。

春の雪の山である。Tannen の林である。雪上に藍色の影の落ちるところ我々の心は楽しからざるを得ない。

Tannen の林を過ぐれば、行手には一、三四五米の真白き雪の山頂が現われた。正午頃、池の辺に着いた。白樺とハイマツの疎生する雪原である。

池を前にしてテントを張った。テントの左後は一、三四五米の頂である。四方は丘を以てめぐらされたる如き池の縁に目的の宿営は始められたのである。

先ずピッケルで池の中央と覚しき辺を掘って、飯盒で水

を汲み上げた。清冽透明、千古の雪の融けたる、未だ俗塵に汚れざる水である。芦別山塊の黄金水である。

貴重の水で飯を炊いた。味噌汁を作った。美味、流石は山中汚れざる池の清水である。

雨混じりの雪が降って来た、風も相当に出はじめ、キャンプファイアの塹壕はいよいよ恭さんによって掘り深められた。テントの入口から見ると、塹壕の中の人は頭も見えぬのである。恭さんは内部の雪を削って腰掛までしつらえてくれる。

今度の山旅の今一つ楽しみは、恭さんの所謂密豆の御馳走である。寒天を飯盒で煮て冷やし、これを賽の目に切り豆を軟かに煮たるものと混ぜ、これに砂糖を煮詰めたる液汁を掛けて食う所謂密豆である。塹壕で食う密豆としては上乘のものである。夜に入って、雨混じりの雪は可成りに強く、塹壕もこれには防ぐよしもなく、早くからテントに入って寝て了った。

翌朝の雲海は素晴しかった。羊皮を肩に掛け、ハイマツの香に浸み乍らテントの口を出る時の空気の透徹さは街中の朝の冷水摩擦などには比すべくも無い健康である。

朝飯の後、天候は回復し、青空が雲の間より覗き始め雪の原は目映ゆくなった。

「オーイ、山椒魚が居るぞ」と池の方から声がする。清



栃内 吉彦

1926-1928

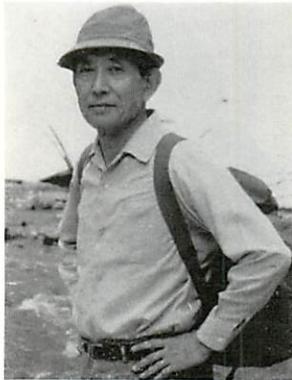
1930-1936



鈴木 限三

1928-1930

1936-1940



伊藤 秀五郎

1940-1944



犬飼 哲夫

1946-1948



奥村 敬次郎

1948-1949

歴代山岳部長



原田 準平
1949-1962



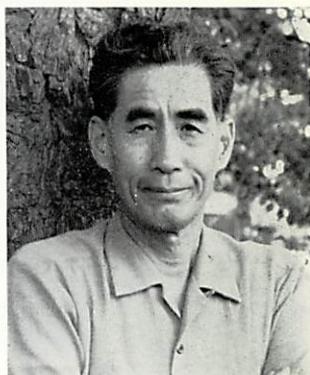
渡辺 千尚
1962-1965



橋本 誠二
1965-1971



東 晃
1971-1973



有馬 純
1973-1978

歴代山岳部長



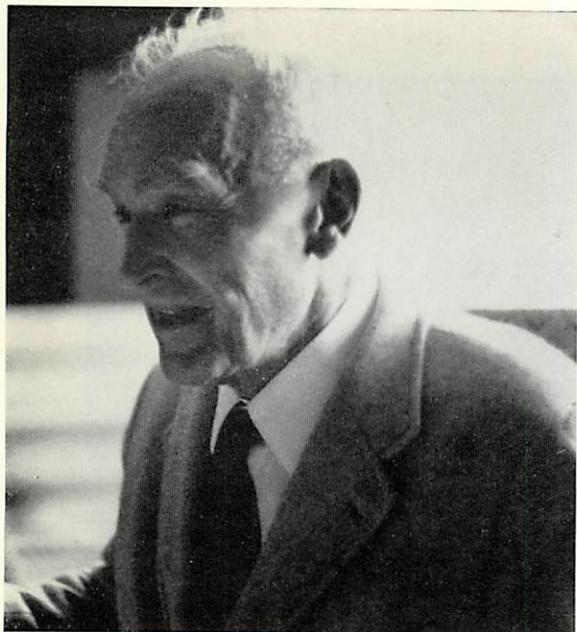
男沢先生一家とベテガリ隊員

今村昌耕



大庭さんの牧場で

松村雄



グブラー先生近影

小平俊平



吹上温泉の飛沢さん

朝比奈英三

冽極まりなき、汚れなき、山中の水は、山椒魚さえも慕って来て居るのであった。

山椒魚のいる池、ただ一匹の山椒魚は忽ち夏のこの山の池畔の風景の全貌を彷彿として眼前に展開させてくれた。

山 好 き の 弁

中学のころ山登りが好きになって、それから二十年の間、私は一日として山のことを想わない日はなく毎日毎日を言わば香氣に暮らしている。私は今こうして五月の札幌の空のもとに住んでいて、最も眼を奪われるのも、藻岩から手稲にかけて石狩平原を西に限って連なる山々の残雪の輝きである。また私がかつての日いよいよ学校の教師として一生を送るべく決心したのも実は山登りのためであって、とても会社などの夏休みも冬休みもない生活は堪らないと思っただけからに他ならない。

部報編集委員付記

この山椒魚の住む山中の池、私達は唯親しみのうちに誰言うともなく『限三池』と呼ぶようになった。そして毎春、残雪の未だ消えざる頃、仲間この池の水を掬むもの、年と共に増している。

(部報六号—二九三八—より再録)

奥 村 敬 次 郎

このような次第で私は来る夏、来る冬ごとに北海道の山を歩き回った。そこではいつも学生が道連れであって、長い間には随分と懐しい学生もあり、色々と思ひ出もある。しかし残念なことに学生というものは何年かすると必ず卒業して皆どこかに行ってしまう。けれどもそこがまた学校の有難いところで、毎年新しいのが、しかもその中には山好きな男も必ず混って次々と入って来る。だからまあ相手変われど主変わらずというような訳で私はいつもそれら若い人々の尻については歩いたのである。そして私は十年一

日の如く山登りをし続けているのである。実際、北海道の
ような自然の環境に包まれて、わが愛すべき若者達とともに
に語らい、共に宿るその幾日かの楽しい山の生活のことを
想うと私はもはや終生山登りを止めることはできない。変
な話だが、私は結婚するとき、「俺は一生山登りだけは止
めないからそのつもりでいろ」と言い渡し、つまりそれ
を結婚の唯一の条件とした。私にはそのころから既に山登
り以外にはこれとて夢見るような未来もなかったのではあ
る。爾来、女房は亭主の山登りのことをどう考えているか
は知らないが、それはこっちの知った事でなく、私だけは
ともかく約束を破らないつもりでいる。

私は何とかして六十までは今までのような山登りを続け
たいと思っている。六十と言うのには理由がある。それは
かつて十五年程前、私は石狩岳からニベソツにかけて十日
余りを歩いた事があるが、その時ついて来てくれたのが成
田という老人で、この人は昔、大島亮吉さん達とも一緒に
歩いたことのある北海道では有名な案内人の一人である
が、その成田の爺さんが丁度六十歳であったからである。
爺さんは私達に「自分ももう六十でこれが最後の山登りに
なるかも知れない。こういう荒山を歩くには、自分は既に
年を取り過ぎている」としみじみ言っていた。しかし爺さ
んはとて六十とは思われない元気で、あのクッチャウ

ンベツからスプントムラウシに越す例の石狩越えの所な
ど、丈なす熊笹の中をどんどん先に立って分けて行く爺さ
んの姿をわれわれはともすれば見失うぐらいのものであつ
た。もっとも、ああいう一生を山野の中で生きて来た人と
私達とは、身体の出来も違うだろうが、それにしても節制
さえするならば自分等も六十位までは何とか山登りができ
るに違いないと私はその時以来固く信ずるようになったの
である。節制などというのはよく凡人の口にしたがる言葉
であるが、そういう人間に限ってそれができたためしはな
い。私も勿論その例に洩れない訳であるが、まあとにかく
六十まではと考え、しかもその上欲なことには、これから
次々と登りたい山など毎日毎日指折り数えて暮らしてい
ると、とても登りきれものではないし、六十まであと二十
年ばかりしかないことが堪らなく淋しく感ぜられる。

さて私はこのように山が好きで今までも少なからず山を
歩き廻って来たのであるが、私は決して登山家というよう
なものではない。登山家というからには少くもそれ相応の
存在価値がなければならぬであらうし、またそれどころ
か私には登山に対して一片の理論も一応の技術も持ち合わ
せがないのである。だから後進を指導するなどは論外で
ある。後進を指導するどころか逆に私はいつも山へ行くた
びに学生達のいかにも大胆な立派な山男振りに驚嘆してい

るのであって、例えば私には目もくらむような恐ろしい雪渓など若い人達はどうどんとかげ降りて行くのにこっちはすっぱり足がすくんでしまおうという具合である。こういう時にはどうにも若い学生に顔向けがならないような気がして私はまず第一に恥かしさを感じ、次にその気恥かしさがある種の勇気を起こさせ、最後にその勇気が私をして恐る恐る前進せしめることになる。

私はどうも犬など嫌いなところを見ると、生来が臆病なのかも知れない。しかし考え様によると、これが今日まで私をして山登りを続けさせた所以であって、この臆病のために私は未だかつて一度のアクシデントも起こしたことはないし、また同行の学生に怪我などさせてそのため責任を感ずる破目に落ちたこともない。

また私は美しき自然に憧れる詩人的素質をひとより多く持っているかというところでもない。このそうでもないというのは、実は多分にひいき目で見ただけであって、それは誰しも自分は美的情操を欠いているなどと、自分で思うものはないからである。しかし考えて見ると多少の経験の違いはあるにしても、美しいものは誰が見ても美しいのであって、登山と詩とを結びつけるなどは錯覚もまた甚だしいといわなければならない。凡そ表現能力を持たない詩人などとは意味がない。自分は山岳渓谷の美しさなど百も承知

しているつもりだが、その美しさを表現する一つの言葉も知らない。

また一方自分には、登山を通じて自然を冷静に観察し得る科学的能力があるかというところ、これも全然駄目である。高原に咲く一むらの花にも山腹に横たわる一塊の岩にも、しばし心を奪われることはある。しかし自然観察などということは、その基本的訓練を経なかった者には実に並々ならぬことである。

以上、私には峻厳なるものを乗り越えて行こうとする気魄において既に欠けるところがあるのだから、おのれはいかに山を愛しているようにとも到底登山家というような代物とはなり得ないことを、自分は身をもって論証したのであって、ここに至って自分のこうした雑文などには青年諸君を裨益する何ものもないことはや明らかとなったのである。しかしまた一方詭弁を弄するならば、こんなものでも読んでくれようというものは、もともと少数の山岳部の学生であって私などが何を言おうが既に気心の知れた仲である。だからもう少し書かしてもらうことにする。

さて高等学校に学ぶ諸君のうちには、例えば登山家と言われるような人達によって代表される精神を夢見ている人はないであろうか。それは理想を追うて峻険に挑む一つの精神である。実際、私といえども若き日にはこのような夢

を抱いて生きていたのであって、だからこそ山登りもしたのであるが、ただ現実はいくらにも無惨であり、理想に描いた山岳が既に感覚の世界に転落して、自分には登山が漸く一つの趣味に墮しつつある。

私のここで言いたいことは、自分もかつては若者らしい情熱をもって自然の懷の中に飛び込んで行ったのであるが、そして確かに山は青春の夢を育ててくれる可能性のあるところに違いないのだが、ただ自分の場合にはそれが単なる可能性に終わったということである。そこでこの可能性の故にこそ、私はどうしても若き諸君に山登りを奨めないう訳にはゆかない。諸君の英才、諸君の熱情をもってすれば山は必ずや青春の高き精神を充たしてくれる永遠の地となるであろう。そして固き友情をもって結ばれ、古き伝統を有するわが北大山岳部にこそは、まさに青春の夢を円やかにするこよなき温床となるに違いない。

私の如き鈍才は論外であるけれども、諸君の山登りがまた若し不幸にして、私のように、途中で志が敗れてしまつて、それが単なる一つの趣味に終るような場合があつたとしても、それで悔ゆることもあるまい。凡人には凡人並みな世の勤めもあるし、そのような男に登山が趣味であつたとしてもまた悪くはなからう。

私は決して自分の趣味などにかこつけて回らぬ舌でおの

れを語っているのではない。それは、私共、よかれ悪しかれとにかくこれまで青年教育の驛尾に付して来たものにとつて現下の国情を考え敗戦後の日本の運命を想うならば、實際涙なきを得ないからである。青年だけにはどうしても卑屈な気持を抱かせたくない。何とかして伸び伸びとした環境の中に心身ともに健やかに在らしめたいというのが私の偽らぬ気持である。そのためには、青年をしてその眼を大空に向つて放たしめ、その身を美しい自然の中に追いやりたいというのがただ今の私の心境である。今年も既に円山に桜の咲くころとなつて、いよいよ山のシーズンも近づいて来た。我々の魂は期せずして早くも日高の山に飛んでいるであろう。

(昭和二十二年五月)

(編者註、本文は奥村先生が、昭和二十四年八月九の沢で遭難される二年前に書かれたもので、戦後最初の「カール」八号に掲載された)。

男沢先生と南札内分教場

有 馬 純

昭和の初期から終戦後数年にかけて、山岳部の主力が日高山脈に注がれていた二十数年間、最も頻繁に登山のルートになったのは札内川であった。それはこの川のアイヌ名が示すように、河原がよく発達してひろびろとかなり上流迄歩き易いことも理由の一つであろうし、この流れの奥に北日高の盟主とも言うべきカムイエクウチカウシ山があり、またコイカクシュサツナイから国境尾根に登れば、北に一八二三米峰、南にヤオロマツプ、ルベツネを経てあのペテガリ岳に至る極めて有利なルートが得られることも理由の一つと言えよう。だがそれらの何れにもまして、男沢先生の居られた南札内分教場の在存を挙げなければならぬであろう。

部報の年表によれば、部員で最初に分教場に寄ったのは、大立目、西田、佐々の三氏らで、札内川の奥深く地質

調査に入った昭和七年夏のことである。続いて八年に坂本（直）、中野（征）、徳永（正）氏が立寄っている。しかし、実際には翌九年一月に坂本、相川（修）、照井の三氏が札内川上流の冬期登山を目指し、分教場に泊ったのがいわば口火となったようである。この年だけで実に八パーテイもの部員達がここにお世話になっている。私にとっても忘れられないのは、この年七月、北大に入学して初めて日高を目指した兄（有馬洋）達のパーティが、エクウチカウシの下山ルートを誤ってコイボクシュシビチャリに下り、予定より一週間遅れて再びとって返し、エクウチカウシに登りなおして札内川へ下った時のことである。リーダーの西村さんとはとも角、当時未だ十八歳だった三人の少年達は空腹にすっかりやつれ果てて男沢先生宅にたどり着いたのであった。このようなわけで先生に関することどもは、こ

の時以来随分と兄達から聞かされたものである。ともあれ、この年から始つて昭和二十六年迄、先生のお宅に立寄つたり、泊めて頂いた部員の数は二百名に近い。しかもこれは正常の山行についてだけのデータであつて、前述の昭和九年夏の兄達の遭難騒ぎ、十五年一月のペテガリの遭難、二十二年夏コイカクシユサツナイ岳からの下山中に起きた花岡八郎君の転落死、二十四年夏札内川九の沢における奥村敬次郎氏（当時山岳部長）の事故死、また大事に至らずに済んだ十八年夏の九の沢カール付近での「仲間にはぐれて姿を消した」事件など、凡そ十五年間に起きたこれらさまざまな遭難事故には、必ず男沢先生のお宅が搜索と救援の根拠地になり、数多くの部員や関係者達が、まさに入れ替り立ち替りお世話になつたのである。

男沢哲先生は明治二十年五月宮城県の生れで、明治三七、八年日露戦争当時海軍に入られた。兵曹長で辞められるまで二十年以上海軍に在籍、軍艦で度々遠洋航海にも出られたという。大正十四年秋三十九歳で退役、翌十五年十月に仙台市から南札内の特別教授場に赴任された。恐らく長男の哲夫さん（山の会特別会員、現在釧路市在住）は当時十歳位だつたと思われる。先生の炉辺談話によれば、海軍を辞めて内地から南札内に来られた時、裏の川（札内川ヒョウタンの辺りか）で山女を釣つたところ余りよく釣れるの

で面白くなり「結局ヤマベに騙されてここに居つくことになつた」とのことである。実際先生は半生を海軍で過されただけに、水に入ることを少しも躊躇せず、流れの深みまでアツという間にザブザブ入つて山女を釣られたという。それほど当時の札内川には山女が沢山いたし、また先生も若かつたのであろう。お酒は海軍で鍛えただけに曾つては斗酒を辞さぬ酒豪だつたようである。勿論札内に来て分教場で先生をして居られたのだからお酒は好きでも酒量は慎んで居られたのだろう。哲夫さんの話では昭和二十八年亡くなられる迄お酒を楽しまれた由である。

私が先生のところ初めてお世話になつたのは昭和十三年七月ヌカビラ川から幌尻岳―新冠川―エサオマントッタベツ岳―エクウチカウシ―札内川の二週間の山旅を終えての帰途の時であつた。羽田、近藤、喜谷、今村（昌耕）ら上級の予科旅行部員の諸君との山行で、初めて歩いた日高の印象は甚だ強烈で四十年を経た今でも当時の山旅の情景の一コマ―コマが鮮やかによみがえってくる。ユクルベシユベを過ぎる頃から、山では消耗していたのに今や里馬力を出して遥かに畑の彼方へ一直線に続く道をひた歩きに歩く仲間。そのあとをマメですつかり傷んだ足を引摺るようにして、懸命に追いすがる自分の目にやつと落葉松の林が現われ、その中に素朴な小さな分教場がそれと判つた時の

欲び。初めてお会いするのに、もうずっと前から顔見知りだったような親しみを覚えさせる男沢先生ご夫妻。当時先生は既に五十歳位だったと思うが、全くの童顔で、その温容、その語る言葉には善意が溢れ、若い私達を強く惹きつけたのであった。風呂を浴びて汗を流し、親切なひるのもてなしを受けてすっかり元氣を取戻し、再びルックを肩に私達は中札内へと道を急いだのであった。あの落葉松の林の門のところ先生ご夫妻と何人かの子供さん達が立って何時までも手を振って送って下さった…。

分教場はバラックに近い平屋の木造で、土壁もない板張であった。玄関の向って右手が先生の住宅、左手が只一部屋の教室であった。そして木の床は、教室も廊下も便所も木目が出るほどよく磨かれていた。永年海軍で訓練を受けた先生が、軍艦の甲板洗いの要領で生徒達にブラシで床洗いをさせたのであろう。分教場のクラスは只一つ、先生も只一人、生徒の半数近くは先生の子供さんと思われた(実際先生は哲夫さんを頭に十男一女の子福者であった)。

あの頃から四十年近い歳月が流れ、先生も既に故人になられて久しい。先生は終戦後、現役軍人を長年務めた廉でページを受け、教壇を五男の千里さん(現在十勝清川小学校在職)に譲られ、悠々自適の日々を過して居られたが、昭和二十八年四月分教場の取壊しを機として哲夫さんの住

む釧路に居を移され、その年の秋に亡くなられたのであった。

もう二十年も前のことになるが、私が冬のベテガリで死んだ兄の遺言に従って、朝比奈さんと二人で九の沢カールに積んだ(昭和十七年夏)ケルンを訪れようと札内川に入ったことがあった。トラックに乗ってコイカク合流に向う途中、私は目を皿のようにしてあの落葉松に囲まれた分教場を見出そうとしていた。しかし、その辺りは一面の牧草畑であり、私達のトラックは一瞬にして過ぎ去ってしまった。この度千里さんからの手紙に「現在南札内は過疎地になり、農家が五戸になりました」とあった。

それはとも角、戦前、戦中そして戦後を通してあれほど多くの部員達がお世話になった男沢先生が、昭和二十八年秋に釧路の哲夫氏宅で息を引きとられたことを、私達は札幌の地に数多く居ながら少しも知らず、従ってまた先生のお葬いの式に参列もせずじつとしたことを今になって申訳なく思うのである。先生の奥さまはもう相当のご高齢と思われるが、今もご健在中札内の八男武さんの下にお暮しと大きく。私としても、もう一度九の沢のカールに積んだ兄のケルンを訪れたいし、もし許されるなら中札内の先生の奥さまにおめにかかり、お礼とお詫びを申し上げたいと思っている。

知床の木下さん

三 角 亭

札幌からの夜行で朝網走に着く汽車がある。早朝の網走の駅で下りて、駅の右側の改札を出、駅前の広場を通り、

国道を渡って網走川にかかった橋までくる。すると雪印の煙突と木下さんの木工場が眼の前だ。橋を渡りおわった所から下り坂をトントンと下りると、そこが木下さんの玄関の前だ。ガラガラッと戸をあけて「ごめん下さい」と声をかけると、「あーらしばらくでしたね」と奥様が現われ

る。そしてひとわたりの挨拶があつて、次はばばちゃんとの挨拶だ。そこでこの夏は誰が来たこと、網走で最近あったことの大体の知識ができる。そのころ、奥の間から大将がお出ましになる。「おお三角か」とのたもうて、洗面。

ここでまた挨拶があつて、その頃には新鮮な魚の煮える香ばしいにおいが鼻をくすぐる。こうしてこの夏の網走地方、網走周辺の湖沼地域から、小清水へ斜里への海岸線、

さらに知床半島へと広がる「知床の殿様」の領国での放牧生活が始まるのだ。

はからずも木下さんについて書くようにとの依頼を受けて、私の頭に浮んでくるのは極めて日常的な、過ぎし日の、年々のフィールドの幕あけを告げる夏の朝のディテイルなのである。

略 歴

明治四十一年二月 網走市緑町一番地に生れる

昭和二年三月 北海道立網走中学校卒業

昭和二年四月 北大入学

昭和二年七月 網走町有志による第一回知床探勝

団と知床を訪れる

昭和三年一月 海別岳（中安靖知氏と）

昭和三年二月 斜里岳（中安靖知氏と）

- 昭和三年十二月 十勝岳合宿
- 昭和四年二月 無意根山
- 昭和四年八月 ウトローテッパンベツールサ川―
国境―セセキ―国境―ルサ川―
ッパンベツ (原忠平氏と)
- 昭和四年十二月 十勝岳合宿
- 昭和五年八月 ルサ川―知床岳―セセキ温泉―ル
サ川 (原忠平氏と)
- 昭和六年八月 硫黄山―ラウス岳 (山本絹次、橋
秀雄両氏と)
- 昭和八年四月 御尊父の逝去により、工学部二年
終了で退学。家業を継ぐ
- 昭和十一年 斜里岳二股小屋の建設
- 昭和二十一年 藻琴山銀嶺荘の建設
- 昭和二十三年 岩宇別小屋の建設。これから十年
間の木下組造材部での施業が始ま
る
- 昭和三十三年 木下組造材部岩宇別事業所の閉鎖
- 昭和三十四年 岩宇別小屋は木下小屋として再発
足
- 昭和三十五年一月 網走市緑町一番地にて逝去
- 昭和三十五年八月 ラウス平に木下弥三吉のケルン建
設

この稿を記すにあたって整理した略歴を今一度眺めてい
ると、やはりその中心をなすもの、木下さんの一生に大き
な方向を与えたのが、昭和四年から五年へかけての、原忠
平氏との知床への旅であったことが想われてくる。木下さ
んのお宅での、ビールを飲みながらのリラックスした晩な
ど、御気嫌になると出てくるのが「忠平との知床」のこと
であった。この時の記録の一部は北大山岳部部報二号にも
あるが、二人は、テッパンベツに滞在して、ルシャ川を根
室側に越え、再度乗越して戻ったり、知床岳に登ったり、
硫黄山からラウス岳への縦走を試みるなど、当時まだ海岸
の漁場に番屋があるだけだった知床の内陸に、縦横に脚を
伸ばしたのであった。昭和三十三年六月、三十年ぶりに知
床を訪れられた原忠平氏は、木下組事業所 (岩宇別小屋)
の日記に次のように記している。

「満洲から帰ってから、知床へ来いと木下君からさそわ
れて十余年、三十年振りにこの地を訪れる機会にめぐまれ
た。自動車道からイワオベツの溪流に下ると、木下造材部
の小屋があった。部屋には二つのピッケルがかけられてい
たが、これを見ろといわれて手にとると学生時代に私が愛
用していたベルンのピッケルであった。学生時代の数々の
思い出が、このピッケルにはこめられているが、ここに、

かざられているとは夢にも思わなかった。数々の山の思い出。その中でも木下君と知床の山を歩いたその思い出はわすれることができない。

知床岬の突端で植物採集に夢中になり、船長から帰れの信号があったのに十五分おくれたために風雨に会い、生き残った思いのしなかったことや、テッパンベツの漁場に泊って知床岳に登ったり、ルサ越してセセキの温泉を訪れたり、長い雨に降りこめられて二十日近くも採集用の古新聞の広告欄まで読まされたこと。硫黄山からラウス岳の縦走。一日に熊一三頭を見る、など。その思い出はつきない。」

この旅こそが木下さんにおける『青春の旅』であったに違いない。

昭和八年、御尊父の逝去に会って、木下さんは学業半ばに帰郷、家業を継がれることになった。戦後昭和二十三年、木下さんは知床に事業の場を求めることになる。すなわち木下組造材部岩宇別事業所の設置である。この間のいきさつについては、これまた岩宇別小屋日記から、昭和三十三年事業所閉鎖当時の木下さん自身の文を借りよう。

「約三十年まえ、原忠平氏と知床の山々を歩きし縁にて、同氏のすずめで敗戦後の昭和二十三年より奥地森林の開発を目指し、ここ岩宇別の清流に臨み造材事業所を建て、森林の伐採とラウス岳への登山者の便を計り十年を既に経

る。爾来幾多の著名なる学者の宿泊ありて、知床の感想を記せらるるは本事業所の光栄でありかつは良き思い出もある。

今本事業所を閉鎖するに当りて、感激まことに深きものあり。されど当所に宿泊せられし方々も時にふれ思いを寄せらるることを信じ、また本書に記せられし厚意を謝す。」知床でのこの十年間は、木下さんがその事業、企業経営へのアイデアを、またその活動力を存分に振った時期であったと同時に、かつての旅の日の夢を、そこに根を下す者としてさらに展げた会心の時代だったのであるまいか。

知床は木下さんにとって事業の場であると同時に、青春の日の夢に秘やかにつながる自由の天地を意味したのではなかったか。

大先生方、知己の方々と共に、私のごとき何の面識もない者も多数押しかけた。またいくつもの学術調査団の蔭のスタンバイもされた。忙しい中、訪れる者に何くれとなく面倒をみながら、木下さんは遠い日に想いを馳せ、その懐かしみを若者に托してでもいたのだろうか。

この木下組造材事業所は、三十四年、北見営林局の肝入りもあって、「木下小屋」として再発足し、今日に及ぶことになるのである。

この翌年、木下さんは出生地と同じ網走市緑町一番地で

亡くなった。

木下さんのお葬式は寺で行なわれた。葬式にはお通夜がある。しかしそのお通夜が本当の意味でのお通夜である葬式には、この頃とんと出会わないのではないか。広い本堂が木下さんとの最後の晩を惜しむ人で一杯だった。虚色の悲しみではなかった。酒が注がれ、花札が開かれ、そして一月の網走の夜を、皆が本当に『お通夜』し、別れを惜しんだのであった。木下さんらしいお通夜であった。

そしてその年、ラウス平にケルンが築かれた。網走山岳会の人達、イワウベツやウトロの人達、そして北大山岳部の後輩も加わった。イワウベツの、かつての氏の天地を見下す処にケルンは在る。その碑文には「限りなく知床を愛し、惜しみなくこれを頌ちあたえた木下弥三吉君」とある。

人の本性には放浪と定着がある。放浪する者は定着を夢見、定着する者はその心の片隅みに放浪の生活への愛惜を抱く。

出生地と同じ地番において亡くなったという近年稀な事実は、木下さんが引受けられた、『定着し人々を受け入れる役割』を想い起させる。常に準備をし、何時でも用意を整えて永年何気なく待っていること。これは何でもないことではない。

訪れる者は全く様々であった。山崎春雄先生にはじまる偉い先生方から、われわれの輩まで、網走を訪れ知床を訪れる者は当然のように木下さんのお世話になった。一度訪れた者は二度、三度と訪れ、常連となった。網走を訪れる多くの訪問者は、その旅の計画を立てる時、木下家に寄る秘やかな楽しみを、その旅の一つの理由としていたに違いない。

木下さんの若者を見る眼には夢があった。かつて札幌で植物学会が開かれそのエクスカーションが網走へ知床で持たれたことがあった。その船での巡検の途中、一日知床半島北見側の浜に上陸して漁場からマスを貰い、即席鍋に興じたことがあった。その時かなたの岩蔭からとぼとぼと現れた一学生があった。きけば根室側から岸伝いに知床半島を一周すべく、知床岬を過ぎてここまで来たのだと言う。岩崖はどうするのだと問えば、通過できる高さまでどこまでも登るのだと言う。浜鍋の一餐にあずかって彼がまた岩字別を目指して消えた後、木下さんは激賞することしきりであった。「いやあ大したものだ。今時の若い者なぞ言うが大したものだぞ」それは自らのエネルギーだけをたのんでの自我のほとぼりへの共感であり、ケレン味ない試みを正面から受止める賞賛であった。

木下さんは古風な人であった。しかしそれを古いと言っ

てしまえるかどうか。地方の一小都市のオールド・ボーイ木下さんの周辺の人脈には何か古くて新しいものを感じさせるものがあった。他人の後を機敏に追う、そういうった、必要のない新しさへの追従は拒否するが、本当の意味での時代の進展には敏感でありたい。そういうった雰囲気は木下さんを取巻く人達に感ずる。木下さんを古風と評することは許されると思う。しかしその古さはこのような古さであった。

先日網走山岳会から会報、創立十五周年記念号を頂いた。木下さんと網走とのつながり、木下さんと知床とのつながりは先ず事業を通じてのものであったけれど、またその周囲にはいつの間にかその夢に染った人達をつくり出していたのかも知れぬ。氏の没後も岩宇別の事業所が「木下小屋」として、登山者のための施設としてのこされていることはすでに述べた。この小屋にいる星さんは、かつて木下組で事業にたづさわっていた方である。またウトロには「知床少年学校」があり、桂田敬二校長を中心とした、私達が夢想しながらなかなか現実とはなし得ない形の活動を展開している。ここに見られる思想と流れがはたして、札幌や東京への追従と位置づけられるものであろうか？桂田さんは網走山岳会の一員である。この山岳会は自由で騒蕩たる雰囲気を持つと同時に、ひょっととヒマラヤに脚を伸

ばしたりする端倪すべからざるところを持つ山岳会でもある。ここにまた私達は木下さんに発する流れの一つを見る。北大山岳部のオールド・リベラリズムは、かくして木下さんという人物を通じて、その一つの流れを網走に、知床に、華咲かせている。札幌を去った木下さんは結局網走から出ることなく一生を終ったが、そこに播かれた種子は、ある意味では古い山岳部の正統的な流れを今なお伝え続けていると言えよう。

豊似川の大庭さん

松 村 雄

私が初めて豊似川を訪れたのは、昭和三十六年の春山山行のときである。高松プー、リーダー以下パーティ六人は元浦川からソエマツ沢を遡って国境稜線に上り、ソエマツ岳、カムイ岳へ往復してから南下してトヨニ岳に至った後、トヨニ川を下った。入山十三日目、山行最後の幕営地をたたみ、久しぶりに人里に出る期待感を胸に秘め、右岸テラス末端に通じた函の上の朽ちかけた古橋を恐る恐る渡った。航空測量以前の古い「上豊似」の五万分の一地形図には、この橋の近くのテラスまで人家の記号があつて学校も載っている。しかし、テラスを進んで見える景色に人影はなく、帯状に植林されたカラマツ林や雪原としてひろがる切り開きは開拓地の名残りを留めていたが、地図上の人家や学校の記号の場所にそれらしいものは見あたらず、ようやく見つけた農家は空家という有様だった。除雪された

道路に出てラッセルワークから解放されるという期待が裏切られて見ると、足のスキーも肩のザックも殊更重く感じられた。ようやく除雪された道に出て人の気配のする農家を見た時は、山行を無事終えた安堵感と疲労感が交錯した。道に面して家の前に積まれた丸太の上に、小柄だが身体つきのしっかりした中年の男の人が休んでいた。会釈すると、陽に焼けた顔をほころばせて、家の上って休んでゆくよう勧めてくれた。遠慮しつつ久しぶりの畳の感触を確かめる私達に、薪ストーブの焚き口に坐ったお爺さんが坐を勧め、活潑で気さくな奥さんが搾りたての牛乳を沸してくれた。女の子一人を交えた子供たちが五人、人なつこそうな様子で私達を遠巻きにしていた。この時はほんのひとときの休息だったが、一家の誠意に満ちた親切と素朴で明るい雰囲気や印象が残った。これが大庭さんと私達の出会いだ

った。

玉石の美しい豊似川と大庭さんの雰囲気が忘れられず、春山で一緒だった高松さん、増山さんと私の三人で、その夏豊似川に入ってヤマベ釣りと同ランブを存分に楽しみ、豊似岳へ登った。大庭さんに一日停滞して六年生の雅敏君の案内で豊似川の川原で釣りをし、遊んだ。増山さんは子供達から「アカさん」の愛称を授かった。アカさんは瀬に遡河するマスを見つけ、服を濡らして追いかけたが取り逃してしまった。飼われている二頭の豊耕馬を放牧場に連れ出して乗り廻し、得意になって撮影のポーズを取った。私達持参のスパゲッティを調理して振舞い、初めて食べる子供たちに西洋ウドンだと説明した。夜はランブの灯の下で焼酎をご馳走になりながらお爺さんの政太郎さんから熊や鹿の話聞いた。焼酎を番茶や蜂蜜で割って飲む方法があることをはじめて知った。政太郎さんの語り口はトットツとしており、主の政之助さんは比較的口数が少なくニコニコして聞いていることが多かった。奥さんの末子さんは陽気で洒落だった。素朴な楽しさに満ちた開拓地の日だった。

北大山岳部で大庭さんを知ったのは私達が初めてではない。昭和二十九年冬豊似川に入った岡本パーティが最初であり、その当時最奥人家だった仙道さんに泊っていたのを

夜一杯機嫌の政之助さんが呼んできてご馳走したという奥さんの懐古談に、岡本、森両先輩の名前が出るので、両氏にその時の事を伺いたいと思っていたが、機会を逸している。部報の山行記録を調べて見ると、私達のパーティが入った昭和三十六年以降四十四年までの九年間に一〇パーティが豊似川に入っており、そのほとんどが大庭さんに立寄ってお世話になっていることを知り、改めて山岳部が大庭さんと深く関わっている事を悟った。

記録の中で傑作なのは、札内川で遭難した故山際君が「大庭さんに打撲を馬の薬で応急処置してもらおう」というのがある(一〇号一七二頁)。山行で大庭さんへ寄ったのが動機となって地質学卒論テーマに豊似川を選び、大庭さんをベースにして歩いた末、養子みたいな付き合いをしているのは現在チリ在住の吉田克人君である。山行以外の機会に部員が個人的に立寄ってお世話になった事例も多らしい。私自身、旅の途中、よく帯広で迂廻して広尾線に乗り換えて大庭さんを訪れ、豊似川の自然を楽しんだ。

大庭さんの家は豊似市街から一二キロメートル入った中豊似(地図上では上豊似となっている)にある。東を除く三方が日高山脈の出尾根に取り囲まれた幅二キロメートル足らずの細長い堆積地であるので、日照時間が短かく農作には厳しい条件である。お爺さんの政太郎夫妻が秋田県

横手から開拓団でこの土地に集団入植したのは昭和五年のこと、政之助さんは当時一三歳だった。奥さんの末子さんは東京で生れて娘時代を旭川で過し、昭和二十二年政之助さんにお嫁入りした。入植当時の中豊似の農家戸数は七〇戸程あったが、厳しい営農条件に勝てず、離農する農家が多く、現在では一三戸に減ってしまった。大庭さんでも幾度か岐路に立たされ離農を考えたことがあったという。

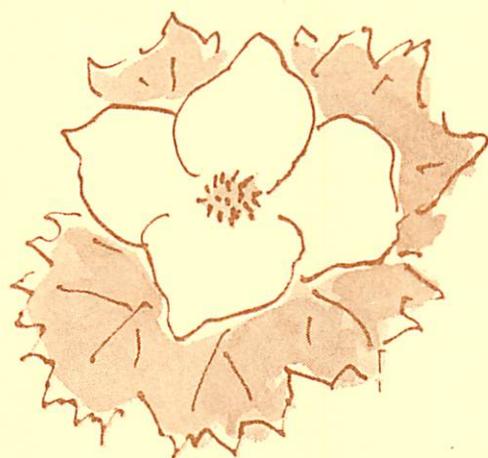
初めて訪れた頃は乳牛が数頭しかおらず、発育盛りの子供達を抱えて最も生活の苦しい時代だったのだろう。私達も大庭さんの生活が決して楽でないことを感じ取ってはいいたが、学生の身勝手さの故に自分達のスケジュールで前触れなく立寄ったのだが、いつも心暖まる歓待を受けた。末子さんは述べ懐した「今度山岳部の人がある時までには部屋を建て増そう、今度はサイロを造ろうというように、皆さんが訪ねて下さることが私達の生活の励みになったんです」と。

苦勞の甲斐あって、現在では下手の離農農家の土地を買い取って大庭第二農場とし、そこに乳牛五〇頭余りを飼育して、政之助さん（現在五六歳）、長男雅敏君（二八歳）、三男誠君（二三歳）の親子三人で酪農経営を軌道に乗せている。今夏訪れた時は、牛舎に真新しい自動搾乳装置が取り付けられていた。

三十年代の豊似川は、大庭さんの家を過ぎると、やがて車道が切れ、かつて二股までつけられた造材道は廢道と化してフキやイタドリが繁茂する所となっていた。しかし、現在は豊似市街から、当時大庭さんの子供達に通った分校のあったカムメロベツ川との合流点の橋のたもとまで舗装されており、更に上流へと道路整備が進められている。朽ち果てて物騒な木橋の掛けていたテラス上手の函には、新しい永久橋が掛けられ、二股まで林道が開通した。

日高側のメナンシユンベツ川上流域でも道路工事が行なわれており、いづれ国境稜線の山腹を掘削してトンネルを造る計画がある。完成すれば帯広と浦河、苦小牧を結ぶ最短ルートとなって、中豊似も大変便利になることだろう。そうすれば大庭さんの家の前を長距離トラックや本州ナンバーの車が引きもぎらず通過することとなり、あの美しい玉石の豊似川の清流と山の靈氣に包まれた静けさが過去のものになってしまうのかと思うのは第三者の身勝手な郷愁というものだろうか。

隨
想



冬山合宿中の思い出

犬 飼 哲 夫

昭和十三年、冬の十勝岳における山岳部の合宿中の出来事であった。十二月二十四日に三年班の一つが、富良野岳の頂上近くで、新造の天幕のテストを兼ねて高所露営練習を行った。学生の猿丸、中野（綽名ゴマシヨオ）外一名と私の四人が同じキャンプに泊った。その夜は割合に穏やかで、キャンプの入口にローソクをともした風情は、入口の雪壁の反射でまことに美しく、一同は子供のように喜んだ。特に夜明の景色はかくべつで、晴れ渡った空に十勝岳や上ホロカメットクの真白な峯々が画のように浮んでいて、一同は天幕からとび出して感激のあまり絶叫した。翌日は富良野岳を滝谷より直登して、意気大いに上った。

さて、その次の日は連日の活動でやや疲労していたにも拘らず、ゴマシヨオらの班は元気に任せて合宿地の吹上温泉から最遠距離にある美瑛岳のアタックに出かけた。午前

中はややおだやかな天候だったので、美瑛谷より美瑛岳の直登をめざしたが、時間切れで頂上直下で引返した。しかし午後からは荒れ模様となり、この山のお定まりの悪条件の西北風に吹雪をまじえた風に向って合宿に帰るのだから最悪のコンディションになった。果して、午後四時半の帰着時刻には姿を見せず、真暗な七時になって捜索隊を出すことになって、数名の元気な者は懐中電灯をかざして泥流を横断して美瑛方面に向った。一方、森林のはずれの泥流の高い所に、後で営林署に謝罪することにして山のような焚火をした。八時頃になって、吹雪の中はるか向うから懐中電灯が見え出し人声も聞えて来た。急ぎ馳せつけると、ゴマシヨオがすっかり消耗してスキーをはいたまま仲間を抱えられてへなへなになって歩いて来た。

この年の合宿医の金光君が彼を見るなり、全身凍傷だ休

まずに歩き続けろと命令した。ゴマシヨオは時々休ませてくれ、スキーをソリにして乗せてくれと訴える。然し、金光は絶対休まずな、時々叩けというから頬を叩くとゲラゲラ笑って少しも痛がらず、そうかと思うと突然ああい景色だなあと行って、昨夜のキャンプのことをいい出し、精神が乱れて来た。過労と寒さのための全身凍傷の特徴がはっきり出て、皆で休ませたら死ぬから、いじめるだけいじめて合宿まで連れもどせといいながら、引きずるようにして九時過ぎ吹上温泉に着いた。そこで金光君のいう通りにして、屋外の物置に入れ、真赤裸まっぴんぼろにして席の上に寝せ皆で雪でワッショ、ワッショとこすった。十五分程したら冷い助けてくれと叫んだ。その時、金光はもう命は助かったと

冬期登山のはじめ

日本の近代アルピニズムの道を開いたのは、日本山岳会の創期の人々である。しかしその登山は日本アルプスとい

宣言した。われわれは思わず手を止めてポロポロと涙を出して泣き合って喜んだ。ゴマシヨオはこれで手の指先を凍傷しただけで一命をとりとめたが後に応召して、ガダルカナルで戦死してしまった。

私はいくたびか山岳部の合宿に参加したが、ゴマシヨオらと一緒にすごしたこの時の思い出が一番強く印象に残っている。

全身凍傷の時は、その当人は無感覚でむしろ快適になり、いろいろな幻想がおこり、一寸休んでも天国に行ったような気分になるというが、この事件の二年程前銭函峠で十二月末に一人が凍死した北大青年寄宿舍の予科生の一行の話にもあったことである。(一九七八年五月)

加 納 一 郎

われる中部山岳地帯が主であって、一九一〇年代には、北海道には、登山のための登山というものはなかった。まだ

開拓のことに急で、山岳地では、満足な地図もできていなかった。この時分に、上川中学（旭川）の教諭であった小泉秀雄氏が、中央高地すなわちいまの大雪山系一帯にわけ入って、パイオニアとしてのすぐれた業績をのこされた。その成果は『山岳』の第十二年二、三号に輝いている。

夏だけに限られていた日本の山登りを、冬にまでひろげたのは、スキーを覚えた学生層であった。それは早稲田、慶応、学習院、京大、東大などのスキー部、あるいは山岳部、旅行部であった。そのころ北大にはまだ山岳部はなかった。山もスキーもひっくりかえり、スキー部の活動範囲となっていた。スキー部としては、はじめはむしろ山の方がおもしろかった。エゾ富士はもとより、ニセコアンヌプリにのぼり、芦別岳、十勝岳にのぼって冬山の可能性を、ぐんぐんひろげていった。日高山脈に、はつ道を開いていったのは山岳部になってからである。

日本の冬山は、これら学校スキー部およびその出身者によって開かれ、北海道では北大が、本州ではまゑに記した諸大学が中心となって、初期の業績を冬ごとに高めていった。もっともそのほかに、京都府立第二中学校の校長であった中山再二郎さんらの関西スキークラブの人たち、それには田中喜左衛門さん、中野忠八さん、山口季次郎さんなど町の有力者、つまり旦那衆がおられて、伊吹山を中心と

して活躍され、日本アルプスの冬の登山にも第一歩をふみ入れていった。このことは特に注目しなければならぬのであるが、小川勝次（のちにスキー連盟の会長になった）著の「日本スキー発達史」には、一言もふれていないのは大きな手落ちである。また東京では、オーストリア人のウイソクラーなどの在留外人が、五色温泉などでスキーをやっていた。この人たちから刺戟をうけたなかには、松方三郎、板倉勝宣といった人々（学習院）があった。

学習院には旧制高校にあたる高等部までしかなかったの
で、松方さんは京大へ、板倉君は北大に來た。板倉勝宣と
いうすぐれた登山家をむかえた北大スキー部では、北海道
の冬山の開拓にひとときわ高い活動力をしめし、十勝岳、芦
別岳、旭岳、黒岳へと、新しい道をもとめて、登頂の記録
をたてていった。板倉君はまた日本アルプスでもパイオニ
アの道をひらいていった。日本アルプスの冬山のはじまり
については、すでに書かれたものがあるから、わたしがく
りかえすまでもない。ここでちょっと京大と北大の縁故に
ついて記しておきたい。

松方―板倉の線で、両大学の山ずきがつながったばかり
でなく、ちょうどそのころ、京都大学に農学部ができるこ
とになって、北大からスキー部長であった植物学の並河教
授と、スキー部のジャンプ競技を指導された遺伝学の木原

均さんが、京大教授となられたことから、京大と北大の山とスキーの仲間の交際は、いっそう密接なものになった。もっともそのころ京大には、スキー部も山岳部もなく、旅行部という名であったと思う。たしか並河先生は、そこでも旅行部長をひきうけられていたと記憶する。のちに京大学士山岳会（AACK）として世界的な活動をされた人々も、並河、木原両先生から北海道的な所産をとりいれながら、京大として独自の業績をつんでいったのである。

日本には、立山の室堂をはじめ、富士、御岳などには、古くから登拝者のために宿泊用の山小屋がもうけられていた。近代的な登山がはじまってからは、いわゆる日本アルプスの各所に、営業小屋がつくられた。ところが北海道では、夏山の登山が大そうおくれしていたせいもあって、営業小屋は今日でもほとんど存在しないのである。北海道では何ごともそうであるように、役所の施設が先行する。すなわち、旭岳や黒岳の小屋は国費でつくられたものであり、中谷博士が雪の結晶の観察をはじめた有名な白銀荘（十勝岳）も営林局で建てたものである。

ところが、日本でヨーロッパにあるような山小屋が最初に建てられたのは、実は札幌の近郊の山々だったのである。それは北大スキー部の十五周年の記念に、手稲山の中間にパラダイス・ヒュッテができたのが最初で、つづいて奥

手稲にヘルベチア・ヒュッテが立てられた。スイスの建築家マックス・ヒンダーさんの設計になる丸太作りの、ししゃれた山小屋がエゾマツ、トドマツの森林の中に、学生たちの手でできあがったのであるから、大そう注目をうけた。秩父宮さんがその小屋まわりをやって、自分も一つほしいと、御料林であった空沼岳の林中に空沼ヒュッテをこしらえさせるというふうで、ヒュッテというドイツ語が、たちまち日本語化してしまう勢いであった。もちろん、このようなグループ・ヒュッテは、スキーの盛行とともに、本州の各地にもつぎつぎ出現していった。あぜくら造りの小屋の中は、ほし草をしいた二段ベットになっていて、大きな薪ストーブがとりつけられ、天井は高い。そんな小屋は、石づみで、なかはうすべりが敷いてあるくらいの旧来の山小屋から見ると、たいそうハイカラで、原始林のなかの小屋から小屋へ、スキーをはいて泊り歩けるのが、うらやましがられたものである。

（わが雪と氷の回想、昭和四十四年八月朝日新聞社刊より）

北大山岳部と私

原 田 準 平

私が北大山岳部とかかりあいをもったのは昭和八年の二月である。昭和六年北大の理学部に赴任して、その冬からスキーを始めた。そしてスキーは基本から練習すべきであることを悟った。昭和八年冬北大山岳部の十勝岳スキー合宿に参加し、初年班でスキー練習を基本からやった。

昭和八年から十年間毎冬十勝岳のスキー合宿に参加した。冬中は札幌付近を出来るだけスキーで滑り廻っていた。札幌周辺の山はもとよりニセコ方面にまで足を延ばした。太平洋戦争以前の大学の教師は暮には雑用に煩わされずスキーを楽しむことが出来た。戦争に入る頃よりスキーをする時が制限されてきた。

終戦後昭和二十四年山岳部長になって欲しいという学生幹事の申し入れを受けた。北大山岳部は私の出身中学（横浜の神中）の後輩であるが山については大先輩の伊藤秀五

郎君の創設したものである。そして歴代の名部長の後を継ぐことは一寸気がひけたが、考えた末引きうけた。部の運営は学生に任せ、部長は問題が起きた時、行動することにした。それをよく学生諸君は実行された。感謝している。

昭和三十三年十一月理学部長になることになったので、山岳部長退任の希望を申し出たが、部からは承認されなかった。そして昭和三十七年三月北大を定年となり、新設の旭川工業高等専門学校長に配置換えとなった。それと同時に北大山岳部長をやめた。

山岳部長として責任のあった昭和二十四年より三十七年までの間に三十三年冬十勝岳のスキー合宿中に起きた遭難が唯一つの悲しい思い出である。しかしこの時、学部長になりたてで十勝岳の遭難事件を処理するため現地に急行した。帰学した所、新学部長は三日も留守にし学部長代理を

置かなかつたと同僚からお叱りうけた一幕もあつた。

これとは別に北大初めての海外遠征が計画され、北大ヒマラヤ遠征隊が組織された。出発することになった時は山岳部長として出来るだけの協力をした。チャムラン登頂の壮挙に成功したことは実にうれしかった。今になつても忘れることができない。

旭川の校長宿舎に現役員やOB部員が押しかけて来て泊っていったり、日高行の途中廻り道をし、旭川に来て食糧の一部（主として酒類）を調達して行つた部員もあ

つた。

私も来年八〇歳になる。思い出はつきない。北大山岳部の今後の発展と、山を愛し山に登る部員並びにOB諸君の健勝であることを祈っている。

北大山岳部の一員に加えられ最後に山岳部長となつたことを私は心から感謝している。

最後に私は山男の終着駅として山を見ながら眠ることができる様、友人と一緒に富士山麓の靈園を選んだ。

創立夜明け前の思い出

渡 辺 千 尚

わが山岳部創立当時はスキー登山がようやく盛んになつて、悲壮な覚悟で決行したスキーによる手稲山初登頂はもう昔話になつていた。だがヒマラヤ、北極、南極が身近に感じられる昨今から見ればまだまだ神話、伝説とも思われ

るようなことが残っていた。当時の冬季登山は麓の人家や温泉からの日帰り直登が常道であつた。そして深い山になると山中の駅通や造材飯場を利用するのがせいぜいで、未だ雪上キャンプは行われず、厳冬期の山岳縦走などは思い

もよらなかつた。現今では冬季のキャンプは大したこと
は考えられないが、全く経験がなく、ろくな装備もなかつた
当時としては皆目見当がつかなかつたのは無理もないこと
とであつた。聞くところによれば私が予科に入学する前に
恵迪寮旅行部で、雪の中庭にテントを張つて、有志が実験
動物となつて一夜を明してみたという。このような今にし
て見れば笑い話ともいふべきことが、後年になつて厳冬期
における日高諸峰の初登頂や大雪山系の縦走など、わが山
岳部の活躍につながつていたのであるまいか。

冬季登山にキャンプが次第に登場するようになってから
も、当初のキャンプは今日のように決して手軽にできるも
のではなかつた。だんだん水気を含んで重くなつてくるテ
ント、重くて、かさばるトナカイのシュラーフザックをは
じめとして、キャンプ用具は重いものばかりで、運ぶのに
苦勞が多かつた。しかも設営に費す勞力や時間も馬鹿にな
らなかつた。それで簡単な小屋を予め建てておいて、これ
を使用して冬季登山に成功したことがしばしばあつた。

このような小屋の構想は山岳部創立以前からあつて、私
が予科に入学した年（一九二五）の秋に恵迪寮旅行部が中
心になつて、札幌近傍の山に小屋を試作することになつた。
たまたま北大スキー部では手稲山の中腹の通称パラダイ
スとか雁皮平と呼ばれるところにわが国で最初のスキー

ヒュッテを建設することが決定して、その準備をすすめて
いた。昨今スキーヒュッテは雨後の筍の如く国内にたくさ
ん建つて、決して珍しくはないが、パラダイスヒュッテの
建設はスキーの殿堂として、大きな期待をもつて迎えられ
た。まだスキー部員であつたわが山岳部の連中はその建設
に協力を惜しまなかつた。しかし私にとつてはパラダイス
ヒュッテよりもわれわれ山の仲間達が試作した小屋の方が
はるかに思い出深いものがある。

いよいよ手稲山に待望のパラダイスヒュッテが出来るとい
う前のシーズン（一九二五）に恵迪寮旅行部が中心となつ
て、建設予定地付近に予備ヒュッテ（？）を試作すること
になつた。今から見れば笑い話であるが、自分達の手で
作つたヒュッテに泊まることのできるというので、相当張
り切つて準備をすすめた。私などは予科に入学したばかり
で、まだ一度もスキーを滑つたことがなく、これから雪が
降つて、青山温泉のスキー合宿に参加してスキーを習つて
から、はじめてこのヒュッテに泊つて滑るという段取り
で、先輩連とはまた違った感激があつたわけである。「予備
ヒュッテ」といえば人聞きがよいが、立木を倒して骨組を
作り、笹で屋根をふき、周りを笹で囲つた掘立小屋に過ぎ
ないものであつた。

雪のまだ来ない土曜日、笹をはじめいろいろな建設用具

をかついで、軽川から登る図は山窩のセブリの建設もかくやと思わせる情景にほかならなかった。現在パラダイスヒュッテのある地点のやや南方の、われわれが「水呑み場」と呼んでいた場所にテントを張って、沢のほとりに、ヒュッテを建てることになった。二日間の労作の後に完成したヒュッテを後にして千尺高地に下った頃は、秋の日は暮れるのが早く、遠く暑寒別連山が石狩湾をへだててかすかに浮び、折よく出た月に石狩川が光っていた光景は今も忘れることができない。

やがて学期試験も窓外の雪を眺めて、上の空で受け、夜ともなればこっそり林学スロープにぬけがけの功名を競った。青山温泉の一週間にわたる猛烈なトレーニングに初めて山野を滑る術を会得した。そして札幌に帰ってからも早く新設のヒュッテに行けるように（初身者はなかなか山へ行く許可が得られなかった）円山スロープに日参した。

ようやくヒュッテ行きの許可が出て、トナカイのシュラーフザックにリュックをふくらませて出発した。アザランのなかった当時はヒュッテにたどりつくまではなかなかの行程だった。雪に埋れたヒュッテの入口を掘って中に入った。テーブル、ベット、ストーブもなく、テントの中と少しも変るところがなかったが、われわれの喜びは大へんなものであった。ドライの食事後（山へアルコール分の持参

は御法度であった）の話題は完備したヒュッテのことや、山、スキーのことなどで止まるところがなかった。ヒュッテは雪に覆われ、更に谷間のため風もなくとても静かで、やがて各自のシュラーフザックの中に、遠くアルプスのヒュッテに思いをさせて眠りに入った。この夜はかなり荒れたので、寮に残った連中は心配して、翌朝一番の列車で急いでヒュッテを訪れた。ところが驚いたことにヒュッテの中は余りの寝心地のよさに、まだ情眼を貪っているていつらくであった。これに味を占めて、そのシーズンにはしばしばこのヒュッテを利用して粉雪を楽しみ、また新しいスキールートを開拓することができて、完備したヒュッテよりもはるかに思い出深いものがあつた。

付記 手稲山に試作した小屋についてはすでに北大山の会

会報第二十五号（一九五一）に書きましたが、また再びこ

に取り挙げました。

山小屋のピッケル

原 忠 平

私は中学時代から山が好きで、特に東京に近い奥秩父は四季を通じて出かけていた。秋の甲武信の東沢上りや、正月の甲武信から金峯山の登頂は、今は亡くなった日本山岳会の神谷恭さんに連れていってもらったものである。そんなわけで北海道の山はあこがれのまどであった。

私のクラスからはダブさんと宇敷君が北大に入り、中学からは岩垣君や外に二人入った。私は南寮の四十一号に入られて、室長は山健さんであったが、この部屋に入ったものは何をやっても「しじゅう一番」でなければいけないと訓辞を受け、それを守って私は頭から数えてもおしりから数えても一番で卒業したことをほこりに思っている。つまり昭和六年五月に卒業したのであった。

その頃山岳部は南寮の三十号が中心で、四十一号、四十二号にも部員がいた。三十五号には田中のコイさんや宮沢

のベコ、須藤の宣ちゃんや野中君がいた。つなげたベットの上でチョン(花がるた)をやっていた。自然にお茶くみは新米の私が当番で、学校の講議時間のあいた先輩は一階の四十一号の窓から入ってくるので、四十一号や三十五号のルームで小使いをやる私は講義に出る暇はなかった。もっとも私もその方が好きで教室に出た時は留年者と間違えられた。

しかし山にはよく出かけた。当時山日記をつけていたが、年に一二〇日は越していた。冬期石狩岳の登山が残されたプログラムで、そのため、石狩川を遡行するか、大雪越えをするかが問題になって、大函が冬期凍結することが確認されてからは、石狩川の上流に食料基地を作ることがきまった。今のバスで大学平というのがそこで、夏のうちに小さな山小屋を建てて食料基地を作った。冬に入って

大函の凍結がおくれ、一時は駄目かと思つたが一月九日に凍つたという電報が入つて遂に登頂に成功した。

石狩岳の冬期登頂が成功してからは、登山の目標は日高山脈にむけられたが、私は北への魅力にひかれて、天塩岳からクマネシリ、武利、武華から斜里岳へと歩いて、いよいよ知床への意欲がつのつていった。知床には二カ年継続して、約二週間位づつ出かけたが、最初の一年目はテッパンベツの漁場から硫黄山に上り、ラウスのかたでラウス温泉から上ってくるグブラーとムシャとに合流して、ラウスの頂上に上り、岩尾別に下つて網走に出た。ラウス岳のザッテルで雨に三日とじこめられ、毎朝グブラーがインメル、シュレヒトと言つてテントから出てくる姿が、如何にもグブラーらしく今でも手を開いて困つたという姿が頭にのこっている。二年目は知床岬の突端に上り驟雨を受けて死ぬ思いをしたり、知床岳に上ったり、ルサ越をしてセセキの温泉につかたり、テッパンベツの山小屋に一週間もとじこめられて、ドを作つて溪流を上る鱒をとったり、鱒のサシミやホホ肉の天ぷらにもあきて、ザイルをもつてライヌスの玉子をとりに行つたり漂流記的な生活をした。熊に一日、仔熊を含めて一三頭会つたのもこの時である。

満洲から帰つて久方振りに木下君の家を訪れ、館脇先生も加わつて岩尾別温泉の木下君の造材小屋に行つた。大箱

のビール四箱呑んだ新記録も、小屋にかかっていた卒業の時に木下君にあげたベルンのピッケルを見て、一筆よせ書き帖に書いたのもこの時で、あとで知床日記として札幌から放送され、その録音が私の所におくられて来た。レコードをかけるが一番最初にハラチュウヘイという声が出て来て、オッタマゲタのも今は想い出の数々とはなつた。木下君も館脇先生も他界され、なつかしい友だちはだんだんへつてくる。

しかし私を育ててくれた北海道の自然となつかしい友達は永久に私からはなれない。

熊

私の兄が網走の田中三晴様の御宅に御世話になり、知床を眺め、行ってみたいと言ったら、三晴様の御父様が熊が居るから行ってはならんと言われたそうだ。

大正十五年七月須藤宜之助君と知床に行った。彼は石狩岳への途中、忠別岳付近で熊に出会った経験者、私は一度も熊にお目にかかったことはなかった。今度は熊さんに会えるだろうと期待していた。

斜里からボンボン船で漁場に寄りながらウトロに着いた。翌日、人夫大泉幸太郎と岩尾別温泉に向った。道に老人が腰をおろしていた。この先に熊が道をふさいでいる。ガンピに火をつけて、振廻しても動かないので、ここまで戻ってきた、こんどは人数もふえたから行きましよう、と出掛けたが、熊は居なかった。この付近は荒畑、バッタに襲われ、折角開拓した土地を捨ててしまったと言う。その

山 県 浩

為にか、岩尾別温泉も空家だった。空家に一泊したが、それから天幕の中で蚤退治が日課となった。遂に熊さんに会えなかった。

昭和四十二年八月、日本山岳協会の全日本登山大会が知床であった。大正十五年にはウトロから三日目に羅臼岳の頂上に着いた。こんどは羅臼側から一日で羅臼岳を登り岩尾別温泉に着いた。温泉は元の位置だが立派な温泉になっていた。知床五湖は昔の地図には書いてなかった。

羅臼の北鞍部に碑があった。碑文を見たら木下弥三吉君の山道開設をたたえ、「北大山の会」で建てたことが分かった。斜里で閉会式があり、木下弥三吉君に感謝状が贈られた。式には今はない弥三吉君に代り、未亡人、初代様が出席された。初対面でした。弥三吉君は私より一年後の卒業、当時の姿を思い出した。

昭和三年七月日高に入った。日高は熊が多いと聞いていた。札内岳の頂上に着いたら、エサオマントッタベツに続く尾根の上に子連れの熊が居た。待望の野生の熊だ。水本文太郎が杖一本持って、一寸見て来ましよう、と出かけた。そのうちに熊は谷に下って行った。

昭和三年八月、原忠平君、水本文太郎の子息新吉と美瑛岳から十勝川本流に出て、ニペソツ川を溯り、ニペソツに登った。川も小さくなってきたころ先頭を歩いていたら後から熊だと叫ぶ。前方二〇メートルばかり、子連れの熊が逃げて行く。その速いのは驚いた。これでは追いかけるならおしまいだ。暫く行くと、兩岸は崖、奥は滝、崖の入口の左岸から登る。気がつくど踏跡がある。上に出たらガラ場。水のある最後の所で幕営。熊が呼び合っている声の不気味にひびく。あの崖の所で分れ分れになったのだろう。

先年「北大山の会」の仲間とカナダに行った。野生動物が、人なつこいと言うか、ものおじしいと言うか、人が近づいても逃げもしない。立山の雷鳥はすぐ道松の中に逃げこむ。雷鳥が居ると、皆近くまで寄り集って写真をとったが、動かなかった。又道路に鹿が沢山出てきた。皆車をとめて見ているが、驚く様子もない。いかにも長閑な風景だ。鹿は三種類見たが、行き会っても平然としている。熊

には会わなかったが、熊には食物を与えないで下さいと立札がある。

最近熊による悲しい事件を聞く。昔は思いもよらぬことだ。黒岳の小屋の水場に熊が現れ小屋に逃げ込んだら、屋根の上を歩きまわっていたとのこと。水場に忘れた飯盒を嗜って、穴をあけられたのを見たことはある。

カナダでも熊には食物を与えない様にとある。食事の後始末が悪いと人間の食物の味を覚え、人に挑みかかるのではないか。

安心して山に行ける日を望んでやみません。

部と私と

佐々保雄

その頃、北大には理学部がまだ無かったので、私は仙台北の二高に行き、更に東京に出たが、卒業の昭和五年に理学部が創設され、その助手となつて札幌に戻つて来た。以来、昭和四十五年、定年で退職するまで四十年勤めていたことになる。

山岳部の行事に正式に参加するようになったのはそれ以来だが、それ以前にも冬休みには帰省すると、よく誘われて十勝の合宿に参加し、幾冬かを過した。合宿が終つて学生たちは帰つても、残つて正月を過すことも多かった。多くの知人が東京などからやつて来るからだつた。後に日本山岳会の長老になつた藤島さんの毒舌ぶりに驚いたのもそんな折であつた。昼間はそれぞれ仲間はどこかの山に出かけるが、夜は一間に集つて駄弁るのが皆の楽しみだつた。コチコチに凍つた密柑をストープで融かしたり、南部せん

べいをポリポリ噛り乍ら、その山のどこの林間滑降がよかつたとか、霧に巻かれて十勝側に下りかけたとか、山崎先生がポツリポツリ話されるスイスの山の話など、いろいろ話がはづむ。そんなある時、どこかのよその隊がまだ帰つていないと言うので、ソレツと支度をして夜遅くまで搜索したこともあつた。ヘッドランプが連つて森の中に見え隠れするさまが今も目の底に残っている。

ある合宿で部の一隊が雪崩でやられ、初めてその恐ろしさを思い知らされたが、剣沢小屋の雪崩による遭難を温泉のラジオで聞いた時の驚ろきも忘れられない。つい数日前、じゃ元気でと別れた頑健な連中だつた。雪崩では日高のコイカクでの遭難が部として最初の大きな試練だつた。デア・グーテ・カメラートを聞く毎に、合同葬で胸をつまらせたことを思い出す。

部の行事では、昭和二年の三月、トムラウシに直行やダブサン・納所^{ナツホ}たち大ぜいで登ったことが印象深い。根拠地とした俵真布の農家まで、三十軒もの長いアプローチ、夜中に出かけて暗くなって帰った十六時間のアルバイトも、積雪期の初登頂の喜びと銀杏ヶ原の二キロ余の長い直滑降で、十二分に報われた。広い板のような斜面、傾斜は一〇度などで、緩いが、すごいスピードが出てることが雪の飛び方で判る。一緒に走っている左右の仲間と、スゴイなあなどと話し合ったり、傾斜が緩くなって自然に止ったのだが、暫らくはルックラゲで、まだ滑っているような感じがとれなかったこと、長い間寒風にさらされて跨間が痛くなったことなどもまだ覚えてる。

今は樺太と共にソ連に奪われた千島にもたびたび行ったが、予科の独逸語教師アーノルド・グブラーさんが、渡辺成三君と行った昭和五年の北千島行が最初だった。その頃の千島は、夏の一時期に鱈場が所々に見られるだけの、全くの自然境と言ってよかった。打ち続く高い海崖、その背後の火山列、その裾野に咲き乱れる美しい花々、足を踏み入れるのも惜しまれる一面のお花島だった。

阿頼度島には朝早く上陸し登り八時間、頂きで広濶な展望をほしのままにしながらの昼食、岸で待つ小樽丸が、下山せよの合図のポーッ、ポーッと白煙を上げているのに驚

いて、二、三三九米を一気に下山、三時間後にはランチに乗っていた。

この時占守島で会った報効義会の別所一家、その息子の二郎蔵君とは昭和十一年に再訪した時以来親しい友達となり、絶えず消息を交わす仲となる。彼は敗戦後根室に引き揚げて牧場を始めたが、その間に記した北千島の生活実記は原稿紙にして一、八〇〇枚、それでもなお未完だったが、その一部は部のOBの小枝一夫君の世話で、講談社から「わが北千島記」となって出版(昭和五十二年)された事は嬉しかった。書け書けとかねてハッパをかけていた甲斐があったからだ、彼はその本の姿も見ずして亡くなったのは痛惜であった。この原稿の整理には部の先輩初見一雄君が当った。彼も千島に魅せられ二郎蔵君のファンになった一人で、自身「すこし昔の話」の中でこのことを書いてる。

昭和七年の冬休み、いつも十勝でもあるまい、どこか新しく開拓出来る所はないかと、五万を案じて目に入ったのが、今の愛山溪温泉、当時の直井温泉だった。冬は無人なのを、直井さんに頼んであけて貰った。幸いに連日天気恵まれて、そこへ行ける限りの頂を踏んだ。愛別岳の白川尾根とか、旭岳へ行く時越える当麻岳下の鞍部、当麻乗越などは今では通り名になったが、その時に便宜上付けたものだ。その春には部員の村山林治郎君たちも行って連名

で部報にのせた記事に、これらの地名が最初の活字になっている。

この時一緒に行った西田彰一君とは、日高の山に三年続けて入り、樺太の東北山地に一夏を共に過した。三回目の日高での二十日間は八ミリ三巻として残っている。フィルムは白黒でアメがふっているが山中でのいろいろな生活場面が映っていて懐しい。その主役の一人に十勝茅室のアイヌ人水本新吉君がいる。ひげだらけの顔で拾った鹿の角をかざしてニコニコしているのが嬉しげだ。

水本君の父、水本文太郎翁は初期の大雪山や日高入りの案内としてなくてはならなかった人で北大や慶大の連中とよく一緒に歩いている。その息子の彼とは十勝川―石狩川と

歩いたのを最初に、日高の三回や北千島にも一緒に行って貰い、山の生活技術の多くや、山と人間との触れ合いのいろんな場面を彼から学んだ。誠実な立派な男子で、若くして亡くなったが、私にとってのデルス・ウザーラであった。まだ生きていたら、お互に年をかこち乍ら、十勝川の源流などを歩くこともあったであろうに。

こうした半世紀を顧みると、私は心の赴くままに行きたい所登りたい山を巡ったことになるが、それでも、まだまだ行きたい所訪ねたい山が沢山ある。私と同じ年輩の友人や、十勝で一緒に過した人々も、或は遠くに去り或は故人となつて了った。私自身はまだ年に教度、体力に合せた山歩きはしているが、やはり淋しい思いの昨今である。

グ ブ ラ ー さん と 私

金 光 正 次

昭和三年四月北大予科医学科に入学した私達は、独逸語会話の教師として肩幅の広い、がっしりした体格の外人を

紹介された。彼は耳慣れぬ言葉に当惑する私達に、微笑とわずかの仕草を交えながら挨拶した。これがグブラーさん

と私の最初の出逢いであった。

先生が編集した会話の教本に手稲山・朝里岳・余市岳など札幌近郊の山の名が出て来るので、山の好きな人とは思ったが、間もなく先生がスイス山岳会の会員であり、北大山岳部のために銭函峠の奥にスイス風の山小屋を建てられたことを知って、畏敬と共に親近の念を高めた。その頃のヘルベチアヒュッテは出来上ったばかりで、外装や敷地の整理などの仕事が残っていた。私達はその手伝いに行つて幾度かグブラーさんと泊り合わせ、ヒュッテの名の由来や、スイスの山の話の伺った。中でもスイスの山には熊笹がないので、岩場と氷河のほかはどこでも自由に歩けると聞いて、日頃これに悩まされる私達を嘆息させたものである。

予科を終える頃から満州の状況が緊迫し、それに伴つて大学でも軍事教練が必修科目になった。或る時グブラーさんにスイスの大学ではこんなつまらぬことはしないだろうと問うたところ、大学生は教練をしないが、卒業すれば誰でも召集をうけて兵役に就くこと、山岳戦の演習は中々厳しいこと、スイスの兵隊は最新の兵器を装備していることなどを教えられ、それまで甘く想像していた平和の国スイスの実態に触れる想いをした。

昭和六年の夏、グブラーさんに誘われて二人で利尻と礼文を巡った。いまは観光ルートになったこの島も当時は訪

れる人が少く、礼文島の桃岩は麓から足の踏み場もない程高山植物が敷き詰めていた。西海岸の丘でレブンウスニキソウの大群落に出逢つた時、グブラーさんは故郷のエーデルワイスを想い出されたのであろう。そこにうつ伏になり少年のように花に頬ずりしたのを覚えている。私は海が見えなければ高山の気分が味わえるのにと言つたら、グブラーさんは海のそばで高嶺の花を賞でるのは素敵ではないかと反論した。海を持たない国民の情感であつたかも知れない。

その時近くを逍遙していた鳥打帽の男をグブラーさんは指さして、あれは我々を尾行して来たポリスだと言う。満州事変が始まる直前であつたから、警察が外人の行動を監視していたらしい。この男は利尻島にもついて来て、私達が泊つた鬼脇の宿に上がり込み、亭主と話していた。私は我々の身分と旅の目的を説明し、何か不審なことがあるかと問うと、その男はお前達のこととは全部調べてある、余計な口をきくなと鋭い目で私をにらみつけた。翌日利尻岳に登つた時もハイ松の茂みの間からこの男の鳥打帽が見えがくれするのを見てグブラーさんが怒ってしまい、下山した途端に不愉快だから直ぐ札幌に帰ると言い出した。定期船は明朝までないと告げてもどうしても帰る、どんな船でもよいから探して来いと大変な権幕である。ようやくその夜

稚内に行く小さな漁船を探し出し、それに便乗させてもらうことになった。魚臭い船底に寝転ぶと間もなく出港したが、夜半からつった尻尻おろしに煽られて木の葉のように揺れる。船に弱い私も心身の疲れで酔う前に眠ってしまった。何やら騒ぐ声に目をさまし船底から出ると、夜はずでにあって風は治まったがうねりが大きく、尻尻島が波の間に見えかくれている。船はエンジンを止め、かなりの速度で西方に流され、稚内岬が次第に遠ざかって行く。船頭に訊ねると、昨夜のシケでスクリューが故障し、その上漂流物が当って油タンクが破れ油が漏るといふ。これを伝えるとグブラーさんは船底に坐ったまま「マハトロース」とつぶやいたが不安の色はかくせない。午後になってスクリューが回り始め、夕方おそく稚内港に辿りついた。これにはグブラーさんも余程こたえたと見えて、その後逢う度びにあの時は朝鮮まで流されるかと思つたと言われた。

グブラーさんとの山旅は私が学部四年の春、余市岳の近くに小屋を作ろうという山崎春雄先生の提唱で、その場所を探す春山スキー行で終つた。現在の札幌医大の小屋はこの調査により戦後実現したものである。グブラーさんはその年に帰国され、翌年軍服姿の写真に短期召集をうけていると記したお便よりを最後に、私との交流が途絶えてしまった。昭和三十三年冬、私が訪欧した時、ハンブルグ

に駐在中の和久田弘一氏からグブラーさんの消息を聞き、チューリッヒ郊外キュスナハトのお宅を訪ねた。二十三年ぶりにお会いしたグブラーさんは予想したより若く見え、少しはにかむような面差しで話すところなど子科の頃と少しも変ってはいなかった。戦時中の生活、私の従軍経験、グブラーさんの記憶に残る学生の消息、その旅の途中訪れたネパールのことなど話は尽きなかった。これを契機に手紙の交流が復活し、グブラーさんも色々な視察団を率いて何度も訪日され、札幌にも来られた。

昭和五十年の秋、機会を得て再びキュスナハトを訪れた時、グブラーさんの顔に老いの徴しが現われていたが、相変らず御壮健で、秋晴れの湖に映える紅葉を眺め乍ら、互にその後訪れた国や山について語り合った。去年の暮れグブラーさんからアテネのバルテノンの絵はがきがとどいた。奥様と一緒にスマトラのバタック族の民族的調査に行こうとしたが、老齢の故で医者が許さぬので、代りにギリシャに来たと記してあった。私とその近くに居ることを知って計画されたのではないかと思うと残念でならない。グブラーさんは今年数え年で八十一歳になられる。

私は北大山岳部に入部してから現在に至るまで五十年にわたって交際をいただき、多くのことを教えられた。私以上に親密な交わりを続けている古い部員も少くない。グブ

ラーさんはヘルベチアヒュッテを建設したグループの一人
というだけでなく、北大山岳部の創設期の部員に有形無形
の影響を与えた人である。山岳部が存続する限りグプラー

さんの名が伝え継がれることを望んで俟まない。

(昭和五十三年三月ジャカルタにて)

北大山岳部の雰囲気

豊田春満

中学生の頃から少し山を歩いていた私は、昭和四年北大
予科に入學するとすぐ山岳部に入った。かなり頻繁に行な
われる部の会合に出て、先輩達の話に耳を傾けているうち
に、だんだんわかって来た部の雰囲気に私は次第に魅入ら
れて行つた。それはオリジナル・メンバーである秀さんの
影響も大きかったと思うが、知的で精神主義的な理想を目
指すもので、「これが大学というものであり、大学の山岳部
というものだ」と思うようになった。

部員の間ではメンバースhipというものが非常に重視さ
れ、強調されていた。それは単なる資格の有無というよう

な意味ではなく、献身・協力・融和というような、あくま
でも自発的なモラルの意味であった。それは山で遭遇する
であろういろいろな困難を克服するにはメンバーの団結が
必要であり、一方登山というのはあくまでも自発的な行為
である以上、その団結も服従とか義務というような類のも
のではなく、あくまでも自発的なものでなければならぬ
ということであった。

そういうメンバースhipを培うには、山に行つた時だけ
の付焼刃ではなく、平素から部員同志の心の垣根を取
払い、先輩後輩の分け隔てを無くし、互に腹臆なく語り合

う、いわば「刎頸の交わり」をするようにしようというところで、部員同志は先輩でも名前を呼び捨てにし、綽名のあつる者（殆んど全員に綽名があつた）は必ず綽名で呼ぶことというきまりが出来上がつていた。しかし、田舎の中学からポット出の新入部員である私にとっては、仰ぎ見るような感じの先輩の名を呼び捨てにするということはなかなかできないことで、初めのうちはなるべく名前を口にしないような話し方を工夫してしゃべつたが、そのうちにだんだん呼び捨てにできるようになつた。部員の数がかなり多く、学部やクラスが違うお互を早く知り合うための配慮だつたろうが、会合の時にはかなり屢々自己紹介が行なわれた。ある時ダブさんが「農学部昆虫の渡辺千尚です。綽名は《ダブさん》山岳部では《さん》をつけて呼んではいけないことになっていますが、《ダブさん》の《さん》までが綽名ですから、私だけは《さん》をつけて呼んでいただけがまいません」という自己紹介をやって、一同大笑したことがあつた。

登山はあくまでも自発的で自主的な行為であるとすると、風の北大山岳部では、完全に自由な雰囲気支配していろいろな傾向を持った部員が、それぞれのペースでのびのびと個性的な山登りを楽しんでたし、また上下の分け隔てない気風で、部の会合は屢々活発なディスカッションの

場となり、山岳部というのはまるでディスカッションの団体のような観を呈することもあつた。

終戦後間もないある日、かつては軍事教練に使われていた建物の片隅の物置のような部室で、山岳部の再建（？）が話し合われた時、犬飼先生が「この頃しきりに民主主義ということが言われるが、北大山岳部はとくくの昔から、民主主義的だつたんだ。北大山岳部ほど徹底して民主的だつた団体はあまりないだろう」と言われた。七年間軍隊で暮らして帰つたばかりの私には「そう言われて見れば確かに、北大山岳部というのは民主主義そのもののような団体だつたなあ」と深くうなづかれることであつた。

このような気風は、山岳部や山の会の中に居る間は余りに当然すぎて、いわば空気のうちにその存在を意識することとはなかつたが、昭和二十五年郷里に帰つてから以後、他の登山団体の人々とき合つてみて、眉をひそめたくなるような事を屢々見聞するに及んで、北大山岳部の気風が、他に余り例がないほどの貴重な美風であつたことを、今更のように感じさせられて来た。例えば上級生の部員が下級生の部員をシゴクというような、まるで軍隊を思わせるような忌むべき行為は、他の多くの大学山岳部にはかなり行きたつていたことのように、この登山の自発性とは相容れぬ愚劣な行為は、北大山岳部ではあり得べき事でも考え

られる事でもなかった。

シゴキが行なわれるような山岳部というのは、競技スポーツの部と同程度の次元の低い空気が支配しているに違いないと考えられる。「スポーツ」の一番正しい意味を伝える日本語は「遊戯」であろう。人を相手に勝敗を争う「競

技」という言葉も、健康というお返しを期待するような「体育」という言葉も「スポーツ」の意味を歪めているように思う。そして「登山」こそが「スポーツ」の本来の意味に最も合致している「スポーツ」であると私は思っている。

五十年の追憶

安田 一次

増毛の駅で降りて海岸沿いの道を日本海から吹きつける吹雪の中を歩き出した。間もなく別刈から山道に入り、尾根づたいに登ってゆくと吹雪はますますはげしくなり視界はほとんどなく、唯電柱づたいに三人は黙々として歩いた。その中、吹溜りでは電柱も雪の下にかくれ、スキーが電線にからまる位の積雪量になる。夕闇せまる頃、雪の下に穴倉の様な入口をみつけ、やっと武好の駅通に着いた。一行は、伊藤秀五郎（秀さん）、高田五郎（五郎チン）と私

であった。

出かける前から秀さんは増毛山道の日本海の景色のよいこと、今は残り少なくなった駅通の話など、私達を喜ばせるつもりらしかったが、顔なじみの番人も変り、その上この天気ですっかり気嫌をそこね余り話もせず、それでも明朝の天気を気にし乍ら三人共早く寝てしまった。翌朝目を醒すと戸外は相変らずの吹雪で結局雄冬行きは中止と言うことになり日本海から吹きつける風を避け、尾根の左側の斜面

の林の中でスキーを楽しむことになった。雪は粉雪で思う存分滑れたのがせめてものなぐさめであった。この様につまらない山登りになってしまったが特にこれを書いた理由は、この同行三人の中、私を除いて他の二人が最近あいついで他界されたためである。

おぼろげな記憶をたどりながら書いても既にその時の事を語り合う友はない。今から四十八年程も前のことであった。

私の山岳部には入った昭和四年以前の秀さんは、この増毛山塊と日本海ぞいの山道をこよなく愛していられた様で、このことは当時の秀さんの紀行文とか部報一号にもしばしば書かれている。

厚田から濃昼山道、送毛山道を通って浜益に出る道は今では車で通れるようになり、札幌から日帰りでも昔ながらの海岸の風景を楽しむことが出来る。

昭和四十二年から五十年迄の八年間私は再び札幌に住んだ。北大に勤めることになったのである。

渡辺千尚氏（通称ダブさん）から山の会会長をお引受けしたときは、北大山岳部が五十年も経て来たことを私は全く意識していなかったが、しかしこの五十年間に北海道の山は夏冬を通じて殆んど登りつくされ、又比較的容易に海外旅行が出来る様になった現在、山岳部員並に若い山の

会会員の目が海外の山に向けられるのも当然であることに気がついた。毎年行われている夏山登山の一環としての山岳部員のみによるマッキンレー行きもその一つのあらわれである。又山の会会員の個人或は他のグループに参加しての海外登山も次第に多くなって来ている様である。最近の他団体のヒマラヤ登山活動にも刺激され、北大山岳部員並に若い山の会会員のみによる大きな海外への expedition をやろうと言う気運が次第に昂まって来た様に思われた。

しかもこの計画が現実動き出したのは、五十周年記念事業に結びついた時以来のことであろう、それは厳冬期のヒマラヤ八千米級の登頂と言うことで、先ずアンナプルナ（八、〇九一）が第一案として出て来た。討議の問題点は資金、技術問題及び厳冬期の資料の不足と言うことであった。勿論、東京、関西支部からも多数意見が出された。結局将来の八千米級を目標として、先ず七千米級処女峰を試みることになった。この計画は初登攀と調査と言う意味を兼ねていることとなり、資金も自己資金を基本としながらも不足分は山の会会員による寄付をも御願いすることとなった。

計画は現地の国内、国際状況によって二転三転し、結局ガルワルヒマラヤの Trisul (7120) に野田、バーティ(四名)を送ることになった。この経過は“Trisul Expedition 経

過報告(野田四郎)に書かれているが、私もこれ以上のくわしい報告とか、その後の検討結果を聞く機会なく札幌を去ることになってしまったが、私の知る範囲ではポーターの冬山に対する防寒の装備不足とか不慣れに問題があった様に思われる。確かにポーターの十分な装備を行うと登攀に必要な荷物の運搬の能率が悪くなると言う問題もある。氣候のよい時に荷物を上げておくとか何か別の方法を考えねばならぬ。今後冬期八千米級登頂を目指すからにはまだ研究問題は多い。時間は単調に増大する。過去なくして現在はありません。将来を希望に満ちたものにするため

峠・山・氷河

北大山岳部と私の結びつきを思い返してみると、真先に出てくるのは銭函峠の景色である。札幌一中の五年生の春だったと思うのだが、山岳部員数人でヘルベチア・ヒュッ

には現在その可能性の多い方向に向って努力する以外に方法は無い。野田パーテイーのガルワルヒマラヤ遠征もこの第一歩であった。問題はこの結果を充分検討し、次の第二歩をどの様にふみ出すかにあり前途はまだ多難である。私の在札最後の四年間会長在任当時、この様な大きな海外 Expedition は不慣れた私にとって荷が重く、秀さん、長髪(先日訃報を受けた中野征紀さん)両先輩はその実現に欠かすことの出来ないメンバーであった。今ここに亡き御二人の在りし日を思いその御冥福を祈るのみである。

(昭五三・三・一六)

東

晃

テに行ってみようということになった。それは、二、三年生の部員の足ならし程度のもではあったが、とにかく私がリーダーになって泊りがけの山に行った初めてのことで

あった。ヘルベチア・ヒュッテが北大山岳部のものであることは知っていたから、私の家のすぐ前に住んでおられた福地宏平さんのところへ行つてヒュッテの鍵を借りた。その鍵が、あの大きな頑張なものであったことはよく覚えて
いる。

一行が何人であったか、もう忘れてしまつたが、土曜日の学校が終るとすぐ駅にかけつけて、汽車にのつた。銭函駅から十万坪の畑を抜けて峠へ。その日は風は強かつたが、天気はよかつた。実はリーダーとしては、何日も前から天気が気がかりだつたのだが、雨の心配はなさそうだつた。しかし、ヒュッテまでどのくらいの時間があるだろうか。鍵を借りて福地さんに行つたとき、文平さんが教えて下さつた。エルステ・アイへまで行つてひと休み、そこから少し登りがきつくなるからツヴァイテ・アイへでもうひと休み、そして最後の急坂を登り切ると笹原に出る、そこが銭函峠だよ、と。

何時間かかつて登つたか、新緑の峠路を辿つて、熊笹の葉が一面に枯れた峠をちよつと向う側へ下り出したところで、私はあつと息を飲んで立止つた。遅い午後の日を受けて定山溪天狗岳のシルエツトが正面に浮び、白井岳と朝里岳の斜面はまだ真白な雪、その上に強い風を思わせる巻積雲が青空を区切つている。今でも私の脳裏に鮮かに焼付い

ている峠の景色である。

あれから幾度、銭函峠を通つたことであろう。北大に入つてから、春夏秋冬、何度となく峠を越えてヘルベチアへ往復したものだ。グブラー先生が名付けられたエルステ・アイへ、ツヴァイテ・アイへの意味もわかつたし、しらねあおいの薄紫の花を初めて見たのもこの峠路である。秋の紅葉は、向う側からの帰路、春香山や奥手稲の峯々を眺めながら来る時が一番美しい。たしか深田久弥氏の本だつたと思ふのだが、その頃の日本の代表的な峠をいくつか紹介した文章を集めてあつたが、そこに銭函峠が紹介されていないことをどれ程残念に思つたことか。

ヘルベチアのヒュッテンブッフを開いて、山岳部の雰囲気を感じた私は、北大に入って本当の山登りをしたいと思つた。しかし、入学したのは、ペテガリの大遭難のあつた年の春であつたから、運が悪かつた。それに戦争の影響である。予科の二年のとき太平洋戦争に突入して、物資と食糧も不足、だいたいのんびり山なんかに登つてゐるのは非国民扱いという風潮になつてきた。山に一週間か十日入つて出てくると、いつも内閣が変わつていたり、何か大事件があつた。そんなわけで、学生時代にこれと思ふような山登りはしてほしくない。夏山は悪天候やら怪我やらで三年続きの敗退。一番思い出に残つてゐるのは予科一年の三月に登つ

た音更川からの石狩岳である。

理学部に進んで、中谷宇吉郎先生の教室で卒業論文をやることになって、昭和二十年の春にニセコ山頂の着氷観測所に登った。山岳部には、ニセコをスキー部の縄張りと思つてか敬遠する気風があつたから、これは初めてのニセコ登山であつた。山頂観測所の一隅に陸軍の気象部隊の兵隊数人がいて、気象観測と無電で気象データを受発信することをやっていたが、その受信機にサイパン放送が入つてくる。もう日本の戦後処理の話をしていて「日本には重工業はゆるさない」といつていた。実験装置の修理や組立てをやりながら、ニセコ軽工業です、などと冗談を言い合つたりした。六月、七月には太平洋の移流霧の映画撮影のため、洞爺や支笏湖の紋別岳に行った。そのとき、静かな支笏湖とそれをとしまく山々を眺めながら、こんなことを考えた。

戦争はもうすぐ終るだろう。重工業の許されない日本で物理学はどうなるだろう。そうだ、海洋物理というのはあるが山岳物理というのはまだないようだ。戦争が終つたら「山岳物理」でもやろうか。そうしたら、どんなことが研究の対象になるだろうか。

間もなくやつて来た敗戦の現実の下では、これは学生の懐いた空しい夢であつたようだが、二、三年経つとこれが

中途半端ながら物になった。昭和二十二年の石狩川大洪水の調査がきっかけになって、大雪山の積雪水量調査が中谷研の仕事になり、大学院の後半から数年これにかかわつて毎冬大雪山や然別沼に行ったからである。山岳部の現役諸君が十勝・大雪縦走をやつた頃、こちらはユコマンベツ川や然別沼をスキーで歩き廻つてた。

マナスル隊が戦後初めて日本からヒマラヤに向つたころ、山の会会報に「氷河の話」を書いたことがある。その後、アメリカで研究をする機会に恵まれて、グリーンランド氷床の研究をしている連中の間で生活している中に「氷河の話」に書いたことを自分で成就させなくては、と思うようになった。部の先輩、橋本さんをかたかつてアラスカの氷河に出かけたのが昭和三十五年だから、「山岳物理」を思いついてから十五年後のことである。以来、氷河とは縁が切れなくなつてしまつた。

積雪調査でも、氷河調査でも、山岳部員の経験はいろいろな場合大変役に立つた。しかし「山岳物理」が商売になると、山には余り登れなくなるものである。そびえ立つピークを仰ぎ見つつ氷河のクレバスを渡つてゆくということになる。そして、山岳部が氷河のある山に遠征隊を出すことになつたときも、仕事の故に、それに加わる暇を見出せなかつた。こんな山歩きスタイルは、第一義的な登山から

隔ること遥かに遠いものであろう。しかし、山が人生から離れることがなかったという意味で、部の五十年の歴史と

日 高 で

自分の山歩き四十年とを重ね合わせて願うことが出来るのは幸いである。

鮫 島 惇 一 郎

日高と聞いただけでぞくつとしたその日高の山へ、はじめて入ったのは昭和二十三年の夏であった。芽室から、おんぼろトラックで行けるところまで行った。といつても上美生までであった。はじめて背負うキスリングは、日高ま

ら、きつと登ってくるのがあるはずだと、いくたびも後を振り返りながら歩かされたのを、よく記憶している。やつと？ その日の夕方、たどりついたのはトムラウシ沢の合流点であった。

では間に合わせたいと、見よう見まねで作った手縫いであったが、これはよくできていた。当時、閘米屋が手入れのときに、列車内に放棄していったズダ袋がその原形であったが、その袋の処置に困るといふ駅前交番からもらい受けた代物であった。

上美生から、農道をたどると、ときどきエゾマツやトドマツの大径木を積んだ馬車に会う。おりるのがあるのだから

合流付近の暗い森の一角に飯場があつて、どうぞ泊りなさいという。薄暗いランプに照らされた室内には、いかついオッサンや生きのいいあんさん達がいた。焼酎をくみかわしていたり、花札に打ち興じている姿に、ある意味で驚きと、物珍らしさがあつた。日高の山に入るのか、何て物好きだな！ と異口同音にいわれて、何と答えたらいいものなのかと、いささか困つたのは、つい昨日のことに思

われる。

手割りの柵と、皮のまだついている柱で組み立てられ、紫の煙がゆっくりと流れる飯場をあとにすると、ほどなく小道は、沢の流れに消えていた。地下足袋をはいて、さらに草鞋をつけることは、はじめて、ということもあって、新鮮なあこがれと、感觸があつた。手頃な枝を支えに、いくたびも渡渉がくりかえされた。大きな沢の合流点と合流点が、どうも地図と距離があわないとか、イワナよりヤマベがうまいとか、勝手なことをいいかわしながら四日目に美生岳の頂上を望みえたのであつた。

かつてこの美生川には、択伐でも入つたのであろう、ところどころに朽ちた橋桁が黒い姿で残されていた。それにしては森林は暗く沢に迫り、日高の稜線をなかなか見ることではできなかった。

奥の二岐にたどりついて、美生の頂をこの眼で確め、その甘く、香わしい沢風を胸に入れたのが妙になつかしい。日高の国境稜線をかいま見た最初の日であつた。

その日から三十年近くもたった日、機会を得てふたたび美生川に入った。頼りないカラマツの枝が風に揺れ、かつてのあの原生林とも見えた黒い森林は、失われていた。林道がどこまでも続き、その両側は、四角くまた三角に区切られた造林地や、皆伐跡地が望まれるだけであつた。何と

いうこの変りようであらう。

水は石を洗い、奔流が岩を噛む沢水でありながら、かつての姿をさがすことは難しい。ヤマベの、いやイワナの影すらも水底には走らない。岩をくずし、くずれ落ちた岩は流れにおよんでいた。長い年月をかけ、角が滑らかに削られてはいる玉石に混じつて、碎石がその角もあらわに転がっていた。

車で走っている限り、アスファルト道路が砂利道よりいかにきまつている。ぬかるみより砂利道がいにきまつている。しかし、アスファルト道路より砂利道が、砂利道よりわだちが、それよりもたんなる踏跡が自然の豊かさは濃い。自然をより多く希いながら、より快適な生活を望むことはやはりおかしなことなのかもしれない。

かつて岩をへつり、胸まで沢水につかり、渡渉をくりかえし、やぶを漕がされたあまたの沢、尾根に道路ができる。もう誰も、ふたたびあの苦勞を重ねることはしない。これでいいのかと自分に問いかけてみるのだがその具体的な対策はなかなか浮かんでこない。

日高の鋭い稜線、圈谷、溪谷、森林、お花島にハイマツ。そのすべてが日高の特長ではあらうけれど、日高の日高らしいゆえんは、その原始性に支えられている。どこの地域もおしなべて平均化されつつある現在、日本にひとつ

ぐらい原始性を讃える山岳地域があったっていいではないか。日高を、山へ登る仲間のひとりじめにするつもりはない。しかし、山へ登る努力を惜しんで日高を味わおうとする人々にたいしては、拒否してさしつかえなからう。日高を日高らしく残すことを、日高を登る人々は共通の目標とすべきであろう。

空から眺めると、頂から頂へ、ハイマツ林を縫い岩角を

まがり、細く続く踏跡がよくみえる。いたずらに手を加えることなく、これら踏跡を大切にしていきたいと希っている。

北大山岳部が今日の日高の開拓者であるのだから、それを残すためにも力をつくす義務が、あるのではないだろうか。

わがベース・キャンプの魅力

佐 伯 富 男

むかしから立山で生計をたてている私の生まれた芦峰寺（あしくらじ）では、夏休みになると小学生たちは、叔父や、叔母たちの働く立山の山小屋へ遊びに行くのが夏休みの唯一の楽しみだった。

晴れた日、村のなかから眺める立山連峰の姿は、真夏と
いうのに雪が縞状に残り、子どもたちにとっては不思議な

夢の国だった。また母親からは、あの山には大蛇の棲む大きな滝があるし、悪いことをする子が連れて行かれる鬼の棲む地獄があることやら、神さまの棲む美しい池のあることをコタツで聞かされたものだった。

小学校五年生の夏休み、村から美しい清流が奇岩の間を流れる称名川沿いに、強い太陽に照らされ汗だくになっ

て、日本一の称名滝につき水しぶきを肌を感じた時、母親のいうとおり大蛇の棲むところだと思わざるを得なかったものだった。

急坂をあえぎあえぎ数知れないほど休み、パッと視界が開けたところが、なんと色とりどりの小さな花が咲き乱れる大高原の弥陀ヶ原。子どもの私にとつてはおとぎの国へたどりついたようだった。さらに足を進めると、村の近くで見る松の木とまったく形が変わったずんぐりとした針葉樹があり、地上を這っている松、その間に縞状に走る雪渓、こんな世界が身近に存在していたことにただ驚くだけだった。

振り返ると、お花畑のなかには点々と無数の水たまりを見下ろすことができ、山小屋で働く人々に聞くと、地獄から休みをもらった人が田植えをした餓鬼の田んぼだと教えてくれた。鬼の棲む地獄谷へ訪れたものの、子ども心には噴き上げる煙、異様な臭は寒けがする思いだった。

しかし、三〇〇メートルの稜線に立つて、富士山をはじめとする北アルプス、南アルプスの山々を眺めた時、俺はやった、こんな高いところを征服したのだという気持ちでいっぱいになったものである。

人間にとつて少年時代の思い出、きっかけが一生を支配することがあるのか、私は中学に入り山岳部に籍をおい

た。立山・剣岳へ訪れる機会が多くなるばかりでなく、後立山連峰、さらに薬師岳から槍・穂高の山々へと各シーズンごとに足をのばすようになり、高校をどうやら終えたのだった。

自然にとりつかれ、大学は北海道で過ごすことになったものの専攻の学問はどこかへ、もっぱら原生林と山々の放浪で終ったものの、少年時代に過した北アルプスの山々に比べて、どことなく味気ないものだった。

大学を終えて立山ガイドとしてプロの生活に入り、他人さまのお金で八甲田山から富士山まで歩いたり、南アルプス中央アルプス、白山などへ出かけるチャンスに恵まれ、山々を歩き回った。南極・南アフリカ・ヒマラヤ・アンデス・アラスカ・カナダ・北極・台湾・インドネシアと登山・探検にウロウロと出かけているものの、その地方にはそれぞれの特徴を見出すものの、わがベース・キャンプの北アルプスのような良さを発見することができないのである。

北アルプスは本当に変化に富んだ山である。三〇〇〇メートルの山脈は日本にとつてはいうまでもなく屋根であるが、剣岳・槍ヶ岳・穂高岳をはじめとする岩峰、また一方立山・白馬岳・薬師岳などの女性的な山、そして、それととり囲む大高原、そこにはかれんな高山植物が咲き乱れて

いる。

岩峰の間には一キロメートルにもおよぶ万年雪(越年雪)があり、ところによっては氷河地形があり、カールにはお花畑が色とりどりのお化粧で私を迎えてくれるのである。このお花畑を流れる水、雪が融けて花崗岩の岩肌を削り澄んだ水、二日酔いの喉を潤すのに最高といえよう。

高原やカール、お花畑では、高山蝶が花を求めてさまよひ、ライチョウも負けずにヒナの一团を連れて散歩する風景は、北アルプスでなかったら見られないものだろう。

日本は火山国で、あちこちで噴煙を見ることができ、その、北アルプスのような高所でその勇姿を眺めることはできず、焼岳・立山地獄谷のように雲の上の噴煙こそ信仰登山の源をなすものである。

火山は大小さまざまな池を生み、麓にはお湯をもたらす。一步一步踏みしめて山を登り、汗だくになった人々は、山のかえりそのお湯で疲れを流し、よりいっそう北アルプスの魅力を感じるのである。

万年雪の末端から流れる水は、黒部峡谷や高瀬の溪流をはじめとする絶壁、廊下、小ささまざまな滝、巨岩、奇岩の間を流れ、加えてアオモリトドマツ、ネズコなどの針葉樹林帯、ブナやナラの原生林の森林美とともに、日本特有な峡谷の景観こそ世界に誇るべきものであろう。

地形的な変化に富んだ北アルプスは、また四季の変化にも富んでいることは格別である。

北アルプスの冬は日本海から吹きつける季節風で白銀の世界と化するものの剣岳や穂高岳の岩膚は黒々と現れ、気象条件のきびしさを物語ってくれるのである。厳冬の北アルプスは訪れる人々も少なく、全く匂のしない世界である。どこにいても音や匂に悩まされている私たちにとって音も匂もない世界こそもっとも魅力ある世界といえよう。

しかし、いったん荒れ狂うと絶えることを知らない風の音、静かな晴天の日に崩れ落ちる雪の音は、私たちの腹の底に響きわたるもので、自然のおそろしさを教えてくれるものである。

北アルプスの冬は長いが四月末ごろになると、ツキノワグマも冬眠が終り、草場に姿を現したり、ニホンカモシカも仔を生み、ライチョウたちもなわ張りの棲み場に帰り山の主人公たちの活動が始まる。なんとなく活気を感じるのである。

ブナをはじめとするイタヤカエデ、ミズナラなどが新緑の匂をぶんぶんさせ、どこからとなくウグイス、コガラ、ヤマガラなど数知れない多くの小鳥たちが原生林でさえずりをはじめるのである。

北アルプスの春は急テンポで樹林帯から高原帯へ進み、

シヤクナゲ、ムラサキヤシオツツジ、ムシカリの花など色とりどりに咲き、さらにミズバショウ、ニッコウキスゲなどウグイスのさえずりとともに咲きはじめ、やがて高山植物の女王と親しまれているチングルマの大小の群落の白い花が咲きはじめる。氷河時代から生きぬいたライチョウたちもヒナを連れて散歩して北アルプスの夏を迎えるのである。クイーンに負けじとばかり、多種多様の高山植物が咲き誇るころ、北アルプスの夏はクライマックスとなる。

しかし、北アルプスの夏は短く、三〇〇〇メートルの稜線から秋の気配が見出されるのは八月末である。コバイケイソウの葉が黄色をおび、チングルマの花も白い包子をつけ、葉が赤味をおびはじめ、ウラジロナナカマドが紅に色づき、山は紅葉シーズンとなるのである。そして稜線に初冠雪が訪れる風景は、地球上をさがしてみても北アルプス以外に見出すことはできないことだろう。

高原地帯から溪流、峡谷へと秋は下り、流れ主の岩魚たちは産卵の小沢へウロウロさかのぼり、イタヤカエデやブナが色づき、冬の近づきを私たちに知らせてくれるのである。ひと嵐ごとに色づいたブナの葉が溪流へ群をなして飛び散って行く姿は、私たちから、楽しかった思い出からも、何かを奪い去って行くような気さえするものだ。

そのころ、稜線は白銀の訪れとなり、長い眠りに入るの

である。私の人生のベース・キャンプの北アルプスは地形的に恵まれ、豊かな植物が繁り、そこには数々の動物が棲んでいる。それらはすべて主人公であり、私に北アルプスへの魅力を与えてくれるのである。

この主人公たちを子孫のためにいつまでも残したいものである。

ボケボケ人生

西村 豪

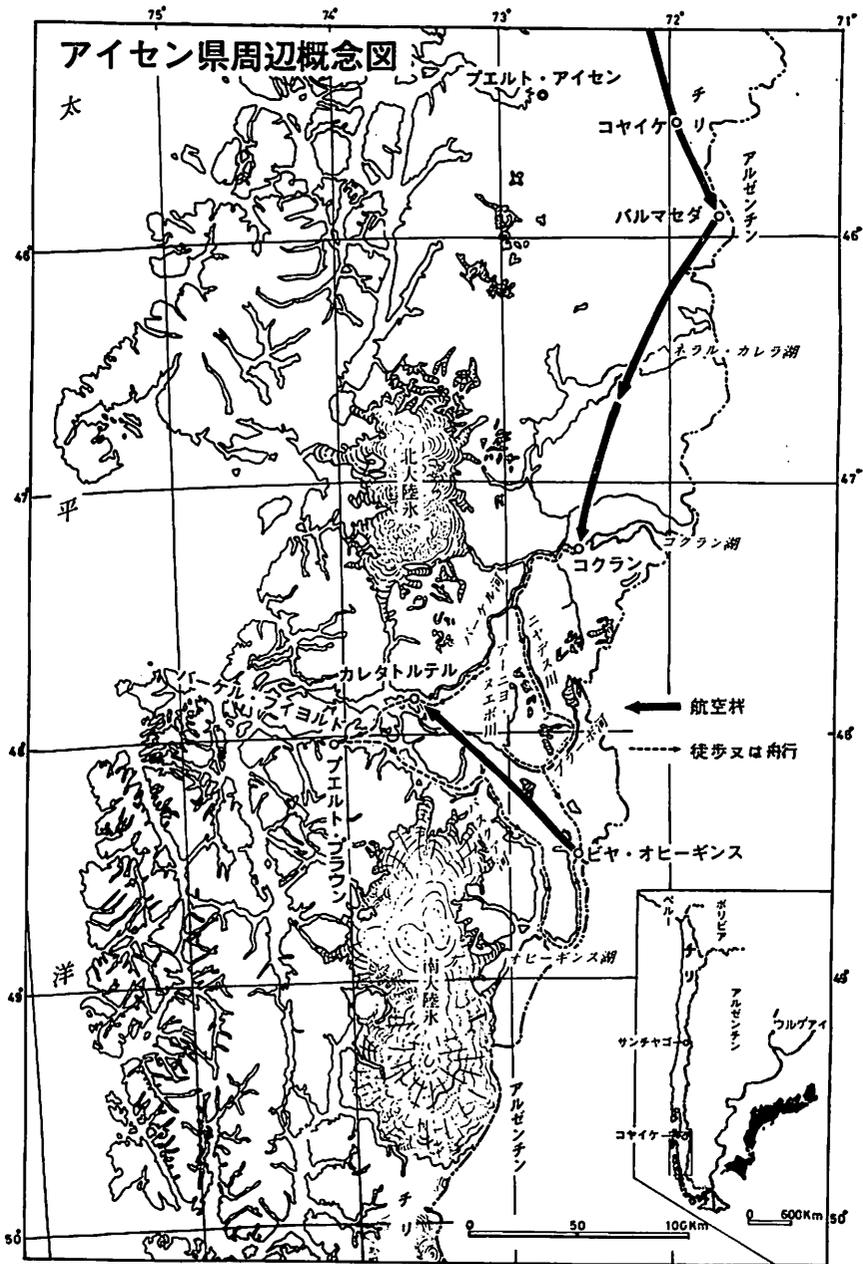
チリでの生活も十三年になった。日本から来られた人会うと、「相当ボケるでしょう」とよく言われる。

「またアシタ」、「どうにもならない」で済まされるのが気にならなくなったろうということかなと思う。一方、こちらに言わせれば、チリで仕事も手続きも予定通りはかどらずカッカッと頭にくるのは「日本ボケ」の取れない連中ということになる。

思い出してみると、山岳部へ入った頃の自己紹介で、先輩に落第坊主がゴロゴロいるのがわかった時、これは、きつと「北海道ボケ」「山ボケ」だろうと思った。そのうち、こっちもその仲間入りしてしまった。何とか卒業出来た後までもトン公、アンマ、エンドー等々の諸先輩に引きずられ（？）ボケボケはなおらないで来てしまった。北海道でも合宿や山行のときメシは一番遅かったが、チリへ来

ると一般に食事は一時間、二時間、三時間と続き、はじめの頃は一番早かった僕も、今ではチリ人に全くヒケをとらない。そして、アタカマ砂漠、パタゴニアの山々などをウロチョロするうち、とうとう、「チリーボケ」の一人になつてしまった。

さて、この十三年、とくに私を惹きつけて来たパタゴニア・アンデスの山歩きの一端を紹介しよう。パタゴニアといつても広いが、そのうちでアイセン県が最も面白い。県といつても面積にすると北海道に四国を加えたよりは少し大きく、人口はわづか五万。そのフィヨルド、川、湖、氷河、そして山は魅力そのもの、人も少なく道もほとんどない土地だから、現役時代の日高と同じく沢歩きが主となる。とは言つても沢の水量は豊富で冷たく、徒歩は無理で馬歩きとなる。しかも、一度山へ入ると短くて一カ月、長



くて三カ月間を要するという広さであるから、荷物運びにも馬は必要不可欠なのである。広さと河の大きさについては付図を参照していただきたい。

この地域の河川流量を発電量に換算すると、世界有数のもので、未開発のものではトップクラスに入る。バークル河とバスクア河の二つの河だけで三千MWもあり、開発のコストも安いと見られている。氷河の氷として蓄えられた水はまず氷河湖へ注ぎ、それからU字谷を流れて海へ出る。この氷河と湖の二段構えの天然ダムは水をよくコントロールして、河川には大洪水の起こることもなく年間を通じて流量はほぼ一定している。

パタゴニア調査隊以降、年々歩くうちに地質の上では全く空白地帯であったこの地域のデータも次第に積って来たことだし、未知の領域も狭まって来た。そこで、昨年は残りの未踏域に踏みこんで十年間のパタゴニア山行にケリをつけるべく、出かけることにした。目指すは、北大陸氷と南大陸氷の間にあるバークル・フィヨルドの周辺とその源流をなす上記二つの川である。

「パタゴニア」といえば、曇天、氷河、強風、雨、霰等々のイメージがつきまとうが、一九七四年、一九七五年、一九七六年には四〇日間、五〇日間という無風(?)、快晴が続き、そのイメージも変えられそうだったところ、昨年は

何と五十年來の悪天候に見舞われ、連日、雨と霰にたたかれてしまった。それで三〇日間の予定が、七五日にのびてしまった。

一月早々、三浦雄一郎先輩の一行が南極へ向けて発った翌日、人口四百万の首都サンチャゴからポイング七二七で一氣に人口三万の県庁所在地コヤイケ(空港はこれより七十キロ離れたバルマセダ)へ到着。これより先、都庁所在地のコ克蘭(人口一七〇〇)へは陸路なら約一カ月かかるところだが、セスナ、パイパー等の単発か、双発機、又は第二次世界大戦時代に活躍したDC-3型機の週二回の定期便が利用できる。全て有視界飛行でこれも天気次第だから、きっちり予定通りとはいかないのが普通である。それでも予定通り無事コ克蘭へ着いたものの、村の創立記念祭とぶつかり、誰一人馬方役を引き受けてくれない。仕方なく祭が終るまで約十日間待たされてしまった。

我々の一行は、チリの有名な登山家エドワルド・ガルシア、AACHの吉田克人、チリ大学の学生二名と小生。それに馬七頭、馬方二人を加え、計七名七頭のキャラバンを組み南下する。荷物は全て馬が運ぶものの、その中にはゴムボートもあってかさばる。バークル河の支流ニャデス河の源頭をつめ、ブラーボ河の支流デス・ブライエル川をのぞんだのが十日目の二月八日。本流沿いにブラーボ河を下

り、河口近くで未踏の支流アーニョ・スエボ川遊行を企てたが、馬は雨、悪路、重荷に、疲労困憊、食糧も不足して来たので、それも成らず、二月一六日には引き返すことにした。その帰途野牛の子牛一頭をつかまえたものの、計画をやり直すには既に遅く、盛大な焼肉パーティーの材料にされてしまった。帰りは無線のあるビヤ・オヒーギンス（人口三〇〇）へ向い、二月二一日到着、ようやく外界と連絡がつき、翌日双発のバイパー機が迎えに来てくれた。さっそくバークル河口の海軍基地カレタ・トルテルへ飛ぶ。好天に恵まれ、空からパタゴニア・アンデスの眺望を満喫。その日は、丁度小生の四十歳の誕生日、基地でお祝いをし、久方振りのベッドに寝る。

翌日は舷外機付ゴムボートでバークル河中流のデボー地へ向う。平時、毎秒二千立方メートルの流量を誇るチリ最大のバークル河は例年にならない連日の雨で大増水。このため遊行に手間どり、デボーを終えて五日後に基地に帰りついた。二月二八日、三月八日まで続いたゴムボートの旅を開始、バークル・フィヨルドを舟行してステール・フィヨルド、ホル・モント水河落口、ペドレーロ川、プンタ・ラウラ、プエルト・ブラウンの各地を調査する仕事は計画通りうまく行った。フィヨルドの海が荒れたのはたった一日で、それも追風であったのが幸いした。

もう予定の日数も大分遅れていることとて、バスクア河口では、当初の計画通りその遊行をすべきか中断かと議論の末、計画完遂と決定。ここで学生二人はカレタ・トルテルへ帰し、ビヤ・オヒーギンスから同行してくれた土地の男アラテアを加え、ガルシア、吉田と小生の四名のみで遊行を開始した。平時、毎秒六五〇立方メートルの流量で急流の連続のこの河も今年は大洪水。手間どったが何とかバスクア河畔のケトル湖まで、エンジン付の土地の舟で遊行出来、大いにはかどった。これより先、水源のオヒーギンス湖までは急流と滝の連続である。従ってルートも高巻きの連続となる。それも強雨の中を強行軍である。

五日目の夕方、ガスの切れ間にオヒーギンス湖が眼下に展開した。

バスクア河は一九〇〇年ブリセーニョを隊長とするチリ政府の探険隊によりはじめて遊行され、この時初めて、その水源がオヒーギンス湖であることが発見されている。今回の我々のルートはほとんど彼等のルートをたどった模様で、あちこち深い森林の中に朽ち果てたキャンプ跡があり、当時支流に渡した角材の掛け橋も諸処に見られた。しかし今回は、支流という支流は濁流が溢れ、ゴーゴーとうなる滝と化し、コケむした角材の橋は全て中ほどで流失してしまっていた。従って昨年の増水は七〇年来のもの

いえよう。

これ等難所の全ては、土地で生れ育ったアラティアの命がけの大活躍で無事通過出来た。我々がこれまで身につけた山のテクニク(?)のいづれもさっぱり役に立たず、十年以上付き合ってきたアラティアに、ここですっきり頭が上がらなくなってしまった。同様のことはニャデス河のぼつてブラーボ河へ乗越した時の馬方役をしてくれたチーチョ・オレヤナについても言える。

強雨の中の強行軍だったので、シュラフも食糧もすべてビショ濡れ、木という木は全て水を含めるだけ含んでいて、たき火もほとんど出来なかった。最後の行程、パスクア河には一番しごかれてしまったが、オヒーギンス湖畔について、ビヤ・オヒーギンスからの舟を待つ。もう引き返すことも出来ず、陸路前進するルートもなかった。食糧もすっきり底をついた三日目、待ちに待った舟がやって来た。後でわかったことだが、ビヤ・オヒーギンスの国境警備の警官たちが我々のことを心配してなけなしの燃料をはたいて偵察に出してくれた舟であった。

舟が動き出した頃、また湖は強風と大波に荒れはじめた。しかし、これも追い風で幸いした。湖は以後四日間荒れ続けたのだから、舟がこちらへやって来る事ができたのも文字通りの「幸運」であった。荒れに荒れた三日間の

舟旅の後、ビヤ・オヒーギンスに無事到着。四日後、迎への双発バイパー機が来てこの旅も終った。

いつもの通り、アイセン県知事、チリ大統領府国家計画庁長官等から祝福されたが、サンチャゴに帰っても、まだ山ボケしていた。パタゴニアの調査にケリをつけることは出来なかった。このAACHの原稿を書きながら、今年(一九七八年)もまたパタゴニア行を準備中という次第である。

ヒマラヤの犬たち

伏見硯 二

一

ネパール語で「カヨ」とは「食べた」という意味です。朝のあいさつに「カナカヨ？」がよく使われます。「カナ」は「ご飯」の事ですから、直訳すると「ご飯を食べたか？」ということになりますが、意味は「お元気ですか？」といったところでしよう。

シエルバ族は、ヒマラヤ山脈のふもとに住む高地民族です。彼らは、十六世紀にチベット高原からヒマラヤ山脈を越えてきたといわれています。そのヒマラヤ山脈のふもとでは、六月から八月までのモンsoon期間中に四つの大きな祭りがあり、そのうちの一つにヤルジャンと呼ばれている豊作を祈る祭りがあります。モンsoonの間、水河近くの牧場に出かけていた人たちも、これらの祭りには村へ集

まり、酒を飲み、語り、歌い、踊り、そして時には、けんかもあります。力強い足のステップをつかうシエルバ・ダンスの調べにのって、日本の追分節に似た歌が、ヒマラヤ山脈にこだまします。男衆も、女衆も、そして子供衆までもが飲んで、翌日はみなの衆が二日酔いです。すると「ヤルジャン、カヨ？」と聞かれます。直訳すると「ヤルジャン（のお祭り）を、食べたか？」となりますが、おそらく「ヤルジャンのお祭りを、楽しんだか？」といったところでしよう。

「カヨ」というネパール語は、幅の広い言葉で、いろいろな意味に使われています。一九七四年九月には「インドエア、シッキム、カヨ」という表現が使われました。これは大変なことです。「インドが、シッキムを食べた。」んですから。

二

一九七三年春、僕たち、名越昭男さんや、小須田達夫さん、そして日本の若き氷河研究者たちは、チョモロンマのふもとに、氷河観測基地を作りました。観測基地といっても大げさな建物ではなく、手作りの石小屋なんです。ここは、気象観測所であるとともに、数週間続く氷河上の調査から帰ってきたときの休養所でもあったのです。僕たちの調査を手伝ってくれたシェルパ族のベンパ・ツェリンさんがある時、牡の小犬を連れてきて、飼い始めました。この小犬は、全身が黒く、将来勇猛な犬になることを願ってブルー（ネパール語の「熊」の意味）と名づけました。チベットには、小型で、毛の長い、耳のたれさがった、チベットン・スパニエルとかチベットン・テリアといわれている飼犬がいます。僕たちのブルーは、もつと大型で、ヤクや羊などの放牧された家畜の群をまとめるシェパード役の犬です。

一般に、犬の祖先は、オオカミとジャッカルであると考えられています。そして、オオカミの血が多いほど大型で攻撃心が強く、ジャッカル血が多いほど小型で警戒心が強いといわれています。ブルーの祖先は、オオカミの血を多くもち、チベット高原周辺の民族が家畜との生活を始め

た頃に、人類との共同生活を始めたのかもしれない。数カ月すると、ブルーは、ちょっとばかり熊らしくなり、人に向けて吠えるようになりました。そして氷河観測基地周辺を訪れる人たちに危害を加え始めました。僕たちは、よく「ブルー、カヨ。」といつてくる苦情をもちこまれたものでした。

三

三月のカトマンズは、うららか。風があたたか。畑の麦が色付く。梨や梅が満開。冬のように朝霞はたたない。空が澄み、ヒマラヤの山々がういてみえる。気分爽快。多食のあとの散歩の足がのびる。夜のはやいカトマンズの街はひっそり。裸電球の下で動くのは、イヌといぬと犬。

カトマンズは、犬の多い所。昼は、狭い街の通りを、人と人力車と荷車と自動車、いもあらい。犬は人に蹴飛ばされ、車にはねられる。はねられて死んでも、牛のように扱ってもらえない。せいぜいゴミタメいき。あげくのはてはカラスのエジキ。

人さまが、かがみこみ、クソする。犬たちは少し離れた物陰で待つ。犬たちにとっては、ごちそう。人にとってはなくてはならない清掃役。

街の犬は、どんかん。通りの真中で昼寝。牛さまのまね

をしているのか。これで人に蹴られる位ならまだまし。自動車があれば、いちごころ。最近、びっこの犬が、やたらと増えた。「通りはもともと俺たちのもの。」と犬は思っているのかもしれない。

四

ネパールは今、急激な近代化の道を突走っている。交通、コミュニケーション、工業、教育、軍事などが近代化している。中でも、軍事面での近代化が目につく。近代化が急激に進むと、時には、おやっと思う出来事に気がつく。ネパール人は詩を愛する民族で、毎年コンテストが開かれる。一九七四年のコンテストの題名は“Let us be industrious and make increasing use of indigenous materials”だった。又、政府の役人が学生に向かって“Students should not hesitate even to sacrifice their life for the sake of the country.”とぶつたりする。「これなぞ、どこの国の戦争中の出来事みたいだ。急速な近代化とは、宣戦布告なき国内戦争かもしれない。「新しいチャン(濁酒)を飲むと頭痛がする。」とネパールの人はいう。新しい近代化という酒を、急激に、また、あびるほど、飲まされてゐるのだ。犬もまたしかり。

五

人がにらみつける。街の犬は、すぐ物蔭に隠れる。石をつかんで、かまえようものなら尻っぽをまいて一目散。だが、ものの二、三分するとなにくわぬ顔でまた通りをうろつきはじめ。そして、運がよければ人さまの落し物にありつけるというわけだ。

街の犬は、どうどうと人に向かって吠えることを忘れてしまっている。いつも、上眼づかいに人を見る。時には、自分の影にさえおびえる。犬にとって誰が味方で、誰が敵かわかりかねているのだから。いつも不特定多数のごちそうにあづかっているのだから。

街の裏通りには、まだ人に向かって吠えるのを忘れない犬がいるようだ。だが、どうも、ほんものの吠え方ではない。口だけは人に向かっているが、後足は逃腰だ。

六

では、バルーはどうか。ヒマラヤの牧場の犬はどうか。目をむき、牙を出し、あらんかぎりの声をしぼり、体全体で、人に向ってくる。ところが、このバルーをはじめとするヒマラヤの牧場の犬も、飼主にかかつては、からきし駄目だ。飼主のいいなりだ。遅かれ早かれ、この犬たちのオ

オカミの血は、うすくなっていくことだろう。

七

だが、しかし、オオカミの血の濃い犬たちもいる。ヒマ
ラヤを徘徊する野犬の群。この犬たちは、おっかない。石
をかましても尻っぽをまかない。石を投げてもむかってく
る。子供などが、食われるとのことだ。この犬たちが、
四、五匹も群がると、大人といえども危ない。この犬たち
がもつ凄味はどこからくるのか。よるべなき者たちの叫び
なのか。

八

よく晴れ渡った月夜の晩、氷河近くの岩壁から、オオカ
ミの遠吠えが聞こえる。彼等は昼は、めつたに姿を見せな
い。テント周辺の雪の上の足跡を見て、昨夜、オオカミが
近くに出没したことを知る。氷河上にも、峠へと続く急な
雪原にも、オオカミの足跡が残る。ヒマラヤ山脈の高い峠
を横断した最初の動物は、オオカミであったかもしれない。
人間はオオカミの足跡を見て、そこが通過可能である
ことを知る。シェルバ族の祖先は、氷河に残るオオカミの
跡を民族移動の道標としたのかもしれない。十六世紀に始
まる氷河の拡大期に、ヒマラヤ山脈の南面の急崖を氷河が

ほどよく覆った時に。

九

一九七四年三月、僕たちはカトマンズに、ヒマ・アラヤ・
パーワン（ヒマラヤの館）を開設した。「ヒマラヤを人類
文化のセンターに」という安間荘さんのアイディアを実現
するための基地だ。この考えが引き継がれ、渡辺興亜さん
たちが中心となって、一九七七年十月にはカトマンズに、
ヒマラヤ研究所が設立された。

研究所への引越しの当座、隣りの白犬もまたその隣り
の黒犬もよく吠えた。ところが二、三日もすると、これら
の犬たちは、僕に向って吠えることを忘れてしまったよ
うだ。

「この白犬と黒犬たちが、『カヨ』」などと人間さまが不
平をいうことは、はたしておこるであろうか。本物の『バ
ルー』はどこに在るのだろうか。ヒマラヤ山脈を最初に横
断したオオカミの血をひくバルーは。

写真説明

十勝岳温泉付近より富良野岳

坂本直行

戦後、旧噴火口の沢の下流で崖尾根乗越付近に十勝岳温泉という温泉旅館ができた。これは昭和四十三年二月九日北大山の会のスキー行のとき撮った。この景色は昔と全く変わっていない。

天狗岳よりニペソツ山

坂本直行

昭和四十四年十月一二日撮影。この時は異常に早い寒さで、屋根の上は氷雪に飾られていた。

春の五剣山

朝比奈英三

豊平川の左岸にある五剣山(五万分の一地形図上では観音岩山)は、滝の沢か簾舞から程近い見晴らしの良い岩峰である。岩はぼろぼろだが訪れる人の少いしずかな山だった。下に見える定山溪への国道のまわりはまだ畑ばかりである。人物は手前から中野征紀、豊田春満。昭和十三年のある日曜日。

昭和四年卒業山岳部員送別会

二月一四日 於大通り精養軒 ○印今年度卒業生

最前列右より、佐藤正、笠原直三、菊池寛、渡辺成三、原忠

平、西川桜、松本元治郎、小黒春之助、江幡三郎、高橋正三、不明氏。第二列、○大戸健一、○鴨下克己、野崎健之助、○小森五作、○田中二郎、○伊藤秀五郎、○和辻広樹、鈴木限三、田口鎮雄、沢本氏、河合克己、○前川保夫、○中村了。第三列板橋卓、木下弥三吉、高橋喜久司、野中保次郎、井田清、安積樟三、沢本三郎、石川勝寿、今村正男、荘保忠三郎、大和正次、坂本正幸、島村和雄、野村虎男、梅沢一郎。最後列、小平良平、南部信夫、小立正彦、星光一、徳永芳雄、山県浩、長野忠一、大立目謙一郎、和久田弘一、福西幸次郎、福島健夫、寺尾邦彦、須藤宣之助、松本久吾、島村光太郎、山口健児、渡辺千尚

コイカクシュシピチャリ川の溯行

伊藤紀克

昭和十三年の夏。私達は初めてこの川をさかのぼり、三岐からサツシピチャリ川をへてルベツネ山に直登した。人物は左より中野征紀、橋本誠二。

カムイエクウチカウシ山八の沢カール

鮫島惇一郎

昭和五十三年七月の航空写真。地上からは見えにくい八の沢カールの全貌がわかる。

美瑛岳より十勝川源流

橋本誠二

昭和十六年一月、美瑛岳より眺めた十勝川源流の深林で、正面に石狩連峰、左にトムラウシ山がみえる。今はこの美林も沢沿いを残して広く伐採されてしまった。このあたりはまた「大雪山十日の物語り」の舞台でもある。

トムラウシ川源流の温泉

橋本誠二

トムラウシ川本流の、トムラウシからと、五色ヶ原からの沢が合流するあたりに温泉が湧いていて、昭和二十九年頃山崎英雄らによって発見された。この写真（昭和三十年五月撮影）の下半中央部にある草原に、昭和三十四年部員の手で小さな丸太小屋が建てられ、温泉小屋の名で大勢の部員に親しまれた。この小屋には屋根がなかったので数年で朽ち倒れたが、未だに訪れる部員は少くない。

厳冬期のコイカクシユサツナイ川上流

岡彦一

昭和十二年一月の第一次冬期ベテガリ隊。沢の両側は、その裾を蒼水におおわれた百米余りの大岩壁で、行手もまた蒼水の滝である。空は青く暗れていたが、この岩と氷の深い谷底には陽はとどかない。三年後同じ時期に第二次ベテガリ隊がこの谷で雪崩に会い遭難した。

ヤオロマップ稜線上のキャンプ設営

岡彦一

昭和十二年二月一日第一次ベテガリ隊のアタック班の前進キャンプ。人物は右から坂本直行、林和夫、中野竜雄、葛西晴雄、及川盛也。坂本と及川はサポート班である。

五色ヶ原より石狩岳

橋本誠二

昭和十四年三月初旬。人物は先頭より清水誠吉、片山純吉。

石狩川にて

橋本誠二

昭和十三年三月二三日、大函手前の天斧沢合流点。屏風岳を目ざす渡辺盛達と片山純吉（右）が、ニセイチャロマップから武利、武華、屏風に登る清水誠吉、芳賀良一、新美長夫、羽田喜久男（先頭から）を見送る。

神威岳

岡田勝英

神威とソエマツの間の稜線は、「靴の幅リッチ」と呼ばれる程両側が鋭く切れ落ちて、緊張させられるところである。この辺りからの神威岳は白く鋭く高い。昭和四十三年十二月。

ピリカヌプリ南面

岡田勝英

日高金山縦走に当って最初に登られた頂がピリカヌプリである。東西に大きく尾根を張り出し、春別川とヌビナイ川が深く突き上げ、名の示すように美しい。昭和三十七年三月。

神威岳よりペテガリ岳

岡田勝英

ソエマツからペテガリへの尾根は日高の稜線のうちでも特に細く、不安定な雪庇に悩まされる所である。延々と続く山なみのなかで、中央部にひとときわ高くそびえるのはペテガリ岳である。昭和四十七年十二月。

札内岳より幌尻岳

岡田勝英

国境稜線より東にはなれている札内岳からは、主峰幌尻岳をはじめとする北日高の山々をくまなく見渡すことができる。昭和三十一年―三十二年冬の日高金山縦走の終点附近のルートがよく見える。昭和三十八年三月。

ヌビナイ川上流

鮫島惇一郎

ヌビナイ川は明るい沢である。ことさらに気をはらなくても良

い沢登りは心をふくらませてくれる。ここは奥二岐上流ピリカヌプリへの沢、標高九〇〇米附近。昭和五十二年七月一八日。

中ノ川、中ノ岳南東面直登沢

神谷晴夫

南日高の沢の中でもこの沢は特に悪い。最近ではこのような直登沢を沢すじに忠実にトレースする登り方がとられ、ヘルメット、ザイル、ハーケンなどを用いて岩登り的な要素が多くなった。中央の人物は佐野芳雄。昭和三十八年七月。

チャムラン隊員とシェルパ

チャムラン遠征隊

前列右より鈴木良博、小林年、中野征紀、岡本丈夫、リエゾンオフィサー マニク・トウラダール、久木村久、永北俊一、安間荘。後列ラクパ・ゲルブ、アン・ノルブ、アン・ゲルブ、パサン、タルケサーダー、パサン・プタール、リンジン、ラクパ・ツェリン、ニマ・ナムギャル、ブルキバ、カミ・パサン、カルマ・ツェリン。

チャムラン登路

チャムラン遠征隊

登路となった「長髪ルート」(本誌北大山岳部とヒマラヤ参照)。チャムランの南尾根から真西におちている氷河である。

カヒルトナ氷河上の一服

竹田英世

昭和四十七年六月二九日、カヒルトナ氷河二四〇〇米地点にて。三人組のザイルパーティーでスキーを使いベースキャンプへの荷上げ。見渡せばホレイカー峠が左手に、ハンター峠が右手に望まれ、仰ぎみる正面には四千米の高度差でマッキンレー南壁が迫る。

アサバスカをのぞむ

丹羽由紀夫

昭和四十八年八月、五十周年記念行事の一つとして北大山の会東京支部が企画したカナディアンロックキー行には、会員とその家族多数が参加した。ウイルコックス・パスでくつろいでいるA班。正面の氷河をいだいたアサバスカはさすがに大きい。

八ツ手岩

倉林正尚

昭和十四年度の合宿では、前年の上ホロ雪崩による遭難の一周忌にあたる十二月二七日だけが晴れ、この日上ホロのケルン詣りをしたときとった写真である。
毎冬の合宿で、八ツ手岩がこれだけ晴れてみえることはめずらしい。

美瑛岳の稜線にて

橋本誠二

美瑛富士より美瑛岳を越え、これより稜線を十勝岳へ向う。先頭より明比衛、加藤英夫、佐藤弘。昭和十七年一月。

硫黄山でイグルー作りの練習

東晃

昭和十四、五年頃からイグルーが冬の露営用利用されるようになった。これは十六年一月、十勝合宿の居残り組が作っているイグルー。人物は右より橋本誠二、佐藤弘、渡辺良一。現在ではこのあたりにも樹木が茂り、噴煙の位置もかわった。

吹上温泉の夕暮

朝比奈英三

昭和十三年三月、スキー客もへって静かになった温泉宿。残照の富良野岳が美しい。十二月の合宿中は天候の良い日が少く、このような夕景色はほとんど見られない。

十勝岳白銀荘附近

鮫島惇一郎

戦後吹上温泉はなくなったが、合宿は白銀荘や勝岳荘などの小屋を利用して、引続き十勝連峰で行われた。泥流にスキーリフトができ、三段山にスキーコースが切り開かれたりしたが、小屋のまわりの針葉樹林はまだ美しい。

オプタテシケ合宿の初年班

古川幹夫

最近の合宿は小屋を使わないことが多い。昭和五十一年にはオプタテシケ山西尾根の森林限界附近のキャンプをベースにして春の合宿を行った。

北日高ルベシベ山附近のキャンプ

橋本誠二

山崎先生は昭和十年から日高山脈北端より三年計画で美生岳まで縦走した。これは第三年目、昭和十二年五月のときのスナップである。右より鈴木限三、山崎春雄、中野征紀、有馬洋、渡辺盛達。

五月の限三池附近

今村昌耕

限三池とは昭和十一年五月、布部附近より夕張山脈主稜を芦別岳まで縦走された鈴木限三先生に因んで名づけられた一三四五米降の北の小沼である(部報六号参照)。このあたりの稜線上にはいくつかの小池沼があり、サラメ雪の頃が美しい。これは昭和十二年春の一行。右より、住宮省三、橋本誠二、浅野芳彦、高橋亀之助、新美長夫。

ヘルヴェチア・ヒュッテ

東晃

美しい白樺の林に囲まれ、小樽内川のせせらぎ以外には静寂を破るものもなかったヒュッテも、定山溪、小樽間の自動車道の開通、とくに戦後のモーターゼーションのおかげで、すっかり環境が変ってしまった。これは戦時中、昭和十五年九月八日部員の薪切りアルバイト中に撮影したもの。洞爺丸台風(十五号台風)にやられる以前の白樺の密林がみえる。

二十五周年ヘルヴェチア祭

最前列右より、木崎、井上、橋本(誠)。第二列、三尾、不明、朝比奈、東、井手、木村、杉野目、山崎(英)、野田、町原、網倉、向川、前田、五十嵐。第三列、不明、不明、三角、野口、早稲田、豊田、中島、原田、岡田、渡辺、山崎(春)、倉島、森、水沢、越野、中村、白浜、有波。最後列、石橋、石谷、不明、不明、岡本。昭和二十六年十月六日

歴代山岳部長

柄内吉彦(初代及び三代)……………一九五八年撮影
鈴木限三(二代及び四代)……………一九四二年頃、北大予科教室にて
伊藤秀五郎(五代)……………一九六九年、大雪山にて
大銅哲夫(六代)……………一九七五年、苫小牧国有林にて
奥村敬次郎(七代)……………一九四八年、エサオマン

トッタベツ川合流にて

吹上温泉の飛沢さん

朝比奈英三

昭和三年より十六年までの十勝合宿が、いずれも成功裡に行われ、これらの合宿に参加した部員にとって吹上温泉の名が常に懐しく想い出される理由の一つは、温泉宿の経営者である上富良野の飛沢さん一家と、毎年シーズンになるといつも同じような顔ぶれがそろって従業員の人々の、商売気をはなれた温いもてなしであった。昭和十三年三月。

スケッチ説明

音更川より春の石狩岳

坂本直行

十勝三股から音更川を西へ溯ると、くろぐろとした森の上に、川上岳から音更山へと続く石狩連峰の真白な稜線が高く仰がれたものであったが、戦後は十五号台風のおかげで、このように石狩岳のほとんど全容が眺められる。

昭和三十五年四月三日。

原田準平(八代)……………一九三六年、ニセコアンヌプリにて
渡辺千尚(九代)……………一九六四年、アポイ岳にて
橋本誠二(十代)……………一九七〇年、立山にて
東 晃(十一代)……………一九六四年、アラスカ、メン
デンホール氷河にて
有馬純(十二代)……………一九七八年、北大構内にて

男沢先生一家とペテガリ隊員

今村昌耕

昭和十八年十二月第三次ペテガリ隊が南札内分教場の男沢先生のお宅に泊めて頂いた。これには男沢先生御夫妻と令息及び隊員左より上杉寿彦、荘田幹夫、渡辺良一、佐藤弘が写っている。数日後この隊は、はじめて宿願のペテガリ山頂に立つことができた。

大庭さんの牧場で

松村雄

左から大庭政太郎氏、三人の令孫、増山直義、高松秀彦。

昭和三十六年八月。

グプラー先生近影

小平俊平

昭和五十年六月、七十九歳の先生。チューリッヒ郊外のお宅をお訪ねしたときのスナップ。

北大山岳部年表 (一九二六—一九七六)

この年表は山岳部五十年間の主要な活動の記録を編年的にまとめたものである。ただし、山岳部誕生前の胎動期は既に大正九年(一九二〇)の恵迪寮旅行部の創立に始まっているので、この年からの部の先輩あるいはスキー部員による著しい登山を収録した。さらに参考のため、その前の北海道の登山草創期、北大スキー部員によるスキー登山事始めの記録をつけ加えた。

部の登山記録としては、初めのうちは北海道の山の初登、とくに積雪期初登を挙げ、後にはヴァリエーション・ルート開拓、縦走などの新形式をとり入れたものを挙げた。これらの選択は後述の各年代の担当者の責任によつて行なわれたので精粗適切でない場合もあり得ることをお断りしたい。なお、部報所載の登山記録全部を地域的分類によつて表示したものは部報十一号にのつている。

部の登山記録の他に、部の運営、行事等の記録も多少煩わしい感もあるが忠実に記載した。しかし戦争末期ごろの記録に多少不確かな点が残っている。また、山の会の発足(昭和十五年)以後は、山の会の記録を部の記録の中に含

めて配列した。毎年の記録の最後に一段下げて記載したのは、部の活動そのものではないが、北大内外の動き、登山界のビッグ・エヴェント等、参考事項である。

年表作製責任者

胎動期および	朝比奈英三
一九二六—三五	
一九三六—三九	有馬純
一九四〇—四五	東馬晃
一九四六—五一	白浜晴久
一九五二—五五	小林年
一九五六—六一	橋本正人
一九六七—七〇	神谷晴夫
一九七一—七六	矢野真

出典略号の説明

- I、II、…… 北大山岳部々報号数
- 1、2、…… 北大山岳部時報、北大山の会会報号数
- 北 伊藤秀五郎著「北の山統篇」(一九七六)若溪堂
- ス 北大スキー部部報十五年記念号(一九二六)
- 史 高沢光雄、北海道登山小史Ⅲ(一九七三)北の山脈一〇号

年月日	事項	出典
明36(一九三) 5	上川文武館生徒二一名 旭岳登山	北
明38(一九五) 10	日本山岳会創立	
明40(一九七) 明42(一九)	札幌農学校、東北帝国大学農科大学となる。予科併設	
明44(一九二)	予科外人講師ハンス・コラーの指導により北大学生初めてスキーをはく	ス
明45(一九三) 6	旭川の 小泉秀雄、大雪山に登り科学的究明に着手	史
大2(一九三) 2・11	北大スキー部創立	北
12・31	永峯沢より手稲山スキー初登山 スキー部稲田昌祖ら	北
大4(一九五) 大5(一九六)	富士山冬期初登 スキー部荒木忠郎、柳沢秀雄、角倉邦彦、他人夫三名 一高、三高に旅行部(山岳部)創立 慶応義塾大学に山岳会創立 夕張岳―芦別岳縦走 小樽高商 西田彰三	ス

大6(一九二) 3	羊蹄山スキー初登頂 スキー部 大島幸吉、木原均、岡見開多、岩崎直砥	ス I
大7(一九) 4	北海道帝国大学設置。東北帝大より農科大学移管	
大8(一九) 4	大学令発布に伴い学部制施行。農科大学は農学部となり、医学部新設	
大9(一九二〇) 2・10	中山峠より喜茂別岳 スキー部 福地義二郎 西尾稔、板倉勝宜、後藤一雄、松川五郎、網野兼一、高松正信	ス
3・27	十勝岳 アイゼン使用す。スキー部 六鹿一彦ら	I
5	恵迪寮旅行部創立	
7	化雲内―トムラウシ山―石狩岳―石狩川 慶応山岳会 大島亮吉、田中三晴 (成田嘉助、高橋浅市)*	「山」 大島亮吉 岩崎直砥 (一九三〇)
	早稲田大学山岳部創立	

* 括弧内人名は案内人、人夫を示す。以下同じ。

<p>大10 (一九二二)</p> <p>無意根山冬期初登 板倉勝宜ら一〇名 余市岳、朝里岳冬期初登 平井左門ら六名 芦別岳冬期初登 板倉勝宜、加納一郎、松川五郎ら 予科桜星会旅行部創立 スキー部有志により雑誌「山とスキー」創刊 榎有恒 アイガー東山稜初登 英国隊、第一次エヴエレスト遠征</p> <p>5・9 9・9 6 4 4・3 2・12 1・7</p> <p>ス ス 北</p>	<p>大11 (一九二二)</p> <p>旭岳冬期初登 ユコマンベツより 板倉勝宜 松川五郎、板橋敬一、加納一郎、後藤一雄 黒岳冬期初登 層雲峡より 板倉勝宜、加納一郎、板橋敬一 英国隊、第二次エヴエレスト遠征 雪崩のため七人のポーターを失う</p> <p>3 3 3</p> <p>ス 北</p>	<p>大12 (一九二三)</p> <p>板倉勝宜 立山松尾峠で吹雪のため遭難死亡 札幌岳スキー初登 松川五郎ら九名 空沼岳・狭薄岳 岡村源太郎、森下星一 帯広―音更川―石狩川―石狩川―層雲別村 田口鎮雄、藤江永次、佐々木政吉(長田福松、原) 第一次RCC発足</p> <p>7・16 7・12 3 1・17</p> <p>ス ス II</p>
---	--	---

<p>大13 (一九二四)</p> <p>十勝岳 冬期第二登、厳冬期初登、小森五郎、藤江永次、佐々木政吉、田口鎮雄、伊藤秀五郎 層雲別―黒岳―忠別岳―ヌタツプヤンベツ―石狩岳―石狩川―層雲別 小森五作、宮沢精須藤宣之助 早大山岳部舟田三郎ら厳冬期の槍ヶ岳初登 慶応山岳会大島亮吉ら積雪期の穂高連峯初登 大雪山に登山道路と石室(黒岳・旭岳)完成 英国隊、第三次エヴエレスト遠征、頂上に向ったマロリー、アイヴズイン帰らず 北大に工学部新設</p> <p>1 3 3 7・13 7・12 1・26 1・26</p> <p>史 II II</p>	<p>大14 (一九二五)</p> <p>富良野岳冬期初登 西方尾根から 北大生ら八名(氏名不詳) 黒岳小屋より北鎮岳、白雲岳、旭岳 伊藤秀五郎、田中二郎、佐々木政吉、高杉正樹、須藤宣之助、和辻広樹、小森五作、宮沢精 美生川―美生岳―ポロシリ岳―トッタベツ川 小森五作、伊藤秀五郎、和辻広樹、永井政治 榎有恒らマウンントアルバータ(カナダ)初登頂</p> <p>2・7 3・26 3・5 7・12 7・20</p> <p>I II II</p>
---	--

大15 (一九二六)

5・14	12・22 29	11・10 11・2	7・4 7・2	7・19	7・12 18	7・14 22	5・16 21	5・12 21	5・17 21	2・6 9	1・4 7
<p>磐寒別岳冬期初登 佐々木政吉、赤松勲、小森五作、伊藤秀五郎、沢本三郎、和辻広樹、須藤宣之助</p> <p>夕張岳 トナンシベツ川より 小森五作、山口健児、和辻広樹、井田清、高橋喜久司、沢本三郎</p> <p>層雲別ニセイカウシユベ 石狩北見国境、渡辺千高 須藤宣之助、井田清、野崎健之助、北見峠</p> <p>層雲別―黒岳―忠別岳―スタツパンベツ―石狩岳―音更山―往復 野中保次郎、西川桜梅沢一郎、高橋喜久司(川村、岡田)</p> <p>上フヲノ―吹上温泉―十勝岳―美瑛岳―ベベツ岳―オプタテンケ山―トムラウシ山―化雲岳―松山温泉 山口健児、山縣浩、原忠平</p> <p>ウトロ―岩宇別温泉―羅臼岳―硫黄山―羅臼岳―東方頂上―ポロベツ川上流の小屋―ウトロ山縣浩、須藤宣之助(大泉幸太郎)</p> <p>イトンムカ―武華山―武利岳往復ニセイチヤロマツツ―層雲峽 西川桜(高橋浅市)</p> <p>ホロカオトフケ―ニベツツ山 沢本三郎(長田福松)</p> <p>北大スキー部バライスイヒユツテ建設</p> <p>北大山岳部創立 部長 栃内吉彦、幹事 沢本三郎、伊藤秀五郎、田中二郎、宮沢精、和辻広樹、小森五作</p> <p>スキー合宿、蘭越新見温泉 五班四七名</p> <p>北大創基五十年記念式典挙行</p>											
I	I	II	II	II	II	II	II	I、II	II	II	II

昭2 (一九二七)

11・12	11	7 11	7 8	7・21 30	7・13 24	5・28 29	5・3	4	3・21 22	3・18 21	2・24	2・6	1・7	1・6 7
<p>天幕―天塩岳往復 伊藤秀五郎、野中保次郎、山縣浩、原忠平(菊谷 吉田)</p> <p>翁温泉跡―上ホロカメツク山冬期初登 沢本三郎、野崎健之助、須藤宣之助、井田清、和辻広樹、牧野要三</p> <p>層雲別ニセイカウシユベ山冬期初登 宮沢精、坂橋卓、原忠平、渡辺成三</p> <p>研究会・送別会 学生集会所 二月までの登山の報告、卒業部員 佐々木政吉、田口鎮雄、岩森秀夫、松川篤治</p> <p>美瑛―俵真布―硫黄岳―トムラウシ山―俵真布、野崎健之助、坂本直行、坂橋卓、渡辺千高、徳永芳雄 佐々保雄、佐山英駿</p> <p>雌阿寒岳、雄阿寒岳冬期初登 島村光太郎他一名</p> <p>新入部員歓迎会</p> <p>山岳部、予科旅行部新入部員観迎天幕行 銭函峠</p> <p>西クマネシリ岳、ピリベツ岳、クマネシリ岳 原忠平、渡辺成三(横川丑蔵)</p> <p>ピリカベタン―札内岳―エサオマントツタベツ岳、井田清、高橋喜久司、坂橋卓、中村邦之助、館脇操(水本文太郎)</p> <p>本年の夏山、中央高地 五班、日高一班、本州 四班、夕張山脈 二班</p> <p>ヘルベチアヒユツテ建設</p> <p>部員章作成 デザイン 和辻広樹</p> <p>栃内部長外遊、新部長 鈴木限三</p>														
I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I

12 28 29	12 20 28	9 25	8 5 12	6	4 26	4	4 3	3 27	3 20 21	3 19	3 4	2 8	1 21	昭3 (一九二八)	12 22 29	12
芦別岳冬期初登、外山勝四郎、島村光太郎、石川勝寿、佐藤正、松本久喜、野村虎男	名スキー合宿 十勝岳吹上温泉 一〇班、五五	夏期登山報告会 日高 四班、中央高地 三班、知床 二班、本州 二班、その他 二班	スピナイ川 ビリカヌブリーソエマツ沢 高橋喜久司 (水本文太郎)	部報 I 号発行	新入部員歓迎会・研究会 (三月登山報告四班)	美生岳冬期初登 西川桜、須藤宜之助	部長 橋内吉彦、幹事 山縣浩、西川桜、野崎健之助、徳永芳雄、原忠平、渡辺成三	斜里岳冬期初登 原忠平、中野征紀	武利岳 武華岳冬期初登 原忠平、中野征紀 渡辺成三、徳永芳雄、板橋卓	東狩場山冬期初登 伊藤秀五郎	白倉秋也、外山勝四郎	送別会 学生集会所 卒業部員 沢本三郎、	美瑛岳冬期初登 安積樟三、大戸健一、鴨下克己、前川保夫	前石狩沢 石狩岳冬期初登 伊藤秀五郎、小森五作、和辻広樹、野中保次郎、井田清、西川桜	スキー合宿、新見温泉 八班七二名	沢本三郎著「登山スキー術の手引」出版 (約三〇頁、一〇〇部)
			II										I			I

5 16 20	5 15 22	5 7	4 1 12	4	2 14	2 9	2 6 9	2 1	1 3 14	昭4 (一九二九)	7	2			
小平良平、江幡三郎、徳永正雄、今村正男	芦別岳 夕張岳縦走、山口健児、南部信雄、別岳 黒岳、安積樟三、島村光太郎、石川勝寿、佐藤正、菊地寛、金光正次	新入部員歓迎会 学生集会所一号室 新入部員一三名	ニペンソ山積雪期初登 徳永芳雄、佐藤正	部長 鈴木限三、幹事 須藤宜之助、渡辺千尚、今村正男、石川勝寿、島村光太郎、寺尾邦彦	送別会 精養軒 卒業部員 伊藤秀五郎、和辻広樹、小森五作、田中二郎、鴨下克己、大戸健一、前川保夫、中村了	狩場山冬期初登 野崎健之助、菊地寛	定山溪天狗岳冬期初登 板橋卓、島村和雄、梅沢一郎	冬期登山報告会 報告四件	規尻岳 トッタベツ岳冬期初登 小森五作、野中保次郎、伊藤秀五郎、高橋喜久司、須藤宣之助 (水本文太郎、中村雄蔵)	ルームをベルス喫茶店に設けること決定	秩父宮 ヘルベチアヒュッテ宿泊、スキーツアー	立教大学山岳部創立	札内川 カムイエクウチカウシ山 春別川 イドナツブ岳初登 慶大 斎藤長寿郎 山田喜一、藤江才介 (高橋浅一、秋元久義)		
									II			登高行 VII			

5 16 26	5 15	4	2 15	1 22	昭5 (一九三〇)	8 10	12 29 1 1	12 22 29	11	9 27	8 27 9 10	7 4 15	6 7
松山温泉(天人峽)―石狩岳―ユニ石狩岳―三 国山―武華川 中野征紀 相川修、菊地寛、 小平俊平、金光正次	新入部員歓迎会 栃内部長船朝歓迎を兼ねる	部長 栃内吉彦、幹事 河合克己、笠原直三 江幡三郎、福島健夫、大和正次、今村正男	力、高橋喜久司、中村了、野中保次郎	送別会 精養軒、卒業部員 須藤宜之助、山 口健児、佐藤正、安積耀三、米井静雄、中西	相談会、部規約改正、部費年額一円	独塊山岳会(パウアー隊長)カンチェンジ ンガ遠征	札幌の門田直馬、ピッケル・アイゼンの製 作販売始める	スキー合宿 十勝岳吹上温泉 一―班七七名 北見峠―チトカニウシ山 江幡三郎、高橋正 三	部報II号発行	研究会・夏期登山報告会 日高 五班、中央高地 三班、知床 一班、 本州 三班、千島 一班	チロロ川―北トツタベツ岳―トツタベツ岳― トツタベツ川―帯広―広尾―栗古岳 伊藤秀 五郎	研究会(春山登山報告、利尻、ニベソツ、芦 別―夕張、十勝―大雪)	美生岳―幌尻岳―新冠川―幌満川―エサマン ベツ―棟似 徳永芳雄、今村正男、坂本正幸 (水本新吉)
					III	III			III	II			

2 5 10	昭6 (一九三一)	3 6	3	12 22 29	10 20	10 3	8 4 17	7 11 21	7 11 16	7 9 22	6 12	5 21 27
トナシベツ川―夕張岳 金光正次、徳永正雄 小黒春之助、相川修	北大に理学部新設	京都市学士山岳会(AACK)創立	国際遠征隊(デイレインフエルト隊長)カン チェンジンガ遠征	スキー合宿 十勝岳吹上温泉 一〇班、八九 名	ベルグマン氏講演会、カムチャツカ探險	研究会(夏山報告) 日高 三班、中央高地 二班、夕張山脈 三班 本州 四班、その他	ニセイチャロマップ―屏風岳―ニセイチャロ マップ―武利岳―ニセイチャロマップ―石狩 川―石狩岳―トムラウシ山―黒岳 徳永正雄 安藤正三、相川修、高山豊太郎(札幌二中教 諭)	神威岳 相川修、有岡隆(水本文太郎)	札幌内川―コイカクシニセサツナイ川―国境線― 一七九四米峯―一八三九米峯―往路を戻る 徳永正雄、大谷木賢二(水本新吉)	美生岳―トツタベツ岳―幌尻岳―エサオマン トツタベツ岳―札幌内岳 大目目謙造、佐藤友 吉、小立正彦、豊田春満、山口健児	夏山計画発表	武華岳―武利岳―支湧別岳 佐藤正、大和正 次、江幡三郎、佐藤友吉
		III			III							

2・18	3・11 20	4	5・6	5・20 30	6・9	7・10 20	7・16 26	8・16 27	9・28	11・25	12・23 29
送別会 精養軒 卒業部員 板橋卓、石川勝 寿、原忠平、西川桜、徳永芳雄、渡辺千尚、 波部成三、中川一郎、南部信雄、梅沢一郎、 山縣浩、松本久喜、松本利夫、河野敬三郎、 島村和雄、島村光太郎	カムイエタウチカウシ山―エサオマントツタ ベツ岳―札内岳冬期初登 徳永正雄、佐藤友 吉、村山林治郎、安田一次 (水本新吉、中山 堀一郎)	部長 枅内吉彦、幹事 江幡三郎、相川修、 高橋正三、金光正次、佐藤友吉、小黒春之助 新入生歓迎会・三月登山報告会 三月登山 四件	ニベソツ岳―天狗岳―沼の原山―化雲岳 江 幡三郎、小黒春之助、豊田春満、伊藤紀克、 佐藤友吉 (野村正太郎)	春山報告会・研究会 春山三班報告の後、部 報III号につき協議	音更川―石狩岳―忠別岳―黒岳 豊田春満、 高木秀夫 (長田福松)	エサオマントツタベツ川―エサオマントツタ ベツ岳―新冠川―幌尻岳―トツタベツ岳―美 生岳 徳永正雄、相川修、伊藤紀克、石橋正 夫 (水本新吉)	ニベソツ山―トムラウシ川―トムラウシ山― 十勝岳 徳永正雄、大戸昌雄 (水本新吉)	夏期登山報告・研究会 日高 一班、中央高 地 五班、本州 一〇班、その他 二班	部報III号発行	スキー合宿 十勝岳吹上温泉 一二班、八五	

IV

III

1	6・21	6 9	昭7 (一九三二)	1・4 7	1・25	2・18	3・16 22	3・26	4	5・6	5・30 31	6・8	7・12 21	7・14 28	
京大 極地法により富士山冬期登山 スマイスら ガルワルヒマラヤのカメット (七七七五米) に登頂、当時の登頂最高峯 パウアー隊 再度カンチェンジュンガ遠征				ウベベサンケ山 中野征紀、小黒春之助、徳 永正雄、村山林治郎、豊田春満	冬期登山報告会 三班	送別会 亀屋支店 卒業部員 江幡三郎、大 和正次、笠原直三、今村正男、坂本正幸、大 頭卓、大島昌一郎、河合克己、篠原斎	西クマネンリ岳―クマネンリ岳―ビリベツ岳 ―南クマネンリ岳 豊田春満、石橋正夫、中 野征紀、徳永正雄	豊似―梁古岳 坂本直行、相川修	部長 枅内吉彦、幹事 菊地寛、中川久美雄 小平俊平、西川利通、大立目謙誼	新入部員歓迎会・三月登山報告会	文武会デー山岳部展覧会 学生ホール五号室	小谷運動具店にルームをもうける	春期登山報告会 五班	札内岳―エサオマントツタベツ岳―カムイエ クウチカウシ山―札内川―十勝ボロシリ岳 徳永正雄本野正一、水上定一、照井孝太郎、 弓削徳三、石橋正夫 (中山弥一郎)	ヤオロマツ岳―カムイエタウチカウシ山― 札内岳 大立目謙一郎、西田彰一、佐々保雄 (水本新吉、小西友市、水本松太郎)

IV

3	3・23 4・5	コイカクシユサツナイ岳―ヤオロマツブ岳― 一八三九米峯―カムイェクウチカウシ山 藤紀克、豊田春満、西村正(中田仁三郎)
4		部長 栃内吉彦、幹事 豊田春満、伊藤紀克 水上定一、相川鎮雄、佐瀬亘、小林正 春山報告会 七班
5	5・10	新入部員歓迎天幕行 札幌岳滝の沢口
6	6・2 3	文武会デー登山報告会 三班
6	6・9	ヤオロマツブ岳―テガリ岳 中野征紀、相 川修
7	7・3 15	中ノ川―テガリ岳―札内川 石橋恭一郎、 三宅健一(中山弥一郎)
7	7・8 21	ヤオロマツブ川―ルベツネ山―テガリ岳 ヤオロマツブ岳―一八三九米峯―コイカクシ ユサツナイ岳 豊田春満、杉頼夫
8	8・15 21	テロロ岳 中野征紀、清水重也
9	9・18	第一回夏期登山報告会 九班
10	10・3	第二回夏期及び秋季文武会デー登山報告会 七班
10	10・24	文武会デー映画会
12	12・21 29	スキー合宿 十勝岳吹上温泉 一二班、一〇 名
12	12・29 1・3	十勝岳―美瑛川―トムラウシ山 石橋正夫、 徳永正雄、伊藤周一
5	5・7	独逸山岳会 ナンガ・バルバットに遠征、 メルクル隊長以下三名の隊員を吹雪のため 失う

V

12	12・15	部報V号発行
9	9・17	夏期登山報告会 日高一〇班、中央高地 三班、本州 二班、千島、樺太 二班、その 他 二班
9	9・2 9	芽室川―バンケスシ川―バンケスシ岳―右左 府 西村正、福地宏平、有馬洋、岡彦一
7	7・21 11	シュンベツ川―滑若岳 水上定一、照井孝太 郎
7	7・13 1	北千島(シユムシユ、アライト、パラムシル) 初見一雄、太田嘉四夫、岡彦一、西圭一
6	6・1 2	新入部員歓迎行 ヘルベチア、薪運び
5	5・25	春期登山報告会 七班
5	5・16 19	日高山脈北端四国々境スブチミツ岳 山崎 春雄、中野征紀、初見一雄
5	5・9	春期登山報告会 九班、部報V号発行につき 相談
5	5・1	新入部員歓迎会
4		部長 栃内吉彦、幹事 照井孝太郎、奥田五 郎、福地文平、杉頼夫、石橋恭一郎、太田嘉 四夫
3	3・20 30	ルベンペ山―テロロ岳冬期初登 初見一雄、 奥田五郎
3	3・25	山岳部時報第一号発行、続いて年内に二号 (七・二〇)、三号(一〇・三二)発行
2	2・17	冬期登山報告会 八班
1	1・17	送別会 豊平館 卒業部員 徳永正雄、相川 修、中野征紀、菊地寛、金光正次、大島正幸 今村博、高田五郎、井深英夫、村山林治郎、 石渡達六郎、星野好博、安田一次、終って時 報発刊の相談あり
昭10	(一九三五)	

V

昭14 (一九三九)	昭15 (一九四〇)
1・19	1・5
十勝岳遭難報告会・追悼会 学生ホール 九〇名	前年一・二・三〇より入山中のベテガリ隊(葛西晴吉、有馬洋、戸倉源次郎、片山純吉、清水誠吉、近藤達、羽田喜久男、渡辺盛達、内田武彦、橋本誠二)コイカクシニサツナイ川上流で雪崩のため遭難、内田、橋本を除く八名死亡
1・23	12・15
合宿合評会並に徳永芳雄先輩歓迎会	冬期登山練習合宿 十勝岳吹上温泉 一一班 六一名
2・15	12・5
送別会 グランドホテル 卒業部員 朝比奈英三、湊正雄、西村正、中村象夫、玉沢広、湯川龍二	11・13
部長 鈴木限三、幹事 有馬洋、橋本誠二、渡辺盛達、近藤達、内田武彦、片山純吉	10・8
4	10・3
故瀨戸三郎、高田徳阿君追悼会	10・3
夏山計画発表会並に渡辺武雄先生、菊池寛先輩歓迎会	6・22
6・15	6・22
故徳永正雄先輩追悼会並に秋山報告会 榎有恒氏歓迎座談会	6・15
6・22	6・15
西川桜、高橋正三両先輩歓迎並に山岳部創立記念会	6・15
11・13	6・15
映画会 学生ホール「十勝合宿」(ハミリ)と「スイスの山々」(カラストライド)	6・15
10・8	6・15
10・3	6・15
6・22	6・15
6・15	6・15
4	6・15
昭14 (一九三九)	昭15 (一九四〇)
1・19	1・5
十勝岳遭難報告会・追悼会 学生ホール 九〇名	前年一・二・三〇より入山中のベテガリ隊(葛西晴吉、有馬洋、戸倉源次郎、片山純吉、清水誠吉、近藤達、羽田喜久男、渡辺盛達、内田武彦、橋本誠二)コイカクシニサツナイ川上流で雪崩のため遭難、内田、橋本を除く八名死亡
1・23	12・15
合宿合評会並に徳永芳雄先輩歓迎会	冬期登山練習合宿 十勝岳吹上温泉 一一班 六一名
2・15	12・5
送別会 グランドホテル 卒業部員 朝比奈英三、湊正雄、西村正、中村象夫、玉沢広、湯川龍二	11・13
部長 鈴木限三、幹事 有馬洋、橋本誠二、渡辺盛達、近藤達、内田武彦、片山純吉	10・8
4	10・3
故瀨戸三郎、高田徳阿君追悼会	10・3
夏山計画発表会並に渡辺武雄先生、菊池寛先輩歓迎会	10・3
6・22	6・15
6・15	6・15
6・22	6・15
6・15	6・15
4	6・15
昭14 (一九三九)	昭15 (一九四〇)
1・19	1・5
十勝岳遭難報告会・追悼会 学生ホール 九〇名	前年一・二・三〇より入山中のベテガリ隊(葛西晴吉、有馬洋、戸倉源次郎、片山純吉、清水誠吉、近藤達、羽田喜久男、渡辺盛達、内田武彦、橋本誠二)コイカクシニサツナイ川上流で雪崩のため遭難、内田、橋本を除く八名死亡
1・23	12・15
合宿合評会並に徳永芳雄先輩歓迎会	冬期登山練習合宿 十勝岳吹上温泉 一一班 六一名
2・15	12・5
送別会 グランドホテル 卒業部員 朝比奈英三、湊正雄、西村正、中村象夫、玉沢広、湯川龍二	11・13
部長 鈴木限三、幹事 有馬洋、橋本誠二、渡辺盛達、近藤達、内田武彦、片山純吉	10・8
4	10・3
故瀨戸三郎、高田徳阿君追悼会	10・3
夏山計画発表会並に渡辺武雄先生、菊池寛先輩歓迎会	10・3
6・22	6・15
6・15	6・15
6・22	6・15
6・15	6・15
4	6・15

昭14 (一九三九)	昭15 (一九四〇)
1・9	7・20
1・18	7・20
悲報を受け、部員・先輩合計三八名、五隊の捜索隊により遺体発掘、引降ろし作業。戸倉隊員を除く七名の遺体発見	北大山の会(OB会)設立 (十一月一日現在会員九二名)
1・21	9・27
右遭難部員合同葬 札幌中央寺	夏期登山報告会 日高 二班、中央高地・夕張 四班、千島 三班、本州 三班、台湾 一班
2・15	9・27
冬期登山報告会 日高一、中央高地一	北大山の会札幌集会 世話人を(札幌)中野征紀、朝比奈英三、福地宏平、(東京)山口健児、小平俊平の五名とする
2・16	9・27
ベテガリ隊遭難事情発表会	
2・18	9・27
送別会 グランドホテル 卒業部員 岩間嘉吉、林和夫、中野昌、及川盛也、駒沢欣一、岡彦一、福地宏平、星野昌平、中野竜雄、丸山喜久男、鈴木部長辞意表明	
3・22	7・5
ベテガリ遭難第二回捜索 中野征紀他三名、戸倉隊員遺体捜索、帯広営林署の協力により流出止めの柵「アバ」を建設	7・5
4・3	7・5
幹事 橋本誠二、塩月陽一、児玉五郎、渡辺良一、今村昌耕、住宮省三、原一郎、新美長夫 部長交代 伊藤秀五郎部長となる	7・5
4	7・5
新入部員歓迎会	7・5
5・1	7・5
春期登山、文武会デー登山報告会 湯川竜二先輩入営壮行会 日高 三班、中央高地 二班、道内 五班、本州 一班	7・5
5・16	7・5
夏期登山計画発表会	7・5
5・30	7・5
ベテガリ遭難第三回捜索 七日戸倉隊員遺体発見、十日札内川におろし、茶碓に付し、十二日遺骨札幌着	7・5
6・4	7・5
昭14 (一九三九)	昭15 (一九四〇)
1・9	7・20
1・18	7・20
悲報を受け、部員・先輩合計三八名、五隊の捜索隊により遺体発掘、引降ろし作業。戸倉隊員を除く七名の遺体発見	北大山の会(OB会)設立 (十一月一日現在会員九二名)
1・21	9・27
右遭難部員合同葬 札幌中央寺	夏期登山報告会 日高 二班、中央高地・夕張 四班、千島 三班、本州 三班、台湾 一班
2・15	9・27
冬期登山報告会 日高一、中央高地一	北大山の会札幌集会 世話人を(札幌)中野征紀、朝比奈英三、福地宏平、(東京)山口健児、小平俊平の五名とする
2・16	9・27
ベテガリ隊遭難事情発表会	
2・18	9・27
送別会 グランドホテル 卒業部員 岩間嘉吉、林和夫、中野昌、及川盛也、駒沢欣一、岡彦一、福地宏平、星野昌平、中野竜雄、丸山喜久男、鈴木部長辞意表明	
3・22	7・5
ベテガリ遭難第二回捜索 中野征紀他三名、戸倉隊員遺体捜索、帯広営林署の協力により流出止めの柵「アバ」を建設	7・5
4・3	7・5
幹事 橋本誠二、塩月陽一、児玉五郎、渡辺良一、今村昌耕、住宮省三、原一郎、新美長夫 部長交代 伊藤秀五郎部長となる	7・5
4	7・5
新入部員歓迎会	7・5
5・1	7・5
春期登山、文武会デー登山報告会 湯川竜二先輩入営壮行会 日高 三班、中央高地 二班、道内 五班、本州 一班	7・5
5・16	7・5
夏期登山計画発表会	7・5
5・30	7・5
ベテガリ遭難第三回捜索 七日戸倉隊員遺体発見、十日札内川におろし、茶碓に付し、十二日遺骨札幌着	7・5
6・4	7・5
昭14 (一九三九)	昭15 (一九四〇)
1・9	7・20
1・18	7・20
悲報を受け、部員・先輩合計三八名、五隊の捜索隊により遺体発掘、引降ろし作業。戸倉隊員を除く七名の遺体発見	北大山の会(OB会)設立 (十一月一日現在会員九二名)
1・21	9・27
右遭難部員合同葬 札幌中央寺	夏期登山報告会 日高 二班、中央高地・夕張 四班、千島 三班、本州 三班、台湾 一班
2・15	9・27
冬期登山報告会 日高一、中央高地一	北大山の会札幌集会 世話人を(札幌)中野征紀、朝比奈英三、福地宏平、(東京)山口健児、小平俊平の五名とする
2・16	9・27
ベテガリ隊遭難事情発表会	
2・18	9・27
送別会 グランドホテル 卒業部員 岩間嘉吉、林和夫、中野昌、及川盛也、駒沢欣一、岡彦一、福地宏平、星野昌平、中野竜雄、丸山喜久男、鈴木部長辞意表明	
3・22	7・5
ベテガリ遭難第二回捜索 中野征紀他三名、戸倉隊員遺体捜索、帯広営林署の協力により流出止めの柵「アバ」を建設	7・5
4・3	7・5
幹事 橋本誠二、塩月陽一、児玉五郎、渡辺良一、今村昌耕、住宮省三、原一郎、新美長夫 部長交代 伊藤秀五郎部長となる	7・5
4	7・5
新入部員歓迎会	7・5
5・1	7・5
春期登山、文武会デー登山報告会 湯川竜二先輩入営壮行会 日高 三班、中央高地 二班、道内 五班、本州 一班	7・5
5・16	7・5
夏期登山計画発表会	7・5
5・30	7・5
ベテガリ遭難第三回捜索 七日戸倉隊員遺体発見、十日札内川におろし、茶碓に付し、十二日遺骨札幌着	7・5
6・4	7・5

5・4 11	5・27	5・16	4	3・27	2・22	2・18	2・12	2・6	1・23	昭16 (一九四一)	12・27	12・22 12・28	12
門脇久(子科二年部員)鳥海山にて遭難死亡、遺体の捜索を班長以下七名をもって行なう	この中に五月四日、今村昌耕、住宮省三による積雪期ベテガリ初登頂あり	第二回春山報告会 二、石狩岳、ルベツネ山、四・五月の登山 日高二、その他 道内五	第一回春山報告会	幹事、渡辺良一、今村昌耕、新美長夫、小関幸治、明比衛、佐藤弘	山の会会報第一号発行	送別会 グランドホテル 卒業部員 橋本巖 関守、伊吹良太郎、内田武彦	部報VII号発行	文武会は北大報国会に改組され、山岳部も鍛練部山岳班と称することとなる。班長は伊藤秀五郎教授	合宿批評会・冬山報告会	スキー技術低下の批評あり、冬山は中央高地二班いずれも悪天候のため退却	北大山岳部時報改め北大山の会々報第一〇号発行	「カール」第六号発行	冬期登山練習合宿 十勝岳吹上温泉 九班、四八名
			12						11				11

4・14	1・27	昭17 (一九四二)	12・8	1	12・21 12・29	12・6	11・6	11・5	10・23	9・27	8・17 8・23	6・25
山の会東京集会	合宿批評会・冬山報告会		早大山岳部 極地法により朝鮮冠帽峯登頂 太平洋戦争開戦	研究会「雪崩について」渡辺、「十勝の地図について」朝比奈	卒業繰上げに伴う幹事交代、十七年十月まで幹事明比衛、倉林正尚、山口俊也、有馬純駒田盈郎、高田敦徳、宇井格生	研究会「氷河について」佐々保雄	本年度学部卒業十二月に繰上げとなる。 送別会 グランドホテル 卒業部員 橋本誠二、原一郎、児玉五郎、塩月陽一、高橋藤夫	研究会「気象について」、増井、「岩登りについて」新美	山の会会報第一二号発行	夏山報告会・秋山計画発表会 日高 二、中央高地 四、本州 三、秋山 四班	コイカクシユ札内岳にケルン建設 遺族羽田氏父子と中野征紀以下一〇名参加	
	13											13

7	4	2 ・ 9	昭20 (一九四五)	12 ・ 17 ・ 23	11 ・ 20	10 ・ 19	5 ・ 27	4	3 ・ 28	1 ・ 26	昭19 (一九四四)
空襲対策として備品を先輩宅や医学部解剖学教室に分散	雄 幹事 菊池徹、橋本芳郎、藤木忠美、山崎英	送別会 グランドホテル 卒業部員 駒田盛郎、山口俊也、山田真弓、東晃、明石忠司、竹山太郎		冬季登山練習合宿 再び吹上温泉使用不能となりニセコ馬場温泉にて行なり	映画会 山崎先生宅	雄 幹事 菊池徹、橋本芳郎、藤本忠美、山崎英	佐藤弘、高田敦徳、増井幸雄、門田元、中山倬志	学生ホールが軍の使用に供されることとなりルームなくなる。備品は水産専門部倉庫に保管	伊藤秀五郎班長 予科教授退任に伴い班長辞任、しばらく班長不在となる	合宿批評会・冬山報告会 冬山 日高 二、中央高地 一	
19		VII									

12 ・ 15 ・ 21	12 ・ 8	11 ・ 11	9 ・ 27	9 ・ 14 ・ 15	9 ・ 6	5 ・ 22	4	2 中旬	1 ・ 15	昭21 (一九四六)	8 ・ 15	12 ・ 17 ・ 23
昭和二十一年の山行 夏山五班一六名	冬山合宿 十勝岳白銀荘 二六名	「イグルー」 橋本誠二	冬山研究会 農学部会談室 「雪崩」 湊正雄	冬山研究会 農学部会談室 「雪崩」 湊正雄	冬山研究会 農学部会談室 「雪崩」 湊正雄	冬山研究会 農学部会談室 「雪崩」 湊正雄	冬山研究会 農学部会談室 「雪崩」 湊正雄	冬山研究会 農学部会談室 「雪崩」 湊正雄	冬山研究会 農学部会談室 「雪崩」 湊正雄	冬山研究会 農学部会談室 「雪崩」 湊正雄	冬山研究会 農学部会談室 「雪崩」 湊正雄	冬季登山練習合宿 十勝岳勝岳荘 非常な困難をおして行なうことが出来た。参加者一四名 太平洋戦争終結
VII	19							VII	19	19		VII

昭24 (一九四六)

12 15 ~ 22	11 5	10 26	10 8	9 23 ~ 24	9 20	9 18 ~ 19	9 15	9 10	8 29	8 24	8 23	8 18	8 15 ~ 21	8 11	6	5 29	4	
冬山合宿 十勝岳勝岳荘 五班二九名、先輩 五名	野田四郎、山崎英雄、白浜晴久、杉野目浩、 大賀皓、有波敏明	幹事交代、木崎甲子郎、関祐次、長井晃四郎	冬山研究会 ルーム	ヘルベチア祭	ルーム移転 学生会館二階東端の元の部屋に 戻ることができた	赤岩 岩登会	原田準平教授 部長に就任	夏山報告会・部員総会 日高七班、中央高 地二班、その他 一班、本州 一班	奥村部長避難経過報告会 農学部会議室	葬儀 東本願寺 北大体育会葬、北大学生会 葬	遺髪船札	収容隊は遺体を九ノ沢カールに葬る が現地に向う	先輩、部員一五名、学医、警察官、営林署員 が現地に向う	中落石に打たれ死亡	部長 奥村敬次郎教授 札内川九ノ沢を下降	山の会会報第二二号発行	新入生歓迎キャンプ 札幌岳 雪渓登り	部長 奥村敬次郎、幹事 山崎英雄、木崎甲 子郎、関祐次、向川信一、長井晃四郎、大賀皓
23								22						山崎 日記			VIII	

10 6	9 30	9 21	9 9	6	6 21	5 13 ~ 14	5 12	4	2 25	2 10	1 8 ~ 19	昭25 (一九五〇)	5	3 6	12	
研究会 「雪中露營」 山崎英雄	研究会 「ヒマラヤについて」 野田四郎	研究会 「ヒマラヤについて」 野田四郎	山の会会報第二二号発行	夏山報告会 日高八班、中央高地四班、本州 四班	アイヌ語研究会 ルーム 講師 知里真志保 氏	新入部員歓迎キャンプ 札幌岳 参加者二八 名	学部地下ホール	部員総会 新入部員歓迎会 春山報告会 農 学部	有波敏明、佐伯富雄	長井晃四郎、白浜晴久、杉野目浩、中村利一 郎、藤森元、八代利雄	送別会 辰巳、卒業部員 菊地三郎、鮫島惇 一郎、藤森元、八代利雄	冬山報告会	カムイェクウチカウシ山と一八三九米峯 コ イカクシユサツナイ岳より往復、四班 山崎 英雄ほか一名	日本山岳会北海道支部発足	昭和二十四年の山行 夏山 日高七班一九名 その他一班三七名、冬山 日高 三班一 名、その他八班二六名、春山 二班一〇名	新制北海道大学発足(法文、教育、理、医、 工、農、水産の七学部)
24	VIII	24						VIII	23	VIII	23				VIII	

12 15	10 16 23	10 6	9 18	5 19	4 30	4	2 17	2 9	昭26 (一九五二)	6 3	3	12	12 17 23	11 9	
冬山報告会 日高二班、中央高地三班 送別会 卒業部員 木崎甲子郎、大賀晴、向 川信一、森田寛、関祐次、鈴木和子 部長 原田準平、幹事 野田四郎、杉野目浩 早稲田收、千葉幹雄、三尾龍民、木村俊郎、 白浜晴久、中村利一 部員総会 新入生歓迎キャンプ 札幌岳 参加者一八名 夏山報告会 日高 九班、中央高地 三班、 その他 一班、本州 三班 山岳部・ヘルベチアヒュッテ二五周年記念祭 ヒュッテにて 参加者四一名 冬山合宿 十勝岳勝岳荘 二班一三名 山の会会報第二五号発行										後期幹事決定 山崎英雄、野田四郎、白浜晴 久、有波敏明、三角亨 渡辺裕男、長井晃四 郎、中村利一、杉野目浩 冬山合宿 十勝岳勝岳荘 五班三二名 昭和二五年の山行 夏山 日高八班三〇名、 その他 八班二五名、冬山 カムイエクウチ カウシ山一八三九米峯 四班二名、その他 三班一五名、春山 四班一二名 山の会会報第二四号発行 法文学部は文学部と法経学部に分離、予科、 専門部廃止 フランス隊(エルゾーク隊長)ネパールヒ マラヤ、アンナブルナ(八〇七八米)登頂。 最初の八千米級登頂					
VIII 27										VIII 25		VIII 25		VIII	

10 20	8 25	5 15	5 17 18	4 27 28	4 18	2 15	2 4	昭27 (一九五二)	12 22 9
冬山報告会 農学部地下ホール 送別会 明治製菓 卒業部員 山崎英雄、網 蔵俊雄、長井晃四郎、三角亨、津田朋二、尾 崎弘恒、豊田茂成 部長 原田準平 幹事 有波敏明、越野正、中島秀雄、中村邦 夫、木村俊郎、倉島功、岡本丈夫 新入部員との懇親会 ヘルベチア余市岳一 五名 新入部員歓迎キャンプ 札幌岳(滝の沢)一 五名 春山報告会 日高 一班三名、本州 一班二名、その他、 五班二〇名 山の会会報第二六号発行 夏山報告会 日高 七班二四名、中央高地 四班一一名、 本州 四班一〇名									後冬期十勝大雪縦走 六班一九名、木崎甲子 郎、野田四郎、越野正、木村俊郎、井上正惟 白浜晴久、有波敏明、早稲田收、野口裕、杉 野目浩、森厚、岡本丈夫、中村利一、石谷邦 次、中島秀雄、千葉幹雄、山崎英雄、網蔵俊 雄、三尾龍民 昭和二十六年の山行 夏山 日高 一〇班三 一名、その他 六班一四名、冬山 十勝、大 雪縦走 六班一九名、日高 三班九名、その 他 二班四名、春山 四班一三名
VIII 27									VIII 27

10・4	ヘルベチア祭 四二名
10・10	研究会「凍死、凍傷の話 一」有波
10・17	研究会「打撲、脱臼、捻挫等について」井上
11・1	研究会「凍死、凍傷の話 二」有波
11・14	研究会「山に於ける疾病について」井上
12・9	山岳部展示会(秋季大学文化祭の一環として行う)
12・17	研究会「登山スキー術とその練習法について」越野「合宿に於ける装備」木村
12・27	映画会「南極の秘境」
1・8	冬山合宿(ヘルベチアヒュッテ 四班二七名(鉄道ストライキのため十勝岳合宿中止))
4	ベッピリガイ沢―中ノ岳、ベテガリ岳、神威岳、杉野目浩、有波敏明、中島秀雄、岡本丈夫、森厚、小林年(中ノ岳冬期初登、ベテガリ岳、神威岳冬期新ルート) 北大に獣医学部新設
1・11	昭28(一九五三) 知床縦走後の京大山岳部(伊藤洋平他四名)と懇談会
1下旬	冬山報告会 日高 二班一〇名、中央高地一班四名
2・12	送別会及び山の会 山崎英雄君マナスル遠征社行会 グランドホテル 卒業部員(旧制)井上正惟、野田四郎、杉野目浩、白浜晴久、中村利一、三尾龍民、佐伯富男、千葉幹雄(新制)越野正、早稲田收、野口裕、深井一郎、矢作栄一

3・14	十勝岳合宿 勝岳荘 四班一九名
4	部長 原田準平
4・22	幹事 木村俊郎、中島秀雄、依田幸二、高田光彦、石谷邦次、春日徳治、岡本丈夫、五十嵐恒夫、和田一雄、河内洋佑、小林年
4・23	部員総会・新入部員自己紹介・合宿批評会・春山発表会
5・3	新入部員懇親会(ヘルベチア)
5・13	木曾殿越にて井上正惟君遭難死亡
5・16	春山報告会
5・30	日高 二班七名、本州 四班一三名、その他六班二二名
7・23	新入部員歓迎会 札幌岳
8・6	岩登り練習会 赤岩
8・19	額平川(ベンケチェブの沢)―新冠川(スカンライの沢)―新冠川本流―エサオマントツタベツ岳―カムイェクウチカウシ山―札内川(八の沢)
8・21	岡本丈夫、野坂桂介、小林年(新冠川の初完全廻行)
8・22	剣岳白萩川ブナクラ谷にて鈴木康平君遭難
9	白萩発電所取入口にて遗体発見収容
10・10	山の会会報第二七号発行
10・15	夏山報告会及び鈴木康平君遭難報告・批判会
10・24	日高山脈 七班二一名、中央高地 二班六名
12・15	本州 六班一三名、その他 一班四名
12・24	ヘルベチア二十六周年祭 五〇名
	冬山合宿 十勝岳勝岳荘
	初年班 一班九名、二年班 三班一六名、〇B班 一班三名

1・26	早大山岳部 南米アンデス、アコンカグア 登頂
3	旧制大学最後の卒業、新制大学初の卒業
3 ~ 6	日本山岳会第一次マナスル登山遠征(隊長 三田幸夫)にOB山崎英雄参加
5・29	英国隊(ハント隊長)のヒラリー、テンジ ンサウスコルよりエヴェレスト(八八四 八米)初登頂
7・3	独塊隊、ヘルマン・ブール ナンガパルバ ット(八一二五米) 初登頂
2・9	昭29 (一九五四) 部員総会 冬山報告会
2・16	日高 一班五名、中央高地 一班五名、本州 一班三名
4	送別会 産業会館 卒業部員 有波敏明、石 谷邦次、春日徳次、木村俊郎、倉島功、水沢 広光、高田光彦、中村邦夫、佐藤行郎、中島 秀雄、新妻徹、町原亨、渡辺裕男 部長 原田準平
5・2 ~ 5	幹事(前期) 岡本丈夫、森厚、依田幸二、 河内洋佑、和田一雄、小西純、五十嵐恒夫、 長友久雄 幹事(後期) 河内洋佑、長友久雄、和田一 雄、小西純、加納正敏、元木隼里、石村実、 西信博、永光俊一
5・22 ~ 23	春山 日高 一班三名、中央高地 一班四名 本州 三班一名、その他 二班九名 春山合宿 芦別岳 六班三〇名 新入部員歓迎会 札幌岳

VIII

9・27	夏山報告会
10・2 ~ 3	日高 七班二七名、中央高地 二班一〇名、 本州 四班一五名、その他 一班二名
12・18 ~ 26	ヘルベチア二十七周年記念祭
12・20 ~ 31	冬山合宿 十勝岳白銀荘
7・31	初年班 一班一名、二年班 一班八名、O B班 一班二名 幌尻岳、カムイエクウチカウシ山 放射状登 山 六班一八名 イタリア隊 K2(八六一一米) 初登頂
1・28	昭30 (一九五五) 冬山並びに合宿報告会
2・11	送別会 産業会館 卒業部員 荒生繁雄、五 十嵐恒夫、渡辺八枝子、岡本丈夫、竹江詰、 高橋剛、森厚、依田幸二
4	部長 原田準平 幹事 (一九五五・五~一〇) 長友久雄、永光俊一、佐野匡四郎、安藤久男 宮地隆二、鈴木弘泰、高橋利雄、西信博、 木村久、元木隼里、増田定雄、加納正敏、滝 沢政治
4	幹事 (一九五五・一〇~五六・五) 永光俊一、佐野匡四郎、久木村久、宮地隆二 安藤久男、西信博、石村実、小口洋右、加納 正敏
5・29 ~ 5	春山合宿 芦別岳 初年班 一班一三名、二年班四班一四名
5・13	春山報告会 日高 一班五名、中央高地 二班八名

VIII

VIII

5・21 ~ 22	9・23	10・2 ~ 3	12・17 ~ 23	5・25	9・11	1・27	2・14	5・14	6・8	6・9	9・20	10・21 ~ 24	11・13
新入部員歓迎会 砥石山至恩山荘 夏山報告会	日高 五班一五名、知床 一班三名、本州 二班八名 ヘルベチア祭	冬山合宿 十勝岳勝岳荘 初年班 一班一七名、二年班 六班二三名 英国隊 カンチエンジュンガ(八六一六米) 初登頂。翌日第二隊登頂	日本山岳会 マナスル登山先遣隊にOB橋本 誠二参加			冬山報告会 日高 三班、中央高地 一班、本州一班、その他 一班 送別会 卒業部員 河内洋佑、小枝一夫、小林年、小西純、坂野茂晴、長友久雄、和田一雄、渡辺定元 部長 原田準平	幹事 一部交代、新幹事 西信博、宮地隆一、佐野匡四郎、久木村久、安藤久男、高橋利雄 石村実、小口洋右、滝沢政治	部員総会 夏山計画発表	夏山 日高 一二班四一名、中央高地 二班 一〇名、穂高岳合宿 九名	幹事会 冬山日高山脈金山縦走と十勝岳合宿を同時に行うことを決定	冬山のための偵察、春別川(南日高)	冬山資金調達のための映画会	
						昭31 (一九五六)							
						VIII							

11・23 ~ 25	12・15	12・16 ~ 21	5・9	1・8	2・15	3	3・4	4・30 ~ 4	5・18 ~ 19	6・14	6・28	6・9	10・11	11・15	11・16	11・22 ~ 25	
羊蹄山にて冬山訓練	日高山脈金山縦走本隊出発	冬山合宿 十勝岳勝岳荘 三班一五名参加 日本山岳会 マナスル登山隊(隊長楢有恒)	今西、ガルツェン初登頂、十一日加藤、目下田再登		日高山脈金山縦走成功	幹事交代、新幹事 高橋利雄、安間荘、木幡賢、増田定雄、森康通、宮地隆二、佐々木幸雄、久木村久	送別会 卒業部員 安藤久男、石村実、片山彰三、加納正敏、鈴木弘康、高野了乙、永光俊一、牧野博恒、元木暉里	春山 日高 二班七名、その他 三班一〇名 春山合宿 十勝岳勝岳荘 八班四四名	新入生歓迎会 至恩山荘	幹事会で空沼小屋管理を受けけること決定	幹事 一部交代 小幡、宮地辭任、酒井和彦、遠藤禎一、志牟田隆男新任	夏山 日高 一二班三八名、中央高地 二班 四名、剣岳合宿 九名	例会で部報八号発刊につき検討	冬山資金調達のための映画会	冬山計画発表	芦別岳にて冬山訓練 二二名	
						昭32 (一九五七)											
						VIII											

12・16 12 1	冬山合宿 勝岳荘 四三名他に先輩三名 冬山 日高 一班六名、穂高岳 二班一一名 芦別岳 一班三名	1	南極観測第一次越冬隊(西堀榮三郎隊長) オングル島に基地設営越冬開始 O B 中野 征紀、佐伯富男、菊池徹参加、夏隊に小林 年(犬ぞり担当)参加 この後、南極観測 ヒマラヤ、アラスカ、パタゴニア等の学術 調査に O B 部員の参加が多くなる	4	北大の理工系学部の拡張始まり学生数増加
2・15	幹事交代 新幹事 安間 莊、橋本 正人、酒井 和彦、今村 正克、森 康通、遠藤 禎一、志 幸田 隆男、佐々木 幸雄	2・15	送別会 産業会館 卒業部員 小口 洋右、越 智博、久木村 久、高橋 利雄、滝沢 政治、増田 定博、宮地 隆二、西信博	3 4	春山 日高 一班四名、穂高岳 二班一一名 富士山 一班五名
4・2	前田 一夫、穂高岳で遭難死亡	4・30 5・6	春山 合宿 十勝岳勝岳荘 五十数名	5・16	幹事交代 新幹事 酒井 和彦、関根 敏夫、遠 藤 禎一、今村 正克、橋本 正人、岩崎 祐三、神 前博、志 幸田 隆男
6 9	新入生歓迎会 空沼 祭		夏山 日高 一班三六名、中央高地 五班 一三名、本州 四班二七名		前田君のため七ツ沼カールにケルンを積む

昭33 (一九五八)

VIII

VIII

9・25 30	旭岳における東京芸大 安藤氏遭難の捜索に 協力	10・30	冬山資金調達のための映画会	11・21	冬山計画発表 極地法による北鎌尾根より奥 穂高往復、参加一八名、冬山合宿は同時に行 うこととす
11・21	芦別岳にて冬山訓練	11・21 24	芦別岳にて冬山訓練	11・27 30	北鎌尾根班入山
12・19	冬山合宿班 十勝岳勝岳荘 二九名札幌発 合宿初年班 小竹 パーティ三名帰らず	12・21	合宿解散、捜索隊編成、北鎌尾根班下山	12・22	小竹、加藤両君遺体収容、下山
12・23	京大 A A C K (隊長桑原武夫) チョゴリザ 登頂	8・4			

昭34 (一九五九)

IX

VIII

2	1 26 30	12 27 22	12 24 22	12 15 20	12 17	12 15	10 6 7	10	8 19 25	8 19	8 10	8 4
昭38 (一九六三)	凌雲岳北尾根(初登)―黒岳	黒川武、久須美健三郎、鶴巻大陸、一原正明 送別会 卒業部員 安田元、市村輝宜、末兼光 河野和男、阪田正勝、高橋昭好、高松秀彦 西森茂夫、牧 正、吉村啓一、渡辺尚、登倉母実	札内川よりカムイエックウチカウシ山、十勝幌 尻岳、一八二三峰、コイカクシニ札内岳、 ヤオロマツブ岳、札内岳、エサオマントツタ ベツ岳を登る	冬山、日高 三班一五名、中央高地 四班二 二名、知床 一班三名、札幌近郊 一班五名	冬山合宿 愛山溪温泉 初年班、五班二九名、 二年班 五班二四名	山の会総会 役員交代、渡辺千尚 会長就任 チャムラン隊報告、ナラカンカール峰遠征計 画発表あり、新ヒマラヤ委員会をもうけて計 画を推進すること決定	ヘルベチア祭	黒川武、鶴巻大陸、山口淳一、久須美健三郎、 黒川武、神谷正男	剣沢小屋―弥陀ヶ原經由富山へ上野救出	ヒマラヤ遠征隊帰国歓迎会 産業会館	ヒマラヤ遠征隊帰国歓迎会 産業会館	チャムラン隊帰国
	X											X

5 22	12 24 11	12 15 20	10 20	10 5 6	10	9 30	7 17 28	7 10	5 18 19	5 15	4 29 3	4	3 14 2
米田エヴェレスト登山隊(ディレンプアー ス隊長)エヴェレスト西稜―東南稜縦走に	冬山 日高 一班三名	冬山 日高 五班二八名、中央高地 二班九 名、近郊 一班三名	山の会会報第三三号発行、部内誌カール第一 四号発行	冬山合宿 十勝岳勝岳班 初年班 三班一七 名、二年班 五班二四名	幹事 西信三、沢田義一、庵谷晃、大本昭弘 渡辺真之、橋本甲午、丹羽由紀夫	部報IX号発行(チャムラン報告掲載)	夏山 日高 八班三四名、北ア 濁沢合宿一 一名。日高二年班は、中南部の直登沢を数本 連続的に登攀	同隊はナラカンカールの探査を行ない。同峰 は存在しないことを推定、地質、氷河の調査 を行ない、翌年一月二十四日神戸港帰着	空沼祭	山の会会報第三二号発行	春山合宿 初年班 三班一五名、二年班 五 班二〇名	部員 渡辺千尚、幹事 西信三、安田典、渡 辺真之、本間敏彦、大本昭弘	春山 日高 三班一二名、中央高地 一班五 名、北ア 四班一八名
													X

成功、ヒマラヤ・ジャアインツにおけるウ
アリエーションルート開拓はじまる

昭39 (一九六四)

2	送別会 卒業部員、石田隆雄、一原正明、岡田重信、河合誠哉、黒川武、坂本浩輔、本間敏彦、増山直義、三浦章司、内藤拓、松村雄安田殿
3	幹事 沢田義一、石本恵生、中川昭三、橋本甲午、庵谷晃、丹羽由紀夫、益田稔 春山 日高 二班一〇名、知床 一班四名、北ア 四班一三名
3	7・7 28
4	春山合宿 十勝岳勝岳荘 初年班 五班二六名、二年班 五班二一名
5	5・23 24
6	6・1
7	7・8
7	7・9 8・29
10	10
10	10・3 4
10	10・5
12	12・3

山の会会報第三四号発行
第一回ヒマラヤ委員会 六月の山の会総会に相川修より提案されたダウラギリ山塊遠征計画(第三次遠征)のため組織さる。隊長を相川に決定
夏山 日高 八班三五名、北ア 剣岳合宿一〇名
幹事 庵谷晃、岡田勝英、松田颯、丹羽由紀夫、古川宇一、川道武男
ヘルベチア祭
第二回ヒマラヤ委員会 ダウラギリの登山不許可(ネパール政府)のため計画を一年延期に決定
第四回ヒマラヤ委員会 一九六六年の遠征計画はダウラギリIV峯を第一案としカンジロバ・ヒマールを第二案とすること決定

35

35

X

12	12・13 18
12	12・15
12	12・24 1
1	1・10

冬山合宿 十勝岳勝岳荘 初年班 四班二一名、二年班 四班一八名
山の会会報第三五号発行
冬山 ベテガリ集中登山、七班三八名
(サツシヒチャリ沢、ヤオロマップ川冬期初週行)

X

昭40 (一九六五)

1	幹事 松田颯、古瀬健、須田長良、川道武男、八木橋武、神谷晴夫
2	送別会 卒業部員 岡田勝英、尾崎頭一、沢田壮兵、藤野明治、部屋哲、古川宇一、丹羽由紀夫、米道裕弥、山口淳一、山田知充、渡辺興亜 春山 日高 二班一一名、北ア 三班一二名
3	3・9 31
3	3・14
3	3・26 4・5
4	4
5	5・1 5
5	5・5 8
5	5・13 20
6	6・1 8
6	6・8 20

部長交代 橋本誠二
春山合宿 初年班 ヘルベチア 二六名、二年班は近郊で小山行
第二次捜索隊 偵察隊 四名
第二次捜索隊 本隊 二二名
第三次捜索隊 第一次パトロール隊四名
第三次捜索隊 第二次パトロール隊五名、沢田の遺体発見。一四日出発の本隊三九名により残りの遺体発掘、現場で茶毘にふす

XI

11・8	十月山行報告会 日高 一班、大雪 一班、芦別夕張 二班、羊蹄 二班	
11・29	十一月山行報告会 大雪 三班、日高 一班、芦別 一班	
12・11	山岳部第二代、第四代部長鈴木眼三先生死去	
12・20 ~ 24	冬山合宿 十勝岳白銀荘、八班四〇名	
昭44 (一九六九)		
1・19	定山溪天狗岳にて雪崩遭難事故、二年パーテイ 二名負傷	
1・21	遭難事故反省会 以後山行を一時休止する	
2・14	冬山報告会 日高 四班一八名、大雪 一班五名、暑寒別 一班五名	
3・2	送別会 富国生命会館 卒業部員 岡沢孝雄、小野寺弘道、片桐且雄、加納隆、伏見硯二、平田更一、本多和彦	
3・2	スキー大会 手稲山	
4・18	部長 橋本誠二	
4・25	幹事 遺藤一、伊藤豊志雄、石下光夫、井上孝俊	
4・26 ~ 5・2	春山報告会 近郊 二班一名、北ア 一班一三名、合宿形態の春山	
5・10 ~ 11	五月合宿 十勝岳白銀荘、八班四〇名参加	
5・24 ~ 25	赤岩講習会	
6・13	空沼祭	
	六月山行報告会 日高 三班、大雪 三班、芦別 一班、暑寒別 一班 この頃赤岩登り特に盛んになる	
		XI

7	カラコルム、パツौरラ偵察隊出発、現役部員二名参加	
9・18	夏山報告会 日高 六班二六名、大雪 一班六名、知床 一班七名、本州 三班一〇名	
10・9	山岳部組織論「あるれば」と以降」を発表、規準委員会	
10・11 ~ 12	ヘルベチア祭	
10・17	運営委員会制度発足 石下光夫、伊藤豊志雄、古田進、下沢英二、矢野実	
12・21 ~ 24	冬山合宿 ヘルベチアヒュッテ、四班二〇名	
4・10	学園紛争 入学式に端を発す	
12	学園紛争のあおりで冬季休暇の短縮、冬山プランニングに支障をきたす	
昭45 (一九七〇)		
1・23	冬山報告会 日高 二班二名、大雪 三班一九名	
1・30	昨年北大ネパールヒマラヤ学術調査隊に参加したOBがインドより持帰った大麻の吸飲に関与して取締当局の取調べを受けた山の会会員一名は除名、三名は退会、現役部員一〇名は自主的に退部した。このため部は北大体育会内の公認を取り消され、休部の止むなきに至る。残存部員は非公認ながら登山活動続行山の会東京支部林和夫を中心にして昨年来企画されていたカラコルム遠征計画(ネパール)は、バキスタンより不許可となり、ネパールに転進、ダウラギリV峰の入山許可を得たが右不祥事件のため中止となる	
		XI

2 5	3 5	3 8	3 14 120	4 3 12	4 17	4 30	5 5 10	5 16 17	5 30 31	6 12	6 14	6 30	9 4	10 9	10 10 11	11 6	11 27	12 15 21
エウエレスト・スキー探険隊にOB佐伯富男 安岡荘、橋本正人、川道武男、伏見硯二およ び現役井上孝俊参加 送別会 雪印パーラー 卒業部員 石井宇一 郎、遠藤一、大谷文雄、大村富士夫、佐藤弘 道、佐野芳雄、高木信明、土屋彦、福尾克也、 寺井啓 スキー大会 手稲山 積丹山塊で遭難直前の事故あるも無事下山 ヘルベチア学校 二〇名参加 幹事 矢野実、下沢英二、白石和行、浜名純 十勝を語る会 OB・現役交流会 春山合宿 十勝岳白銀荘、八班三五名 空沼祭 ヘルベチア植樹祭 六月山行報告会 大雪 二班、日高 一班、 芦別 二班 赤岩講習会 山の会会報第三八号発行 夏山報告会 日高 五班 一三名、大雪 六班 三三名、北ア 一班六名 幹事 下沢英二、越前谷幸平、北村真、柏原 深 ヘルベチア祭 部再建委員会発足 十月山行報告会 日高 一班、芦別 二班、 岩寒 一班 十一月山行報告会 大雪 四班 冬山合宿 大雪リクマンベツ、小屋掛けとテ ントをベースに。八班四〇名																		

1 3	5 12 13	昭46 (一九七一)	1 18	1 30	2 17	2 27	2 28	3	3 31	4	4 3	4 29 3	5	6 3
教養部の封鎖解除により学園紛争鎮静化に 向う 日本山岳会エウエレスト登山隊(松方三郎 隊長)南西壁登攀は不成功なるも、南東稜 より三名登頂			冬山報告会 日高 一班六名、大雪 一班一 一名、南ア 一班四名 山の会臨時総会 会則改正、評議員がおかれ ることになった。役員交代、会長 安田一 次 部として公認される。部長 東兎 送別会 雪印パーラー 卒業部員 町田利明 伊藤豊志雄、井上孝俊 スキー大会 手稲山 春山 日高 二班一〇名、大雪 一班三名、 知床 一班五名、北ア 二班一三名 山の会会報第三九号発行 部長 東兎、前期幹事 平野逸雄、竹田英世 小宮山 英重、高橋一穂、高田寛之、前田仁一郎 部報XI号作成開始 春山合宿 十勝岳勝岳荘 二三名、小屋代高 騰、一般スキーヤー増加等合宿不適地の声 起る 北大山の会編「日高山脈」若溪堂より刊行 後藤寿晴君遺体発見 昭四十四年入部、四十 五年十二月退部発見 昭四十六年四月始ヶ岳北 根にて単独登山中滑落死亡、北大山岳部関係 者による捜索が行なわれていた。十日神戸に て葬儀。OB数名列席											

9	夏山報告会 日高 四班一七名、上越 一班四名
10	後期幹事 竹田英世、平野逸雄、高田寛之、高地恒夫
10・1	部員章交付五名
10・9・10	ヘルベチア祭 三二名
12・14・19	冬山合宿 十勝岳勝岳荘 二六名
1	昭47 (一九七二) 冬山報告会 日高 二班八名、北ア 二班八名
2・10	山の会会報第四〇号発行
2・26	送別会 雪印パーラー 卒業部員 高橋孝三 吉田克人、白石和行、有馬真、平野逸雄、伏島信治
4	部長 東晃、幹事を廃し、プロモート機関 発足、小宮山英重、高地恒夫、高田寛之
4	例会を毎週金曜から木曜に変更し、ルームの運営主体は上級部員会議へ
5・2・7	春山合宿 大雪山リクマンベツ川源頭(幕営小屋がけ) 入山に二日を費す「光の谷」など 北面の山、沢を大いに楽しむ
5・20・21	空沼小屋祭 山小屋管理放棄論再燃す
6・11	春山報告会 日高 一班四名(西川岳登頂)
7・9	北ア 一班三名、上越 一班三名
7・15	山の会総会、再びニセロで アラスカマツキンレー峰登頂 L 越前谷幸平 AL 竹田英世、鎧邦芳、古川幹夫、池上宏一 安藤朝夫 部報XI号発行

9・20	夏山報告会 日高 四班一八名、知床 一班六名、北ア 一班四名、南ア 二班八名
10	幹事会復活 後期幹事 高橋一穂、池上宏一、小須田達治
10・14・15	ヘルベチア祭 三〇名
10	山の会評議員会 山岳部創立五十周年(一九七六年)に向けて記念事業委員会発足をきめる
11	第一回記念事業委員会 種々の提案あり
12・15・20	冬山合宿 十勝岳白銀荘
1	昭48 (一九七三) 冬山報告会 北ア 一班三名、大雪 二班一名、狩場 一班四名、北見 一班三名
2	第二回五十周年記念事業委員会
2・24	送別会 雪印パーラー 卒業部員 越前谷幸平、下沢英二、石下真通、矢野実、浜名純、高田寛之、竹田英世
3・1	山の会会報第四一号発行
4	部長 有馬純、前期幹事 池上宏一、古川幹夫、鎧邦芳
4・29・5・4	春山合宿 一年班 ヘルベチア、二年班 日高、芦別、十勝、暑寒別、一、二名
5	春山報告会 日高 一班四名、大雪山 一班五名、上越 一班三名、北ア 一班三名
5・19・20	空沼祭
	山の会会報第四二号発行 五十周年記念事業の一つとして冬の八千米峰(アンナプルナ)の議論おこる

4	3 25	3 23	2 22	1 23	昭49 (一九七四)	5 14	12 16 21	11 13	10 21	10 13 14	10	9 17	8	8 7 19	6 20 21
冬山報告会 天塩 一班六名、日高 一班六名、大雪山 二班五名 送別会 雪印パーラー 卒業部員 池上宏一、小宮山英重、高橋一穂、本庄章、前田仁一郎、古田進 北ア 後立山連峰赤岩尾根で部員二名が雪崩に遭遇負傷、二五日ヘリコプターで救助される。この春、北海道、北アに雪崩遭難続出 「雪崩、その遭難を防ぐために」橋本誠二(共訳)北大図書刊行会より発行 部長 有馬純、前期幹事 鏝邦芳、管野信夫、富田ゆきし、川口昌宏、関野幸二、花井修						今西錦司氏を迎えて余市岳登山 山の会有志五十周年記念カナディアン・ロッキー登山(コロンビア・アイスフィールド周辺)五十周年記念事業事務局発足 夏山報告会 日高 六班三〇名、知床 一班五名 後期幹事 安藤朝夫、山崎信夫、池上宏一、管野信夫 部員章交付三名 ヘルベチア祭 二〇名 積丹岳バスハイク 山の会会報第四三号発行 冬山合宿 十勝岳原始ヶ原(暮營、小屋がけ)京大隊(西堀栄三郎隊長)ヤルン・カン(八五〇五米)に登頂									

3 5	12 17 25	12 7	12 5 22	11 6	10	10	10	9 17	9 4	9 4	6 13	5 18 19	5	4 28 3	4 28 1
春山報告会 日高 一班四名、大雪 一班五名、知床 一班五名、ニセコ 一班三名、北ア 二班四名、南ア 一班三名、八ヶ岳 一班二名 空沼祭 三〇名 五十周年記念事業委員会 八千米級冬期初登の準備としてガネットシユヒマール・ラクサンカルボに七四七五の冬に遠征隊を出すこと隊長を木崎甲子郎とすること決定 ネパール政府エヴェレスト周辺を除き全面登山禁止を宣言。ラクサンカルボを断念し、ガールワルヒマラヤに切換え、隊を縮少し隊長を野田四郎とすること決定 夏山報告会 日高 七班三五名、東北 一班四名、北ア 一班四名、上越 一班三名 部員章交付 七名 部内マラソン大会 ヘルベチア祭 三〇名 五十周年記念事業委員会 遠征目標をトリスルに変更、隊員に越前谷、竹田、石村を選ぶトリスル隊順次出発 雪崩研究会発足 小冊子「雪崩の危険と遭難対策」(若林隆三監修)発行、講演会講習会(中山峠)を主催 冬山合宿 十勝岳原始ヶ原 二年班、ヘルベチア一年班、この冬より雪崩紐を個人装備に加える 橋本誠二(LOB)の名をよび、Geology of Nepal Himalaya の著者一六名、秩父官記念学術賞受賞						春山合宿 十勝岳白銀荘 三六名									

昭50 (一九七五)

10・10 12	10	9・22	6	6・22	5・17	5・17 18	5・10 11	5	4・29 5・4	4	2・27	2・25	1・31	1・27	1・19
赤岩合宿	後期幹事 花井修、高橋仁、杓沢敏、石松重雄、岸川啓二	夏山報告会 北日高 二班一〇名、中部日高 四班一四名、穂高岳 二班五名、谷川岳 一班二名	六月山行報告会 斜里岳 二班六名、西日高 一班四名、中部日高 一班三名、南日高 一班五名、芦別岳 一班三名、大雪 二班九名、磐稜別 一班五名	山の会総会、役員交代 会長 中野征紀	赤岩講習会	五十周年記念事業委員会 トリスル隊の報告発表について	空沼祭	春山報告会 日高 三班一三名、利尻 一班四名、知床 一班五名、北ア 二班八名、八ヶ岳 一班三名	春山合宿 大雪山リクマンベツ(幕営、小屋がけ)二四名	部長 有馬純、前期幹事 関野幸二、花井修 高篠和憲、河合範夫、渡辺勇	「雪崩の危険と遭難対策」第二冊発行	送別会 石狩会館 卒業部員 中村純夫、井上晴喜、古川幹夫、山崎信夫	トリスル隊帰国	冬山報告会 日高 一班四名、夕張 一班三名、八ヶ岳 一班四名	トリスル隊人夫のストライキのため登攀中止

昭51 (一九七六)

7・3 15 16	5・11	5・29 5・4	4	4	3・4	2・28	2・22	1・30	1・29	9・24	12・18 22	12・7 9	12・3	10・18 19	
トリスル遠征隊会計報告、記念出版委員会(委員長朝比奈英三)設置と、創立五十周年記念パーティー(九月、実行委員長有馬純)を決定	空沼祭 三一名	五十周年記念事業委員会	山岳部初代部長橋内吉彦先生死去	冬山報告会 北日高 一班五名、中部日高 二班六名、南日高 一班四名、東北 一班七名、北ア 一班二名	山の会初代会長伊藤秀五郎死去	送別会 卒業部員 宮田ゆきし、安藤朝夫 部員章交付 六名	部長 有馬純、前期幹事 杓沢敏、石松重雄 森田英和、土田直行、秋葉公太	春山合宿 オプタテンケ(幕営)一年班四班 二五名、二年班三班一五名、OB参加多数	部員総会 春山報告 大雪 一班六名、北ア 三班一〇名、白山 一班四名	凌雲岳北尾根遭難報告	冬山合宿 十勝岳 幕営三〇名、ソンド棒による雪崩の捜索訓練を行う	英国隊(ボニントン隊長)エヴェレスト南西壁より登頂	ヘルベチア祭	ブルーム移転 文連会館から体育館横のプレハブへ 学生部の意向による	凌雲岳北尾根で一班四名中三名がかなり重い凍傷

12	12	11	11	10	10	9	9	9	9	8	7
18			14	23	16	30	16	13	13	11	19
22					17					12	
<p>部員総会 クラーク会館 夏山計画発表</p> <p>山の会会報第四号発行</p> <p>山岳部五十周年パーティー前夜祭 ヘルベチアヒュッテにて</p> <p>山の会総会 記念誌出版のこと承認さる</p> <p>山岳部五十周年記念パーティー 札幌パークホテル ○B現役参加九〇名</p> <p>部員総会 夏山報告会 クラーク会館、北日高 六班三二名、中部日高 一班四名、谷川岳 一班四名</p> <p>部員章交付 一三名</p> <p>ヘルベチア祭</p> <p>ルームマラソン大会</p> <p>大雪山旭岳で悪天のため下山一名がパーティーとはぐれ、雪洞に待機して二日後捜索隊に救助される</p> <p>五十周年記念誌出版委員会発足 (委員は札幌一一名、東京二名、関西二名)</p> <p>記念誌出版費募金趣意書 山の会会員へ発送</p> <p>冬山合宿 裏大雪原始ヶ原(幕営) 三三名、凍傷続出</p>											

編集後記

北大山岳部創立五十周年を祝って北大山の会の記念総会が開かれた昭和五十一年九月十三日、記念事業の一つとして記念誌の出版が正式に決められ、朝比奈が出版委員長を引受けることになりました。

まず在札会員のなかから後記の十五名の方に出版委員をおねがいし、記念誌内容原案の作成にかかりました。また東京と関西の両支部からも二名ずつの委員を出して頂きました。原案作成の進行につれ、両支部の委員には委員長より随時連絡をとり、それぞれの支部または委員個人としての意見を求めました。両支部より出された助言にもとづき原案の修正や追加が行われましたが、その最も著しいものは、「山岳部の歩み」を内容とする座談会を、昨年山の会総会の日、九月十七日に開催してこれを記事としたことでもあります。また同じ日に開かれた委員会では、両支部代表を加えて記念誌内容の最終案を決定しました。

私達の意図は、北大山岳部五十年の各時期における代表的山行や、山登りの在りかたを記述し、記念誌全体として、部が現在に至るまでの精神面と実際面での山登りの大きな流れが感じられるものにしたということでありました。

編集には在札の出版委員全員が、五十二年二月以来毎月

のように会合を重ね、集まった原稿ごとに目をとおし、必要な場合には著者の了解をえて添削または訂正を行いました。再録の文章には古い文体も多く、難解の部分は当用漢字や現代かな使いに直したところもありますが、なるべく原文の気分を残すようにつとめました。

伊藤秀五郎氏―秀さん―の遺稿と、山口、坂本両氏が新しく書きおろされた文との間には、事実や年月の記述に若干の相違がありますが、事実と異なる場合も遺稿は原文のままとしました。

本誌の最初にある四篇は山岳部創立前後の部の様子をよく語っておりますが、これにつづいて既刊の部報から、それぞれの時代の気風がよく現われていると思われる七篇の紀行文を再録し、著者自身または当時の部員の方に解題をお願いしました。尚「一月の石狩連峯」は原文の一部と、過去の登山記録を載せた一章を省略させて頂きました。

北大山岳部の精神面の流れを、一貫した論文の形で述べることが希望する意見もありましたが、私達は、各時代をそれぞれ現わしている文章から、この流れを汲みとって頂けるものと考えます。この流れを語るために企画された座談会の記事は、必ずしも充分に期待にそったとは申せないかも知れませんが、座談会以後に掲載されている多くの方々の文章あるいは登山合宿・遭難小史等の記述からも、

バラエティに富んだ北大山岳部の山登りの在りかたが、将来への希望も含めて、時の流れとともに余すところなく語られていると思われます。

本記念誌の巻頭の言葉は、記念誌企画の当初から当時の山の会長長であった中野征紀氏―長髪さん―が書く予定で、長髪さん自身も記念誌の完成を非常に期待しておいででした。しかしそのころから病床にあった長髪さんは、執筆を気にされながらも遂にペンを執らずに亡くなられました。このため出版委員会は先輩方の意見も上がった上、巻頭の辞の執筆を金光正次氏に懇請し、はるかジャカルタから原稿を頂くことができました。またこの記念誌を飾る扉、スケッチ、カットはいつもながら坂本直行氏を頼りました。

本記念誌の出版に要する経費はすべて北大山の会会員諸氏よりの寄附金と、北大山の会五十年記念事業費にてまかなうことができました。ここに厚くお礼申し上げます。

御多忙中をこころよく力作をおよせ下さった執筆者の方々、写真を撮影または提供された方々、また地図の作成をほとんど一人で引受けて下さった熊野純男氏に深く感謝致します。

北大山岳部関係以外の出版物からの遺稿の再録を快諾された伊藤花子夫人、加納敏子夫人と、茗溪堂、朝日新聞社

の両出版社にお礼申し上げます。

最後に本誌の編集に協力された多くの山の会会員諸氏、また原稿の転写や浄書に協力された山岳部現役諸君に対し心から感謝して筆をおきます。

昭和五十三年九月

北大山岳部五十周年記念誌出版委員長 朝比奈英三

出版委員

朝比奈英三	有馬純
東 晃	白浜晴久
小林 年	橋本正人
岡田勝英	山田知充
神谷晴夫	小野寺弘道
有馬 真	矢野 実
伏島 信治	沓 沢 敏
向山 栄(現役)	
以上 札幌	
小枝 一夫	庵 谷 晃
以上 東京支部	
伊吹良太郎	吉 田 勝
以上 関西支部	

北大山岳部五十周年記念誌



一九七八

